

茨城県教育財団文化財調査報告第63集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整
理事業地内埋蔵文化財調査報告書(II)

柴崎遺跡Ⅱ区

中塚遺跡

(上)

平成3年3月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第63集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整
理事業地内埋蔵文化財調査報告書(II)

しば ぎき
柴 崎 遺 跡 II 区

なか つか
中 塚 遺 跡

(上)

平成 3 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団



柴崎遺跡Ⅱ区全景



杏葉



杏葉

序

つくば市は、昭和62年に桜村・谷田部町・豊里町・大穂町の4町村が合併し、つくば市として発足し、その後昭和63年には、筑波町が編入して現在のつくば市となりました。

つくば市は、我国最大のサイエンスシティとして、国や民間の研究機関をここに集中的に誘致し、日本の科学・技術の研究開発の核としての役割を担う「筑波研究学園都市」として整備拡充が日々進められております。

その一環として、住宅・都市整備公団は柴崎地区に職・住が近接する『テクノパーク桜』の建設を進めており、その予定地内に、柴崎・中塚遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、昭和62年4月から平成2年3月までの、3年間にわたり発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に、「研究学園都市計画柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（I）」（柴崎遺跡I・II-1区）として刊行致しました。

本書は、昭和63年度に調査を行った柴崎遺跡のII区と柴崎遺跡に隣接する中塚遺跡に関する報告書であります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深め、ひいては、教育・文化の向上の一助として、広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である住宅・都市整備公団、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 儀 田 勇

例 言

- 1 本書は、昭和63年度に住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した、茨城県つくば市（旧桜村）に所在する柴崎遺跡Ⅱ区及び中塚遺跡の発掘調査報告書である。なお、2遺跡の所在地は、次のとおりである。

柴崎遺跡Ⅱ区 つくば市大字柴崎字反町177番地外

中塚遺跡 つくば市大字上野字中塚674-1番地外

- 2 柴崎遺跡・中塚遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成2年度初めの組織替えにより、従来の調査課（企画管理班、調査第一・二・三班、整理班）は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課、調査課、整理課をおき、調査課には、調査第一・二・三の三つの班をおくこととなった。

理 事 長	川 又 友三郎 磯 田 勇	昭和61年4月～昭和63年5月 昭和63年6月～	
副 理 事 長	小 林 元	昭和63年4月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 雄 小 林 洋	昭和61年4月～平成元年3月 平成元年4月～	
事 務 局 長	坂 場 庸 克 一 木 邦 彦	昭和62年4月～平成元年3月 平成元年4月～	
埋蔵文化財部長	石 井 毅	平成2年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行	平成2年4月～
	課長代理	水 飼 敏 夫	平成2年4月～、(昭和62年4月～平成2年3月 企画管理班長)
	主任調査員	山 本 静 男	(昭和61年4月～平成元年3月 企画管理班)
	主任調査員	小 河 邦 男	(平成元年4月～平成2年3月 企画管理班)
	主任調査員	小 山 映 一	平成2年4月～
	係 長	園 部 昌 俊	昭和63年4月～
	主 任	山 崎 初 雄	(昭和60年4月～平成元年3月 企画管理班)
	主 事	大 部 章	(昭和61年4月～平成2年3月 企画管理班)
	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～
主 事	大 貫 吉 成	平成2年4月～	

調 査 課	課長	青木 義夫	昭和59年4月～平成元年3月
	課長(部長兼務)	石井 毅	平成元年4月～, (昭和63年度 調査第一班長)
	主任調査員	佐藤 正好	昭和63年度調査
	主任調査員	人見 暁朗	昭和63年度調査
	調査員	後藤 義明	昭和63年10月～平成元年3月調査
	調査員	吉川 明宏	昭和63年10月～平成元年3月調査
整 理 課	課長	沼田 文夫	平成2年4月～
	主任調査員	佐藤 正好	平成2年度 柴崎遺跡・第1章～第4章, 整理・執筆・編集
	調査員	松浦 敏	平成2年4月～9月 柴崎遺跡・第4章第1節, 中塚遺跡・整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号については、第3章第1・2節の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 4 発掘調査に際し、東京都教育庁社会教育部文化課学芸員 福田健司氏に御指導をいただいた。
- 5 金銅製品の保存処理については、東京国立文化財研究所修復技術部第三修復技術研究室室長 青木繁夫氏に依頼し、保存処理結果の報告をいただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導・御協力を賜った関係機関、並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表する次第である。

目 次

口 絵

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
第3節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺構・遺物の記載方法	11
第1節 遺構の記載方法	11
第2節 遺物の記載方法	12
第4章 柴崎遺跡II区	14
第1節 遺跡の概要	14
第2節 竪穴住居跡	16
第3節 土坑	338
第4節 地下式墳	339
第5節 井戸	343
第6節 溝	353
第7節 考察	362
柴崎遺跡II区第64号住居跡出土杏葉の鍍金の分析調査について	370
第5章 中塚遺跡	375
第1節 遺跡の概要	375
第2節 遺構と遺物	375
第3節 考察	395
第6章 結語	399

挿 図 目 次

柴崎遺跡II区

第 1 図	調査区呼称方法概念図……………	2	第 31 図	第11号住居跡出土遺物実測図 ……	50
第 2 図	桜地区遺跡分布図……………	8	第 32 図	第12号住居跡・竈実測図……………	52
第 3 図	柴崎遺跡調査区……………	9	第 33 図	第12号住居跡出土遺物実測図 ……	53
第 4 図	基本土層図 ……………	15	第 34 図	第13号住居跡・竈実測図……………	54
第 5 図	第 1 号住居跡・竈実測図……………	17	第 35 図	第14A・B号住居跡実測図……………	55
第 6 図	第 1 号住居跡出土遺物実測図 ……	18	第 36 図	第15号住居跡実測図 ……………	57
第 7 図	第 2 号住居跡出土遺物実測図 ……	19	第 37 図	第16号住居跡実測図 ……………	57
第 8 図	第 2 号住居跡・竈実測図……………	20	第 38 図	第17号住居跡実測図 ……………	58
第 9 図	第 3 号住居跡・竈実測図……………	22	第 39 図	第18A・B・C号住居跡実測図 ……	60
第 10 図	第 3 号住居跡出土遺物実測図 ……	23	第 40 図	第18B号住居跡竈実測図 ……………	61
第 11 図	第 4 号住居跡・竈実測図……………	25	第 41 図	第18B号住居跡出土遺物実測図 ……	61
第 12 図	第 4 号住居跡出土遺物実測図(1) ……	26	第 42 図	第19A・B・C号住居跡実測図 ……	64
第 13 図	第 4 号住居跡出土遺物実測図(2) ……	27	第 43 図	第19B号住居跡竈実測図 ……………	65
第 14 図	第 4 号住居跡出土遺物実測図(3) ……	28	第 44 図	第19B号住居跡出土遺物実測図 ……	66
第 15 図	第 5 号住居跡・竈実測図……………	30	第 45 図	第20号住居跡・竈実測図……………	68
第 16 図	第 5 号住居跡出土遺物実測図(1) ……	31	第 46 図	第22A・B号住居跡実測図……………	69
第 17 図	第 5 号住居跡出土遺物実測図(2) ……	32	第 47 図	第22A・B号住居跡竈実測図……………	70
第 18 図	第 5 号住居跡出土遺物実測図(3) ……	33	第 48 図	第22A号住居跡出土遺物実測図 ……	71
第 19 図	第 7 号住居跡・竈実測図……………	36	第 49 図	第22B号住居跡出土遺物実測図 ……	73
第 20 図	第 7 号住居跡出土遺物実測図 ……	37	第 50 図	第23・24号住居跡実測図……………	75
第 21 図	第 8 号住居跡実測図 ……………	39	第 51 図	第24号住居跡出土遺物実測図 ……	76
第 22 図	第 8 号住居跡出土遺物実測図 ……	39	第 52 図	第25A・B号住居跡・竈実測図 ……	78
第 23 図	第 9 A・B・C号住居跡実測図 ……	41	第 53 図	第26号住居跡・竈実測図……………	80
第 24 図	第 9 A・C号住居跡竈実測図 ……	42	第 54 図	第27・37号住居跡実測図……………	81
第 25 図	第 9 A号住居跡出土遺物実測図(1) ……	43	第 55 図	第28号住居跡実測図 ……………	82
第 26 図	第 9 A号住居跡出土遺物実測図(2) ……	44	第 56 図	第29号住居跡実測図 ……………	83
第 27 図	第10号住居跡・竈実測図……………	46	第 57 図	第29号住居跡出土遺物実測図 ……	83
第 28 図	第10号住居跡出土遺物実測図 ……	47	第 58 図	第29・30A・B号住居跡実測図 ……	85
第 29 図	第11A・B号住居跡実測図……………	48	第 59 図	第30A・B号住居跡竈実測図……………	86
第 30 図	第11A・B号住居跡竈実測図……………	49	第 60 図	第30号住居跡出土遺物実測図 ……	87

第 61 图	第31号住居跡・竈実測図……………	88	第 93 图	第48号住居跡出土遺物実測図(1)	123
第 62 图	第31号住居跡出土遺物実測図 ……	89	第 94 图	第48号住居跡出土遺物実測図(2)	124
第 63 图	第32号住居跡・竈実測図……………	90	第 95 图	第49号住居跡・竈実測図 ……	125
第 64 图	第32号住居跡出土遺物実測図 ……	91	第 96 图	第49号住居跡出土遺物実測図(1)	127
第 65 图	第34A・B号住居跡・竈実測図 ……	92	第 97 图	第49号住居跡出土遺物実測図(2)	128
第 66 图	第34号住居跡出土遺物実測図 ……	93	第 98 图	第50号住居跡・竈実測図 ……	130
第 67 图	第36号住居跡・竈実測図……………	95	第 99 图	第50号住居跡出土遺物実測図(1)	131
第 68 图	第38号住居跡・竈実測図……………	96	第100图	第50号住居跡出土遺物実測図(2)	132
第 69 图	第38号住居跡出土遺物実測図 ……	97	第101图	第51号住居跡・竈実測図 ……	134
第 70 图	第39号住居跡実測図 ……	98	第102图	第51号住居跡出土遺物実測図(1)	135
第 71 图	第39号住居跡竈実測図 ……	99	第103图	第51号住居跡出土遺物実測図(2)	136
第 72 图	第39号住居跡出土遺物実測図 ……	99	第104图	第52号住居跡・竈実測図 ……	138
第 73 图	第40・41号住居跡実測図 ……	101	第105图	第52号住居跡出土遺物実測図…	138
第 74 图	第40号住居跡竈実測図……………	102	第106图	第53A・B号住居跡実測図 ……	140
第 75 图	第40号住居跡出土遺物実測図…	102	第107图	第53A・B号住居跡竈実測図 ……	141
第 76 图	第41号住居跡出土遺物実測図…	102	第108图	第53A号住居跡出土遺物実測図	142
第 77 图	第42号住居跡実測図……………	104	第109图	第53B号住居跡出土遺物実測図	142
第 78 图	第42号住居跡竈実測図……………	105	第110图	第54号住居跡・竈実測図 ……	144
第 79 图	第42号住居跡出土遺物実測図(1)	106	第111图	第54号住居跡出土遺物実測図…	145
第 80 图	第42号住居跡出土遺物実測図(2)	107	第112图	第56号住居跡・竈実測図 ……	147
第 81 图	第43号住居跡実測図……………	108	第113图	第56号住居跡出土遺物実測図(1)	148
第 82 图	第43号住居跡竈実測図……………	109	第114图	第56号住居跡出土遺物実測図(2)	149
第 83 图	第43号住居跡出土遺物実測図…	110	第115图	第57号住居跡・竈実測図 ……	151
第 84 图	第44号住居跡実測図……………	112	第116图	第57号住居跡出土遺物実測図…	152
第 85 图	第44号住居跡竈実測図……………	113	第117图	第59号住居跡実測図……………	153
第 86 图	第44号住居跡出土遺物実測図…	113	第118图	第60号遺構出土遺物実測図…	154
第 87 图	第45号住居跡・竈実測図 ……	115	第119图	第61号住居跡実測図……………	156
第 88 图	第45号住居跡出土遺物実測図(1)	116	第120图	第61号住居跡竈実測図……………	157
第 89 图	第45号住居跡出土遺物実測図(2)	117	第121图	第61号住居跡出土遺物実測図(1)	158
第 90 图	第47号住居跡・竈実測図 ……	119	第122图	第61号住居跡出土遺物実測図(2)	159
第 91 图	第47号住居跡出土遺物実測図…	120	第123图	第62号住居跡・竈実測図 ……	161
第 92 图	第48号住居跡・竈実測図 ……	122	第124图	第62号住居跡出土遺物実測図…	162

第125图	第63号住居跡実測図……………	163	第157图	第80号住居跡出土遺物実測図…	201
第126图	第63号住居跡竈実測図……………	164	第158图	第82号住居跡実測図……………	203
第127图	第63号住居跡出土遺物実測図…	165	第159图	第82号住居跡竈実測図……………	204
第128图	第64号住居跡実測図……………	167	第160图	第82号住居跡出土遺物実測図…	205
第129图	第64号住居跡出土遺物実測図…	168	第161图	第83号住居跡・竈実測図 ……	206
第130图	第65号住居跡実測図……………	171	第162图	第83号住居跡出土遺物実測図…	207
第131图	第65号住居跡竈実測図……………	172	第163图	第85号住居跡実測図……………	208
第132图	第65号住居跡出土遺物実測図…	172	第164图	第86号住居跡実測図……………	209
第133图	第66号住居跡・竈実測図 ……	174	第165图	第86号住居跡出土遺物実測図…	210
第134图	第67号住居跡・竈実測図 ……	176	第166图	第87A・B号住居跡・竈実測図…	211
第135图	第67号住居跡出土遺物実測図(1)	177	第167图	第88号住居跡・竈実測図 ……	213
第136图	第67号住居跡出土遺物実測図(2)	178	第168图	第88号住居跡出土遺物実測図…	214
第137图	第68号住居跡・竈実測図 ……	179	第169图	第90号住居跡実測図……………	215
第138图	第68号住居跡出土遺物実測図…	180	第170图	第91号住居跡実測図……………	216
第139图	第69号住居跡・竈実測図 ……	181	第171图	第92号住居跡・竈実測図 ……	218
第140图	第69号住居跡出土遺物実測図…	181	第172图	第92号住居跡出土遺物実測図…	219
第141图	第71号住居跡・竈実測図 ……	183	第173图	第93号住居跡・竈実測図 ……	221
第142图	第71号住居跡出土遺物実測図…	184	第174图	第93号住居跡出土遺物実測図…	222
第143图	第72号住居跡実測図……………	185	第175图	第94号住居跡・竈実測図 ……	224
第144图	第72号住居跡竈実測図……………	186	第176图	第95号住居跡・竈実測図 ……	226
第145图	第72号住居跡出土遺物実測図(1)	187	第177图	第95号住居跡出土遺物実測図…	227
第146图	第72号住居跡出土遺物実測図(2)	188	第178图	第96A・B号住居跡・竈実測図…	229
第147图	第73号住居跡・竈実測図 ……	190	第179图	第96B号住居跡出土遺物実測図(1)	230
第148图	第73号住居跡出土遺物実測図…	191	第180图	第96B号住居跡出土遺物実測図(2)	231
第149图	第74号住居跡・竈実測図 ……	193	第181图	第97・98号住居跡実測図 ……	234
第150图	第74号住居跡出土遺物実測図…	194	第182图	第97・98号住居跡竈実測図 ……	235
第151图	第75号住居跡・竈実測図 ……	195	第183图	第97号住居跡出土遺物実測図…	236
第152图	第75号住居跡出土遺物実測図…	196	第184图	第98号住居跡出土遺物実測図…	236
第153图	第76号住居跡実測図……………	196	第185图	第99号住居跡・竈実測図 ……	238
第154图	第77号住居跡実測図……………	198	第186图	第100号住居跡・竈実測図……………	240
第155图	第77号住居跡出土遺物実測図…	199	第187图	第100号住居跡出土遺物実測図	241
第156图	第80号住居跡・竈実測図 ……	200	第188图	第101号住居跡・竈実測図……………	243

第189图	第101号住居跡出土遺物実測図	243	第221图	第120号住居跡・竈実測図……………	282
第190图	第102号遺構出土遺物実測図 ……	244	第222图	第120号住居跡出土遺物実測図	283
第191图	第104 A・B号住居跡実測図……………	246	第223图	第121号住居跡実測図 ………………	284
第192图	第104 A号住居跡竈実測図 ……	247	第224图	第122号住居跡・竈実測図……………	286
第193图	第105号住居跡・竈実測図……………	248	第225图	第122号住居跡出土遺物実測図	287
第194图	第105号住居跡出土遺物実測図	249	第226图	第123号住居跡実測図 ………………	288
第195图	第106号住居跡実測図 ………………	250	第227图	第123号住居跡出土遺物実測図	288
第196图	第107号住居跡・竈実測図……………	251	第228图	第124号住居跡・竈実測図……………	289
第197图	第107号住居跡出土遺物実測図	252	第229图	第125号住居跡・竈実測図……………	291
第198图	第108号住居跡・竈実測図……………	254	第230图	第125号住居跡出土遺物実測図	292
第199图	第108号住居跡出土遺物実測図	255	第231图	第127号住居跡出土遺物実測図	292
第200图	第109号住居跡・竈実測図……………	256	第232图	第129号住居跡実測図 ………………	293
第201图	第109号住居跡出土遺物実測図	257	第233图	第130号住居跡・竈実測図……………	295
第202图	第110号住居跡・竈実測図……………	259	第234图	第130号住居跡出土遺物実測図	296
第203图	第110号住居跡出土遺物実測図	260	第235图	第131号住居跡・竈実測図……………	297
第204图	第111号住居跡実測図 ………………	261	第236图	第131号住居跡出土遺物実測図	298
第205图	第113号住居跡・竈実測図……………	263	第237图	第132号住居跡実測図 ………………	299
第206图	第113号住居跡出土遺物実測図	263	第238图	第132号住居跡竈実測図 ………………	300
第207图	第114号住居跡実測図 ………………	265	第239图	第132号住居跡出土遺物実測図	301
第208图	第114号住居跡竈実測図 ………………	266	第240图	第133号住居跡・竈実測図……………	303
第209图	第114号住居跡出土遺物実測図	266	第241图	第133号住居跡出土遺物実測図	304
第210图	第115号住居跡・竈実測図……………	267	第242图	第134号住居跡・竈実測図……………	306
第211图	第115号住居跡出土遺物実測図	268	第243图	第134号住居跡出土遺物実測図	307
第212图	第116号住居跡実測図 ………………	270	第244图	第135号住居跡実測図 ………………	308
第213图	第116号住居跡出土遺物実測図	270	第245图	第135号住居跡出土遺物実測図	308
第214图	第117 A・B号住居跡実測図……………	272	第246图	第136号住居跡・竈実測図……………	310
第215图	第117 B号住居跡竈実測図 ……	273	第247图	第136号住居跡出土遺物実測図	311
第216图	第117 B号住居跡出土遺物実測図 ……	275	第248图	第137号住居跡実測図 ………………	312
第217图	第118号住居跡実測図 ………………	277	第249图	第137号住居跡出土遺物実測図	312
第218图	第118号住居跡竈実測図 ………………	278	第250图	第138号住居跡・竈実測図……………	314
第219图	第118号住居跡出土遺物実測図	279	第251图	第139号住居跡・竈実測図……………	315
第220图	第119号住居跡実測図 ………………	280	第252图	第139号住居跡出土遺物実測図	316

第253図	第140・147・150号住居跡実測図	318	第269図	第15号土坑出土遺物実測図……	338
第254図	第147・150号住居跡・竈実測図…	319	第270図	第1・2号地下式墳実測図 ……	340
第255図	第141号住居跡・竈実測図………	321	第271図	第3・4号地下式墳実測図 ……	342
第256図	第141号住居跡出土遺物実測図	322	第272図	第1・2号井戸実測図 ……	344
第257図	第142号住居跡・竈実測図………	324	第273号	第3・4号井戸実測図 ……	346
第258図	第142号住居跡出土遺物実測図	325	第274図	第5・6号井戸実測図 ……	347
第259図	第143・146号住居跡・竈実測図…	326	第275図	第7・8号井戸実測図 ……	349
第260図	第143号住居跡出土遺物実測図	327	第276図	第1・2・3・5号井戸出土 遺物実測図………	350
第261図	第144号住居跡実測図 ……	328	第277図	第2・3・4・5・6号溝 実測図………	355
第262図	第145号住居跡・竈実測図………	330	第278図	第7号溝実測図………	357
第263図	第145号住居跡出土遺物実測図	331	第279図	溝出土遺物実測図………	361
第264図	第148号住居跡・竈実測図………	332	第280図	竪穴住居跡主軸方向・小竪穴 住居跡主軸方向………	364
第265図	第148号住居跡出土遺物実測図(1)…	333	第281図	金銅製品の蛍光X線スペクトル	372
第266図	第148号住居跡出土遺物実測図(2)…	334			
第267図	第150号住居跡出土遺物実測図	336			
第268図	第151号住居跡実測図 ……	337			

中塚遺跡

第1図	第1・2・3・4土坑（SK） 実測図………	377	第5図	第4号溝実測図………	388
第2図	第1号溝実測図………	379	第6図	土坑・溝・遺構外出土遺物実測図	390
第3図	第2号溝実測図………	383	第7図	遺構外出土土器拓影図(1)………	391
第4図	第3号溝実測図………	385	第8図	遺構外出土土器拓影図(2)………	392

付 図 目 次

付図1 柴崎遺跡II区遺構配置図

付図2 柴崎遺跡II区集落変遷図

表 目 次

柴崎遺跡II区

表1	柴崎・中塚遺跡周辺遺跡地名表………	7	表3	竪穴住居跡一覧表 ……	364
表2	土坑一覧表 ……	338			

中塚遺跡

表1	茨城県の陥し穴状遺構検出遺跡 ……	396
----	-------------------	-----

写真図版目次

柴崎遺跡II区

- P L 1 遺跡全景
- P L 2 第1号住居跡遺物出土状況
第1号住居跡
- P L 3 第2号住居跡, 第3号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡
- P L 4 第4号住居跡竈内遺物出土状況
第4号住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況
- P L 5 第5号住居跡竈内遺物出土状況
第5号住居跡, 第7号住居跡遺物出土状況
- P L 6 第7号住居跡, 第8号住居跡遺物出土状況, 第8号住居跡
- P L 7 第9号住居跡遺物出土状況
第9A・B・C号住居跡
- P L 8 第10号住居跡遺物出土状況
第10号住居跡, 第11A・B号住居跡, 第1号土坑
- P L 9 第12号住居跡遺物出土状況
第12号住居跡
- P L 10 第13・14A・B号住居跡遺物出土状況, 第13号住居跡
- P L 11 第14A・B号住居跡, 第15号住居跡遺物出土状況
- P L 12 第15号住居跡, 第16号住居跡遺物出土状況, 第16号住居跡
- P L 13 第17号住居跡遺物出土状況, 第17号住居跡, 第18A・B・C号住居跡遺物出土状況
- P L 14 第18A・B・C号住居跡, 第19A・B・C号住居跡・遺物出土状況
- P L 15 第20号住居跡, 第22号住居跡竈土層断面図・竈内遺物出土状況
- P L 16 第23号住居跡遺物出土状況, 第23号住居跡, 第24号住居跡遺物出土状況
- P L 17 第23・24号住居跡, 第24号住居跡, 第25A・B号住居跡遺物出土状況
- P L 18 第25A・B号住居跡, 第26号住居跡, 第27・37号住居跡
- P L 19 第28号住居跡遺物出土状況, 第28号住居跡, 第29・30A・B号住居跡遺物出土状況
- P L 20 第29・30A・B号住居跡, 第31号住居跡遺物出土状況
- P L 21 第31号住居跡, 第32号住居跡, 第34A・B号住居跡
- P L 22 第34A・B号住居跡, 第36号住居跡, 第27・37号住居跡
- P L 23 第27・37号住居跡, 第38号住居跡, 第39・88号住居跡
- P L 24 第40号住居跡遺物出土状況, 第40号住居跡, 第41号住居跡遺物出土状況
- P L 25 第40・41号住居跡, 第42号住居跡遺物出土状況, 第42号住居跡
- P L 26 第43号住居跡遺物出土状況, 第43号住居跡, 第44号住居跡遺物出土状況
- P L 27 第44号住居跡, 第45号住居跡
- P L 28 第47号住居跡遺物出土状況, 第47号住居跡, 第48号住居跡遺物出土状況
- P L 29 第48号住居跡, 第49号住居跡遺物出

- 土狀況，第49号住居跡
- P L 30 第50号住居跡遺物出土狀況
第50号住居跡
- P L 31 第51号住居跡遺物出土狀況，第51号
住居跡竈内遺物出土狀況，第51号住
居跡
- P L 32 第52号住居跡遺物出土狀況，第52号
住居跡，第53A・B号住居跡
第6・7・8・9・10号土坑
- P L 33 第54号住居跡遺物出土狀況，第4号
土坑，第56号住居跡遺物出土狀況
- P L 34 第57号住居跡遺物出土狀況，第57号
住居跡，第58号住居跡
- P L 35 第59号住居跡，第61号住居跡遺物出
土狀況，第61号住居跡
- P L 36 第62号住居跡遺物出土狀況
第62号住居跡
- P L 37 第63号住居跡遺物出土狀況，第63号
住居跡，第64・65号住居跡遺物出土
狀況
- P L 38 第64号住居跡杏葉出土狀況，第64号
住居跡，第65号住居跡遺物出土狀況
- P L 39 第64・65号住居跡，第65号住居跡，
第65号住居跡遺物出土狀況
- P L 40 第64・65・66号住居跡，第67号住居
跡遺物出土狀況，第67号住居跡
- P L 41 第68号住居跡遺物出土狀況，第68号
住居跡，第69号住居跡遺物出土狀況
- P L 42 第69号住居跡，第71号住居跡遺物出
土狀況，第72号住居跡遺物出土狀況
- P L 43 第72号住居跡，第73号住居跡遺物出
土狀況，第73号住居跡
- P L 44 第74号住居跡遺物出土狀況，第74号
住居跡，第75号住居跡遺物出土狀況
- P L 45 第75号住居跡，第77号住居跡遺物出
土狀況，第77号住居跡
- P L 46 第80号住居跡遺物出土狀況
第80号住居跡
- P L 47 第82号住居跡遺物出土狀況，第82号
住居跡，第83号住居跡遺物出土狀況
- P L 48 第85号住居跡，第86号住居跡，第87
A・B号住居跡
- P L 49 第87A・B号住居跡，第88号住居跡，
第90号住居跡遺物出土狀況
- P L 50 第90号住居跡，第91号住居跡，第92
号住居跡遺物出土狀況
- P L 51 第92号住居跡遺物出土狀況，第92号
住居跡，第93号住居跡遺物出土狀況
- P L 52 第93号住居跡，第94号住居跡
- P L 53 第95号住居跡遺物出土狀況，第95号
住居跡，第96号住居跡遺物出土狀況
- P L 54 第96A・B号住居跡，第97・98号住
居跡遺物出土狀況，第97・98号住居
跡
- P L 55 第97・98号住居跡，第99号住居跡遺
物出土狀況
- P L 56 第100号住居跡遺物出土狀況，第100
号住居跡，第101号住居跡遺物出土狀
況
- P L 57 第101号住居跡，第103号住居跡遺物
出土狀況，第104A・B号住居跡遺物
出土狀況
- P L 58 第104A・B号住居跡，第105号住居
跡遺物出土狀況

- P L 59 第105号住居跡, 第106号住居跡遺物
出土狀況, 第106号住居跡
- P L 60 第107号住居跡遺物出土狀況
第107号住居跡, 第108号住居跡遺物
出土狀況
- P L 61 第109号住居跡遺物出土狀況, 第110
号住居跡遺物出土狀況, 第110号住居
跡
- P L 62 第110・111・112・113号住居跡遺物
出土狀況, 第112号住居跡遺物出土狀
況, 第113号住居跡遺物出土狀況
- P L 63 第113号住居跡, 第114号住居跡遺物
出土狀況
- P L 64 第114・115号住居跡遺物出土狀況,
第116号住居跡遺物出土狀況
第116号住居跡・第7号井戸
- P L 65 遺構検出狀況, 第117A・B号住居跡
遺物出土狀況, 第117A・B号住居跡
- P L 66 第118号住居跡遺物出土狀況
第118号住居跡, 第119号住居跡
- P L 67 第120号住居跡遺物出土狀況
第120号住居跡, 第122号住居跡遺物
出土狀況
- P L 68 第122号住居跡, 第123号住居跡遺物
出土狀況
- P L 69 第123号住居跡, 第124号住居跡, 第
125号住居跡遺物出土狀況
- P L 70 第125号住居跡, 第126号住居跡遺物
出土狀況
- P L 71 第127号住居跡遺物出土狀況
第127号住居跡, 第128号住居跡
- P L 72 第129号住居跡遺物出土狀況
- 第129号住居跡, 第130号住居跡
- P L 73 第131号住居跡遺物出土狀況, 第131
号住居跡, 第132号住居跡遺物出土狀
況
- P L 74 第132号住居跡遺物出土狀況, 第132
号住居跡, 第133号住居跡遺物出土狀
況
- P L 75 第133号住居跡遺物出土狀況
第133号住居跡, 第134号住居跡
- P L 76 第135号住居跡遺物出土狀況, 第135
号住居跡
- P L 77 第136号住居跡, 第137号住居跡遺物
出土狀況, 第137号住居跡
- P L 78 第138号住居跡, 第139号住居跡遺物
出土狀況, 第141号住居跡遺物出土狀
況
- P L 79 第141号住居跡遺物出土狀況, 第141
号住居跡, 第143号住居跡遺物出土狀
況
- P L 80 第144号住居跡, 第145号住居跡遺物
出土狀況, 第146号住居跡
- P L 81 第2・5・6号土坑
- P L 82 第7・8・10号土坑
- P L 83 第11・12・13号土坑
- P L 84 第14・15・17号土坑
- P L 85 第18号土坑, 第1号地下式墳
- P L 86 第2・3・4号地下式墳
- P L 87 第1・3・4号井戸
- P L 88 第5・6号井戸
- P L 89 第6号井戸
- P L 90 第7号井戸, 第2・3号溝
- P L 91 第4号溝

- P L 92 第 5 号溝
- P L 93 第 1・2・3 号住居跡出土遺物
- P L 94 第 4 号住居跡出土遺物
- P L 95 第 4 号住居跡出土遺物
- P L 96 第 5 号住居跡出土遺物
- P L 97 第 5・7 号住居跡出土遺物
- P L 98 第 8・9 A 号住居跡出土遺物
- P L 99 第 11 B・12・18 B 号住居跡出土遺物
- P L 100 第 19 B・22 A・22 B 号住居跡出土遺物
- P L 101 第 22 B・24・30 号住居跡出土遺物
- P L 102 第 31・32・38・39・40・41 号住居跡出土遺物
- P L 103 第 42 号住居跡出土遺物
- P L 104 第 43 号住居跡出土遺物
- P L 105 第 44・45 号住居跡出土遺物
- P L 106 第 45・47・48 号住居跡出土遺物
- P L 107 第 48・49 号住居跡出土遺物
- P L 108 第 49・50 号住居跡出土遺物
- P L 109 第 50 号住居跡出土遺物
- P L 110 第 51・52・53 号住居跡出土遺物
- P L 111 第 54・56 号住居跡出土遺物
- P L 112 第 56・57 号住居跡出土遺物
- P L 113 第 60・61 号住居跡出土遺物
- P L 114 第 61・62・63 号住居跡出土遺物
- P L 115 第 63・64 号住居跡出土遺物
- P L 116 第 65・67 号住居跡出土遺物
- P L 117 第 67・68・69・71 号住居跡出土遺物
- P L 118 第 72・73 号住居跡出土遺物
- P L 119 第 73・74 号住居跡出土遺物
- P L 120 第 74・80・82 号住居跡出土遺物
- P L 121 第 82・83 号住居跡出土遺物
- P L 122 第 86・88・92 号住居跡出土遺物
- P L 123 第 92・93・95 号住居跡出土遺物
- P L 124 第 96 号住居跡出土遺物
- P L 125 第 96 号住居跡出土遺物
- P L 126 第 97・98・100 号住居跡出土遺物
- P L 127 第 100・101・102・105 号住居跡出土遺物
- P L 128 第 107・108・109 号住居跡出土遺物
- P L 129 第 109・110・113・114 号住居跡出土遺物
- P L 130 第 114・115・116・117 号住居跡出土遺物
- P L 131 第 118・120 号住居跡出土遺物
- P L 132 第 120・122・123・125 号住居跡出土遺物
- P L 133 第 127・130・131 号住居跡出土遺物
- P L 134 第 132 号住居跡出土遺物
- P L 135 第 133・134 号住居跡出土遺物
- P L 136 第 135・136 号住居跡出土遺物
- P L 137 第 137・139 号住居跡出土遺物
- P L 138 第 141・142・143 号住居跡出土遺物
- P L 139 第 145・148 号住居跡出土遺物
- P L 140 第 148・150 号住居跡出土遺物
- P L 141 第 15 号土坑，溝，第 1・2・3・5 号井戸出土遺物

中塚遺跡

- P L 142 中塚遺跡全景
- P L 143 調査前風景，試掘調査，第 1 号土坑
- P L 144 第 2 号土坑，第 3・4 号土坑遺物出土状況

P L 145 第 1・2・3号溝

構外出土遺物

P L 146 第 3・4号溝

P L 148 遺跡内出土遺物(1)

P L 147 第 2・3号土坑, 第 1・4号溝, 遺

P L 149 遺跡内出土遺物(2)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県つくば市付近は、筑波研究学園都市建設以前は平地林と水田・畑が散在する農村地帯であった。この緑豊かな田園地帯に「研究学園都市」の建設が昭和30年代に計画され、40年代初めから建設工事が進められた。現在は研究・教育機関と関連する高層ビルが林立し、それを核とする工業団地の建設が進められている。また、そこで働く人々の住宅団地も造成されて、つくば市は国際的頭脳都市として大きく生まれ変わろうとしている。

つくば市は、昭和62年11月、新治郡桜村、筑波郡谷田部町・豊里町・大穂町の4町村が合併して誕生した市で、昭和63年1月には筑波郡筑波町が合併し、県南最大の都市となっている。

柴崎遺跡及び中塚遺跡は、つくば市の東部、桜地区に所在し、旧桜村当局は、昭和50年3月柴崎地区における工業団地造成計画をまとめ、昭和56年8月に計画を茨城県に提出した。翌57年、旧桜村教育委員会は将来の開発に備えて、開発予定地内における埋蔵文化財の分布調査を筑波大学に依頼し実施した。同年11月、村当局は、住宅・都市整備公団に工業団地造成について協力を依頼した。これを受けて公団は、昭和59年4月、茨城県教育委員会に開発予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対して茨城県教育委員会は、同年5月に独自に分布調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の存在を確認し、その旨、住宅・都市整備公団に回答した。開発計画が具体化した昭和61年12月、住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会に、開発エリア内における埋蔵文化財包蔵地の範囲についての確認があり、茨城県教育委員会は、直ちに試掘調査を実施し遺跡の範囲を確認し、住宅・都市整備公団に回答した。

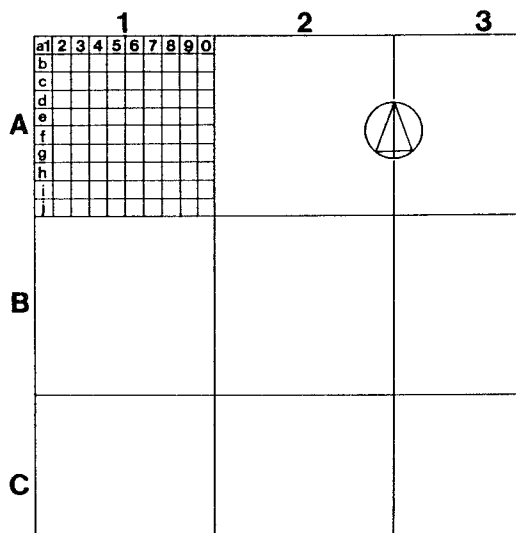
その結果、茨城県教育委員会、旧桜村教育委員会、住宅・都市整備公団の三者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、現状保存が困難なため記録保存の処置をとることで一致した。62年2月、茨城県教育委員会は、住宅・都市整備公団に、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年3月、住宅・都市整備公団から茨城県教育財団に、柴崎遺跡の発掘調査の依頼があり、茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と柴崎遺跡発掘調査について打ち合わせを行い、昭和62年4月1日、柴崎遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、同年4月から柴崎Ⅰ区とⅡ区の一部を、さらに昭和63年4月からⅡ区と中塚遺跡の調査を実施することとなった。

第2節 調査方法

1 地区設定 (第1図)

柴崎・中塚遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸(南北)・Y軸(東西)を基準線として、40m四方の大調査区に分割し、さらに、大調査区内を4m四方の小調査区に細分割した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区において北から南へA・B・C……西から東へ1・2・3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は北から南



第1図 調査区呼称方法概念図

へa・b・c……j, 西から東へ1・2・3……0とし、小調査区の名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a₁」「B2e₂」のように呼称した。

なお、両遺跡における基準点の座標は次のとおりである。

- (1) 柴崎遺跡 (D4a₁) ……X軸(南北)+11,960m Y軸(東西)+25,120m
- (2) 中塚遺跡 (C3a₁) ……X軸(南北)+12,320m Y軸(東西)+25,680m

2 遺構確認

遺構確認は、調査面積の8分の1にあたる小調査区を発掘する方法により、遺構の確認を試みた。その結果、土師器や須恵器の破片とともに、住居跡や溝と思われる落ち込みが確認された。また、表土の厚さは30~60cmであることも判明した。この試掘結果をふまえ、遺跡全面の表土除去をすることにした。表土除去には重機を利用したが、遺跡が2地区に分かれていること、遺跡内にまだ耕作している畑が残っていることなどを考え、2回に分けて実施した。重機で除去したあとを追うように、人力による遺構確認を行い、住居跡や溝、井戸等を確認した。遺跡の中央部はやや高く、周辺部は低くなるが、この低い部分はローム層がほとんどなく、粘土質の褐色土が堆積していた。

3 遺構調査

住居跡の調査は、土層観察用ベルトを十文字に設定して掘り込む四分割法を原則とした。分割した地区の表記は、北東部を1区とし、以下時計回りに2・3・4区とした。なお、平面プランが明確でないものや、覆土がほとんどなくベルト設定が困難な住居跡については、南北あるいは東西に二分割した。この場合は、北側あるいは東側を1区とし、残りを二区とした。土坑については、長軸方向に二分割し、地区名は住居跡の表記に準じた。掘立柱建物跡については、柱痕跡あるいは柱掘り方が一直線に連続するようなラインを設定し、このラインに沿って二分割して掘り込んだ。井戸及び地下式壙については、土坑のそれに準じた。溝については掘り込まれている方向が様々であるため、適宜土層観察ベルトを設定して掘り込みを実施した。

土層については、色調・含有物・締まり具合・粘土等を分類した。色調の決定にあたっては、「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社)を使用した。遺物の取り上げは、出土位置・遺物番号・レベルを図面あるいは台帳に記録した。遺構の観察は、埋土の堆積状況・床面・壁・柱穴・竈等について留意した。遺構の実測については、平面図は水系を1m方眼に地張りして計測し、土層及び遺構断面図は水系を適度なレベルに水平に張り、計測した。遺構番号は、調査した順に番号を付した。

第3節 調査経過

柴崎遺跡II区の調査は、昭和63年4月1日から平成元年3月31日までの1年間、中塚遺跡は、昭和63年10月1日から同年12月25日までの3ヶ月間実施した。

以下、調査経過の概要について記述する。

(昭和63年)

- 4 月 発掘調査を開始するための諸準備を行い、倉庫の設置、進入路や駐車場を確保し、併せて遺跡内の山林の伐開作業を開始した。中旬から試掘調査を並行して進め、土層堆積状況・遺構等の確認調査を実施した。
- 5 月 前月に引き続き、試掘調査を実施した結果、竪穴住居跡・溝ととらえられる落ち込みや土師器・須恵器の破片が確認できた。調査の能率をあげるため、重機を導入して表土除去を進めた。
- 6 月 重機による表土除去を続けると同時に、遺構確認作業を実施し、中旬より、竪穴住居跡の調査を開始した。調査は、遺跡のほぼ中央部から始め、下旬までに約15軒の竪穴住居跡の調査を行った。
- 7 月 竪穴住居跡の調査は、10番台から30番台に進み、これに伴って竪穴住居跡の測量

も同時に進めた。

- 8 月 竪穴住居跡の調査は、50番台に進み、調査の進行に伴って、地下式竈の調査も実施したが、降雨の日々が続き、作業にかなり困難をきたした。
- 9 月 前月に引き続き、柴崎遺跡の竪穴住居跡、土坑、溝、井戸の掘り込み・調査・測量を行うと同時に、10月から同時並行調査を実施する中塚遺跡の土層堆積状況・遺構確認調査を行った。
- 10 月 柴崎遺跡 これまで調査してきた竪穴住居跡、土坑、溝、井戸の測量と併せて、80番台までの竪穴住居跡の掘り込み調査を進めた。
中塚遺跡 重機を導入し、表土除去・遺構確認調査を行った。
- 11 月 柴崎遺跡 竪穴住居跡の調査は、90番台に進み、掘り込み・測量を実施し、遺構の写真撮影を行った。
中塚遺跡 確認された溝、土坑の掘り込み調査を進め、併せて土層堆積状況の測量を実施した。
- 12 月 柴崎遺跡 120番台までの竪穴住居跡の掘り込み調査と、遺構の測量を継続して進めた。
中塚遺跡 前月に引き続き、溝・土坑等の掘り込み調査と測量を進め、下旬には、遺構の写真撮影・航空写真撮影を実施して、調査を終了した。

(平成元年)

- 1 月 5日より、柴崎遺跡の調査を開始し、竪穴住居跡の調査は、130番台まで進み、井戸・溝の掘り込みを進めながら、既に掘り込みの終了した遺構の測量・写真撮影を進めた。
- 2 月 竪穴住居跡151番・井戸・溝等の掘り込み・測量を進め、また、新た当該遺跡東側に所在する鹿島神社の東側150m²内の遺構確認調査を実施した。これまで調査された柴崎遺跡内の遺構・遺物の性格を明確にとらえるために、東京都教育庁文化課学芸員福田健司氏を講師として招聘し、「小竪穴遺構」についての班内研修会を実施した。
- 3 月 上旬には検出された遺構の調査もほぼ終了し、補足調査を実施した。中旬に遺跡の航空写真撮影を行い、これまでに作成した図面類の点検・修正、遺物の洗浄・注記等を実施し、18日には現地説明会を行った。その後は、遺跡内の危険箇所(井戸・土坑等)の埋め戻しを行い、24日に関係機関等への連絡を済ませ、一切の調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

柴崎遺跡は、つくば市大字柴崎字反町177ほか、中塚遺跡は同市大字上野字中塚674-1ほか、所在し、常磐自動車道・桜土浦インターチェンジの北北西約7kmの地点に位置している。

遺跡の所在するつくば市は、昭和62年11月に桜村・谷田部町・豊里町・大穂町の4町村が合併して誕生した茨城県で最も新しい市であり、昭和63年11月には筑波町が編入した。つくば市の総面積は257.71km²である。

柴崎遺跡の調査は、昭和62年4月から開始し、当初は旧桜村に所在していた遺跡であったため、前述した事情から今後旧桜村を「桜地区」と呼称して記述することにする。

つくば市は、関東地方の北東部・茨城県の南西部に位置し、市の南東端から東方約5kmには霞ヶ浦が、北端には筑波山が聳えて、この地域は水郷筑波国定公園にも指定される地域として知られている。地形を見ると北東部には筑波山塊の南勢端がせまり、その山塊の端を桜川が南東に流下して霞ヶ浦に注いでいる。また、市の西端を小貝川がほぼ南へ流下し、その地域は、沖積低地で主に水田となっている。この両河川の間広がる平坦な台地は、筑波稲敷台地と呼ばれ、台地は、畑や平地林となっている。この地は、昔から自然に恵まれていて、産業の中心は主に農業であったが、昭和40年代から始まった「筑波研究学園都市」の建設により、大きな変貌を遂げつつある。現在は研究学園都市の中心部はほぼ完成し、周辺地域の開発と整備が着々と進められている。

遺跡の所在する桜地区は、つくば市の南東部に位置し、土浦市・新治村に接している。桜地区の西側部を学園東大通りに沿うように、霞ヶ浦に流入する花室川が南東に流下し、桜地区の東部新治村との境を桜川が同じく南東に向かって流下している。両河川の間には、標高20～30mの平坦な台地が北西から南東へ舌状に延びている。

柴崎遺跡及び中塚遺跡は、花室川の沖積低地になだらかに傾斜する標高25mほどの台地に所在し、現況は、山林や畑で、桜川との比高は20m、花室川との比高は1～2mを測り、桜川・花室川の沖積低地は水田となっている。

第2節 歴史的環境

つくば市桜地区内の遺跡は、桜川右岸台地端部とその流域に開けた低地に数多く存在しており、これまでの桜地区内での遺跡分布調査の結果、先土器時代の遺跡は、確認されず、縄文時代以降の遺跡が比較的多く認められている。

縄文時代の遺跡は、桜地区内で13か所確認されており、これらの中で周知の遺跡として、旭台貝塚(12)、下広岡遺跡(37)がある。旭台貝塚は、桜地区内における唯一の貝塚で、桜村史によると貝層は30～40cmの厚さに堆積し、アカニシ・ハマグリ・ヤマトシジミ等で構成されている。また、下広岡遺跡は、花室川の右岸にあり、常磐自動車道土浦桜インターチェンジの建設に伴い、茨城県教育財団が昭和53年度から54年度にかけて調査を実施した遺跡である。その結果、中期の竪穴住居跡や袋状土坑等が検出され、縄文時代中期の大集落跡であったことが窺える遺跡である。さらに、下広岡遺跡と同時期に比定される遺跡では、台坪才十朗遺跡(3)・天神遺跡(8)・大角豆遺跡(35)・下大角豆遺跡(21)などがあり、いずれも、縄文時代中期前葉の阿玉台式期から後葉の加曽利E式期に集落が形成されていたものと考えられる。後期から晩期にかけては、前述した旭台貝塚・西坪B遺跡(14)・花室遺跡(26)などが確認されているが、いずれも、遺物の散布がみられる程度である。

弥生時代の遺跡は、古来遺跡(30)・西坪遺跡(23)が低地にみられ、台地上には、縄文時代と複合する花室遺跡・大角豆遺跡等が確認されているが、これらの遺跡はいずれも弥生式土器片が散布しているにすぎない。

古墳時代の遺跡は、桜川流域の水田地帯をみおろす舌状台地端部に確認され、古墳は台地上や低地部にも築造されている。全長80m、後円部径50m、高さ8m、前方部の長さ30m、高さ2mの規模をもつ前方後円墳の天神塚古墳(7)や、さらに、全長75mを測り、直刀が出土した金田古墳(18)、全長45mの鹿島様古墳等3基の前方後円墳が存在し、それぞれの背後に、円墳を伴い古墳群が形成されている。また、低地にも全長65mと50mの規模をもつ前方後円墳2基と円墳1基を有する松塚古墳群があり、さらに、とりおい塚古墳、前方後円墳と思われる古塚古墳等がある。その他、上境の滝の台古墳群・西坪台古墳群・稲荷山古墳・千現塚古墳等多くの古墳や古墳群がみられ、当該期の集落跡や包蔵地も多く、縄文時代と複合する大山遺跡(6)や天神遺跡、弥生時代と複合する倉掛遺跡(35)、その他、土器屋遺跡(17)・明神の門遺跡(31)・沼向遺跡(1)等がある。

奈良・平安時代の遺跡は、布目瓦が出土した九重廃寺(16)、河内郡衙の倉庫群とみられる西坪遺跡の建築址(総柱の掘立柱建物跡)と、それと関連の深いと思われる本田条里があり、さらに、本田条里の南には、五佐山の下の大池を基点に丘陵沿いに正しく東と北に築堤し、東西九里、南

北四条にくぎった長方形の36坪に構成された上ノ室条里もみられたが、現在は、両条里とも湮滅している。

中世以降の遺跡としては、城館跡が確認され、小田氏との関連が深い金田城跡・花室城跡・上ノ室城跡等がある。

参考資料

「桜村史 上巻」桜村教育委員会 昭和57年

「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 昭和62年

「茨城県教育財団文化財調査報告X」茨城県教育財団 昭和56年

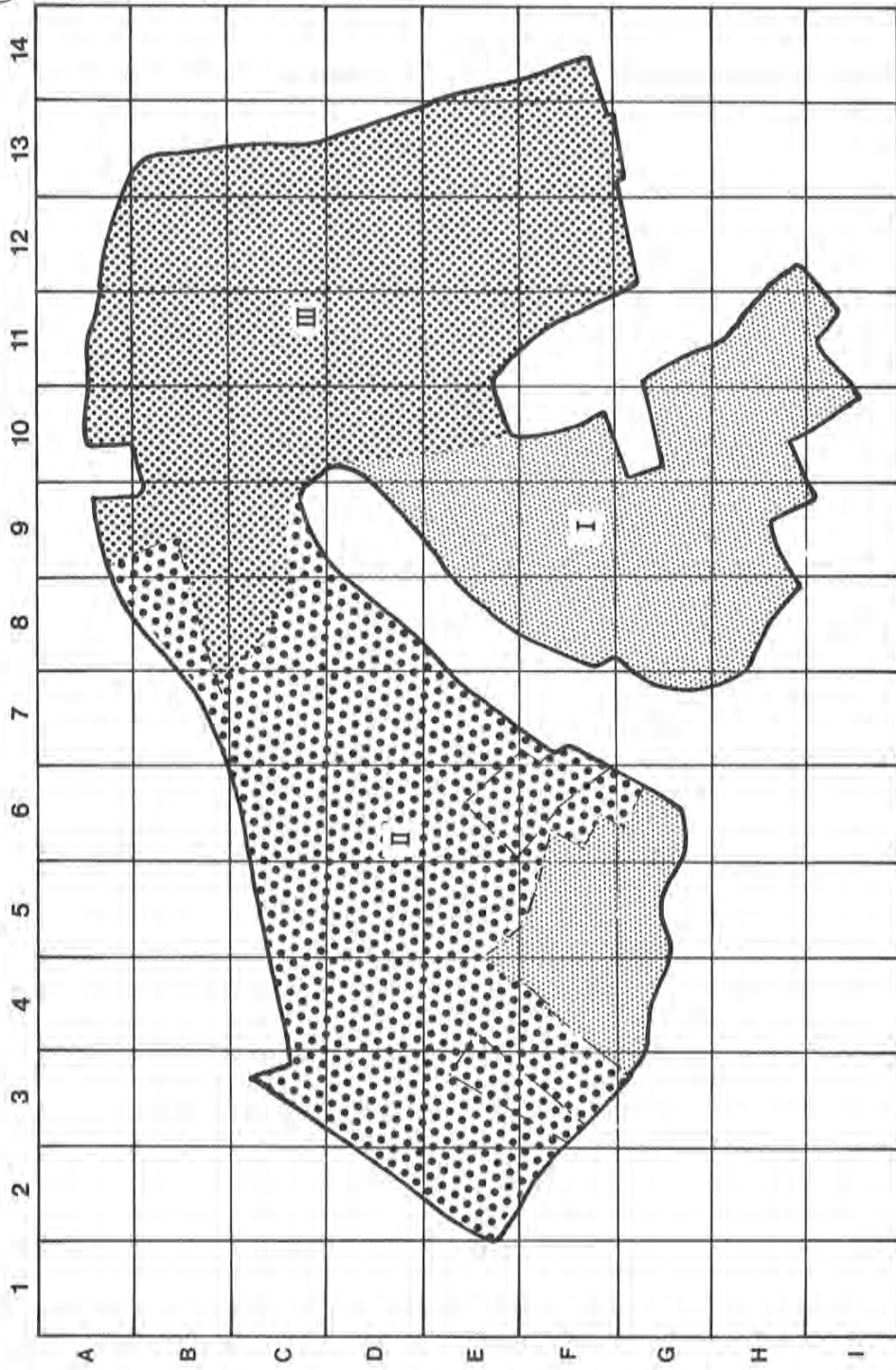
「柴崎地区埋蔵文化財分布調査報告書」桜村教育委員会 昭和62年

表1 柴崎・中塚遺跡周辺遺跡地名表

図中 番号	遺構名	時代				図中 番号	遺構名	時代			
		縄文	弥生	古墳	奈・平以降			縄文	弥生	古墳	奈・平以降
1	沼向遺跡			○		22	河内郡衙跡				○
2	古塚古墳			○		23	西坪遺跡		○		
3	台坪才十朗遺跡	○				24	本田遺跡				○
4	愛宕塚古墳			○		25	松塚古墳群			○	
5	十日塚古墳		○			26	花室遺跡	○	○		
6	大山遺跡	○		○		27	花室城跡				○
7	天神塚古墳			○		28	上ノ室条里跡				○
8	天神遺跡	○		○		29	上ノ室城跡				○
9	柴崎遺跡			○	○	30	古来遺跡		○		
10	滝の台古墳群			○		31	明神の門遺跡			○	
11	どんどん塚古墳		○			32	大日塚古墳			○	
12	旭台貝塚	○				33	東古墳群			○	
13	中根遺跡			○		34	鹿島様古墳			○	
14	西坪B遺跡			○		35	倉掛遺跡			○	
15	とりおい塚古墳			○		36	大角豆遺跡		○		
16	九重廃寺跡				○	37	千現塚古墳			○	
17	土器屋遺跡			○		38	下広岡遺跡	○			
18	金田古墳			○		39	中塚遺跡	○		○	○
19	金田城跡				○	40	古来館跡				○
20	横町古墳群			○		41	稲荷前古墳群			○	
21	下大角豆遺跡	○									



第2图 桜地区遺跡分布图



第3図 柴崎遺跡調査区 (I区…62年度, II区…63年度, III区…平成元年度)

第3章 遺構・遺物の記載方法

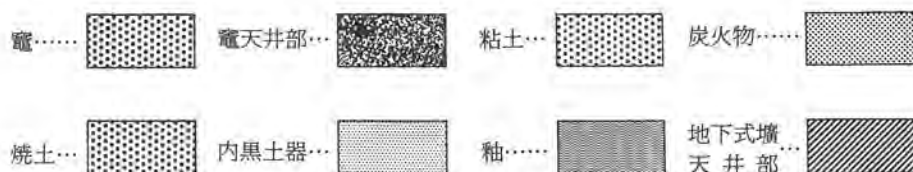
第1節 遺構の記載方法

本書では、遺構等の記載に際して、下記の要領で統一した。

1 使用記号

住居跡……SI 土坑……SK 掘立柱建物跡……SB 溝……SD 井戸……SE
 ピット(柱穴)……P₁・P₂～ 実測土器……P 土製品……DP 拓本土器……TP
 石器・石製品……Q 金属製品……M 瓦……T

2 実測図中の表示



3 土層の分類

当遺跡で検出された遺構の土層の観察については、色調、含有物の種類と量、粘性等を記載し、色調については、「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社)を使用した。

4 遺構実測図の作成方法と掲載方法

- 各遺構の実測図は、原則として縮尺20分の1の原図を、竈は10分の1の原図をそれぞれトレースして版組みし、さらに3分の1に縮小して掲載した。
- 溝については、縮尺20分の1の原図を、適宜縮小して掲載した。
- 水系レベルは、同一レベルの場合に限り1か所の表示で表し、それ以外は個々に掲載した。
- 土層の観察状況については、人為的な堆積状況が認められた場合のみ、その旨を記し、自然堆積の場合は、特に記述はしなかった。

5 土坑一覧表の見方について

【土坑一覧表】

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長径	短径	深さ					

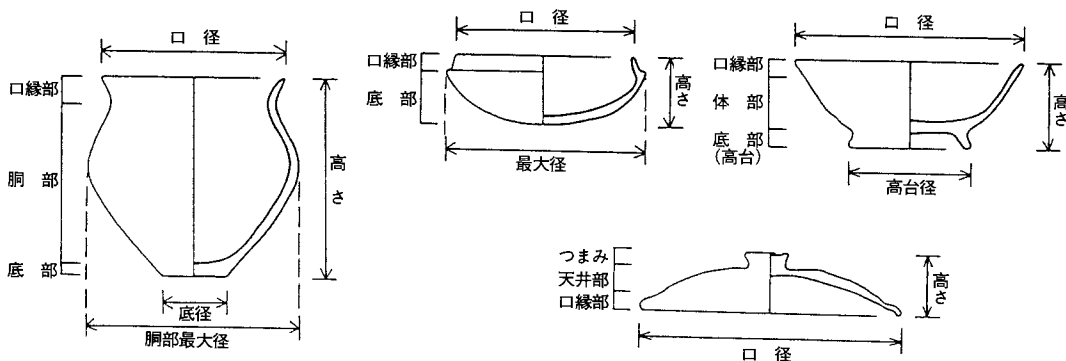
- 位置は、グリッド名で表示し、2か所以上のグリッドにまたがる場合は、遺構の占める割合の多いグリッド名を表示した。
- 長径方向は、座標北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。
- 壁面は、底面からの立ち上がり角度が76°~90°を垂直、75°以下を外傾とした。
- 備考には、重複関係など、特記事項等を記入した。

第2節 遺物の記載方法

本書では、遺物の記載に際して、下記の要領で統一した。

1 遺物実測図の作成方法と掲載方法

- 土器の実測図は、中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は、須恵器の叩き目と底部の調整痕を採拓し、叩き目については実測図の外面部に、底部については実測図の下側に、それぞれ図示した。
- 須恵器の断面は黒く塗りつぶし、土師器と区別した。
- 土器の内・外面を黒色処理した遺物は、黒色部分にスクリーントーンを使用した。
- 遺物は、原則として、実測図を3分の1に縮小して掲載した。しかし、遺物の種類や大きさにより、それ以外の縮尺を使用した場合もある。



2 出土遺物観察表の見方について

【出土遺物観察表】

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		A G			

- 番号は、図版中の番号である。
- 法量は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径、E-高台高、F-つまみ高、G-つまみ高とし、¹²()を付した数値は、推定値または現存値である。
- 器形・整形の特徴の欄における「→」の記号は、施文・調整の方向・順位を示す。
- 色調については土色帳を使用し、焼成については硬く焼き締まっているものは良好、焼きがあまく器面がザラザラで剥落しているものを不良とし、その中間のものは普通とした。

3 その他

- 出土遺物の写真に付した番号は、実測図版番号と同一番号である。

第4章 柴崎遺跡II区

第1節 遺跡の概要

1 遺跡の概要

柴崎遺跡は、調査前から縄文式土器片、土師器片、須恵器片が散布し、周知の遺跡として捉えられており、遺跡の所在する台地をI区からIII区に区画して、昭和62年度から平成元年度にかけて調査を実施した。

昭和62年度調査のI区とII区の一部の発掘調査の成果については、平成元年度の報告書に収録しており、本書は、II区から検出された遺構・遺物について収録した。III区については平成元年度に調査を終了し、平成3年度以降に報告書を刊行する予定である。

I区の調査の結果、竪穴住居跡・土坑・地下式墳・井戸・溝が、調査区域の全域から検出され、特に竪穴住居跡は調査区の中央部と南東部に濃密に分布している。

II区も調査の結果、先土器時代の石器、縄文式土器片や石器等が少量出土している。これらは先土器時代・縄文時代の遺構に伴うものではなく、遺物の散布を確認したにすぎなかった。検出された遺構は、古墳時代後期から奈良・平安時代の範疇に位置するものと思われ、下記のとおりである。

II区から、検出された遺構(すでに報告済みのII-1の住居跡16軒、掘立柱建物跡2棟は除く)

竪穴住居跡	146軒
土坑	18基
地下式墳	4基
井戸	8基
溝	6条

これらの遺構の内、竪穴住居跡は台地の全域に分布しているが、分布の状態には疎密がみられる。古墳時代から奈良・平安時代までの集落構成は、それらの時期により立地の様子も異なることがわかり、台地での集落の変遷がとらえられるものと考えられる。次に、土坑・地下式墳・井戸・溝等の遺構であるが、台地の中央部と北西部に密集して検出されている。これらの場所は、いずれも竪穴住居跡が多く検出された場所であり、重複関係が激しく、新旧関係をとらえるのに困難をきたした地区である。

溝は、区画設定や排水溝を目的としたものと考えられ、直線的に走ったり、直角に折れていたりのものが多くみられる。区画を目的とした溝は、集落の形成された同時期に構築されたものと考えられ、集落構成の上で係わりをもつものと思われる。

II区からの出土遺物は、土師器（坏・高台付坏・甕・小型甕・甌）、須恵器（坏・高台付坏・皿・盤・高坏・埴・甕・蓋）、瓦（軒平瓦）、鉄製品（釘・刀子）、金銅製品（杏葉）、石製品（紡錘車）など多種類に及ぶ。

III区の調査の結果、竪穴住居跡、小竪穴、土坑、井戸、溝が調査区域の全域から検出され、特に小竪穴は調査区の北部に濃密に分布している。

2 遺跡の基本層序

柴崎遺跡II区の土層堆積状況は、基本的にI区と同じである。遺跡の基本層序は、下図(第4図)の地層断面図のとおり、7層に分類できる。

第1層は、30～40cmの厚さを有する耕作土である。

第2層は、30～40cmの厚さを有する耕作土を含む明褐色土である。

第3層は、30cmの厚さを有するソフトロームの漸移層の明黄褐色土である。

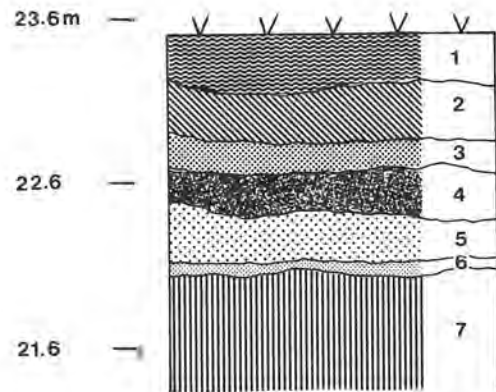
第4層は、30cmの厚さを有し、層中にブラックバンドが認められ、極めて締まりのあるハードローム層である。

第5層は、30～35cmの厚さを有し、粘土が混じる明黄褐色土である。

第6層は、6～10cmの厚さを有する黄灰色の粘土層である。

第7層は、青灰色の粘土層である。

遺跡の立地する台地は、小さな支谷が2か所に入り込み、表土から2.0～2.5mで粘土層になる。土層は比較的薄い地域であり、表土から1.5mで湧水が確認される。台地上は比較的平坦であるが、中央部が若干高く、周辺部はなだらかに傾斜している。台地は畑、低地は水田として利用され、畑地と水田では1～2mの高低差がある。



第4図 基本土層図

第2節 竪穴住居跡

当遺跡からは、146軒の竪穴住居跡が検出されている。竪穴住居跡の時期は、古墳時代後期から奈良・平安時代までであり、奈良時代以降の範疇に入るものが多い。

また、竈や炉をもたず、柱穴が原則として2ないし3か所の小型の竪穴住居跡が20軒検出されている。これらは、遺構の形態等から平安時代に位置するものであり、この時期の竪穴住居跡の構造や集落形態の一端を垣間見ることができる遺跡であるといえる。

第1号住居跡（第5図）

（位置） 調査区の東側、D7d₁区を中心に確認。

（規模と平面形） 6.4×6.1mの方形。

（主軸方向） N-6°-W。

（壁） 壁高28cmを測り、垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅17cm、深さ15cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 全体的に平坦で、硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは、径24～36cm、深さ16～52cmを測る。支柱穴は、P₁・P₂・P₄・P₆・P₇の5本でP₃・P₅はそれぞれP₂・P₄の補助柱穴と考えられる。

（竈） 北壁中央部を28cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部は崩落しているが、袖部の遺存状態は比較的良好で馬蹄形を呈している。燃焼部の内壁や火床部は焼けて焼土化している。焚口部から火床部はほぼ平坦で、煙道部は火床部から急角度で立ち上がっている。

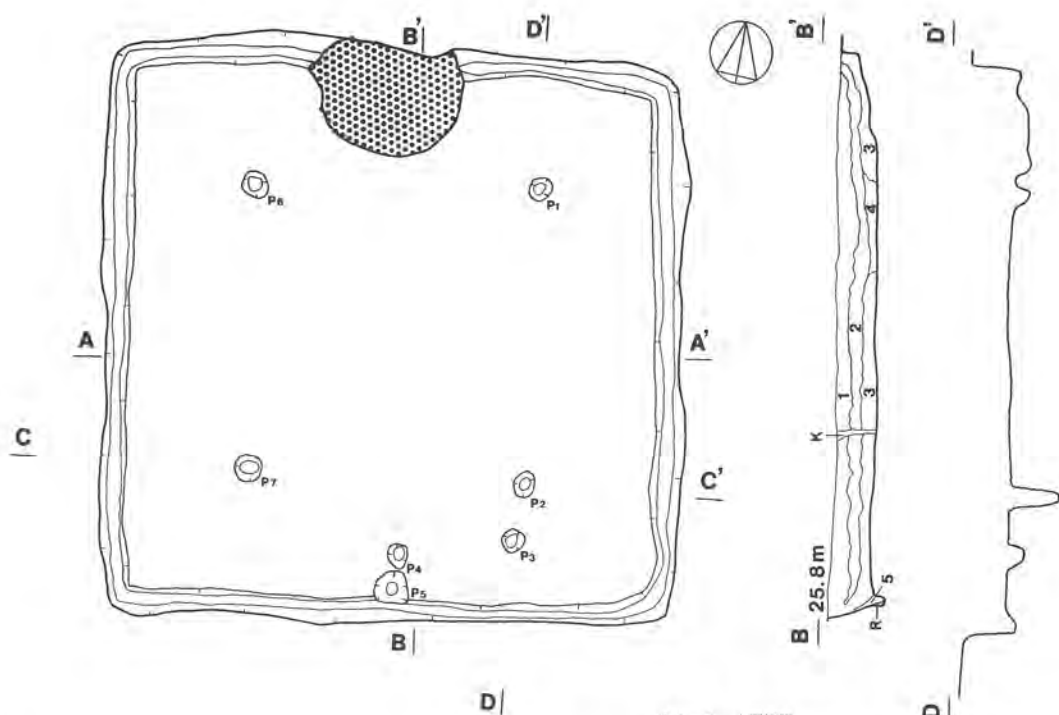
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近の床面及び覆土から土師器・須恵器片が集中して出土している。竈前面の床面からは1・2の土師器坏、5の土師器甕、性格不明の鉄製品が出土している。覆土下層から中層にかけては土師器（坏・甕）、須恵器（坏）が出土している。

（所見） 本跡は遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。

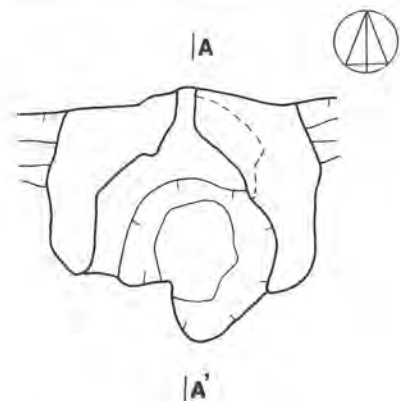
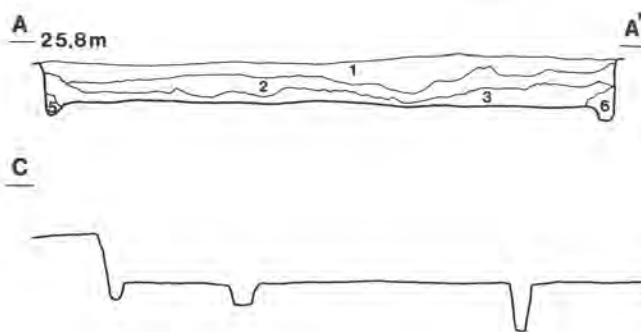
第1号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	坏 土師器	A (14.0)	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部はへら削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	20% 床面
		B (4.5)			
2	坏 土師器	A (13.6)	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は外傾して立ち上がる。底部はへら削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰褐色 普通	20% 床面
		B 4.4			



SI-1 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, 木炭
- 3 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土ブロック
- 4 暗褐色 黒色土・粘土ブロック, 焼土・木炭粒子
- 5 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 6 暗褐色 ローム・焼土粒子

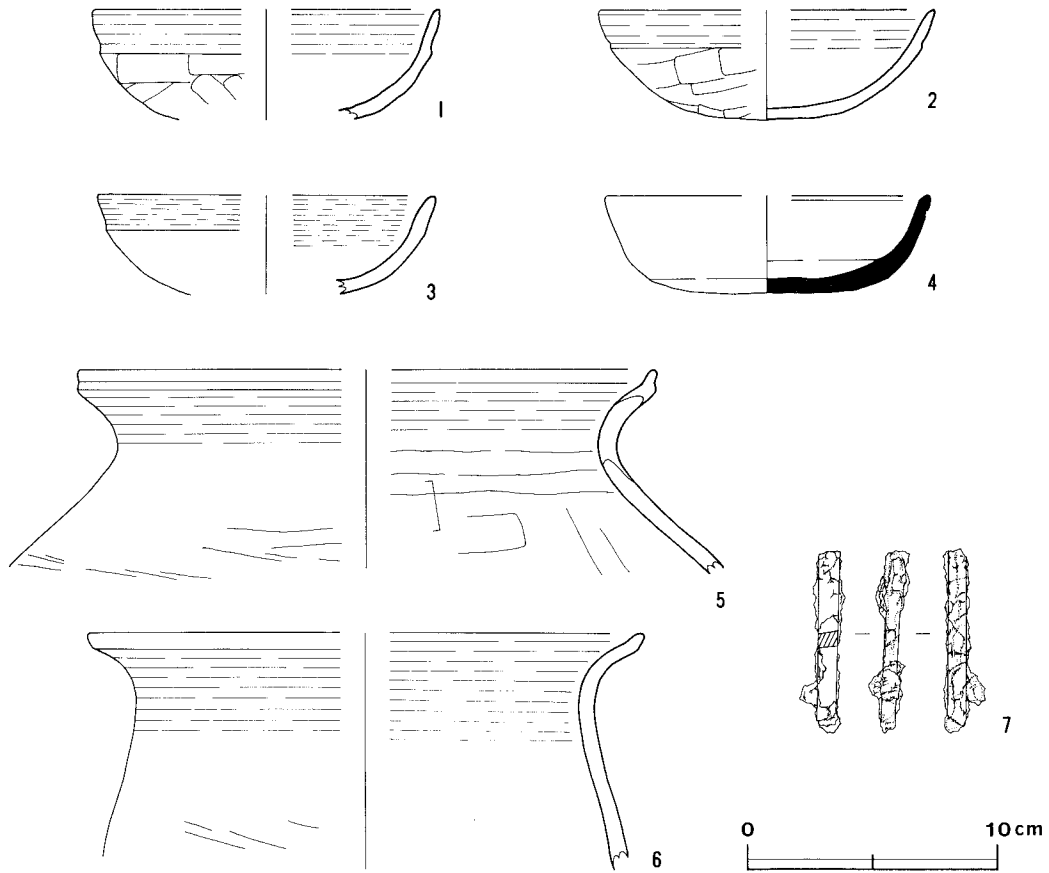


SI-1電 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土・粘土ブロック, 木炭少
- 2 赤褐色 焼土ブロック, 木炭粒子少
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子, 木炭
- 4 極暗赤褐色 焼土・木炭粒子
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子, 粘土, 砂粒
- 6 暗赤褐色 黒色土ブロック, 焼土粒子, 粘土, 砂粒



第5図 第1号住居跡・竈実測図



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 3	坏 土師器	A (13.4)	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は外傾して立ち上がる。内・外面とも摩耗が著しく、整形技法は不明である。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	10% 覆土
		B (4.0)			
4	坏 須恵器	A (13.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸味を有する。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後ナデ。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	20% 覆土
		B 3.9			
		C (7.2)			
5	甕 土師器	A (23.2)	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、口縁端部は上方につまみ出されている。口縁部内・外面は横ナデ。胴部内面は横位のヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	20% 床面
		B (8.0)			
6	甕 土師器	A (22.2)	頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は僅かに外上方につまみ出されている。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	5% 覆土
		B (9.5)			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
7	不明 鉄製品	全長(7.4) 幅 0.9 厚さ 0.6	断面が長方形の棒状を呈している。 上・下部欠損。		

第2号住居跡（第8図）

（位置） 調査区の中央部，D6g₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 5.0×4.8mの方形。

（主軸方向） N-12°-W。

（壁） 壁高5cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 全体的に凸凹であるが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 9か所（P₁～P₉）。掘り込みは，径28～84cm，深さ37～63cmを測る。主柱穴は，P₂・P₆・P₉である。

（竈） 北壁中央部を14cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く袖部の一部と火床部しか確認できない。煙道部は焚口部・火床部から緩やかに立ち上がっている。燃焼部には焼土が充填され，使用頻度の高いことが窺われる。

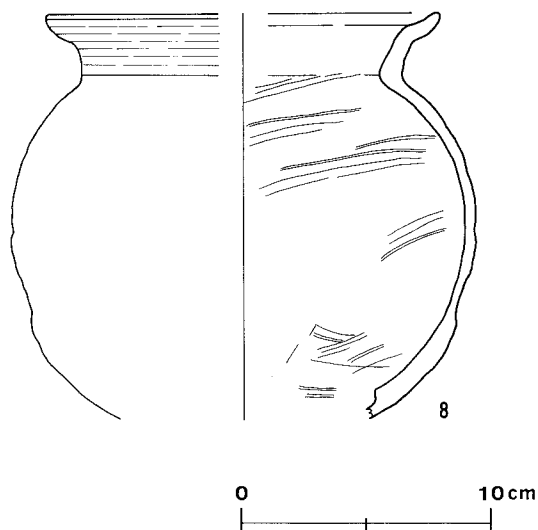
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土中層から8の土師器甕の他，少量の土師器（坏・甕）の破片が出土している。

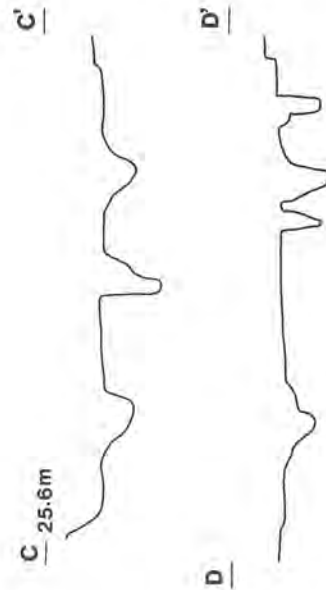
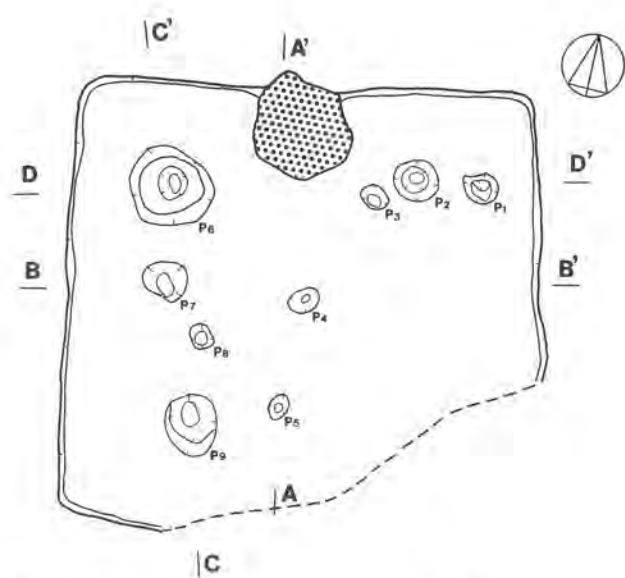
（所見） 本跡の南西部の一部が調査区域外にあり，また遺存状態も悪いいため遺構全体の調査はできなかった。本跡は，遺構の形態・遺物等から6世紀後半に比定される住居跡である。

第2号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 8	甕 土師器	A (15.6) B (16.4)	胴部は球状を呈し，中位に胴部最大径を有する。口縁部は短く，外傾し，口縁端部は外反気味に立ち上がる。口縁部内・外面は横ナデ。胴部内面にへら状工具の丘痕が認められる。胴部外面は剥離が著しい。	砂粒・雲母 明褐灰色 普通	40% 覆土

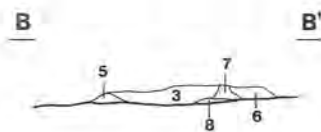
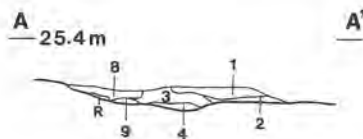
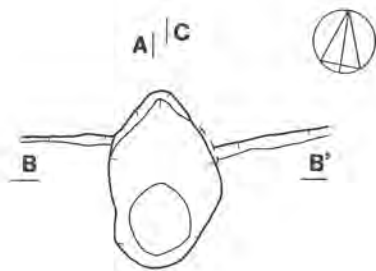


第7図 第2号住居跡出土遺物実測図



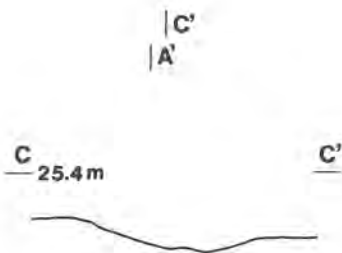
S I - 2 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子
- 2 褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 3 褐色 ローム中ブロック
- 4 褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子



S I - 2 電 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 2 褐色 ローム粒子, 砂粒
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 4 赤褐色 焼土
- 5 褐色 ローム・焼土粒子
- 6 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, 砂粒
- 7 にぶい褐色 ローム粒子, 砂粒
- 8 褐色 ローム
- 9 にぶい赤褐色 焼土粒子, 砂粒
- 10 暗褐色 ローム・焼土粒子



第 8 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡（第9図）

（位置） 調査区の北側，C5gs区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.4×4.3mの方形。

（主軸方向） N-15°-W。

（壁） 壁高44～56cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅24cm・深さ16cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 平坦で，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径32～52cm，深さ22～62cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を26cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部は崩落しているが，天井部の補強材として用いられたものと考えられる土師器甕片が，燃烧部内から出土している。火床部は焼けて焼土化しており，使用頻度は高い。煙道部は焚口部・燃烧部から緩やかに立ち上がっている。

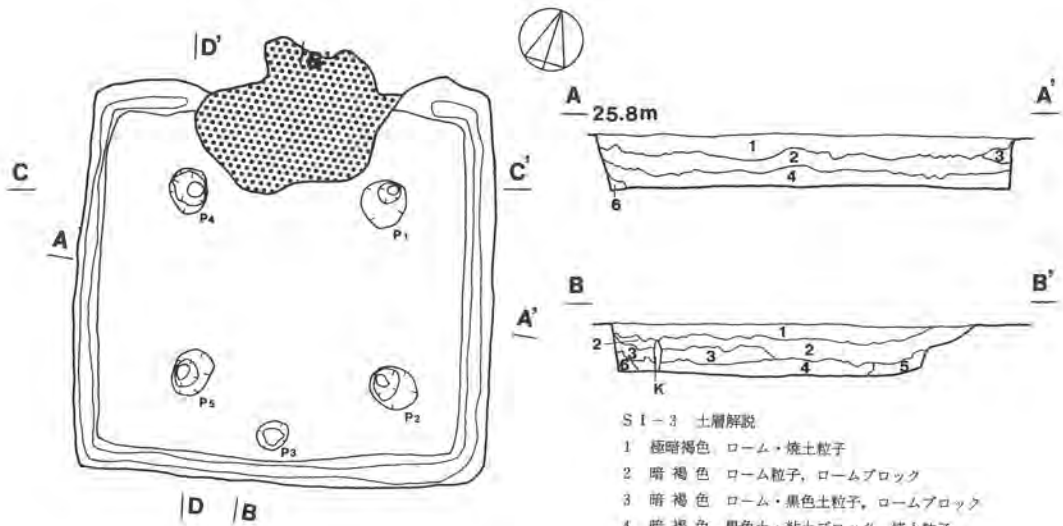
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡全体から検出されている。ほとんどの遺物が覆土中のものであるが，南壁際の床面からは13の土師器高台付坏が出土している。

（所見） 当調査区の中では中型の住居跡に属し，遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

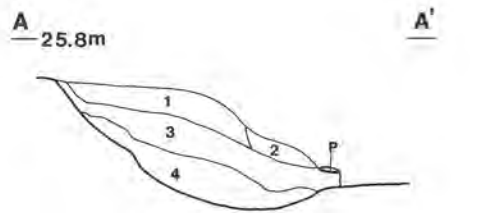
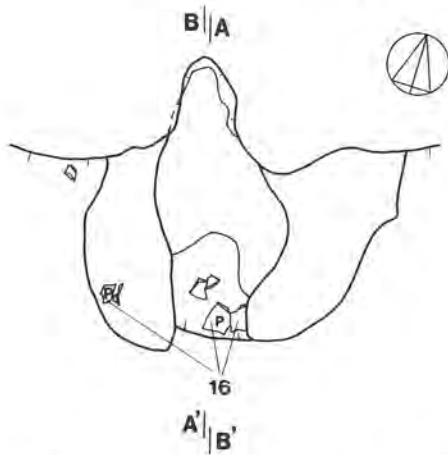
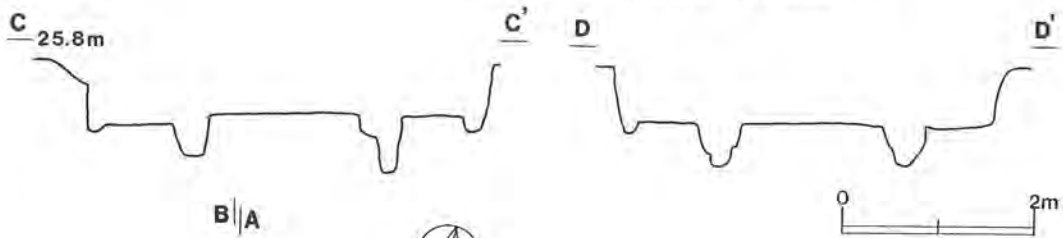
第3号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 9	坏 須恵器	A (14.2)	底部は平底で，体部は直線的に外傾し，口縁端部は尖る。 体部内・外面水挽き整形。体部下端は横方向のヘラ削り。 底部は一方向のヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 普通	40% 覆土
		B 4.2			
		C (8.4)			
10	坏 須恵器	A (14.9)	底部は平底で，体部は直線的に外傾し，口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。体部下端はヘラ削り。底部は全面ヘラ削り。	砂粒・砂礫 褐灰色 普通	40% 覆土
		B 4.1			
		C (8.8)			
11	坏 須恵器	A (13.2)	底部は平底で，体部は直線的に外反し，口縁端部は尖る。 体部内・外面水挽き整形。体部下端と底部との境は明瞭ではない。底部はヘラ切り後ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	20% 覆土
		B 4.2			
		C (7.4)			
12	坏 須恵器	B (2.6)	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。体部下端は一方向のヘラ削り。底部はヘラ切り後ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰オリーブ色 良好	60% 覆土
		C 8.4			
13	高台付坏 須恵器	A (17.0)	底部は平底で，高台は剝離し欠損。体部は下位で「く」の字状に屈曲した後，外反気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 良好	20% 床面
		B (5.4)			



S1-3 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム・焼土粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 3 暗褐色 ローム・黒色土粒子, ロームブロック
- 4 暗褐色 黒色土・粘土ブロック, 焼土粒子
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土
- 6 暗褐色 ローム・焼土粒子

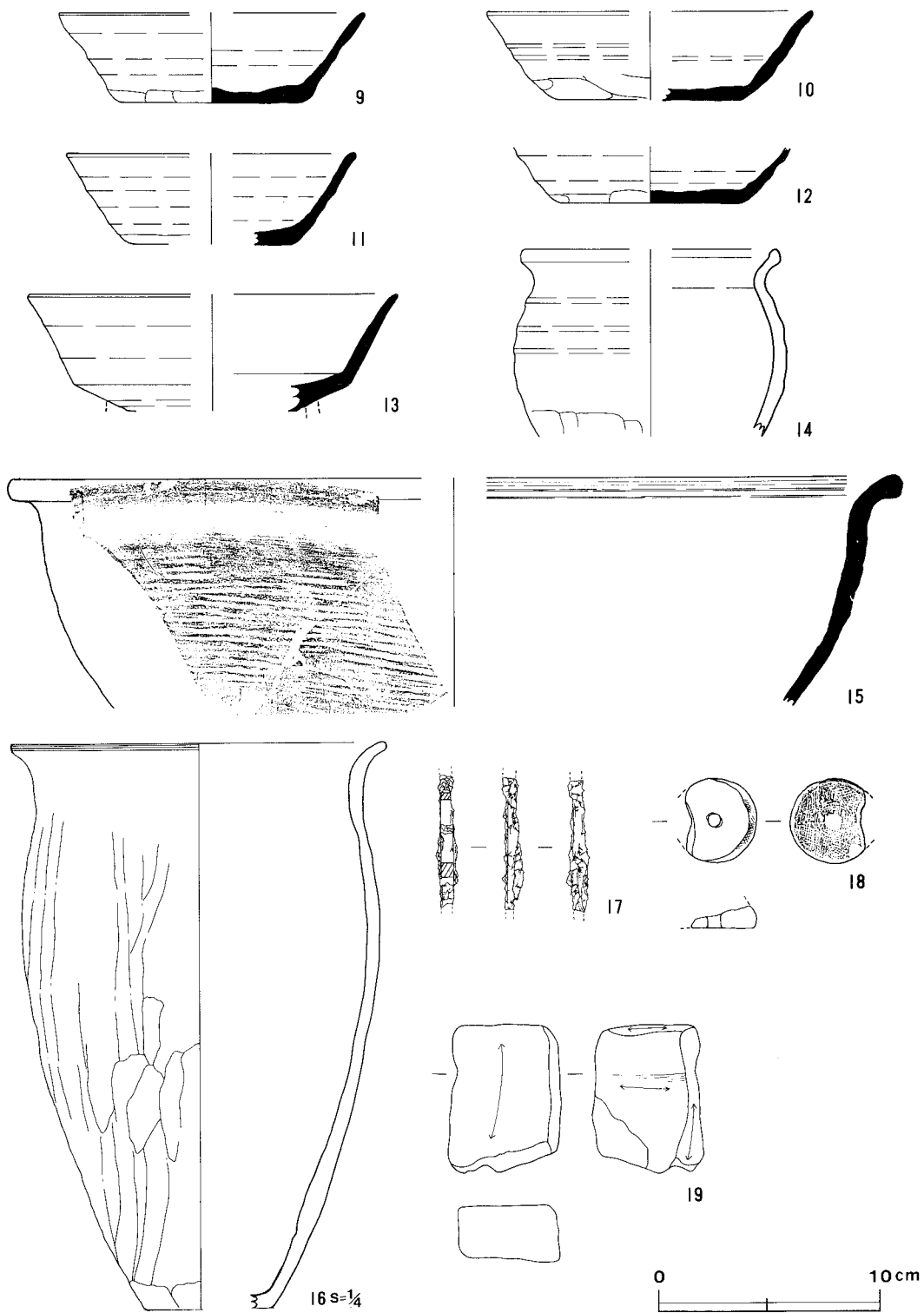


S1-3 Ⅱ 土層解説

- 1 黒褐色 焼土・木炭粒子, 粘土, 砂粒
- 2 極赤褐色 ローム・焼土ブロック, 粘土, 砂粒
- 3 極赤褐色 ローム・黒色土ブロック, 焼土, 粘土, 砂粒
- 4 暗赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック, 木炭



第9図 第3号住居跡・竈実測図



第10图 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第10図 14	甕 土師器	A (11.8)	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。 口縁端部は内上方につまみ出されている。胴部下位はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。器内面はナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にふい赤褐色 普通	20% 覆土			
		B (8.7)							
15	甕 須恵器	A (40.6)	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。 胴部外面は平行叩き目。内面はナデ。口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・雲母 灰黄色 普通	5% 覆土			
		B (10.6)							
16	甕 土師器	A (22.9)	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する。胴部最大径は上位に位置する。胴部下端はヘラ削り。中位は縦位のヘラ磨き。口頸部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫 にふい橙色 普通	60% 底部に木葉痕 覆土			
		B 34.6							
		C (7.7)							
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
17	刀子片	全長(6.1)	刀子の基部の破片。 断面長方形を呈する。		19	砥石	全長 6.9	棒状の砥石。片面に自然面を残す。 四面とも使用により平滑で、中央部の使い減り顕著。	凝灰岩
		幅 0.8					幅 5.1		
		厚さ 0.7					厚さ 3.5		
							重さ140.4g		
18	紡錘車	径 3.9 厚さ(1.0) 孔径 0.6 重さ 15.6g	断面台形。穿孔は上方から施され、広面に使用による同心円状の磨減が認められる。	側面と広面に線刻。 滑石。					

第4号住居跡(第11図)

(位置) 調査区の北側、C5f₈区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.5×3.9mの長方形。

(主軸方向) N-22°-W。

(壁) 壁高44~56cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅26cm、深さ8cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

(床) 平坦で、硬く踏み固められて堅緻である。

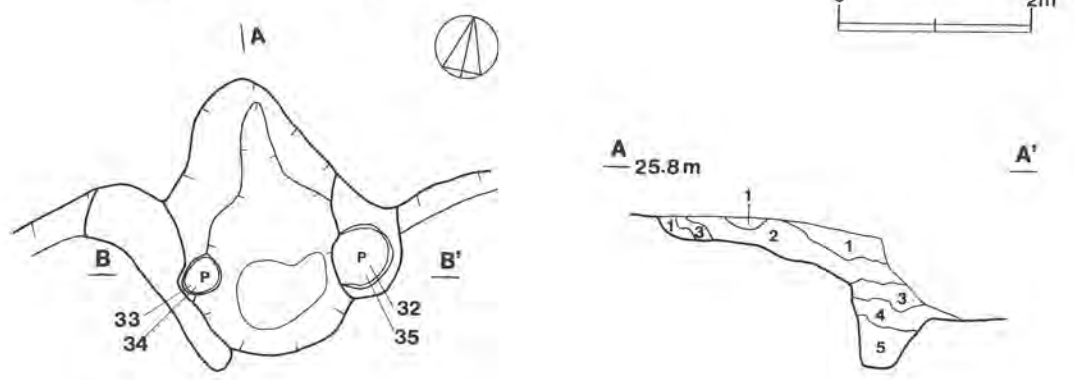
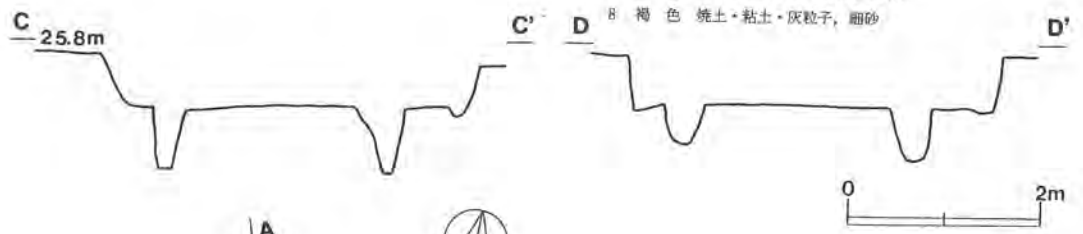
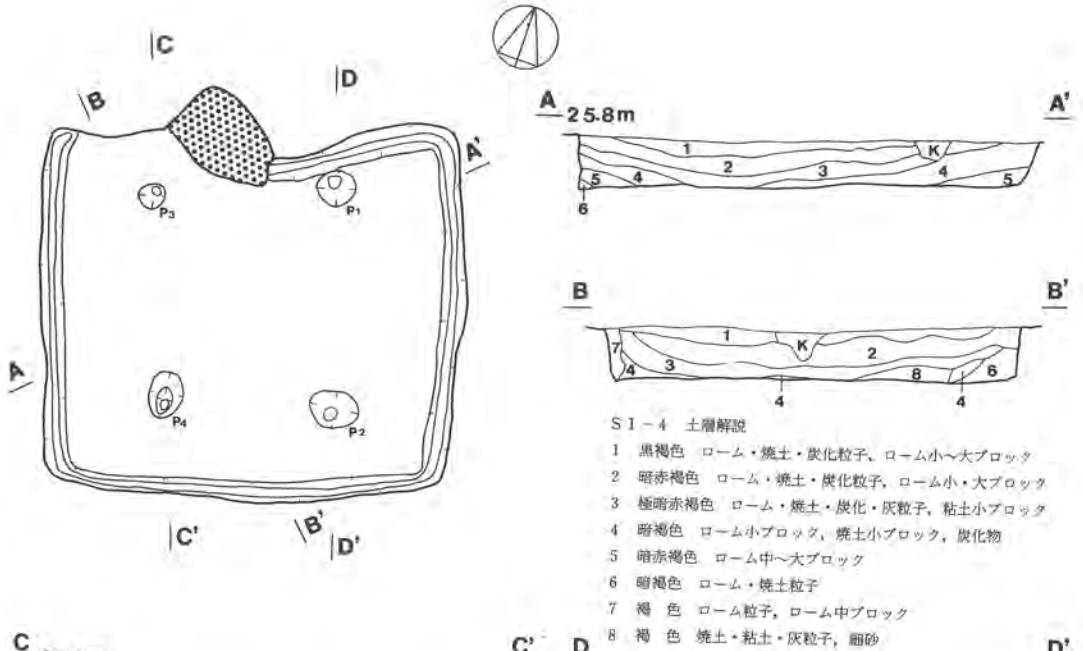
(ピット) 4か所(P₁~P₄)。掘り込みは、径28~48cm、深さ44~75cmを測り、全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央からやや西寄りの壁を18cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪い。両袖部に土師器甕が逆位の状態で出土しており、竈の補強を目的として使用されたものと考えられる。

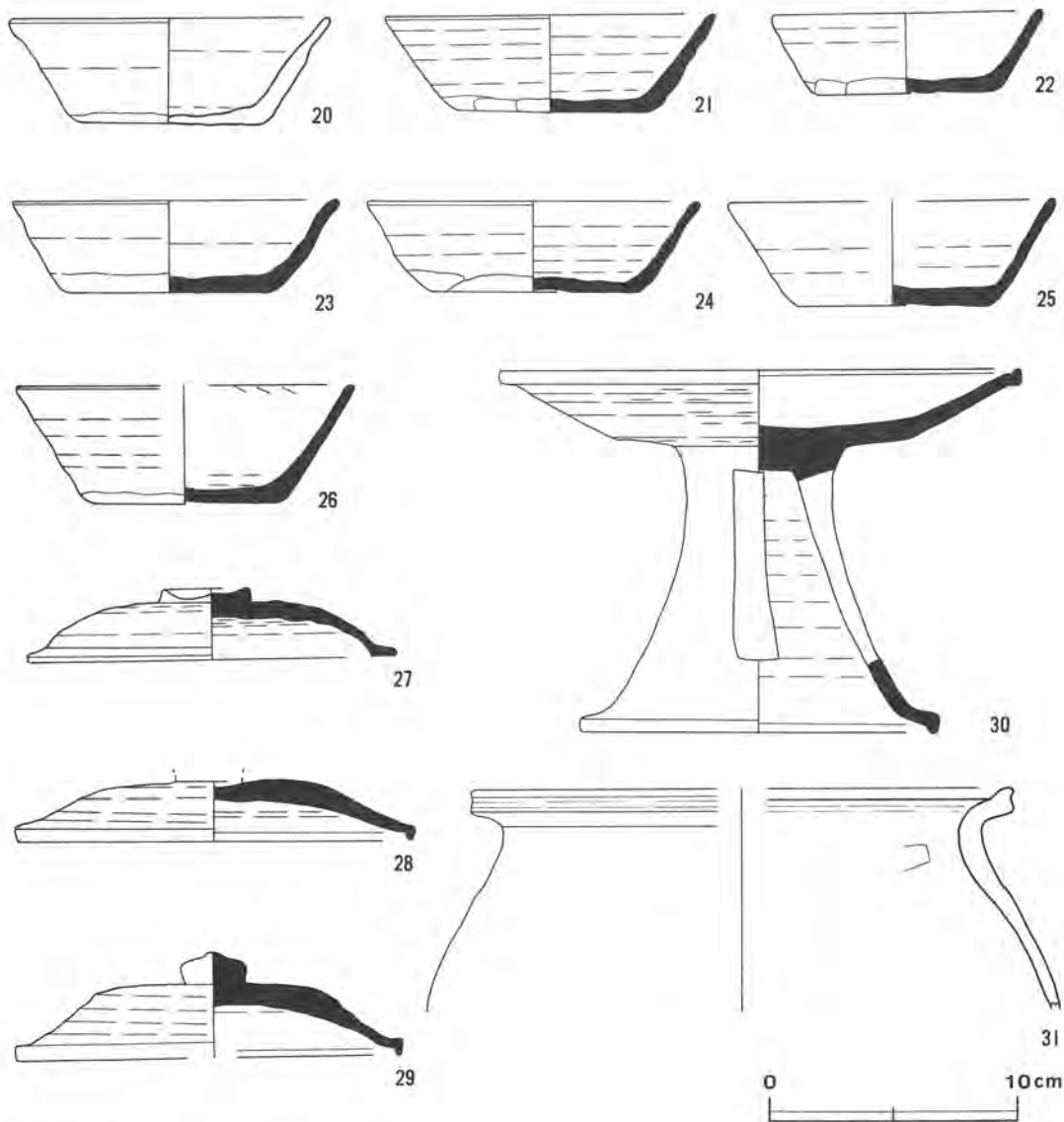
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土下層から須恵器(坏・蓋)等が、比較的多量に出土している。また、竈内からは袖部の芯として用いられた31・32の土師器甕と27の須恵器蓋が出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



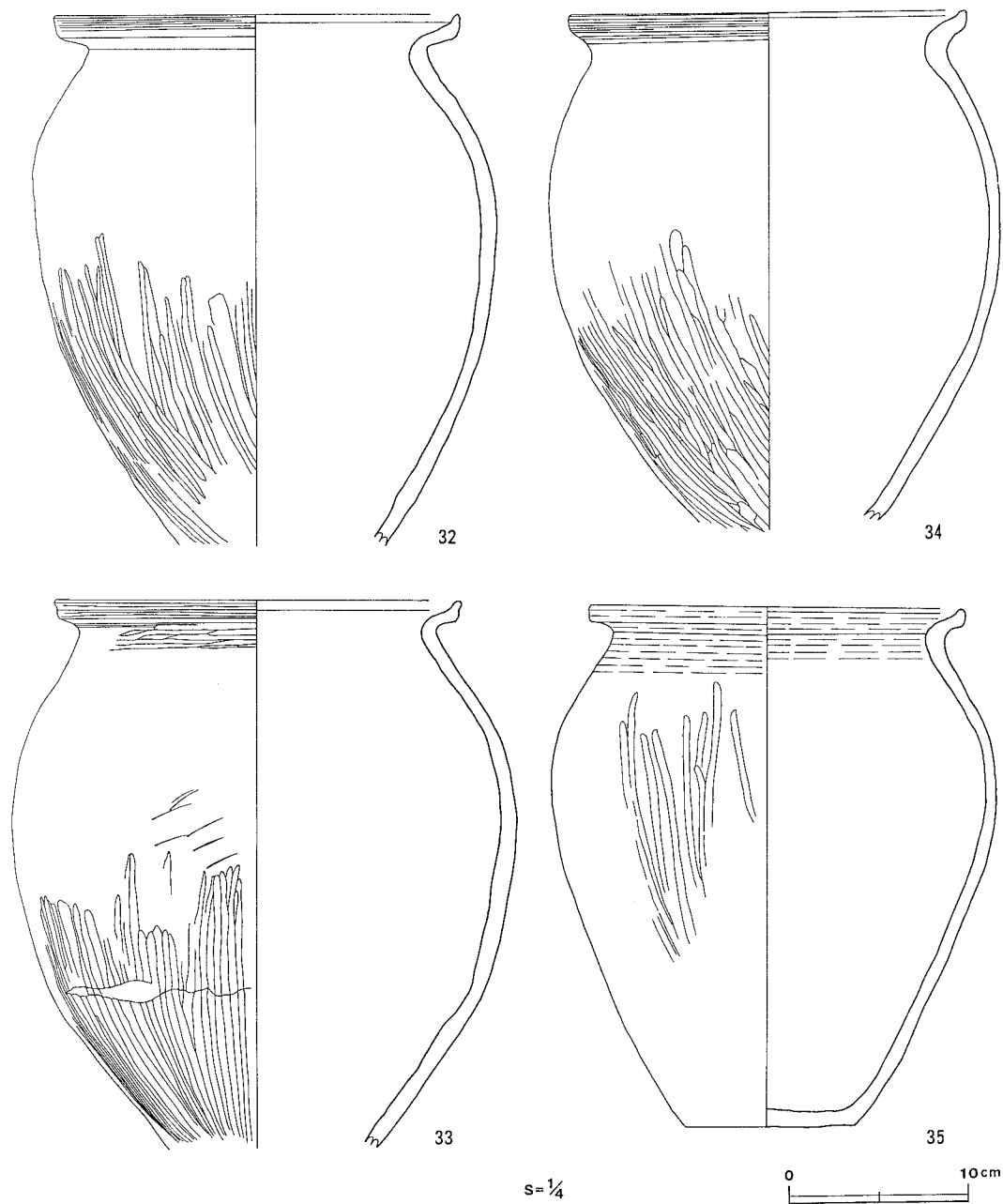
第11図 第4号住居跡・竈実測図



第12図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)

第4号住居跡出土遺物解説表

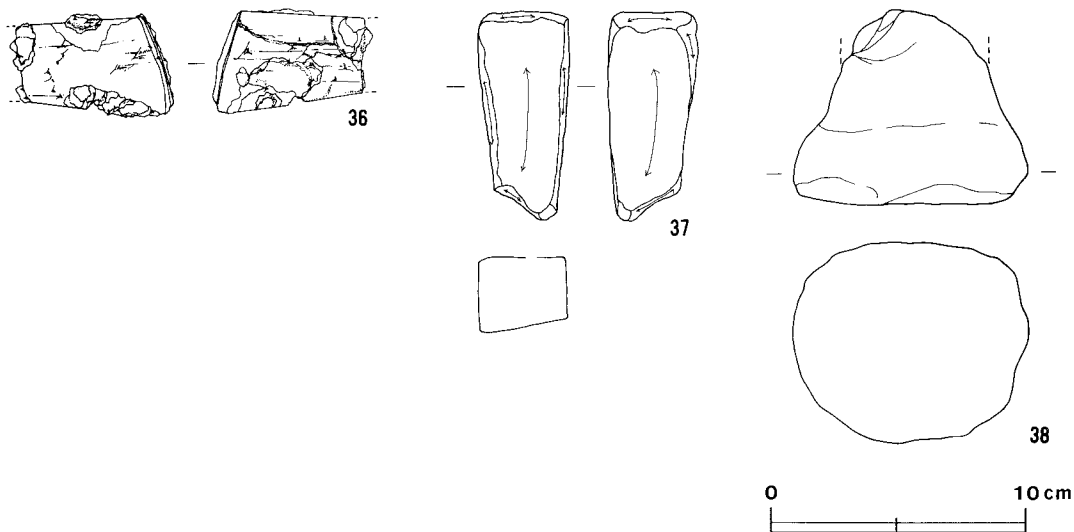
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 20	坏 土師器	A 12.8	底部は平底で、体部は器厚を減しながら直線的に立ち上がり、口縁部付近で軽く外反する。底部は回転ヘラ切り後周辺部のみナデ。器内・外面はナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	90% 床面
		B 4.4			
		C 7.6			
21	坏 須恵器	A 13.3	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。体部下端及び底部はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	100% 覆土
		B 4.0			
		C 7.8			



第13図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 22	坏 須恵器	A 10.8	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後ナデ。 体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰色 普通	95% 口縁部内面に一部煤付着 覆土
		B 3.3			
		C 7.4			



第14図 第4号住居跡出土遺物実測図(3)

第4号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 23	坏 須恵器	A 13.2	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。体部内・外面水挽き整形。底部はヘラ切り後、一方向のヘラ削り。体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	80% 内面煤付着 覆土
		B 3.8			
		C 8.2			
24	坏 須恵器	A 13.6	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後、雑なヘラ削り。体部下端は横方向のヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	95% 覆土
		B 3.7			
		C 8.4			
25	坏 須恵器	A (13.0)	底部は平底で、体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。体部内・外面水挽き整形。底部はヘラ切り後、周辺部のみナデ。器内・外面は摩耗が著しく、調整方法は明確にとらえられない。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 普通	50% 床面
		B 4.3			
		C 7.8			
26	坏 須恵器	A (13.6)	底部は平底で、体部は外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り。体部下端は横方向のヘラ削り。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	30% 床面
		B 4.8			
		C (7.4)			
27	蓋 須恵器	A 15.1	天井部は浅く、口縁部はほぼ水平に屈曲する。つまみは、扁平で中央部は凹む。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	100% 覆土
		B 3.9			
		F 3.4			
		G 0.6			
28	蓋 須恵器	A 16.2	天井部は浅く、なだらかに下降し口縁部に至る。口縁部は屈曲し垂下する。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。つまみは欠損。	砂粒・砂礫 灰黄色 普通	60% 覆土
		B (2.4)			
29	蓋 須恵器	A (15.7)	天井部は浅く、天頂部はほぼ平坦で、口縁部は屈曲し短く垂下する。つまみは摩耗が著しいが宝珠形を呈する。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	80% 竈
		B 4.3			
		F 2.6			
		G 1.3			

第4号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第12図 30	高盤 須恵器	A 20.9	体部は直線的に外上方に大きく開き、口縁部はほぼ垂直につまみ出され、端部は尖る。脚部は裾に向かって大きく反り、段をなして下方に屈曲する。脚部に透かし3か所。器内・外面水挽き整形。体部内・外面及び脚部外面は横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 良好	60% 覆土			
		B 14.8							
		D 14.3							
		E 11.7							
31	甕 土師器	A (21.6)	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、口縁部は外上方につまみ出されている。胴部内・外面ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	20% 甕			
		B (9.1)							
第13図 32	甕 土師器	A 23.1	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は大きく屈曲し、端部は上方につまみ出されている。胴部中位から下位にかけて縦位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	70% 甕			
		B (30.5)							
33	甕 土師器	A (23.3)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。胴部外面上位はヘラナデ。中位から上位はヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。		砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	60% 甕			
		B (31.5)							
34	甕 土師器	A 22.5	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内上方につまみ出されている。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。		砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	50% 甕			
		B (29.2)							
35	甕 土師器	A 21.0	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部中位に最大径を有す。口頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は直立気味に立ち上がる。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。		砂粒・長石・石英 明褐色 良好	60% 底部に木葉痕 甕			
		B 29.7							
		C 9.5							
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
第14図 36	鎌	全長(6.2)	刃部欠損。 基部は表側に折れ曲がる。		38	支脚	全長(7.9) 径(9.3)	上部がやや細くなる円柱状を呈し、上・下端部の一部欠損。	粘土塊から成形
		刃幅 0.8							
37	砥石	全長 8.4	長方形の砥石。側面に自然面残す。四面とも使用により、平滑である。	凝灰岩					
		幅 3.6							
		厚さ 3.5							
		重さ 116.2g							

第5号住居跡(第15図)

(位置) 調査区の北側、C5e₆区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.4×4.2mの方形。

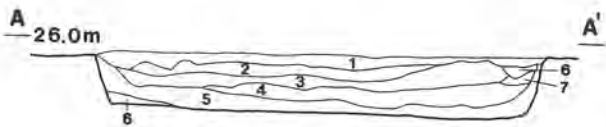
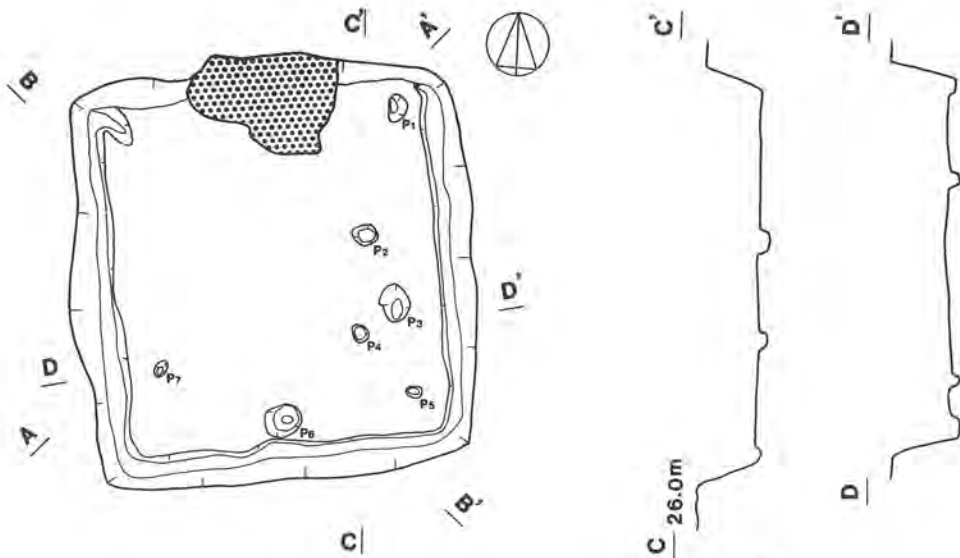
(主軸方向) N-6°-W。

(壁) 壁高は60cmを測り、外傾して立ち上がる。

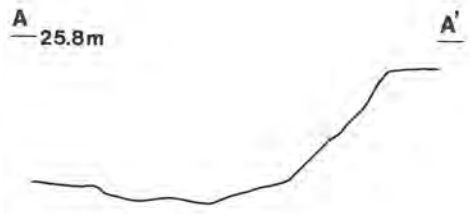
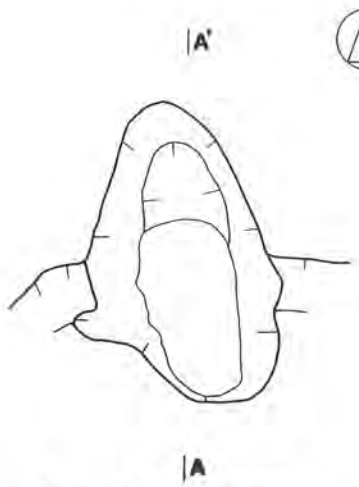
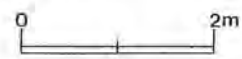
(壁溝) 幅12~24cm、深さ8~12cmを測り、掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床) 平坦で、全体的に硬く踏み固められ堅緻である。

(竈) 北壁中央部を14cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落、袖部だけが残存し馬蹄形を呈する。焚口部から火床部へかけてはほぼ平坦で、煙道部は火床部から急角度となって立ち上がり、煙出口に至る。



- S I - 5 土層解説
- 1 暗褐色土 ローム・焼土粒子微
 - 2 暗褐色土 ローム・焼土粒子少
 - 3 褐色 ローム粒子, ロームブロック
 - 4 暗褐色 ローム・粘土ブロック, 焼土・木炭粒子
 - 5 褐色 焼土・木炭粒子
 - 6 極暗褐色 ローム・焼土粒子
 - 7 暗褐色 ローム・焼土粒子少
 - 8 暗褐色 ローム・焼土粒子少
 - 9 暗褐色 ロームブロック, 焼土粒子
 - 10 極暗褐色 ローム・焼土粒子
 - 11 暗褐色 ローム・焼土粒子多

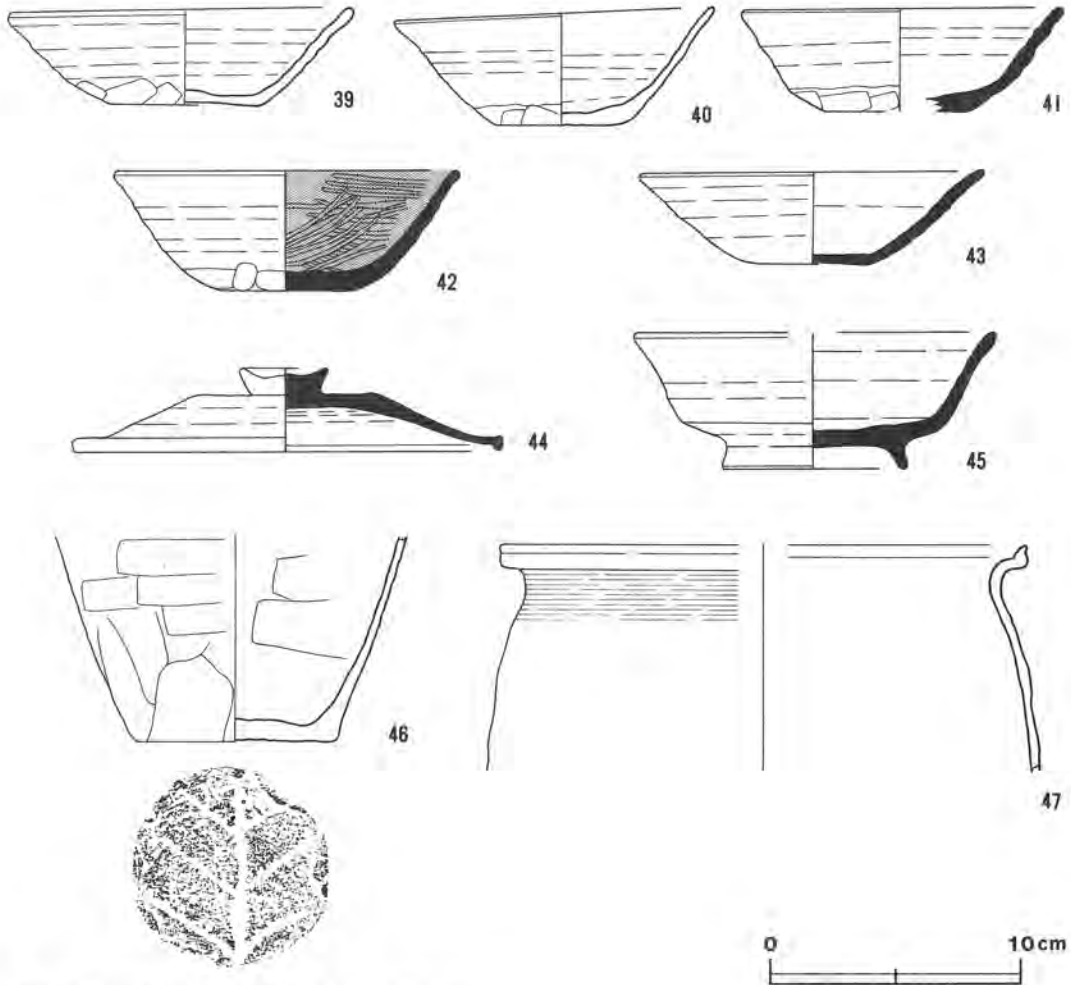


第15図 第5号住居跡・竈実測図

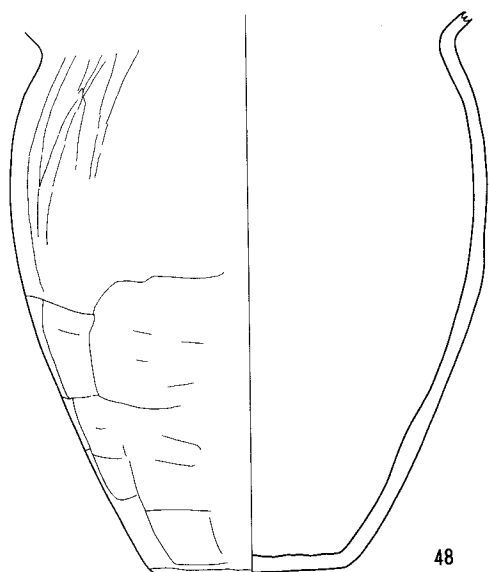
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層と中層から、投棄された状態で土師器(坏・甕)・須恵器(坏・甕)の破片が出土している。さらに竈の両袖部には、袖の芯として土師器甕が逆位に置かれ、天井部には土師器破片が補強材として使用された状態で出土し、燃焼部からは、土師器甕が逆位に支脚として付設された状態で出土している。煙道部には、須恵器甕が2個体接続して煙出しとして使用されている。

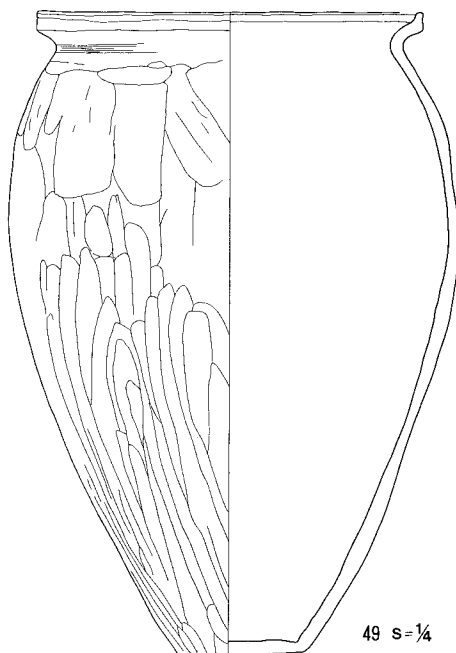
(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



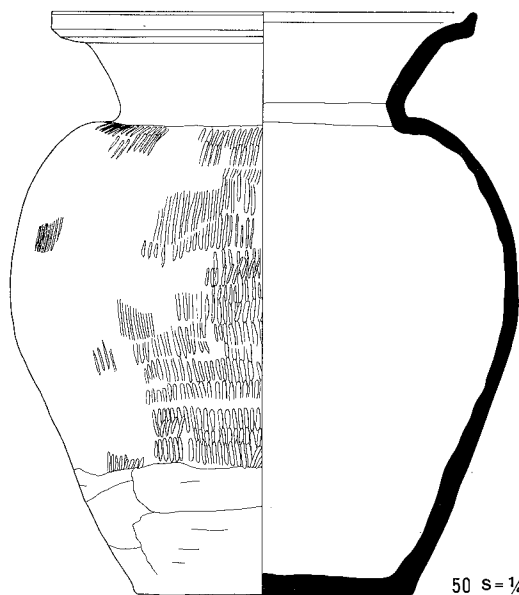
第16図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



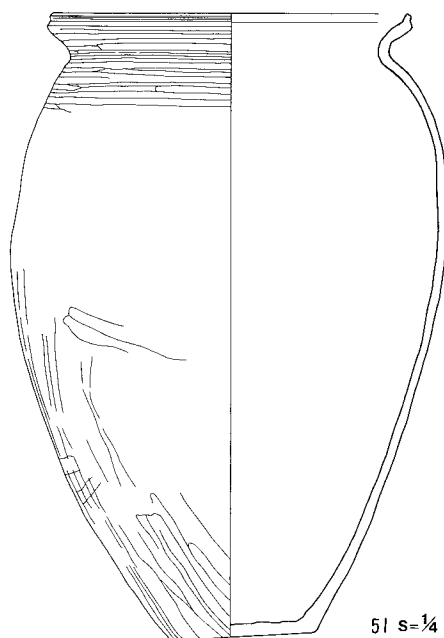
48



49 s=¼



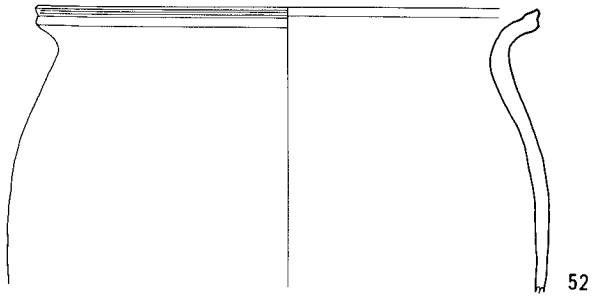
50 s=¼



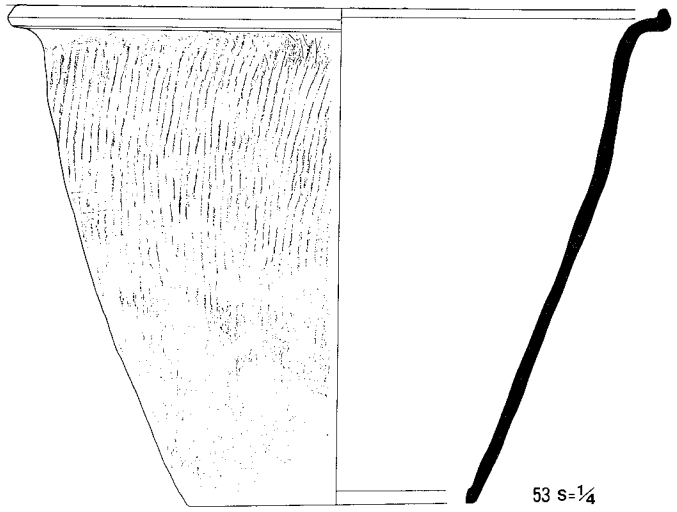
51 s=¼



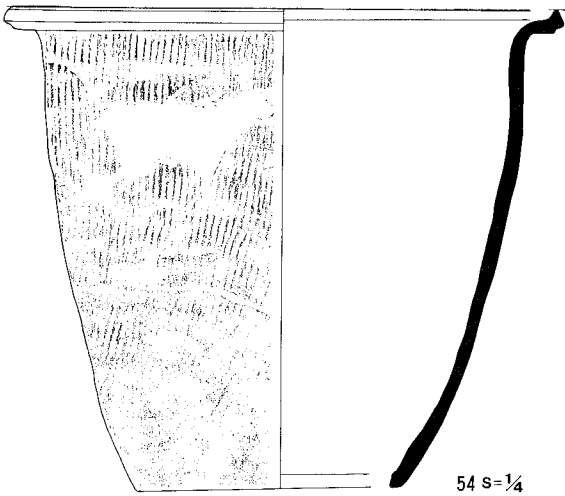
第17図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)



52



53 s=1/4



54 s=1/4



第18图 第5号住居跡出土遺物実測図(3)

第5号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 39	坏 土師器	A 13.6	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部及び体部下端は一方のヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% 覆土
		B 4.0			
		C 6.0			
40	坏 土師器	A 12.9	底部は平底で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部及び体部下端はヘラ削り。器内面へラ磨き。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	80% 覆土
		B 4.8			
		C 5.2			
41	坏 須恵器	A 12.7	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 浅黄色 普通	90% 覆土
		B 4.2			
		C 5.8			
42	坏 須恵器	A (13.7)	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端へラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	60% 内面に煤付着 覆土
		B 4.8			
		C 5.4			
43	坏 須恵器	A 13.7	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部はヘラ切り後ナデ。体部外面は摩耗が著しい。	砂粒・砂礫 明褐色 普通	60% 床面
		B 3.8			
		C 4.4			
44	蓋 須恵器	A 17.0	つまみは腰高で中央部は凹む。天井部は平坦でなだらかに傾斜し、口縁部は鋭く屈曲し、短く垂下する。器内・外面水挽き整形。天井部回転へラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	80% 甕
		B 3.4			
		F 3.6			
		G 1.2			
45	高台付坏 須恵器	A (14.4)	体部はやや外反しながら立ち上がる。底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台がつく。体部内・外面水挽き整形。底部は回転へラ切り後、高台貼り付け。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄色 普通	60% 床面
		B 5.4			
		D 7.5			
		E 1.0			
46	甕 土師器	B (8.3)	底部は平底で、胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 黒褐色 不良	40% 底部に木葉痕 覆土
		C 8.1			
		A (21.0)			
47	甕 土師器	A (21.0)	頸部外反して立ち上がり、口縁部は短く屈曲する。口縁部は外上方につまみ出されている。胴部外面は摩耗、内面はナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	10% 甕
		B (9.1)			
第17図 48	甕 土師器	B (22.5)	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、上位に胴部最大径を有す。胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	70% 底部に木葉痕 甕
		C 7.5			
		A (20.4)			
49	甕 土師器	A (20.4)	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に屈曲する。胴部最大径は上位に位置する。底部はヘラ削り後ナデ。胴部外面下位はヘラ磨き。上位はヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい褐色 普通	80% 覆土
		B 34.0			
		C 6.6			
50	甕 須恵器	A 22.4	底部は平底で、胴部は中位まで直線的に外傾した後、頸部に向け、大きく内彎して立ち上がる。頸部は直線的に大きく外傾し、口縁部は外上方につまみだされている。底部及び胴部外面下端はヘラ削りで、それより上位は縦方向の平行叩き目を施す。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい褐色 普通	90% 床面
		B 30.9			
		C 14.6			

第5号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 5 1	甕 土師器	A 18.9 B 33.2 C 7.6	底部は平底で胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。胴部上位に最大径を有する。 頸部は「く」の字状に外反し、口唇端部は尖る。 胴部外面へラナデ、ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・石英 橙色 普通	50% 竈
第18図 5 2	甕 土師器	A 20.1 B (11.4)	底部欠損。胴部中位は内彎気味に立ち上がり。頸部は「く」の字状に外反し、口唇端部は、外上方につまみ出されている。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・石英 橙色 普通	20% 覆土
5 3	甕 須恵器	A 34.1 B 26.0 C 15.2	胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁部は強く外面に屈曲する。口縁端部は上下に突出す。底部は五孔式。 胴部外面は縦位の平行叩き目。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	70% 床面
5 4	甕 須恵器	A 28.9 B 25.2 C 14.0	胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁部は強く外側に屈曲する。口縁端部は上下に突出し、断面三角形状を呈す。 底部は五孔式。 胴部外面は、従位の平行叩き目。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	90% 竈

第7号住居跡（第19図）

（位置） 調査区の北側、C6g₁区を中心に確認された住居跡。

（平面形） 4.7×4.7mの方形。

（主軸方向） N-33°-W。

（壁） 壁高は56～60cmを測り、垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅16～28cm、深さ8～12cmを測り、掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

（床面） 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

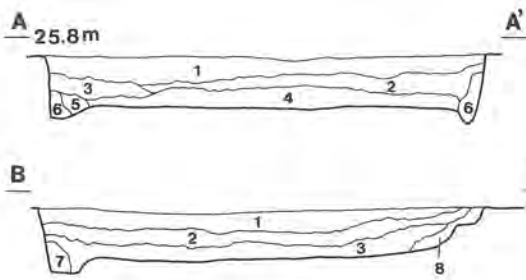
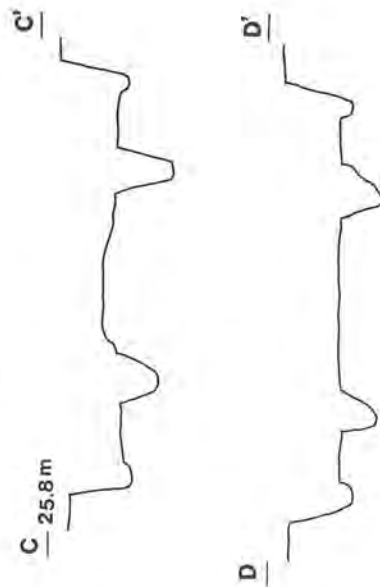
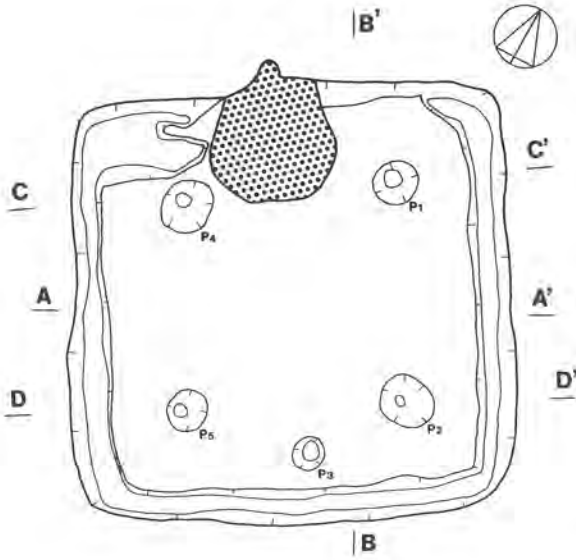
（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは、径36～60cm、深さ56～60cmを測り、支柱穴は5本である。

（竈） 北壁中央部の壁を32cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。遺存状態は良好で原型をよく留めている。袖部は掘り残したロームに粘土を貼り構築しており、焚口部・燃焼部から煙道部にかけての内壁は焼けて焼土化している。

（覆土） 自然堆積。

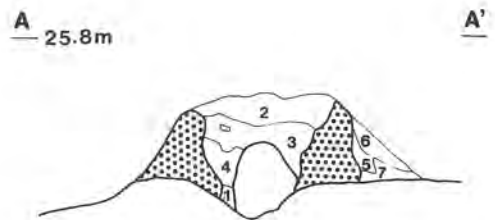
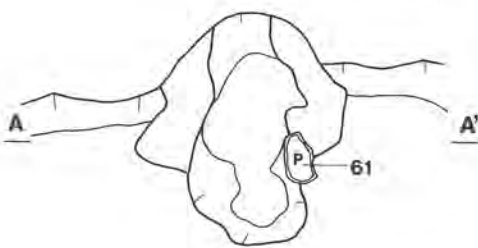
（遺物） 住居跡の中央部の覆土中層から下層にまとまって土師器（坏）・須恵器（坏）の破片が出土している。55は北西コーナー部床面から、56は中央部床面から出土した土師器坏であり、竈袖部付近から釘が出土している。

（所見） 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。



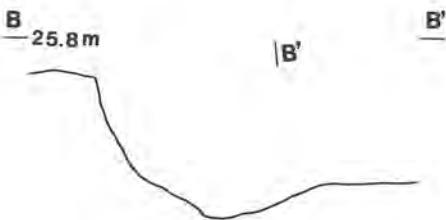
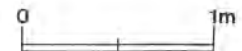
SI-7 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 2 褐色 ローム中・粘土ブロック, 焼土粒子
- 3 黒褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック
- 5 暗褐色 ローム中ブロック, 焼土粒子, 炭化物
- 6 明褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 7 暗褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック
- 8 にぶい黄褐色 粘土・焼土ブロック

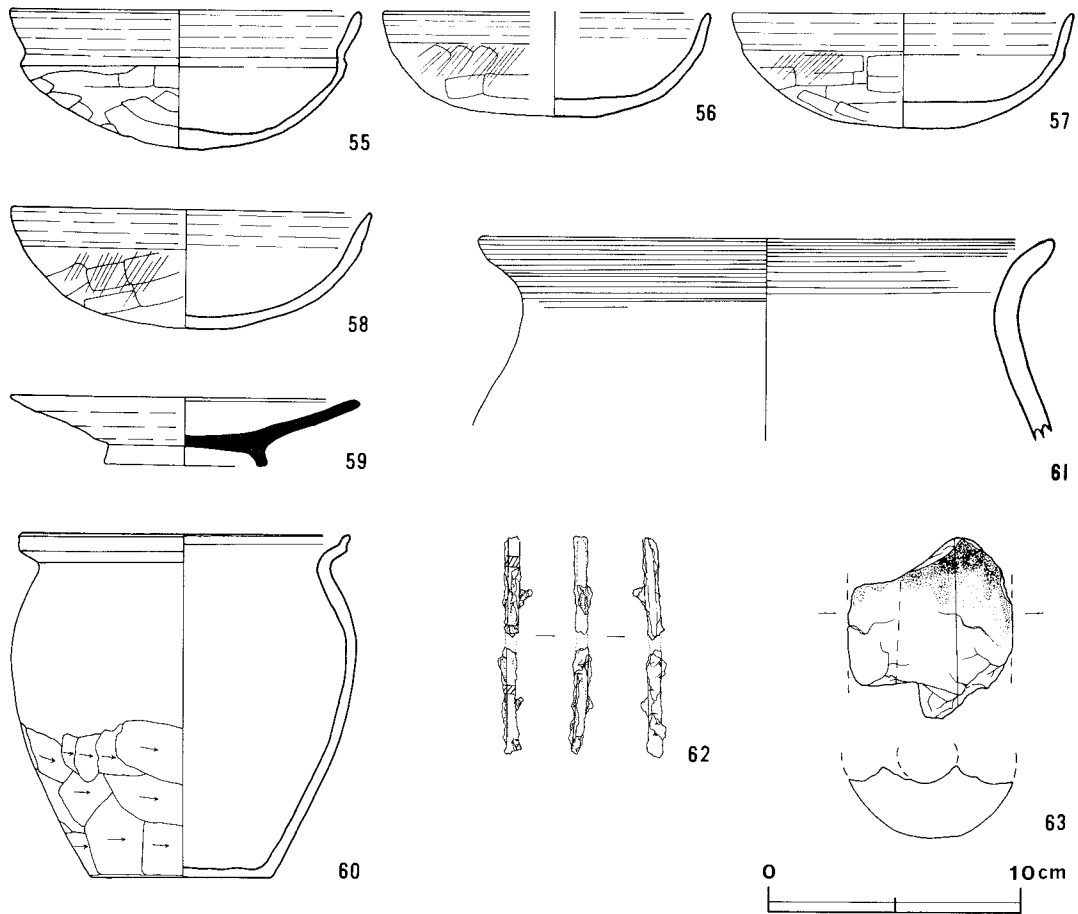


SI-7 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子, 砂粒
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, 砂粒
- 3 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, 砂粒
- 4 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 5 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック, 粘土, 砂粒
- 6 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック, 粘土, 砂粒
- 7 暗褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物



第19図 第7号住居跡・竈実測図



第20図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 55	坏 土師器	A 14.0	底部は丸底で、口縁部との境に段をもち、口縁部は内彎 気味に立ち上がる。底部は多方面のヘラ削り。 口縁部内・外面及び器内面は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	100%
		B 5.6			床面
56	坏 土師器	A (13.0)	底部は丸底気味で、なだらかに口縁部に至る。底部はヘ ラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	30%
		B 4.2			底面
57	坏 土師器	A 13.6	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は外反 気味に立ち上がる。底部及び口縁部との境はヘラ削り。 口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	100%
		B 4.6			覆土
58	坏 土師器	A 14.4	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は外傾 して立ち上がり、端部は尖る。底部外面はヘラ削り。口 縁部内・外面及び体部内面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 良好	80%
		B 4.8			覆土

第7号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第20図 59	高台付皿 須恵器	A 14.0	底部は丸底で、「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ削り。器内部はナデ。		砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	100% 覆土			
		B 2.8							
		D 6.5							
		E 0.8							
60	甕 土師器	A 13.3	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に外反し、口唇端部は外上方につまみ出されている。胴部外面ヘラ削り。口縁部内外面横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	95% 覆土			
		B 13.8							
		C 7.3							
61	甕 土師器	A 22.9	口縁部破片。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部はゆるく外反する。口縁部内・外面横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 におい褐色 普通	60% 竈			
		B 8.1							
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
62	不明 鉄製品	全長(8.3) 幅 0.7	段面が方形の棒状を呈している。 上・下端部欠損。		63	羽口	全長(7.2) 外径(6.6) 孔径(2.4)	先端部破片。 外面は一方向のヘラ削り調整。	先端は溶解している。

第8号住居跡(第21図)

(位置) 調査区の北側、C5d₉区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.0×3.7mの方形。

(主軸方向) N-10°-W。

(壁) 壁高は56~84cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅12~20cm、深さ10cmを測り、掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

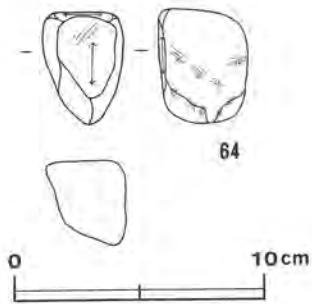
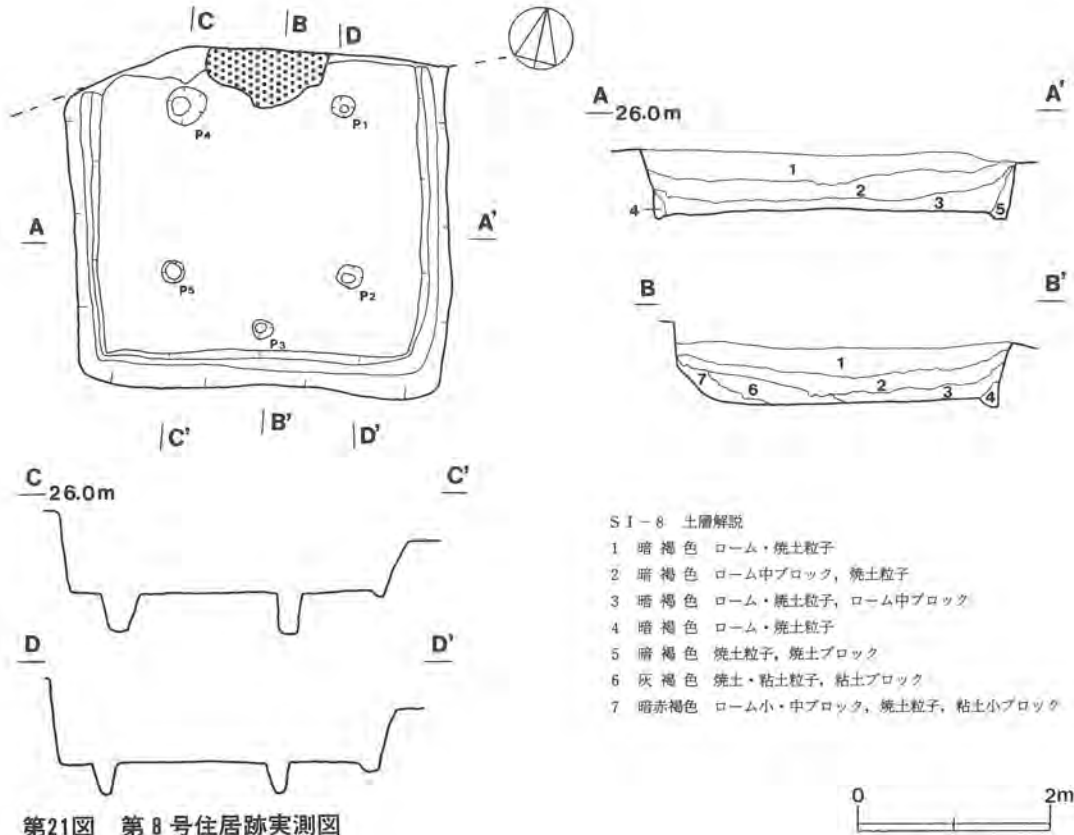
(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは、径20~36cm、深さ20~44cmを測り全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部に粘土・砂で構築されていると考えられるが、袖部・天井部・煙道部は調査区域外のため調査はできなかった。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 住居跡覆土上層・下層から、土師器(坏)・須恵器(坏)の破片が数点出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



第22図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	法量 (cm)	器形の特徴	備考
第22図 64	砥石	全長 4.5 幅 3.3 厚さ 3.6 重さ 56.6g	台形の砥石。全面に使用痕が認められて平滑である。側面部の使い減り顯著。	凝灰岩

第9 A号住居跡 (第23図)

(位置) 調査区の北側, C6e区を中心に確認。

(重複) 第9 B・C号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.8×3.6mの方形。

(主軸方向) N-23°-W。

(壁) 壁高は20cmを測り、垂直に立ち上がる。

(床) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

(竈) 北壁中央部を24cm程壁外へ掘り込み粘土・砂で構築。天井部は構築時に土器片を入れ補強しているが、崩落している。燃焼部は火熱を受け硬化しており、使用頻度は高い。

(覆土) 自然堆積

(遺物) 竈及び竈周辺の流土内から、土師器(坏・甕)・須恵器(坏・甕)の破片や紡錘車、羽口、砥石が出土している。竈内からは、66の土師器坏、71・73の土師器甕、68・69の須恵器坏が出土しており、これらは竈の補強材として用いられたものである。

(所見) 本跡は西壁際を第9C号住居跡に、南西部を第9B号住居跡に掘り込まれ、3軒の中で最も古い住居跡である。遺構の形態・遺物から8世紀後半に比定される住居跡である。

第9B号住居跡(第23図)

(位置) 調査区の北側、C6f₃区を中心に確認。

(重複) 第9A・C号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.3×3.0mの方形。

(主軸方向) N-33°-W。

(壁) 壁高は36cmを測り、外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅4~6cm、深さ4~8cmを測り、掘り込み断面形状は逆台形状を呈し、断続的に廻る。

(床) 重複する第9C号住居跡の床面より若干高く、平坦で重複部以外は堅緻である。

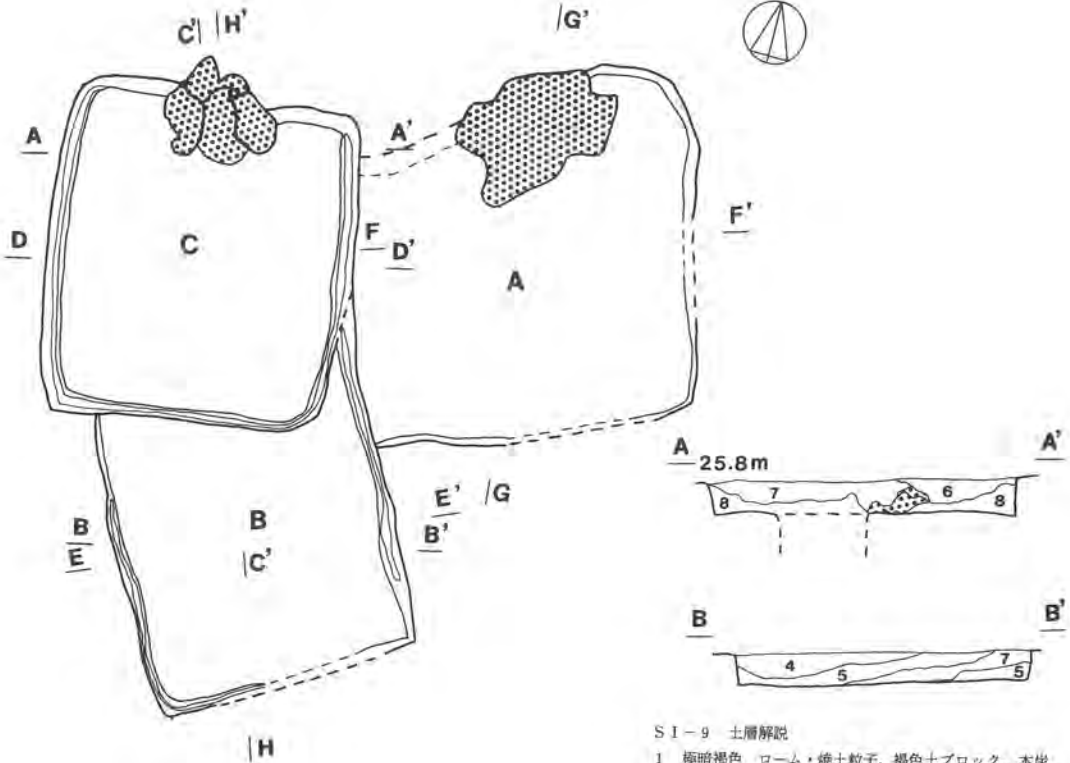
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層から土師器(坏)の破片が2点出土している。

(所見) 本跡は第9A号住居跡南西部を壊して構築し、第9C号住居跡に北壁を壊されていることから、第9A号住居跡より新しく第9C号住居跡より古い。竈は本来付設されていたものと考えられるがその痕跡を検出することはできなかった。重複関係、形態、遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

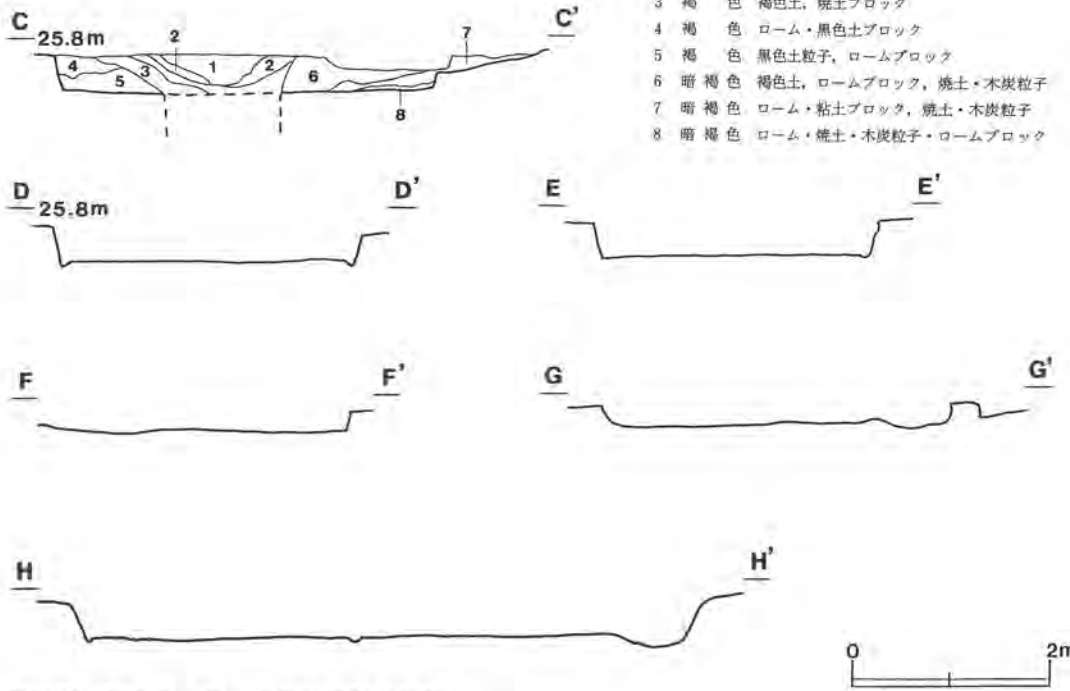
第9A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 65	坏 土師器	A (13.0)	底部は丸底気味で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。器内面はナデ。	砂粒 灰白色 普通	70% 覆土
		B 4.7			
66	坏 土師器	A (16.0)	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は尖る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	40% 竈
		B (5.3)			

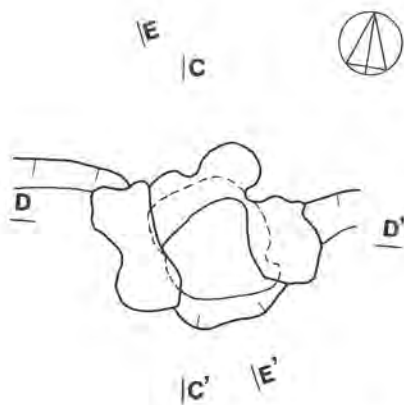
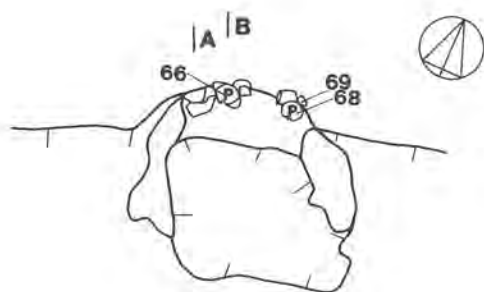


SI-9 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム・焼土粒子, 褐色土ブロック, 木炭
- 2 暗褐色 褐色土, 焼土・木炭粒子
- 3 褐色 褐色土, 焼土ブロック
- 4 褐色 ローム・黒色土ブロック
- 5 褐色 黒色土粒子, ロームブロック
- 6 暗褐色 褐色土, ロームブロック, 焼土・木炭粒子
- 7 暗褐色 ローム・粘土ブロック, 焼土・木炭粒子
- 8 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子・ロームブロック

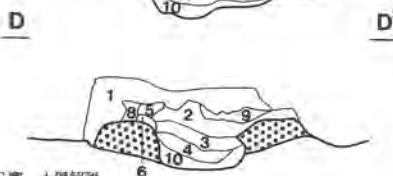
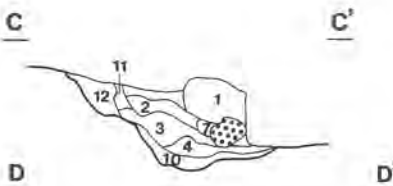


第23図 第9A・B・C号住居跡実測図



SI-9A竈 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土・粘土ブロック, 砂粒
- 2 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 3 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 4 極暗赤褐色 焼土・粘土ブロック, 砂粒
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 6 にぶい赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 7 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 8 暗赤褐色 焼土粒子



SI-9C竈 土層解説

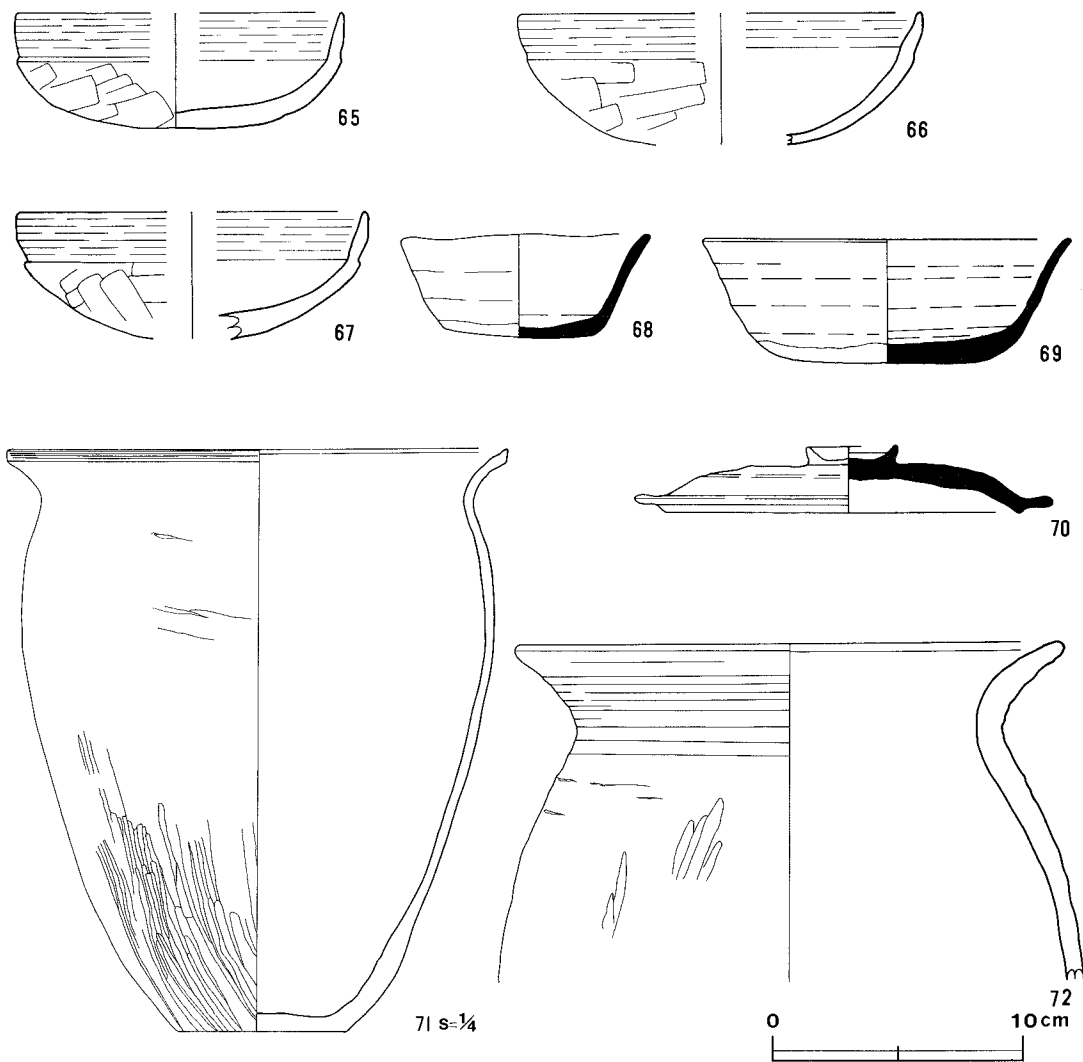
- 1 暗褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック
- 2 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック, 粘土
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 4 暗褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 5 褐色 ローム, 焼土粒子
- 6 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 7 にぶい褐色 粘土, 砂粒
- 8 にぶい褐色 粘土
- 9 褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック, 粘土ブロック
- 10 褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 11 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 12 褐色 ローム



第24図 第9A・C号住居跡竈実測図

第9A号住居跡出土物解説表

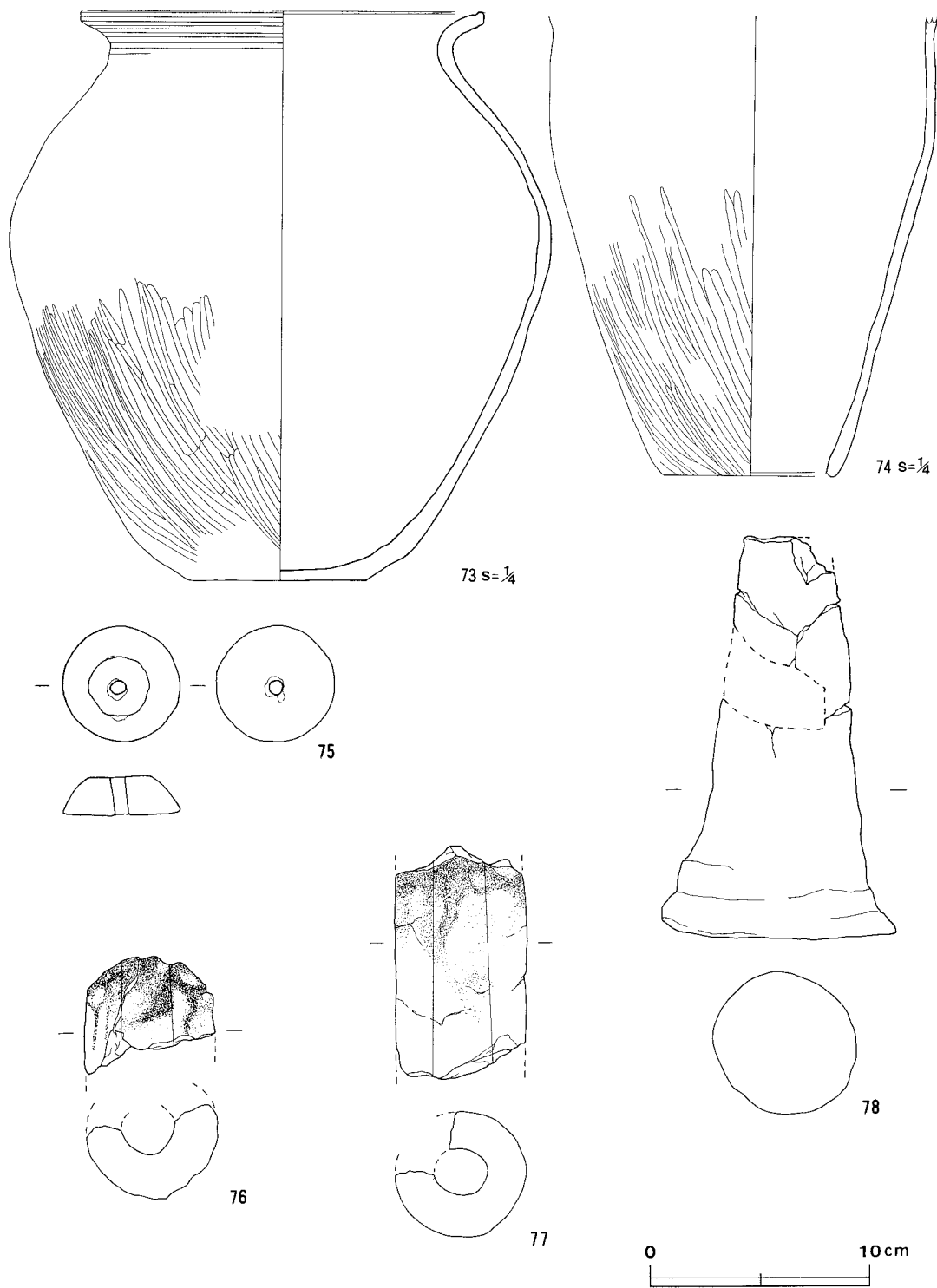
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 67	坏 土師器	A (14.2)	底部は丸底で、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は外傾して立ち上がった後内傾して端部に至る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色	40% 覆土
		B 5.1			
68	坏 須恵器	A 9.8	底部は丸底気味で、体部は外反気味に立ち上がる。底部及び体部下端はヘラ削り。胴部内・外面はナデ。口縁部及び胴部の歪み・摩耗が著しい。	砂粒・小礫・雲母 灰白色 普通	95% 竈
		B 4.2			
		C 6.0			



第25図 第9 A号住居跡出土遺物実測図(1)

第9 A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 69	須恵器	A 14.6	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	60% 竈
		B 5.0			
		C 6.0			
70	蓋 須恵器	A (16.7)	天井部は浅く、なだらかに傾斜する。口縁部はほぼ水平に屈曲し、内傾する短いかえりを有する。つまみは、扁平で中央部がくぼむ。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 黄橙色 普通	80% 覆土
		B (2.7)			
		F 3.7			
		G 0.8			



第26图 第9 A号住居跡出土遺物実測図(2)

第9 A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第25図 7 1	甕 土師器	A (26.4)	底部は平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部は「く」の字状に外反し、口唇端部は外上方につまみ出されている。		砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	40% 甕			
		B 30.9							
		C 8.8							
7 2	甕 土師器	A (21.5)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に外反し、口縁部はゆるく外反する。		砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	20% 覆土			
		B (13.5)							
第26図 7 3	甕 土師器	A (24.1)	底部は平底。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり、胴部中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に強く外側に屈曲する。胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	40% 甕			
		B 34.8							
		C 10.7							
7 4	甕 土師器	B (28.1)	口縁部欠損。胴部はわずかに内彎しながら、外上方に立ち上がる。底部は全面が開孔している。胴部外面へラ磨き。		砂粒・砂礫 明褐色 普通	50% 覆土			
		C 10.4							
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
7 5	紡錘車	径 5.4	断面は台形。穿孔は上方から施され、広面に使用による同心円紋状の磨滅が認められる。	ホルンフェルス	7 7	羽口	全長(10.8) 外形 6.1 孔径 2.5	先端部破片。 外面は多方向のへラ削り調整。	先端部は熔解が認められる。
		厚さ 1.8 孔径 0.7 重さ 66.6g							
7 6	羽口	全長(5.4)	先端部破片。 外面はへラ削り調整。	先端部は熔解し少量の鉄付着	7 8	支脚	全長(18.6) 径 (10.7)	上部が細くなる円柱状を呈す。 上部は欠損している。	粘土塊から成形
		外径 6.1 孔径 2.4							

第9 C号住居跡 (第23図)

(位置) 調査区の北側，C6b₃区を中心に確認。

(重複) 第9 A・B号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.6×3.3mの方形。

(主軸方向) N-8°-W。

(壁) 壁高は28~40cmを測り，垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅8~10cm，深さ4~8cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈し全周。

(床) 全体的に平坦で，特に竈の前面から床面の西部にかけて，硬く踏み固められ堅緻である。

(竈) 北壁中央部を掘り込み粘土・砂で構築しているが，煙道部付近は木根によって攪乱されている。煙道部は火床部から急角度で立ち上がる。

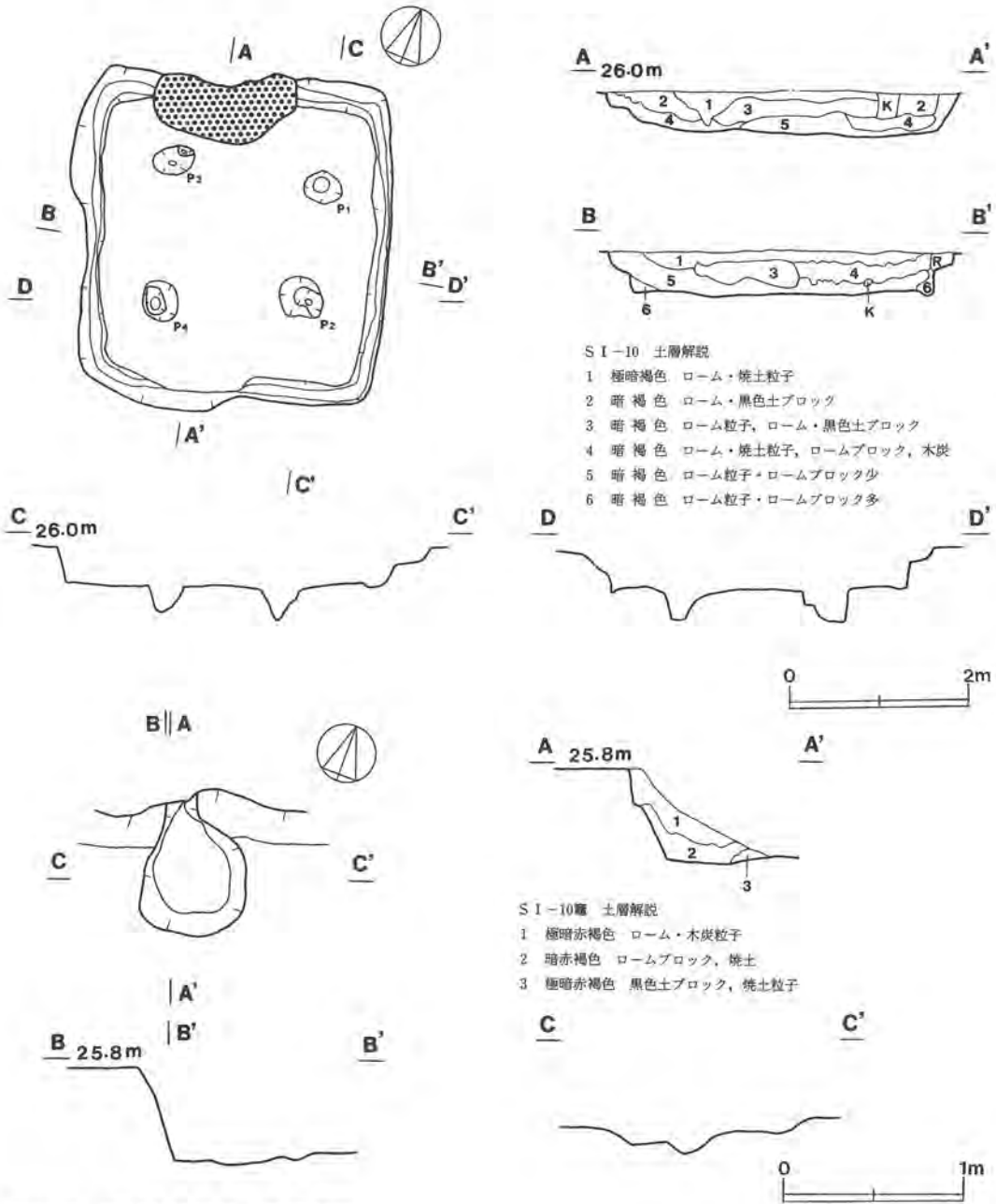
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 東北コーナー付近の覆土上層から，土師器(坏・甕)・須恵器(坏)の破片が少量出土している。

(所見) 本跡を含め3軒の住居跡が重複しているが，いずれも竈をもたない住居跡である。本跡が最も新しく，遺構の形状・遺物から9世紀後半に比定される住居跡である。

第10号住居跡（第27図）

（位置） 調査区の北側，C6c_s区を中心に確認。



第27図 第10号住居跡・竈実測図

(規模と平面形) 3.8×3.7mの方形。

(主軸方向) N-25°-W。

(壁) 壁高は42~56cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅10~24cm, 深さ4~8cmを測る。掘り込み断面形状は不整形を呈して全周。

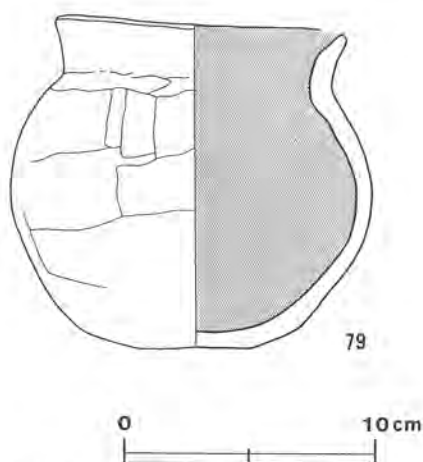
(ピット) 4か所(P₁~P₄)。掘り込みは、径44~56cm, 深さ20~40cmを測り、全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み粘土・砂で構築。遺存状態が極めて悪く、明確にとらえることはできない。

(覆土) 人為堆積。

(遺物) 覆土上層から、少量の土師器・須恵器(坏)の破片が出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。



第28図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 79	埴 土師器	A 11.4	底部は丸底気味で、胴部は球形を呈し、口縁部は僅かに外反して立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい黄橙色 普通	90% 内面黒色処理 覆土
		B 13.4	胴部外面はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。		
		C 4.4			

第11A号住居跡(第29図)

(位置) 調査区の東側, C7g₃区を中心に確認。

(重複) 第11B号住居跡, 第1号土坑と重複。

(規模と平面形) 4.4×4.4mの方形。

(主軸方向) N-12°-W。

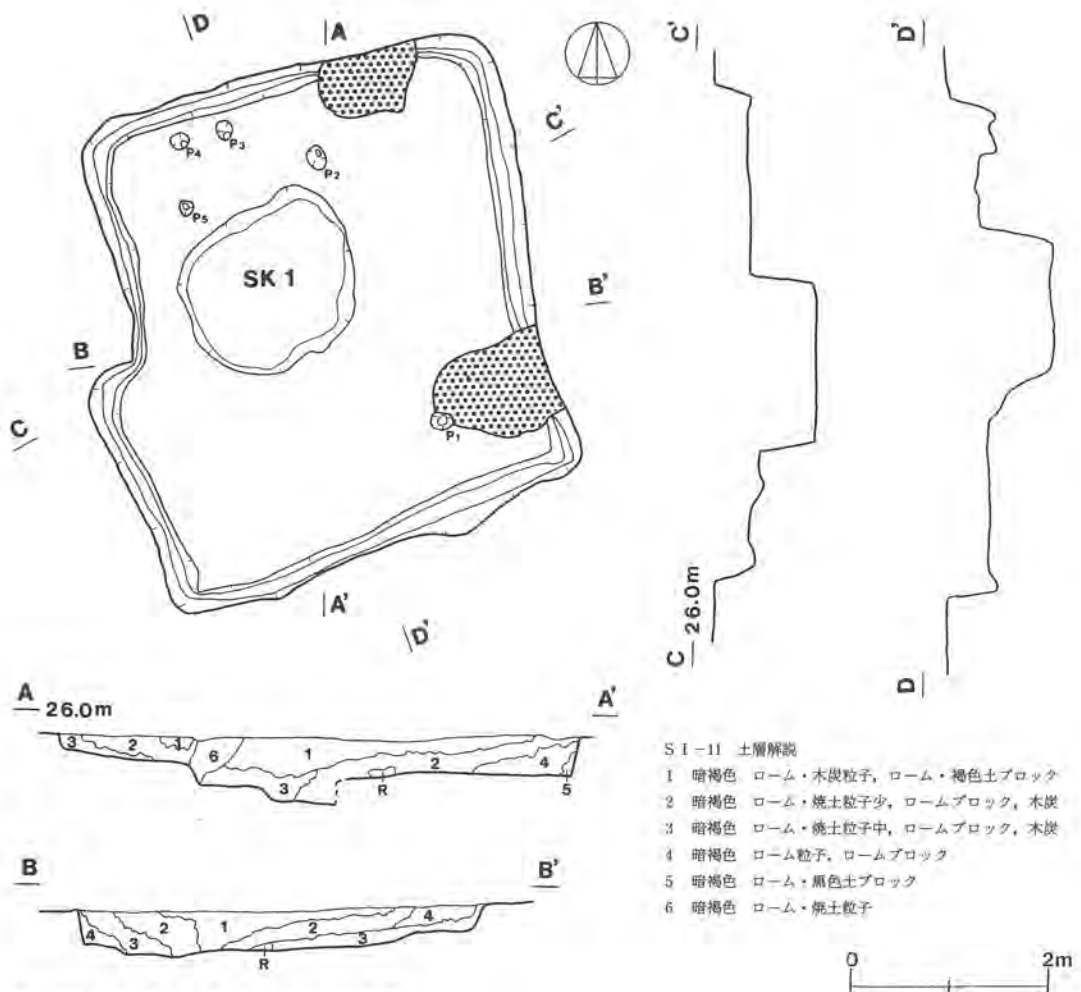
(床) 北西部は、第1号土坑に掘り込まれている。北から南に緩やかに傾斜しているが全体的に平坦で硬く踏み固められている。

(竈) 北壁中央部からやや東寄りの壁を24cm程壁外へ掘り込み粘土・砂で構築。天井部は崩落し袖部は欠損している。燃焼部はあまり火熱をうけていない。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

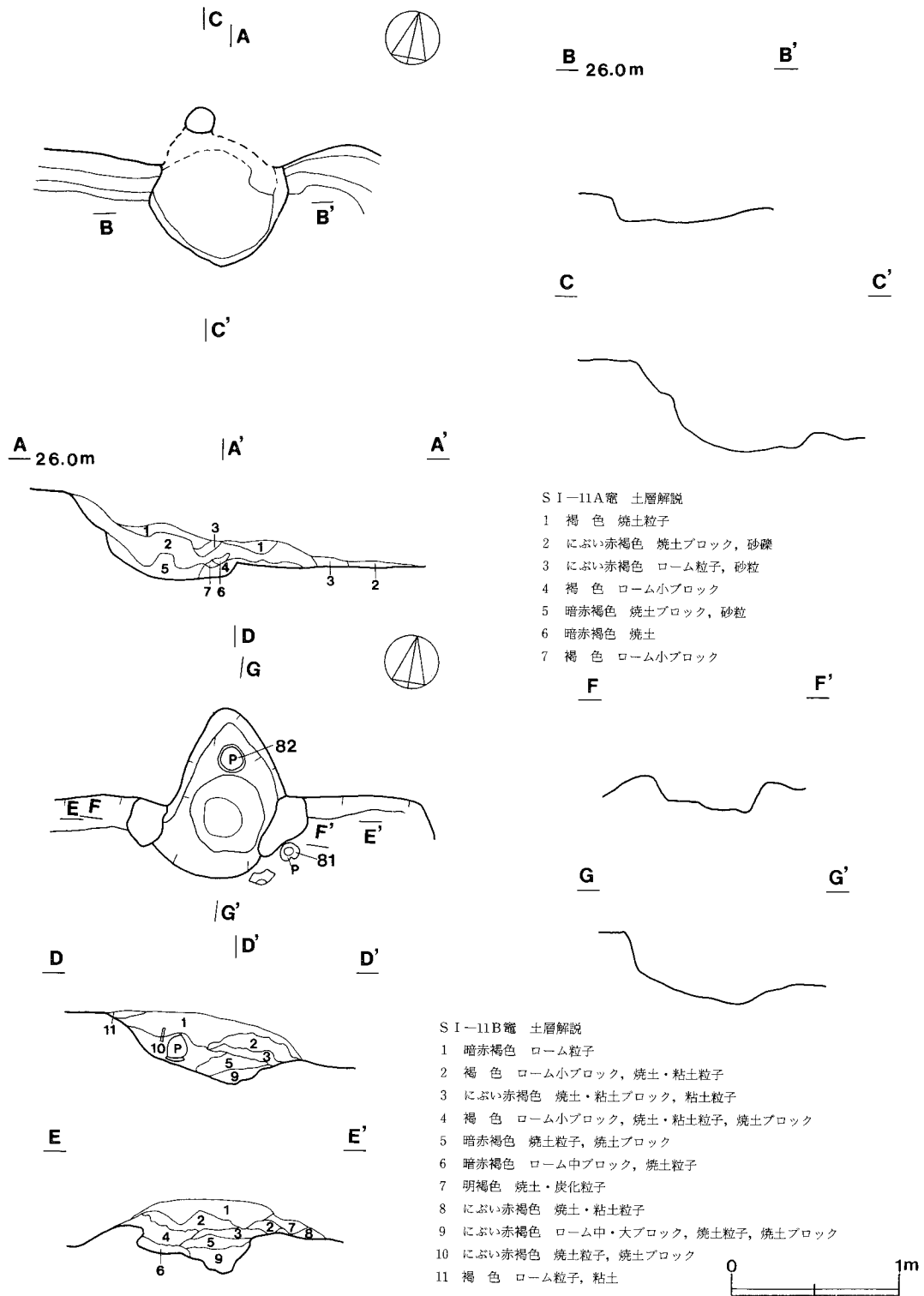
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層から土師器・須恵器(坏)の破片と竈付近からは、土師器坏が出土している。

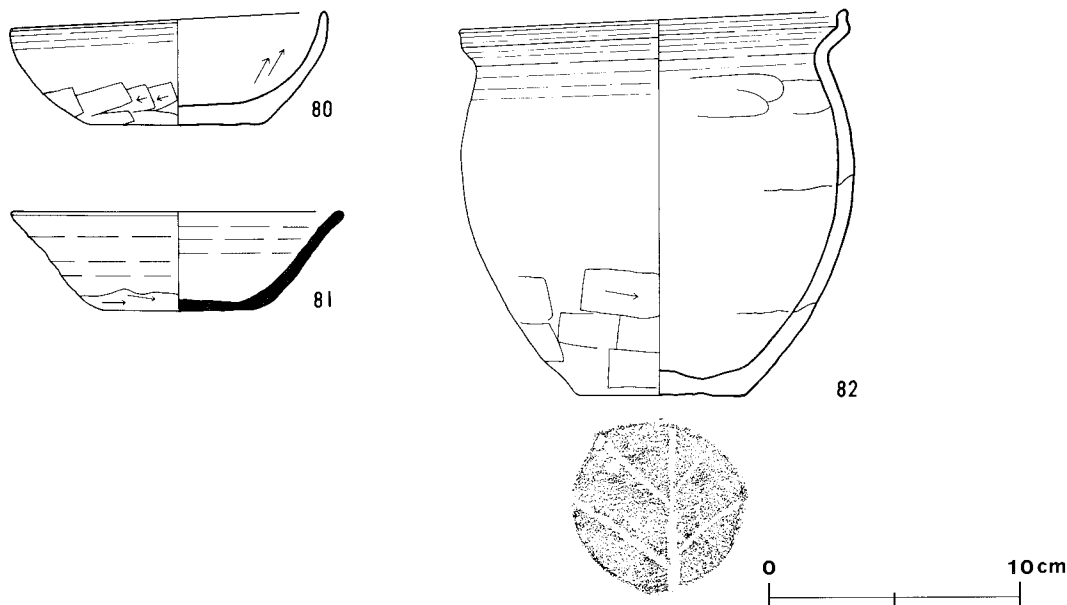
(所見) 本跡は、重複する第11B号住居跡・第1号土坑より以前に構築され、遺構の形態・遺物から判断して、8世紀後半に比定される住居跡である。



第29図 第11A・B号住居跡実測図



第30図 第11A・B号住居跡竈実測図



第31図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 80	坏 土師器	A 12.5	底部は平底で、体部は内彎して立ち上がる。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母に ぶい橙色 普通	80% 器内面煤付着 覆土
		B 4.5			
		C 7.1			
81	坏 須恵器	A 13.1	底部は平底で、体部は外反気味に立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	90% 甕
		B 4.0			
		C 6.0			
82	甕 土師器	A 15.3	底部は平底で、胴部は内彎して立ち上がり、頸部は屈曲する。口縁端部は上方につまみ出されている。胴部下位はヘラ削り。内面はヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 明赤褐色	90% 底部に木葉痕 甕
		B 15.6			
		C 6.7			

第11B号住居跡（第29図）

（位置） 調査区の東側，C7h₃区を中心に確認。

（重複） 本跡の北側部は第11A号住居跡，第1号土坑と重複。

（規模と平面形） 5.3×（4.2）mの長方形。

（主軸方向） N-24°-E。

（壁） 壁高は36～44cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅12～16cm，深さ4～10cmを測り，掘り込み断面形状は┌状を呈し，全周するものと考えられるが，北壁際には検出されない。

（床） 凸凹で，硬く踏み固められて堅緻である。北壁際には第1号土坑に掘り込まれている。

(ピット) 4か所(P₁～P₄)。掘り込みは、径24cm、深さ15cmを測る。

(竈) 東壁中央部を56cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。遺存状態は悪く、袖部の一部のみ検出。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がり、煙出口付近では急角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 住居跡の覆土中層からと竈内から出土している。竈右袖部からは、須恵器坏、燃焼部から土師器小型甕が逆位の状態で出土し、いずれも補強材として使用されたものである。

(所見) 本跡は東壁に竈が付設されている、当遺跡での数少ない住居跡で、遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第12号住居跡(第32図)

(位置) 調査区の中央部、D6e区を中心に確認。

(平面形) 4.3×3.9mの方形。

(主軸方向) N-30°-W。

(壁) 壁高は28～32cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅12～14cm、深さ6～8cmを測り、掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

(床) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

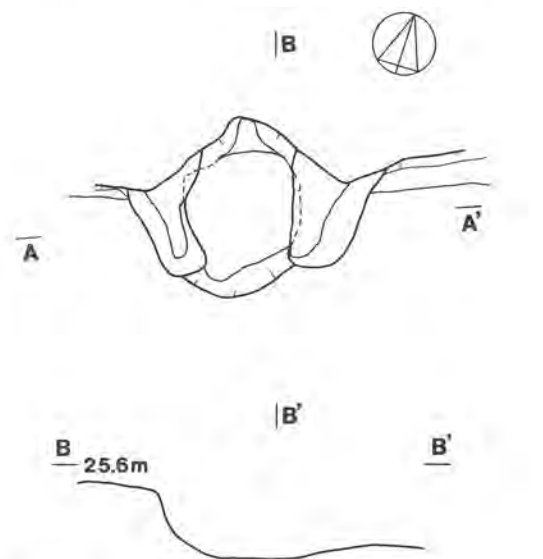
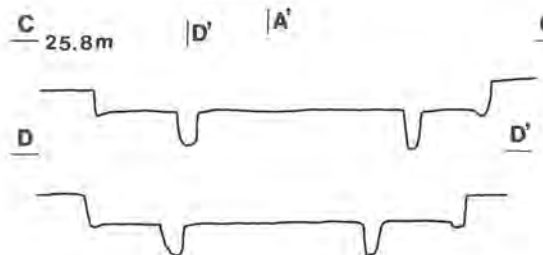
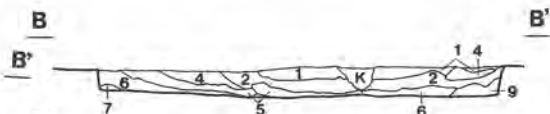
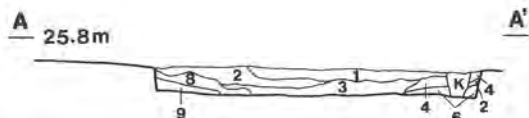
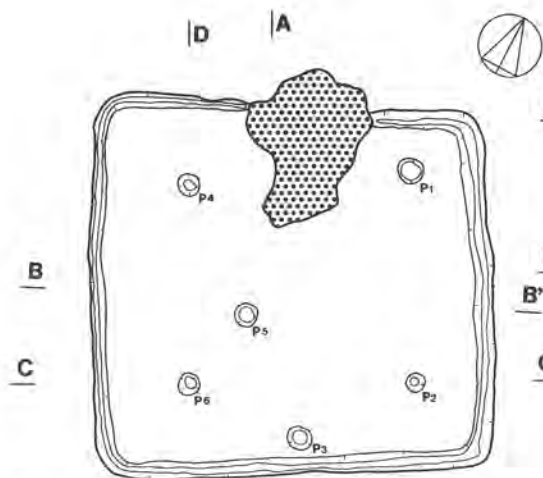
(ピット) 6か所(P₁～P₆)。掘り込みは、径20～28cm、深さ16～28cmを測り、支柱穴はP₁～P₄・P₆である。

(竈) 北壁中央部からやや東寄りの壁を34cm程掘り込み、粘土・砂で構築。焚口部から火床部はほぼ平坦で内壁は焼土化し、使用頻度の高いことが窺われる。火床部から煙道部は急角度に立ち上がる。

(覆土) 人為堆積。

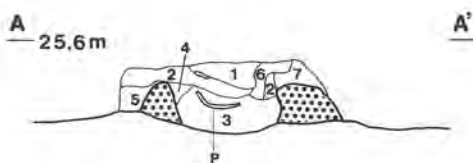
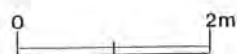
(遺物) 竈内及び竈付近から集中して出土し、竈付近の覆土上層からは少量の土師器(坏・甕)・須恵器(坏)の破片が、出土している。燃焼部からは竈の補強材として用いられた土師器甕・坏が、天井部崩落時の状態で出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して6世紀前半に比定される住居跡である。



S I - 12 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック
- 2 暗褐色 ローム粒子中、ローム小・中ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子多、ローム中ブロック中
- 4 褐色 ローム粒子中、ローム中・大ブロック少
- 5 褐色 ローム粒子
- 6 褐色 ローム小・中ブロック
- 7 暗褐色 ローム小ブロック
- 8 褐色 砂粒・粘土ブロック、焼土ブロック
- 9 暗褐色 ローム・炭化粒子

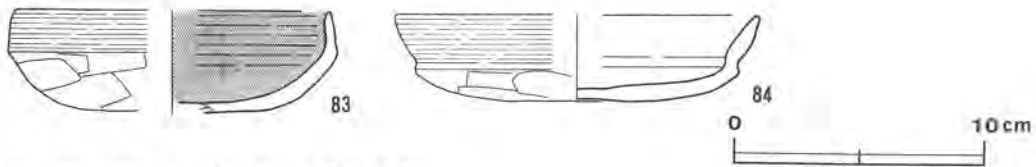


S I - 12 竈 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子、砂粒
- 2 にぶい赤褐色 粘土ブロック、砂粒
- 3 にぶい赤褐色 ローム・焼土・粘土粒子、焼土ブロック
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック
- 5 褐色 ローム粒子
- 6 にぶい褐色 粘土粒子、粘土ブロック、砂粒
- 7 褐色 炭化粒子、砂粒



第32図 第12号住居跡・竈実測図



第33図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第33図 8 3	坏 土 師 器	A (12.6)	底部は平底気味で、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部は尖る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	30% 内面黒色処理 覆土
		B 4.1			
8 4	坏 土 師 器	A (14.5)	底部は平底で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部との境で段をなす。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。底部はヘラ削り。器内・外面は横ナデ。	砂粒 明黄褐色 普通	40% 甗
		B 3.5			

第13号住居跡 (第34図)

(位置) 調査区の東側、C7f₄区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.8×3.6mの方形。

(主軸方向) N-24°-W。

(壁) 壁高は56~60cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅8cm、深さ4cmを測り、全周するが、掘り込みが浅いため断面形状は不明確である。

(床) 平坦で、特に支柱穴の内側が硬く踏み固められ堅緻である。

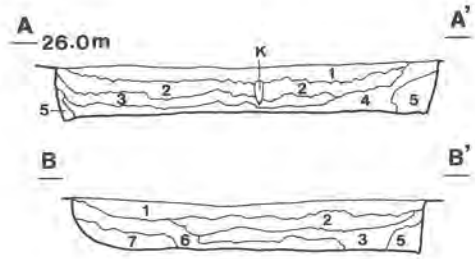
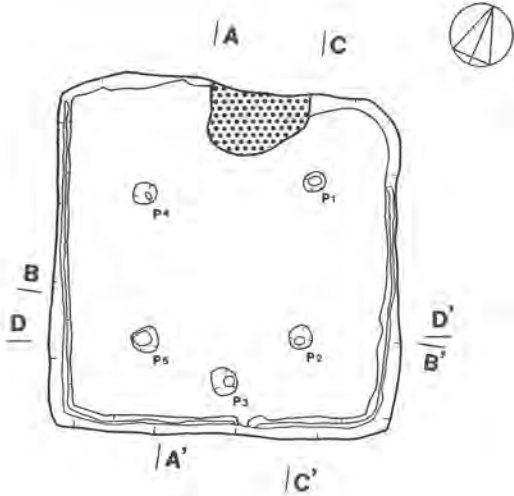
(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは、径24~32cm、深さ26~48cmを測る。全て支柱穴である。

(竈) 北壁の中央からやや東寄りの壁を12cm程壁外へ掘り込み、礫を含む粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが、燃烧部には、焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む暗赤褐色が充填されている。煙道部は急角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

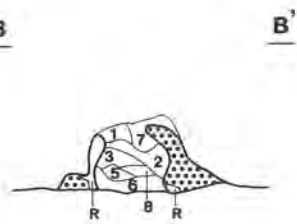
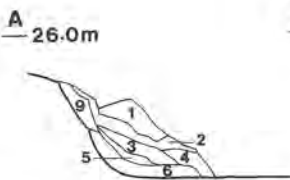
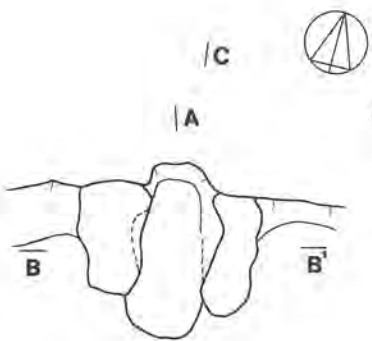
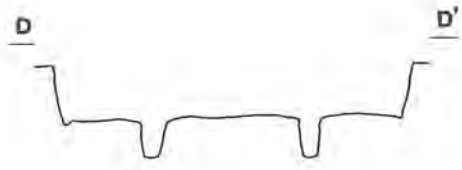
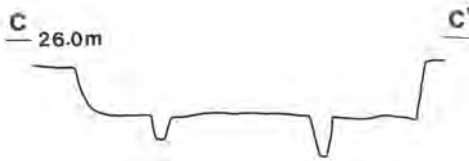
(遺物) 覆土上層・中層から少量の土師器(坏・甗)の破片が出土し、流れ込みの様相を呈している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



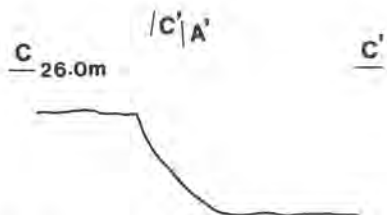
S I -13 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
- 2 褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック
- 5 褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック
- 6 暗褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
- 7 褐色 粘土, 砂, 焼土ブロック



S I -13遺 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 2 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 3 極暗赤褐色 焼土粒子, 灰
- 4 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 5 暗赤褐色 焼土
- 6 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 灰
- 7 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 8 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 灰
- 9 におい赤褐色 ローム粒子



第34図 第13号住居跡・竈実測図

第14A号住居跡（第35図）

（位置） 調査区の東側，C7f₅区を中心に確認。

（重複） 南壁部で，第14B号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.1×2.9mの方形。

（主軸方向） N-21°-E。

（壁） 壁高は28~32cmを測り，垂直に立ち上がる。

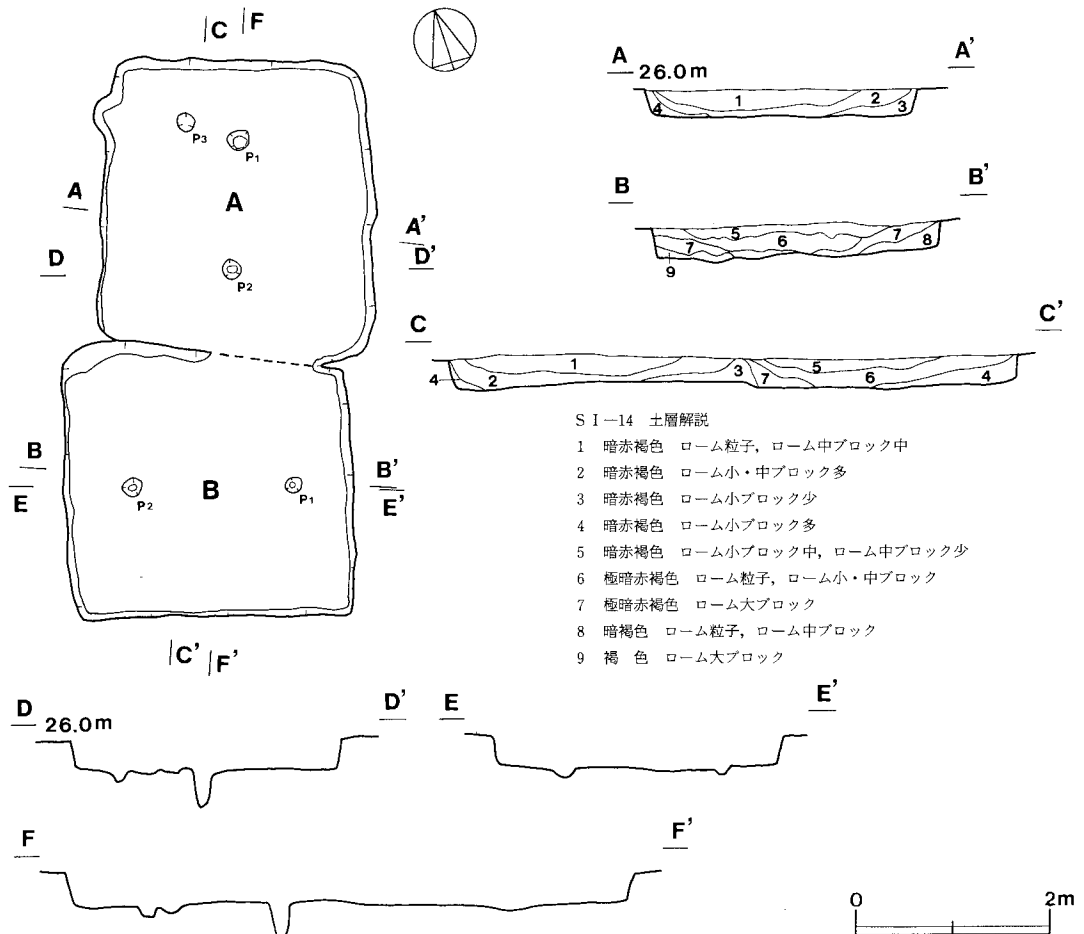
（床） 木根痕と思われる浅い窪みがあり凸凹しており，部分的に硬く踏み固められている。

（ピット） 3か所（P₁~P₃）。掘り込みは，径18~24cm，深さ14~40cmを測る。支柱穴はP₁・P₂である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土土層から流れ込みと思われる状態で土師器・須恵器（坏）の破片が数点出土している。

（所見） 竈をもたない小竪穴住居跡で3本の支柱穴を有するタイプであり，同じ小型の第14B号住居跡に破壊されている。本跡は，遺構の形態から判断して12世紀に比定される住居跡である。



第35図 第14A・B号住居跡実測図

第14B号住居跡（第35図）

（位置） 調査区の東側，C7f₉区を中心に確認。

（重複） 北壁部で，第14A号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.1×3.0mの方形。

（主軸方向） N-72°-W。

（壁） 壁高は28cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径16～24cm，深さ10cmで，いずれも支柱穴である。

（覆土） 自然堆積。

（所見） 第14A号住居跡と同じ小竪穴住居跡であるが，支柱穴は2本である。第14A号住居跡の南壁部を破壊して構築している状況から，本跡の方が新しく，12世紀に比定される住居跡である。

第15号住居跡（第36図）

（位置） 調査区の北東部，C7d₅区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.7×2.7mの方形。

（主軸方向） N-24°-W。

（壁） 壁高は16～20cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床） 北から南に緩やかに傾斜し，硬く踏み固められている。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径16～24cm，深さ20～26cmを測り，全て支柱穴である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から土師器・須恵器（坏・甕）の破片が極少量出土している。

（所見） 本跡は，竈・壁溝をもたない小竪穴住居跡で遺構の形態から判断して12世紀に比定される小型の住居跡である。

第16号住居跡（第37図）

（位置） 調査区の北東部，C7e₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.6×2.5mの方形。

（主軸方向） N-27°-W。

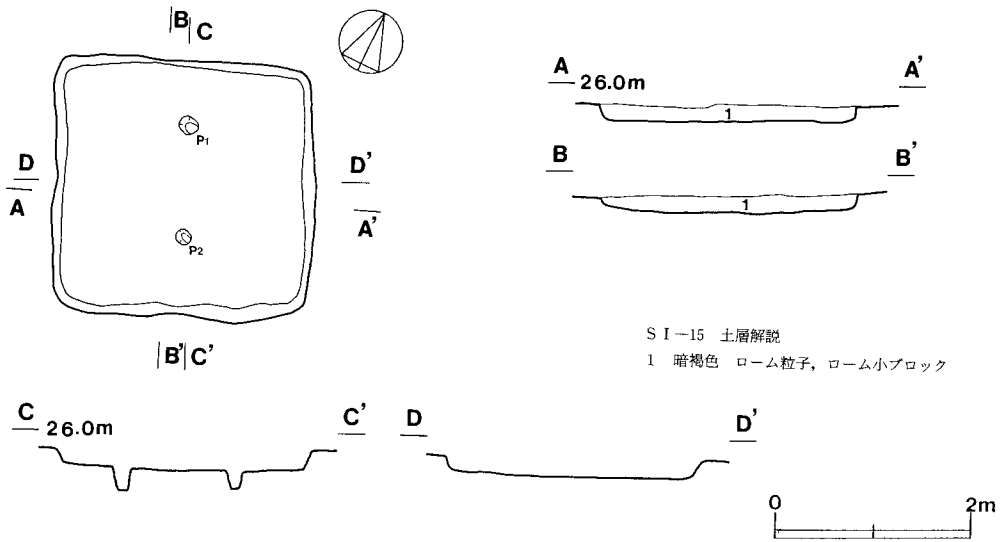
（壁） 壁高は32cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 平坦で，全体的に軟弱である。

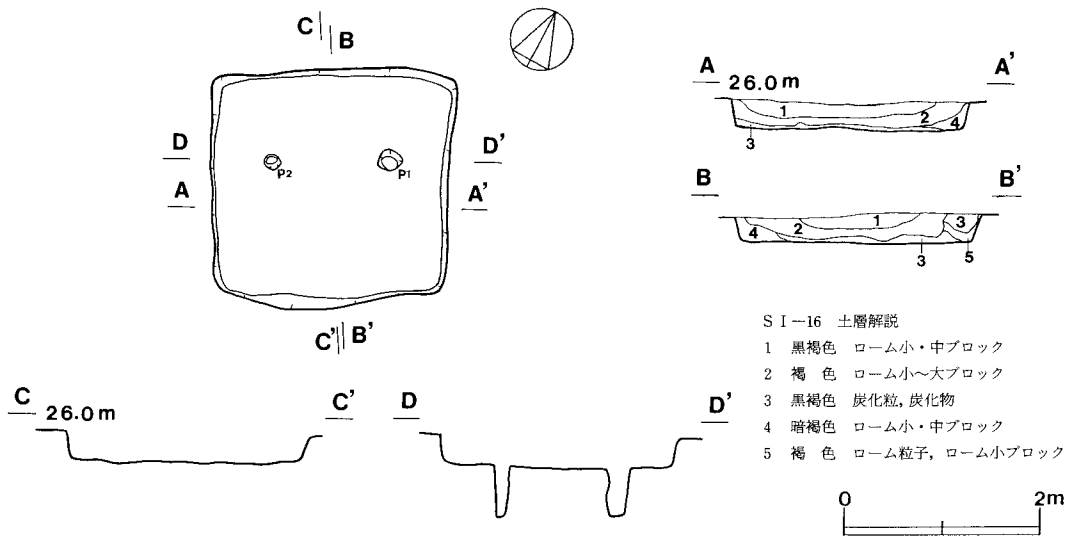
(ピット) 2か所 (P₁・P₂)。掘り込みは、径16~24cm、深さ52~57cmを測り、全て支柱穴である。

(覆土) 自然堆積。

(所見) 本跡は、竈・壁溝をもたない小竪穴住居跡で、遺構の形態から判断して12世紀に比定される小型の住居跡である。



第36図 第15号住居跡実測図



第37図 第16号住居跡実測図

第17号住居跡（第38図）

（位置） 調査区の北東部，C7e₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.8×2.8mの方形。

（主軸方向） N-6°-E。

（壁） 壁高は36～40cmを測り，垂直に立ち上がるが，南壁は外傾する。

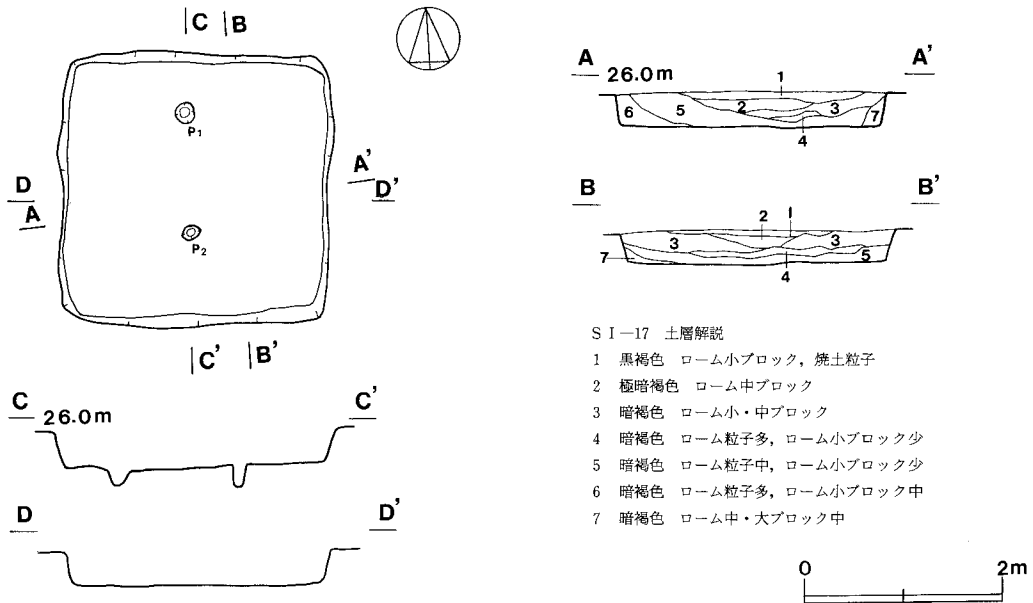
（床） 南側から北側にかけて僅かに傾斜する。硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径18cm，深さ22～28cmを測り，全て支柱穴である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 南壁付近の覆土中層・下層から土師器（坏）の破片が数点出土している。

（所見） 本跡は，竈・壁溝をもたない小竪穴住居跡で，遺構の形態から判断して12世紀に比定される小型の住居跡である。



第38図 第17号住居跡実測図

第18A号住居跡（第39図）

（位置） 調査区の東側，C7f₆区を中心に確認。

（重複） 本跡の南東部は，第18B号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.1×2.6mの長方形。

（主軸方向） N-42°-W。

（壁） 壁高は32～36cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。重複する第18B号住居跡の床面より僅かに高い。

(ピット) 4か所(P₁~P₄)。掘り込みは、径20~44cm、深さ17~58cmを測る。主柱穴はP₂・P₃の2本である。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 西壁中央部付近から土師器(甕)の破片が4点出土しているが、いずれも覆土上層で本跡に伴う遺物ではない。

(所見) 本跡は、小竪穴住居跡で、第18B号住居跡を破壊して構築している状況から、本跡の方が新しく、遺構の形態から12世紀に比定される住居跡である。

第18B号住居跡(第39図)

(位置) 調査区の東側、C7f₇区を中心に確認。

(重複) 北西部で第18A号住居跡、南西部で第18C号住居跡と第5号土坑と重複。

(規模と平面形) (3.4)×(3.2)mの方形。

(主軸方向) N-0°。

(壁) 壁高は24~36cmを測り、外傾して立ち上がる。

(床) 平坦で、2軒の住居跡と重複する部分を除き硬く踏み固められている。

(ピット) 2か所(P₁・P₂)。掘り込みは、径20~28cm、深さ22~39cmを測る。P₁は主柱穴。

(竈) 北壁中央部を80cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落し袖部は欠損している。燃焼部には、多量の焼土・木炭・灰が含まれ、煙道部は急角度となって立ち上がり、煙出口に至る。

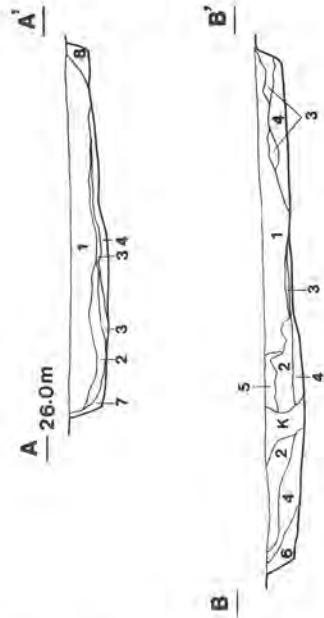
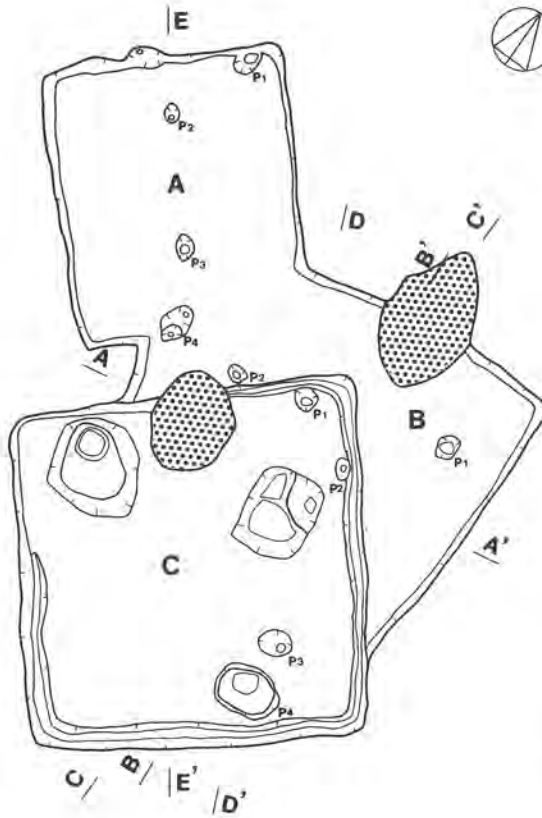
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 遺物は、竈付近の床面から、土師器坏・須恵器坏が、覆土中層から土師器(坏・甕)・須恵器(坏)の破片が出土している。

(所見) 第18A・C号住居跡と重複しているため、平面形・規模は推定であるが、遺物から判断して9世紀後半に比定される住居跡である。

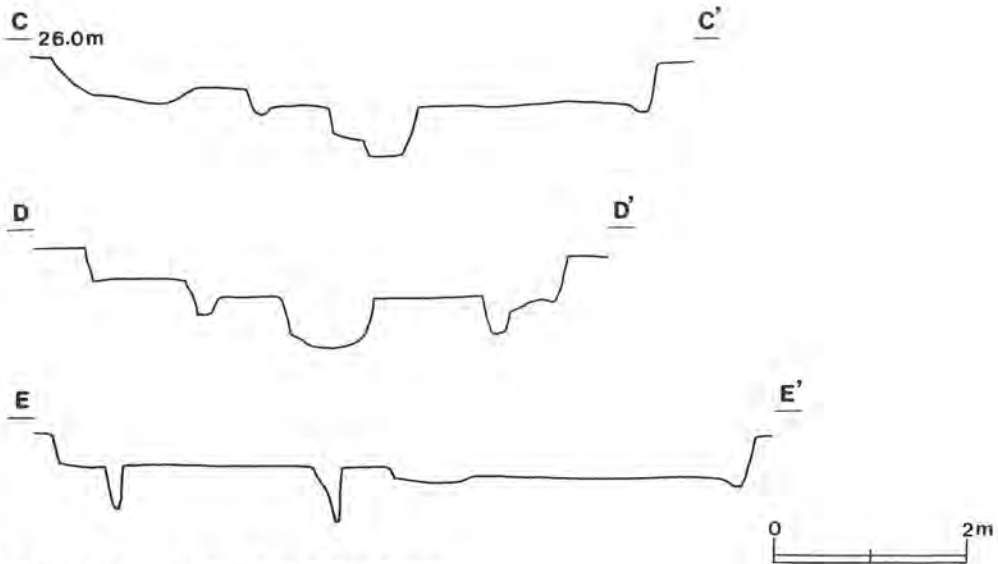
第18B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 85	土師器	A 12.9	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。底部及び体部下端はヘラ削り。器内面はヘラ磨き。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	80% 内面黒色処理 床面
		B 3.9			
		C 5.8			
86	土師器	A (12.0)	底部は平底で、体部は器厚を減じながら、内彎気味に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り。体部外面及び口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% 内面黒色処理 墨書「山」か。 覆土
		B 4.3			
		C 6.0			

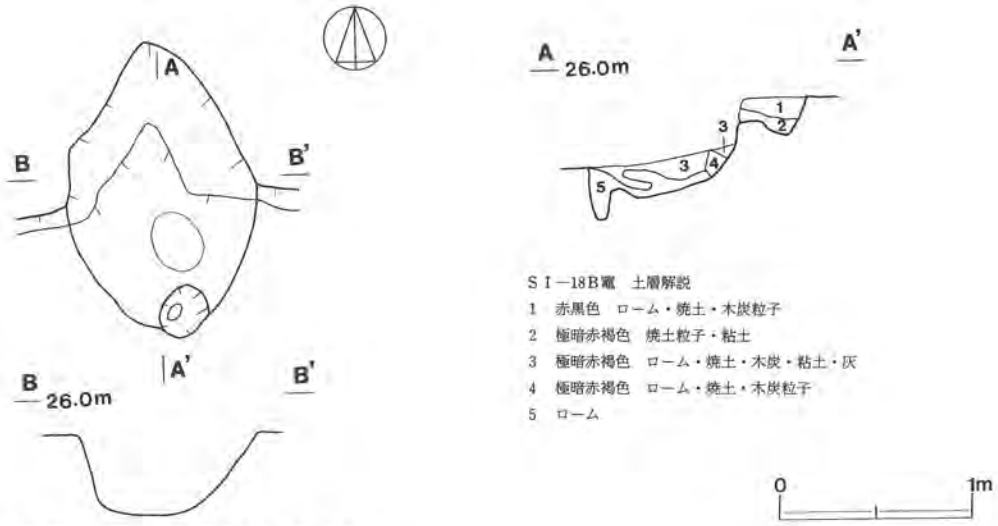


S1-18B・C 土層解説

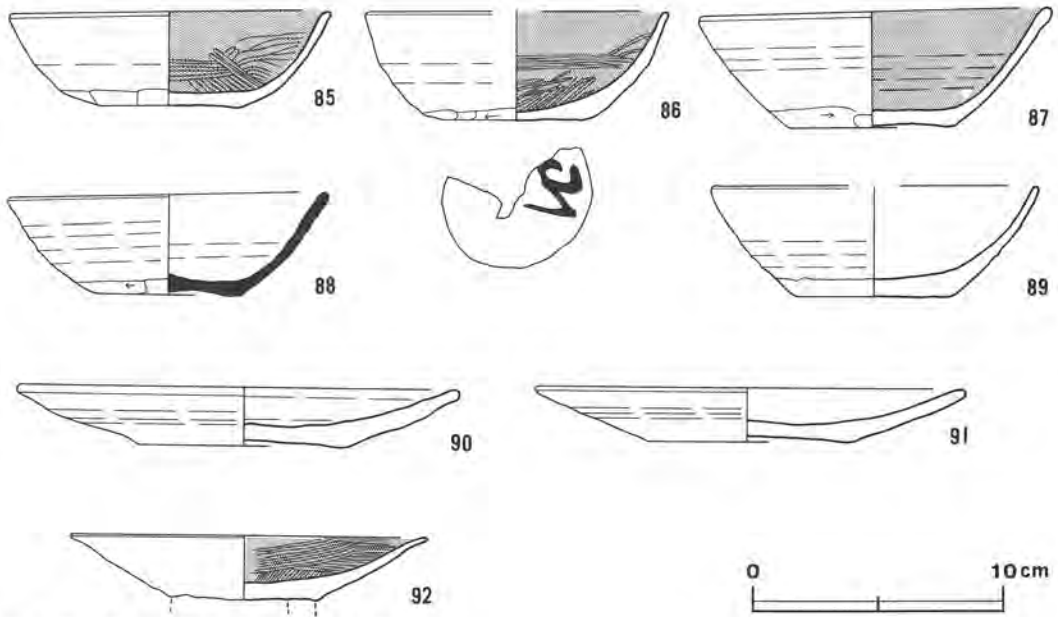
- 1 暗褐色 ローム粒子
- 2 褐色 ローム・炭化粒子, ローム小ブロック
- 3 暗褐色 焼土・炭化粒子, 灰
- 4 暗褐色 ローム小ブロック
- 5 褐色 炭化粒子
- 6 褐色 ローム粒子
- 7 褐色 ローム中ブロック, 炭化粒子
- 8 暗褐色 ローム小ブロック, 炭化物



第39図 第18A・B・C号住居跡実測図



第40図 第18B号住居跡竈実測図



第41図 第18B号住居跡出土遺物実測図

第18B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 87	坏 土師器	A 14.3 B 4.8 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部はヘラ切り。体部下端はヘラ削り。体部外面及び口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	60% 内面黒色処理 煤付着 覆土
88	坏 須恵器	A 12.8 B 4.2 C 5.8	底部は上げ底気味で、体部は内彎気味に立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部はヘラ切り後、周辺部のみヘラ削り。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	50% 竈

第18B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 89	坏 土師器	A (13.2) B 4.4 C 6.2	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	60% 床面
90	皿 土師器	A 17.5 B 2.4 C 8.3	底部は平底で、体部は大きく直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で器厚を減ずる。底部はヘラ削り。体部外面及び口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	80% 竈
91	皿 土師器	A 17.3 B 2.1 C 8.2	底部は平底で、体部は大きく直線的に外傾して立ち上がる。底部はヘラ削り後ナデ。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 淡黄色 普通	60% 竈
92	高台付皿 土師器	A 14.3 B (2.6)	高台部欠損。体部は器厚を減しながら、大きく直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。底部は回転ヘラ切り。体部外面は横ナデ。内面はヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	70% 内面黒色処理 覆土

第18C号住居跡（第39図）

（位置） 調査区の東側，C7g₇区を中心に確認。

（重複） 本跡の北側部分は第18B号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.8×3.7mの方形。

（主軸方向） N-36°-W。

（壁） 壁高は40～44cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10～20cm，深さ8cmを測り，掘り込み断面形状は不整形で，北・西壁際の一部は検出されていない。

（床） 硬く踏み固められ堅緻で，重複する第18B号住居跡の床面より24cm程低い。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径24～104cm，深さ24～43cmを測る。P₃は支柱穴。

（竈） 北壁中央部を16cm程掘り込み，粘土・砂で構築。遺存状態は極めて悪く，天井部は崩落し，袖部も欠損しており，火床部を確認したにすぎない。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 北東壁際にまとまって出土しているが，大半が覆土中層のもので，明らかに投棄されて様相を呈している。

（所見） 本跡と第18A・B号住居跡，第5号土坑の4遺構が重複して検出されたが，新旧関係は第18B号→第18C号→第18A号住居跡→第5号土坑の順で構築されており，本跡は9世紀前半に比定される住居跡である。

第19A号住居跡（第42図）

（位置） 調査区の東側，C7i₆区を中心に確認。

（重複） 東壁部で第19C号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.1×2.6mの長方形。

（主軸方向） N-17°-W。

（壁） 壁高は40cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅6～10cm，深さ2～6cmを測り，掘り込み断面形状は┌状を呈し，北西・南西コーナー壁際に周回。

（床） 平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 1か所。掘り込みは，径52cm，深さ24cmを測る。

（覆土） 自然堆積。

（所見） 本跡は遺構の形態から10世紀前半に比定される住居跡である。

第19B号住居跡（第42図）

（位置） 調査区の東側，C7i₇区を中心に確認。

（重複） 西壁部で第19C号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.5×3.2mの方形。

（主軸方向） N-13°-W。

（壁） 壁高は32cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅6～18cm，深さ1～8cmを測り，掘り込み断面形状は不整形で，全周。

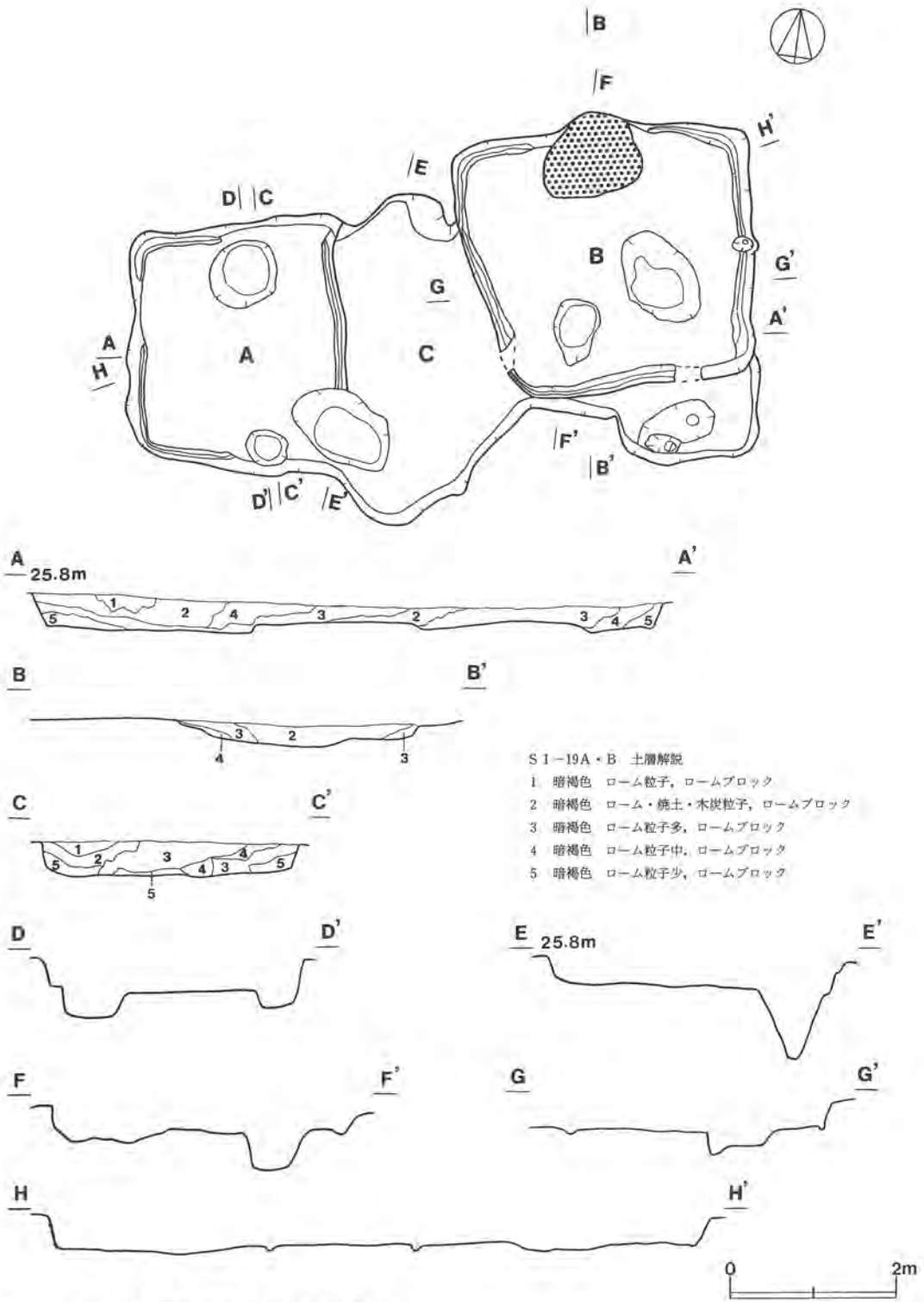
（床） 凸凹が激しいが，硬く踏み固められている。

（竈） 北壁中央部を18cm程掘り込み，粘土・砂で構築。遺存状態は比較的良好で，天井部の一部が崩落しているだけであり，袖部の構築には，平瓦を補強材として用いている。焚口部から燃烧部・煙道部にかけての内壁は，火熱を帯びて赤色硬化し，火床部から煙道部にかけては急角度で立ち上がる。

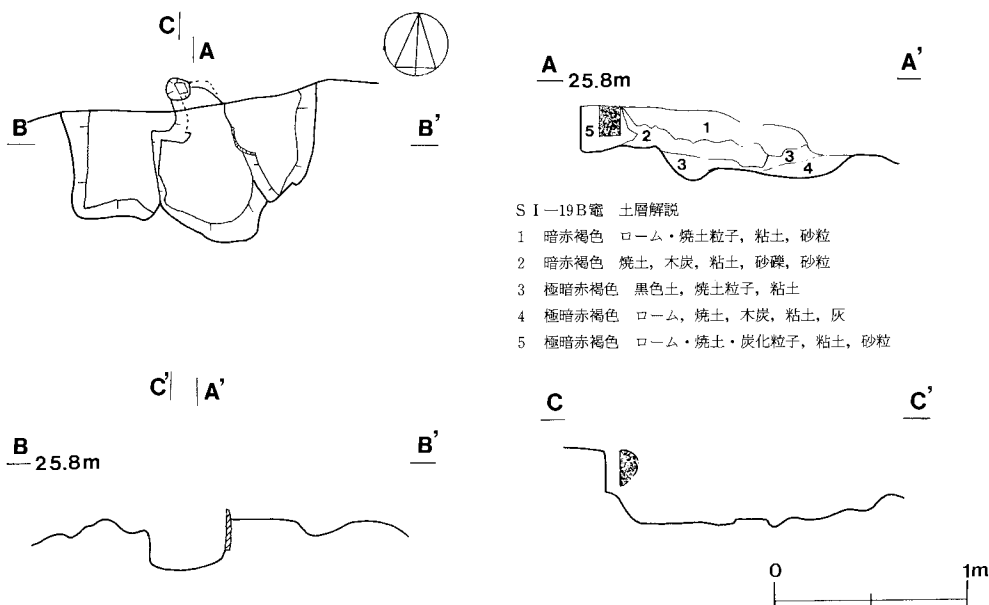
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近を中心に多量の土師器（坏・甕）・須恵器（坏・蓋）の破片が出土している。覆土下層からは土師器坏，須恵器坏が，床面から土師器高台付坏が，竈内からは，土師器甕が出土している。

（所見） 当遺跡で平瓦を竈の補強材として使用している例は本跡だけである。また，瓦の出土も本跡の1点だけである。本跡は遺構の形態・遺物から9世紀後半に比定される住居跡である。



第42図 第19A・B・C号住居跡実測図



第43図 第19B住居跡電実測図

第19C号住居跡 (第42図)

(位置) 調査区の東側, C7i₆区を中心に確認。

(重複) 東壁部で第19B号住居跡と, 北西部で第19A号住居跡と重複。

(規模と平面形) (3.2) × (2.4) mの長方形。

(主軸方向) N-27°-W。

(壁) 壁高は16~34cmを測り, 北壁は垂直に, 南壁は外傾して立ち上がる。

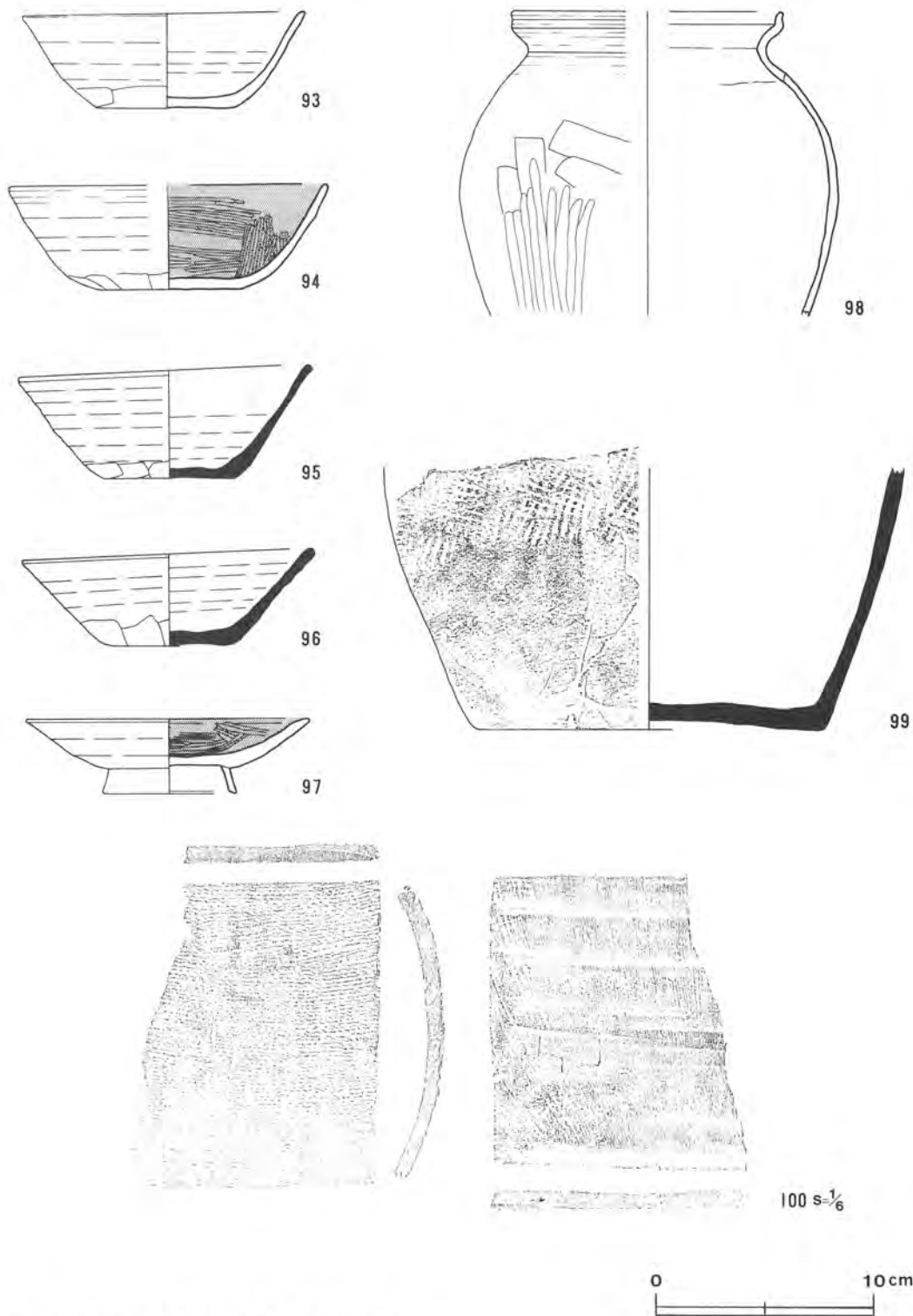
(床) 平坦で, 硬く踏み固められ堅緻である。床面の高さは, 重複する第19A・B号より若干高い。

(覆土) 自然堆積。

(所見) 遺物は皆無で, 柱穴も検出されなかったが, 形状・床面の状態から住居跡と判断した。本跡は, 遺構の形態から8世紀後半に比定される住居跡である。

第19B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 93	坏 土師器	A 13.1	底部は平底で, 体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	60% 覆土
		B 4.5			
		C 6.4			
94	坏 土師器	A (14.7)	底部は平底で, 体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。 底部及び体部下端はヘラ削り。器内面はヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% 内面黒色処理 覆土
		B 4.8			
		C (6.6)			



第44图 第19B号住居跡出土遺物実測図

第19B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 95	坏 須恵器	A 13.4	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端は一方の ヘラ削り。	砂粒・雲母 黄褐色 普通	90% 覆土
		B 5.2			
		C 5.8			
96	坏 須恵器	A 13.4	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、中 位から口縁部にかけて僅かに外反する。体部内・外面水 挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	80% 覆土
		B 4.5			
		C 6.0			
97	高台付皿 土師器	A 13.1	底部は平底で、体部は内彎気味に大きく外傾して立ち上 がり、口縁部は尖る。「ハ」の字状にかけて開く高台がつ く。底部及び体部下端は回転ヘラ削り。器内面はヘラ磨 き。	砂粒 にぶい橙色 良好	90% 内面黒色処理 覆土
		B 3.4			
		D 6.2			
		E 1.1			
98	甕 土師器	A (12.3)	胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に 屈曲し、端部は外上方につまみ出されている。胴部中位 から縦方向のヘラ磨き。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色 普通	40% 甕
		B (14.1)			
99	甕 須恵器	B (12.0)	底部は上げ底気味で、胴部は僅かに内彎しながら立ち上 がる。底部及び胴部下端はヘラ削り。 胴部外面下位に叩き目を施す。胴部内面はヘラナデ。	砂粒・砂礫 黄灰色 良好	30% 覆土
		C 16.0			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
100	平瓦	全長(22.5) 広端 27.5 厚さ 1.5	凸面に縄目叩きが施 されているが粗い。 凹面は布目痕を有し ている。切り離しは 糸切りで行っており、 瓦の周辺部をヘラで 磨いている。	褐灰色 砂礫・長石	

第20号住居跡（第45図）

（位置） 調査区の東側、C7h₅区を中心に確認。

（規模と平面形） 5.5×3.8mの長方形。

（主軸方向） N-18°-W。

（壁） 壁高は28~36cmを測り、垂直に立ち上がる。

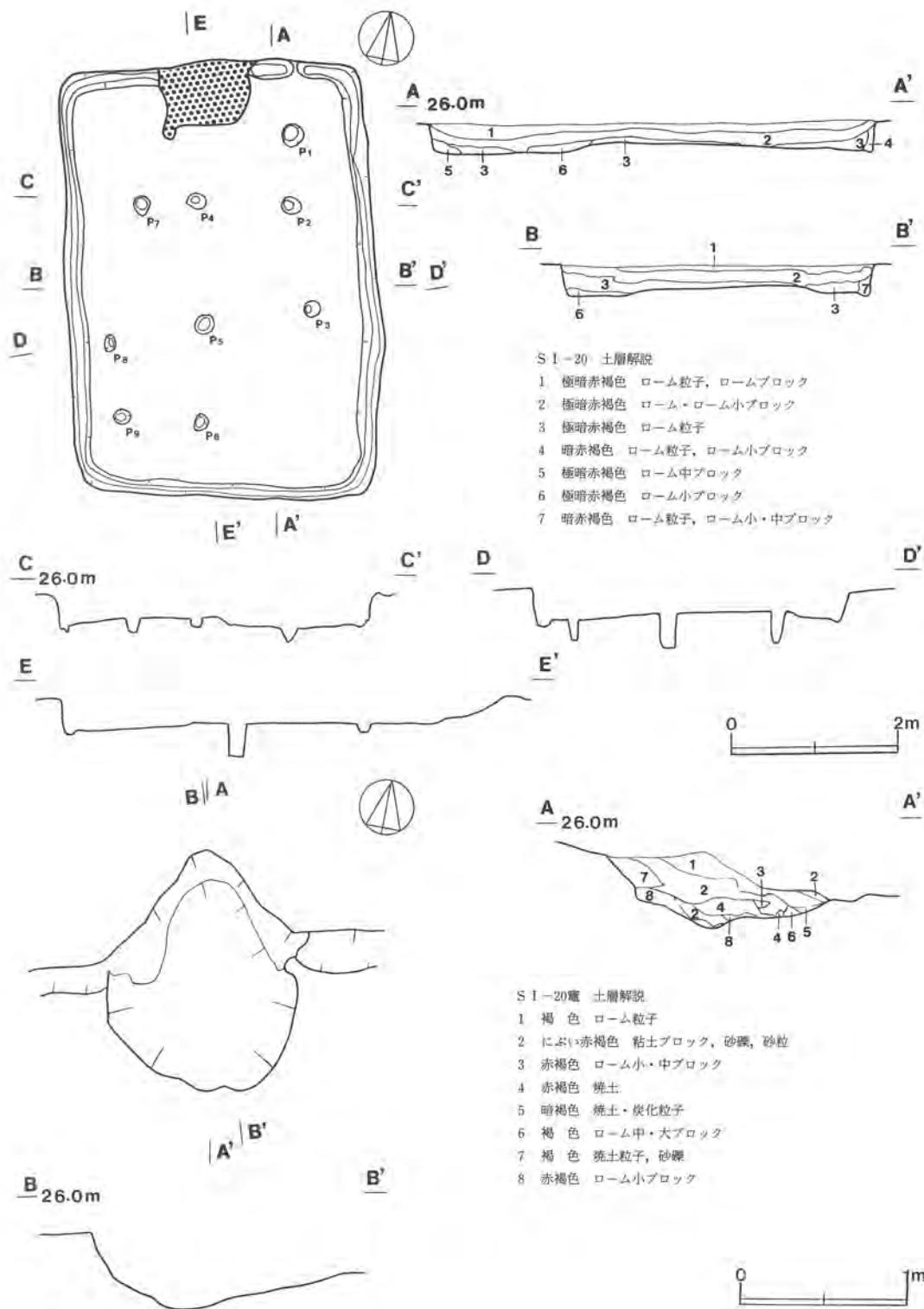
（床） 平坦で、中央部分が若干盛り上がる。柱穴の内側と竈の前面が硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 9か所（P₁~P₉）。掘り込みは、径16~28cm、深さ12~44cmを測る。主柱穴は明確には捉えられない。

（竈） 北壁中央部の壁を56cm程壁外へ掘り込み、砂礫の混じる粘土で構築。遺存状態は悪く天井部は崩落し、袖部は欠損している。

（覆土） 自然堆積。

（所見） 本跡は、本跡に伴う遺物が検出されなかったが、遺構の形態から判断して8世紀後半に比定されると捉えられる住居跡である。



第45図 第20号住居跡・竈実測図

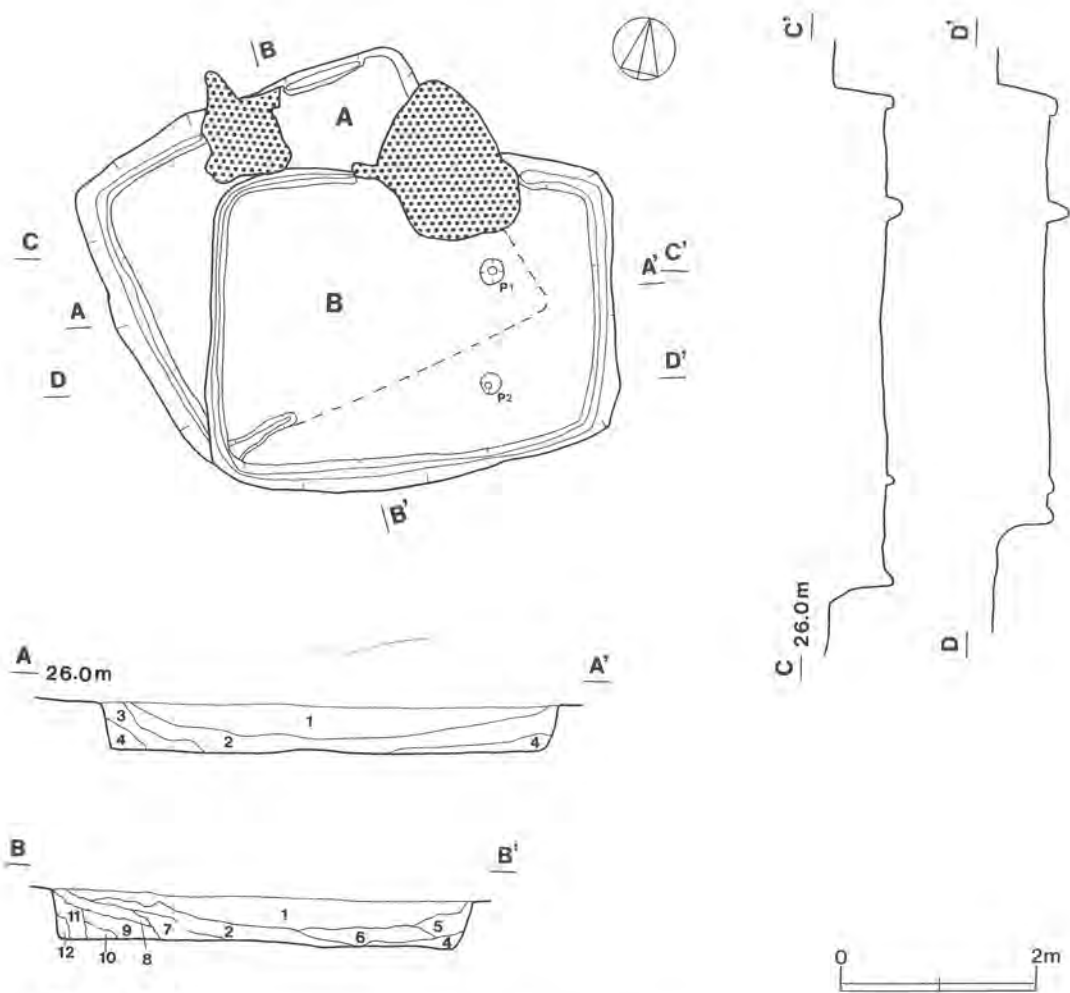
第22A号住居跡 (第46図)

(位置) 調査区の東側, C7j_a区を中心に確認。

(重複) 第22B号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.9×(3.5) mの長方形。

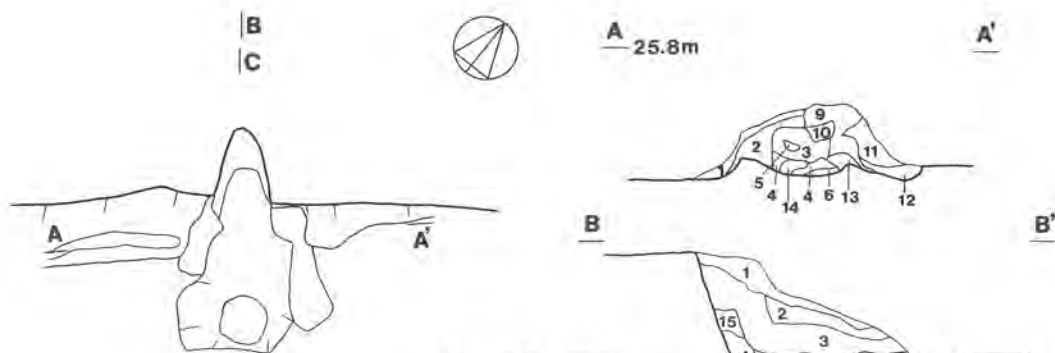
(主軸方向) N-39°-W。



SI-22 土層解説

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム中ブロック | 7 褐色 焼土・炭化粒子, 粘土 |
| 2 褐色 ローム小・粘土ブロック, 焼土粒子 | 8 灰褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子 |
| 3 黒褐色 ローム小ブロック | 9 暗褐色 ローム・炭化粒子, 焼土ブロック |
| 4 褐色 ローム中ブロック | 10 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック少 |
| 5 暗褐色 ローム粒子, 炭化粒子 | 11 暗褐色 ローム粒子少, ローム小ブロック少 |
| 6 暗赤褐色 焼土粒子 | 12 明褐色 ローム中ブロック |

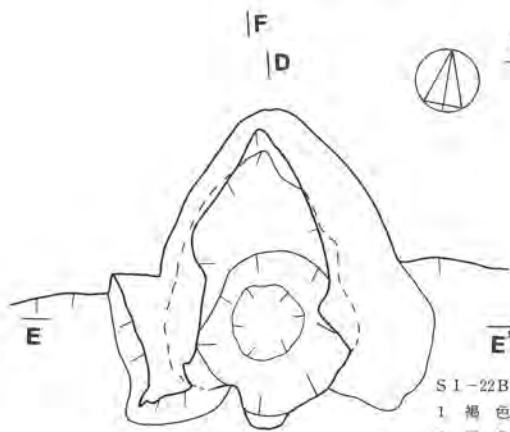
第46図 第22A・B号住居跡実測図



S1-22A 竈 土層解説

- 1 褐色 焼土ブロック、砂粒
- 2 にぶい赤褐色 炭化粒子、粘土ブロック、砂礫、砂粒
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子、焼土ブロック、砂粒
- 4 極暗赤褐色 焼土・炭化粒子
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子、粘土ブロック、砂粒
- 6 褐色 地山
- 7 暗赤褐色 焼土・粘土ブロック
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック
- 9 にぶい赤褐色 粘土ブロック、砂礫、砂粒
- 10 暗褐色 焼土・炭化粒子、砂礫
- 11 暗褐色 砂礫、砂粒
- 12 褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 13 褐色 粘土ブロック、砂礫
- 14 暗赤褐色 ローム・焼土粒子、灰
- 15 褐色 ローム小ブロック

C 25.8m



S1-22B 竈 土層解説

- 1 褐色 焼土・粘土粒子、砂粒
- 2 褐色 焼土・粘土粒子、粘土ブロック
- 3 にぶい褐色 焼土・粘土ブロック
- 4 褐色 炭化粒子、焼土ブロック
- 5 明赤褐色 焼土・粘土ブロック、粘土粒子
- 6 にぶい赤褐色 ローム小・中ブロック、焼土粒子、焼土ブロック
- 7 褐色 炭化粒子、粘土ブロック
- 8 黒褐色 炭化粒子、焼土ブロック
- 9 褐色 粘土
- 10 にぶい赤褐色 焼土・炭化粒子、焼土ブロック
- 11 褐色 焼土ブロック、粘土ブロック、砂粒
- 12 褐色 焼土・炭化粒子、粘土
- 13 暗褐色 焼土・炭化粒子、粘土
- 14 暗褐色 焼土・炭化粒子、焼土ブロック
- 15 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 16 褐色 焼土・粘土粒子

F 25.8m



第47図 第22A・B号住居跡竈実測図

(壁) 壁高52～56cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅12～14cm、深さ7～8cmを測り、掘り込み断面形状はL状を呈し、全周するものと考えられる。

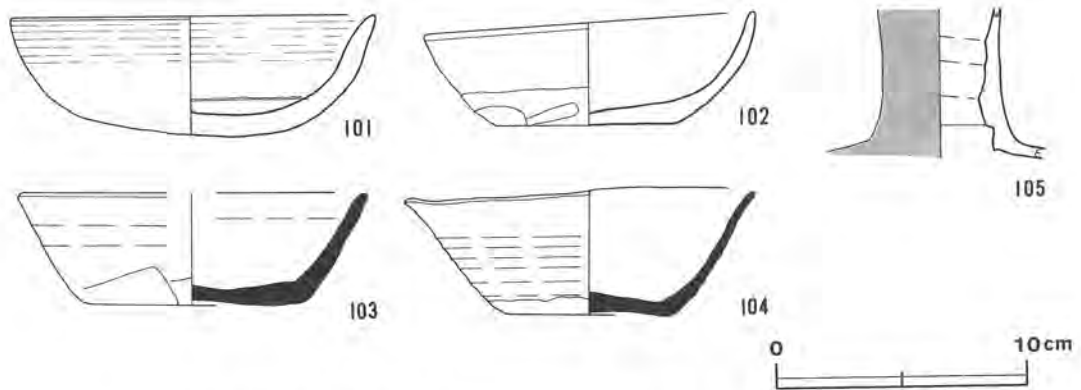
(床) 平坦で、硬く踏み固められているが、南側の床面は第22B号住居跡と重複して破壊されている。

(竈) 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部の一部も欠損している。燃烧部の内壁は火熱を帯び赤色に硬化し、煙道部は火床部から急角度に立ち上がる。焚口部は第22B号住居跡の北西コーナー部と重複している。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土中層から上層にかけて土師器(坏・甕)・須恵器(坏・瓶)の破片が出土している。

(所見) 柱穴が存在していた可能性はあるが、第22B号住居跡との重複しているため確認はできなかった。本跡は埋没後、第22B号住居跡に破壊されている。遺物の出土はなく、遺構の形態から7世紀後半に比定される住居跡である。



第48図 第22A住居跡出土遺物実測図

第22A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 101	坏 土師器	A 14.6	底部は丸底で、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部はへら削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 にふい橙色 普通	70% 器内面煤付着 覆土
		B 4.8			
102	坏 土師器	A 13.1	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は尖る。底部及び体部下端はへら削り。体部内面・外面はナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 橙色 普通	80% 口縁部内面一部煤付着 覆土
		B 4.5			
		C 7.5			

第22A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 103	坏 須恵器	A (14.0)	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り。体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	50% 覆土
		B 4.5			
		C (8.8)			
104	坏 須恵器	A 14.0	底部は上げ底気味で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後ナデ。体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰白色 普通	60% 床面
		B 5.1			
		C (6.4)			
105	瓶 灰釉陶器	B (6.0)	頸部は器厚を減しながら、外反気味に立ち上がる。肩部は強く張る。	砂粒 オリーブ色 普通	10% 自然袖付着 覆土

第22B号住居跡（第46図）

（位置） 調査区の東側，C7j₄区を中心に確認。

（重複） 第22A号住居跡と重複。

（規模と平面形） 4.2×3.5mの長方形。

（主軸方向） N-5°-W。

（壁） 壁高56cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅14～22cm，深さ4～8cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 平坦で，重複部以外は，硬く踏み固められ堅緻である。重複する第22A号住居跡の床面より8cm程高い。

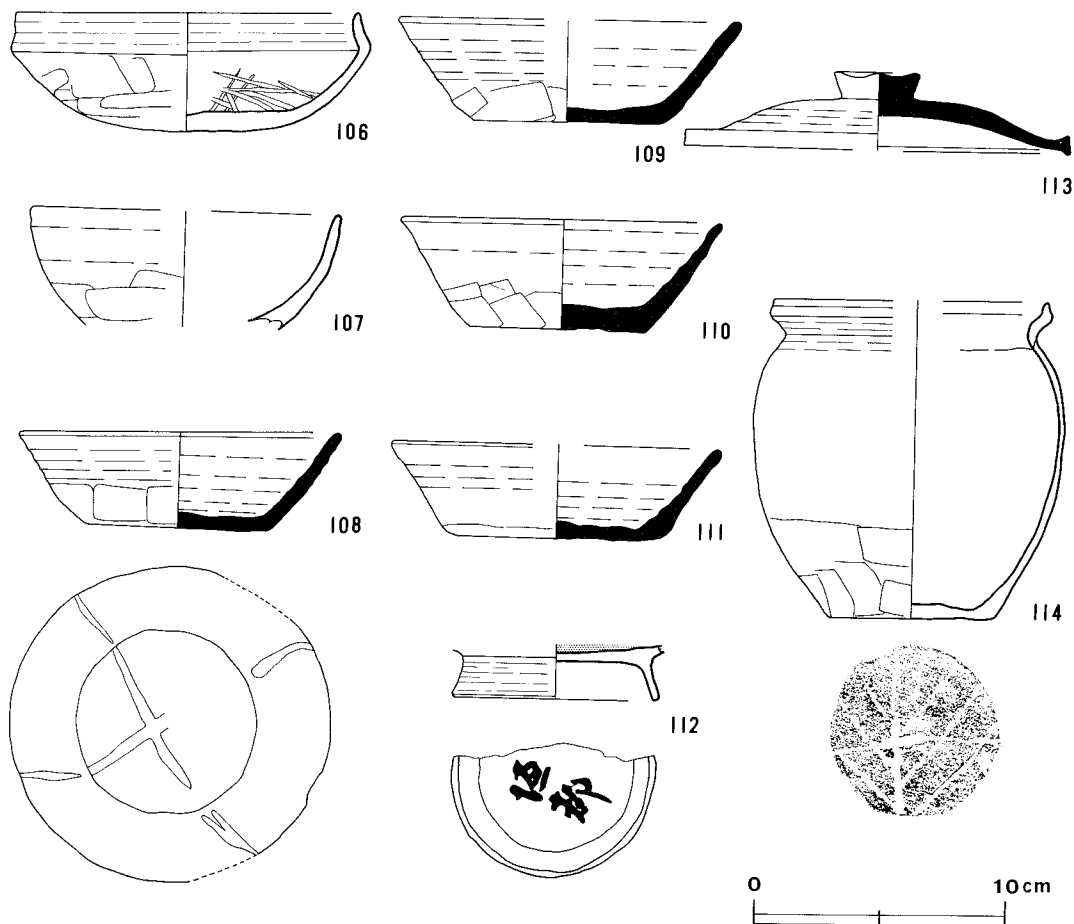
（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径22～28cm，深さ20～24cmを測り，いずれも支柱穴である。

（竈） 北壁中央部よりやや東寄りの壁を80cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが，袖部は遺存し，馬蹄形を呈する。燃焼部の内壁は，火熱を帯びて硬く焼土化している。焚口部から火床部はほぼ平坦で，煙道部は火床部から急角度で立ち上がる。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近から主に出土し，竈の天井部からは，110の須恵器坏，113の須恵器蓋が，覆土中層からは少量の土師器（坏）・須恵器（坏）の破片のほか，墨書された土師器高台付坏（底部に墨書）が出土している。

（所見） 本跡は，第22A号住居跡と同様，東西に長軸を有する竈を付設した住居跡であり，第22A号住居跡の埋没後に構築している。遺物・遺構の形態から8世紀後半に比定される住居跡である。



第49図 第22B号住居跡出土遺物実測図

第22B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 106	坏 土師器	A 13.8	底部は丸底で、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾した後外反気味に立ち上がる。底部外面はヘラ削り。内面は雑なヘラ磨き。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	60% 覆土
		B 4.9			
107	坏 土師器	A (12.3)	底部は平底で、体部は内彎しながら外傾して立ち上がり、口縁端部は尖る。底部及び体部下端はヘラ削り。口縁部内・外面はナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 明黄褐色 普通	40% 覆土
		B (4.7)			
108	坏 須恵器	A 12.7	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁端部は尖る。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰黄褐色 普通	90% 口縁部内面一部煤付着 覆土
		B 4.0			
		C 7.0			
109	坏 須恵器	A (13.4)	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部付近で僅かに外反して、口縁端部は丸味を有する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	50% 覆土
		B 4.1			
		C (7.4)			

第22B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 110	坏 須恵器	A 12.8	底部は平底で、体部は器厚を減しながら直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部は中央部を除きヘラ削り。体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 褐灰色 普通	100% 竈
		B 4.4			
		C 7.0			
111	坏 須恵器	A (13.0)	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	40% 器内面煤付着 覆土
		B 3.7			
		C 8.5			
112	高台付坏 土師器	B (2.2)	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台がつく。	砂粒 橙色 普通	20% 内面黒色処理、墨書「垣都」か。 覆土
		D 8.2			
		E 1.4			
113	蓋 須恵器	A (15.4)	天井部は浅く、なだらかに傾斜し口縁部に至る。口縁部は鋭く屈曲し、短く垂下する。つまみは腰高で中央部は凹む。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	60% 竈
		B 3.1			
		F 3.4			
		G 1.0			
114	甕 土師器	A (10.9)	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、端部は上方につまみ出されている。胴部下位はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 明赤褐色 普通	50% 底部に木葉痕 竈
		B 12.7			
		C 6.6			

第23号住居跡（第50図）

（位置） 調査区の東側，E7j₆区を中心に確認。

（重複） 第24号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.4×3.3mの方形。

（主軸方向） N-40°-E。

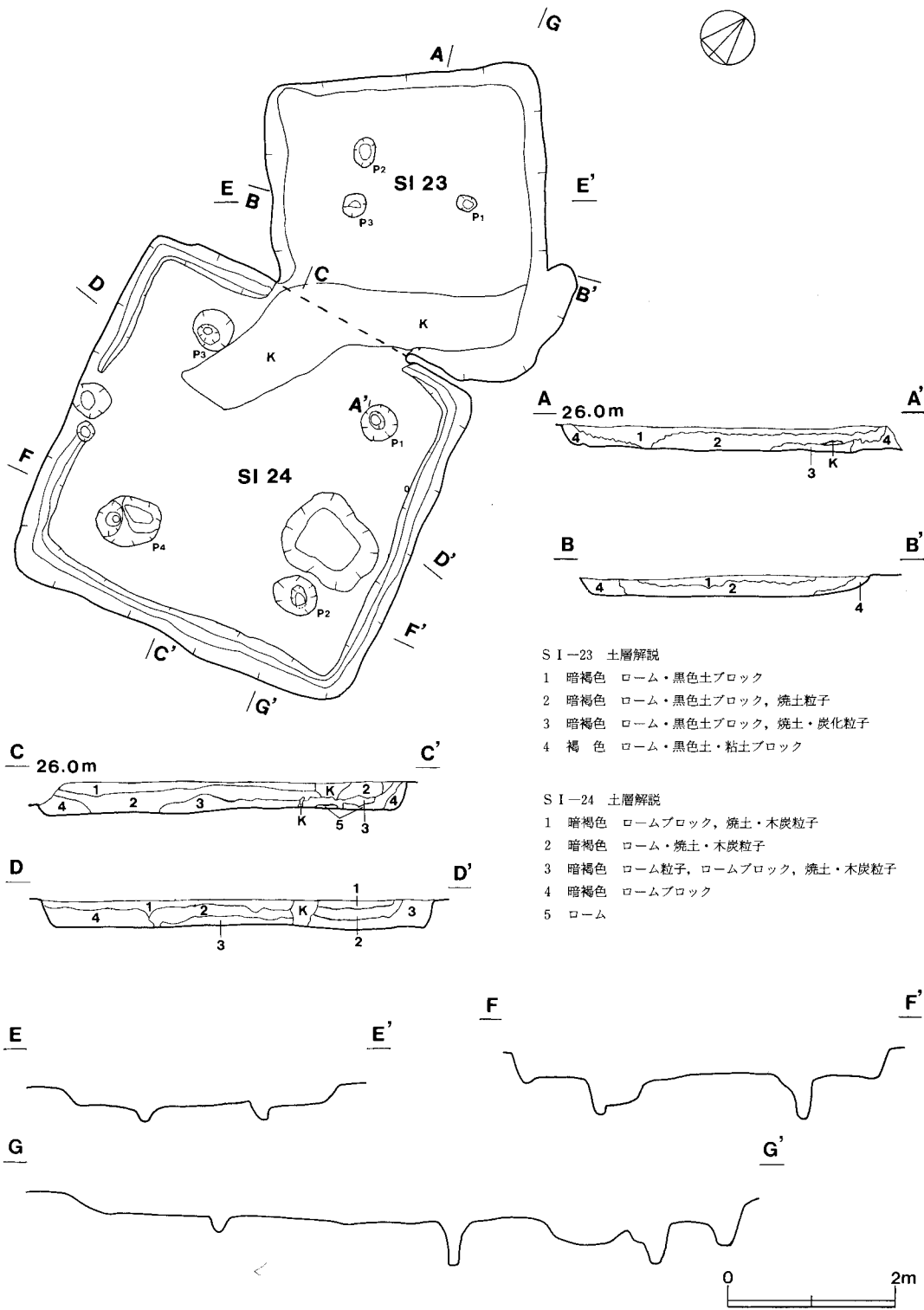
（床） 平坦で、北側から南側にかけて緩やかに傾斜する。硬く踏み固められ堅緻である。南壁際は、北東から南西に位置する溝によって破壊されている。

（ピット） 3か所（P₁～P₃）。掘り込みは、径24～36cm、深さ17～24cmを測り、支柱穴はP₁・P₃である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から土師器（坏・甕）の破片が少量流れ込みの様相を呈し出土しているが、本跡に伴う遺物ではない。

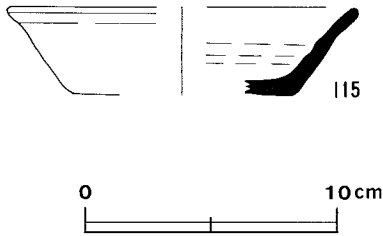
（所見） 本跡は、規模・形状・主軸方向・柱穴数が、第14A号住居跡とほぼ同一であることなどから12世紀に比定される住居跡である。



第50図 第23・24号住居跡実測図

第24号住居跡（第51図）

- （位置） 調査区の東側，D7a₆区を中心に確認。
- （重複） 第23号住居跡と重複。
- （規模と平面形） 4.6×4.5mの方形。
- （主軸方向） N-19°-W。
- （壁） 壁高は28～36cmで，外傾して立ち上がる。
- （壁溝） 幅14～20cm，深さ4～8cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。
- （床） 全体的に平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。P₁・P₂間は木根による攪乱で，さらに竈付近は溝によって破壊されている。
- （ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径24～80cm，深さ24～53cmを測る。支柱穴はP₁～P₄の4本である。
- （竈） 北壁中央部に粘土と砂で構築されていたと考えられるが，第23号住居跡，さらに溝によって大部分が破壊され，僅かに床面に火床部の痕跡が残る程度である。
- （覆土） 自然堆積。
- （遺物） 住居跡の東側の覆土中層から少量の土師器坏・甕片がまとまって出土している。
- （所見） 本跡は第23号住居跡に北壁中央部を壊されていることから，第23号住居跡よりも古く，遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



第51図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 115	坏 須恵器	A (13.8)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がり，口	砂粒・雲母 灰白色 普通	40% 覆土
		B 3.5	縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。		
		C (9.0)	底部はヘラ削り。体部外面は摩耗が著しい。		

第25A号住居跡（第52図）

- （位置） 調査区の東側，C7i₈区を中心に確認。
- （重複） 第25B号住居跡と重複。

(規模と平面形) 5.2×4.8mの方形。

(主軸方向) N-5°-W。

(壁) 壁高は20～32cmで、垂直に立ち上がる。東壁のほとんどは第25B号住居跡に削平され消失している。

(壁溝) 幅12～28cm、深さ7～10cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈する。北壁西側と重複部分から検出されない。

(床) 中央部付近は凸凹している。重複部分を除き堅緻である。

(ピット) 10か所(P₁～P₁₀)。掘り込みは、径24～60cm、深さ10～54cmを測る。主柱穴はP₁・P₈・P₉の3本で、P₁は重複する第25B号住居跡の床下から検出された。

(竈) 北壁中央部の壁を44cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。遺存状態は良好で、天井部・袖部が遺存している。燃烧部の内壁は、火熱を帯び焼土化している。焚口部から火床部は平坦で、煙道部は火床部から急角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈前面及び南西コーナー付近の覆土上層から土師器(甕)・須恵器(坏・甕)の破片が少量出土している。

(所見) 本跡は、北東部を第25B号住居跡を破壊している状況から、本跡の方が新しい住居跡である。

第25B号住居跡(第52図)

(位置) 調査区の東側、C7i₉区を中心に確認。

(重複) 第25A号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.5×2.6mの長方形。

(主軸方向) N-17°-W。

(壁) 壁高は40cmで、垂直に立ち上がる。

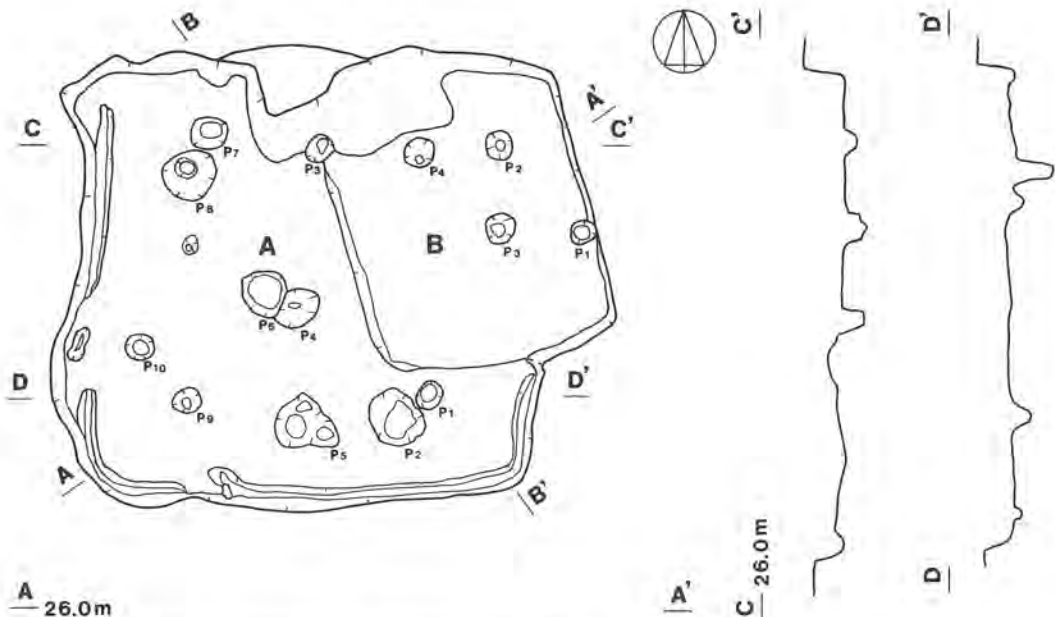
(床) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。中央部は一段低くなる。

(ピット) 4か所(P₁～P₄)。掘り込みは、径16～32cm、深さ15～30cmを測り、主柱穴は不明である。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 土師器(甕)の破片が覆土中層から数点出土しているが、流れ込みとおもわれ、本跡に伴う遺物ではない。

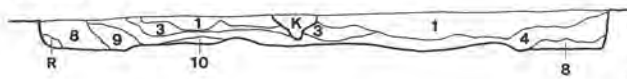
(所見) 本跡は、第25A号住居跡に破壊されている。竈などの内部施設は概に破壊されて4本柱の小型の住居跡である。



A 26.0m

A'

C 26.0m



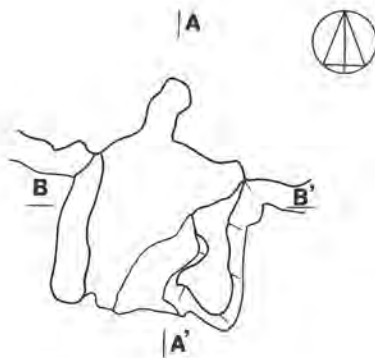
S I-25 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 2 暗褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土粒子
- 4 褐色 ロームブロック, 焼土粒子
- 5 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 木炭粒子
- 6 褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 7 暗褐色 黒色土, ローム粒子, ロームブロック, 木炭粒子
- 8 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 9 暗褐色 ロームブロック
- 10 褐色 ローム粒子, ロームブロック多

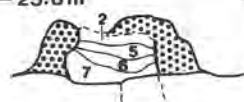
B



B'



B 25.8m



A 25.8m



S I-26 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 2 褐色 ローム粒子, 砂粒
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子, 砂粒
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子, 灰
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 6 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 7 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 8 褐色 砂粒
- 9 褐色 ローム粒子, 砂粒
- 10 暗褐色 ローム粒子, 砂粒
- 11 褐色 ローム・焼土粒子
- 12 褐色 焼土粒子・砂粒
- 13 にぶい赤褐色 焼土ブロック, 砂粒
- 14 暗赤褐色 焼土ブロック



第52図 第25 A・B号住居跡・竈実測図

第26号住居跡（第53図）

（位置） 調査区の東側，C6a₉区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.2×3.2mの方形。

（主軸方向） N-27°-W。

（壁） 壁高は40～56cmを測り，東壁は外傾し，その他の壁は垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10～16，深さ2～10cmを測り，掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

（床） 平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 3か所（P₁～P₃）。掘り込みは，径16～32cm，深さ17～41cmを測る。主柱穴はP₂・P₃の2本である。P₁は遺構のほぼ中央に位置し，掘り込みは深く，内面は堅緻で主柱穴とも考えられる。

（竈） 北壁中央部からやや西寄りの壁を28cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。遺存状態は非常に悪く，天井部・袖部は検出されない。火床部は火熱を帯び赤色に硬化し，煙道部は火床部から急角度に立ち上がる。

（覆土） 自然堆積。

（所見） 本跡は，本跡に伴う遺物は検出されないことから時期は不明である。

第27号住居跡（第54図）

（位置） 調査区の東側，E7j₉区を中心に確認。

（重複） 南西コーナー部で第37号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.0×3.0mの方形。

（主軸方向） N-35°-W。

（壁） 壁高は28cmで，北壁は垂直に，その他の壁は外傾して立ち上がる。

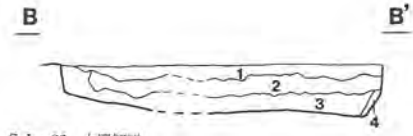
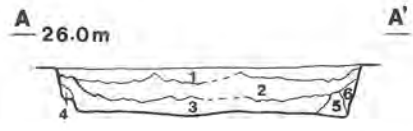
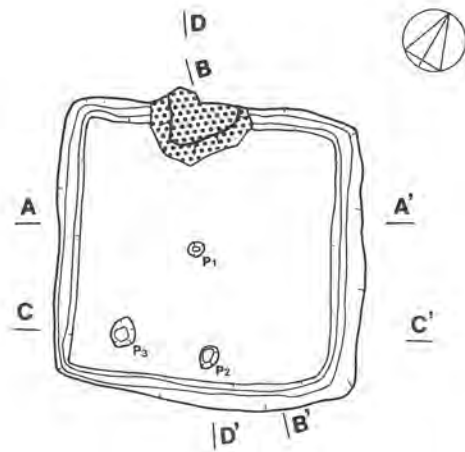
（床） 平坦で，硬く踏み固められ堅緻であるが，東壁付近は攪乱され窪んでいる。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径60～72cm，深さ50～52cmを測り，主柱穴はP₁・P₂の2本である。

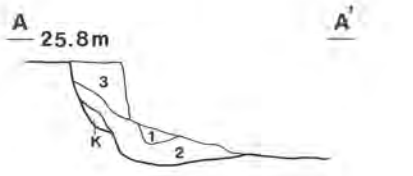
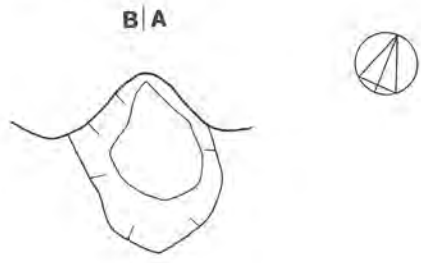
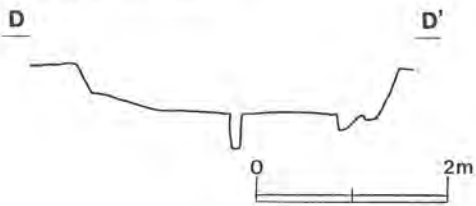
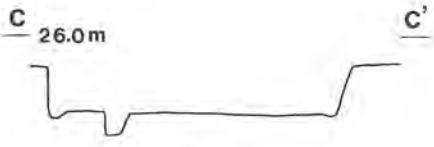
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から極少量の土師器（坏）・須恵器（坏）の破片が出土している。

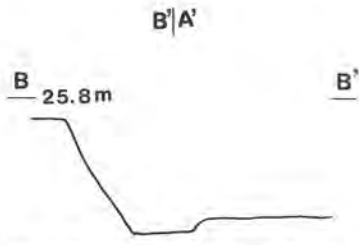
（所見） 第37号住居跡の床面を一部掘り込んで，床を構築していることから本跡の方が新しい。本跡は，遺構の形態から判断して12世紀に比定される住居跡である。



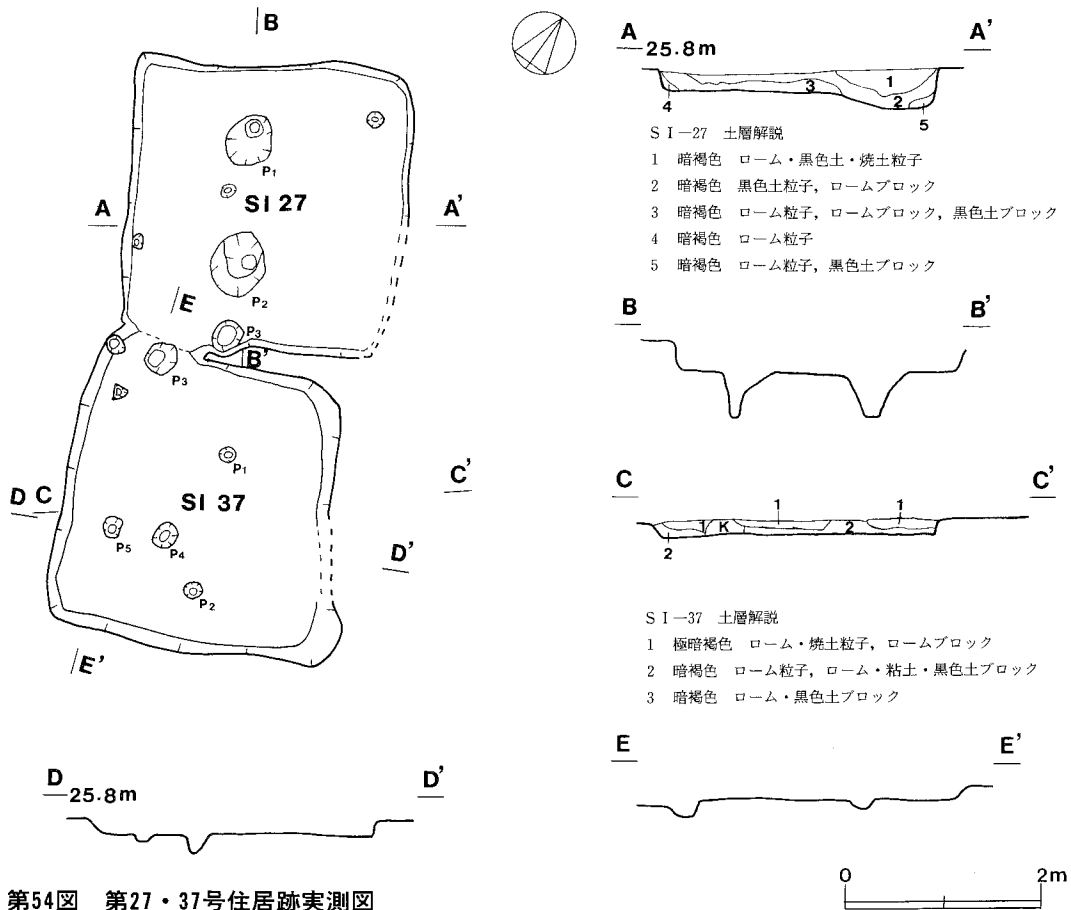
- S I - 26 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
 - 2 褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
 - 3 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土, 木炭粒子
 - 4 褐色 ローム・焼土ブロック
 - 5 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
 - 6 褐色 ロームの崩落



- S I - 26 土層解説
- 1 暗褐色 ローム, 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 2 暗褐色 焼土ブロック, 木炭, 木炭粒子
 - 3 極暗赤褐色 ローム粒子, ローム・焼土ブロック



第53図 第26号住居跡・竈実測図



第54図 第27・37号住居跡実測図

第28号住居跡 (第55図)

(位置) 調査区の東側, C8h₁区を中心に確認。

(平面形) 3.2×3.2mの方形。

(主軸方向) N-43°-W。

(壁) 壁高は30~40cmを測り, 南壁が外傾するほかは垂直に立ち上がる。

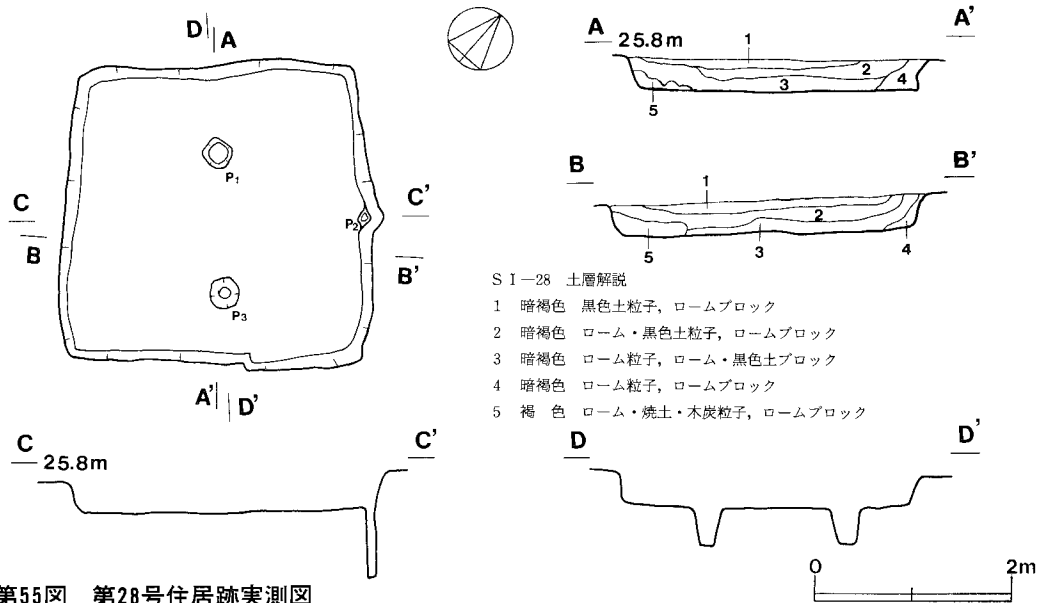
(床面) 平坦で, 特に南西部の床面が堅緻である。

(ピット) 3か所(P₁~P₃)。掘り込みは, 径12~36cm, 深さ38~75cmを測る。支柱穴はP₁・P₃である。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 北壁際の覆土上層から流れ込みと思われる土師器(坏・甕)・須恵器(坏)の破片が数点出土しているだけである。

(所見) 竈はもたないが, P₁・P₂間の床面に炭化物の薄い堆積層が検出され, 火を使用した痕跡と考えられる。本跡は, 遺構の形態・遺物から判断して12世紀に比定される住居跡である。



第55図 第28号住居跡実測図

第29号住居跡 (第56図)

(位置) 調査区の東側, C8g₁区を中心に確認。

(重複) 第30B号住居跡と重複。

(規模と平面形) 2.6×2.5mの方形。

(主軸方向) N-49°-W。

(壁) 壁高は28~32cmを測り, 北・南壁が外傾するほかは垂直に立ち上がる。

(床) 東側は, 第30B号住居跡を埋め戻して築いた貼り床である。全体的に硬く踏み固められ堅緻である。

(ピット) 3か所 (P₁~P₃)。掘り込みは, 径24~28cm, 深さ16~24cmを測る。

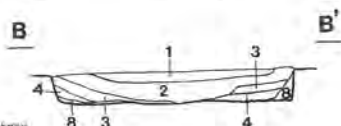
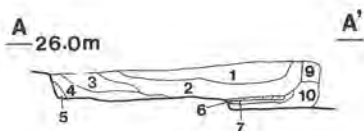
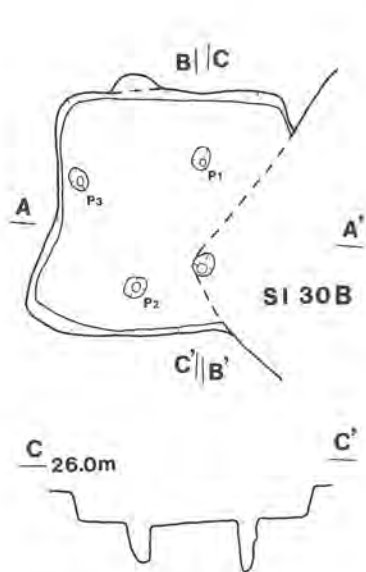
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 北壁際の覆土中層から, 須恵器 (長頸壺) の破片が流れ込みの様相を呈して出土している。

(所見) 本跡は, 第30B号住居跡を掘り込んで構築している状況から, 本跡の方が新しい。本跡の遺構の形態から12世紀に比定される住居跡である。

第29号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 116	長頸壺 須恵器	A (10.4) B (2.6)	口縁部は大きく外反し, 斜め下方向に屈曲する。端部は外上方に軽くつまみ出されている。外面は横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	5% 器内面に自然釉 覆土



SI-29 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物
- 2 暗褐色 ローム小・中ブロック, 炭化粒子
- 3 黒褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子, 炭化物
- 5 赤褐色 地山
- 6 にぶい赤褐色 ロームブロック, 焼土・炭化粒子
- 7 暗赤褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子
- 8 にぶい赤褐色 ローム粒子
- 9 暗褐色 ローム中・焼土ブロック
- 10 暗褐色 ローム小ブロック, 焼土・炭化粒子



第56図 第29号住居跡実測図



第57図 第29号住居跡出土遺物実測図

第30 A号住居跡 (第58図)

(位置) 調査区の東側, C8f₁区を中心に確認。

(重複) 第30 B号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.2×2.7mの方形。

(主軸方向) N-16°-W。

(壁) 壁高は16~28cmを測り, 外傾して立ち上がる。

(床) 北から南に緩やかに傾斜し, 硬く踏み固められ堅緻である。南西部は, 第30 B号住居跡と重複しており軟弱である。

(竈) 北壁中央部を32cm程壁外へ掘り込み, 粘土と砂で構築。異存状態は悪く, 天井部は崩落し袖部は欠損している。火床部は赤色に硬化して平坦である。煙道部は緩やかな角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈付近から土師器(坏・甕)・須恵器(坏・蓋)の破片が集中して出土している。竈の燃焼部からは, 土師器小型甕を逆位に置き, その上に土師器坏を3点伏せて重ねた状態で出土して

おり、これらは、支脚として用いられたものと捉えられる。

(所見) 本跡は、柱穴・壁溝がみられない竈をもった小型の住居跡である。本跡は第30B号住居跡の北壁西側を壊して構築しており、本跡の方が新しい。本跡は遺構の形態・遺物から8世紀後半に比定される住居跡である。

第30B号住居跡 (第58図)

(位置) 調査区の東側、C8g₂区を中心に確認。

(重複) 第29号・第30A号住居跡と重複。

(規模と平面形) 5.4×5.3mの方形。

(主軸方向) N-10°-W。

(壁) 壁高は40~60cmを測り、垂直に立ち上がる。北壁西側は第30A号住居跡に、西壁南側は第29号住居跡に壊され消失している。

(壁溝) 北壁東側には検出されないが、幅10~24cm、深さ6~8cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈する。

(床) 平坦で硬く踏み固められ堅緻である。P₄の北側は、攪乱され窪んでいる。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは、径48~72cm、深さ32~68cmを測り、全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を56cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが袖部の一部が残る。燃焼部の内壁は火熱を帯び赤色に硬化し、焚口部から火床部にかけては緩やかな角度で立ち上がる。

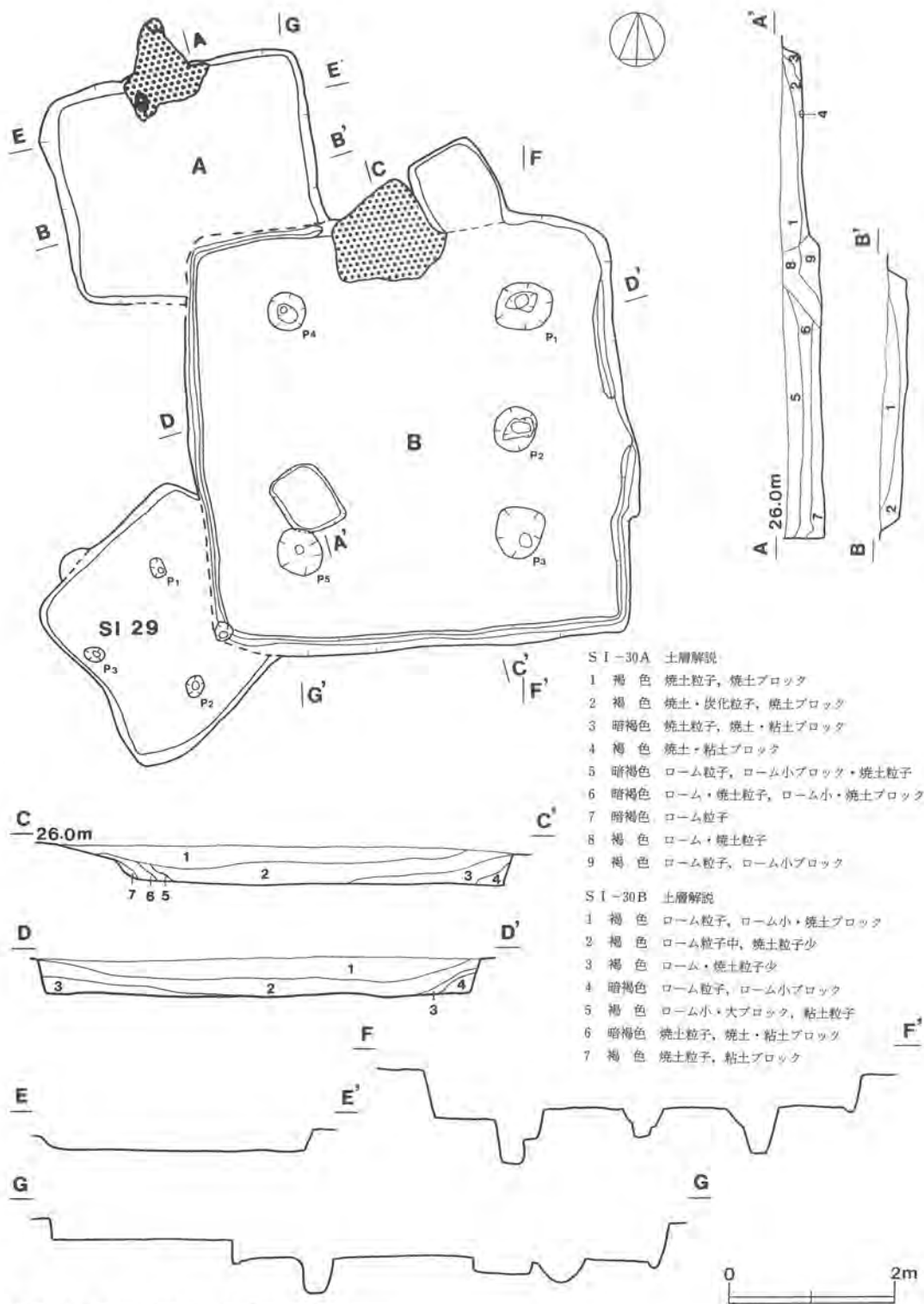
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 南東コーナー付近の覆土下層から中層にかけて、土師器(坏・甕)・須恵器(坏・甕・蓋)の破片が流れ込みの様相を呈して出土している。

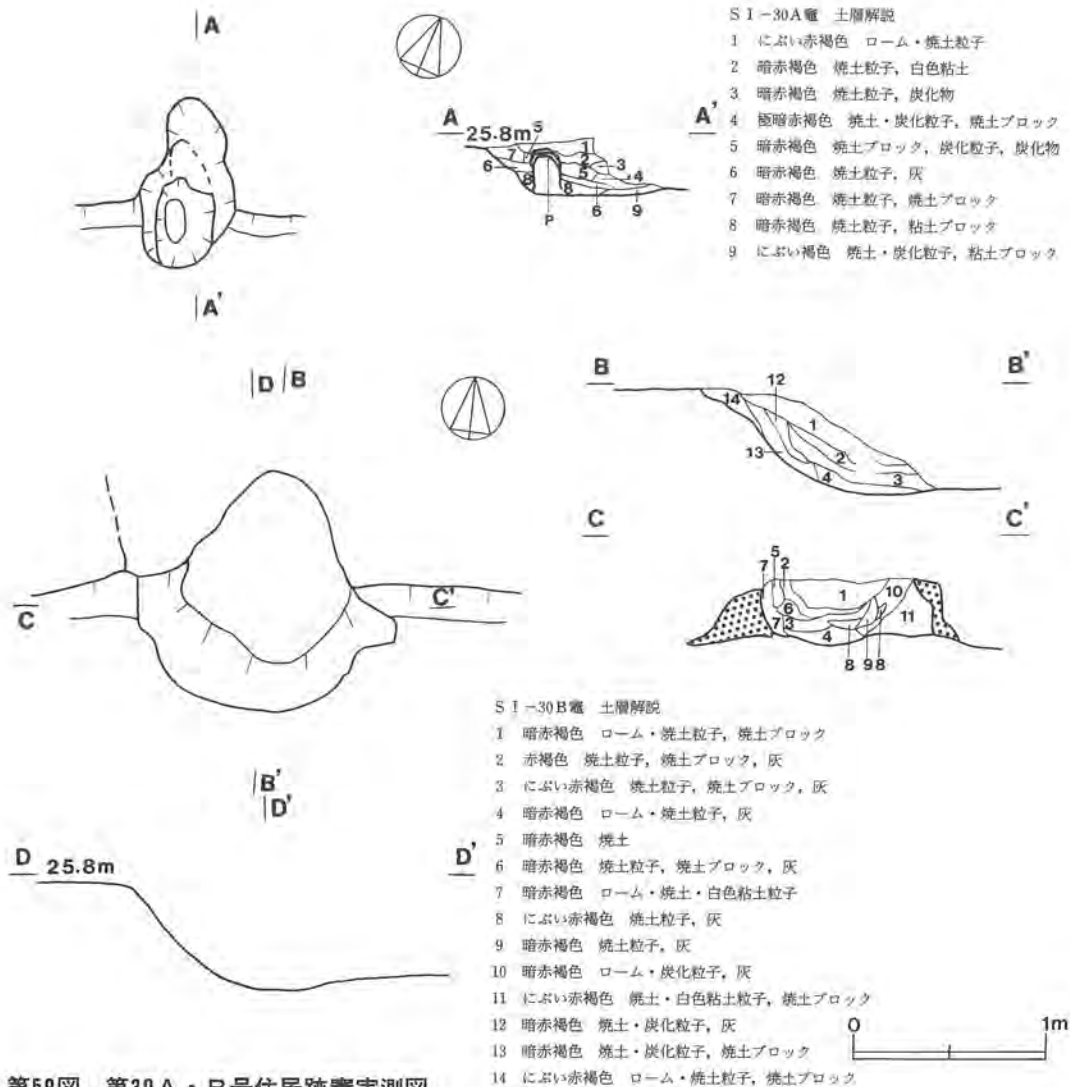
(所見) 本跡と第29号・第30A号住居跡の新旧関係は、本跡が最も古く、次に第30A号住居跡で第29号住居跡が最も新しい。本跡は遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第30号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 117	坏 土師器	A 12.6	底部は平底で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部は回転ヘラ削り後周辺部のみヘラ削り。体部下端は回転ヘラ削り。 器内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	90% 内面黒色処理 竈
		B 3.7			
		C 7.6			
118	坏 土師器	A 13.1	底部は平底で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。底部及び体部下端はヘラ切り後ナデ。体部内面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 良好	80% 竈
		B 4.4			
		C 6.2			



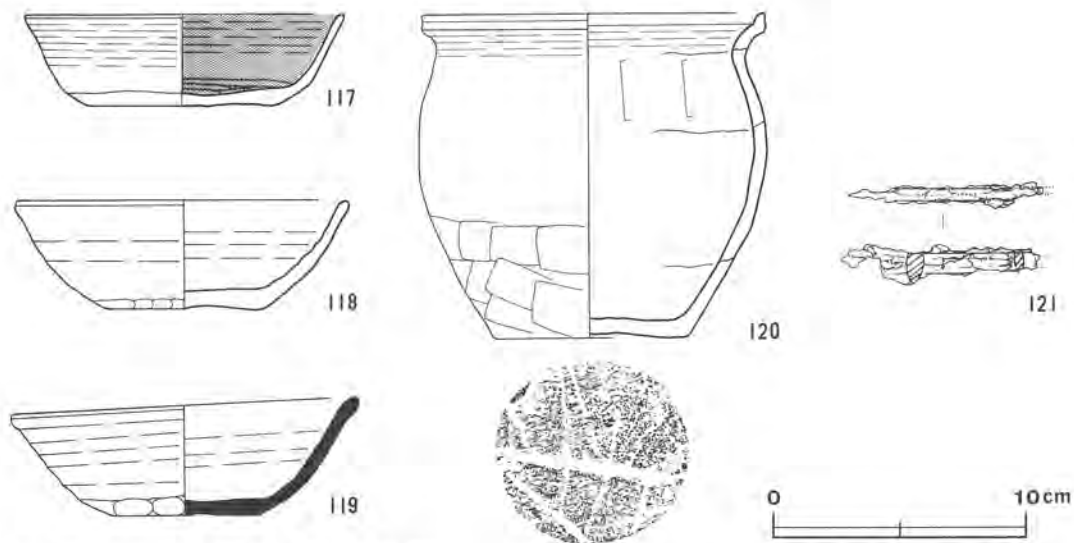
第58図 第29・30A・B号住居跡実測図



第59図 第30A・B号住居跡竈実測図

第30号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 119	須恵器	A 13.7	底部は平底で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端は一方のヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 黒褐色 普通	100%
		B 4.8			
		C 6.0			
120	甕 土師器	A 13.6	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲し、端部は外上方につまみ出される。胴部下位はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 暗赤褐色 普通	90% 底部に木葉痕 竈
		B 13.0			
		C 7.8			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
121	刀子	全長(7.8) 幅 1.2 厚さ 0.6	刀子の基部と刃部の破片。 断面はV字状と長方形を呈する。		



第60図 第30号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡 (第61図)

(位置) 調査区の東側, C8h₂区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.7×4.4mの方形。

(主軸方向) N-7°-W。

(壁) 壁高は20~32cmを測り, 外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅12~24cm, 深さ4~10cmを測り, 掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床) 平坦で, 硬く踏み固められ, 特に支柱穴の内側が堅緻である。

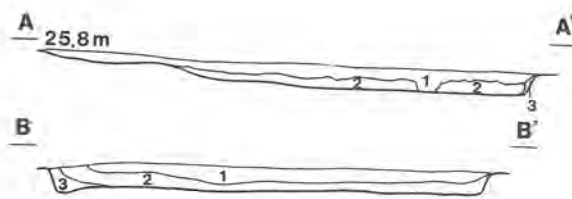
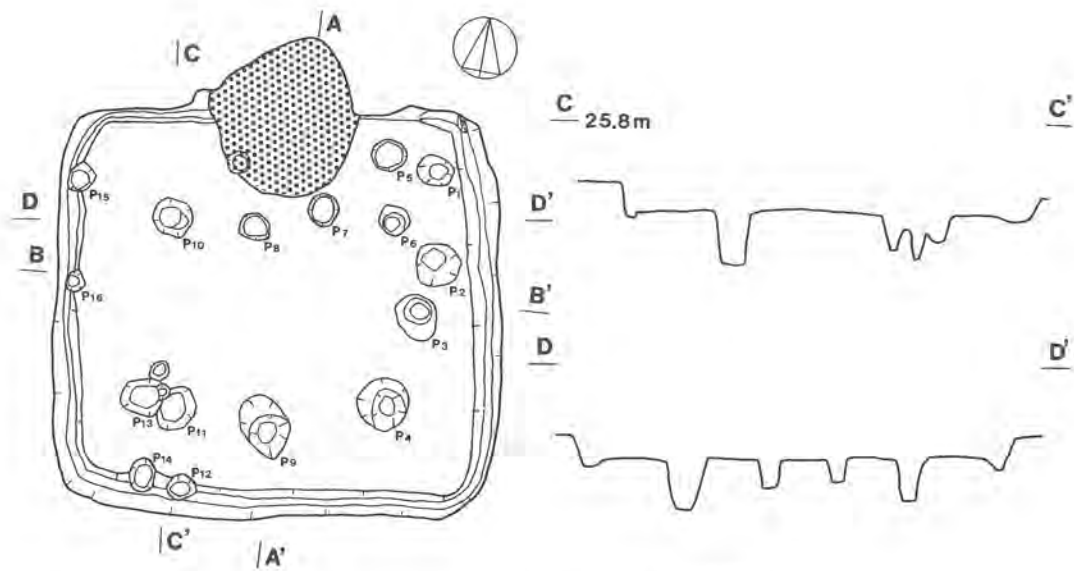
(ピット) 16か所 (P₁~P₁₆)。径24~72cm, 深さ20~56cm。支柱穴はP₄・P₆・P₉・P₁₀・P₁₁の5本である。

(竈) 北壁中央部を12cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂で構築。天井部は崩落している。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がる。

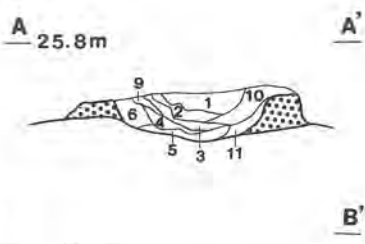
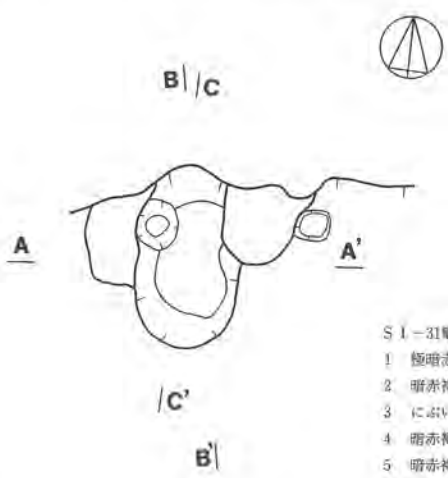
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈付近に, 少量の土師器 (坏) の破片が出土している。

(所見) 本跡は遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。



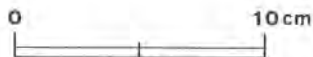
- S1-31 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土, 木炭
 - 2 暗褐色 ロームブロック, 焼土, 木炭
 - 3 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック



- S1-31 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム粒子
 - 2 暗赤褐色 焼土・白色粘土粒子
 - 3 にぶい赤褐色 焼土粒子, 白色粘土
 - 4 暗赤褐色 焼土粒子, 灰
 - 5 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 6 暗赤褐色 焼土・白色粘土粒子
 - 7 暗赤褐色 焼土粒子
 - 8 暗赤褐色 焼土・白色粘土粒子, 粘土ブロック
 - 9 にぶい褐色 焼土粒子, 白色粘土
 - 10 褐色 焼土粒子, 白色粘土
 - 11 にぶい赤褐色 砂礫
 - 12 極暗赤褐色 炭化粒子, 砂礫
 - 13 暗赤褐色 焼土・炭化・白色粘土粒子



第61図 第31号住居跡・竈実測図



第62図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 122	坏 土師器	A (10.8) B (4.4)	体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反気味に内傾して立ち上がる。 口縁部内・外面は横ナデ、体部外面は剝離が著しい。	砂粒・砂礫 黒褐色 普通	20% 内面黒色処理 覆土

第32号住居跡（第63図）

（位置） 調査区の東側，C8h₅区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.2×4.0mの方形。

（主軸方向） N-27°-W。

（壁） 壁高は32～44cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅10～14cm，深さ2～6cmを測り，掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

（床） 平坦で，主柱穴の内側が特に硬く踏み固められ堅緻である。

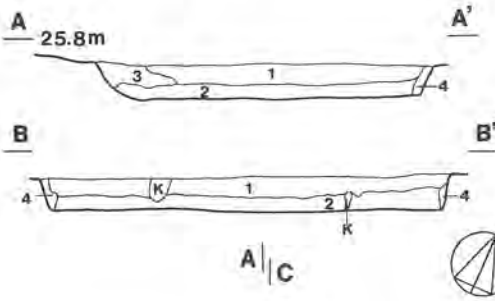
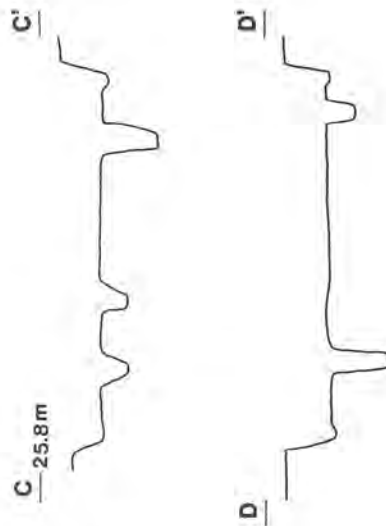
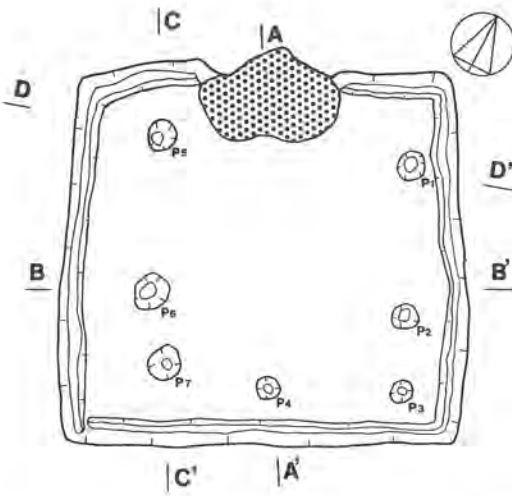
（ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは，径24～40cm，深さ16～64cmを測り，全て主柱穴である。

（竈） 北壁中央部の壁を20cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが，袖部の遺存状態は良く，馬蹄形を呈する。左袖部付近から袖の芯として用いられた土師器甕片が多量に出土している。煙道部は火床部から緩やかな角度で，煙出口は急角度で立ち上がる。

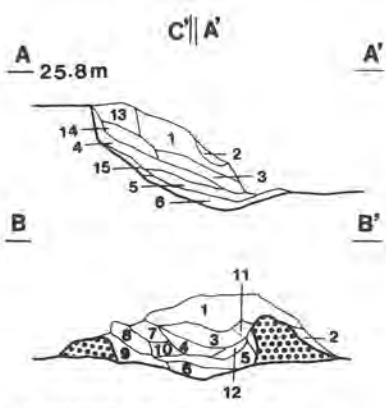
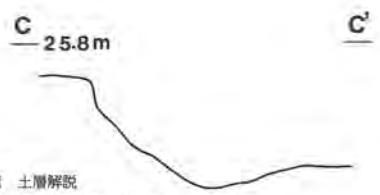
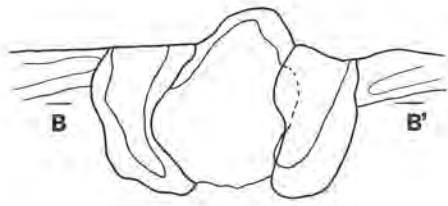
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 北西コーナー付近の覆土から，投棄された状態で，土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）等の破片が出土している。竈天井部の補強材として用いられた，土師器（甕）・須恵器（坏）の破片が出土している。

（所見） 当遺跡の住居跡の中では中型の住居跡であるが，遺構の形態から8世紀後半に比定される住居跡である。



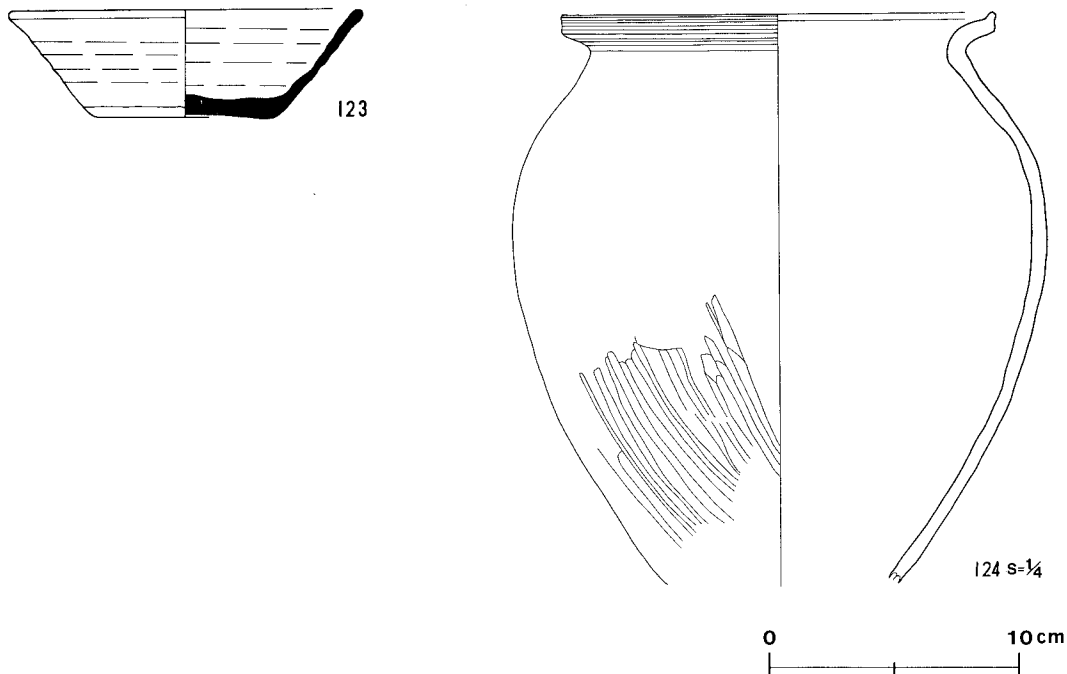
- S I - 32 土層解説
- 1 褐色 ローム小ブロック, 焼土・木炭粒子
 - 2 褐色 ローム中ブロック, 焼土・木炭粒子
 - 3 褐色 ローム粒子, 焼土, 木炭
 - 4 褐色 ローム・黒色土ブロック
- 0 2m



- S I - 32 土層解説
- 1 褐色 白色粘土粒子, 砂礫
 - 2 にぶい赤褐色 焼土・炭化, 白色粘土粒子
 - 3 褐色 白色粘土粒子
 - 4 にぶい赤褐色 焼土ブロック, 白色粘土粒子
 - 5 暗赤褐色 焼土粒子, 灰
 - 6 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 灰
 - 7 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 砂礫
 - 8 にぶい赤褐色 白色粘土粒子, 粘土ブロック
 - 9 褐色 ローム粒子
 - 10 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 灰
 - 11 褐色 白色粘土粒子, 砂礫
 - 12 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 13 暗赤褐色 白色粘土粒子
 - 14 暗赤褐色 白色粘土粒子, 砂礫
 - 15 暗赤褐色 焼土・白色粘土粒子



第63図 第32号住居跡・竈実測図



第64図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 123	坏 須恵器	A 14.3	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部は一方方向のヘラ削り。 体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	80% 竈
		B 4.4			
		C 7.3			
124	甕 土師器	A 22.9 B (30.3)	底部欠損。胴部は内彎しながら外傾して立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。 頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部は上方につまみ出されている。 胴部外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナブ。	砂粒・砂礫 灰白色 普通	40% 竈

第34A号住居跡 (第65図)

(位置) 調査区の東側、D8a₂区を中心に確認。

(重複) 西側部で第34B号住居跡と重複。

(規模と平面形) 4.6×4.3mの方形。

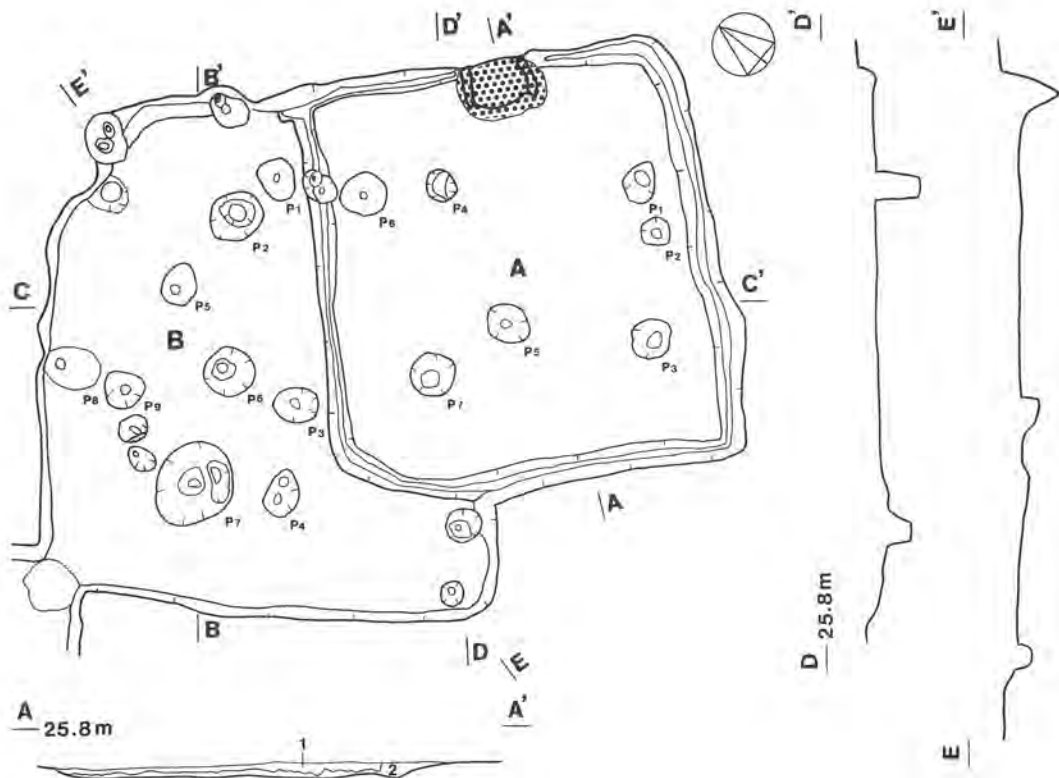
(主軸方向) N-45°-E。

(壁) 壁高は20~24cmを測り、外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅10~18cm、深さ4~6cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

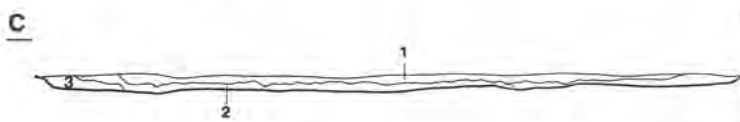
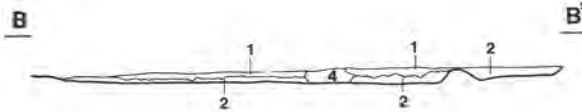
(床) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

(ピット) 7か所 (P₁~P₇)。掘り込みは、径32~48cm、深さ27~54cmを測り、支柱穴として



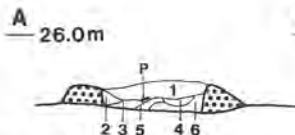
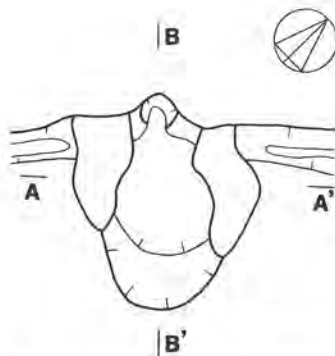
A 25.8m

D 25.8m



S I - 34 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 2 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子, ロームブロック
- 3 褐色 ロームブロック, 木炭
- 4 褐色 黒色土, ロームブロック, 焼土粒子



A' B 26.0m B'

S I - 34 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 2 褐色 ローム・焼土粒子
- 3 におい赤褐色 ローム・焼土粒子
- 4 暗赤褐色 焼土粒子
- 5 赤褐色 ローム中ブロック, 焼土粒子
- 6 褐色 焼土粒子



第65図 第34 A・B号住居跡・竈実測図

捉えられるのは、P₃・P₇の2本で、その他は不明。

(竈) 北壁中央部を14cm程壁外へ掘り込んで、粘土・砂で構築。天井部の一部と袖部は遺存しており、焚口部から燃焼部・煙道部にかけての内壁は火熱を帯び、赤色に硬化している。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 住居跡の西側覆土中層から土師器(甕)・須恵器(坏)の破片が数点出土している。

(所見) 本跡は第34B号住居跡を掘り込んで構築している状況から本跡の方が新しい。本跡は遺構の形態・遺物の状況から7世紀後半に比定される住居跡である。

第34B号住居跡(第65図)

(位置) 調査区の東側, C8j₁区を中心に確認。

(重複) 南東部で第34A号住居跡と重複。

(規模と平面形) (5.6)×4.9mの長方形。

(主軸方向) N-34°-E。

(壁) 壁高は16~24cmを測り、外傾して立ち上がる。

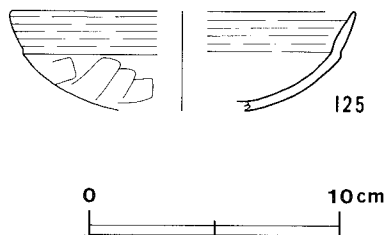
(床) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

(竈) 北壁中央部の壁際に燃焼部と考えられる焼土の堆積する部分が検出されただけで、天井部・袖部等は確認されなかった。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 第34A号住居跡との重複部の覆土上層から土師器(坏・甕)・須恵器(坏)の破片が極少量出土している。

(所見) 本跡は、第34A号住居跡に掘り込まれている状況から、本跡の方が古い。本跡は、遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。



第66図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 125	坏 土師器	A (13.6) B (4.0)	底部は丸底で、口縁部との境に縷をもつ。口縁部は外傾して立ち上がり、端部は尖る。底部はヘラ削り、口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	10% 覆土

第36号住居跡（第67図）

（位置） 調査区の東側，D8b₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 6.4×6.1mの長方形。

（主軸方向） N-32°-E。

（壁） 壁高は10～12cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅8～20cm，深さ2～6cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 全体的に平坦で，竈の前面が特に硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 6か所（P₁～P₆）。掘り込みは，径40～52cm，深さ19～58cmを測る。支柱穴はP₁～P₃・P₅・P₆の5本である。

（竈） 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが，袖部の遺存状態は比較的良好である。焚口部から燃焼部・煙道部にかけての内壁は，火熱を帯び赤色に硬化している。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近に土師器（坏・甕）等の破片がまとまって出土している。

（所見） 本跡は，本跡に伴う遺物が小破片のため，時期は不明である。

第37号住居跡（第54図）

（位置） 調査区の東側，D6j₀区を中心に確認。

（重複） 北東コーナー部で第27号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.3×3.0mの方形。

（主軸方向） N-25°-W。

（壁） 壁高は16cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床面） 平坦で，中央部が特に硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径16～28cm，深さ19～21cmを測り，いずれも支柱穴である。

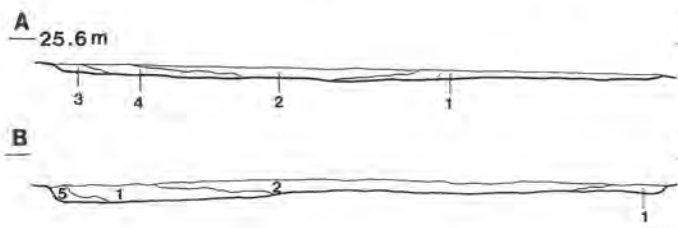
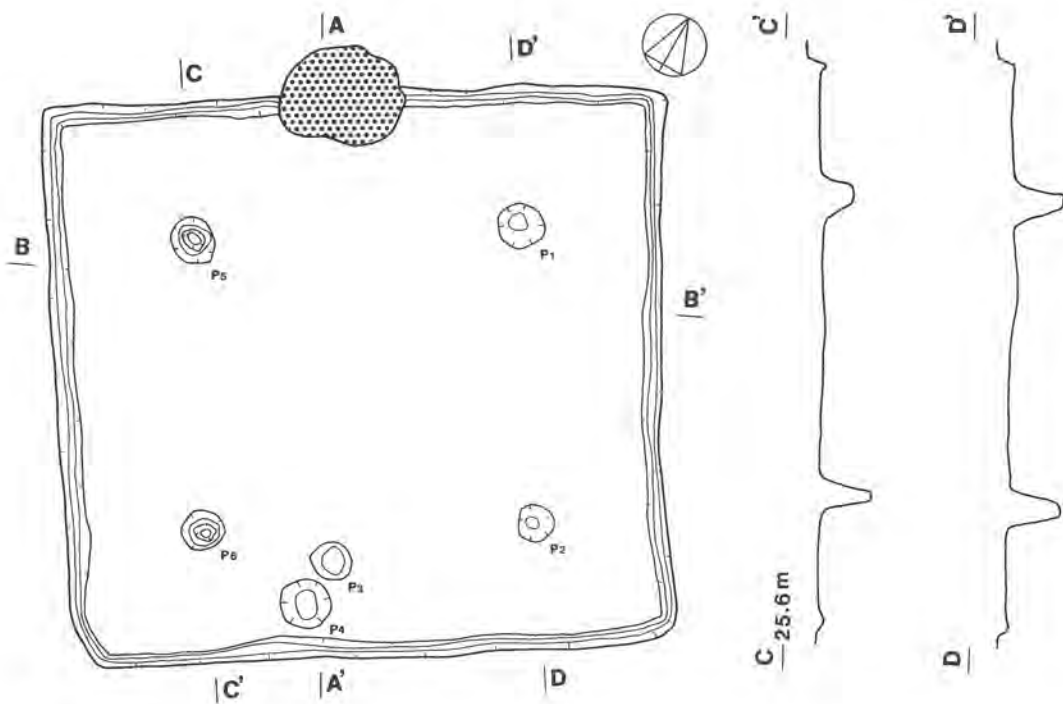
（覆土） 自然堆積。

（所見） 本跡は，第27号住居跡に掘り込まれている状況から本跡の方が古く，小堅穴住居跡で，12世紀に比定される住居跡である。

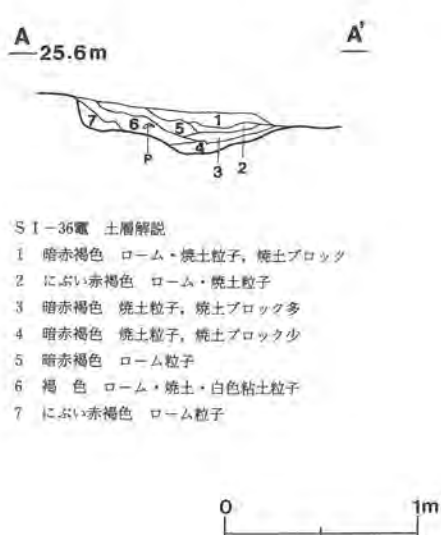
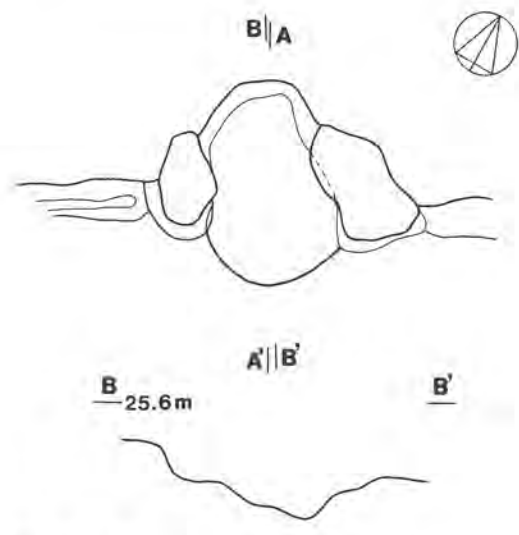
第38号住居跡（第68図）

（位置） 調査区の東側，D7a₉区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.4×4.1mの方形。

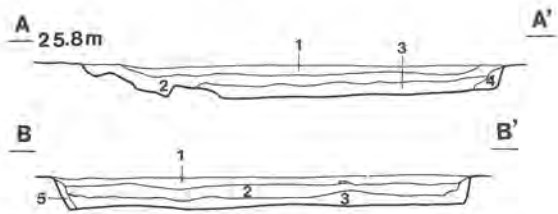
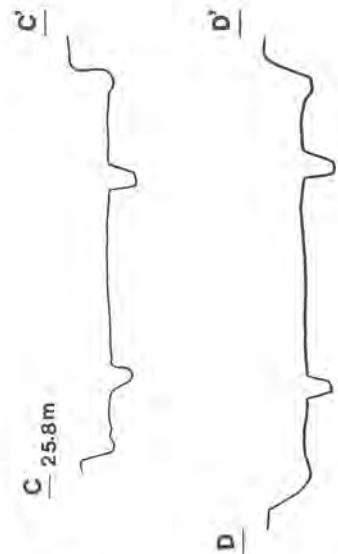
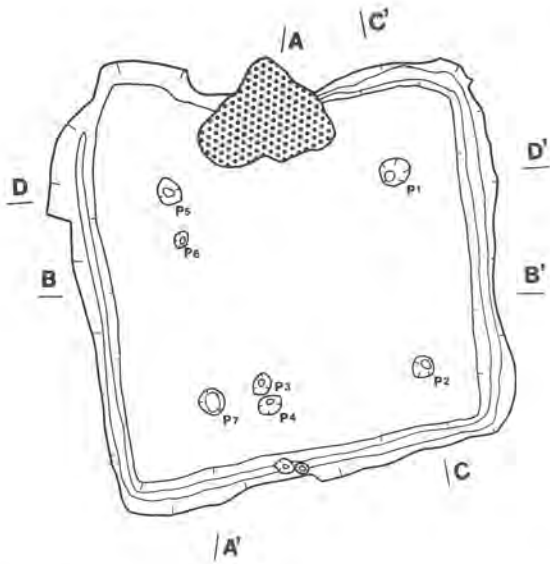


- A'** S I - 36 土層解説
- 1 暗褐色 ローム・黒色土ブロック
 - 2 暗褐色 ローム・焼土粒子
 - 3 暗褐色 ロームブロック、焼土・木炭粒子
 - 4 褐色 焼土・木炭粒子、粘土、砂
 - 5 暗褐色 ローム粒子、ロームブロック
- 0 2m

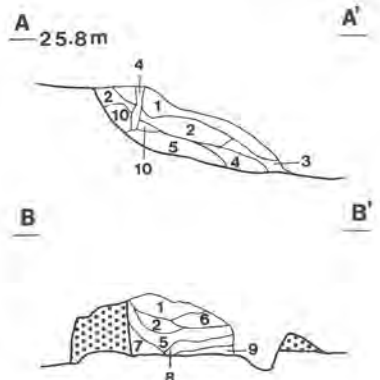
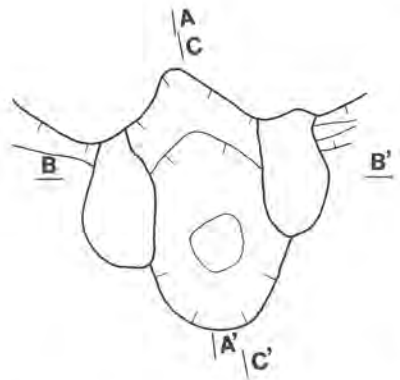


- S I - 36 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム・焼土粒子、焼土ブロック
 - 2 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子
 - 3 暗赤褐色 焼土粒子、焼土ブロック多
 - 4 暗赤褐色 焼土粒子、焼土ブロック少
 - 5 暗赤褐色 ローム粒子
 - 6 褐色 ローム・焼土・白色粘土粒子
 - 7 にぶい赤褐色 ローム粒子

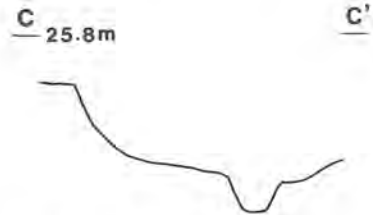
第67図 第36号住居跡・竈実測図



- SI-38 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子, 焼土粒子多, 炭化粒子中
 - 2 暗褐色 ローム粒子, 焼土粒子中, 炭化粒子中
 - 3 暗褐色 ローム粒子
 - 4 褐色 ローム地山
 - 5 暗褐色 ローム中ブロック



- SI-38竈 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム・焼土・白色粘土粒子
 - 2 におい褐色 白色粘土粒子
 - 3 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
 - 4 極暗褐色 ローム・焼土・白色粘土粒子, ローム小ブロック
 - 5 暗赤褐色 焼土粒子, 白色粘土
 - 6 暗赤褐色 白色粘土粒子, 白色粘土ブロック多
 - 7 暗暗褐色 白色粘土粒子, 白色粘土ブロック中
 - 8 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 9 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 10 暗暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子



第68図 第38号住居跡・竈実測図

(主軸方向) N-26°-W。

(壁) 壁高は28~40cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅16~28cm、深さ4~12cmを測り、掘り込み断面形状はU状を呈し全周。

(床) ほぼ平坦で、特に支柱穴の内側が硬く踏み固められ堅緻である。

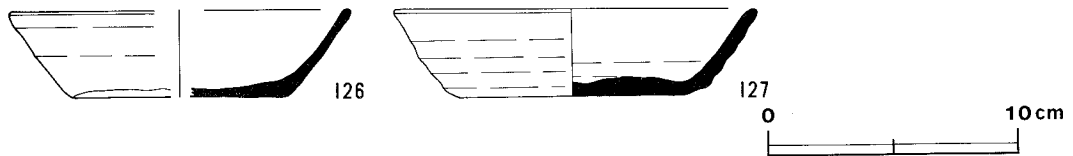
(ピット) 7か所。掘り込みは、径24~32cm、深さ47~73cmを測り、支柱穴はP₁・P₂・P₄・P₅・P₇の5本である。

(竈) 北壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂で構築。燃焼部の火床面は、深く掘り窪められているが、燃焼部から煙道部にかけては緩やかな角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土中層から土師器(坏・甕)・須恵器(坏)等の破片が出土している。

(所見) 本跡は遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



第69図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 126	坏 須恵器	A (13.8)	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 褐灰色 普通	30% 覆土
		B 3.5			
		C (8.8)			
127	坏 須恵器	A 14.6	底部は平底で、体部との境は明瞭ではない。体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	80% 覆土
		B 3.4			
		C 9.2			

第39号住居跡(第70図)

(位置) 調査区の東側、D7e₉区を中心に確認。

(重複) 北東コーナー一部で第88号住居跡と重複。

(規模と平面形) 5.0×5.0mの方形。

(主軸方向) N-42°-W。

(壁) 壁高は24~34cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅16~22cm、深さ6~12cmを測り、掘り込み断面形状はU状を呈し全周。

(床面) 平坦で、硬く踏み固められ堅緻である。

(ピット) 4か所(P₁~P₄)。掘り込みは、径52~64cm、深さ21~26cmを測り、全て支柱穴で

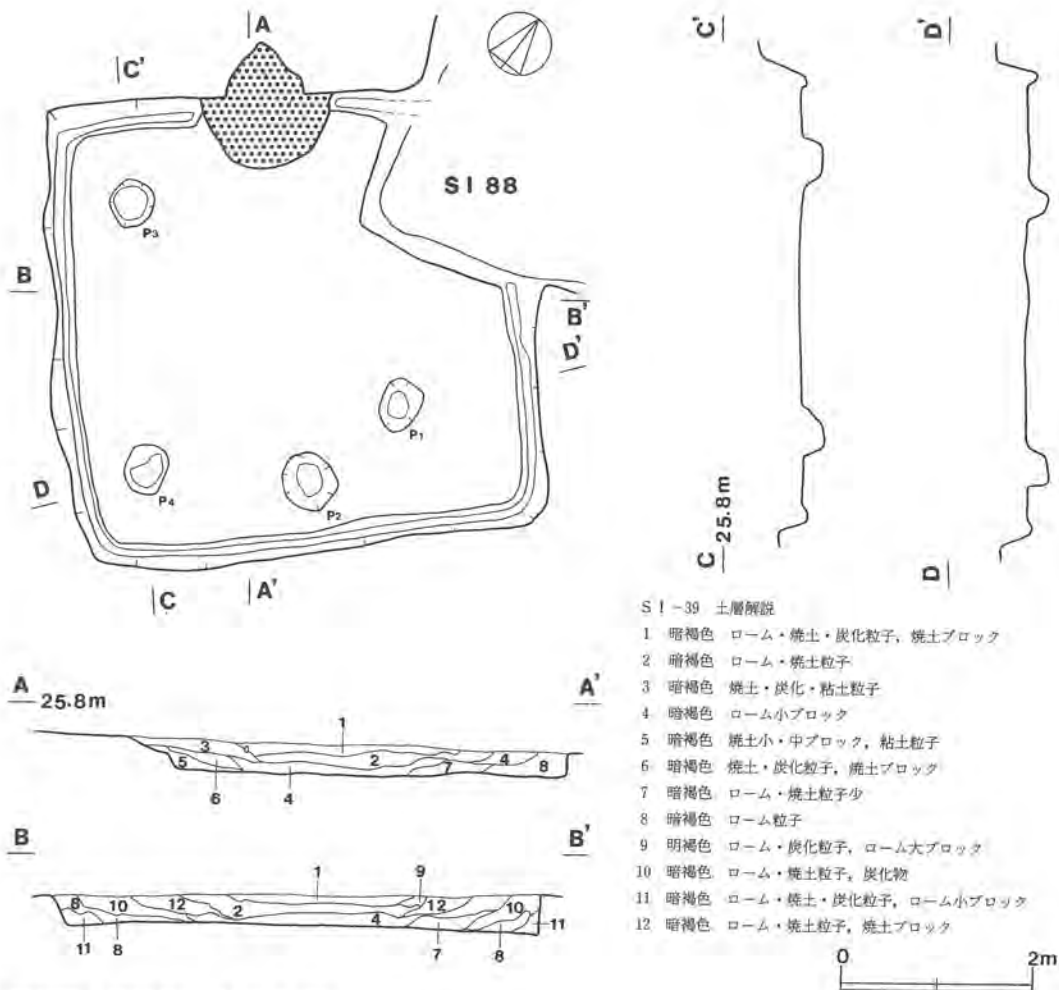
ある。

(竈) 北壁中央部を20cm程掘り込み、粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが袖部は遺存している。焚口部・火床部・煙道部にかけては緩やかな角度で立ち上がり、燃烧部は、火熱をうけ赤色に硬化している。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土中層から土師器(坏・甕)・須恵器(盖)の破片が少量と、床面中央部から須恵器(坏)が出土している。

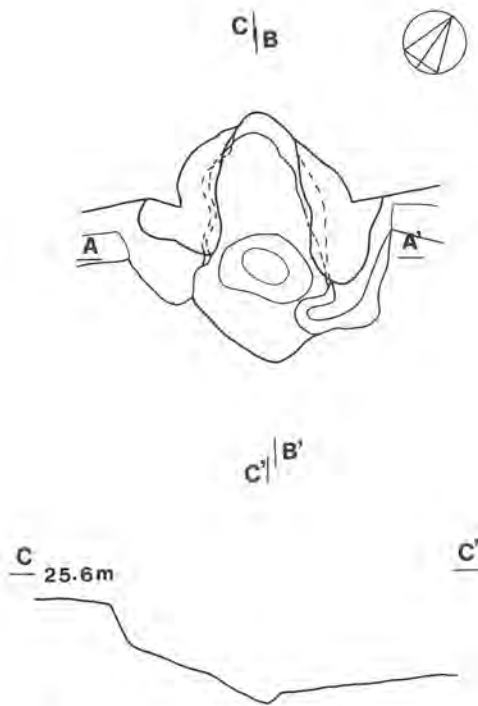
(所見) 本跡は、床面を第88号住居跡が掘り込んで構築している状況から、本跡の方が古く、遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



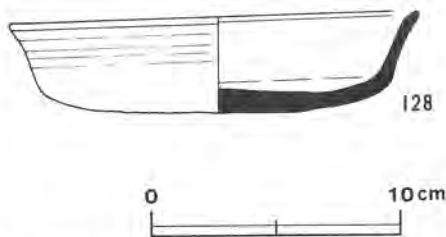
S!-39 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 3 暗褐色 焼土・炭化・粘土粒子
- 4 暗褐色 ローム小ブロック
- 5 暗褐色 焼土小・中ブロック, 粘土粒子
- 6 暗褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 7 暗褐色 ローム・焼土粒子少
- 8 暗褐色 ローム粒子
- 9 明褐色 ローム・炭化粒子, ローム大ブロック
- 10 暗褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物
- 11 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 12 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック

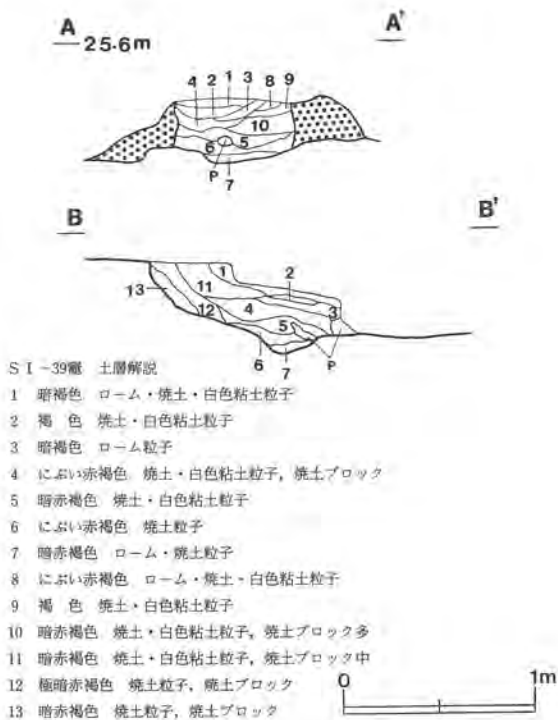
第70図 第39号住居跡実測図



第71図 第39号住居跡竈実測図



第72図 第39号住居跡出土遺物実測図



第39号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 128	坏	A 16.5	底部は平底で、体部との境は明瞭ではない。体部は外反気味に立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・曇母 灰白色 普通	70% 口縁部内側に一条の沈線 床面
	須恵器	B 4.1			
		C 7.2			

第40号住居跡 (第73図)

(位置) 調査区の東側, D7g₆区を中心に確認。

(重複) 第41号住居跡と重複。

(規模と平面形) 4.8×4.8mの方形。

(主軸方向) N-35°-W。

(壁) 壁高16~28cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅4~10cm、深さ4~6cmを測り、掘り込み断面形状はU状を呈し全周していたと考えられるが、北西壁付近は第41号住居跡と重複しているため検出できない。

(床) 特に主柱穴間が、硬く踏み固められ堅緻である。

(ピット) 9か所(P₁~P₉)。掘り込みは、径32~60cm、深さ16~62cmを測り、主柱穴はP₂・P₅・P₇~P₉の5本である。

(竈) 北壁中央部を20cm程掘り込み、粘土・砂で構築。天井部は崩落しているが、袖部は遺存している。焚口部から燃焼部・煙道部にかけては緩やかな角度で立ち上がり、燃焼部は熱を帯び赤色に硬化している。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 住居跡の壁際の覆土の中層から上層にかけて投棄されたと考えられる土師器(坏・甕)・須恵器(坏・蓋)等の破片が出土している。さらに竈内からは130・131の土師器坏がまた、北東コーナー付近の床面からは、132の須恵器蓋が出土している。

(所見) 本跡は、第41号住居跡に北西コーナーを切られていることから、第41号住居跡より古く、遺構の形態・遺物から判断して6世紀前半に比定される住居跡である。

第41号住居跡 (第73図)

(位置) 調査区の東側、D7g₅区を中心に確認。

(重複) 第40号住居跡と重複。

(規模と平面形) 2.9×2.7mの方形。

(主軸方向) N-22°-W。

(壁) 壁高20~24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

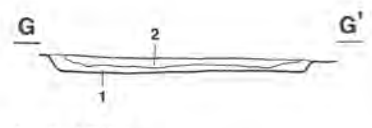
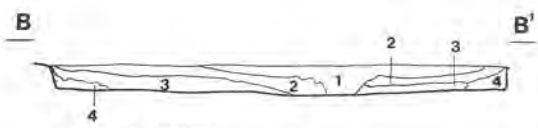
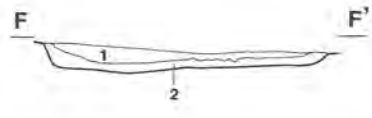
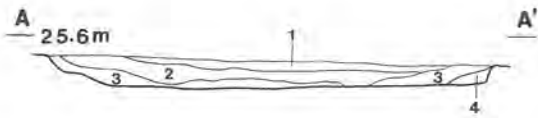
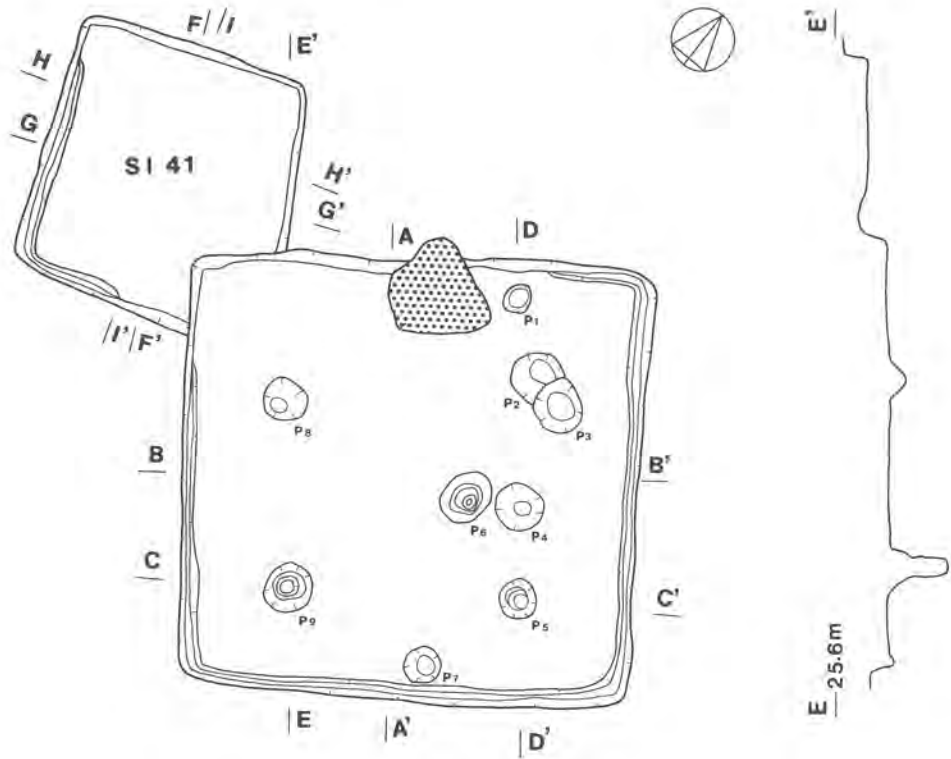
(壁溝) 幅8cm、深さ2~3cmを測り、部分的に検出。

(床) 北西部がやや窪んでいるほかは、平坦で硬く踏み固められ堅緻である。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層から、土師器(坏)の破片が出土している。

(所見) 竈・柱穴は検出されなかったが、方形プランを呈し、床面が踏み固められ堅緻であることから、住居跡と判断した。本跡は、小堅穴住居跡であり、遺構の形態から判断して12世紀に比定される住居跡である。

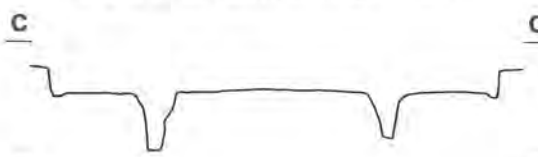


SI-40 土層解説

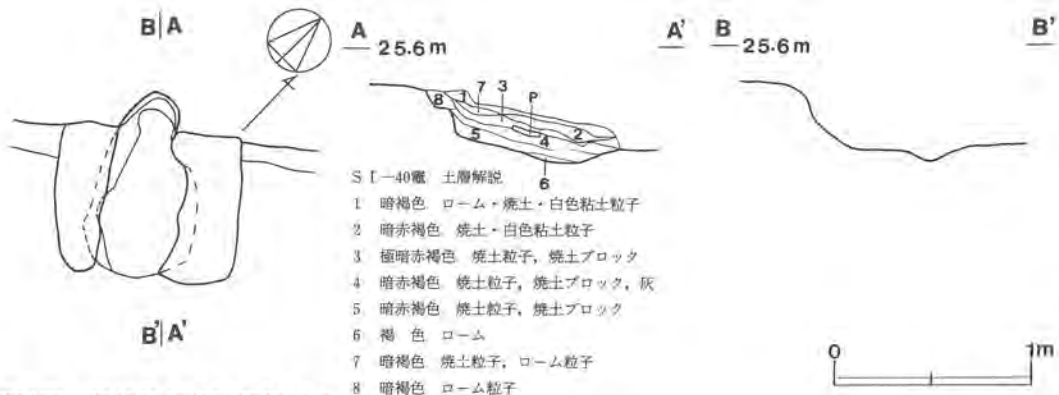
- 1 極暗褐色 ロームブロック, 焼土・木炭粒子
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, 木炭
- 3 褐色 ローム・黒色土ブロック, 焼土粒子
- 4 暗褐色 焼土・黒色土ブロック, 焼土・木炭粒子

SI-41 土層解説

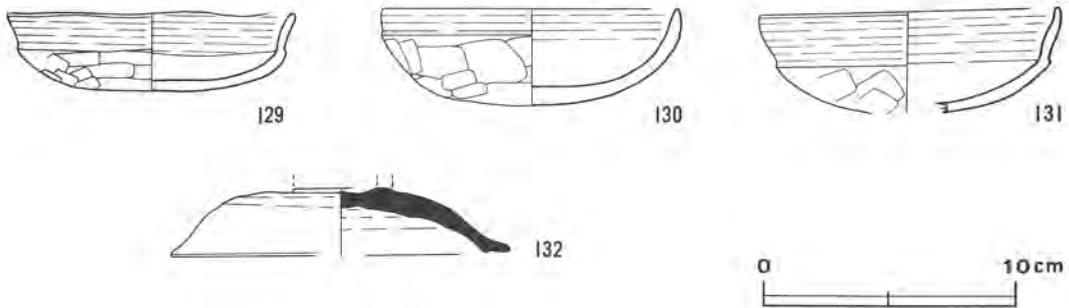
- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子, 木炭
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, ロームブロック



第73図 第40・41号住居跡実測図



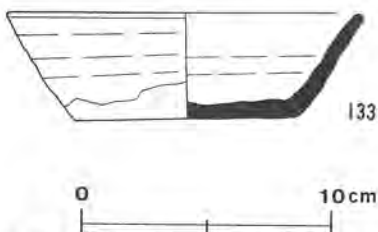
第74図 第40号住居跡竈実測図



第75図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 129	坏 土師器	A 11.5	底部は平底気味で、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 黒褐色 良好	100% 覆土
		B 3.2			
130	坏 土師器	A 11.8	底部は丸底で、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は内彎気味に立ち上がる。底部はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 褐色 良好	80% 竈
		B 3.9			
131	坏 土師器	A 11.8	底部は丸底で、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は直線的に外傾した後、僅かに内傾して立ち上がり、端部は尖る。底部はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	40% 竈
		B (4.3)			
132	蓋 須恵器	A 13.7	天井部は浅く、丸みをもって下降し、口縁部で屈曲する。つまみは欠損。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫 青灰色 普通	60% 床面
		B (2.7)			
		G (0.2)			



第76図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 133	坏 須恵器	A 14.2	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ切り。	砂粒・雲母 褐灰色 良好	70% 覆土
		B 4.1			
		C (9.0)			

第42号住居跡（第77図）

（位置） 調査区の東側，D7f₃区を中心に確認。

（規模と平面形） 6.4×6.3mの方形。

（主軸方向） N-26°-W。

（壁） 壁高44～56cmを測り，北・南壁は垂直，東・西壁は外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅12～20cm，深さ10～15cmを測り，掘り込み断面形状は逆台形状を呈し，全周するものと考えられるが，北東壁付近は攪乱され検出できない。

（床） 北東壁際が攪乱されているほかは，平坦で堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径40～76cm，深さ40～57cmを測り，全て主柱穴である。

（竈） 北壁中央部を31cm程壁外へ掘り込み，白色粘土・砂で構築。遺存状況は良好である。燃焼部から煙道にかけての内壁は，火熱を受け焼土化している。火床部は平坦で，煙道部は火床部から急角度に傾斜して立ち上がり，煙出口に至る。

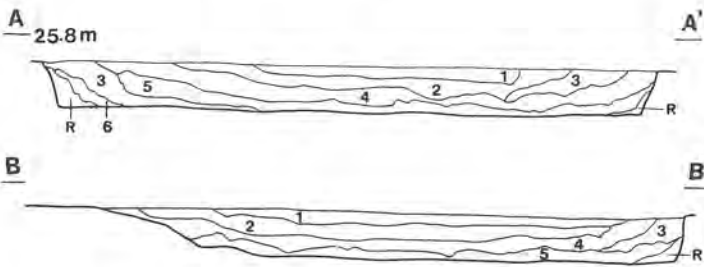
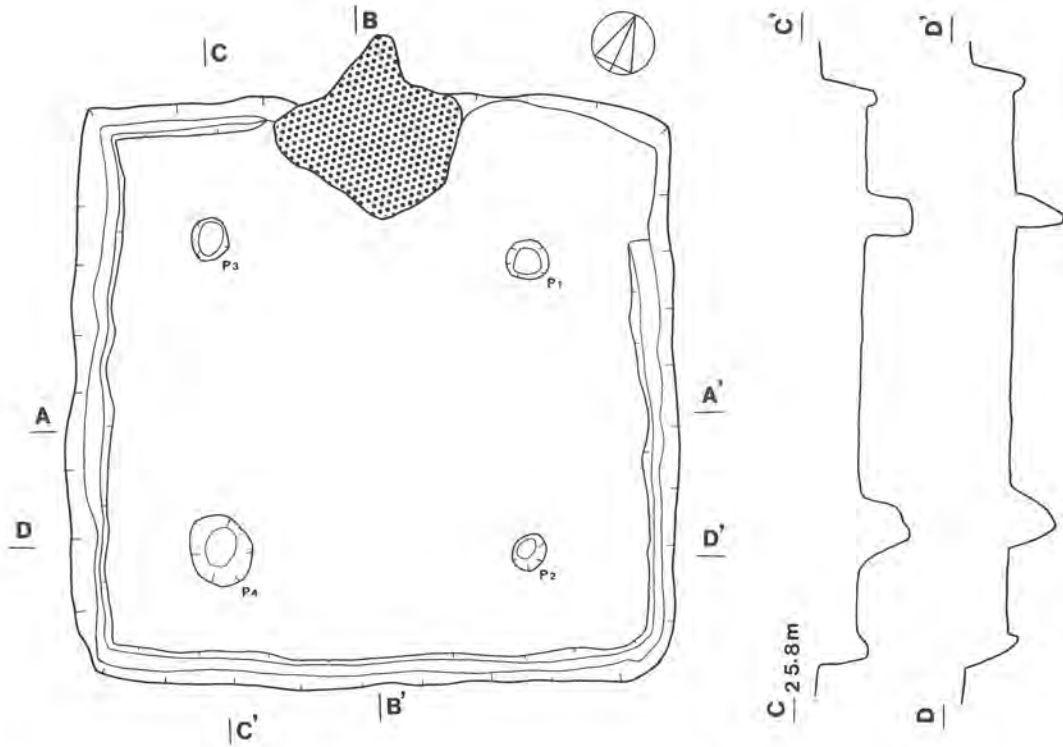
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡全体の覆土下層から上層にかけて，多量の土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕・蓋）の破片が出土しているが，全体に投棄・流れ込みの様相を呈している

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。

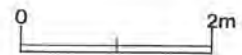
第42号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 134	坏 土師器	A (14.7)	底部は丸底で，口縁部との境に稜をもち，口縁部は僅かに外反して立ち上がる。口縁部内・外面は横ナデ，底部外面は摩耗が著しい。	砂粒 浅黄色 普通	60% 覆土
		B 4.2			
135	坏 土師器	A (14.0)	底部は丸底で，口縁部との境に部分的に稜をもち，口縁部は短く外傾して立ち上がる。底部及び一部口縁部との境はヘラ削り，口縁部外面はヘラ削りの部分を除き横ナデ，内面は横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	60% 覆土
		B 5.0			
136	坏 土師器	A (13.7)	底部は丸底で，口縁部との境に稜をもち，口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	40% 覆土
		B (4.7)			

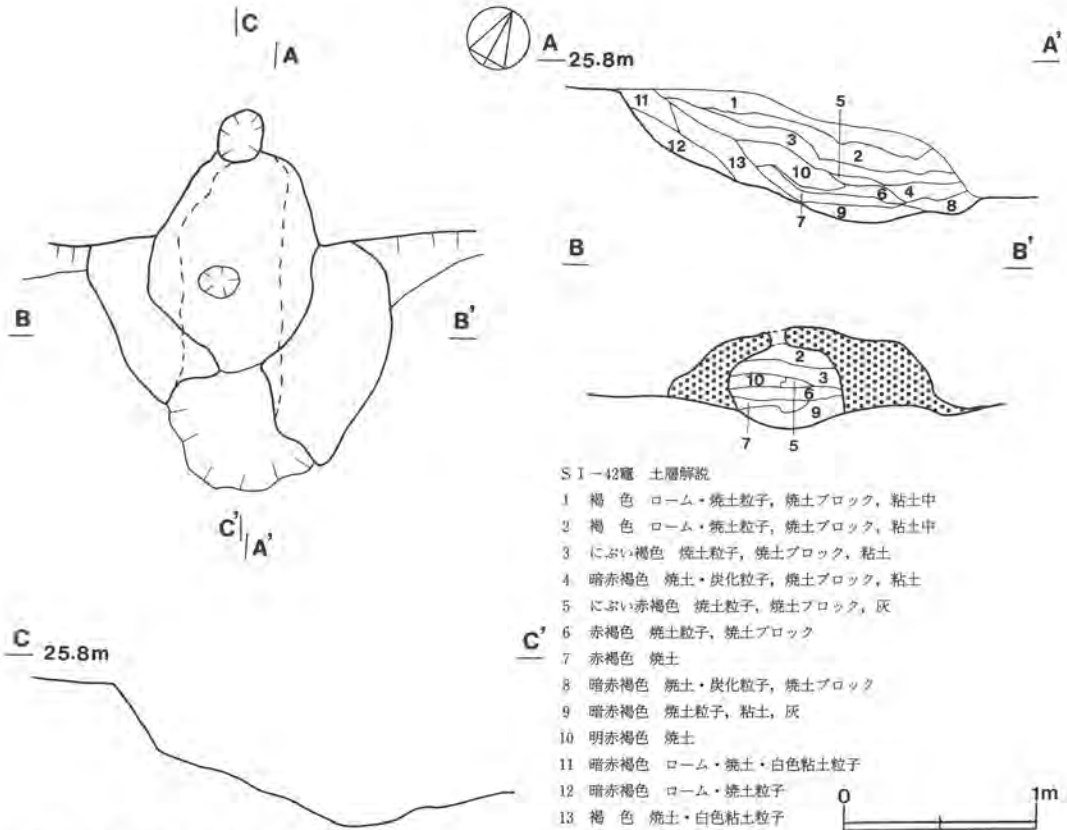


S I-42 土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック、焼土・木炭粒子 | 5 暗褐色 ロームブロック、焼土・木炭粒子少 |
| 2 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子 | 6 褐色 ロームブロック、焼土・木炭粒子中 |
| 3 褐色 ロームブロック、焼土・木炭粒子少 | |
| 4 褐色 ローム・焼土・木炭粒子、ロームブロック | |



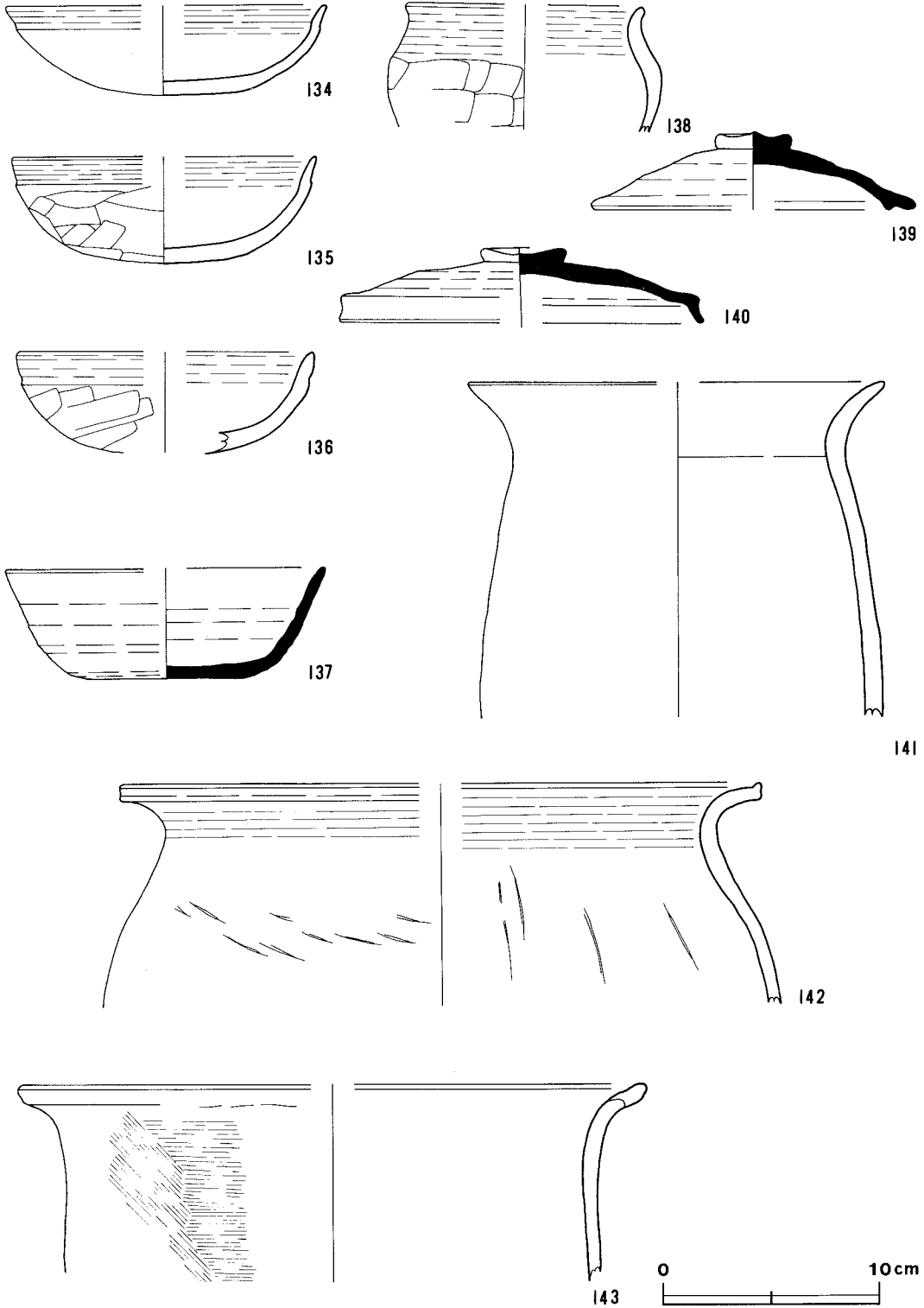
第77図 第42号住居跡実測図



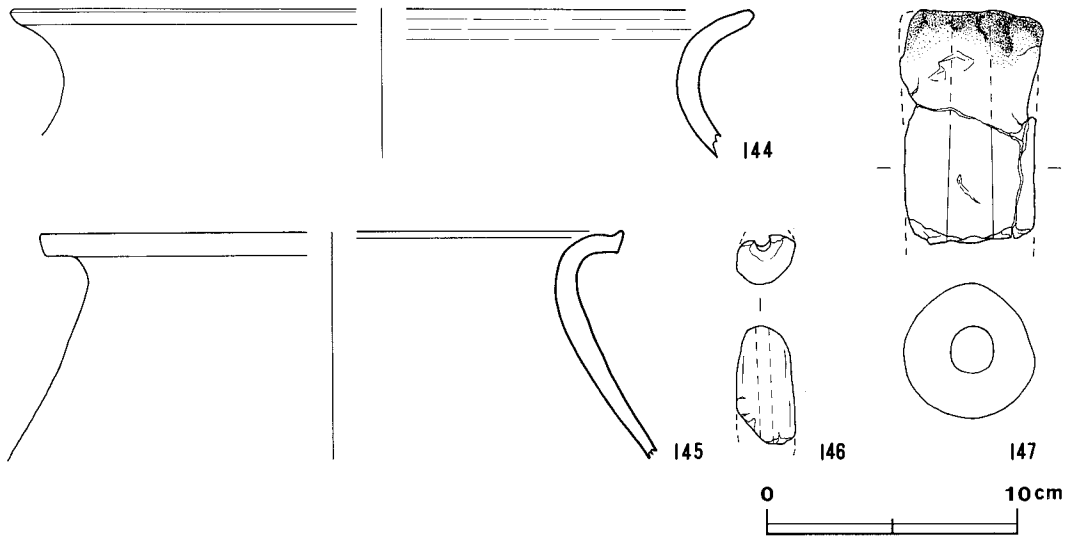
第78図 第42号住居跡竈実測図

第42号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 137	坏 須恵器	A (14.8)	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	50% 覆土
		B 5.1			
		C 7.2			
138	鉢 土師器	A (11.0)	体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は内傾した後、短く外反する。体部外面はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 黒褐色 普通	10% 覆土
		B (5.8)			
139	蓋 須恵器	A (15.1)	つまみは扁平で、中央部が僅かに突出する。天井部は丸みをもち、口縁部に至る。口縁部内側に短い反りをもつ。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	50% 覆土
		B 3.6			
		F 3.5			
		G 0.7			
140	蓋 須恵器	A 16.8	つまみは扁平で、中央部が僅かに凹む。天井部は浅く、中で軽く段をなす。口縁部は鋭く屈曲し、短部はやや外反する。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	50% 覆土
		B 3.7			
		F 3.9			
		G 0.6			



第79图 第42号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図 第42号住居跡出土遺物実測図(2)

第42号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第79図 141	甕 土師器	A (19.1)	胴部は僅かに内傾して立ち上がり，頸部から口縁部にかけては大きく外反する。口縁部及び頸部の内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	30% 覆土			
		B (15.6)							
142	甕 土師器	A (29.8)	頸部は「く」の字状に大きく屈曲して開き，口縁端部は僅かに上方につまみ出されている。胴部内・外面はヘラナデ。口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい褐色 普通	5% 覆土			
		B (10.3)							
143	甕 土師器	A (28.8)	頸部は口縁部にかけて外反して立ち上がり，端部は僅かに外上方につまみ出されている。胴部外面及び口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	5% 覆土			
		B (9.2)							
第80図 144	甕 土師器	A (30.0)	頸部は「く」の字状に大きく屈曲して立ち上がる。口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	5% 覆土			
		B (6.0)							
145	甕 土師器	A (23.4)	頸部は「く」の字状に大きく屈曲して立ち上がる。口縁端部は外上方につまみ出されている。口縁部内・外面は横ナデ。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	10% 覆土			
		B (9.1)							
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
146	管状 土錘	全長(4.7) 外径(2.4) 孔径(0.6) 重さ18.6g	中央に孔を有する。 両端部欠損。		147	羽口	全長(9.4) 外径5.8 孔径1.8	先端部破片。 外面にヘラ削りを残す。	先端部は若干溶解が認められる。

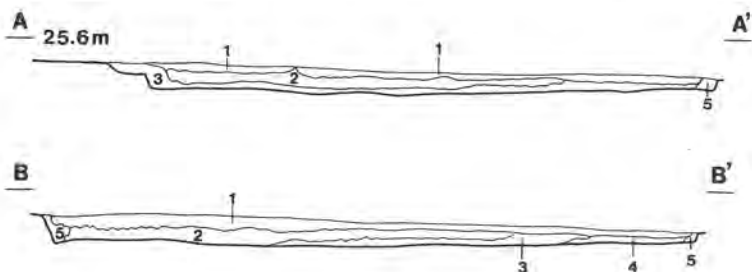
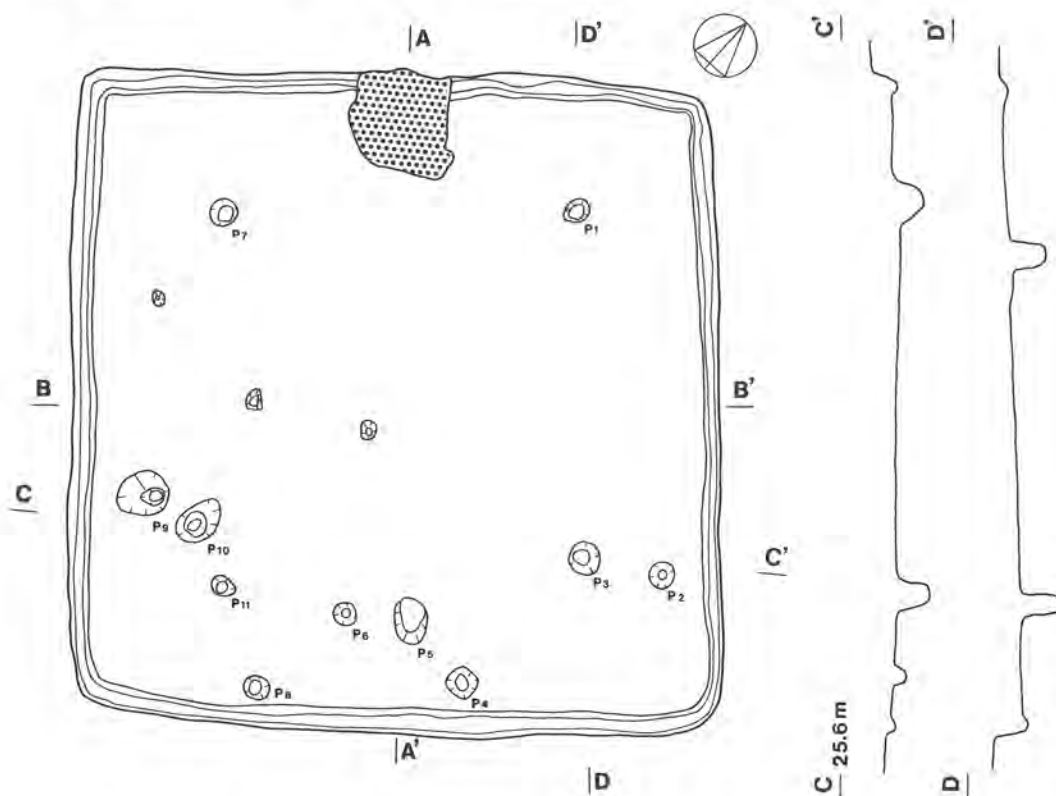
第43号住居跡 (第81図)

(位置) 調査区の東側, D7i,区を中心に確認。

(規模と平面形) 7.6×6.9mの方形。

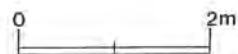
(主軸方向) N-41°-W。

(壁) 壁高14~32cmを測り, 外傾して立ち上がる。



SI-43 土層解説

- 1 暗褐色 黒色土, ロームブロック, 焼土・木炭粒子
- 2 暗褐色 ローム・粘土ブロック, 焼土・木炭粒子
- 3 褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 4 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 5 褐色 黒色土粒子



第81図 第43号住居跡実測図

(壁溝) 幅12~24cm, 深さ6~12cmを測り, 掘り込み断面形状は皿状を呈して全周。

(床) 平坦で, 硬く踏み固められ堅緻である。

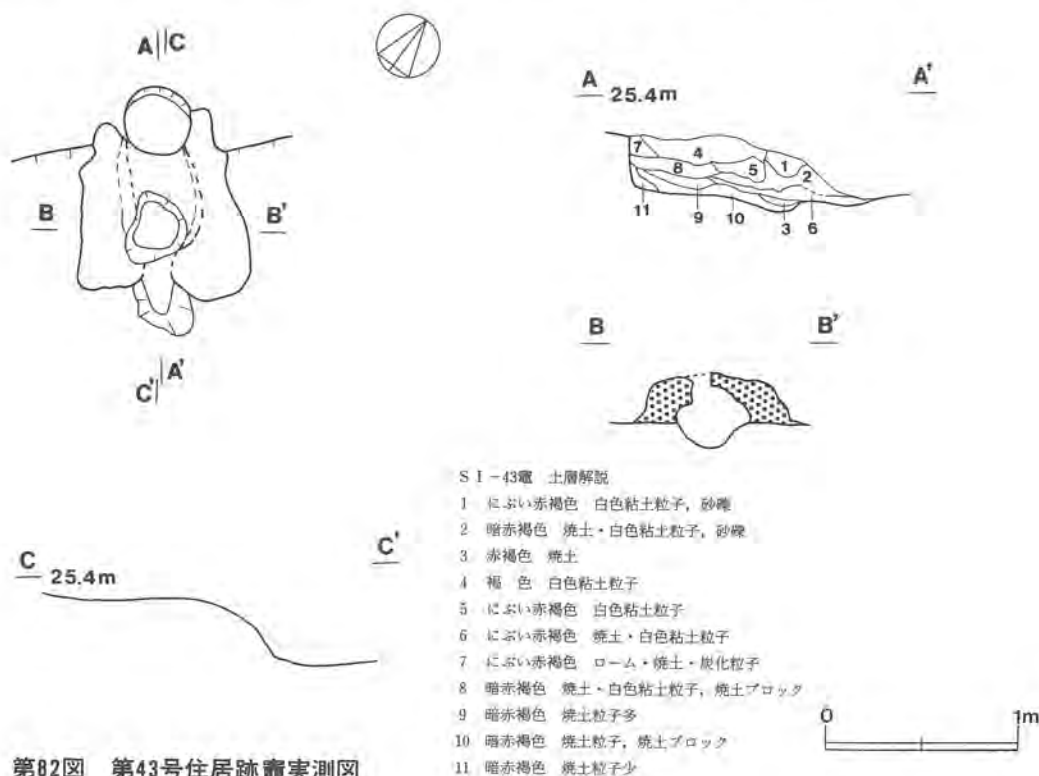
(ピット) 11か所(P₁~P₁₁)。掘り込みは, 径28~52cm, 深さ24~55cmを測り, 支柱穴はP₁・P₃・P₅・P₇・P₁₁の5本である。

(竈) 北壁中央部を16cm程掘り込み, 白色粘土を主体に構築。遺存状態は良好で原形を保つ。燃焼部には多量の焼土が充填され長期間にわたって使用した痕跡を残す。煙道部は火床部から急角度で立ち上がり, 煙出口に至る。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈周辺の床面及び覆土最下層から, 土師器(鉢・甕)が出土している。

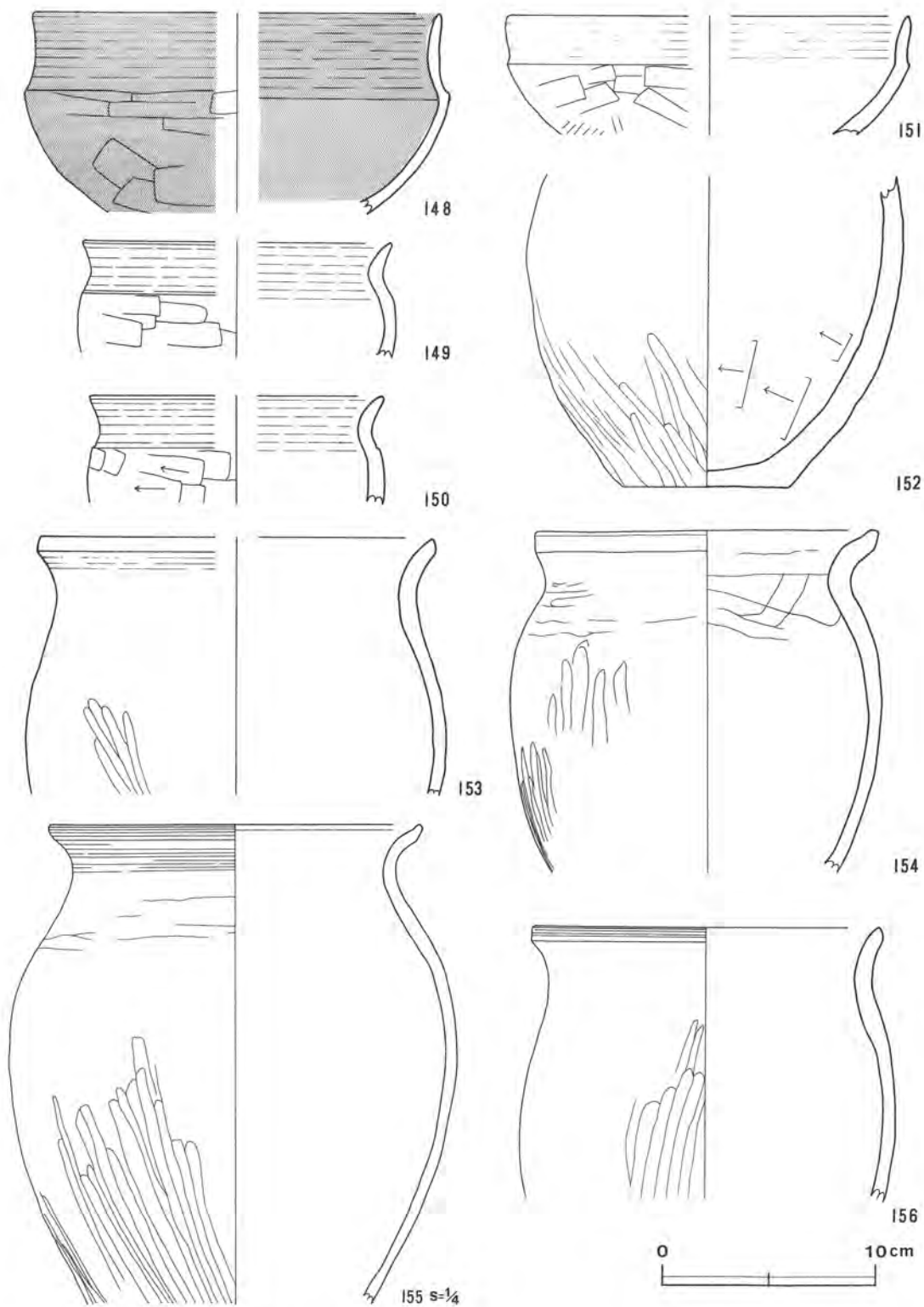
(所見) 本跡は, 確認面からの掘り込みは浅いが, 当遺跡の中で, 最大規模を有する住居跡であり, 遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。



第82図 第43号住居跡竈実測図

第43号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 148	鉢 土師器	A (19.1) B (9.4)	口縁部との境に明瞭な稜をもち, 口縁部は外反気味に垂直に立ち上がる。体部外面はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 黒褐色 良好	30% 内・外面黒色処理 床面



第83图 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 149	鉢 土師器	A (14.4) B (5.5)	口縁部との境に稜をもち、口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる。体部外面はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 良好	10% 覆土
150	鉢 土師器	A (13.8) B (5.1)	口縁部との境に稜をもち、口縁部は外反して立ち上がる。体部はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 良好	10% 床面
151	鉢 土師器	A (18.8) B (5.7)	口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。体部はヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 黄橙色 良好	10% 床面
152	甕 土師器	B (14.8) C 7.8	底部は平底で、胴部は内彎気味しながら立ち上がる。底部はナデ。胴部外面下位は縦方向のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 普通	40% 床面
153	甕 土師器	A (18.8) B (12.2)	胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は尖る。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	10% 床面
154	甕 土師器	A 16.0 B (16.2)	胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、端部は僅かに外上方につまみ出されている。胴部最大径は上位に位置する。胴部外面中位から下位にかけてヘラ磨き、上位及び口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	40% 床面
155	甕 土師器	A 22.9 B (29.8)	底部欠損。胴部は内彎しながらやや外傾して立ち上がり、口縁部は外反し、口縁端部は小さく外反して立ち上がる。胴部外面ヘラ削り・ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・小礫・長石 にぶい橙色 普通	60% 覆土
156	甕 土師器	A 16.2 B (13.0)	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は小さく立ち上がる。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・砂礫 橙色 普通	20% 覆土

第44号住居跡（第84図）

（位置） 調査区の南東部，E7a₃区を中心に確認。

（規模と平面形） 5.6×5.6mの方形。

（主軸方向） N-39°-W。

（壁） 壁高28～40cmを測り，南壁は外傾しその他は垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅8～14cm，深さ6～16cmを測り，掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

（床） ほぼ平坦で，北西壁際は軟弱であるが，その他は硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは，径28～44cm，深さ10～39cmを測り，P₁～P₄・P₇が支柱穴である。

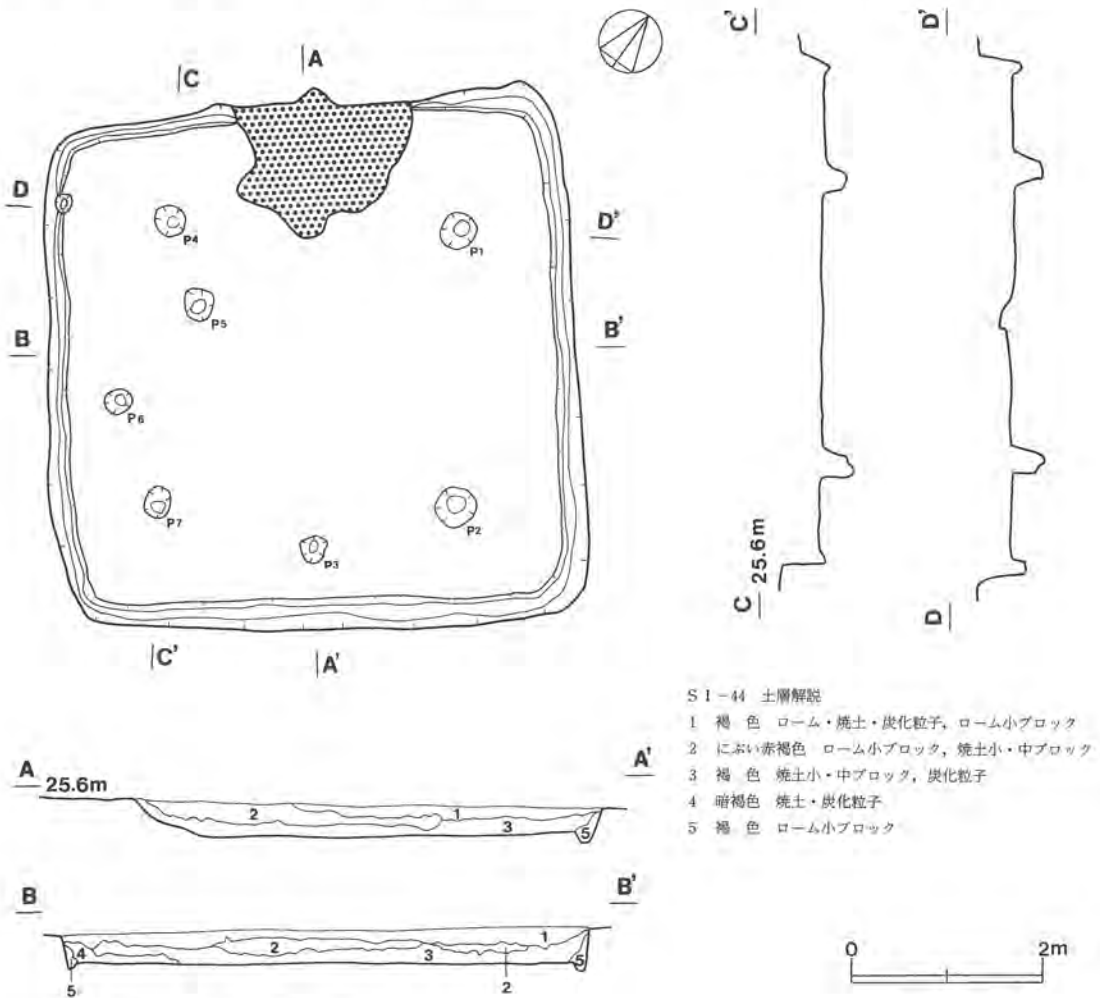
（竈） 北壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み，ローム・砂を含む粘土で構築。天井部の一部は崩落しているが，遺存状態は良好である。燃焼部にはロームブロック・焼土粒子・炭化物を多量に含む。焚口部から火床部にかけてはほぼ平坦で，煙道部は緩やかな角度で立ち上がる。

（覆土） 自然堆積。

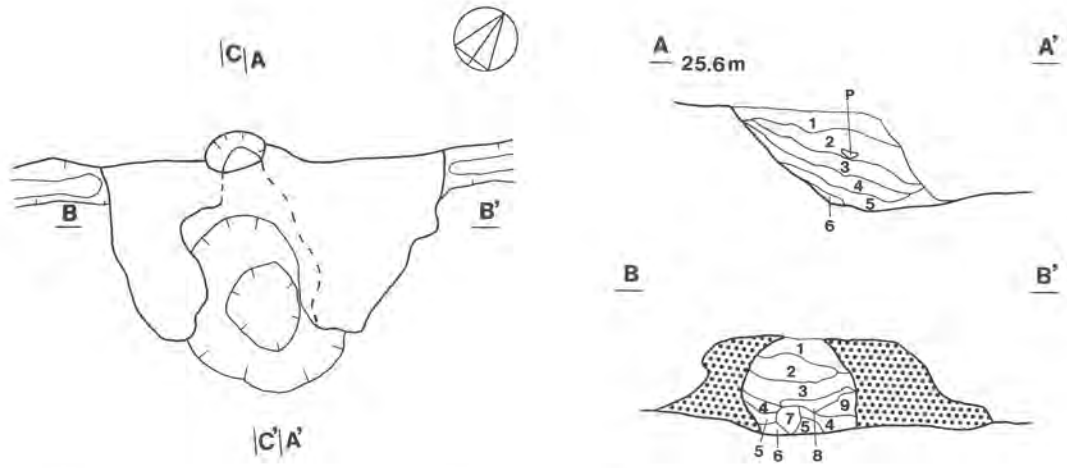
（遺物） 覆土下層から中層にかけて，土師器（坏）・須恵器（坏・蓋・甕）の破片が，出土してい

る。160は、竈の西側の床面から出土した土師器甕である。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。



第84図 第44号住居跡実測図



C
25.6m



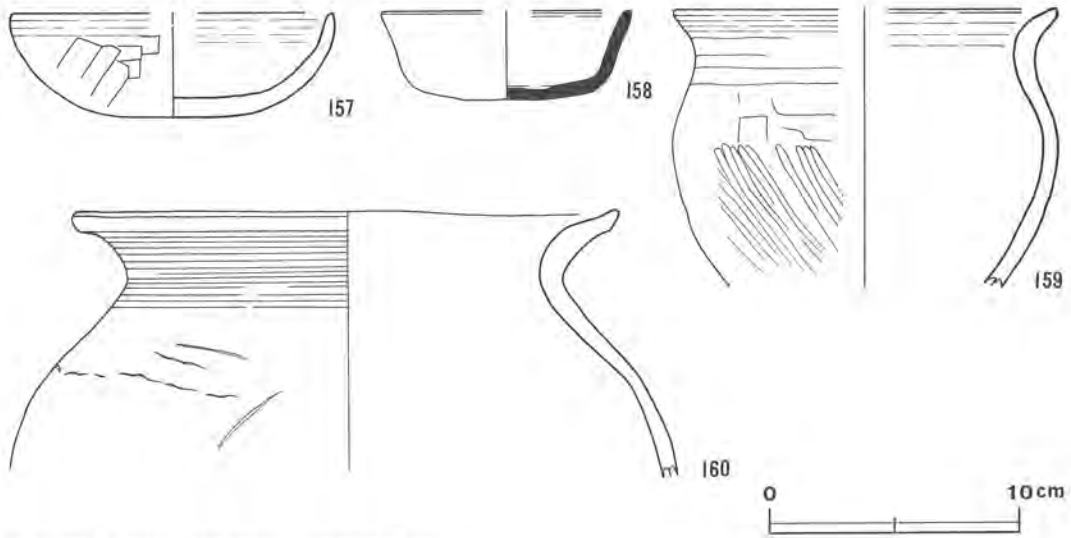
C'

S1-44電 土層解説

- 1 におい赤褐色 ローム・粘土粒子, 焼土ブロック
- 2 暗赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック, 粘土粒子, 灰
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック, 灰
- 5 赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 6 褐色 焼土粒子
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック
- 8 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 9 におい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック



第85図 第44号住居跡竈実測図



第86図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第86図 157	坏 土 師 器	A 13.0	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は内彎 気味に立ち上がる。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は 横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	60% 覆土
		B 4.2			
158	坏 須 恵 器	A (10.0)	底部は丸底気味で、体部との境は明瞭ではない。体部は 外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。体部内・外面 水挽き整形。底部は回転ヘラ削り。口縁部内側回転ヘラ 削り。	砂粒・砂礫 灰色 普通	30% 口縁部内側に一条の沈 線 覆土
		B 3.6			
		C (7.0)			
159	甕 土 師 器	A (15.6)	胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外 反する。胴部中位から下位にかけてヘラ磨き。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 良好	30% 覆土
		B (11.3)			
160	甕 土 師 器	A 21.8	口縁部破片。頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がり、 口縁端部は外反する。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・石英 にぶい橙色 普通	30% 床面
		B (10.7)			

第45号住居跡（第87図）

（位置） 調査区の南東部，E7b₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.8×2.9mの長方形。

（主軸方向） N-11°-W。

（壁） 壁高28cmを測り，東壁は外傾して，その他は垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10～12cm，深さ4～7cmを測り，掘り込み断面形状はU状を呈し，北壁側を除き全周。

（床） ほぼ平坦で，北西部際は軟弱であるが，その他は硬く踏み固められ堅緻である。

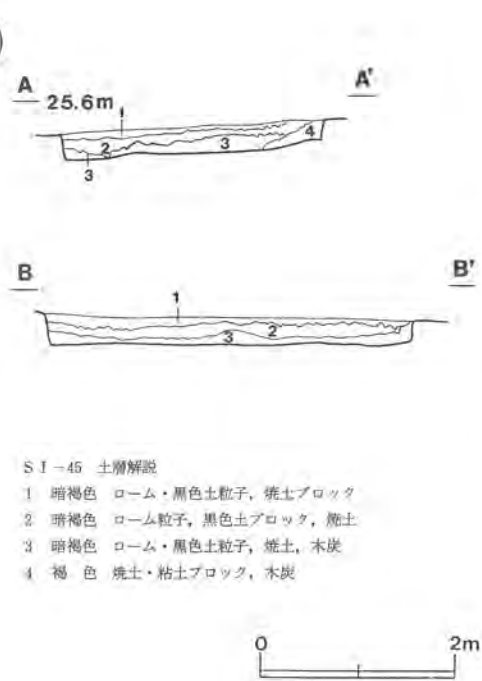
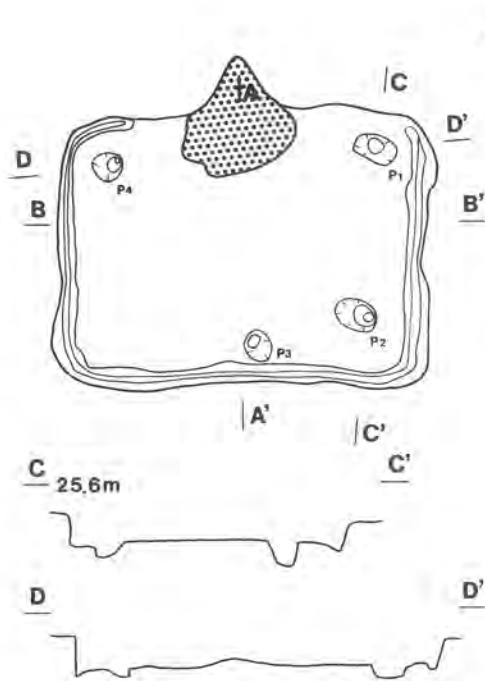
（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径32～44cm，深さ12～32cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部の壁を60cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。遺存状態は極めて悪い。燃烧部から支脚が土師器甕片を横位にのせた状態で出土している。

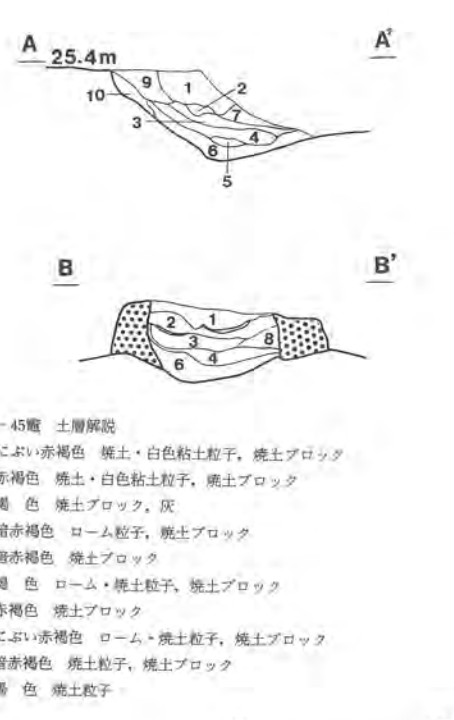
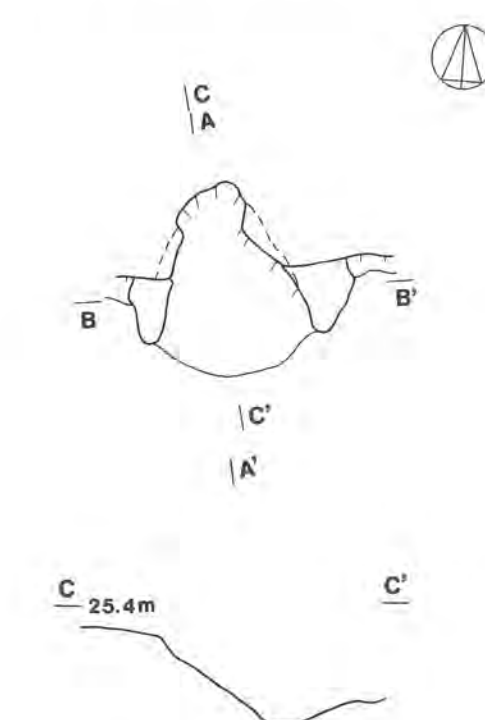
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土中層及び竈内から土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕・蓋）が出土している。竈内からは，補強材として用いられた土師器甕・須恵器盤・蓋が出土している。

（所見） 本跡は，当遺跡では数少ない長方形プランを呈する住居跡であり，遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。

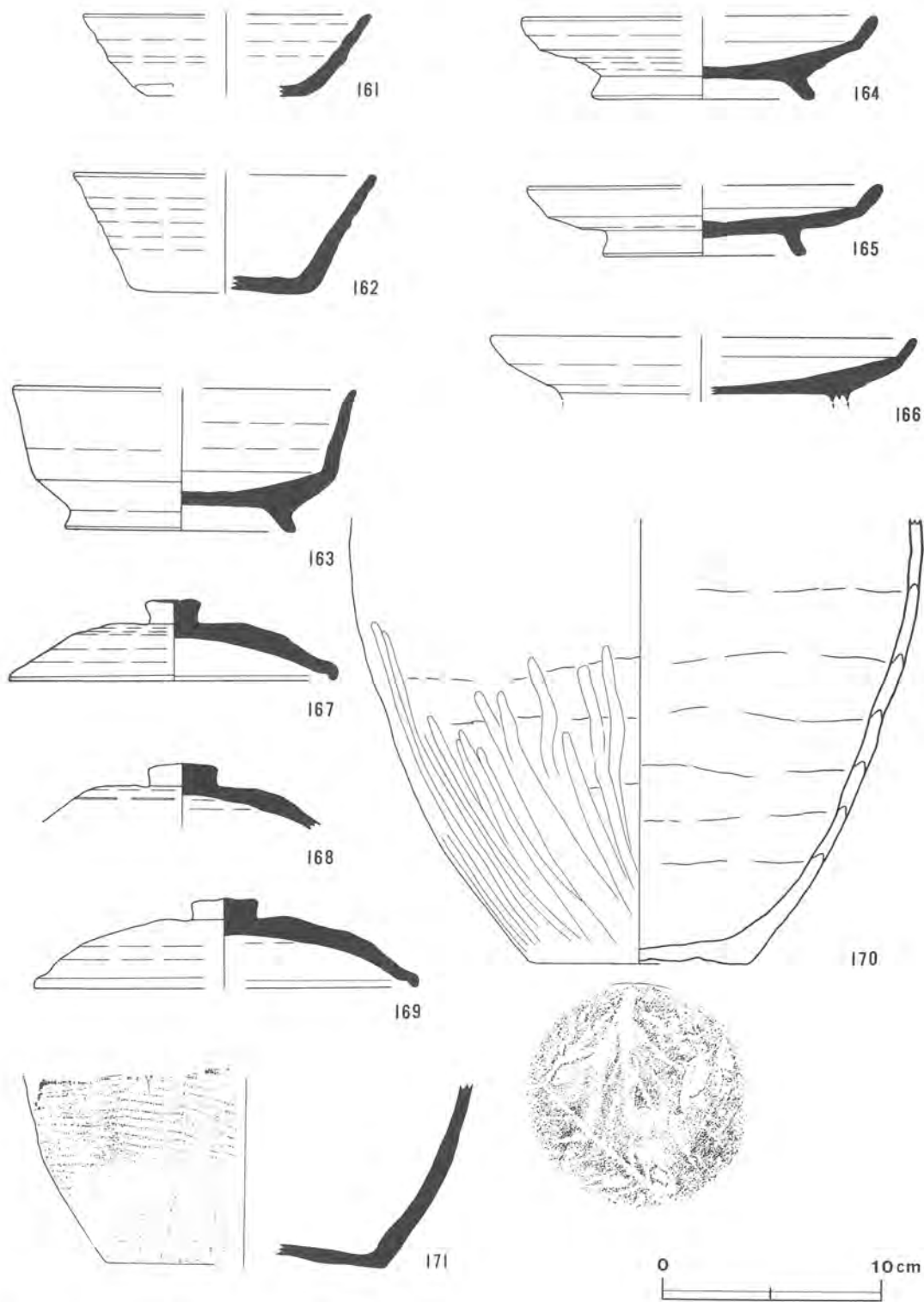


- SI-46 土層解説
- 1 暗褐色 ローム・黒色土粒子, 焼土ブロック
 - 2 暗褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック, 焼土
 - 3 暗褐色 ローム・黒色土粒子, 焼土, 木炭
 - 4 褐色 焼土・粘土ブロック, 木炭

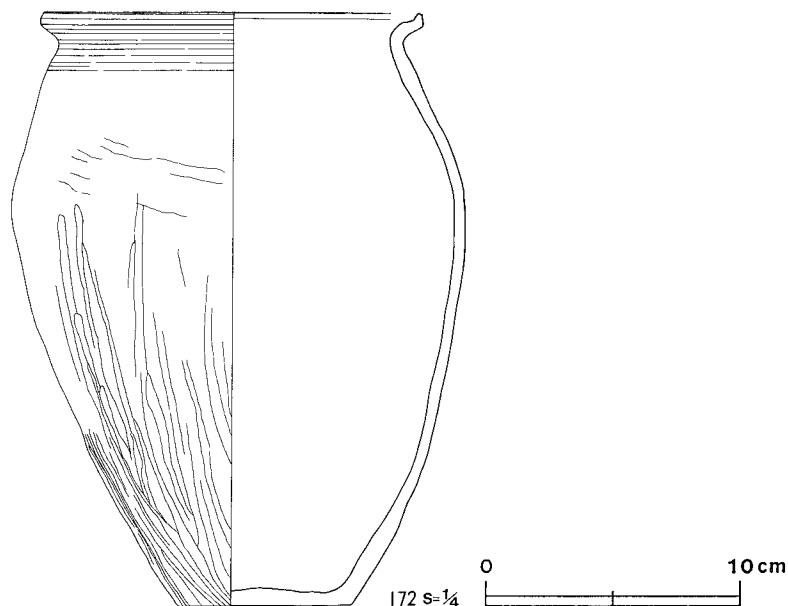


- SI-45 土層解説
- 1 にぶい赤褐色 焼土・白色粘土粒子, 焼土ブロック
 - 2 赤褐色 焼土・白色粘土粒子, 焼土ブロック
 - 3 褐色 焼土ブロック, 灰
 - 4 暗赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
 - 5 暗赤褐色 焼土ブロック
 - 6 褐色 ローム・黒土粒子, 焼土ブロック
 - 7 赤褐色 焼土ブロック
 - 8 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
 - 9 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 10 褐色 焼土粒子

第87図 第45号住居跡・竈実測図



第88图 第45号住居跡出土遺物実測図(1)



第89図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

第45号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 161	坏 須恵器	A (13.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	20% 覆土
		B 3.8			
		C (7.6)			
162	坏 須恵器	A (14.0)	底部は平底で、体部は中位まで直線的に外傾して立ち上がった後、器厚を減じ、僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰色 普通	40% 竈
		B 5.6			
		C (8.2)			
163	高台付坏 須恵器	A (15.9)	坏部は平底で、体部は下位で屈曲した後、直線的に外傾して立ち上がる。「ハ」の字状に開く高台がつく。器内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。体部下端はナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	70% 覆土
		B 6.7			
		D 10.5			
		E 1.2			
164	盤 須恵器	A (16.3)	底部は平底で、体部は直線的に大きく外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾し、端部は丸い。「ハ」の字状に開く高台がつく。器内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ削り。口縁部周辺は横ナデ。	砂粒・砂礫 灰黄色 普通	60% 竈
		B 3.9			
		D 10.3			
		E 1.1			
165	盤 須恵器	A (16.4)	底部と体部との境は明瞭でない。口縁部は外上方に屈曲して立ち上がる。「ハ」の字状に開く高台がつく。器内・外面水挽き整形。底部及び体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	80% 覆土
		B 3.3			
		D 9.4			
		E 1.2			
166	盤 須恵器	A (19.6)	底部と体部との境は明瞭ではない。口縁部は直線的に短く外傾して立ち上がる。器内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ削り。器内・外面摩耗が著しい。高台はほとんどが欠損。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	20% 覆土
		B (3.0)			

第45号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 167	蓋 須恵器	A 15.2	腰高のつまみがつく。天井部は平坦で、段をなして口縁部に至る。口縁部はほぼ垂直に屈曲し、端部は丸みをもつ。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄褐色 良好	90% 電
		B 3.8			
		F 2.6			
		G 1.1			
168	蓋 須恵器	B (3.0)	中央部が盛り上がるつまみがつく。天井部は平坦で、丸みをもってなだらかに下降する。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰色 普通	50% 電
		F 3.3			
		G 1.1			
169	蓋 須恵器	A (18.0)	つまみは扁平で、中央部が僅かに突出する。天井部は平坦で、丸みをもって口縁部に至る。口縁部は下方向に短く屈曲する。器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 良好	40% 覆土
		B 4.2			
		F 3.0			
		G 1.0			
170	甕 土師器	B (20.8)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。胴部外面中位から下位にかけてはヘラ磨き。内面に輪積み痕が残る。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	40% 底部に木炭痕 電
		C 10.5			
171	甕 須恵器	B (8.8)	底部は上げ底気味で、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。胴部内・外面水挽き整形。底部及び胴部下端はヘラ削り、外面に平行叩き目。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 良好	30% 覆土
		C (13.0)			
第89図 172	甕 土師器	A 19.9	底部は平底。胴部はわずかに内彎しながら、外上方に立ち上がり、上位で最大径を測る。頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部は、小さく内上方につまみ出されている。	砂粒・砂礫 橙色 普通	50% 覆土
		B 31.4			
		C 9.1			

第47号住居跡（第90図）

（位置） 調査区の南東部，E7d₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.7×3.7mの方形。（推定）

（主軸方向） N-51°-W。

（壁） 壁高30cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅12cm，深さ8cmを測り，断面形状は皿状を呈し全周するものと考えられるが，遺構の南側は調査区域外のため検出できない。

（床） 平坦で竈前面部が特に堅緻である。

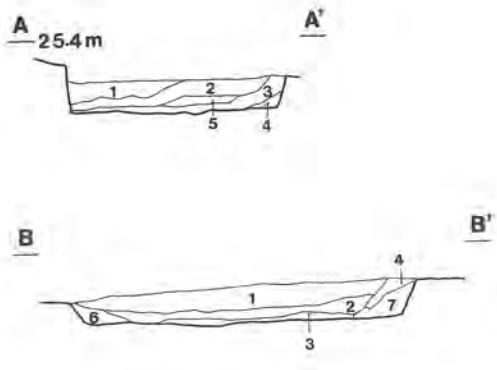
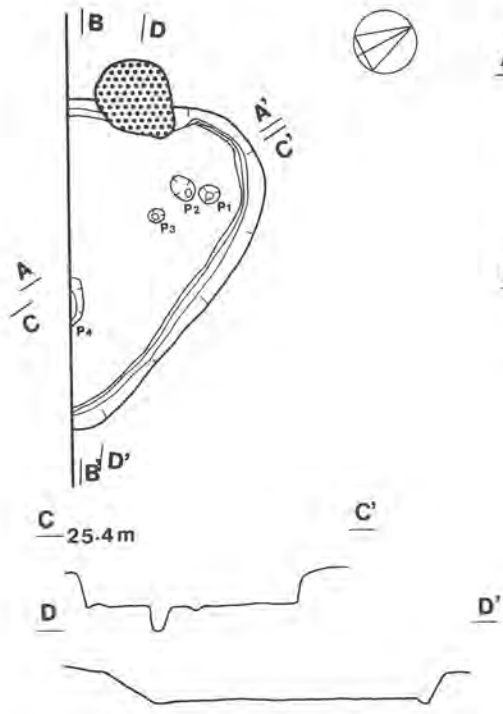
（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径16～48cm，深さ8～28cmを測る。支柱穴は不明である。

（竈） 北壁中央部よりやや東寄りの壁を10cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。袖部は土師器片を補強材として使用している。火床部は焼土化しており，焚口部から火床部はほぼ平坦で，煙道部は緩やかな角度で立ち上がっている。

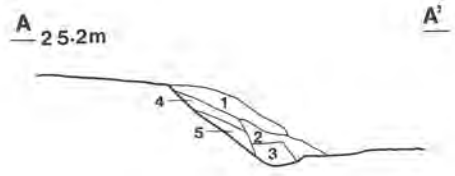
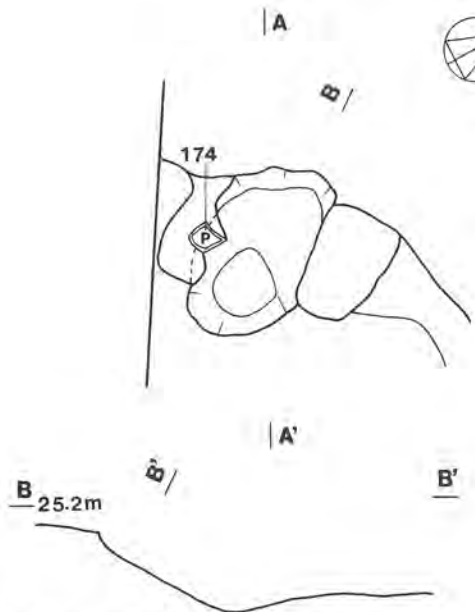
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土下層から173の須恵器杯，竈内から174の土師器甕が出土している。

（所見） 本跡の南西部の大半が，調査区域外であるため，全容は把握できなかったが，遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



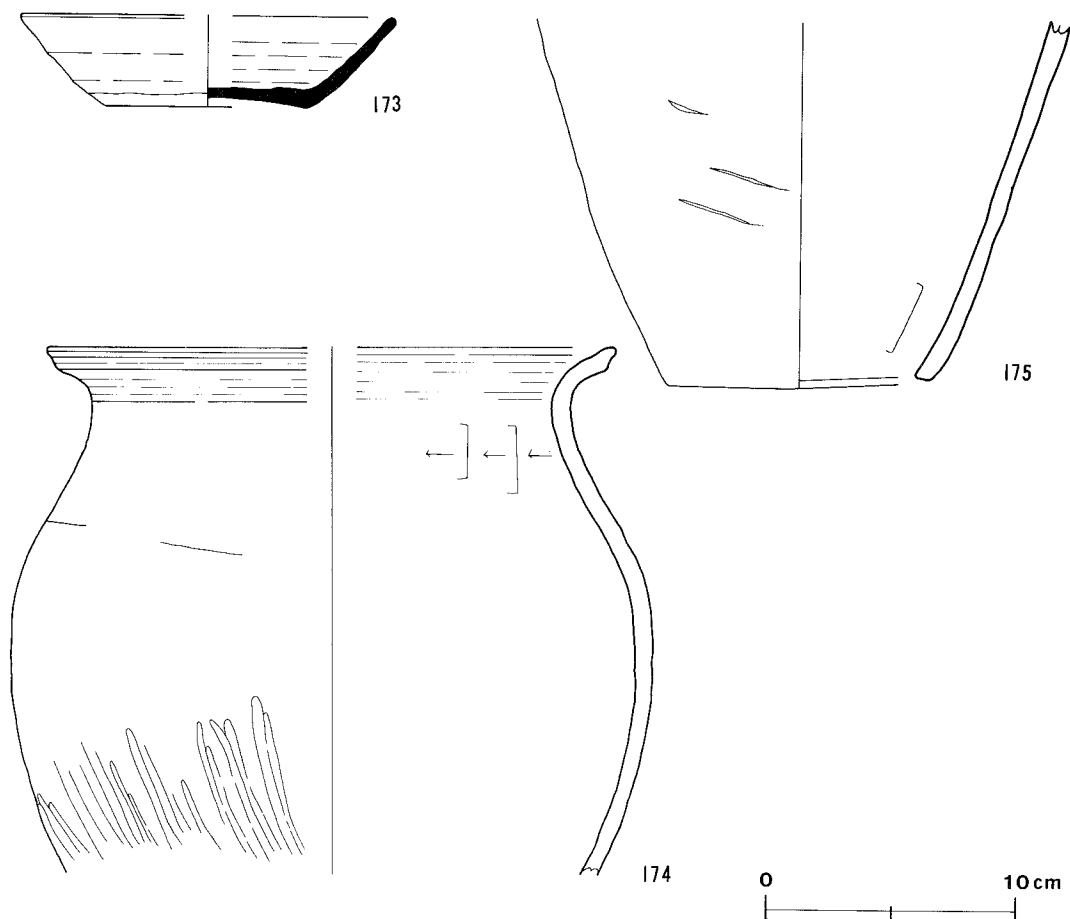
- S1-47 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子少
 - 2 褐色 ローム粒子少, 粘土ブロック
 - 3 暗褐色 ローム粒子中
 - 4 暗赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
 - 5 褐色 ローム粒子少
 - 6 褐色 ローム粒子中
 - 7 暗褐色 ローム粒子少



- S1-47 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
 - 2 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子少
 - 3 にぶい赤褐色 焼土粒子
 - 4 暗赤褐色 焼土
 - 5 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 砂粒



第90図 第47号住居跡・竈実測図



第91図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 173	坏 須恵器	A (15.0) B 3.7 C (8.2)	底部は上げ底気味で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 淡黄色 普通	30% 覆土
174	甕 土師器	A (22.8) B (21.2)	胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は僅かに外方向につまみ出されている。胴部外面下位は縦位のヘラ磨き。口縁部内・外面は横ナデ。頸部内面横位のヘラ磨き。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	20% 竈
175	甕 土師器	B (15.0) C 10.6	胴部は、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。底部は全面が開孔している。外面にヘラ当て痕。内面は剝離が著しい。	砂粒・砂礫 におい赤褐色 普通	20% 覆土

第48号住居跡（第92図）

（位置） 調査区の南西部，E7e₇区を中心に確認。

（規模と平面形） (5.1) × (4.9) mの方形。

（主軸方向） N-36°-W。

（壁） 壁高20～24cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床） 平坦でP₄・P₅・P₇の内側が特に硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは，径36～56cm，深さ28～48cmを測る。配列が不規則で支柱穴は明確に捉えられない。

（竈） 北壁中央部よりやや西寄りの壁を17cm程掘り込み，粘土・砂で構築されているが，袖部の一部を除いてほとんどが流出しており，遺存状態は極めて悪い。

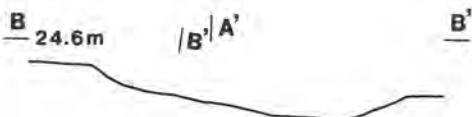
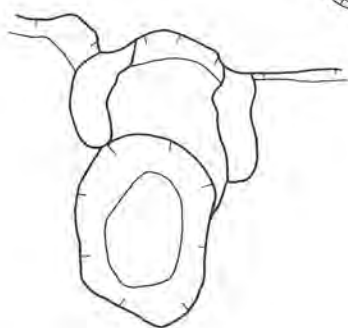
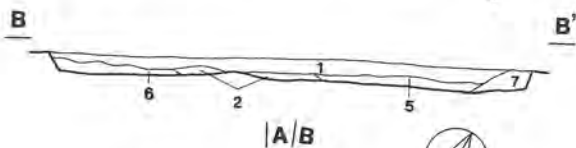
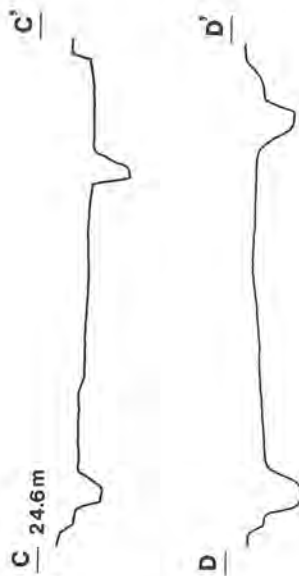
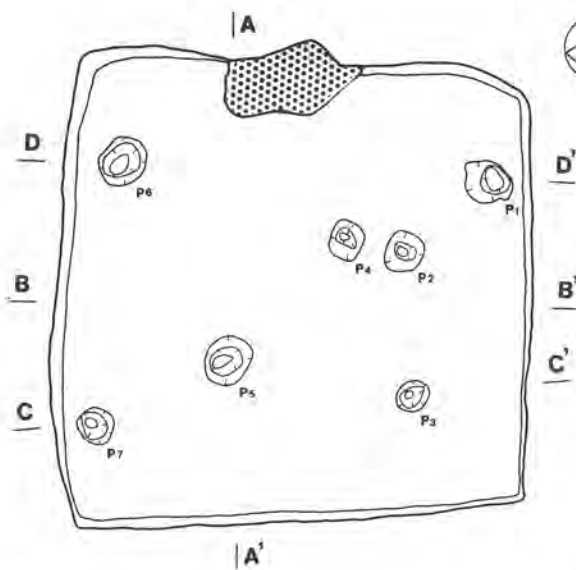
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近から土師器坏・高坏・手捏土器等が出土している。

（所見） 本跡の上部は削られ，壁の遺存状況は悪い。北東壁・南西壁は後世の攪乱を受け，規模や形状は推定でしか確認できなかった。本跡は遺構の形態・遺物から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。

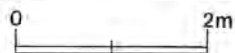
第48号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 176	坏 土師器	A (14.4)	底部は丸底で，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反気味に立ち上がり，端部は尖る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 黄橙色 普通	60% 覆土
		B 4.1			
177	坏 土師器	A (15.0)	底部は丸底で，口縁部は内彎気味に短く立ち上がり，端部は尖る。器内面ナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	40% 竈
		B (4.1)			
178	坏 土師器	A 15.2	底部は丸底で，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上がり，端部は尖る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	90% 覆土
		B 4.4			
179	坏 土師器	A (16.9)	底部は丸底で，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は大きく開き，端部は尖る。端部はヘラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	50% 覆土
		B 4.2			
180	坏 須恵器	A (13.7)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰黄色 普通	70% 床面
		B 4.0			
		C 7.8			
181	甕 土師器	A (23.8)	頸部は大きく外反して立ち上がり，口縁部に至る。口縁端部は外上方につまみ出される。口縁部内・外面は横ナデ，器内・外面は摩耗が著しい。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色	10% 覆土
		B (7.4)			



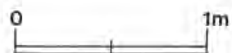
S I-48 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子少, 焼土粒子中, 焼土ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子中, 焼土粒子中, 焼土ブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子少, 焼土粒子中
- 5 暗褐色 焼土粒子少
- 6 暗褐色 ローム粒子少, 焼土粒子少
- 7 黒褐色 焼土粒子少

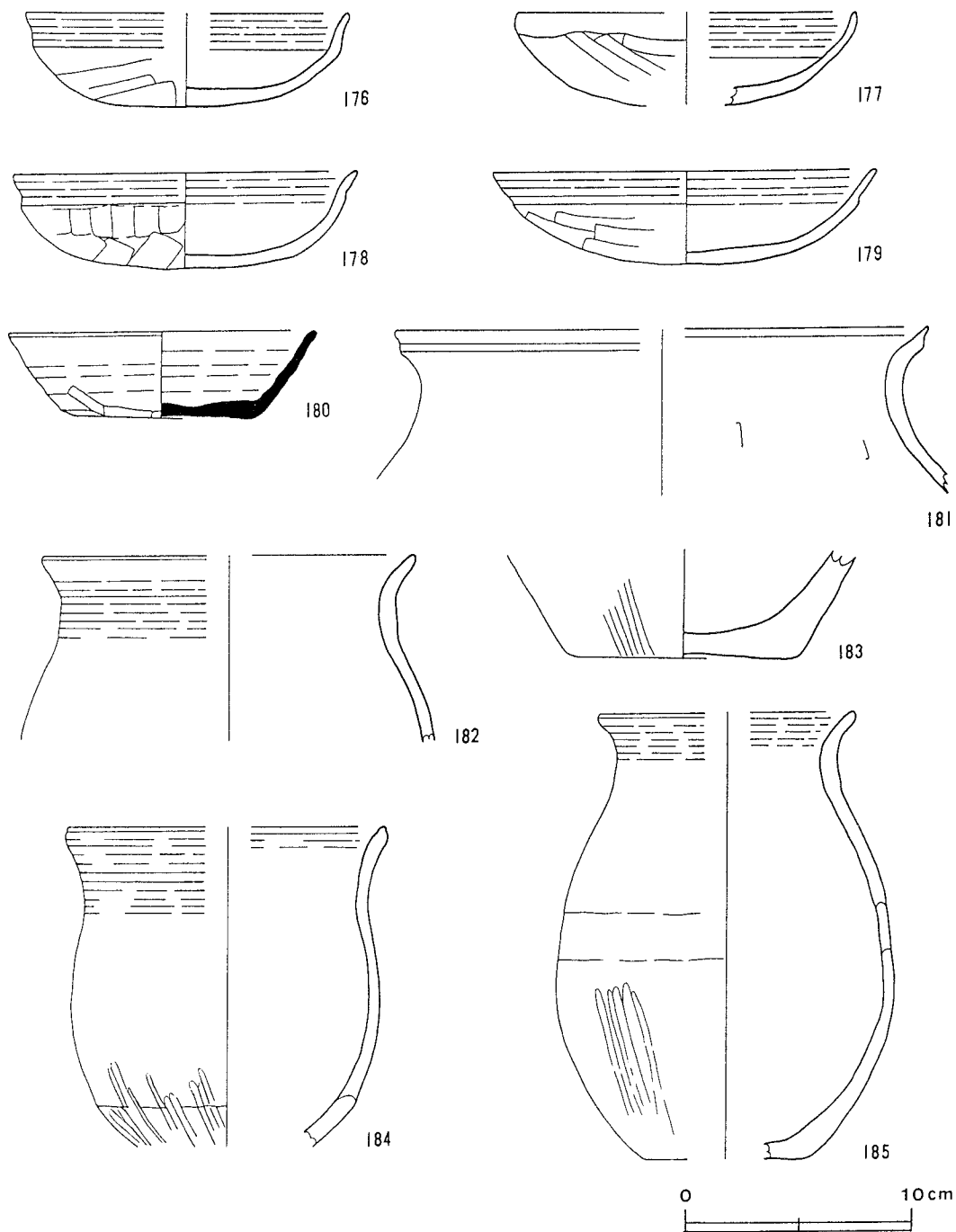


S I-48竈 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 2 褐色 焼土・炭化粒子, 砂粒
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 砂粒
- 4 暗褐色 ローム・焼土粒子少
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子中



第92図 第48号住居跡・竈実測図



第93図 第48号住居跡出土遺物実測図(1)

第48号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第93図 182	甕 土 師 器	A (16.4) B (8.3)	頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸味をもつ。口縁部から頸部にかけての内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	20% 覆土
183	甕 土 師 器	B (4.5) C 10.0	底部は上げ底気味で、胴部は直線的に外傾して立ち上がる。底部はヘラ削り後ナデ、胴部下端は一部ヘラ磨き。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	20% 覆土
184	甕 土 師 器	A (14.0) B (14.2)	胴部は内彎気味して立ち上がり、頸部から口縁部にかけては僅かに外反して立ち上がる。口縁部はやや尖る。胴部下位から底部にかけてヘラ磨き、口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	30% 覆土
185	甕 土 師 器	A (11.4) B 19.8 C (7.0)	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、下位に最大径をもつ。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部は大きく外傾する。胴部下位から底部にかけてはヘラ削り、口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	40% 覆土
図版番号	種 類	法量(cm)	器形の特徴	備 考	
第94図 186	支 脚	全長(17.2) 径 (7.3)	上部が細くなる円柱状を呈す。上・下部は欠損している。	粘土塊から成形	



第49号住居跡 (第95図)

(位置) 調査区の中央部、D6f₃区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.5×4.4mの方形。

(主軸方向) N-39°-W。

(壁) 壁高36~48cmを測り、北・南壁は垂直に、西・東壁は外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅10~12cm、深さ2~5cmを測り、掘り込み断面形状は皿状を呈し全周。

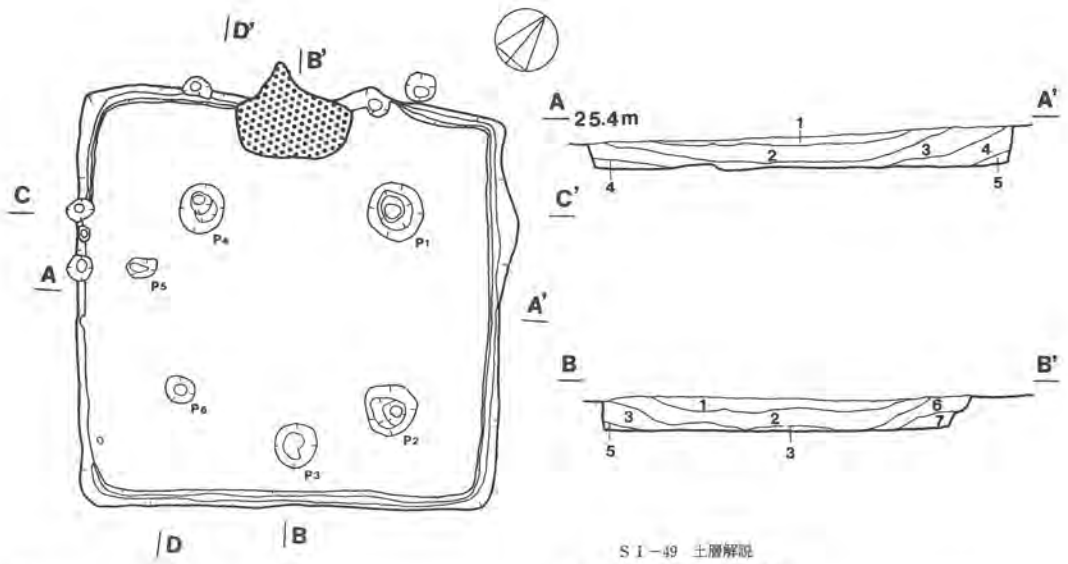
(床) ほぼ平坦で、入口から支柱間の中央部が硬く踏み固められ堅緻である。

(ピット) 6か所(P₁~P₆)。掘り込みは、径28~64cm、深さ20~48cmを測り、支柱穴はP₁~P₄・P₆である。

(竈) 北壁中央部を26cm程掘り込み、粘土・砂で構築。袖部は土師器片を用いて補強し、内壁は火熱を帯び焼土化している。

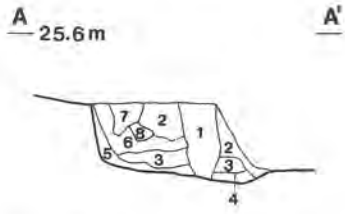
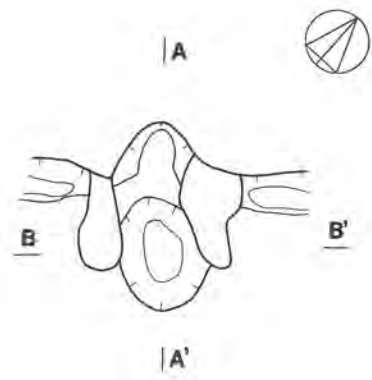
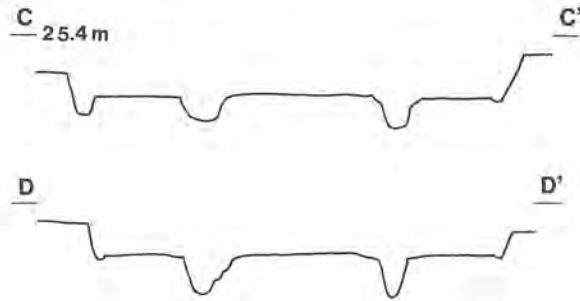
(覆土) 自然堆積。

第94図 第48号住居跡
出土遺物実測図(2)



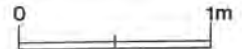
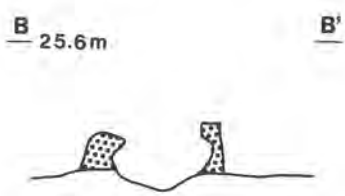
SI-49 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子
- 2 黒褐色 ローム・炭化粒子, ローム小ブロック
- 3 暗褐色 ローム小・中ブロック, 炭化粒子
- 4 褐色 ローム小・大ブロック
- 5 褐色 ローム・炭化粒子
- 6 褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子, 砂質粘土ブロック
- 7 明褐色 ローム大ブロック, 焼土粒子, 砂質粘土ブロック



SI-49電 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 砂粒
- 2 褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 3 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 砂粒
- 4 赤褐色 焼土
- 5 褐色 ローム粒子, 砂粒
- 6 褐色 焼土粒子, 砂粒
- 7 黒褐色 ローム・焼土粒子, ロームブロック, 砂粒
- 8 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 砂粒



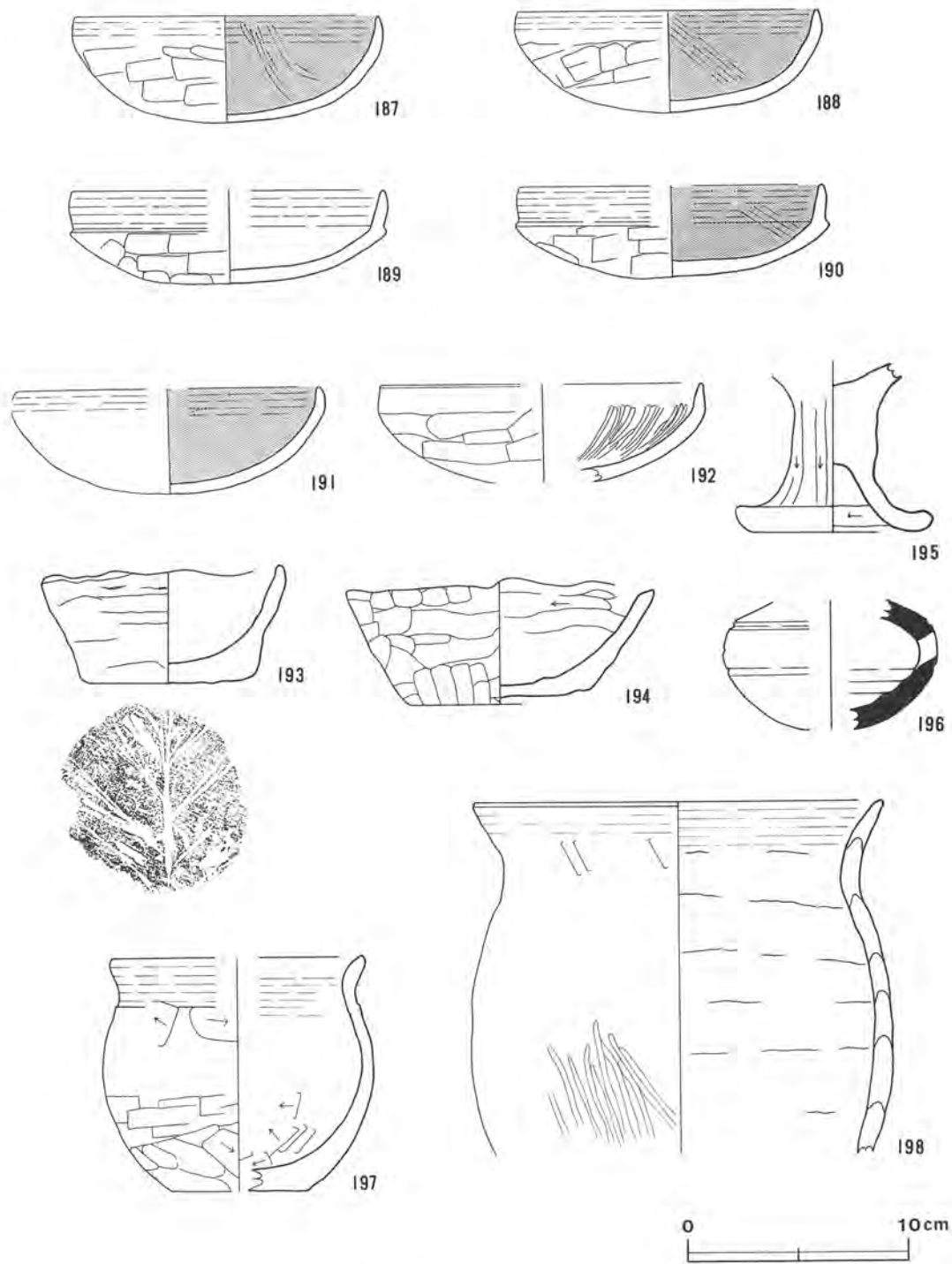
第95図 第49号住居跡・竈実測図

(遺物) 住居跡の中央部及び竈付近にまとまって出土している。竈内からは、189の土師器坏、竈周辺の床面からは188・191の土師器坏、199の甕が出土している。

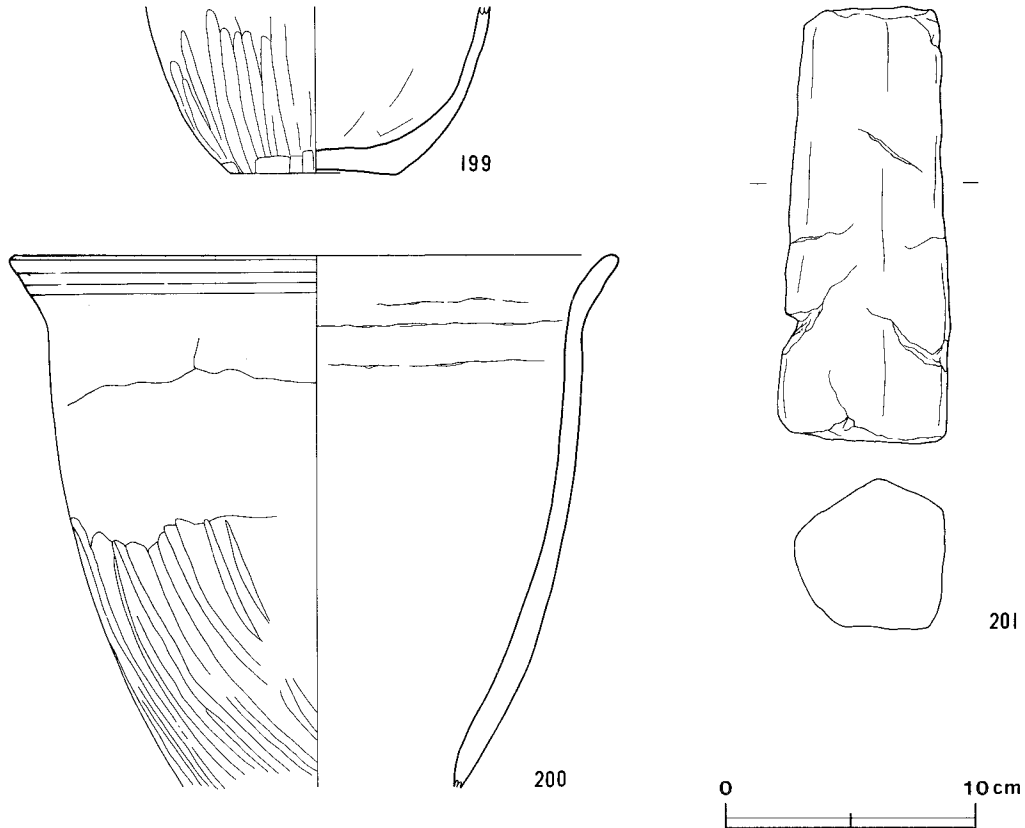
(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。

第49号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 187	坏 土師器	A (14.0) B 4.9	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内彎気味に短く立ち上がり、端部は尖る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面及び器内面は横ナデ。	砂粒 暗褐色 良好	90% 内面黒色処理 覆土
188	坏 土師器	A 13.7 B 4.7	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内彎気味に短く立ち上がり、端部は尖る。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 灰褐色 良好	90% 内面黒色処理 床面
189	坏 土師器	A (14.4) B 4.3	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% 竈
190	坏 土師器	A (14.0) B 4.2	底部は丸底で、口縁部との境に段をもち、口縁部は僅かに内彎して立ち上がる。底部はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 良好	50% 内面黒色処理 竈
191	坏 土師器	A (13.9) B 4.9	底部は丸底で、口縁部との境に稜をもち、口縁部は内彎気味に短く立ち上がる。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 黒色 良好	30% 内面黒色処理 床面
192	坏 土師器	A (14.8) B (4.5)	底部は丸底で、口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は尖る。底部はヘラ削り。器内面はヘラ磨き。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 良好	20% 覆土
193	手握土器 土師器	A 11.2 B 5.3 C 7.6	底部は肉厚で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は尖る。体部外面はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 不良	100% 底部に木葉痕 覆土
194	手握土器 土師器	A 14.0 B 5.7 C 8.2	底部は凹凸で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。底部及び体部は雑なヘラ削り。口縁部内側はヘラ削り後ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 不良	70% 覆土
195	高坏 土師器	D 9.0 E (7.0)	透かしのない脚部で、裾部は大きく開く。底部及び裾部はナデ。支柱部はヘラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	40% 覆土
196	甕 須恵器	B (5.8)	底部は球形を呈する。体部最大径は上位に位置し、円孔を穿つ。器内・外面水挽き整形。体部外面はナデ。内面はヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰色 良好	5% 覆土
197	甕 土師器	A (11.4) B 10.6 C (6.2)	底部は丸底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。頭部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。底部及び胴部外面はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒 橙色 良好	40% 覆土



第96图 第49号住居跡出土遺物実測図(1)



第97図 第49号住居跡出土遺物実測図(2)

第49号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 198	甕 土師器	A 18.6 B (16.0)	胴部は内彎して立ち上がり、口頸部は外反気味に外傾する。胴部外面は中位から下位にかけてヘラ磨き。内面はヘラナデ。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	40% 覆土
第97図 199	甕 土師器	B (6.7) C 6.8	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。底部はヘラ削り。胴部下位はヘラ磨き。	砂粒・砂礫 赤褐色 普通	20% 床面
200	甕 土師器	A (24.0) B (21.5)	胴部はゆるく内彎しながら、外傾して立ち上がり、口頸部は小さく外反する。底部は全面が開孔している。胴部外面は斜位のヘラ磨き。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい橙色 普通	50% 覆土
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
201	支脚	全長(17.6) 径 6.9	上部が細くなる円柱状を呈す。上・下部は欠損している。	粘土塊から成形	

第50号住居跡（第98図）

（位置） 調査区の中央部，D6b₃区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.4×3.0mの方形。

（主軸方向） N-20°-W。

（壁） 壁高32～36cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅8～16cm，深さ4～10cmを測り，掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

（床） 平坦で硬く踏み固められ堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径30cm，深さ40cmを測る。

（竈） 北壁中央部からやや東寄りの壁を60cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。遺存状態は悪く天井部・袖部は検出されなかった。焚口部と火床部はほぼ同じ高さである。

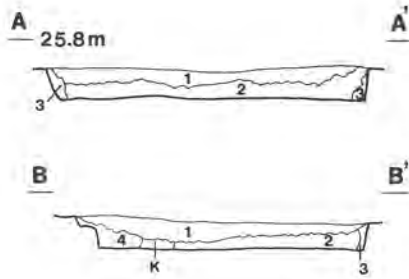
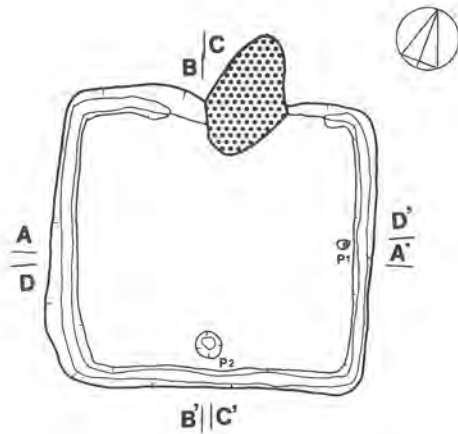
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近と南壁寄りの床面から，土師器甕，須恵器坏・蓋が出土している。

（所見） 本跡は，当遺跡内で数多く検出された，一辺が3m台での竈を有し，柱穴が1か所の小型の住居跡であり，遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

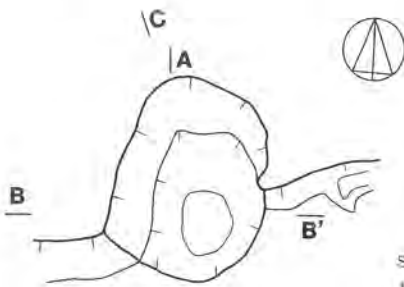
第50号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 202	坏 須恵器	A (12.9)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	30% 覆土
		B 4.1			
		C 7.7			
203	坏 須恵器	A 12.2	底部は上げ底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒 褐灰色 普通	50% 覆土
		B 3.5			
		C 7.7			
204	坏 須恵器	A 13.7	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄色 普通	70% 覆土
		B 4.1			
		C 7.8			
205	坏 須恵器	A 13.2	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がり，端部は丸味をもつ。体部内・外面水挽き整形。底部及び体部下端はヘラ削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	80% 床面
		B 3.8			
		C 7.6			
206	坏 須恵器	A (13.1)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 普通	60% 覆土
		B 4.5			
		C 7.8			
207	坏 須恵器	A (13.6)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。体部内・外面水挽き整形。 底部はヘラ削り。体部は摩耗が著しい。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 普通	40% 覆土
		B 4.3			
		C (8.4)			



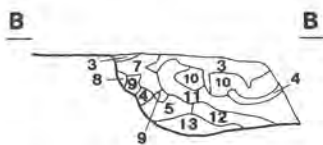
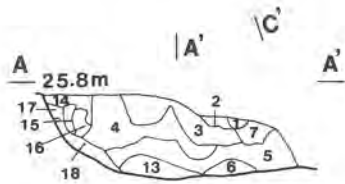
S I-50 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子, ロームブロック, 焼土
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, ロームブロック, 木炭
- 3 ローム
- 4 褐色 ローム・粘土ブロック

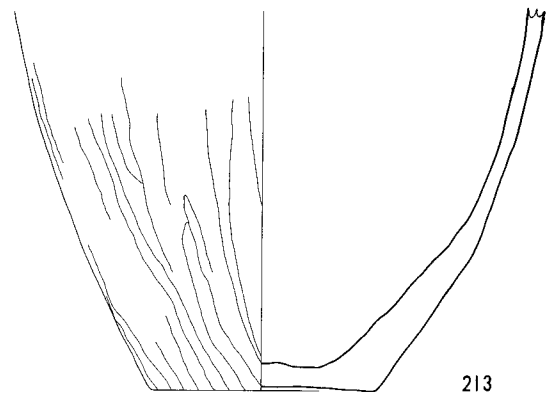
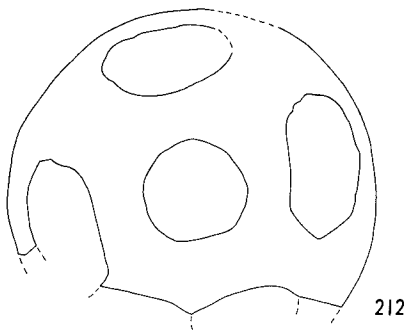
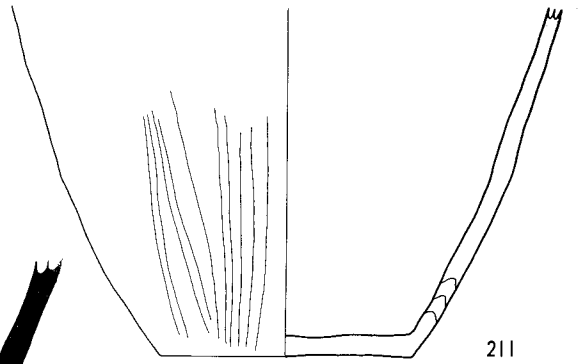
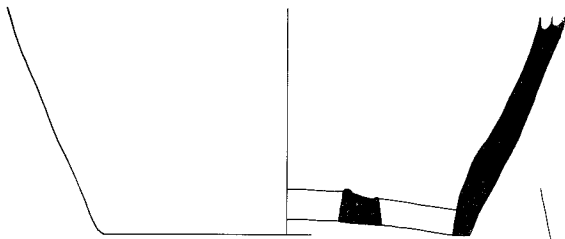
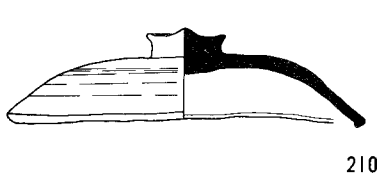
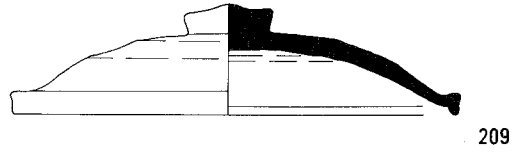
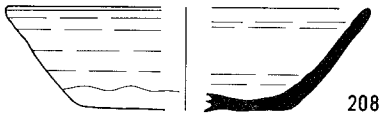
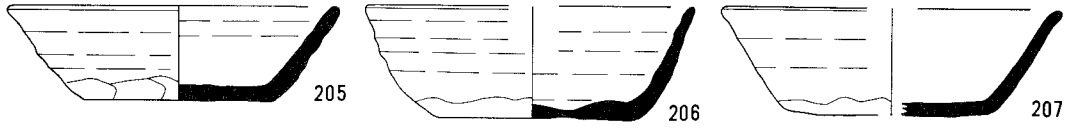
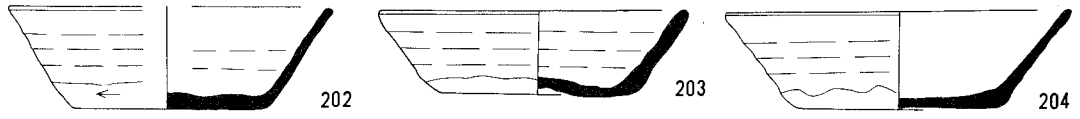


S I-50竈 土層解説

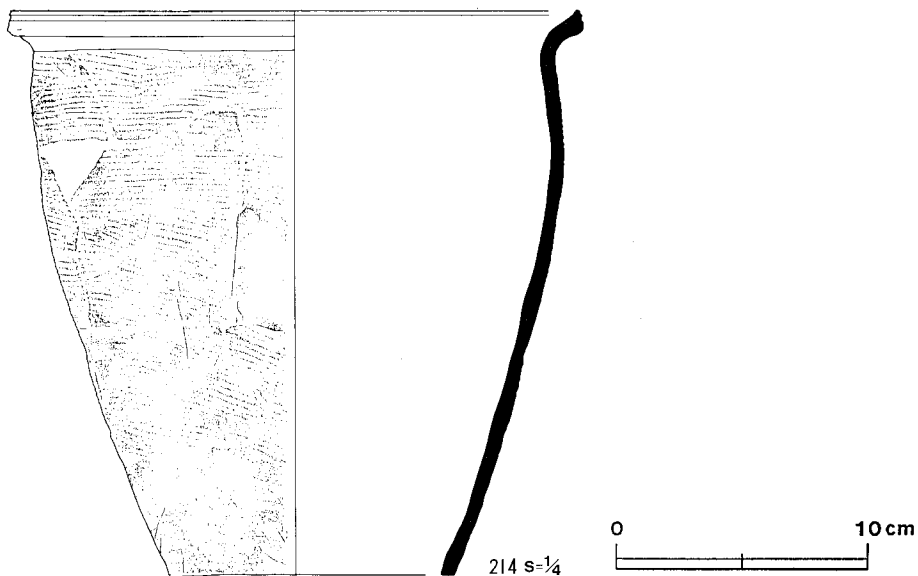
- 1 にぶい黄褐色 焼土粒子, 砂質粘土
- 2 暗褐色 炭化粒子
- 3 暗褐色 ローム・焼土・砂質粘土粒子
- 4 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土ブロック
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック, 炭化物
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土・砂質粘土ブロック
- 7 褐色 焼土・粘土ブロック, 砂岩
- 8 褐色 炭化・砂質粘土粒子
- 9 にぶい赤褐色 焼土粒子
- 10 にぶい褐色 粘土ブロック, 砂粒
- 11 褐色 焼土・炭化粒子, ローム・粘土ブロック
- 12 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 灰
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック
- 14 褐色 ローム・焼土・粘土粒子
- 15 褐色 粘土粒子
- 16 暗赤褐色 焼土粒子・焼土ブロック
- 17 にぶい赤褐色 焼土, 粘土粒子
- 18 暗褐色 ローム・粘土粒子, 粘土ブロック



第98図 第50号住居跡・竈実測図



第99图 第50号住居跡出土遺物実測図(1)



第100図 第50号住居跡出土遺物実測図(2)

第50号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 208	坏 須恵器	A (14.4)	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部はヘラ削り。体部下端は 回転ヘラ削り後ナデ。	砂粒・砂礫 黄灰色 普通	20% 覆土
		B 3.9			
		C (8.8)			
209	蓋 須恵器	A 17.8	宝珠形つまみがつく。天井部は丸味をもち、口縁部に 至る。口縁部は屈曲し、端部は短く垂下する。 器内・外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰色 良好	90% 床面
		B 4.4			
		F 3.5			
		G 1.1			
210	蓋 須恵器	A 13.8	つまみは扁平で、中央部が突出する。天井部は歪みが著 しく、口縁部は僅かに内側に屈曲し、端部は尖る。器内・ 外面水挽き整形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫 黄灰色 普通	100% 覆土
		B 3.9			
		F 3.1			
		G 1.0			
211	甕 土師器	B (14.0)	底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。底部はヘ ラ削り後ナデ。胴部外面は縦方向のヘラ磨き。	砂粒・砂礫 明赤褐色 普通	40% 竈
		C 9.9			
212	甕 須恵器	B (9.1)	開孔部は5か所で、胴部は直線的に外傾して立ち上がる。 胴部下位に叩き目。	砂粒 黄灰色 普通	20% 覆土
		C 14.7			
213	甕 土師器	B (15.3)	底部破片。底部は上げ底を呈し、胴部は内彎気味に立ち 上がる。 胴部外面ヘラ磨き。	砂粒・砂礫・長石 におい赤褐色 普通	30% 床面
		C 8.8			

第50号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 214	甗 須恵器	A 30.1	胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は強く外面に屈曲する。口縁部は上下に突出し、断面三角形状を呈する。	砂粒・砂礫・長石 褐色 普通	50% 甗
		B 29.9			
		C (15.2)			

第51号住居跡（第101図）

（位置） 調査区の東側，C6is区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.2×3.2mの方形。

（主軸方向） N-16°-W。

（壁） 壁高45～50cmを測り、垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 全体に平坦であり、硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 3か所（P₁～P₃）。掘り込みは、径25～40cm、深さ15～40cmと比較的浅いが、全て主柱穴である。

（竈） 北壁中央部を壁外へ60cm程掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部がわずかに残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化して、焼土粒・炭化物粒が充填し、焚口部から火床部にかけては緩やかに立ち上がり煙道に至る。煙道部は煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

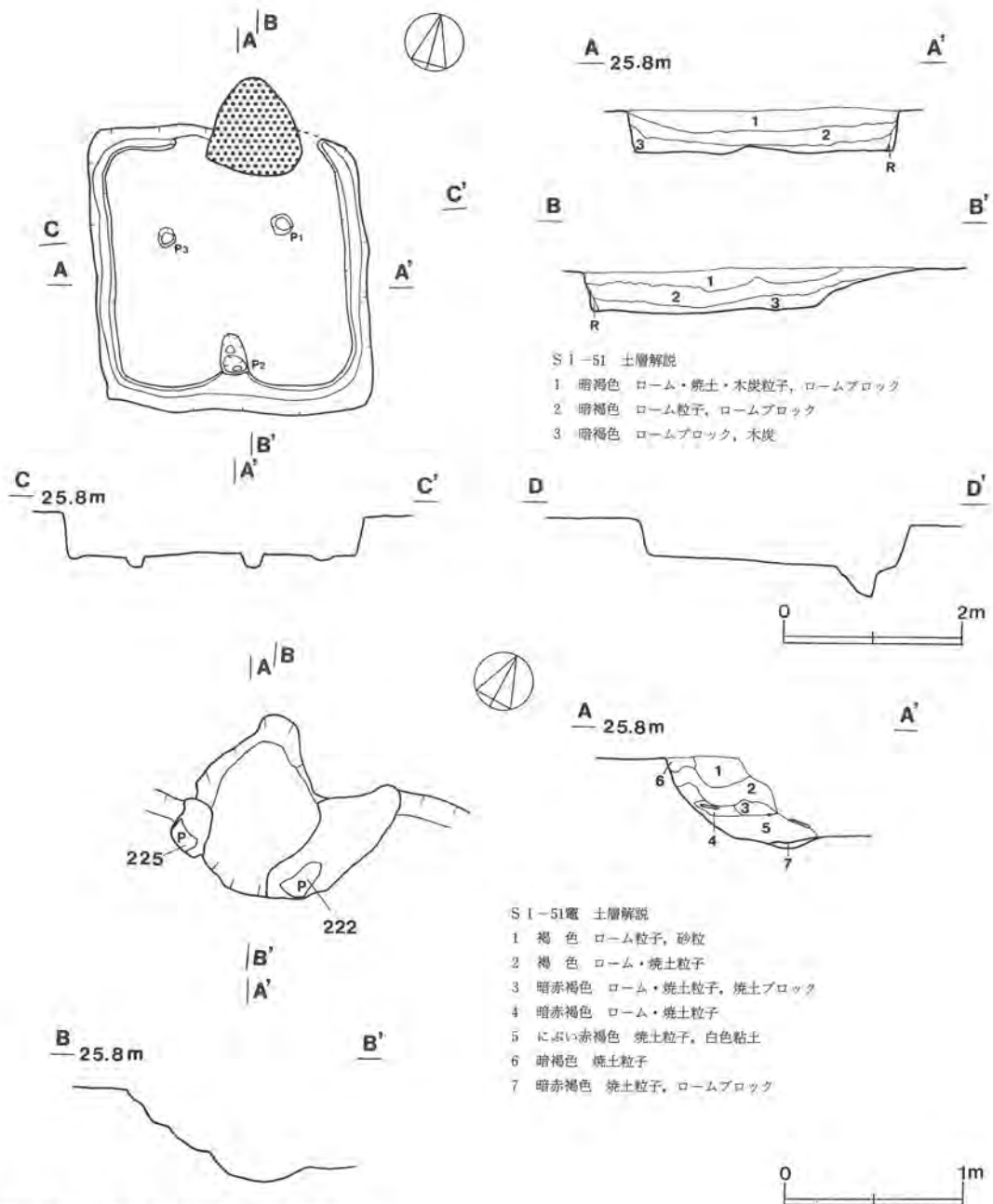
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物は竈付近に散乱した状況で出土している。土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）の破片類が多く、いずれも残存率は低い。221・222は、土師器甕で竈の天井部の補強材や袖部の袖の芯として使用された状態で出土している。

（所見） 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して、10世紀前半に比定される住居跡である。

第51号住居跡出土遺物解説表

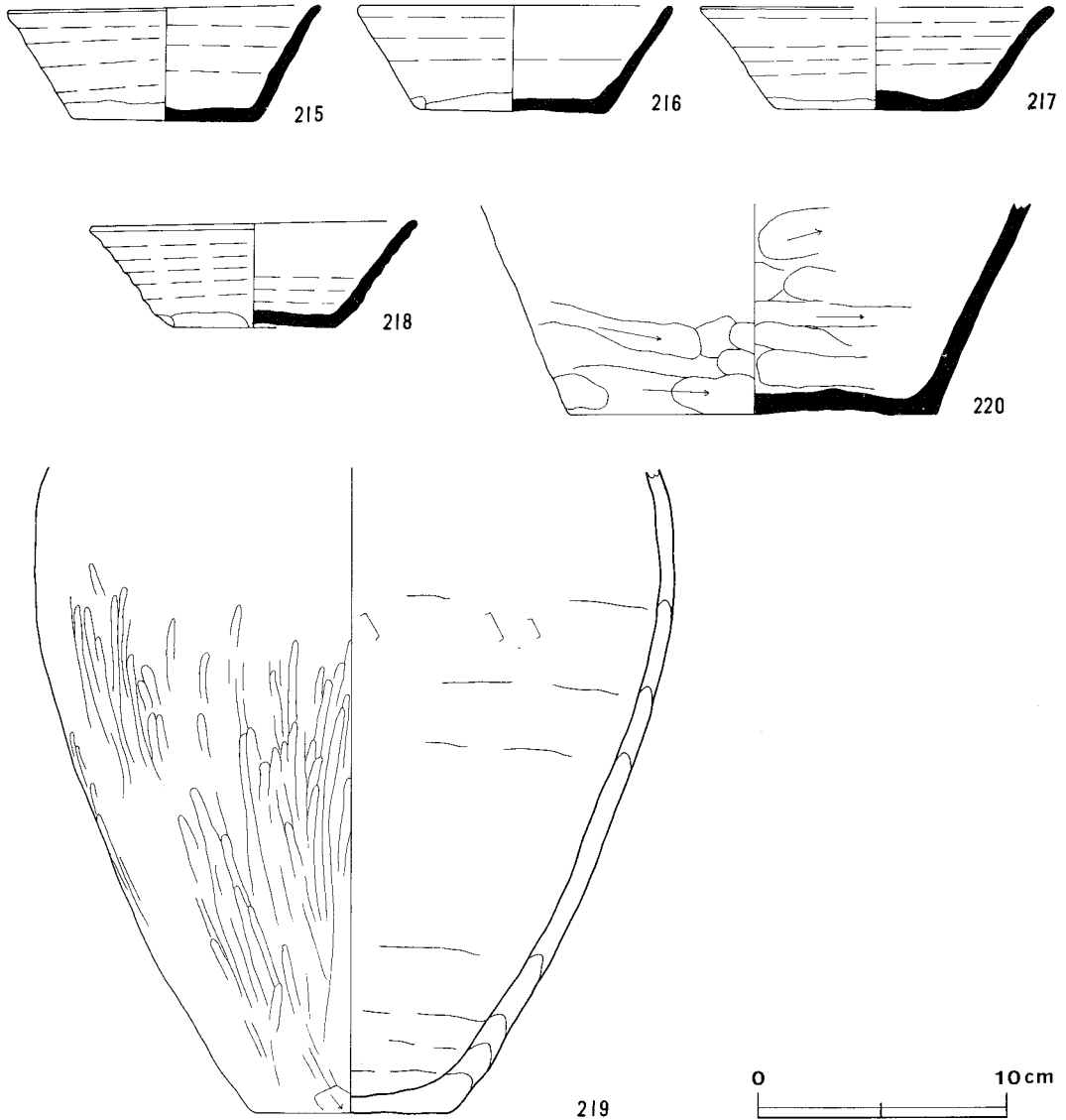
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 215	坏 須恵器	A 12.8	体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。 体部内・外面とも水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	90% 床面
		B 4.8			
		C 7.2			
216	坏 須恵器	A 12.7	体部はやや内彎気味に立ち上がる。体部内・外面とも水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	100% 覆土
		B 4.4			
		C 7.5			



第101図 第51号住居跡・竈実測図

第51号住居跡出土遺物解説表

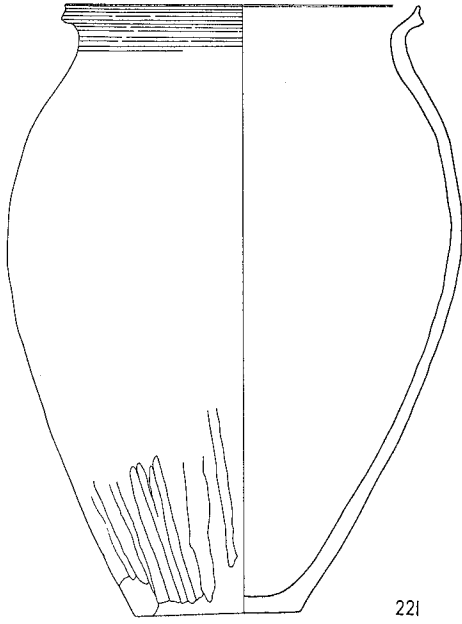
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 217	坏	A 14.1	体部から口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸くなる。	砂粒・砂礫・雲母	50%
	須恵器	B 4.2	体部内・外面とも水挽き整形。底部ヘラ切り。	灰黄褐色	底部に墨書
		C (8.2)		普通	覆土



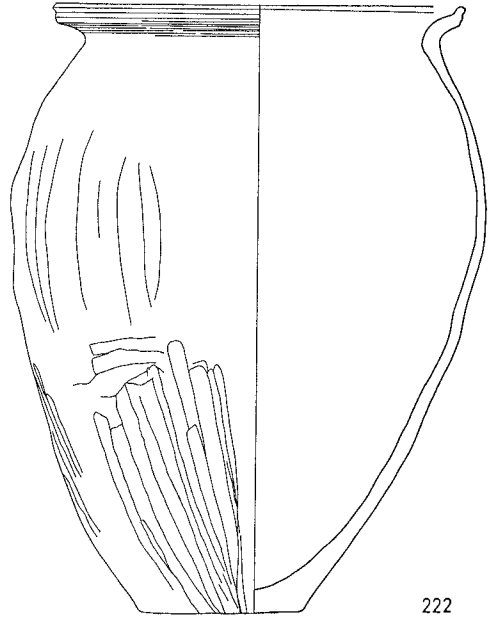
第102図 第51号住居跡出土遺物実測図(1)

第51号住居跡出土遺物解説表

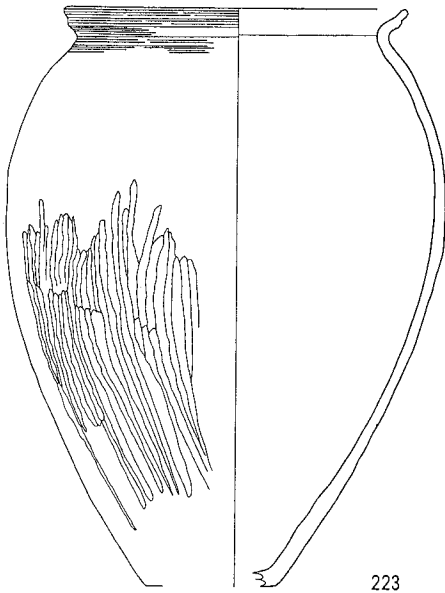
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 218	坏 須恵器	A 13.1	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	70% 覆土
		B 4.4			
		C 6.6			
219	甗 土師器	B (26.3) C (8.9)	胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。胴部から底部にかけてはへらナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 良好	40% 覆土



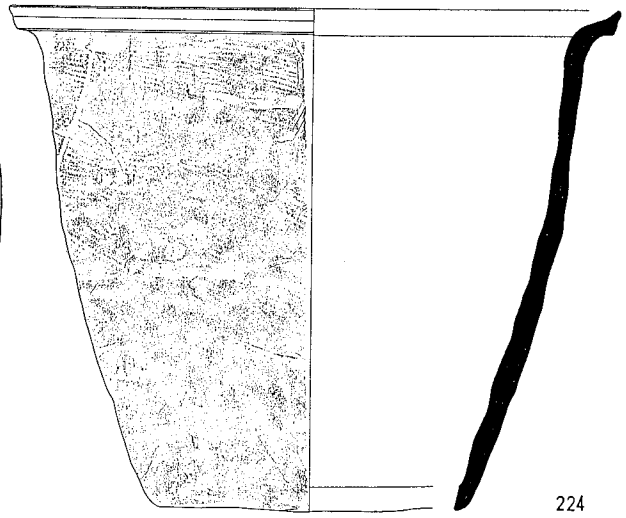
221



222



223



224

0 10cm

s=1/4

第103图 第51号住居跡出土遺物実測図(2)

第51号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 220	甕 須恵器	B (8.5) C 15.0	胴部は内彎気味に立ち上がる。 外面はヘラ削り後ナデ。胴部上半分は平行叩き目。内面下半部指頭によるナデ。	砂粒・長石・雲母 灰色 良好	10% 覆土
第103図 221	甕 土師器	A 18.6 B 32.0 C 8.7	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内上方につまみ出されている。 胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	60% 竈
222	甕 土師器	A 21.3 B 32.2 C 8.5	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・砂礫 明赤褐色 普通	90% 竈
223	甕 土師器	A 17.9 B 30.6 C (6.9)	底部は欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 橙色 普通	70% 竈
224	甕 須恵器	A (32.0) B 26.7 C 15.7	胴部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は直角に屈曲する。 胴部外面横位の平行叩き目。下位はヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 黄灰色 普通	50% 竈

第52号住居跡（第104図）

（位置） 調査区の中央部，D6b₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.0×3.8mの方形。

（主軸方向） N-27°-W。

（壁） 壁高40cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10～25cm，深さ10～15cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 平坦で，硬く踏み固められて堅緻である。

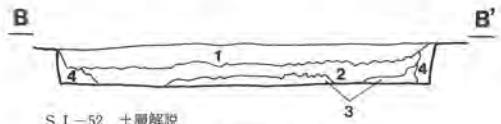
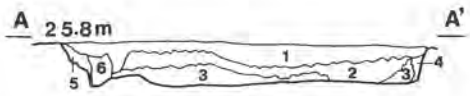
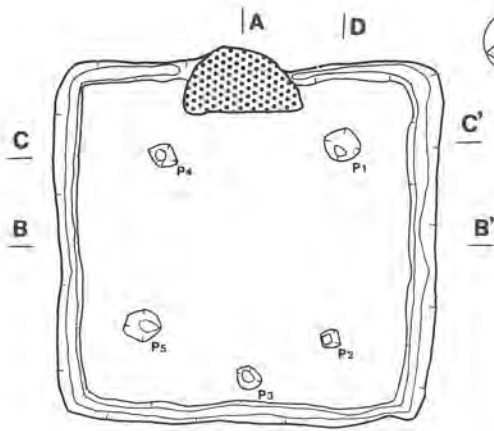
（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径30～35cm，深さ45～60cmと比較的深く，支柱穴はP₁～P₅の5本である。

（竈） 北壁中央部を55cm程掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部は崩壊，馬蹄形を呈す。焚口部から燃焼部・煙道部へかけての内壁は焼けて焼土化している。

（覆土） 自然堆積。

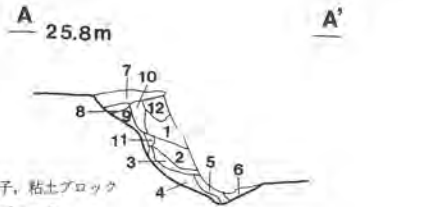
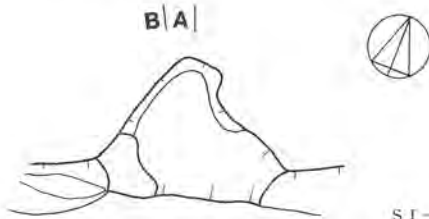
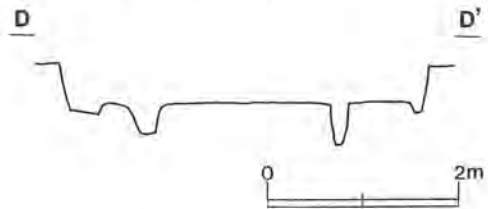
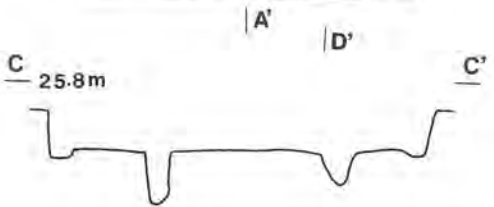
（遺物） 覆土下層から，土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕・蓋）の小破片類がわずかに出土している程度である。226の須恵器蓋は，南壁下層から出土している。

（所見） 本跡は5本柱で，比較的小型の住居跡であるが，遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



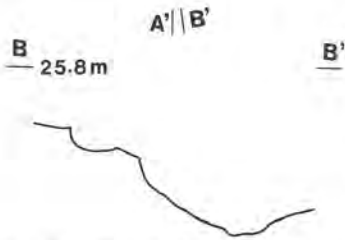
S I-52 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, 木炭
- 3 黒褐色 ロームブロック, 焼土粒子, 粘土
- 4 暗褐色 ローム・焼土粒子, 黒色土
- 5 攪乱
- 6 暗褐色 ロームブロック, 焼土粒子

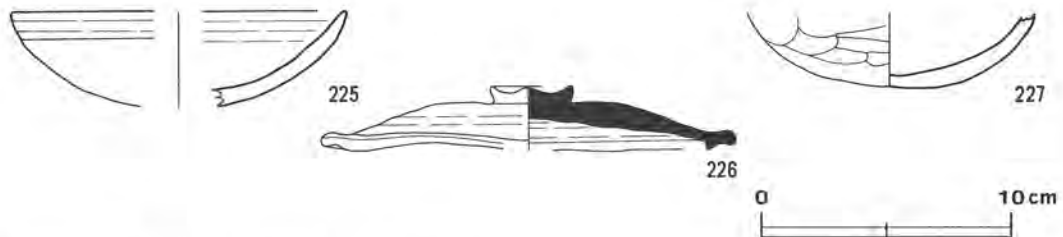


S I-52 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土ブロック
- 2 暗赤褐色 ローム・焼土ブロック
- 3 褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 4 褐色 ロームブロック
- 5 暗褐色 焼土粒子, 粘土ブロック, 砂粒
- 6 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 7 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 8 暗褐色 ローム粒子
- 9 褐色 ローム小ブロック
- 10 暗赤褐色 焼土粒子, 砂粒
- 11 褐色 ローム中ブロック
- 12 暗褐色 ローム・焼土粒子



第104図 第52号住居跡・竈実測図



第105図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 225	坏 土師器	A (13.6) B (3.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。 体部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	20% 覆土
226	蓋 須恵器	A (16.8) B 2.6 F 3.3 G 0.7	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付き、天井部 はやや平坦。返りは断面三角形で口縁を結ぶ線よりも外 へ出る。 つまみ内側は回転へラ削り。天井部から体部は水挽き整 形。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	40% 覆土
227	碗 土師器	B (3.0)	底部破片。底部は丸底を呈し、内彎気味に立ち上がる。 体部外面へラ削り後ナデ。	砂粒・小礫 にぶい橙色	30% 床面

第53A号住居跡（第106図）

（位置） 調査区の中央部，D6c₅区を中心に確認。

（重複） 中央部から北西部にかけ第53B号住居跡，第6・7・8・9・10号土坑と重複している。

（規模と平面形） (4.0) × (3.9) mの方形。

（主軸方向） N-24°-W。

（壁） 残存している東・南壁は壁高30cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅15cm，深さ10~12cmを測り，掘り込み断面形状はU状を呈し，北壁の一部と東・南壁下に廻る。

（床） 平坦で，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径30cm，深さ20~40cmを測る。P₁・P₂は支柱穴の一部である。

（竈） 第6号土坑によって破壊され，火床部がわずかに残存している程度である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から，土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）の小破片と砥石が出土し，いずれも残存率は低い。

（所見） 本跡は第53B号住居跡と第6・7・8・9・10号土坑によって破壊され全容は把握できないが，住居跡の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第53B号住居跡（第106図）

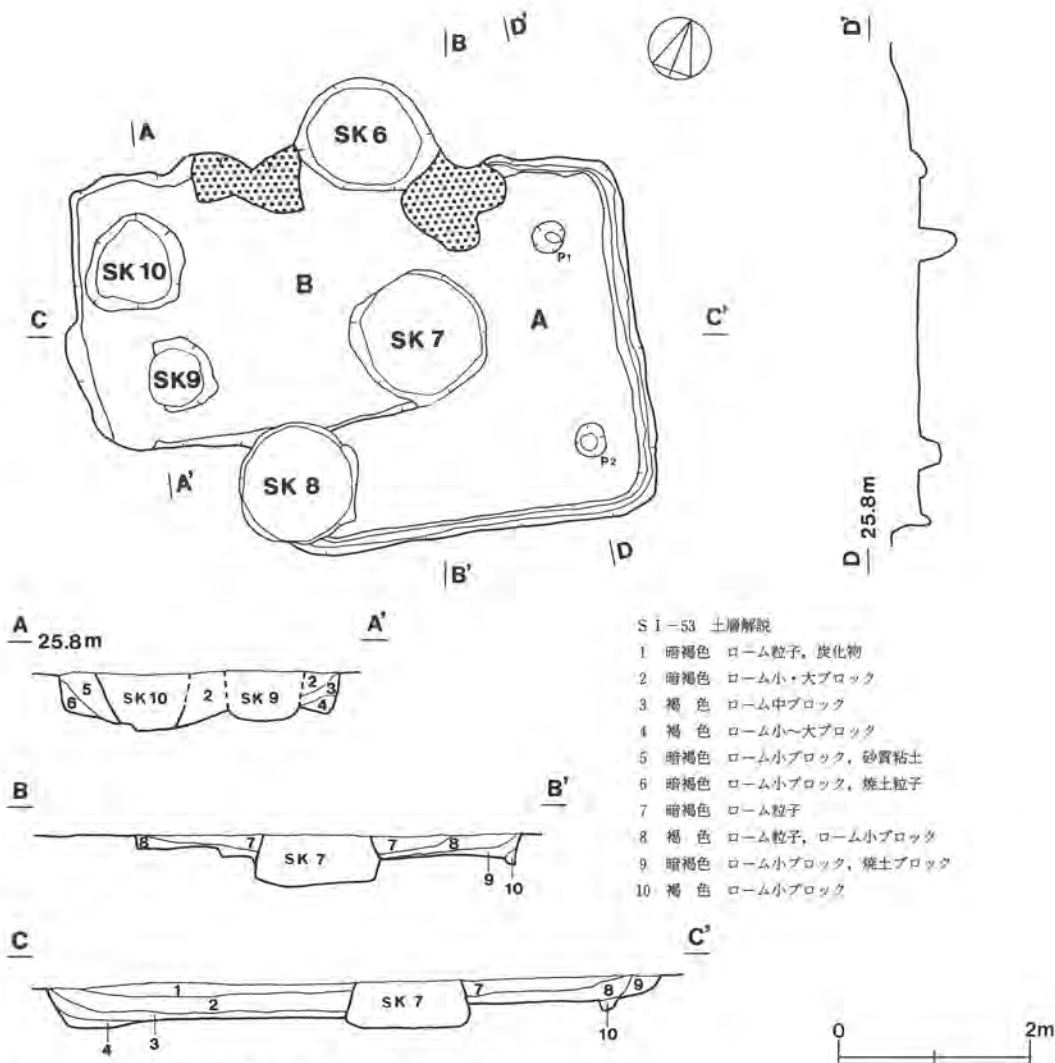
（位置） 調査区の中央部，D6c₄区を中心に確認。

（重複） 東・南・西・北壁にかけて，第53A号住居跡，第6・7・8・9・10号土坑と重複している。

（規模と平面形） (3.7) × (3.0) mの方形。

（主軸方向） N-58°-E。

（壁） 残存している北・南・西壁は壁高40cmを測り，垂直に立ち上がる。



Si-53 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子、炭化物
- 2 暗褐色 ローム小・大ブロック
- 3 褐色 ローム中ブロック
- 4 褐色 ローム小〜大ブロック
- 5 暗褐色 ローム小ブロック、砂質粘土
- 6 暗褐色 ローム小ブロック、焼土粒子
- 7 暗褐色 ローム粒子
- 8 褐色 ローム粒子、ローム小ブロック
- 9 暗褐色 ローム小ブロック、焼土ブロック
- 10 褐色 ローム小ブロック

第106図 第53A・B号住居跡実測図

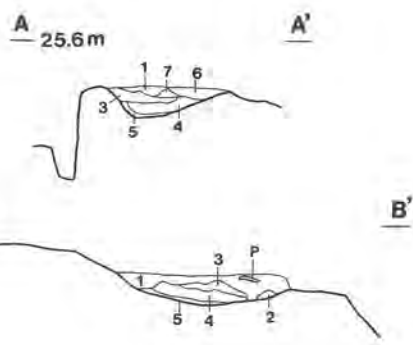
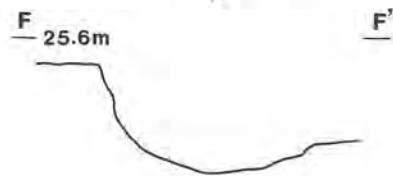
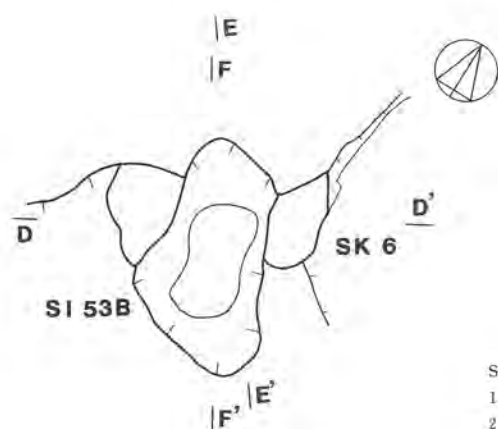
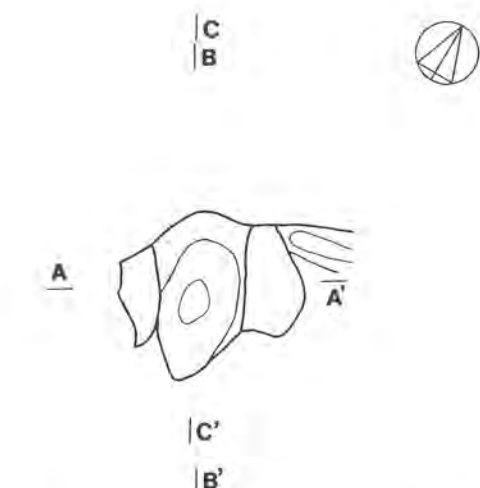
(床) 残存している中央部は硬く踏み固められているが、他は重複して床は検出されない。

(竈) 北壁中央部の壁を25cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部は崩壊、袖部の一部が残存して馬蹄形を呈している。焚口部から燃焼部にかけては焼土化し、煙道部は、比較的緩やかな立ち上がりを呈している。

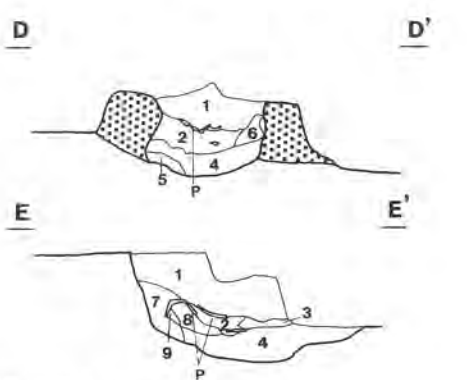
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈内から、土師器(甕)の破片が出土している。234は、土師器甕底部破片で天井部の補強材として使用された状態で出土している。

(所見) 本跡は、第53A号住居跡の埋没後に掘り込んで構築し、本跡の廃絶後に第6・7・8・9・10号の土坑によって掘り込まれている。遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。



- SI-53A竈 土層解説
- 1 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, 砂粒
 - 2 褐色 ローム粒子
 - 3 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
 - 4 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 5 暗褐色 焼土粒子
 - 6 暗褐色 ローム・焼土粒子
 - 7 にぶい赤褐色 ローム粒子, 砂粒

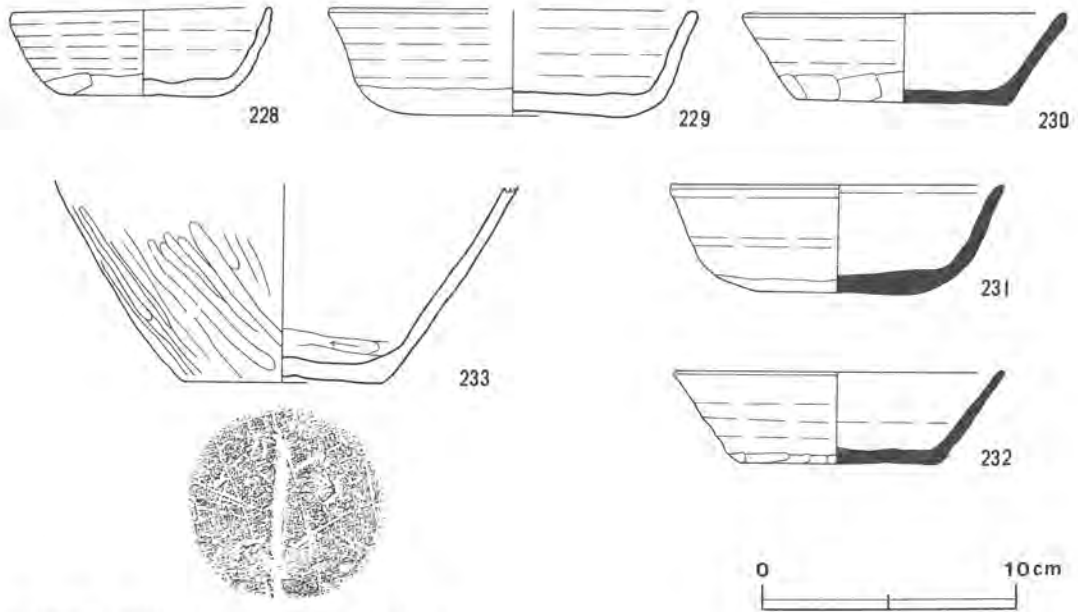


- SI-53B竈 土層解説
- 1 褐色 焼土・粘土粒子, 焼土・粘土ブロック
 - 2 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 3 黒褐色 焼土粒子, 粘土
 - 4 暗褐色 ローム・焼土・炭化・粘土粒子
 - 5 褐色 ローム粒子
 - 6 にぶい赤褐色 焼土・粘土粒子, 焼土・粘土ブロック
 - 7 暗褐色 ローム・焼土・粘土粒子, 焼土・粘土ブロック
 - 8 赤褐色 焼土粒子
 - 9 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子, 粘土

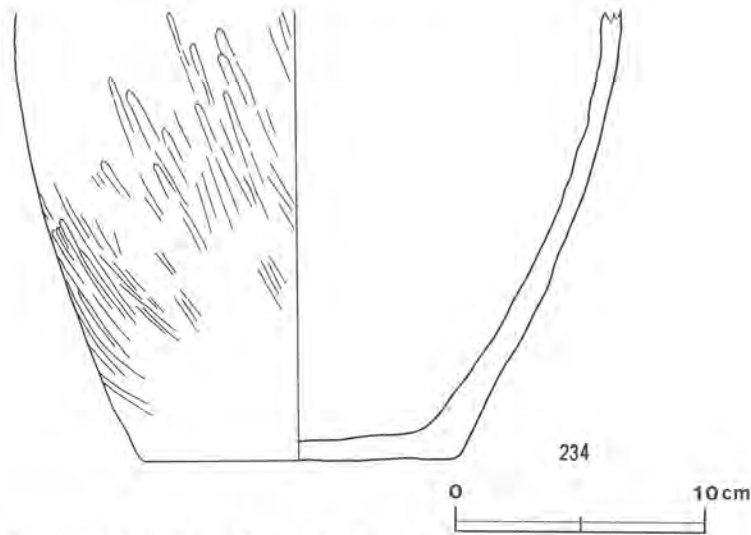
第107図 第53A・B号住居跡竈実測図

第53A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 228	坏	A 10.3	体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内・外面は水挽き整形。底部へラ切り後ナデ。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	90% 床面
	土師器	B 3.6			
		C 6.8			



第108図 第53A号住居跡出土遺物実測図



第109図 第53B号住居跡出土遺物実測図

第53A号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 229	坏 土師器	A (14.6)	体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。 内・外面は水挽き整形。底部ヘラナデ。	砂粒・長石 褐色 良好	50% 電
		B 4.3			
		C 8.7			
230	坏 須恵器	A 12.8	体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反して丸味をもつ。 内・外面は水挽き整形。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	90% 覆土
		B 3.7			
		C 8.4			

第53 A 号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 231	坏 須恵器	A 13.2	体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。 内・外面は水挽き整形。底部ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい黄橙色 普通	70% 器内面に煤附着 覆土
		B 4.4			
		C 6.3			
232	坏 須恵器	A (13.0)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄褐色 普通	50% 覆土
		B 3.7			
		C 7.8			
233	甕 土師器	B (8.0)	胴部は内彎気味に立ち上がる。外面ヘラ削り。内面指頭 によるナデ後にヘラナデ。	砂粒・長石 明褐色 良好	20% 底部に木葉痕 甕
		C 8.0			

第53 B 号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 234	甕 土師器	B (18.0)	底部は平底で胴部は、内彎気味に立ち上がる。 胴部外面斜位方向のヘラ削りが施されている。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	30% 甕
		C 12.6			

第54号住居跡（第110図）

（位置） 調査区の中央部、C6c₂区を中心に確認。

（重複） 中央部から北西側にかけて第4号地下式壙と重複している。

（規模と平面形） 3.2×2.9mの方形。

（主軸方向） N-21°-W。

（壁） 残存している東・南壁は壁高20cmを測り、垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10cm、深さ8cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈し、東・南壁下の一部に検出。

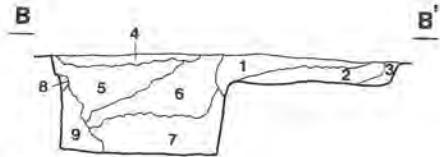
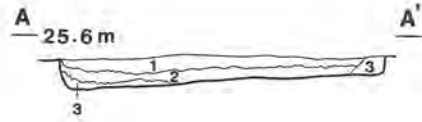
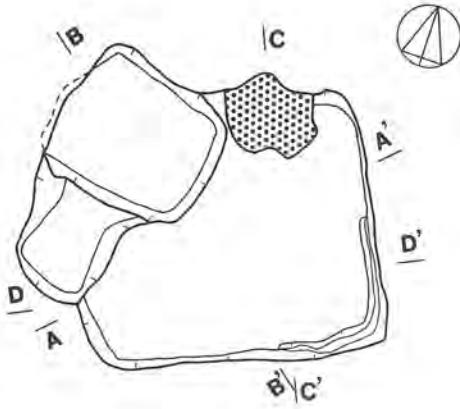
（床） 若干凸凹が認められるが、全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（竈） 北壁中央部からやや東寄りに位置し、北壁を30cm程壁外へ掘り込み粘土・砂によって構築。焚口部から燃焼部・煙道部にかけての遺存状態は良く、火床部は焼土化し、焼土粒・炭化物粒が充填され、焚口部から火床部へかけては緩やかに立ち上がり、煙道部は煙出口近くで急角度で立ち上がる。

（覆土） 自然堆積。

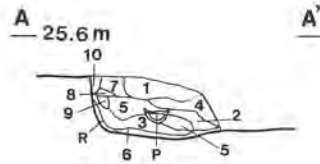
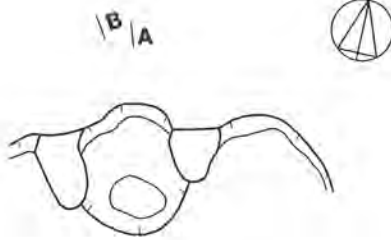
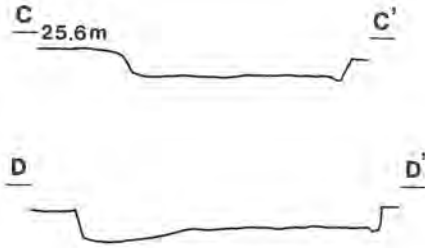
（遺物） 住居跡の中央部から東側にかけての覆土上層から、土師器（坏・甕）・須恵器（坏）の小破片が出土している。236は土師器坏、238・239は須恵器坏で竈天井部の補強材として使用された状態で出土している

（所見） 本跡は第4号地下式壙と重複し、本跡の北西川を破壊し、本跡の埋没五に地下式壙を構築している。本跡は、遺構の形態・遺物から10世紀前半に比定される住居跡である。



S I-54 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子, ロームブロック, 木炭
- 2 暗褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック
- 3 ローム
- 4 暗褐色 ローム・焼土粒子, ロームブロック
- 5 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 6 暗褐色 ローム・褐色土ブロック, 焼土, 木炭粒子
- 7 暗褐色 ローム粒子, 褐色土ブロック
- 8 ローム
- 9 褐色 ローム・黒色土ブロック

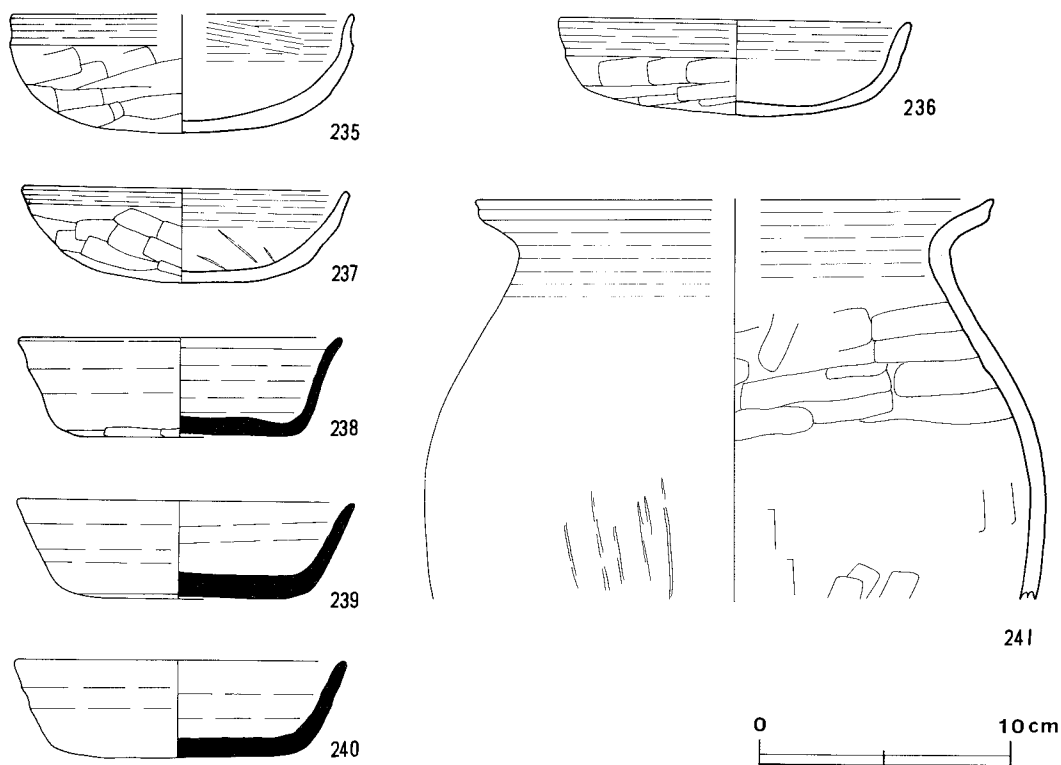


S I-54竈 土層解説

- 1 におい褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土ブロック
- 2 暗赤褐色 焼土・炭化粒子
- 3 褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 4 褐色 ローム・焼土粒子
- 5 におい黄褐色 焼土・粘土ブロック
- 6 におい赤褐色 ローム・炭化粒子
- 7 褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土, 砂粒
- 8 褐色 ローム・焼土粒子
- 9 におい赤褐色 焼土粒子, 粘土
- 10 暗褐色 ローム・炭化粒子



第110図 第54号住居跡・竈実測図



第111図 第54号住居跡出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 235	坏 土師器	A (13.6) B 4.8	底部は平底ぎみの丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる。 体部外面へら削り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 良好	60% 覆土
236	坏 土師器	A 14.0 B 3.9	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は小さく外反する。 体部外面へら削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 黄橙色 良好	90% 竈
237	坏 土師器	A (13.0) B 3.8	底部は平底ぎみの丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に不明瞭な稜を持ち、口縁部は小さく外反する。 体部外面へら削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 黄色 普通	70% 覆土
238	坏 須恵器	A 13.0 B 4.0 C 8.0	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、小さく折れる。 底部回転へら切り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・石英・ 雲母 灰色 良好	70% 竈
239	坏 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 7.9	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 底部へら切り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫 オリーブ灰色 普通	90% 竈

第54号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 240	坏 須恵器	A 13.2	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 底部ヘラ切り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・長石 灰黄色 普通	60% 覆土
		B 3.9			
		C 8.9			
241	甕 土師器	A (20.6)	胴部は球形を呈し、頸部から口縁部は「く」の字状に屈曲し口縁端部は丸味をもつ。 胴部外面ヘラ削り。内面指頭・ヘラによる横ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 明褐色 良好	30% 覆土
		B (16.2)			

第56号住居跡 (第112図)

(位置) 調査区の中央部、D5d_s区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.7×3.5mの方形。

(主軸方向) N-15°-W。

(壁) 壁高は43cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅16cm、深さ10cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈し、東・北壁下に部分的に検出。

(床) 中央部は若干窪みが認められるが、平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 2か所(P₁・P₂)。掘り込みは、径38~40cm、深さ9~18cmを測るが、掘り込みは浅く、主柱穴としては捉えられない。

(竈) 北壁中央部の壁を30cm程壁外へ掘り込み粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。焚口部から燃焼部の内壁は焼土化し、焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から火床部へかけては緩く立ち上がり、煙道部は煙出口近くで急角度で立ち上がる。

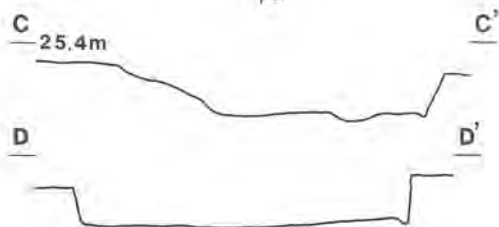
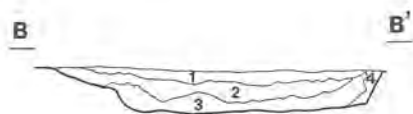
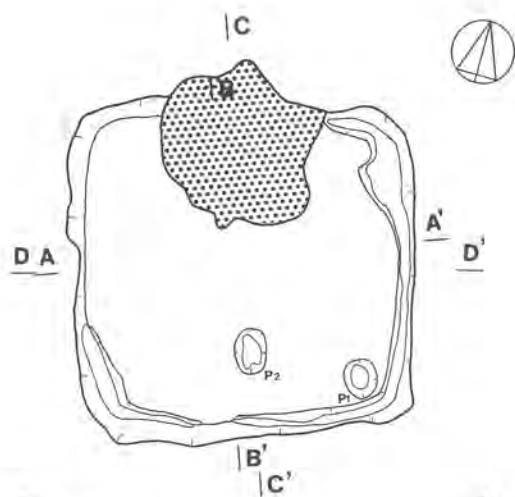
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 遺物は竈付近を中心に土師器(坏・甕)、須恵器(坏・高台付坏・盤・甕・瓦・甗)が出土しているが、いずれも破片である。242の須恵器坏は覆土中層から出土し、243は須恵器坏、246は須恵器甗で、竈天井部の補強材として使用された状態で出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。

第56号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 242	坏 須恵器	A 11.0	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。 体部内・外面とも水挽き整形。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	60% 覆土
		B 3.7			
		C 6.7			
243	坏 須恵器	A 13.5	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。 体部内・外面とも水挽き整形。底部ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	70% 竈
		B 3.9			
		C 7.1			

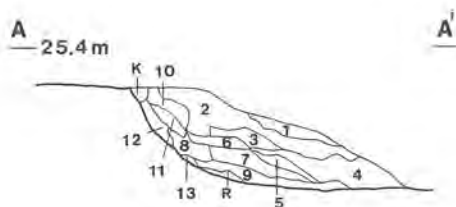
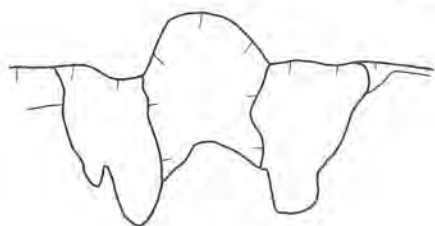


S I-56 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子, ローム小ブロック
- 2 暗褐色 ローム・黒色土ブロック, 木炭粒子
- 3 褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック
- 4 暗褐色 ローム・木炭粒子, ロームブロック
- 5 褐色 ローム・粘土ブロック, 焼土・木炭粒子



A||B

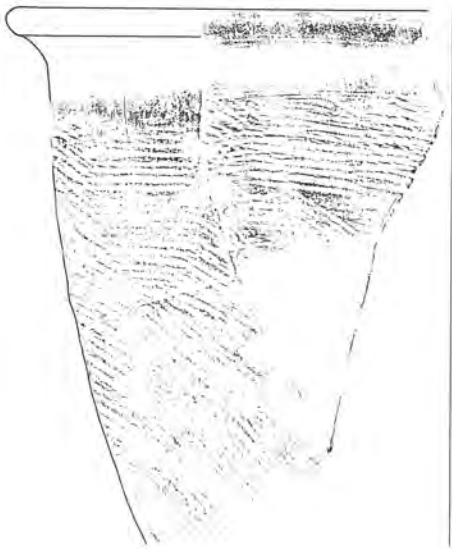
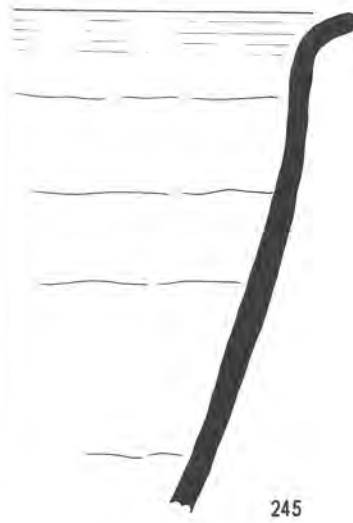
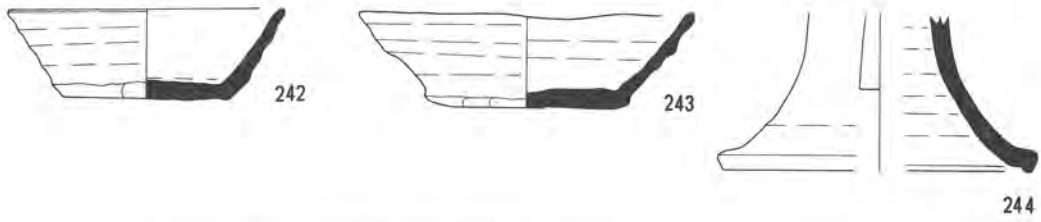


S I-56 土層解説

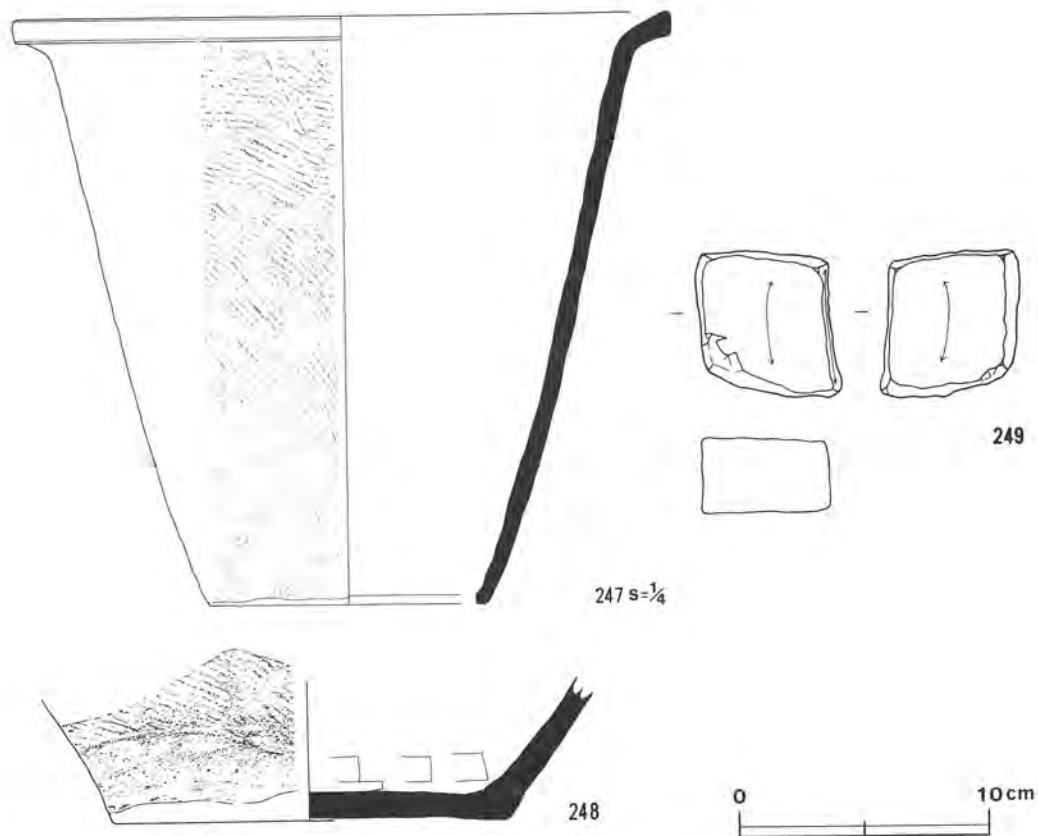
- 1 褐色 ローム・粘土粒子
- 2 暗褐色 ローム・焼土・粘土粒子, ローム小ブロック
- 3 褐色 焼土・粘土粒子
- 4 暗褐色 ローム・粘土粒子
- 5 褐色 焼土・粘土粒子
- 6 暗褐色 ローム・焼土・粘土粒子, 焼土ブロック
- 7 褐色 焼土・粘土粒子, ローム小ブロック
- 8 暗赤褐色 焼土・粘土粒子, ローム小ブロック
- 9 暗赤褐色 焼土・粘土ブロック
- 10 暗褐色 焼土粒子, 粘土
- 11 暗赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック・粘土
- 12 褐色 ローム・焼土粒子
- 13 褐色 ローム



第112図 第56号住居跡・竈実測図



第113图 第56号住居跡出土遺物実測図(1)



第114図 第56号住居跡出土遺物実測図(2)

第56号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 244	高坏 須恵器	A (12.4) B (6.3)	脚部は「ハ」の字状に開き、中位に透し孔を三方に穿つ。 体部内・外面とも水挽き整形。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	20% 覆土
245	甗 須恵器	A (29.2) B (20.2)	胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部外面は平行叩き目。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	10% 甗
246	甗 須恵器	A (35.3) B (21.6)	胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に 屈曲する。 体部外面は平行叩き目。内面に指頭痕。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	10% 甗
第114図 247	甗 須恵器	A (34.5) B 31.5 C (14.6)	胴部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は直角に屈 曲する。 胴部外面は、斜位の平行叩き目。下位はへら削り。口縁 部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰白色 普通	30% 甗
248	甗 須恵器	B (5.6) C 15.9	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。 体部外面は叩き目。底部周辺内・外面指頭によるナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 普通	40% 床面

第56号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
第114図 249	砥石	全長 5.9 幅 5.9 厚さ 3.9 重さ 162.0g	方形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。中央部の使い減り顕著。	凝灰岩

第57号住居跡（第115図）

（位置） 調査区の中央部，D5b₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.9×3.4mの方形。

（主軸方向） N-5°-E。

（壁） 壁高は22cmを測り，若干外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈し，北・南西壁下の一部からは検出されなかった。

（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 6か所（P₁～P₆）。掘り込みは，径20cm，深さ10cm前後で，掘り込みが浅く本跡に伴う主柱穴とは考えがたい。

（竈） 北壁中央部の壁を55cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。燃烧部の内壁は焼土化し，覆土には焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から煙道部は急角度で立ち上がる。

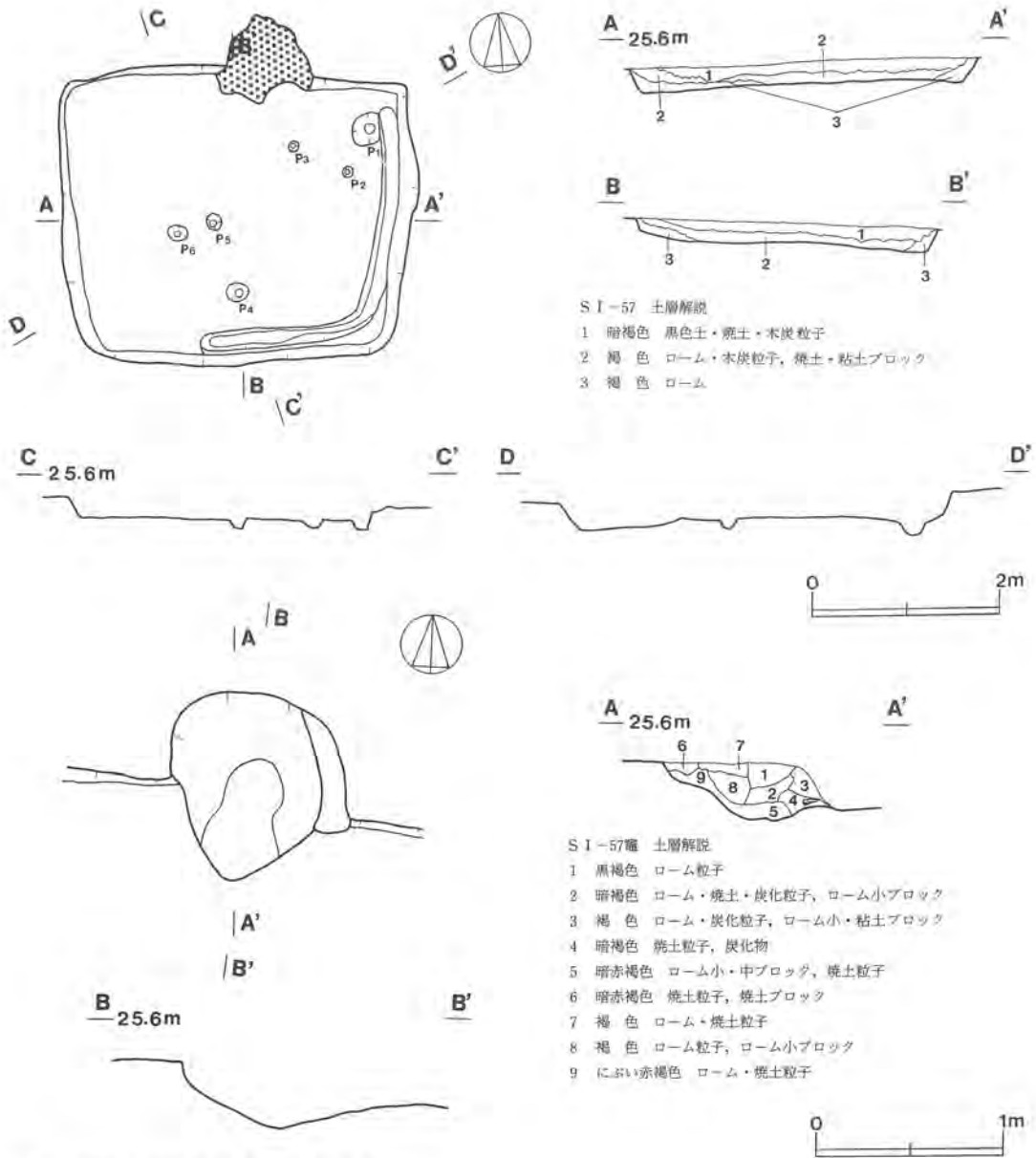
（覆土） 自然堆積。全層に焼土・木炭粒子・ロームブロックが含まれる。

（遺物） 本跡に伴う遺物は，竈付近から土師器（坏・高台付坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が出土している。土師器高台付坏片は竈天井部の補強材として使用された状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。

第57号住居跡出土遺物解説表

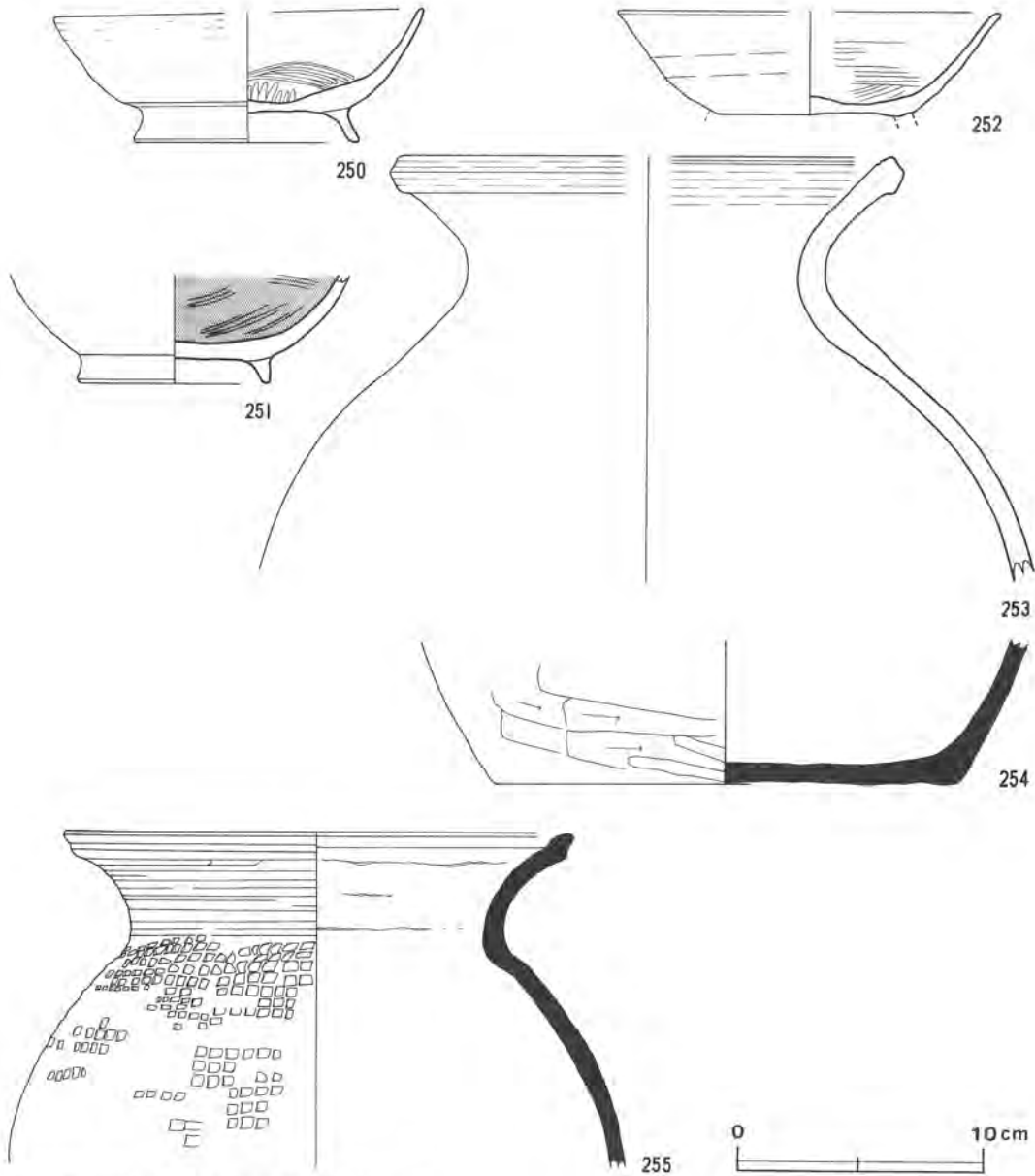
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 250	高台付坏 土師器	A (15.2) B 5.5 D 9.2 E 1.5	底部は平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。高台内・外及び口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	40% 竈
251	高台付坏 土師器	B (4.5) D 8.1 E 1.0	底部は平底で「ハ」の字状に開き，高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。高台内・外面は横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 普通	60% 内面黒色処理 覆土
252	高台付坏 土師器	A (15.6) B (4.3)	底部は上げ底気味で，高台は欠損。体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。体部内面ヘラ磨き。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	60% 竈



第115図 第57号住居跡・竈実測図

第57号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 253	甕 土師器	A (20.2) B (17.2)	底部は欠損。胴部から口縁部は「く」の字状に強く外反する。最大径は上半にあり。肩部外面横位ヘラナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・石英・雲母 灰黄色 普通	20% 床面



第116図 第57号住居跡出土遺物実測図

第57号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 254	甕 須恵器	B (5.9) C 19.3	底部平底。胴部は、直線的に外傾して立ち上がる。 外面ヘラ削り後ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	20% 覆土
255	甕 須恵器	A 20.9 B (13.8)	胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈 曲し、口縁部は外上方につまみ出されている。 胴部外面平行叩き目。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい黄橙色 普通	20% 床面

第59号住居跡（第117図）

（位置） 調査区の中央部，D5a₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.7×2.7mの方形。

（主軸方向） N-20°-E。

（壁） 壁高は35～40cmを測り，垂直に立ち上がる。

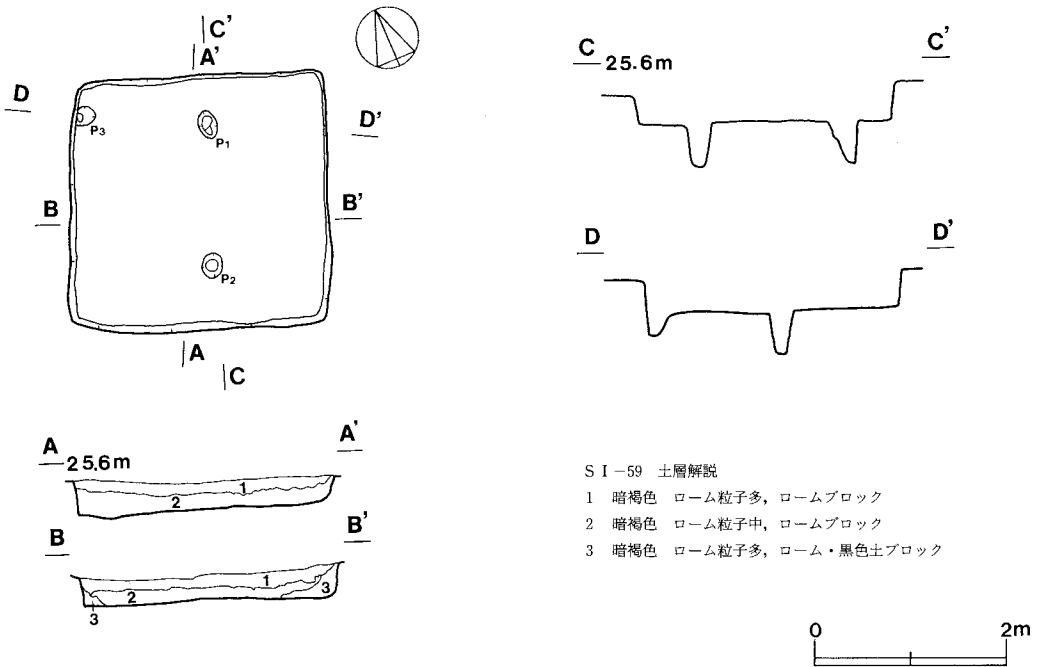
（床面） 平坦で柱穴間が特に硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径30cm，深さ47cmを測り，いずれも支柱穴である。

（覆土） 自然堆積。全層にロームブロック・ローム粒子が含まれる。

（遺物） 覆土上層から，土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）・陶磁器の小片が少量流れ込みの状態で出土している。

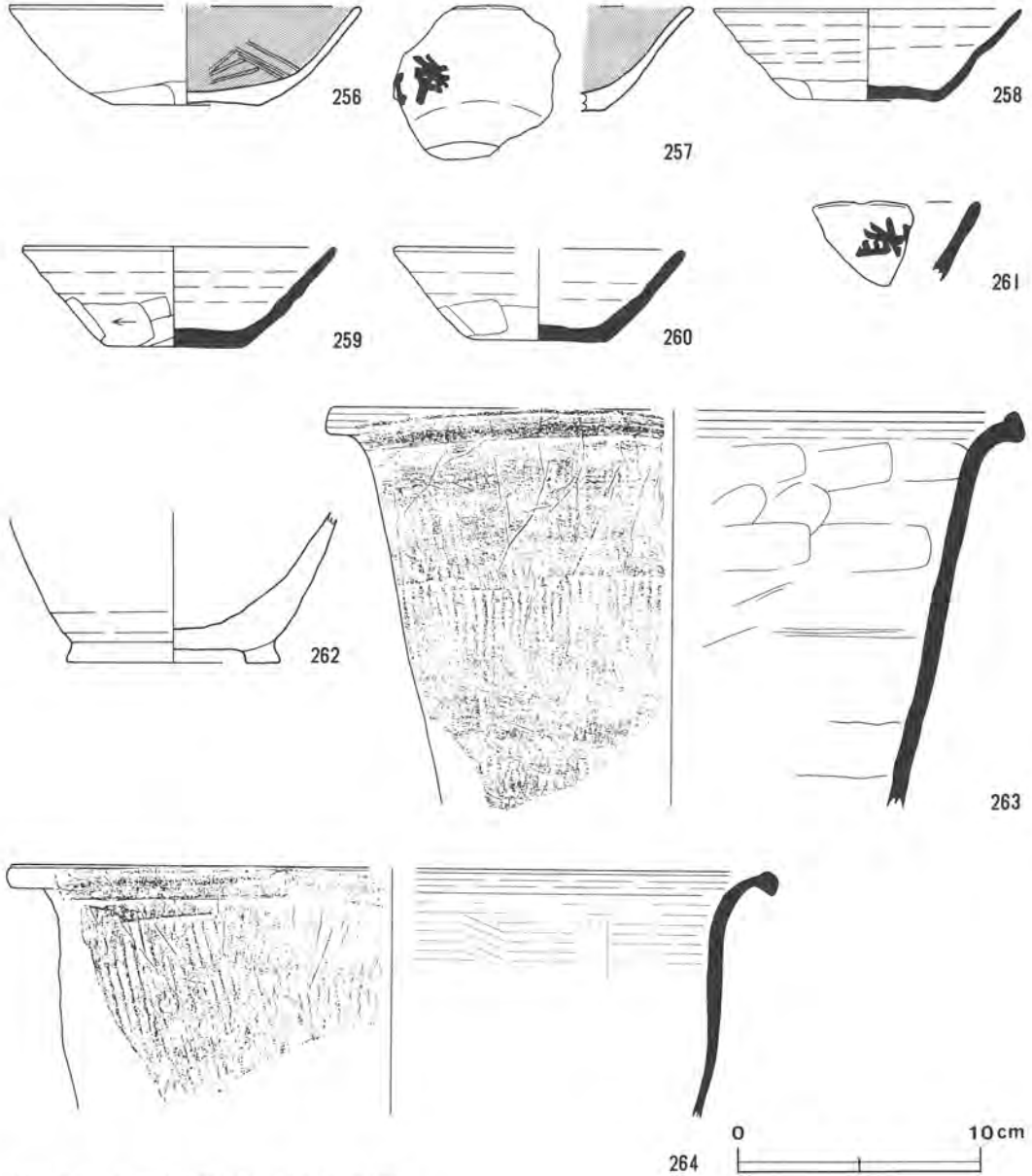
（所見） 本跡は2本柱の小型の堅穴住居跡である。床面の中央部には炭化物・灰が認められ，床もかなり焼土化していることからこの場所には，置き竈か，いろいろが設置されていたものと考えられる。本跡は，遺構の形態から判断して12世紀に比定される小型の住居跡である。



第117図 第59号住居跡実測図

第60号遺構

本跡は、遺構確認の段階で竪穴住居跡として捉えたが、調査の結果、土層堆積状況・形態等から住居跡としてとらえることは不可能であった。



第118図 第60号遺構出土遺物実測図

第60号遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 256	坏 土師器	A (14.6) B 4.2 C (6.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	40% 内面黒色処理 覆土
257	坏 土師器	B 4.3	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ削り。	砂粒・砂礫 橙色 普通	10% 内面黒色処理 体部外面に墨書 覆土
258	坏 須恵器	A 12.8 B 3.9 C 6.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	60% 覆土
259	坏 須恵器	A 12.9 B 4.1 C 5.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	40% 覆土
260	坏 須恵器	A (11.8) B 3.8 C 5.9	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	50% 覆土
261	坏 須恵器	B (3.3)	口縁部破片。 体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	5% 体部外面に墨書 覆土
262	壺 陶磁器	B (6.2) D (8.8) E 0.9	底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がり、高台は「ハ」 の字状に開く。 体部内・外面水挽き整形。高台は貼り付け。	砂粒 黄灰色 良好	20% 覆土
263	甕 須恵器	A (28.4) B (16.3)	口縁部破片。胴部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁 部は「く」の字状に外反して開く。 体部外面平行叩き目。内面指頭によるナデ。口縁部横ナ デ。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	30% 覆土
264	甕 須恵器	A (31.4) B (10.2)	口縁部破片。胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部外反 して大きく開く。 胴部外面平行叩き目。内面指頭による縦位のナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	10% 覆土

第61号住居跡（第119図）

（位置） 調査区西側，C4h₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 5.2×4.9mの方形を呈す。

（主軸方向） N-8°-W。

（壁） 壁高は38cmを測り、若干外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 中央部は若干窪むが，全体に硬く踏み固められて堅緻である。

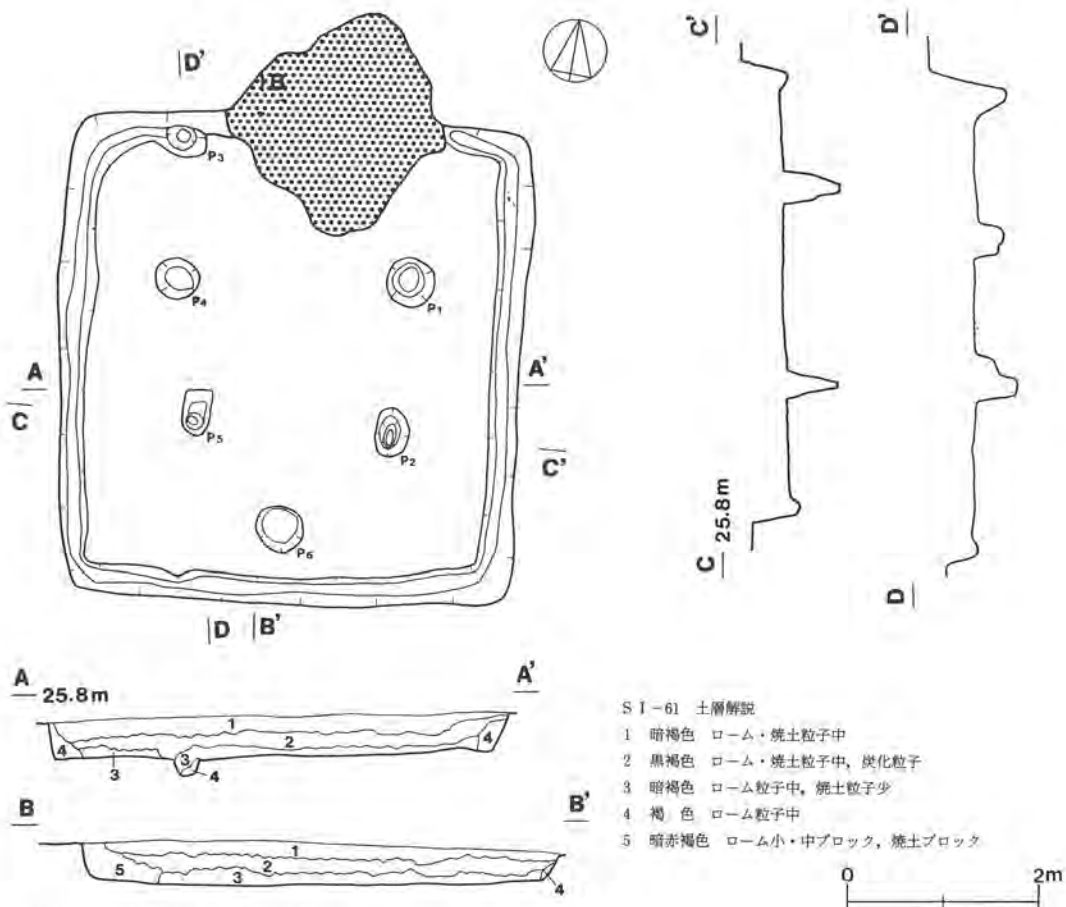
（ピット） 6か所（P₁～P₆）。掘り込みは，径46～55cm，深さ23～62cmを測り，支柱穴はP₁・P₂・P₄～P₆である。

（竈） 北壁中央部の壁を55cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。燃烧部の内壁は焼土化し，焼土粒と炭化物が充填されている。焚口部から煙道部にかけては急角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。全層にローム粒子・木炭・焼土粒子が含まれる。

(遺物) 竈付近と住居跡の中央部から、土師器(坏・高台付坏・甕)・須恵器(坏・甕)の破片が散乱した状態で出土している。

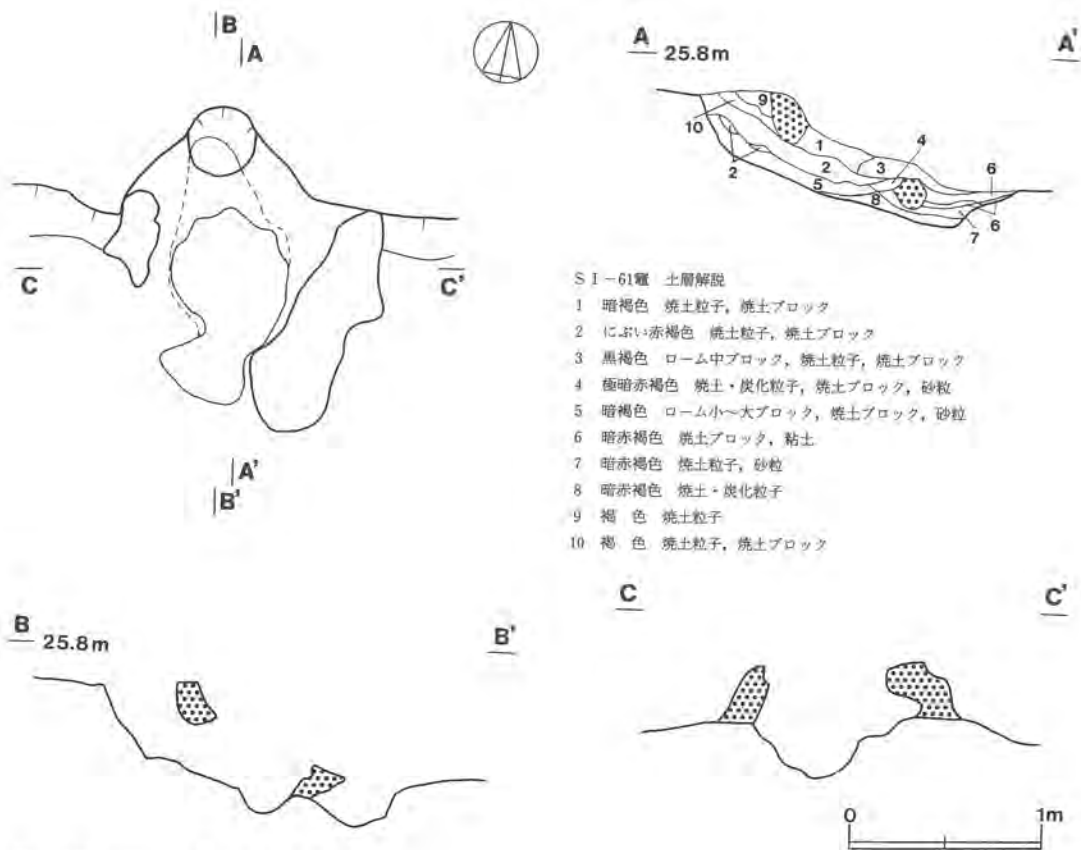
(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



第119図 第61号住居跡実測図

第61号住居跡出土遺物解説表

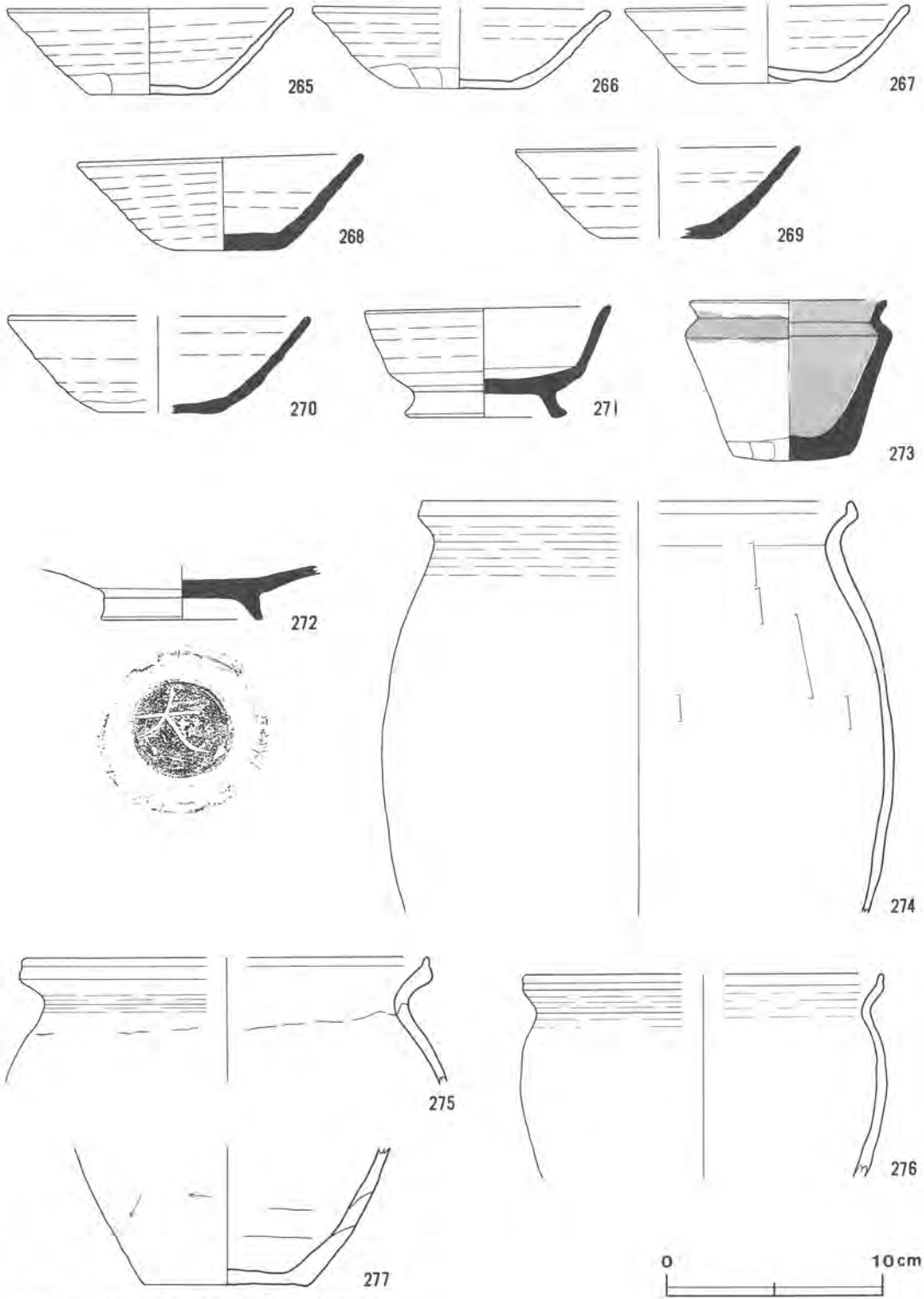
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 265	坏 土師器	A 13.4	底部は上げ底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。	砂粒・雲母にぶい橙色	100%
		B 4.0		普通	
		C 5.7	体部内・外面水挽き整形。底部・底部周辺へら削り。		覆土



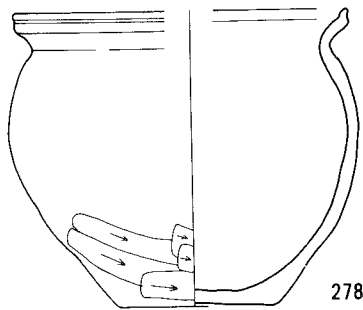
第120図 第61号住居跡竈実測図

第61号住居跡出土遺物解説表

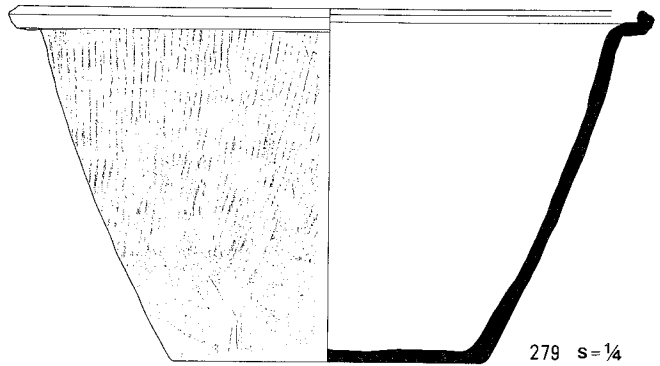
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 266	坏 土師器	A (13.6)	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部・底部周辺ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	30% 覆土
		B 3.8			
		C (6.0)			
267	坏 土師器	A (13.2)	底部は上げ底気味で, 体部は内彎気味に立ち上がり, 口 縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫 橙色 不良	50% 覆土
		B 3.6			
		C (6.6)			
268	坏 須恵器	A 13.2	体部は外反気味に立ち上がり, 口縁端部は小さく外反し 丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。	砂粒・長石・石英・ 雲母 黒色 普通	90% 内面に煤付着 覆土
		B 4.4			
		C 5.0			
269	坏 須恵器	A (13.2)	体部は直線的な立ち上りを示し, 口縁部は小さく外反 する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	40% 床面
		B 4.2			
		C (5.2)			



第121图 第61号住居跡出土遺物実測図(1)



278



279 s=1/4



第122図 第61号住居跡出土遺物実測図(2)

第61号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 270	坏 須恵器	A (13.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	30% 甕
		B 4.5			
		C (5.6)			
271	高台付坏 須恵器	A 11.4	底部は平底。「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎 気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。高台貼り付け。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	90% 覆土
		B 5.2			
		D 7.5			
		E 1.2			
272	高台付坏 須恵器	A	底部破片。底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。 体部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。	砂粒・雲母 灰色 普通	20% 底部に「大」のへら記 号 覆土
		B (2.2)			
		D 7.4			
		E 1.0			
273	小型壺 須恵器	A 9.0	体部は外反気味に立ち上がる。肩部から口縁部にかけて 「く」の字状に屈曲して立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。内・外面に自然釉。	砂粒・砂礫 黒褐色 普通	100% 覆土
		B 7.5			
		C 5.5			
274	甕 土師器	A (19.8)	球胴を呈し、口縁部は「く」の字状に屈曲し外反して開 き、口縁端部を小さくつまみ上げる。 口縁部横ナデ。胴部横位のへら削り。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 普通	20% 覆土
		B (19.3)			
275	甕 土師器	A (18.8)	胴部から口縁部は、「く」の字状に外反して開き、口縁端 部を小さくつまみ上げる。 口縁部横ナデ。胴部横位のへら削り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	10% 覆土
		B (6.0)			
276	甕 土師器	A (16.6)	胴部は内彎して立ち上がり頸部は「く」の字状に屈曲す る。口縁端部は外上方につまみ出される。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	10% 覆土
		B (9.5)			

第61号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第121図 277	甕 土師器	B (6.4) C 7.6	体部から内彎気味に立ち上がる。 底部・体部外面ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	60% 覆土
第122図 278	甕 土師器	A (13.3) B 11.9 C 6.2	小さな平底。球胴を呈し、口縁部は外反して開き、口縁端部をつまみ上げる。 口縁部横ナデ。胴部横位・底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・砂礫 にふい赤褐色 普通	50% 底部に木葉痕 覆土
279	甕 須恵器	A (33.2) B 15.8 C 16.4	底部は平底で5孔を有する。胴部は外傾して立ち上がる。 口縁部は外反し、口縁端部は内上方にわずかにつまみ出される。 胴部外面縦位の叩き目。同下端は、横位のヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・小礫・雲母 灰褐色 普通	20% 床面

第62号住居跡 (第123図)

(位置) 調査区中央部、C5i₅区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.9×3.6mの方形。

(主軸方向) N-12°-W。

(壁) 壁高は44cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅16~20cm、深さ6~10cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

(床面) 中央部から竈付近にかけて若干凸凹が認められるが、全体に硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所 (P₁~P₅)。掘り込みは、径25~40cm、深さ13~40cmを測り、全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を70cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。燃焼部の内壁は焼土化し、煙道部は焚口部から緩く立ち上がり、煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

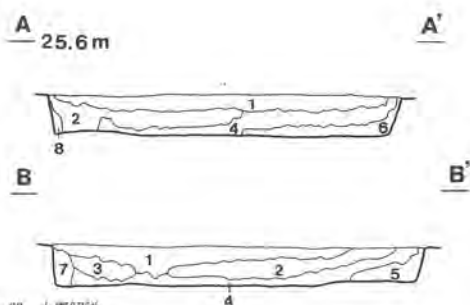
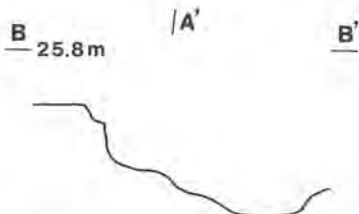
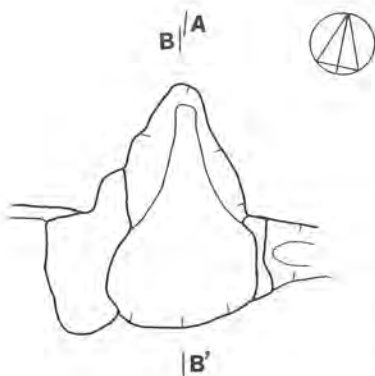
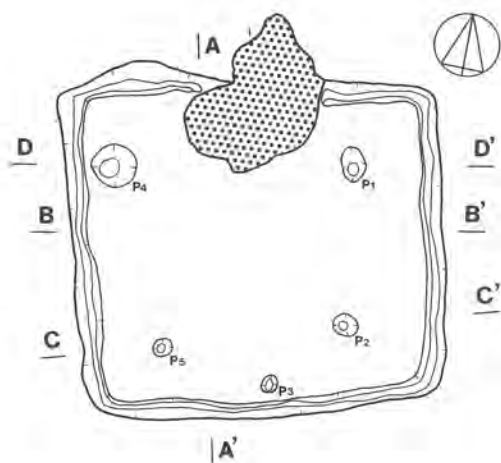
(覆土) 自然堆積。全層にローム粒子・木炭・焼土粒子が含まれる。

(遺物) 竈付近から中央部にかけての覆土から土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏・蓋・甕) の破片が集中して出土している。280は、竈の左袖部付近におかれた状態で出土した土師器の甕である。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。

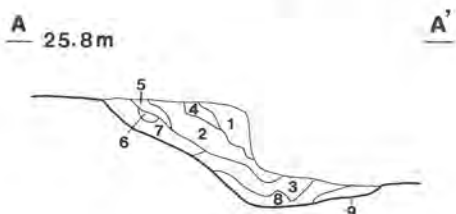
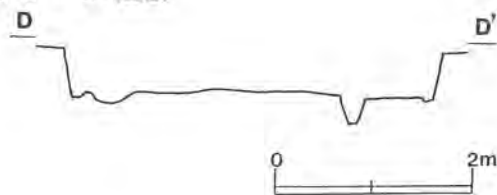
第62号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第124図 280	甕 土師器	A 15.2 B (13.5)	胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は外上方につまみ出される。 口縁部内・外面横ナデ。胴部中位ヘラ削り。下位ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	60% 竈



S I-62 土層解説

- 1 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 2 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム・焼土ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 4 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック, 粘土
- 5 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 6 黒褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 7 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 8 褐色 ローム・焼土粒子

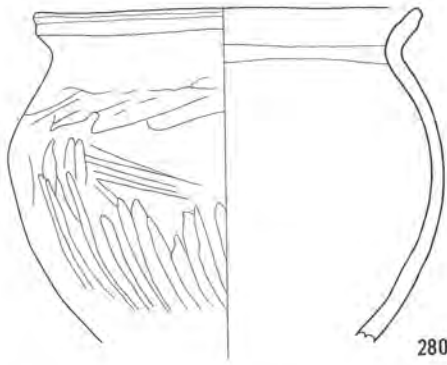


S I-62 土層解説

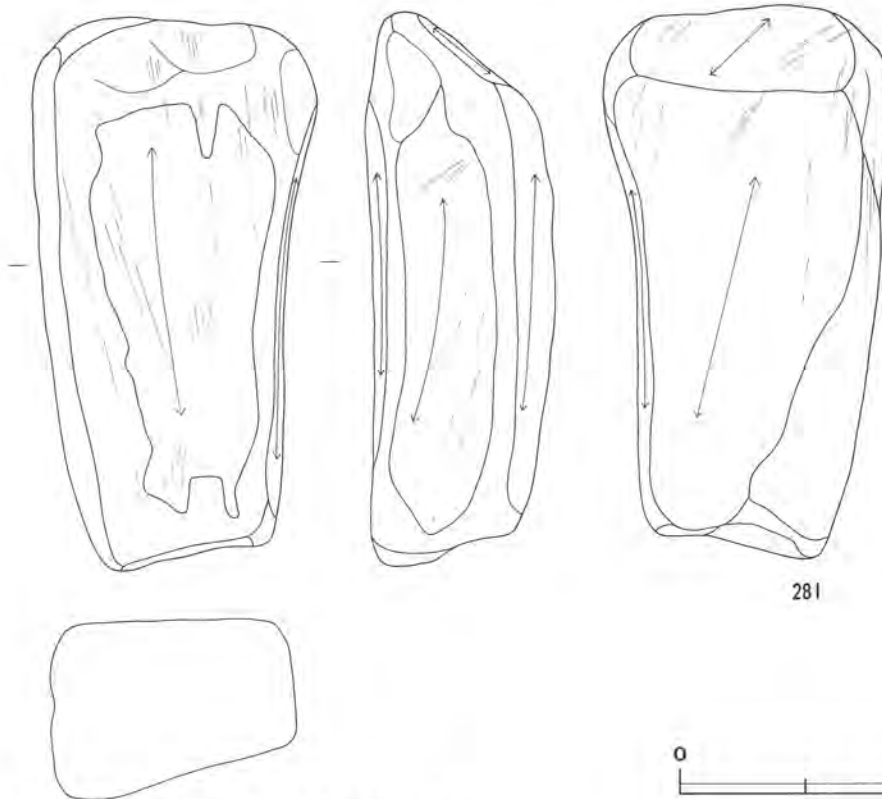
- 1 にぶい褐色 ローム中・大ブロック, 粘土ブロック, 砂粒
- 2 暗赤褐色 炭化粒子, 焼土・粘土ブロック
- 3 暗褐色 ローム大ブロック
- 4 褐色 ローム粒子, ローム小・焼土ブロック, 粘土
- 5 極暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 6 暗褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子
- 7 極暗赤褐色 ローム小・大ブロック, 焼土ブロック, 炭化粒子
- 8 にぶい赤褐色 ローム大・焼土ブロック, 焼土粒子
- 9 暗褐色 焼土・炭化粒子



第123図 第62号住居跡・竈実測図



280



281

0 10cm

第124図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種 類	法量(cm)	器形の特徴	備 考
第124図 281	砥 石	全長 22.4 幅 11.3 厚さ 7.5 重さ 2732g	長方形の砥石。側面一部破損。 全面に使用痕が認められ、使いが顯著。	砂岩

第63号住居跡 (第125図)

(位置) 調査区の北部, C5g₁区を中心に確認。

(規模と平面形) 5.1×4.8mの方形。

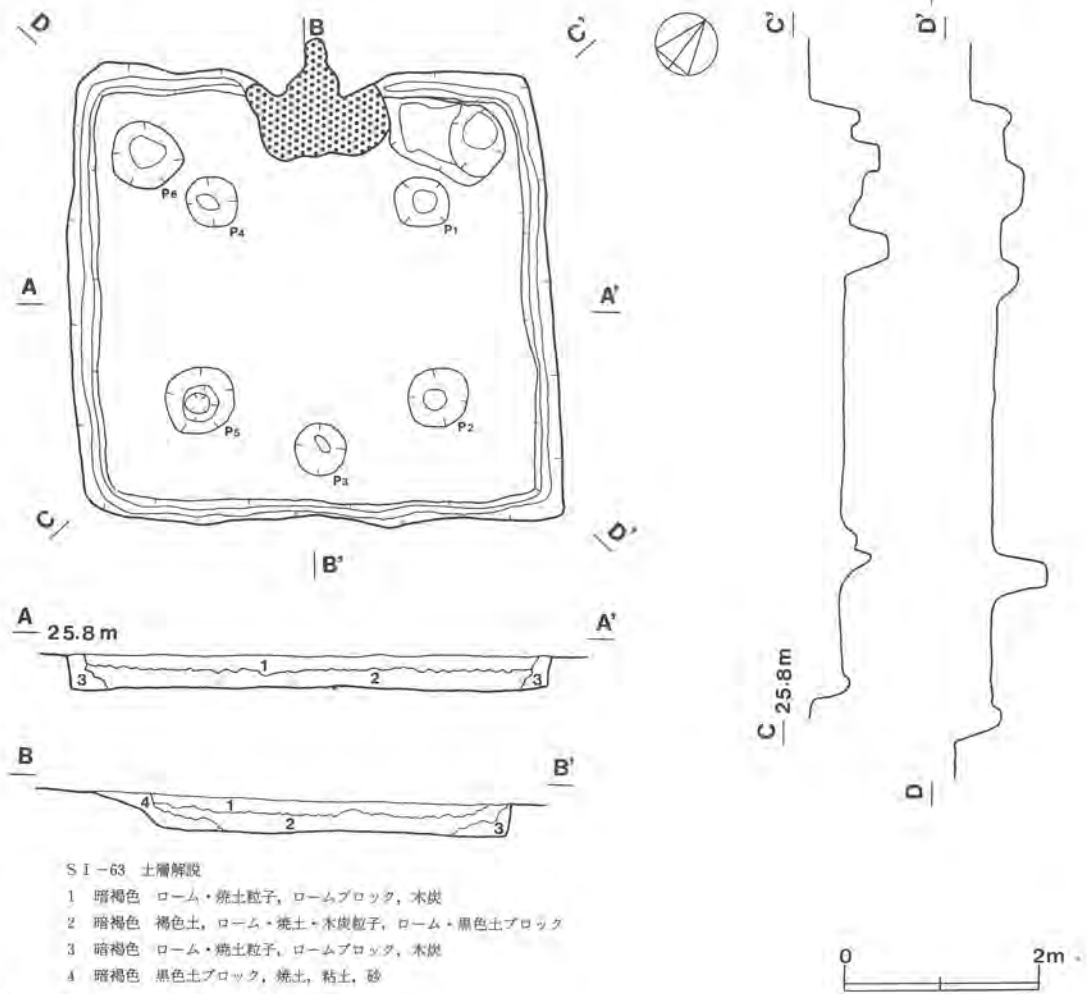
(主軸方向) N-42°-W。

(壁) 壁高は44cmを測り, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅18~20cm, 深さ10cmを測り, 掘り込み断面形状はL状を呈し全周。

(床) 中央部に若干窪みが見られるが, 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 6か所(P₁~P₆)。掘り込みは, 径40~50cm, 深さ25~65cmを測り, 支柱穴はP₁~P₅。



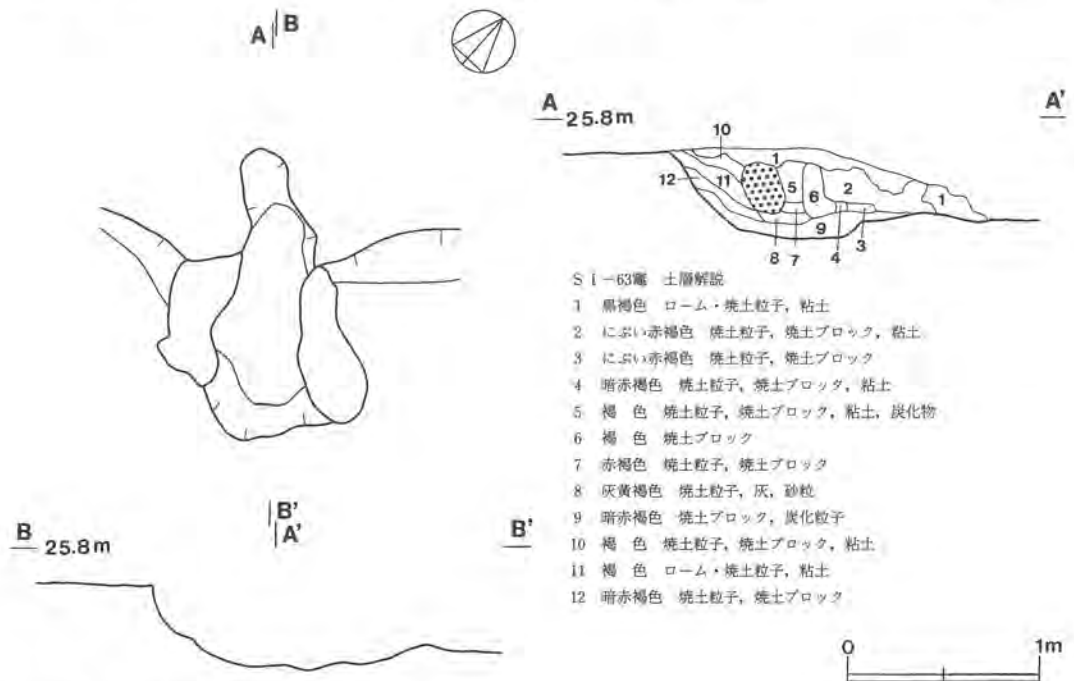
である。

(竈) 北壁中央部を60cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部だけが残存して馬蹄形を呈す。燃烧部の内壁は焼土化し、焚口部から火床部にかけての傾斜は緩く、煙道部の煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。全層にローム粒子・木炭・焼土粒子が含まれる。

(遺物) 竈や床面中央部付近から土師器(坏・甕)・須恵器(甕)の破片が集中して出土している。284は、竈の袖部に芯として使用され、天井部の補強材として用いられた状態で出土している。

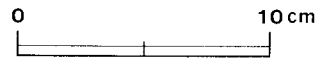
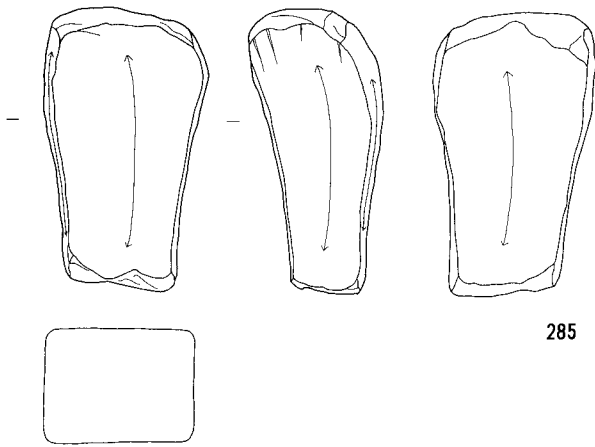
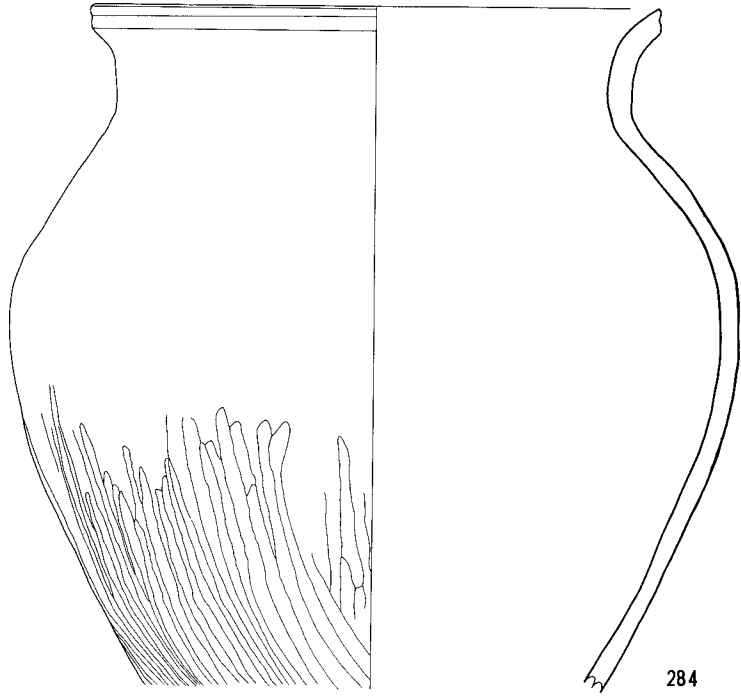
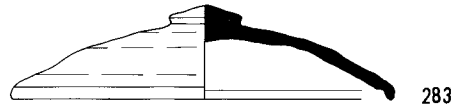
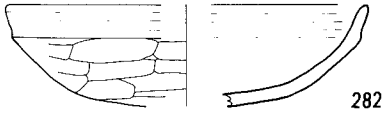
(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



第126図 第63号住居跡竈実測図

第63号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 282	坏 土師器	A (14.4) B (4.1)	体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部との境に稜を有し、外反気味に立ち上がる。 口縁部横ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。内面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい赤褐色 良好	30% 覆土
283	蓋 須恵器	A 15.3 B 3.8 F 2.9 G 0.9	天井中央部に宝珠形のつまみが付く。天井部はやや丸い。 天井部と口縁部との境界に明瞭な稜を持ち、口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。 つまみ内面回転へラ削り。天井部水挽き整形。	砂粒 灰白色 良好	60% 覆土
284	甕 土師器	A 22.6 B (27.5)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は立ち上がる。 胴部外面へラ削り。口縁内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	50% 竈



第127图 第63号住居跡出土遺物実測図

第63号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
第127図 285	砥石	全長 11.4 幅 6.5 厚さ 5.4 重さ475.0g	方形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。全面に使い減りが顕著。	凝灰岩

第64号住居跡（第128図）

（位置） 調査区の北部，C4g₇区を中心に確認。

（重複） 西側で第65号住居跡，南側で第66号住居跡と重複。

（規模と平面形） 5.7×5.6mの方形。

（主軸方向） N-10°-W。

（壁） 壁高は60cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径40～50cm，深さ38～60cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部に位置し，壁を掘り込まずに粘土・砂によって構築。天井部・袖部は崩落し，わずかに焚口部・火床部と煙道部が残存しているだけである。

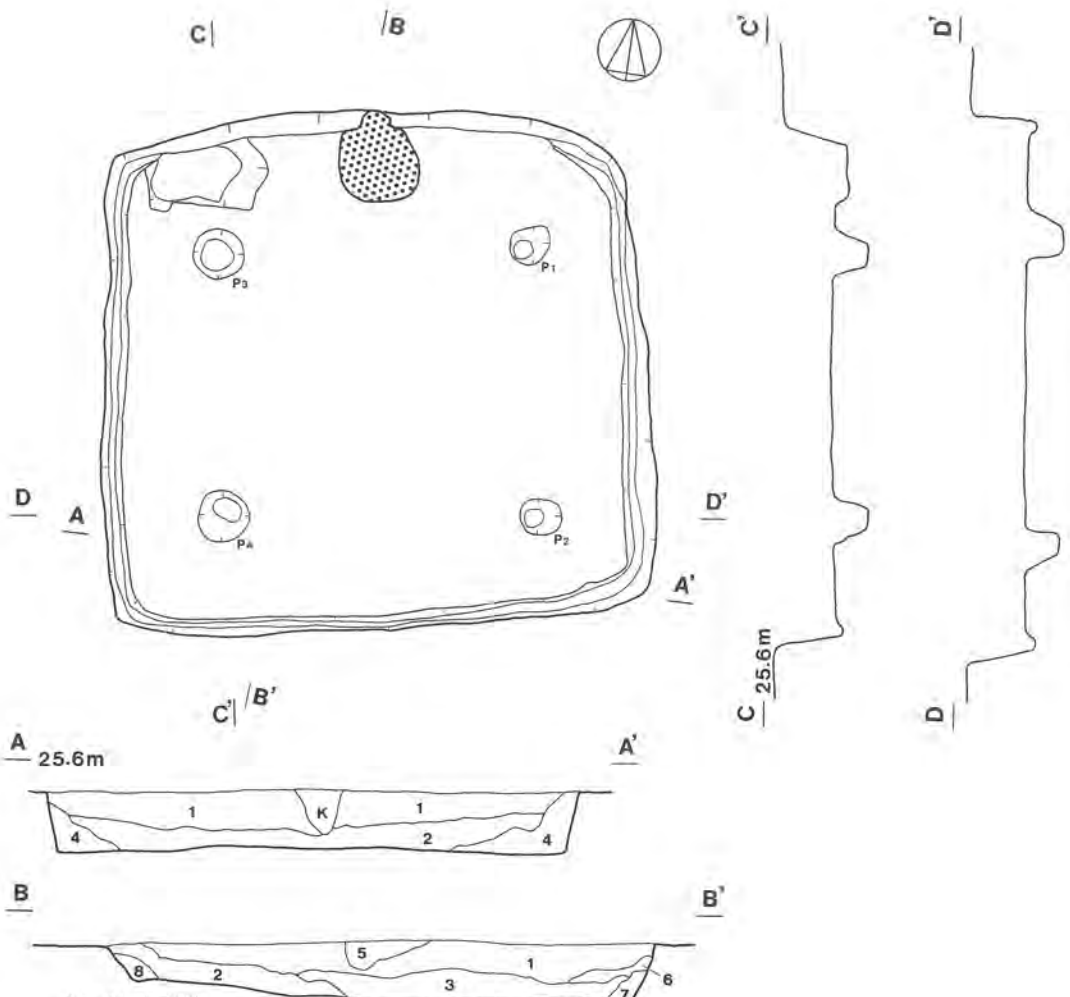
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近や中央部の覆土中層から，土師器（坏），須恵器（坏），金銅製品，鉄製品が出土している。287は土師器坏，290は須恵器坏，295は須恵器蓋で本跡の中央部中層から出土している。

（所見） 本跡は，第65・66号住居跡と重複し，いずれも本跡の廃絶後に構築されている。本跡は，遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。

第64号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 286	坏 土師器	A (14.4) B 4.3	体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部との境に稜を有し，外反気味に立ち上がる。口縁部横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 良好	50% 覆土
287	坏 土師器	A 13.6 B 5.6	体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部との境に弱い稜を有し，垂直気味に立ち上がる。外部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 橙色 良好	80% 覆土



S1-64 土層解説

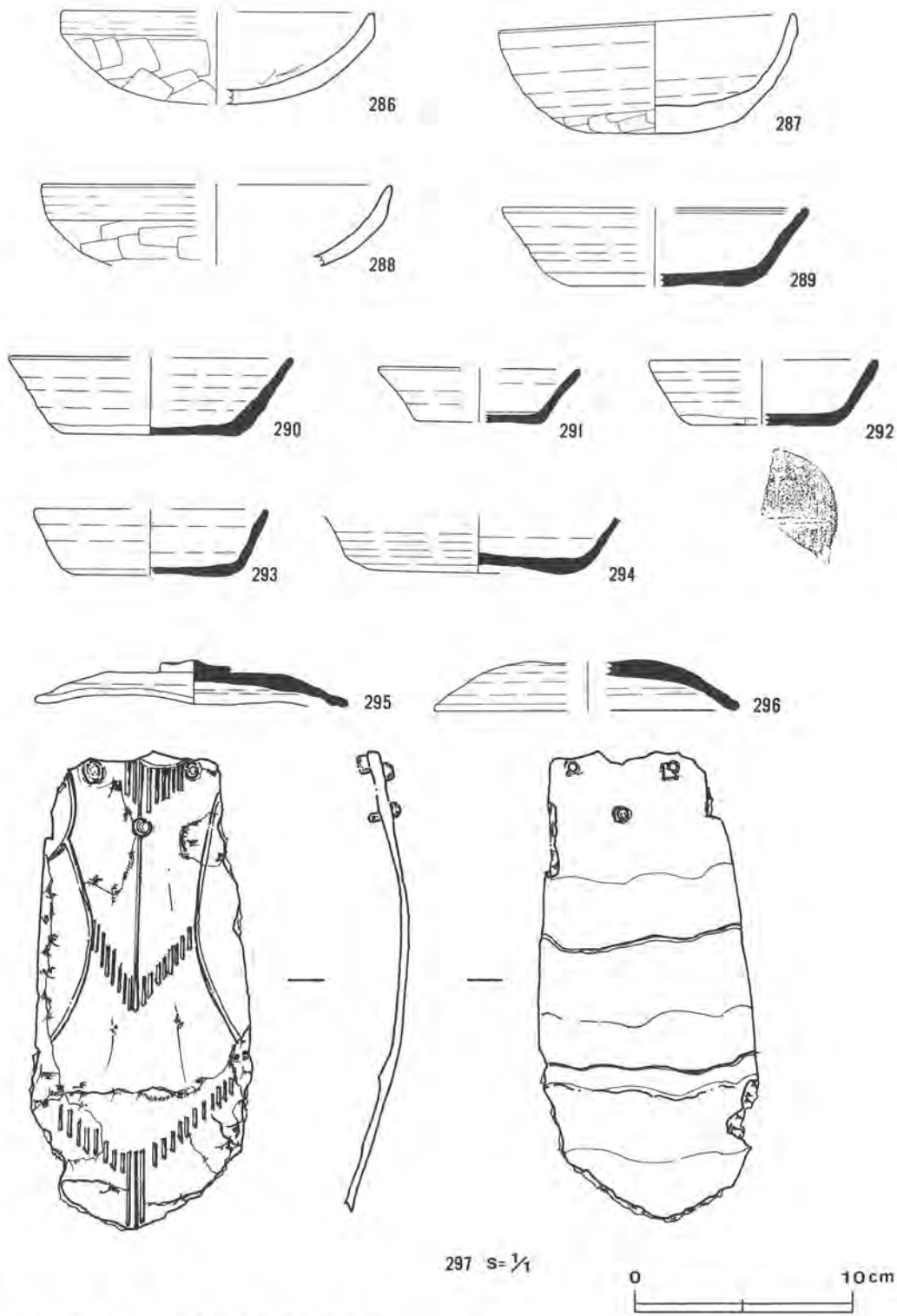
- 1 極暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム・焼土ブロック, 炭化物
- 2 暗褐色 ローム・粒子・炭化粒子
- 3 暗褐色 ローム中ブロック, 焼土・炭化粒子
- 4 暗褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 5 褐色 砂質ローム, 焼土・炭化粒子
- 6 褐色 ローム中・大ブロック, 焼土・炭化粒子
- 7 明褐色 硬質ロームブロック
- 8 におい赤褐色 焼土粒子, 粘土ブロック



第128図 第64号住居跡実測図

第64号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 288	坏 土師器	A (16.0)	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部との境に稜を有し, 口縁部は小さく外反する。 体部外面へら削り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄褐色 普通	20% 覆土
		B (3.8)			



第129图 第64号住居跡出土遺物実測図

第64号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 289	坏 須恵器	A (14.0) B 3.6 C (8.0)	体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は内彎する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	30% 覆土
290	坏 須恵器	A (13.0) B 3.6 C (8.2)	体部は外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	60% 覆土
291	坏 須恵器	A (9.2) B 2.5 C (5.8)	体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反して丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 灰色 良好	20% 覆土
292	坏 須恵器	A (10.2) B 3.0 C (6.6)	体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は小さく丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部周辺・底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰色 良好	20% 底部にヘラ記号 覆土
293	坏 須恵器	A (10.6) B 3.1 C (7.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 黄灰色 良好	30% 覆土
294	埴 須恵器	B (2.7) C 8.5	底部上げ底。体部は外反気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	50% 覆土
295	蓋 須恵器	A 14.5 B 2.6 F 3.2 G 0.6	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付き、天井部はやや平坦。反りは断面三角形。 つまみ内側回転ヘラ削り。天井部から体部にかけてヘラナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	60% 覆土
296	蓋 須恵器	A (14.0) B (2.3)	天井部は平坦。口縁部は下上方に屈曲し端部は平坦。 天井頂部から中位にかけて回転ヘラ削り。 口縁部にかけて水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	40% 覆土

杏葉（第129図-297）

第64号竪穴住居跡の北壁際の覆土下層（床面から高さ10cm）から出土した。

法量は、全長7.2cm、幅3.3cm、厚さ0.2cmを計り、形状は、棘葉形を呈し、一枚の銅板に棘状突起のある身部と、山形の造出部を型どり、両部に毛彫りを施した後、鍍金した金銅造りのものであるが、造出部・身部の一部が欠損し、破損状態が激しい。

残存している部分を観察すると、造出部はその四周に沿って1条の毛彫りが回り、放射状線文を配し、身部は1個の円弧文と中心部に垂下する毛彫りが施されている。また、両端を2mmの長さに内側に押圧折り返す形状を示し、同部に3本の銅製で頭を鍍金した笠鉾を用い、鉾足の方に座金をはめて、鉾端を叩き潰して留めている。

第65号住居跡（第130図）

（位置） 調査区の北部，C4g₆区を中心に確認。

（重複） 東側で第64号住居跡と重複。

（規模と平面形） 4.1×3.5mの方形。

（主軸方向） N-25°-W。

（壁） 壁高は51cmを測り，垂直に立ち上がる。本跡の東壁の一部は第64号住居跡の埋没土を掘り込んで構築しているため，この部分の壁は検出できなかった。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 1か所（P₁）。掘り込みは，径30cm，深さ20cmを測り，支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を55cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落，袖部だけが残存し，馬蹄形を呈している。火床部は焼土化し，覆土には焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から火床部にかけて傾斜は緩く立ち上がり，煙道部は煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

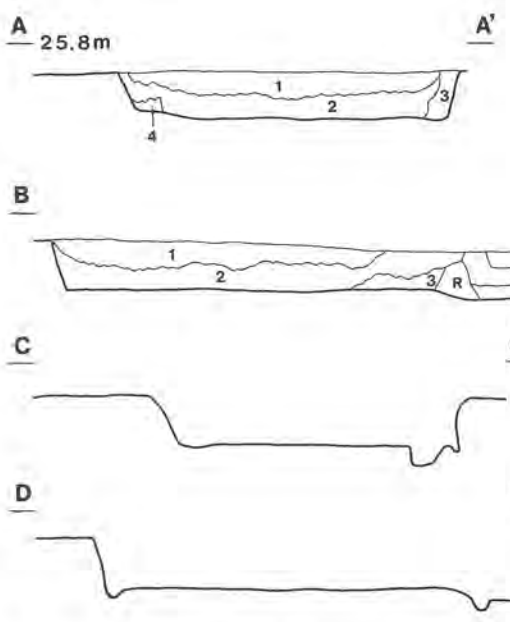
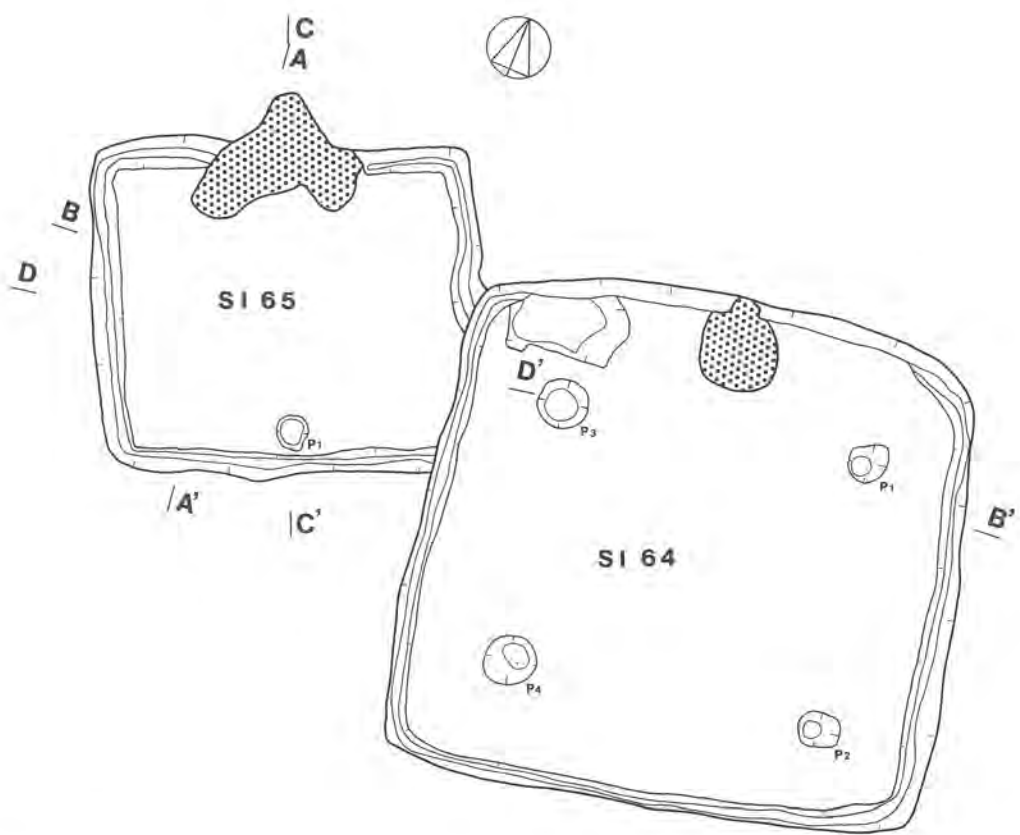
（覆土） 自然堆積。全層にローム粒子・焼土粒子が含まれる。

（遺物） 竈を中心に土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕・高台付坏）が集中して出土している。298は須恵器坏で外面に墨書がみられ，301の須恵器高台付坏は中央部の床面から，また，須恵器坏片が竈の袖部から袖の芯として使用された状態で出土している。

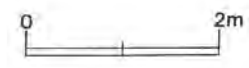
（所見） 本跡は第64号住居跡と重複し，第64号住居跡の廃絶後に構築している。本跡の遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第65号住居跡出土遺物解説表

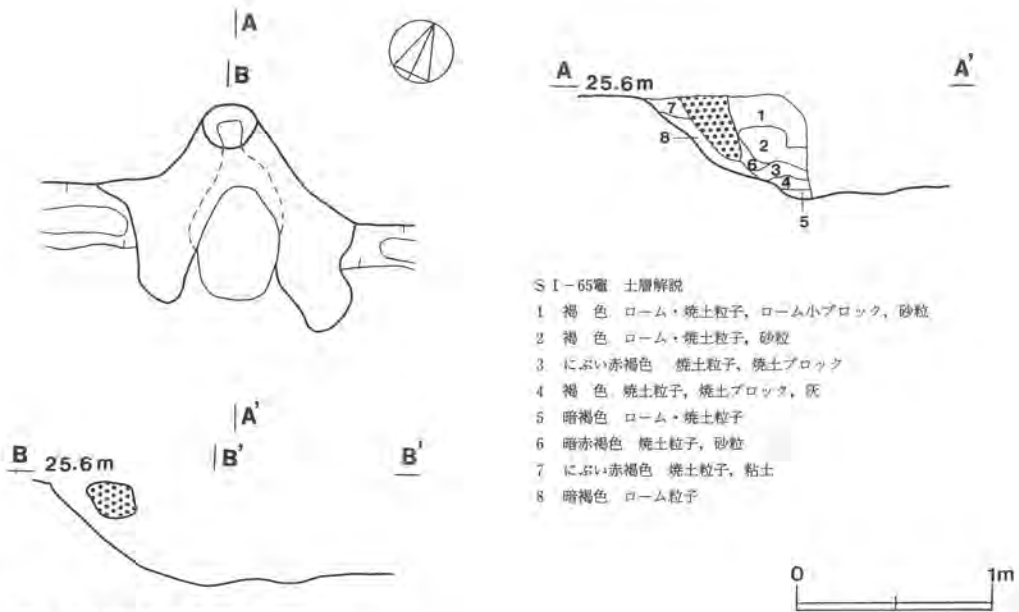
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 298	坏 須恵器	B (3.0) C 7.8	底部は平底。床部は内彎気味に立ち上がる。 体部水挽き整形。底部ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 灰白色 普通	20% 底部に判読不明の墨書 覆土
299	坏 須恵器	A 13.2 B 4.2 C (7.2)	体部は直立気味に立ち上り，口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫 灰色 普通	70% 覆土



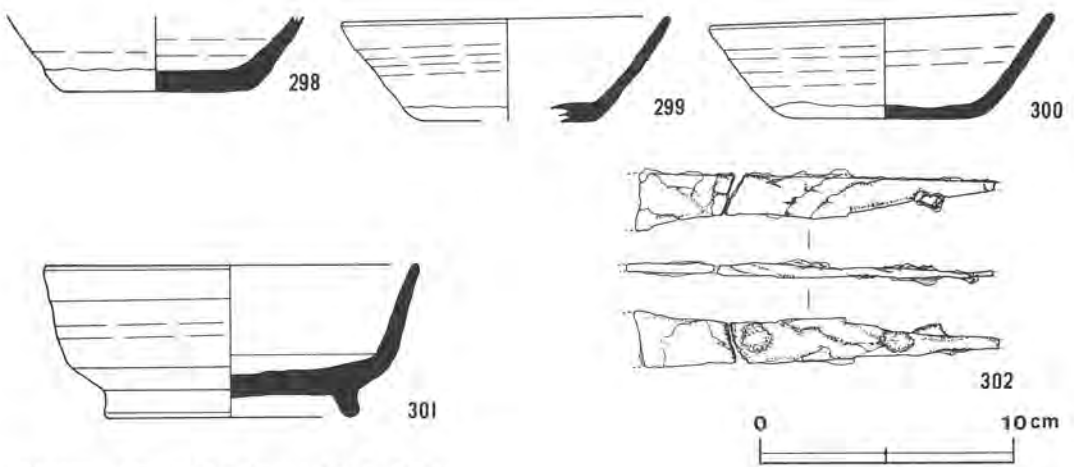
- S I - 65 土層解説
- 1 にふい赤褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
 - 2 にふい赤褐色 ローム・炭化粒子, ローム小・中ブロック
 - 3 黒褐色 炭化粒子



第130図 第65号住居跡実測図



第131図 第65号住居跡電実測図



第132図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 300	須恵器	A 13.8	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄色 普通	60% 覆土
		B 4.2			
		C 8.0			
301	高台付杯 須恵器	A (14.8)	底部は平底で, 「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。高台貼り付け底部回転へら削り。	砂粒・砂礫・長石 褐灰色 普通	60% 覆土
		B 6.1			
		D 10.2			
		E 1.0			

第65号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種 類	法量 (cm)	器形の特徴	備 考
第132図 302	刀 子	全長(14.5) 刃幅 2.3 刃長(8.5)	切先部と基部欠損。 刃部と基部との間に 鬚を有する。	

第66号住居跡 (第133図)

(位置) 調査区の北側, C4i₆区を中心に確認。

(重複) 北側で第64号住居跡と重複。本跡は第64号住居跡の埋没後に構築している。

(規模と平面形) 3.8×3.6mの方形。

(主軸方向) N-22°-W。

(壁) 壁高は28cmを測り, 垂直に立ち上がる。本跡の北壁・東壁の一部は第64号住居跡の埋没土の中に構築している。

(壁溝) 幅20cm, 深さ10cmを測り, 掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

(床) 全体に凸凹しているが, 硬く踏み固められて堅緻である。

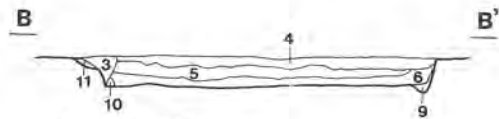
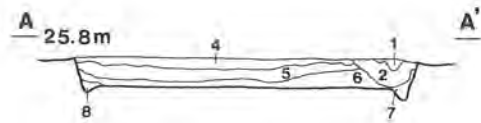
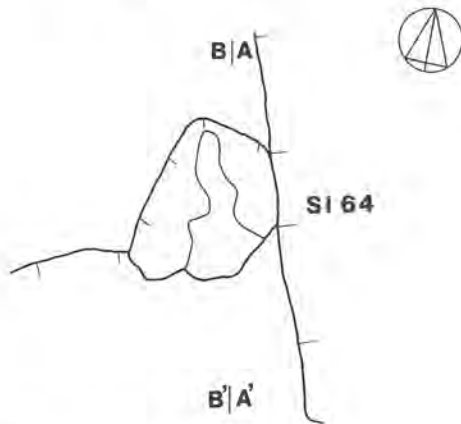
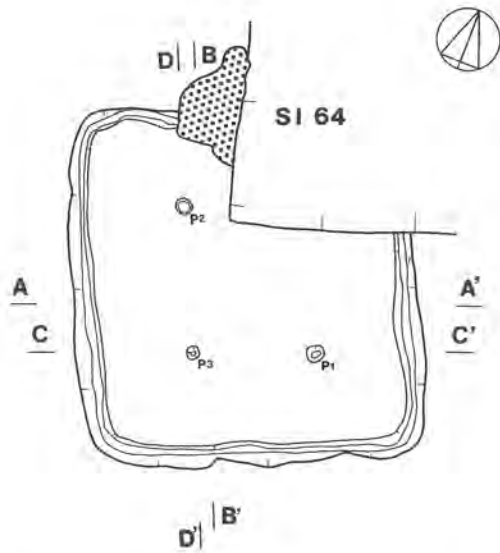
(ピット) 3か所(P₁~P₃)。掘り込みは, 径20cm, 深さ30cmを測る。本来は4本柱の住居と考えられるが1本は重複部分で検出できなかった。

(竈) 北壁中央部からやや南側に北壁を70cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く天井部は崩落, 袖部だけが残存し馬蹄形を呈している。火床面は焼土化し, 焚口部から火床部にかけて比較的緩やかな立ち上がりを呈している。

(覆土) 自然堆積。全層にローム粒子・焼土粒子が含まれる。

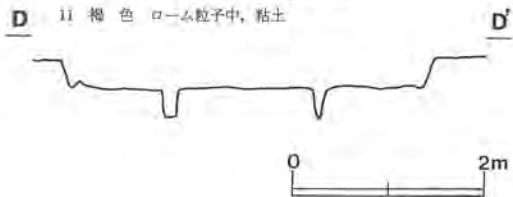
(遺物) 遺物量は少なく全て覆土の上層・中層から土師器(坏・甕), 須恵器(坏・甕)の破片と支脚が出土している。

(所見) 本跡は第64号住居跡の埋没後に構築している。本跡は遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。



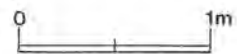
SI-66 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック
- 3 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 4 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 5 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 6 褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少
- 7 褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック多
- 8 褐色 ローム粒子多
- 9 褐色 ローム粒子多, ローム小・中ブロック多
- 10 褐色 ローム粒子中, 焼土粒子, 粘土
- 11 褐色 ローム粒子中, 粘土



SI-66竈 土層解説

- 1 暗褐色 焼土, 粘土
- 2 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子, 粘土
- 3 にぶい赤褐色 黒色土, 焼土・粘土ブロック
- 4 極暗赤褐色 黒色土, 焼土粒子, 粘土



第133図 第66号住居跡・竈実測図

第67号住居跡 (第134図)

(位置) 調査区の西部, C4i4区を中心に確認。

(規模と平面形) 5.8×5.7mの方形。

(主軸方向) N-12°-W。

(壁) 壁高は50cmを測り, 外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm, 深さ10cmを測り, 掘り込み断面形状はU字状を呈して全周している。

(床) 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは、径40~50cm、深さ40~50cmを測り、支柱穴は5本である。

(竈) 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。燃焼部は焼土化し焼土粒・炭化物が充填され、焚口部から火床部へかけては緩く、煙出し近くで急角度で立ち上がっている。

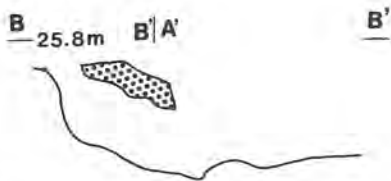
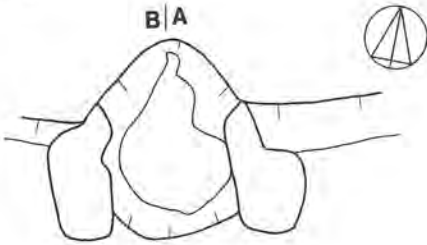
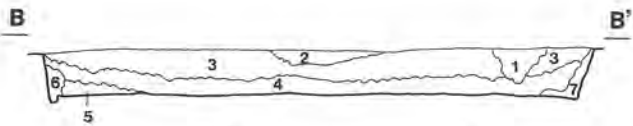
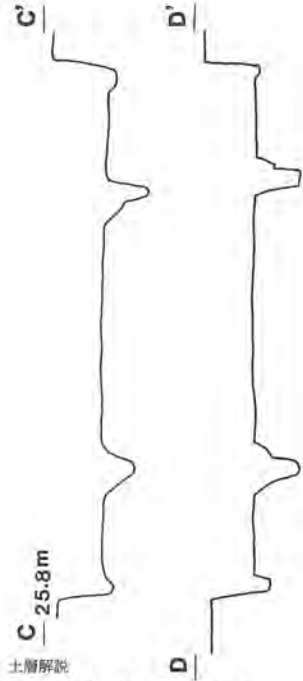
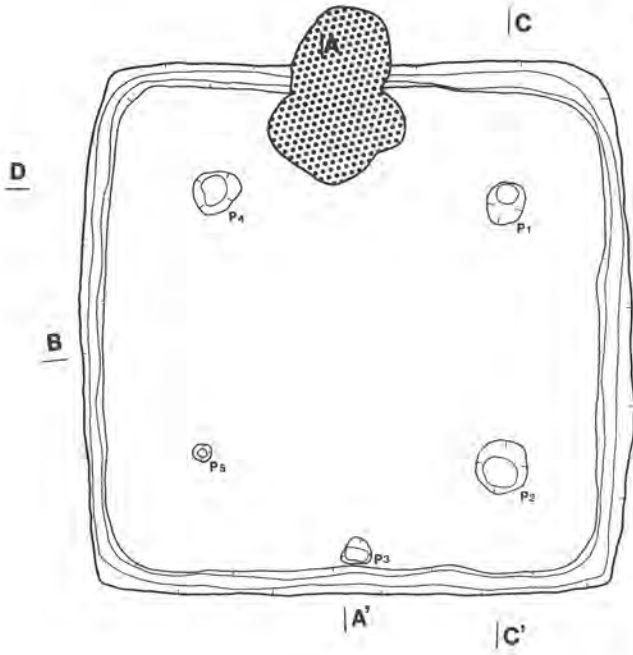
(覆土) 自然堆積。黒褐色土を主体に全層に焼土・木炭粒子が含まれる。

(遺物) 遺物は全て壁付近の覆土中層から、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・蓋・甕)の破片と鉄製品(刀子)が出土している。303は土師器坏, 307は小型甕, 308は甕であり、これらも本跡覆土中層から出土し、306は須恵器蓋で竈の天井部に補強材として用いられた状態で出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。

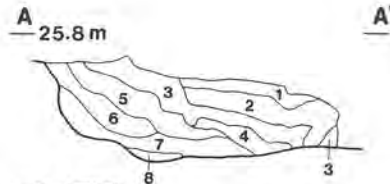
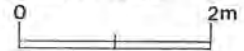
第67号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第135図 303	土師器 坏	A 14.2	底部は扁平な丸底。口縁部との境に稜を有し、内彎気味に立ち上がる。口縁部は2段に成型されて、直立する。体部外面へラ切り。	砂粒・雲母 橙色 普通	100% 覆土
		B 4.0			
304	土師器 坏	A 15.2	底部は丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反する。体部外面へラ切り。内面へラ磨き。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 普通	80% 内面に煤付着 覆土
		B 4.6			
305	土師器 坏	A 13.8	底部は扁平な丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。体部外面へラ切り後ナデ。内面へラ磨き。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 橙色 普通	50% 床面
		B 2.9			
306	須恵器 蓋	B 2.5	天井部中央にやや扁平な宝珠形つまみが付き、天井部はやや平坦。反りは断面三角形。つまみ内側は回転へラ削り。天井部から体部にかけてナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 灰白色 普通	50% 竈
		C (15.0)			
		F 3.8			
		G 0.5			
307	土師器 小型甕	A (14.1)	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲し口縁部に至る。口縁部内・外面横ナデ。胴部中位から下位へラ削り・へラ磨き。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい赤褐色 普通	70% 底部に木葉痕 覆土
		B 13.0			
		C 9.3			
308	土師器 甕	B (9.6)	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部中位から底部外面へラ削り・へラ磨き。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	20% 底部に木葉痕 覆土
		C 9.2			
309	土師器 甕	B (18.4)	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部中位から底部外面へラ削り・へラ磨き。	砂粒・砂礫・長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	30% 底部に木葉痕 覆土
		C 7.8			
第136図 310	土師器 甕	B (11.9) C (8.8)	底部破片。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。胴部外面へラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	15% 底部に木葉痕 覆土



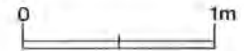
SI-67 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 2 黒褐色 ローム粒子少
- 3 黒褐色 ローム粒子少, 焼土・炭化粒子
- 4 黒褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少
- 5 黒褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子
- 6 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 7 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 8 黒褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少
- 9 暗褐色 ローム粒子多, 焼土・炭化粒子少
- 10 褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土

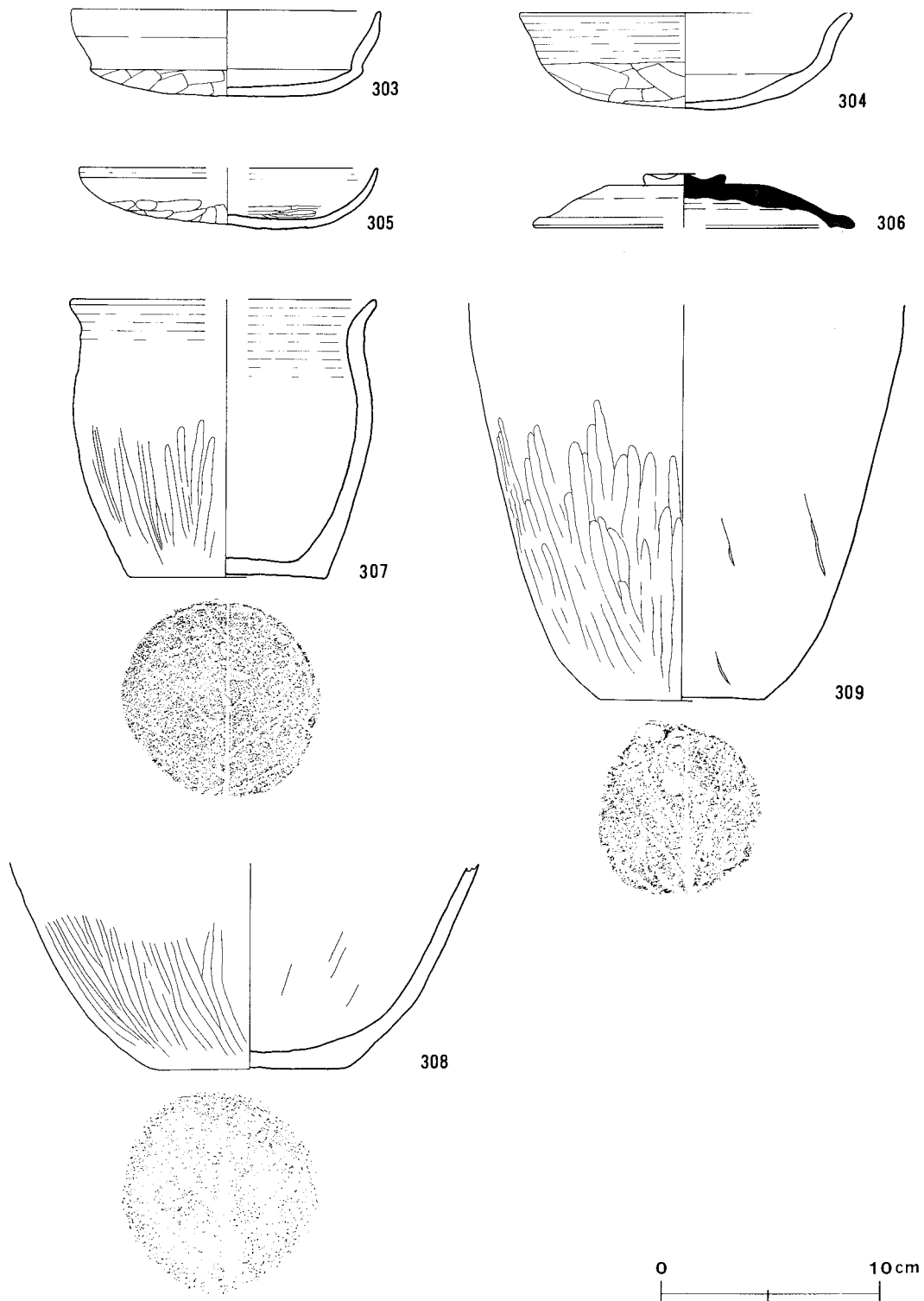


SI-67窟 土層解説

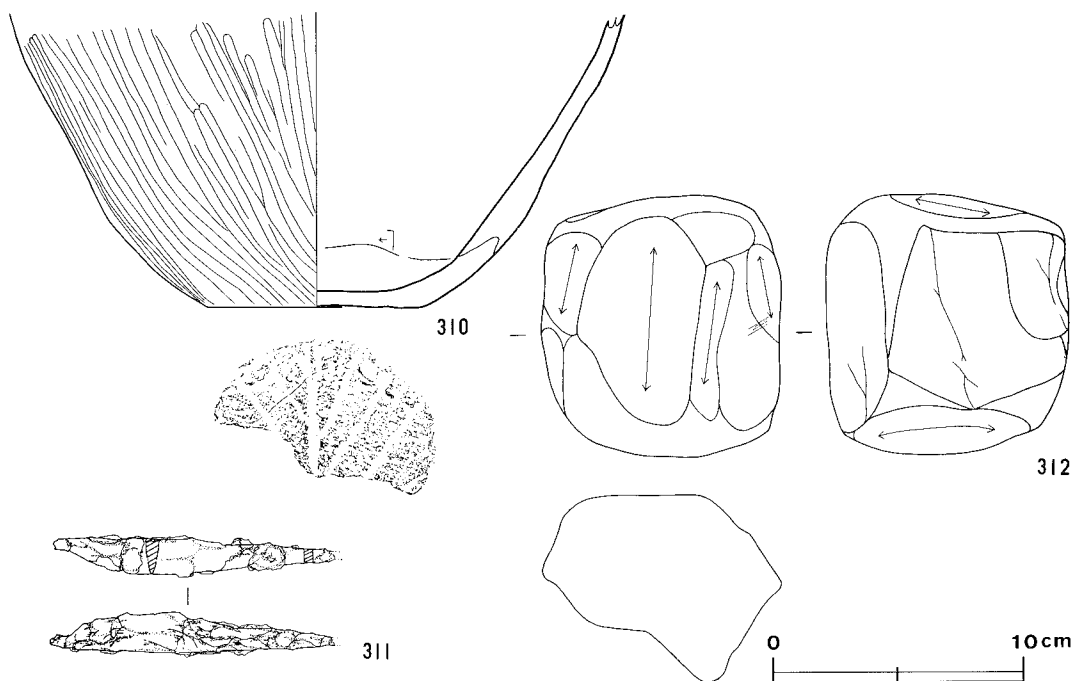
- 1 にぶい赤褐色 焼土・粘土ブロック, 砂礫
- 2 にぶい赤褐色 ローム・焼土・粘土ブロック, 木炭
- 3 暗赤褐色 ローム, 粘土ブロック
- 4 暗赤褐色 焼土, 粘土
- 5 暗褐色 粘土・砂・焼土ブロック
- 6 にぶい赤褐色 ローム・焼土ブロック, 灰, 木炭
- 7 暗赤褐色 ロームブロック, 粘土, 砂粒
- 8 にぶい赤褐色 焼土, 粘土, 木炭



第134図 第67号住居跡・竈実測図



第135图 第67号住居跡出土遺物実測図(1)



第136図 第67号住居跡出土遺物実測図(2)

第67号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
第136図 311	刀子	全長(11.2) 刃幅 1.4 刃長(5.5)	切先部と茎部欠損。 刃部と茎部との間に 関を有し、刃部は断 面V字状を呈する。	茎部に木質 附着	312	砥石	全長 10.5 幅 9.6 厚さ 8.0 重さ 985g	逆台形の砥石。全面 に使用痕跡が認めら れる。 全面に使い減りが顕 著。	砂岩

第68号住居跡 (第137図)

(位置) 調査区の西部, C4d₇区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.1×3.7mの方形。

(主軸方向) N-29°-W。

(壁) 壁高は50cmを測り, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20~26cm, 深さ8~12cmを測り, 掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

(床) 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは, 径20~26cm, 深さ30~40cmを測り, 全て支柱穴である。

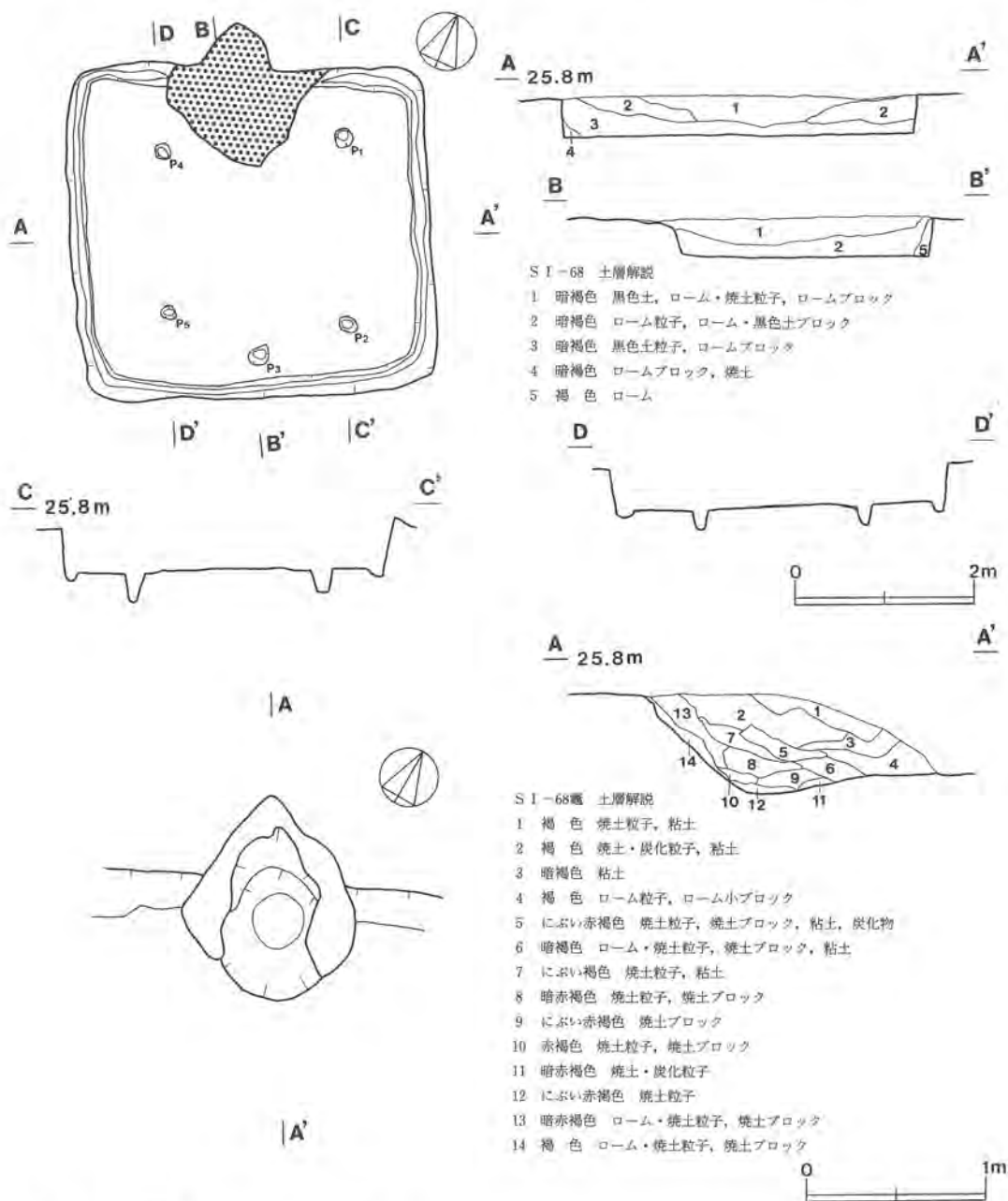
(竈) 北壁中央部の壁を50cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し, 焚口部から火床部へかけては緩く立ち上がり, 煙道部

は煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

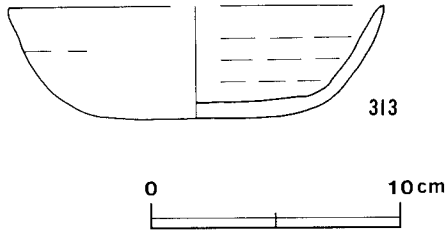
(覆土) 自然堆積。最下層・床面付近は、焼土塊や木炭片・焼土粒子が多量に認められる。

(遺物) 竈付近と東壁付近から土師器(坏・甕)、須恵器(坏)の破片が出土している。313は竈袖部の補強材として用いられた状態で出土した土師器坏である。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して9世紀後半に比定される住居跡である。



第137図 第68号住居跡・竈実測図



第138図 第68号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 313	坏 土師器	A (15.2) B 4.5 C 6.6	体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。 体部内・外面とも水挽き整形。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	50% 竈

第69号住居跡（第139図）

（位置） 調査区の西部，C4d₉区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.3×3.1mの方形。

（主軸方向） N-18°-W。

（壁） 壁高は25cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 中央部付近は凸凹がみられるが，全体に硬く踏み固められて堅緻である。

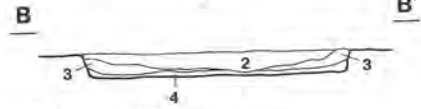
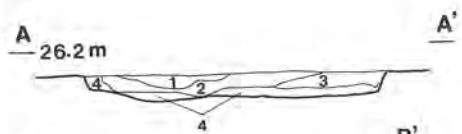
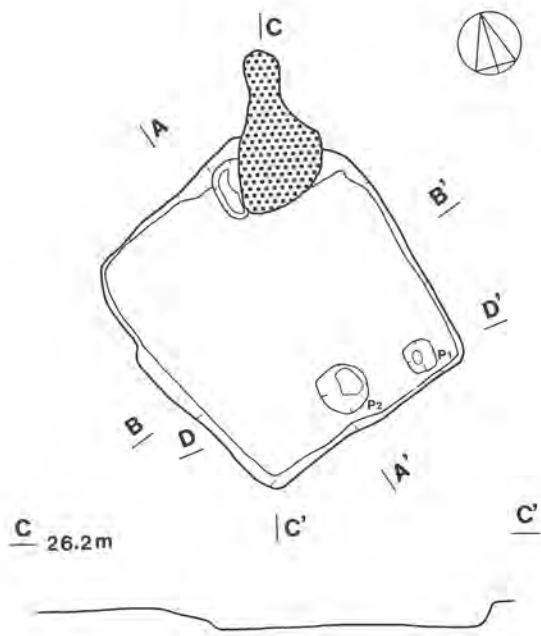
（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径30～40cm，深さ20～28cmを測る。東壁下に2か所検出されている状況から，出入口部の柱穴として捉えられる。

（竈） 北東コーナー部に付設されている。壁を50cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。依存状態が悪く，天井部は崩落，袖部が若干残存している。天井部・袖部の粘土及び焼土が竈前面に多量に流出し，焚口部から燃焼部・煙道部へかけての内壁は焼土化している。

（覆土） 自然堆積。全層に焼土粒子・炭化粒子を含む。

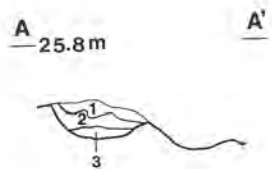
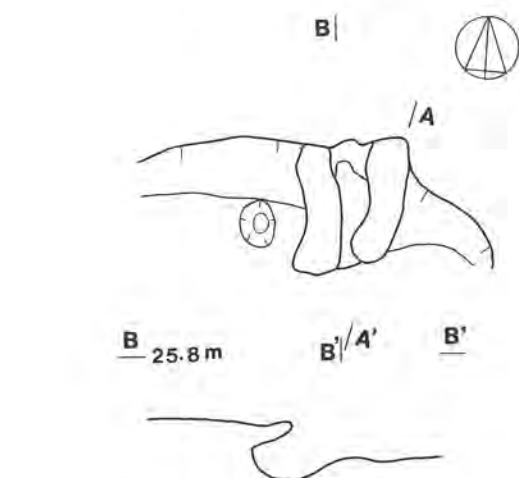
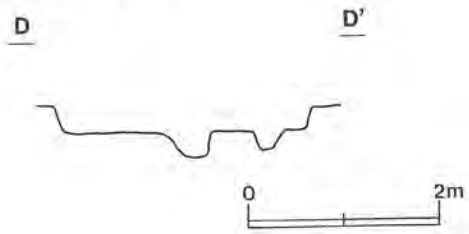
（遺物） 全て竈内から出土しており，土師器（坏・高台付坏・甕），須恵器（坏）の破片で残存率は低い。316は土師器高台付坏で竈の補強材として用いられた状態で出土している。

（所見） 本跡は竈が，北東コーナーに付設されている形態と遺物から判断して9世紀後半に比定される住居跡である。



S I - 69 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 2 暗褐色 ロームブロック, 焼土・炭化粒子
- 3 暗褐色 ローム粒子
- 4 褐色 ローム

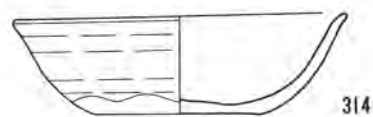


S I - 69 土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土・粘土ブロック
- 2 褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 3 褐色 ローム大ブロック



第139図 第69号住居跡・竈実測図



第140図 第69号住居跡出土遺物実測図

第69号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 314	坏 土師器	A 13.3	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。 体部内・外面とも水挽き整形。	砂粒・雲母 橙色 普通	100% 覆土
		B 4.0			
		C 6.8			
315	坏 土師器	A (16.8)	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部は丸味を持つ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫 にぶい褐色 普通	30% 覆土
		B 5.7			
		C (7.0)			
316	高台付杯 土師器	A (14.6)	底部は平底で、「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。高台貼り付け。	砂粒・砂礫・雲母 淡橙色 普通	40% 竈
		B 5.1			
		D (8.0)			
		E 1.4			

第71号住居跡（第141図）

（位置） 調査区の西部，C5a₃区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.5×3.5mの長方形。

（主軸方向） N-22°-W。

（壁） 壁高は35cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて，中央部は特に堅緻である。

（ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは，径26～28cm，深さ20～26cmを測る。

（竈） 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，袖部・天井部は崩落，袖部だけが残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し，焚口部から煙道部は急角度に立ち上がる。

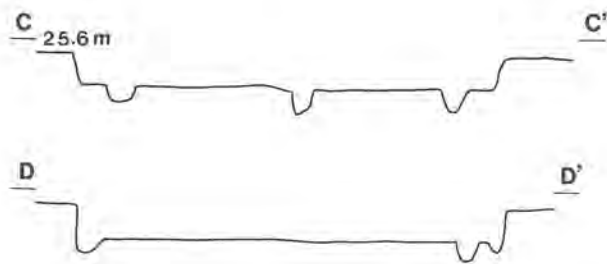
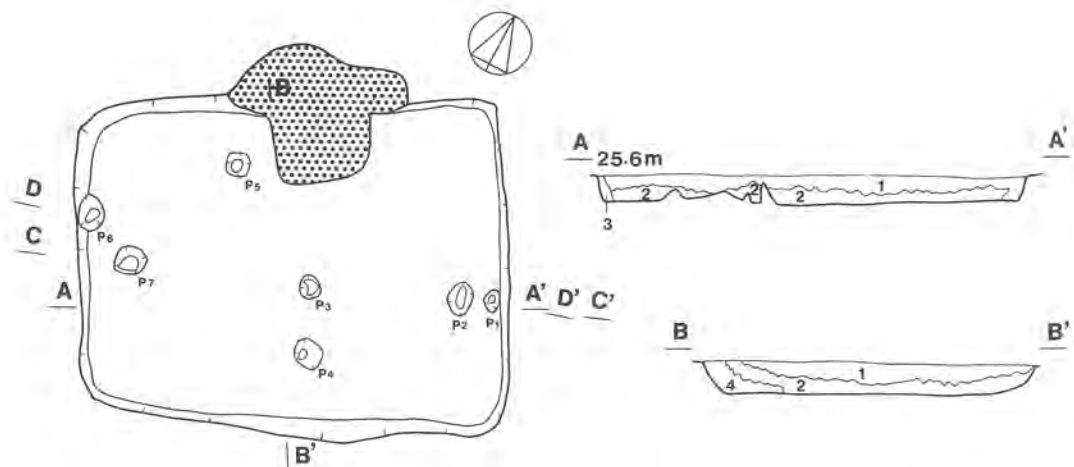
（覆土） 自然堆積。各層にローム粒子・焼土・炭化粒子が含まれる。

（遺物） 竈付近と住居跡の中央部床面から土師器（坏・甕），須恵器（甕・壺）が集中して出土している。318は土師器坏，320は土師器甕である。

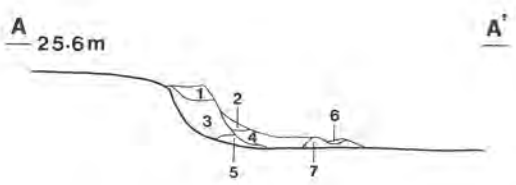
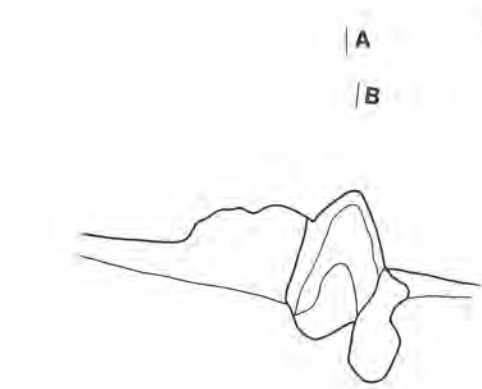
（所見） 本跡は遺構の形態・遺物から判断して，6世紀後半に比定される住居跡である。

第71号住居跡出土遺物解説表

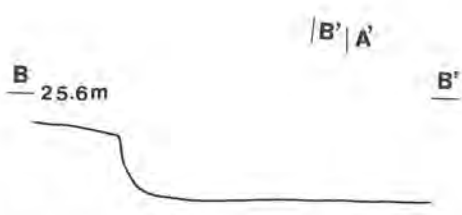
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 317	坏 土師器	A 13.1	底部は丸底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜を有し，口縁端部は外反する。 体部外面ヘラ切り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・雲母 黒色 普通	100% 体部内・外面黒色処理 覆土
		B 4.6			



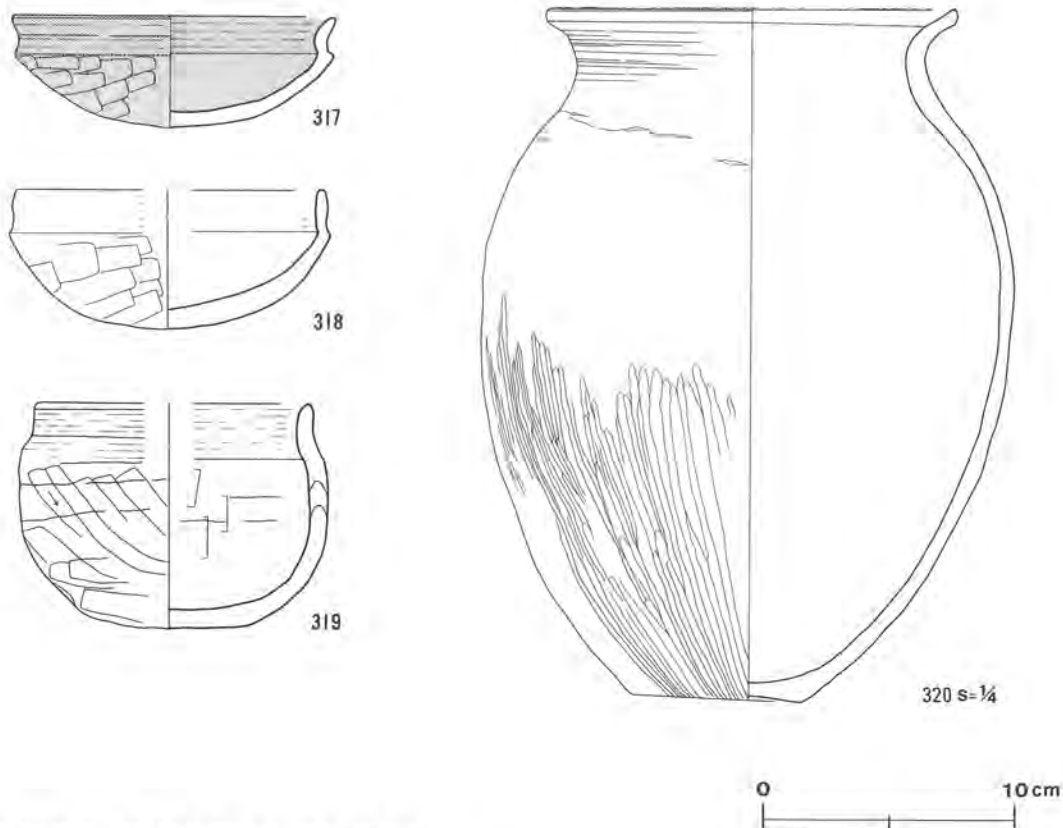
- S I-71 土層解説
- 1 暗褐色 黒色土, ローム粒子
 - 2 暗褐色 黒色土, ローム・焼土粒子
 - 3 暗褐色 褐色土, ロームブロック
 - 4 暗褐色 ローム粒子, ローム・焼土ブロック



- S I-71 土層解説
- 1 褐色 ローム粒子
 - 2 褐色 ローム小ブロック
 - 3 灰褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 4 にぶい橙色 ローム小ブロック
 - 5 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
 - 6 にぶい橙色 ローム中ブロック, 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 7 暗褐色 ローム粒子



第141図 第71号住居跡・竈実測図



第142図 第71号住居跡出土遺物実測図

第71号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 318	坏 土師器	A (12.6)	底部は丸底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を有し、口縁端部は直立気味に立ち上がる。体部外面へラ切り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい赤褐色 普通	60%
		B 5.7			床面
319	壺 土師器	A (11.0)	体部は球形を呈す。口縁部やや内彎気味に外傾。体部へラ削り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい赤褐色 良好	70%
		B 9.3			覆土
		C 6.8			
320	壺 土師器	A 21.2	胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口唇端部は丸味をもつ。胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄褐色 普通	40%
		B 36.7			覆土
		C 9.0			

第72号住居跡 (第143図)

(位置) 調査区の西部、D5c₁区を中心に確認。

(規模と平面形) 5.3×4.8mの方形。

(主軸方向) N-22°-W。

(壁) 壁高は42cmを測り、垂直に立ち上がる。

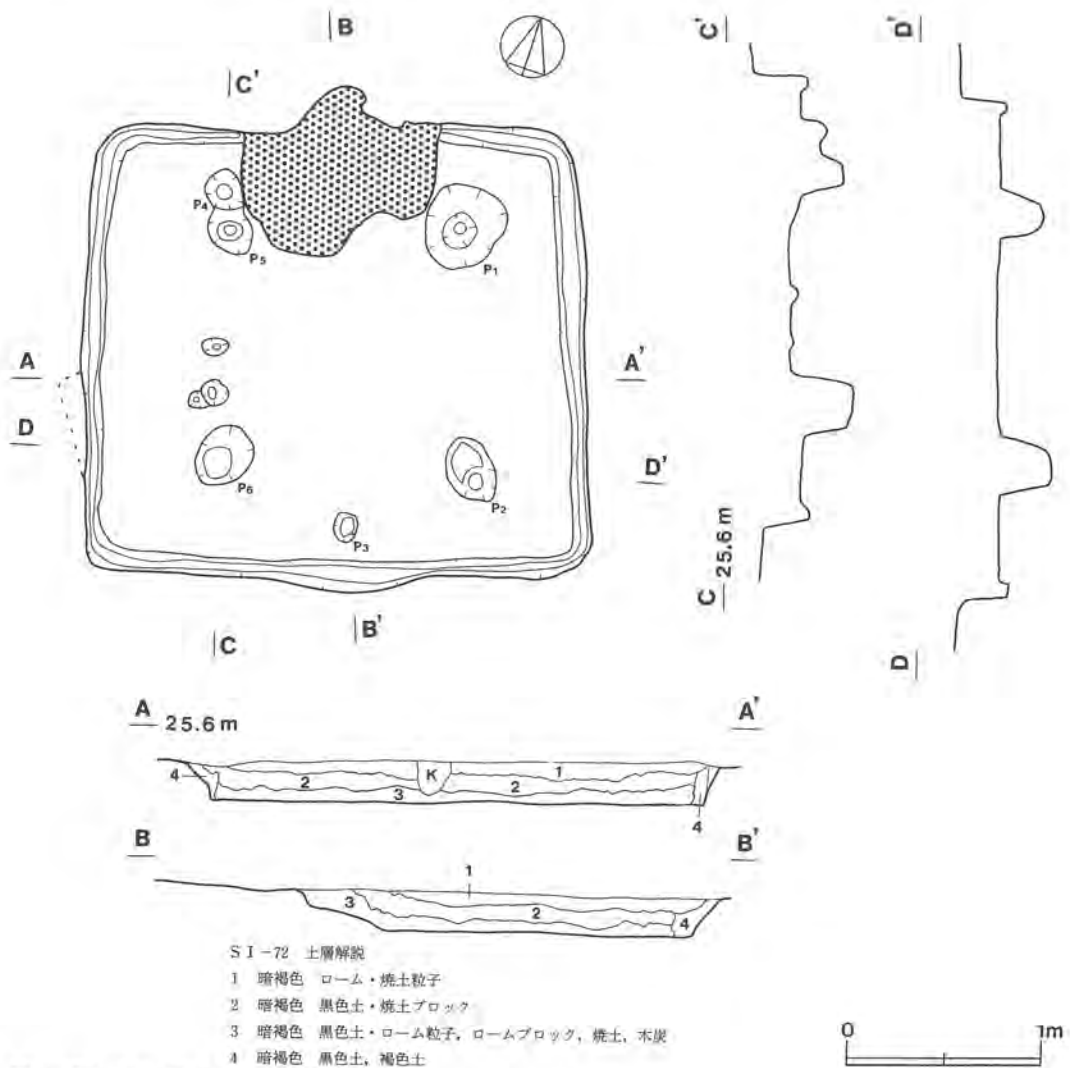
(壁溝) 幅20cm, 深さ10cm, 掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床面) 竈から中央部付近は凸凹しているが, 硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 6か所 (P₁~P₆)。掘り込みは, 径50~60cm, 深さ50~60cmと比較的大きな柱穴であり支柱穴はP₁~P₃・P₅・P₆の5本である。

(竈) 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く, 天井部は崩落, 袖部だけが残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し, 焚口部から煙道部は急角度に立ち上がる。

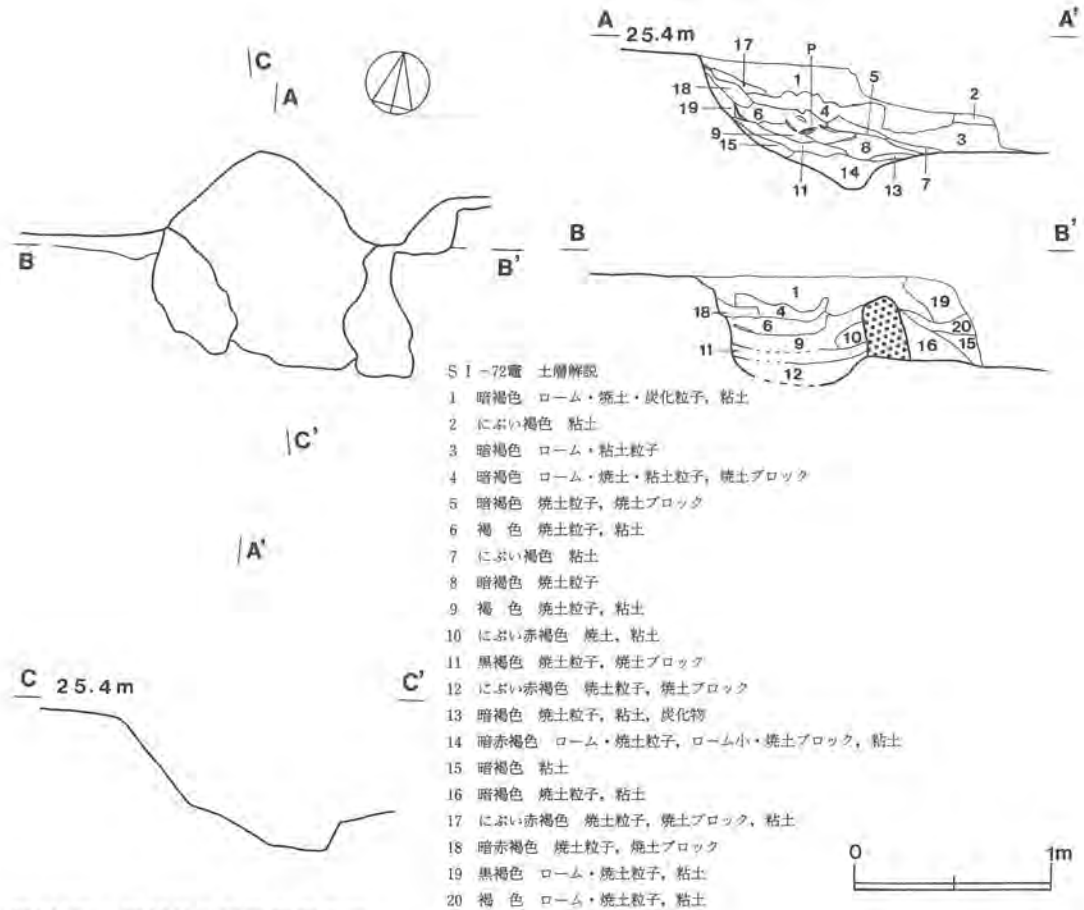
(覆土) 自然堆積。



第143図 第72号住居跡実測図

(遺物) 竈付近から集中して土師器(甕), 須恵器(坏・甕)が出土している。321は土師器坏, 322は須恵器坏, 325は土師器甕で竈の袖部の芯として使用された状態で出土している。

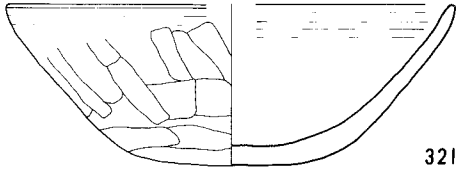
(所見) 本跡は遺構の形態・遺物から判断して, 9世紀前半に比定される住居跡である。



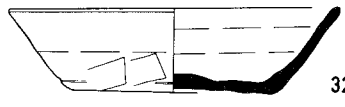
第144図 第72号住居跡竈実測図

第72号住居跡出土遺物解説表

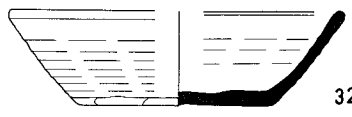
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 321	坏 土師器	A (17.8)	底部は丸底気味で, 体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁 端部は丸味をもつ。 体部外面はヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母 内面橙色・外面黒色 普通	40% 覆土
		B 6.5			
322	坏 須恵器	A 13.1	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は小さく外反する。 底部回転ヘラ切り後ナデ。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	80% 竈
		B 3.5			
		C 8.2			



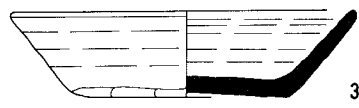
321



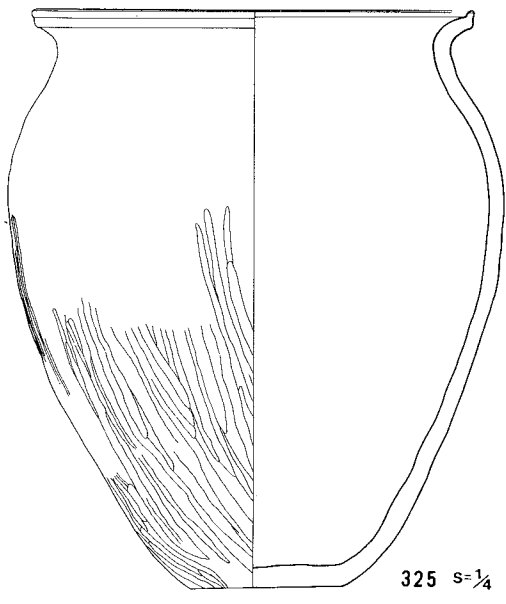
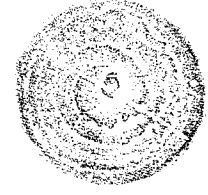
322



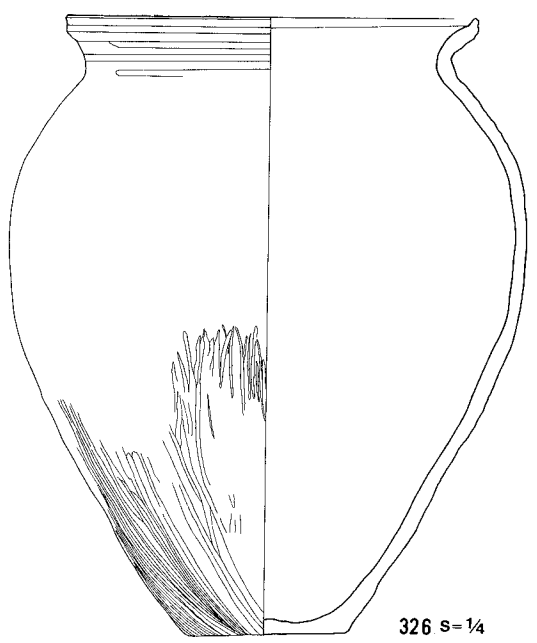
324



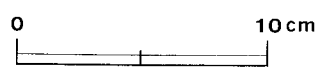
323



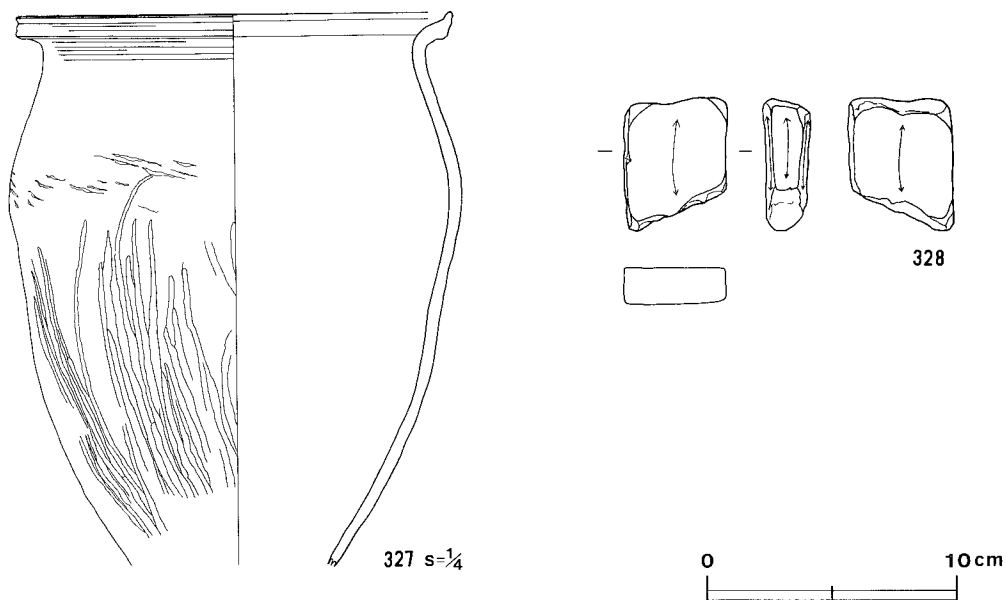
325 s=1/4



326 s=1/4



第145図 第72号住居跡出土遺物実測図(1)



第146図 第72号住居跡出土遺物実測図(2)

第72号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 323	坏 須恵器	A 13.7	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。底部へら切り。周辺へら削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 におい黄橙色 普通	80% 覆土
		B 3.5			
		C 8.0			
324	坏 須恵器	A (13.3)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反し、口縁端部は丸味をもつ。底部へら切りで、周辺へら削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・長石・雲母 暗灰黄色 普通	50% 竈
		B 3.8			
		C 7.7			
325	甕 土師器	A (23.0)	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内上方につまみ出される。胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	60% 竈
		B 30.6			
		C 8.1			
326	甕 土師器	A 21.4	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内上方につまみ出されている。胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 明褐色 普通	50% 竈
		B 32.8			
		C 8.4			
第146図 327	甕 土師器	A 22.9	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 橙色 普通	80% 竈
		B (29.3)			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
328	砥石	全長 5.3 幅 4.2 厚さ 1.9 重さ 49.1g	長方形の砥石。側面に破損が認められる。他の五面には使用痕が認められて平滑で、使い減りが顕著。	凝灰岩	

第73号住居跡（第147図）

（位置） 調査区の西側，D5f₁区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.2×3.7mの方形。

（主軸方向） N-24°-W。

（壁） 壁高は44cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅巾10~20cm，深さ10~18cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 全体に平坦で硬く踏み固められている。中央部から竈付近は，特に堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁~P₅）。掘り込みは，径20~30cm，深さ25~30cmを測り，支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を30cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落，袖部だけが残存し，馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し，燃焼部には焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から煙道部は急角度で立ち上がる。

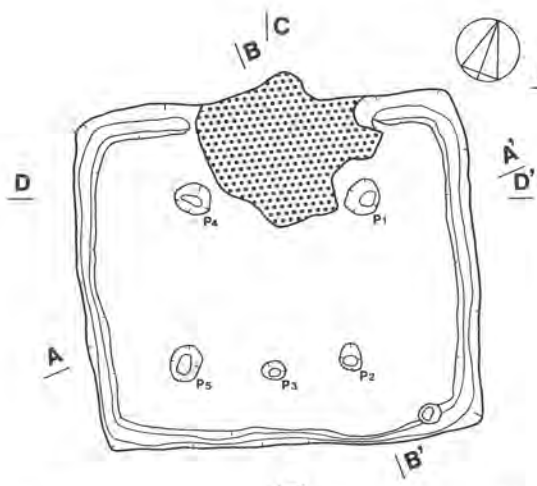
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近と住居跡の西側床面上から土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が出土している。330は須恵器坏で，332は土師器甕である。333は土師器甕片で竈の天井部に補強材として使用された状態で出土している。

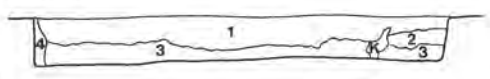
（所見） 本跡は遺構の形態・遺物等から判断して，9世紀前半に比定される住居跡である。

第73号住居跡出土遺物解説表

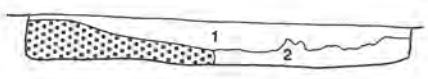
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 329	坏 須恵器	A (18.0)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部はわずかに外反する。 底部回転ヘラ切り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・雲母 黄灰色 良好	20% 覆土
		B 4.9			
		C (12.2)			
330	坏 須恵器	B (3.2)	体部はわずかに外反気味に立ち上がる。 底部回転ヘラ切り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	60% 覆土
		C 8.8			
331	甕 土師器	A 21.6	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がる。 口頸部は「く」の字状に外反し，口縁端部は垂直気味に立ち上がっている。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい黄褐色 不良	60% 竈
		B (26.2)			
332	甕 土師器	A 18.7	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部は「く」の字状に外反し，口縁端部は垂直気味に立ち上がっている。 胴部ヘラナデ・ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	70% 竈
		B 28.6			
333	甕 土師器	A (24.5)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がる。 頸部は「く」の字状に外反し，口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部ヘラナデ・ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	30% 竈
		B (23.5)			
334	甕 土師器	A 23.0	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，胴部上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面ヘラナデ・ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	60% 竈
		B 32.7			
		C 10.2			



A 25.6m A'



B B'



C 25.6m C'

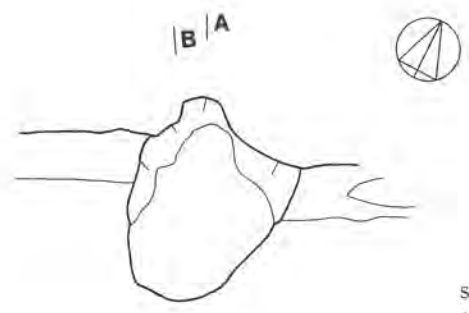
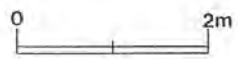


D D'

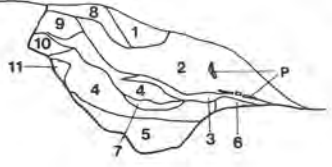


S I - 73 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子, ローム・黒色土ブロック
- 2 暗褐色 ローム・黒色土ブロック, 焼土, 木炭, 粘土
- 3 暗褐色 黒色土, 褐色土, 焼土・木炭粒子
- 4 暗褐色 ローム, 黒色土, 褐色土



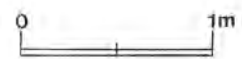
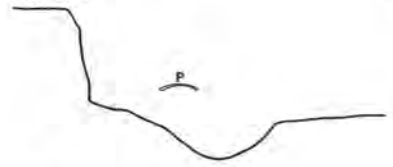
A 25.4m A'



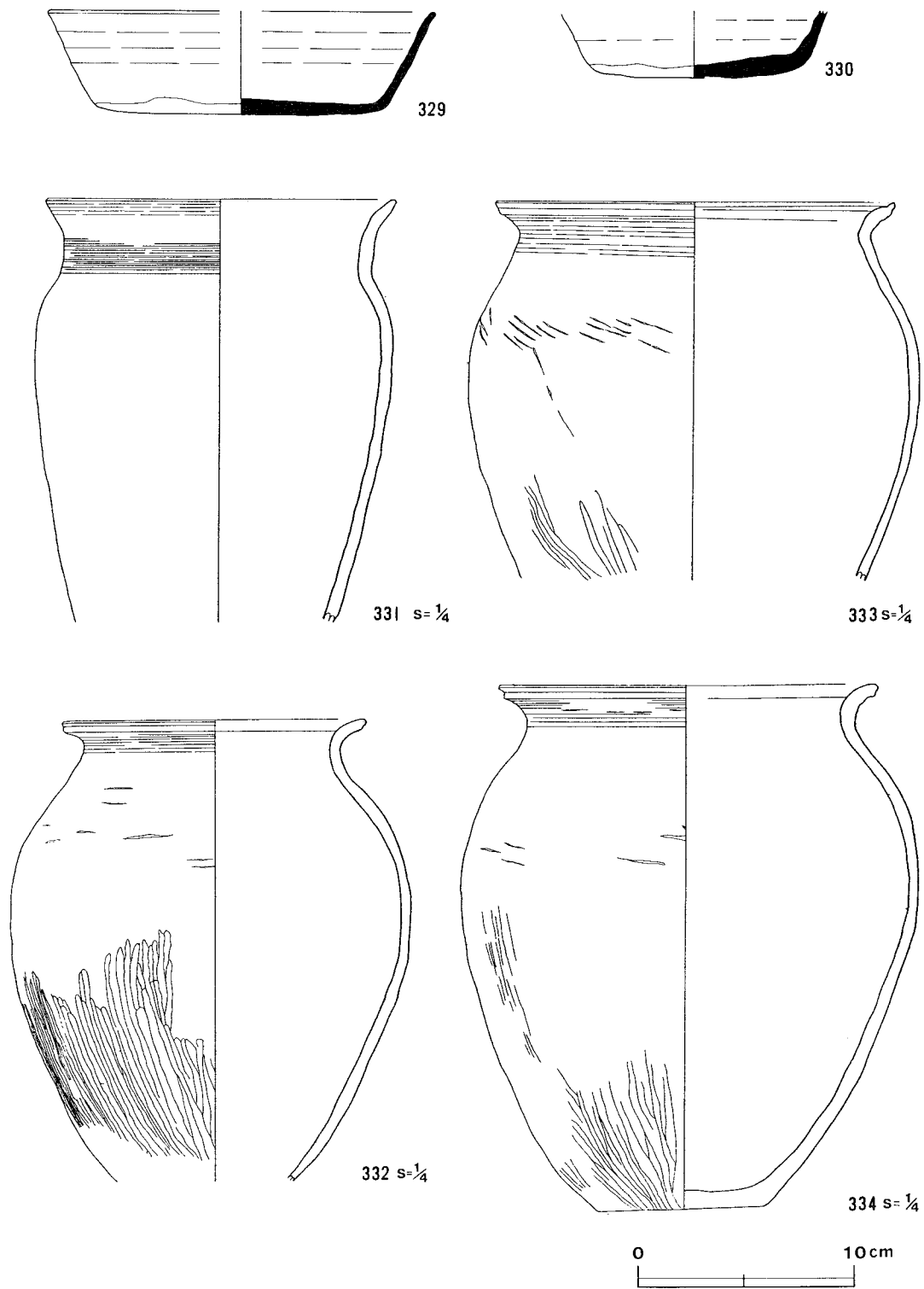
S I - 73電 土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック, 砂粒
- 2 褐色 ローム粒子, 焼土・粘土ブロック, 炭化物, 砂粒
- 3 におい褐色 粘土ブロック, 砂粒
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック
- 5 褐色 ローム小・粘土ブロック
- 6 褐色 ローム中・焼土ブロック
- 7 明褐色 ローム中・大ブロック, 粘土ブロック, 砂粒
- 8 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土ブロック, 砂粒
- 9 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 10 暗褐色 ローム粒子, ローム中ブロック
- 11 におい赤褐色 焼土粒子, 砂粒

A 25.4m A'



第147図 第73号住居跡・竈実測図



第148图 第73号住居跡出土遺物実測図

第74号住居跡（第149図）

（位置） 調査区の西側，D4f₉区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.7×4.4mの方形。

（主軸方向） N-19°-W。

（壁） 壁高は36cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 平坦で硬く踏み固められ中央部が最も堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径20～30cm，深さ38～50cmを測る。支柱穴はP₂～P₅の4本である。

（竈） 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部及び焚口部は崩落し，袖部だけが残存し，馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し，煙道部から焚口部にかけて急角度で立ち上がる。

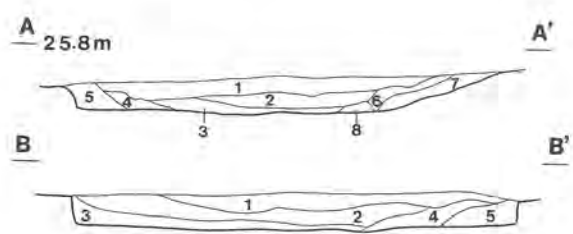
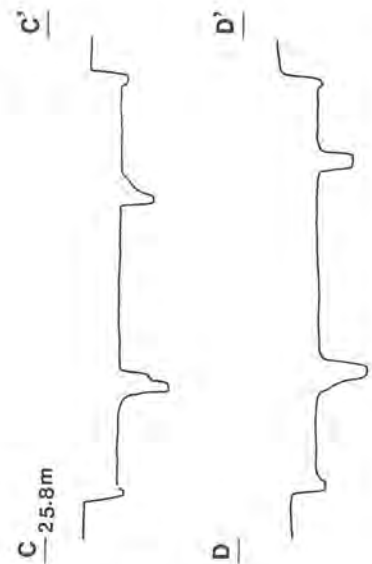
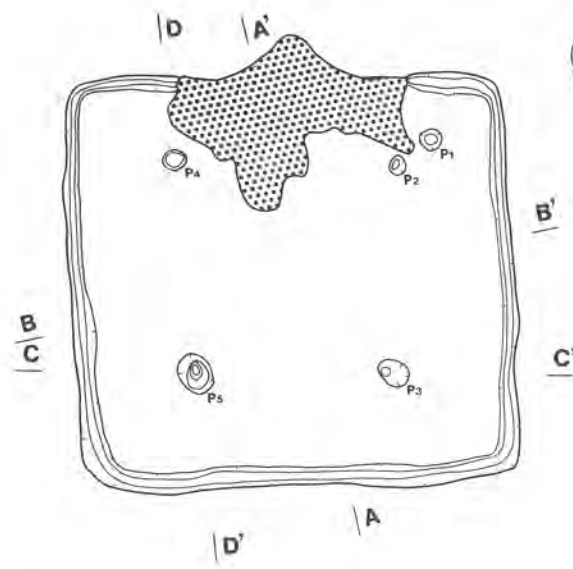
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近から集中して土師器（坏・甕），須恵器（甕・坏・蓋甕）の破片が出土している。335は須恵器坏で床面から，336は須恵器坏で竈内から竈の補強材として用いられた状態で出土している。

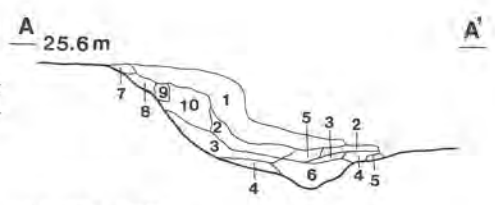
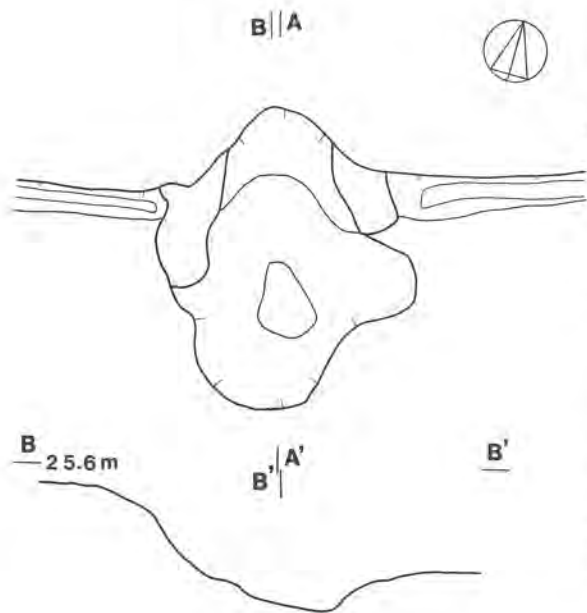
（所見） 本跡は遺構の形態・遺物等から判断して，9世紀前半に比定される住居跡である。

第74号住居跡出土遺物解説表

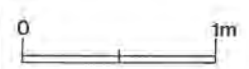
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 335	坏 須恵器	A 13.2	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部は丸味を持つ。 底部・周辺へラ削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・長石・石英・雲母 灰色 普通	90% 覆土
		B 4.1			
		C 6.0			
336	坏 須恵器	A 12.9	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。 底部へラ切り。周辺へラ削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	100% 竈
		B 4.3			
		C 8.5			
337	坏 須恵器	A 13.3	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で外反し，端部は丸味を持つ。 底部へラ切り。周辺へラナデ。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	80% 竈
		B 4.3			
		C 5.7			
338	坏 須恵器	A (12.5)	体部は外反気味に立ち上がり，口縁部付近で内彎し，端部は丸味を持つ。 底部回転へラ切り。周辺へラ削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・石英・雲母 浅黄色 普通	60% 覆土
		B 4.1			
		C 7.2			
339	坏 須恵器	A (13.0)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部付近で外反し，端部は丸味を持つ。 底部回転へラ切り。周辺へラ削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	30% 覆土
		B 4.1			
		C (7.8)			



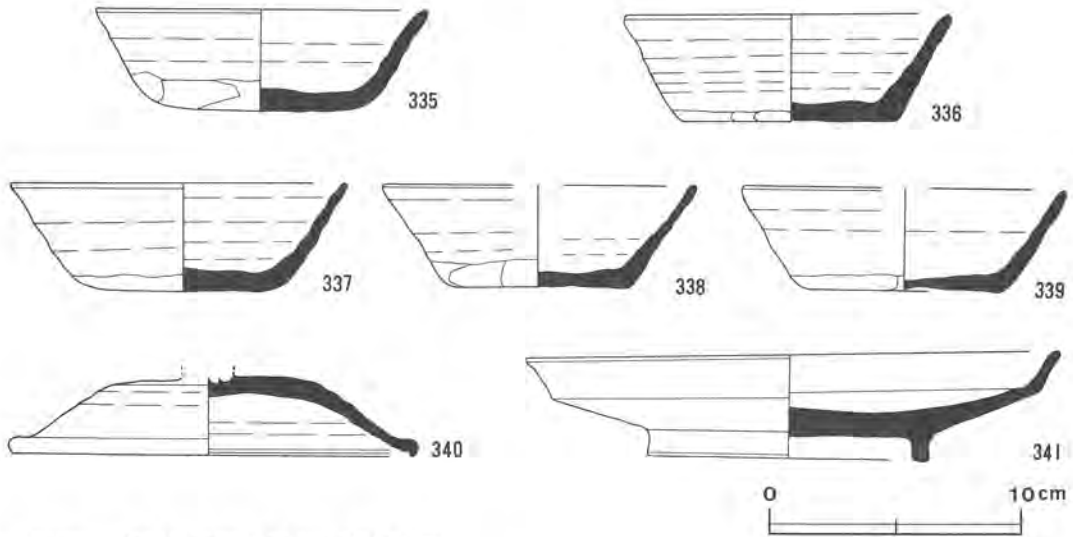
- S1-74 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
 - 2 暗褐色 ローム小ブロック, 焼土・炭化粒子
 - 3 褐色 ローム粒子
 - 4 褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 5 暗褐色 硬質粘土
 - 6 暗赤褐色 硬質ローム, 焼土ブロック
 - 7 におい赤褐色 焼土ブロック, 硬質粘土
 - 8 褐色 粘土



- S1-74 土層解説
- 1 褐色 焼土・粘土ブロック, 砂粒, 砂礫
 - 2 褐色 焼土粒子
 - 3 赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 4 褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子
 - 5 暗褐色 焼土ブロック
 - 6 におい赤褐色 ローム中・焼土ブロック, 焼土粒子
 - 7 におい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土
 - 8 におい赤褐色 焼土ブロック, 粘土
 - 9 暗赤褐色 焼土ブロック
 - 10 褐色 焼土ブロック, 粘土



第149図 第74号住居跡・竈実測図



第150図 第74号住居跡出土遺物実測図

第74号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 340	蓋 須恵器	A 16.4	天井頂部はやや扁平で、やや反り気味に下降し、天井部と口縁部の境界に明瞭な稜をもつ。口縁部は下方向に屈曲し、端部にやや丸い面をなす。 天井頂部回転ヘラ削り調整。天井部から体部、水挽き整形。	砂粒・砂礫・長石 灰黄色 良好	70% 覆土
		B 3.1			
341	甃 須恵器	A 21.4	体部は内嚢しつつ外上方に開く。体部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反して端部はやや丸い。高台は「ハ」の字状に外下方に開き、端部は面をなす。 体部内面から高台にかけて攪ナデ調整。高台は貼り付け。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 良好	80% 覆土
		B 4.5			
		D 11.2			
		E 1.1			

第75号住居跡（第151図）

（位置） 調査区の西側，D4g₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.7×2.2mの方形。

（主軸方向） N-62°-E。

（壁） 壁高は21cmを測り，外傾して立ち上がる。

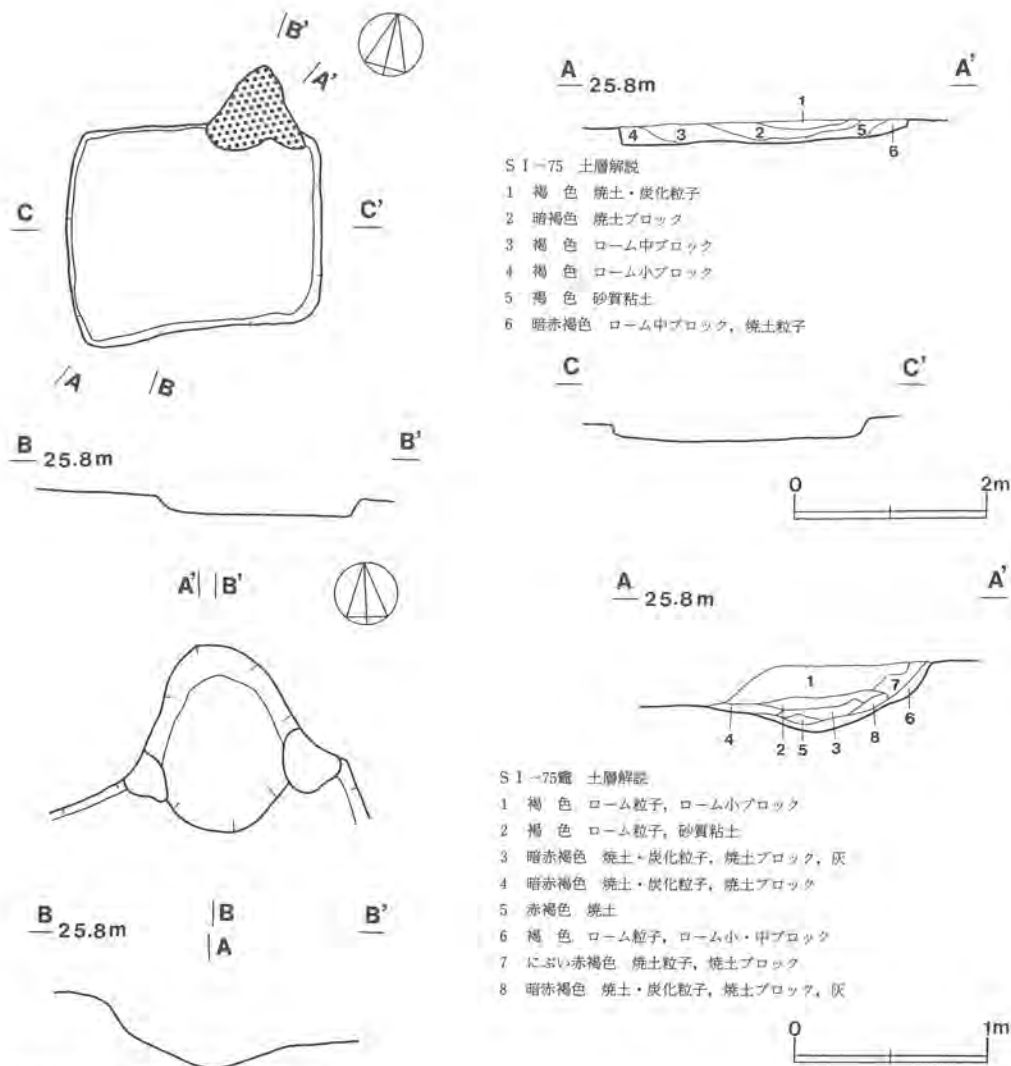
（床） 中央部は凸凹しているが，全体に硬く踏み固められていて堅緻である。

（竈） 北東コーナー部を80cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築している。遺存状態は悪く，天井部及び焚口部は崩壊し袖部の一部だけが残存し，馬蹄形を呈す。火床部はさほど焼土化していないが，若干焼土粒・炭化物が含まれている。煙道部は火床部から比較的緩やかな立ち上がりを示している。

（覆土） 自然堆積。

(遺物) 覆土上層より土師器(坏・甕), 須恵器(坏・甕)の破片が流れ込みの状態では出土している。本跡に伴う遺物は検出されない。

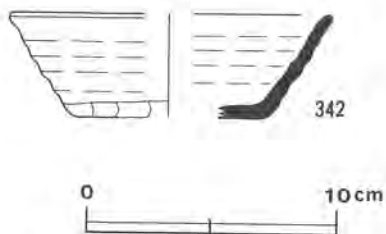
(所見) 本跡は遺構の形態, 竈の構築場所から捉えると10世紀前半に比定される住居跡である。



第151図 第75号住居跡・竈実測図

第75号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 342	坏 須恵器	A (12.8) B 4.2 C (7.8)	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁端部は外反する。 底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。体部内・外面水挽き 整形。	砂粒・長石・石英・ 雲母 黒色 良好	10% 覆土

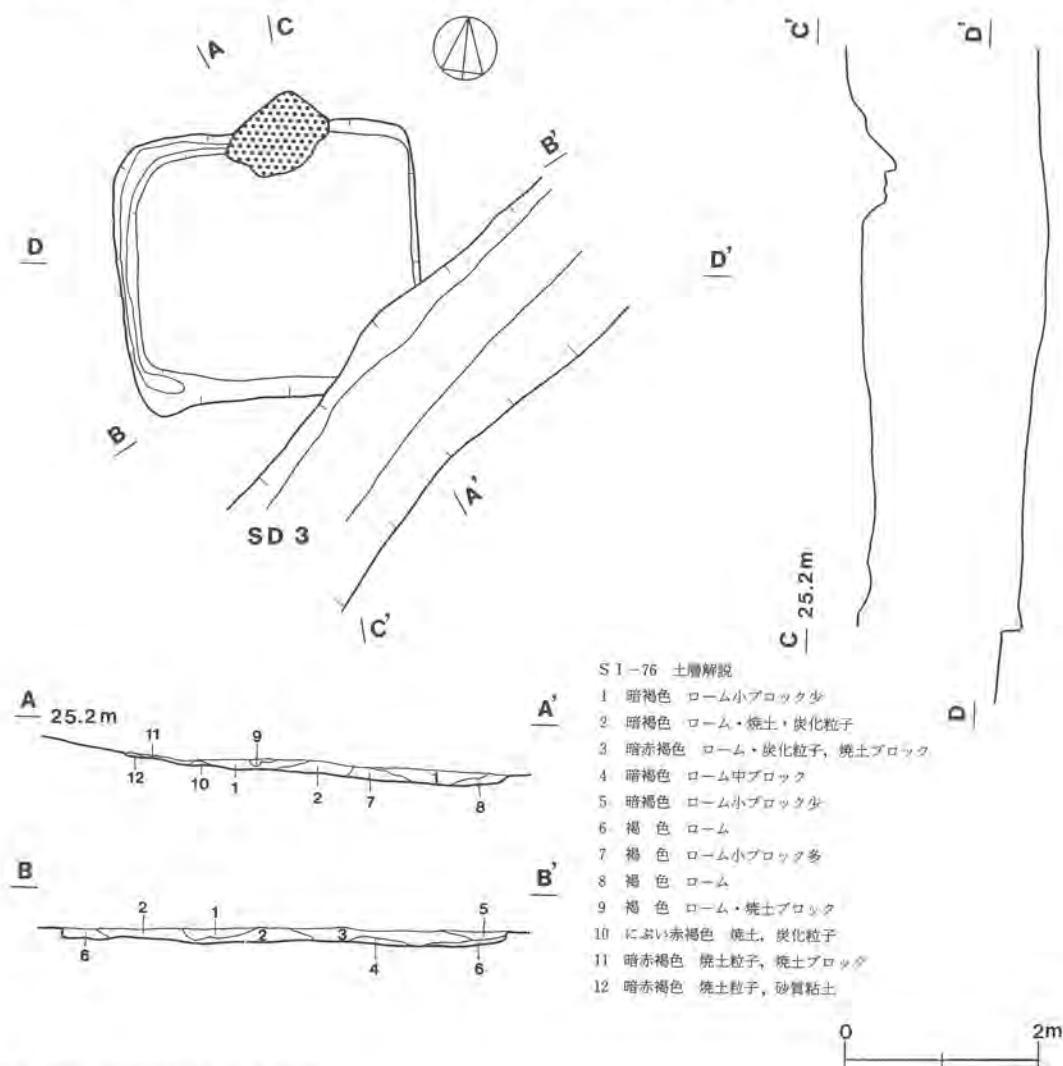


第152図 第75号住居跡出土遺物実測図

第76号住居跡 (第153図)

(位置) 調査区の西側, D5i₁区を中心に確認。

(重複) 住居跡の南側は, 第3号溝と重複し, 破壊されている。



第153図 第76号住居跡実測図

(規模と平面形) 3.1×2.0mの方形。

(主軸方向) N-13°-W。

(壁) 壁高は19cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm、深さ4cmを測り、掘り込み断面形状はL状を呈し西壁下に若干検出されるだけである。

(床) 全体に凸凹しているが、硬く踏み固められていて堅緻である。

(竈) 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、天井部及び焚口部は崩壊し、袖部だけが残存して馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し、煙道部は火床部から比較的緩やかに立ち上がる。

(覆土) 人為堆積。

(遺物) 竈付近に集中して土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕・甑)の破片が出土している。土師器甕片は、竈の天井部が崩落した地域から出土しており、その状況から竈の補強材として用いられていたものと考えられる。

(所見) 本跡は、第3号溝によって破壊され、本跡に伴う遺物も小破片のため、本跡の時期は不明である。

第77号住居跡(第154図)

(位置) 調査区の西側、E5b₃区を中心に確認。

(規模と平面形) 7.0×4.9mの長方形。

(主軸方向) N-9°-W。

(壁) 壁高は15cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅24cm、深さ8cmを測り、掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

(床) 全体に凸凹しているが、硬く踏み固められていて堅緻である。

(ピット) 17か所(P₁~P₁₇)。掘り込みは、径20~40cm、深さ20~30cmを測るが、規則性がなく支柱穴は不明。

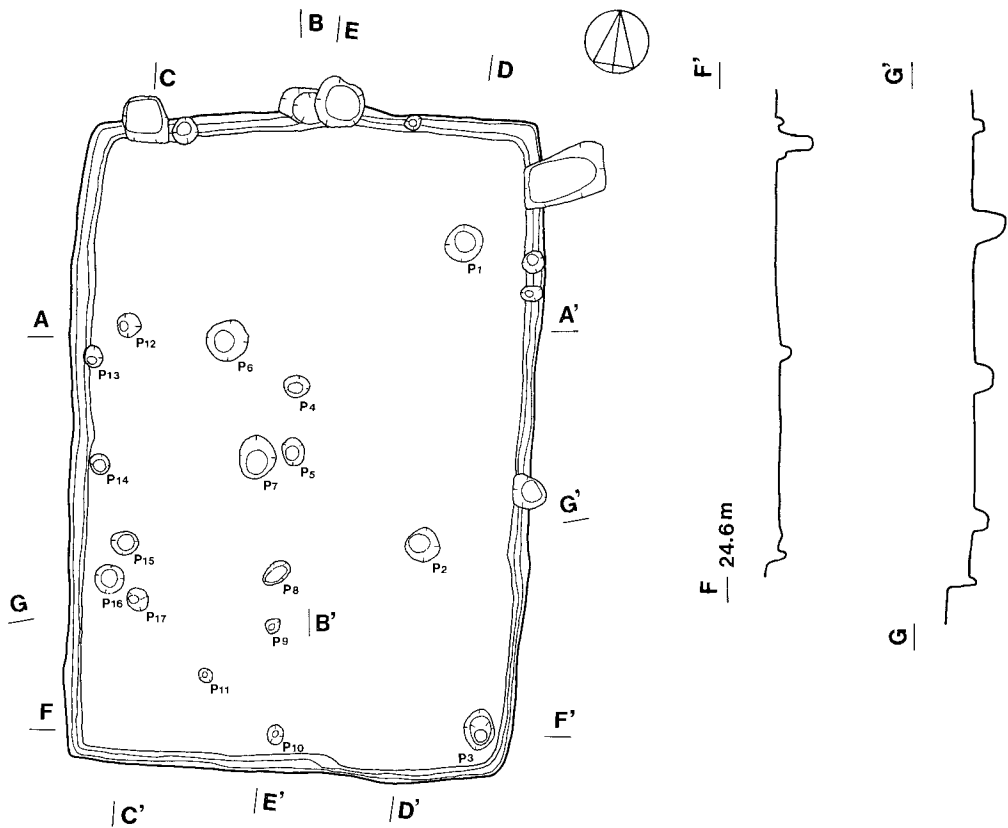
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 各コーナー付近に土師器(坏・甕)、須恵器(甕)の破片が散在して出土している。

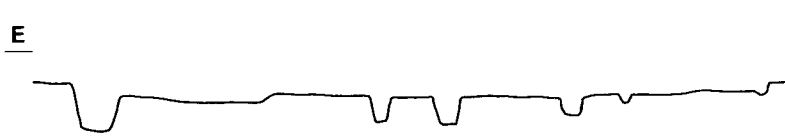
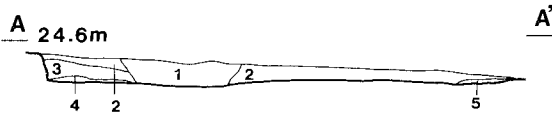
(所見) 本跡は遺構の形態、遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。

第77号住居跡出土遺物解説表

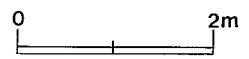
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 343	坏 土師器	A (18.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、底部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は内彎気味に立ち上がる。 体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 黒褐色 良好	15% 内・外面黒色処理 覆土
		B (5.9)			



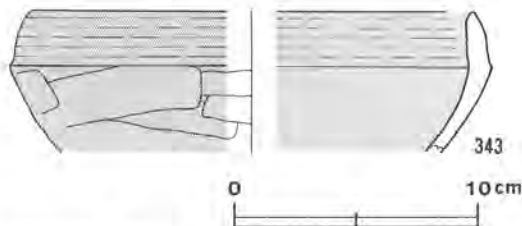
F — 24.6m



- SI-77 土層解説
- 1 黒褐色 ローム・焼土粒子
 - 2 黒褐色 ローム粒子中
 - 3 黒褐色 ローム粒子少
 - 4 褐色 ローム粒子多
 - 5 褐色 ローム粒子中
 - 6 褐色 ローム・焼土粒子



第154図 第77号住居跡実測図



第155図 第77号住居跡出土遺物実測図

第80号住居跡 (第156図)

(位置) 調査区の南側, F5a₅区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.5×4.4mの方形。

(主軸方向) N-19°-W。

(壁) 壁高は25cmで外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm, 深さ10cmを測り, 掘り込み断面形状はL状を呈し, 東・南・西壁の一部で検出されている。

(床) 平坦で硬く踏み固められていて堅緻である。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは, 径60cm, 深さ30~38cmを測り, 全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を55cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化して, 燃烧部には焼土粒・炭化物が多量に充填されている。煙道部は焚口部から緩く立ち上がる。

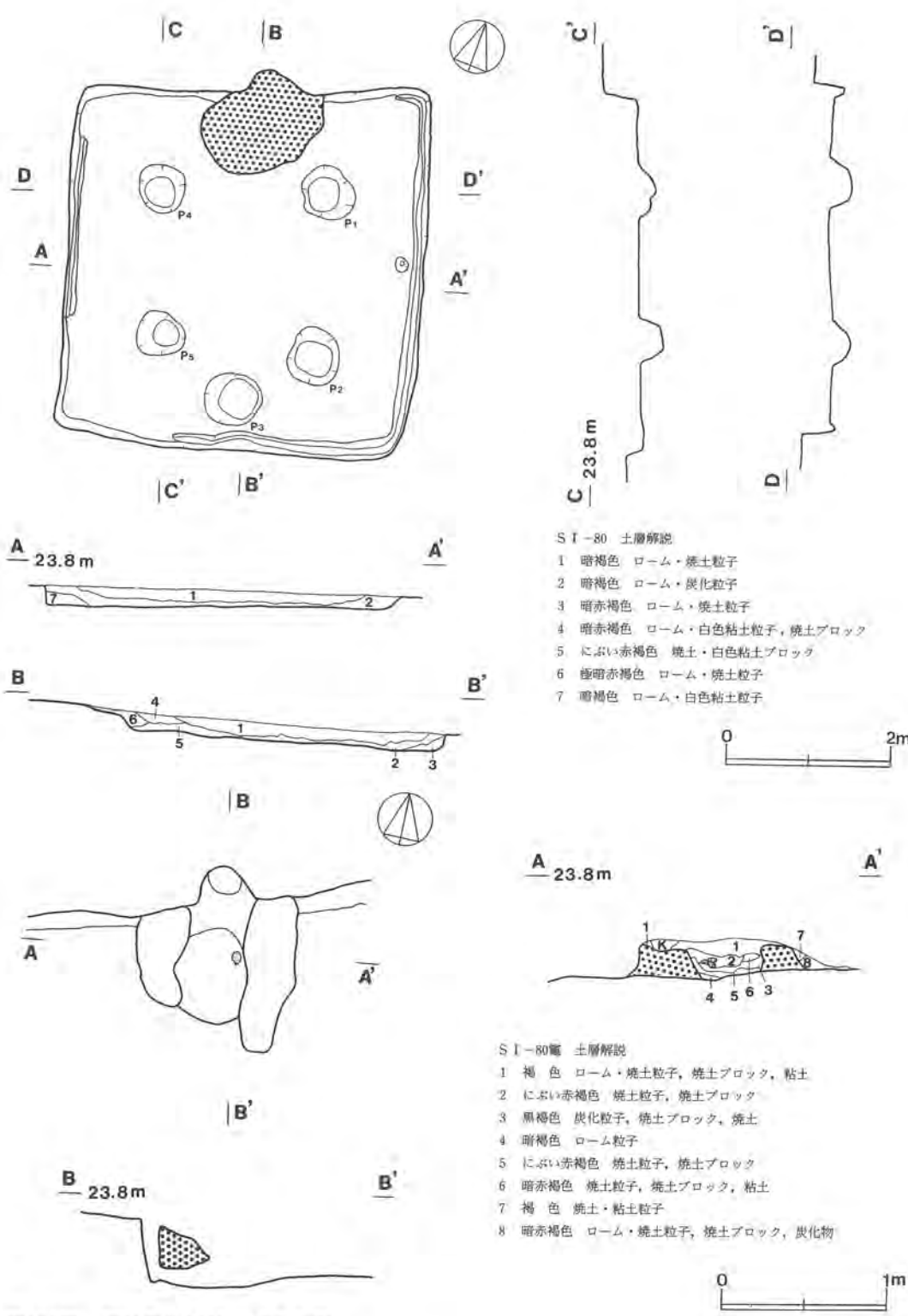
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈付近の覆土上層より土師器 (坏・坑・甕), 須恵器 (坏・蓋・壺・甕) の破片が集中して出土している。

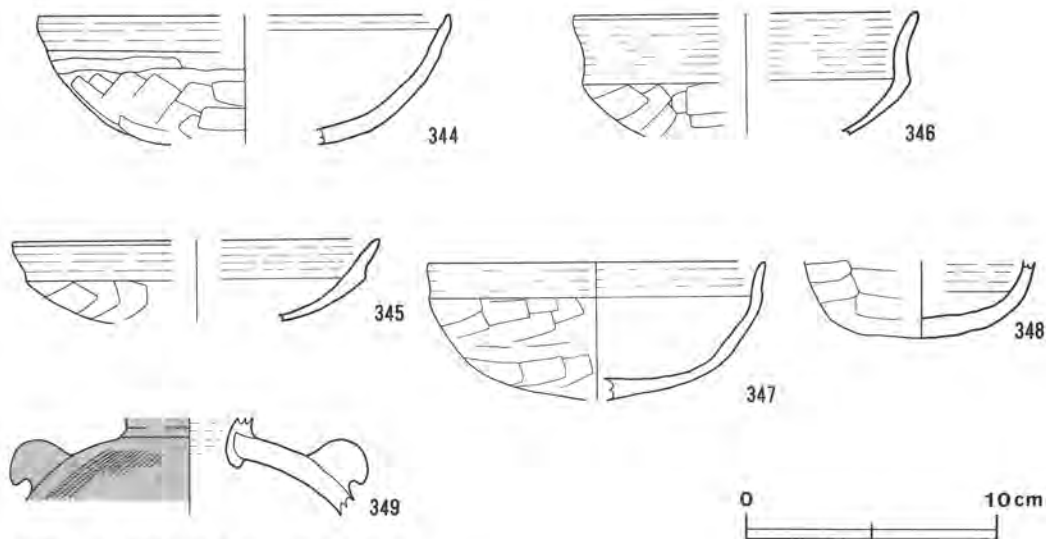
(所見) 本跡は遺構の形態, 遺物から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。

第80号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 344	坏 土師器	A (16.6)	底部は丸底で, 体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部付近で小さく外反する。 体部外面はへら切り。口縁部・体部内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色 良好	20%
		B (5.2)			覆土
345	坏 土師器	A (14.8)	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部との境に稜を持つ。 口縁部は外反し, 端部は丸味をもつ。 体部外面へら切り後ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母にぶい橙色 良好	20%
		B (3.3)			床面



第156図 第80号住居跡・竈実測図



第157図 第80号住居跡出土遺物実測図

第80号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 346	坏 土師器	A (13.8) B (4.9)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。 口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。 体部外面へら切り後ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 黒褐色 普通	10% 覆土
347	坏 土師器	A (13.6) B 5.6	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は垂直に立ち上がる。 体部へら削り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 良好	60% 覆土
348	坏 土師器	B (3.1)	底部は丸底で、体部は内彎気味に立ち上がる。 底部へら切り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 良好	40% 覆土
349	甗 陶磁器	B (3.9)	肩部は張り、丸味強い。口縁部は垂直に立ち上がる。肩部に把手を有する。 肩部外面ナデ。	砂粒・長石・石英 灰白色 良好	10% 外面に釉 覆土

第82号住居跡 (第158図)

(位置) 調査区の西側、E2a₀区を中心に確認。

(規模と平面形) 6.4×6.4m方形。

(主軸方向) N-32°-W。

(壁) 壁高は22cmで外傾して立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm、深さ8cmを測り、掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

(床) 中央部は若干窪んでいるが、全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは、径50~60cm、深さ38~40cmを測り、全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を55cm程壁外へ掘り込み粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し、燃焼部には焼土粒・炭化物が多量に充填され、煙道部は焚口部から緩く立ち上がる。

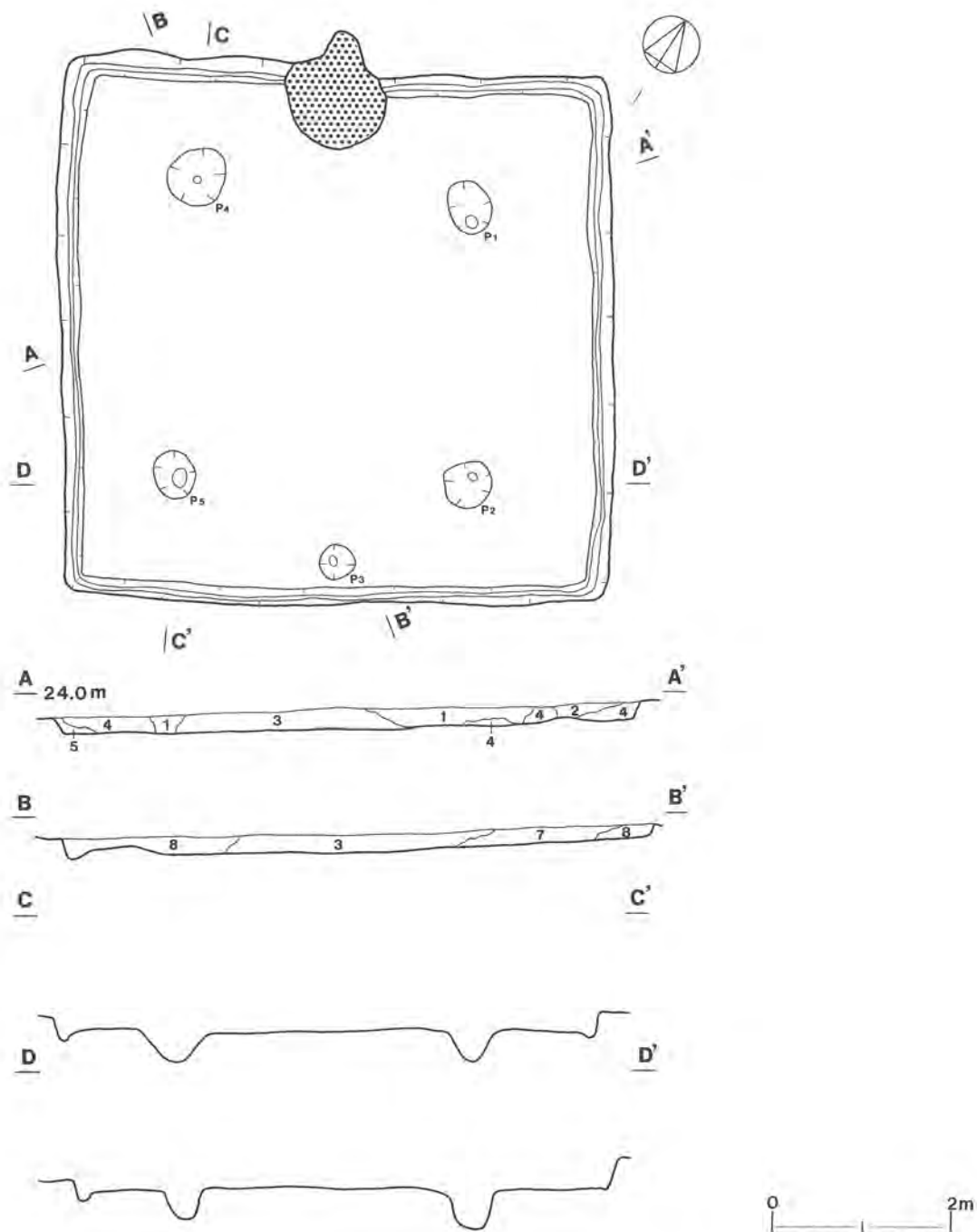
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 各壁際の覆土中層と下層に土師器(坏・高坏・手捏土器・甕)の破片が散在して出土している。350は土師器坏, 357は土師器高坏, 358は土師器手捏土器である。

(所見) 掘り込みは浅いが大型の住居跡である。本跡は遺構の形態、遺物から判断して6世紀前半に比定される住居跡である。

第82号住居跡出土遺物解説表

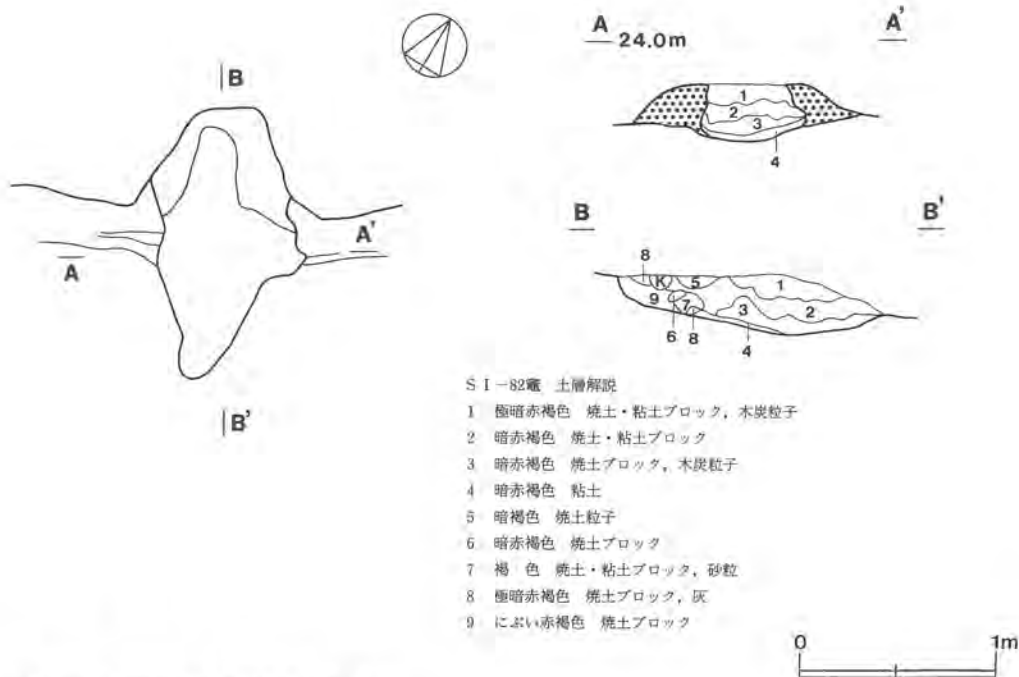
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 350	坏 土師器	A 13.2	底部は丸底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部、体部外面へら切り後ナデ。内面磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 に おい 橙色 普通	100% 覆土
		B 4.6			
351	坏 土師器	A (15.4)	底部は丸底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立する。内・外面摩擦・剝離激しく整形不明	砂粒・砂礫・雲母 橙 色 不 良	30% 覆土
		B 4.8			
352	坏 土師器	A 14.0	底部は丸底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもち、端部はわずかに直立する。底部・体部外面へら切り後ナデ。	砂粒・砂礫・長石・ 雲母 に おい 橙 色 不 良	90% 覆土
		B 4.3			
353	坏 土師器	A (13.3)	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は立ち上がる。体部へら削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 に おい 橙 色 普 通	30% 覆土
		B 5.3			
354	坏 土師器	A 14.3	底部は扁平な丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は丸味を持つ。体部へら削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 明 褐 色 普 通	70% 覆土
		B 4.1			
355	坏 土師器	A (15.0)	体部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は垂直に立ち上がり、端部は丸味をもつ。体部へら削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 に おい 橙 色 普 通	40% 内面黒色処理 覆土
		B (3.6)			
356	坏 土師器	A (14.4)	底部は扁平な丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は垂直に立ち上がる。体部外面へら削り後ナデ。体部内面・口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 明 褐 灰 色 普 通	50% 内面黒色処理 覆土
		B 4.0			
357	高杯 土師器	A 11.8	坏体部は、直線的に大きく開き、口縁部との境に稜をもち、端部は折れて外反する。脚部は「ハ」の字状に開く。杯部外面へら削り後ナデ。脚部内・外面ナデ整形。	砂粒・石英・雲母 内面・黒色、外面・ 橙 色 普 通	95% 内面黒色処理 覆土
		B 7.4			
		C 9.4			



SI-82 土層解説

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム・焼土粒子少 | 5 暗褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少 |
| 2 暗褐色 ローム・焼土粒子少, 炭化粒子少 | 6 暗褐色 ローム粒子少 |
| 3 暗褐色 ローム・焼土粒子少, 炭化粒子中 | 7 暗褐色 ローム粒子中, 焼土ブロック |
| 4 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック, 炭化物 | 8 暗褐色 ローム粒子中, 焼土粒子少, ローム小ブロック |

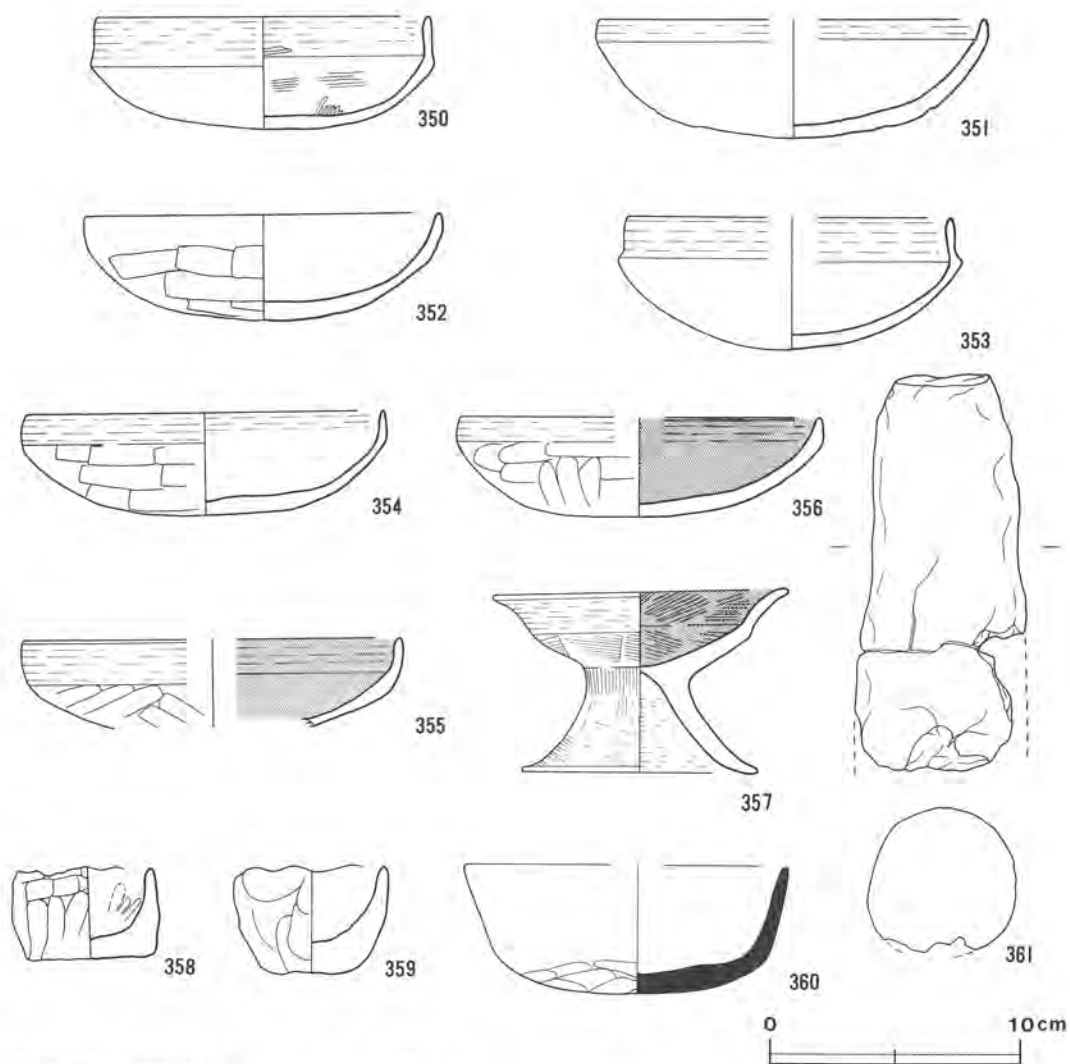
第158図 第82号住居跡実測図



第159図 第82号住居跡竈実測図

第82号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 358	手捏土器	A (5.3)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面指頭によるナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 良好	70% 覆土
	土師器	B 3.7			
		C 4.8			
359	手捏土器	A 5.9	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面指頭によるナデ後、口縁部外面へラ削り。	砂粒砂礫 淡黄色 普通	60% 覆土
	土師器	B 4.4			
360	焼 須 恵 器	A (12.8)	底部は扁平な丸底。体部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面横ナデ。底部へラ削り。	砂粒・砂礫 灰白色 普通	70% 覆土
		B 5.2			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
361	支脚	全長(16.0) 径(6.8)	上部が細くなる円柱 上・下部は欠損して いる。	粘度塊から 成形	



第160図 第82号住居跡出土遺物実測図

第83号住居跡 (第161図)

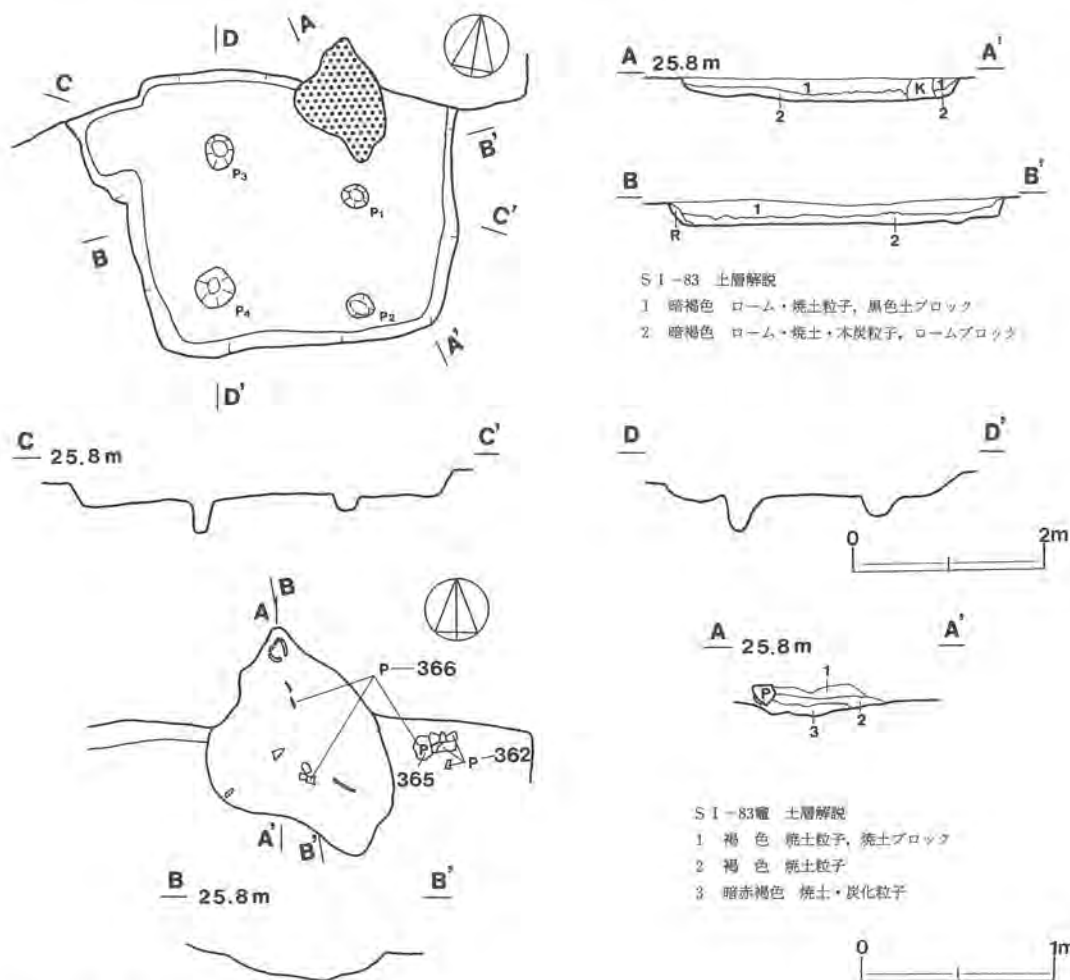
- (位置) 調査区の東側, C7g₈区を中心に確認。
- (重複) 本跡の北壁部で1号溝と重複。
- (規模と平面形) 3.5×2.8mの方形。
- (主軸方向) N-5°-W。
- (壁) 壁高は22cmで外傾して立ち上がる。
- (床) 全体に凸凹が認められるが、硬く踏み固められて堅緻である。
- (ピット) 4か所 (P₁~P₄)。掘り込みは、径20~30cm、深さ26~30cmを測り、全て主柱穴である。

(竈) 北壁中央部より若干東側に位置し、北壁を50cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、天井部及び焚口部は崩壊し、袖部だけが残存して馬蹄形を呈す。火床部は皿状に掘り込まれ、焼土化している。煙道部は焚口部から緩く立ち上がる。

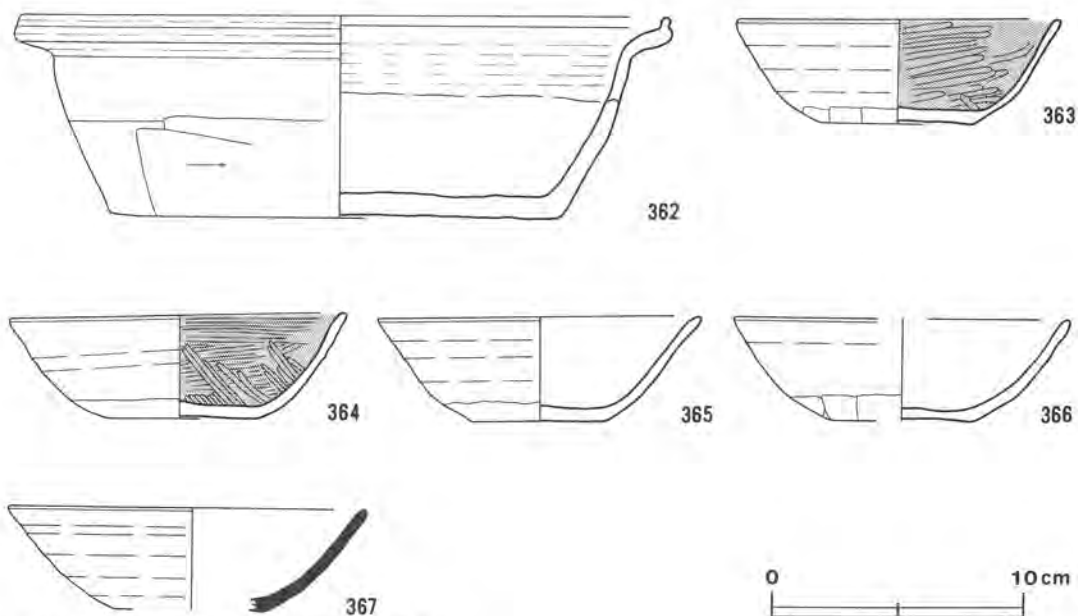
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈付近と西壁付近に土師器(坏・鉢・甕), 須恵器(甕)の破片が集中して出土し、これらの土器の内、須恵器坏片は竈の天井部の補強材として使用された状態で出土している。

(所見) 本跡は遺構の形態、遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



第161図 第83号住居跡・竈実測図



第162図 第83号住居跡出土遺物実測図

第83号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 362	鉢 土師器	A 26.2	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は「く」の字状を呈し、端部は直立する。 体部外面へラ削り。口縁部・体部内面ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にふい橙色 普通	90% 竈
		B 8.2			
		C 17.8			
363	坏 土師器	A 13.0	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は丸味をもつ。 体部外面水挽き。内面へラ磨き。底部へラ切り。	砂粒・砂礫 橙色 普通	90% 内面黒色処理 覆土
		B 4.3			
		C 6.1			
364	坏 土師器	A 13.3	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は小さく外反する。 体部外面水挽き。内面へラ磨き。底部回転へラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	80% 内面黒色処理 覆土
		B 4.3			
		C 5.8			
365	坏 土師器	A 12.7	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	80% 内・外面に煤付着 竈
		B 4.2			
		C 5.3			
366	坏 土師器	A (13.4)	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部で小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	60% 竈
		B 4.1			
		C (5.8)			
367	坏 須恵器	A 14.4	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部で小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。	砂粒・砂礫 淡黄色 普通	70% 覆土
		B 4.1			
		C (6.0)			

第85号住居跡 (第163図)

(位置) 調査区の中央部, D5b₅区を中心に確認。

(規模と平面形) 2.8×2.8mの方形。

(主軸方向) N-16°-E。

(壁) 壁高は49cmで垂直に立ち上がる。

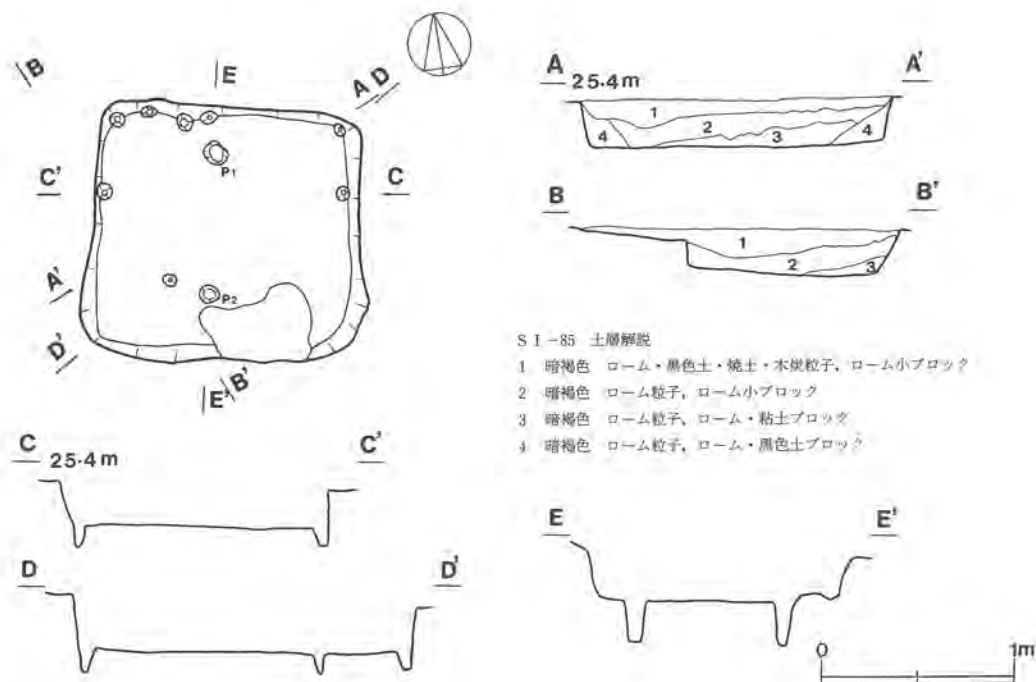
(床) 全体に硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 2か所(P₁・P₂)。掘り込みは、径20cm、深さ46~50cmを測り、全て支柱穴である。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層から、須恵器(甕)の細片が流れ込みの状態で出土しているが、本跡に伴うものではない。

(所見) 本跡は小竪穴住居跡である。柱穴は南北に2本確認され、南壁側に、粘土・黒色土が堆積して、スロープ状を呈してみ固めている状況から、入り口部の施設と捉えられる。本跡は遺構の形態から12世紀に比定される住居跡である。



第163図 第85号住居跡実測図

第86号住居跡 (第164図)

(位置) 調査区の東側, D7a₈区を中心に確認。

(重複) 第144号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.7×3.6mの方形。

(主軸方向) N-32°-W。

(壁) 壁高は40cmで垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅10cm, 深さ6cmを測り, 掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

(床) 全体に硬く踏み固められて堅緻である。

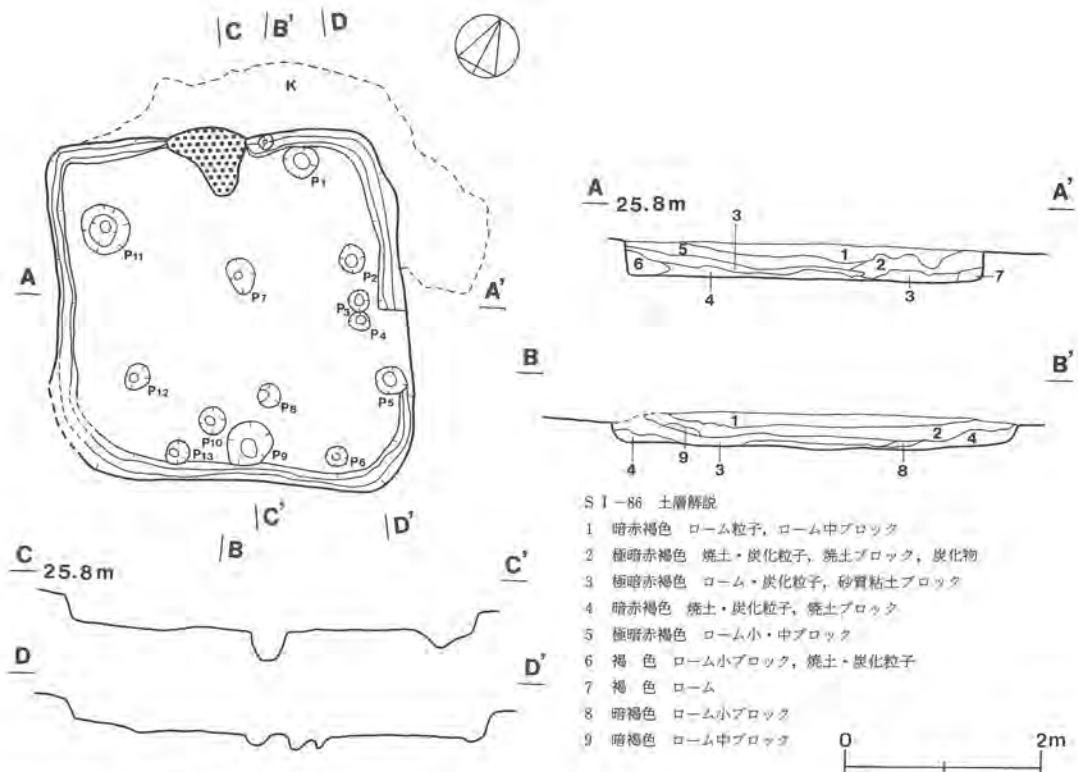
(ピット) 13か所(P₁~P₁₃)。掘り込みは, 径30~50cm, 深さ20~30cmを測り, 支柱穴はP₂・P₅・P₈・P₁₁・P₁₃の5本である。

(竈) 北壁中央部に位置し, 粘土・砂によって構築されたものと捉えられるが, 遺存状態は悪く, 袖部・天井部は既に崩壊し, 火床部がわずかに残存している。

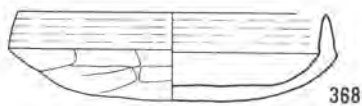
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層から土師器(甕), 陶磁器の破片が流れ込みの状態で出土している。

(所見) 本跡は遺構の形態・遺物から判断して6世紀前半に比定される住居跡である。



第164図 第86号住居跡実測図



第165図 第86号住居跡出土遺物実測図

第86号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 368	坏 土師器	A 12.5	底部は扁平な丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は垂直気味に立ち上がる。体部外面へラ削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 にふい黄褐色 普通	90% 覆土
		B 3.5			
369	坏 土師器	A (13.9)	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。体部外面へラ削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 にふい橙色 普通	50% 覆土
		B 4.6			

第87A号住居跡（第166図）

（位置） 調査区の中央部，D7b₅区を中心に確認。

（重複） 本跡の中央部から，東・南壁部にかけて87B号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.8×3.7mの方形。

（主軸方向） N-25°-W。

（壁） 壁高は16cmで外傾して立ち上がる。

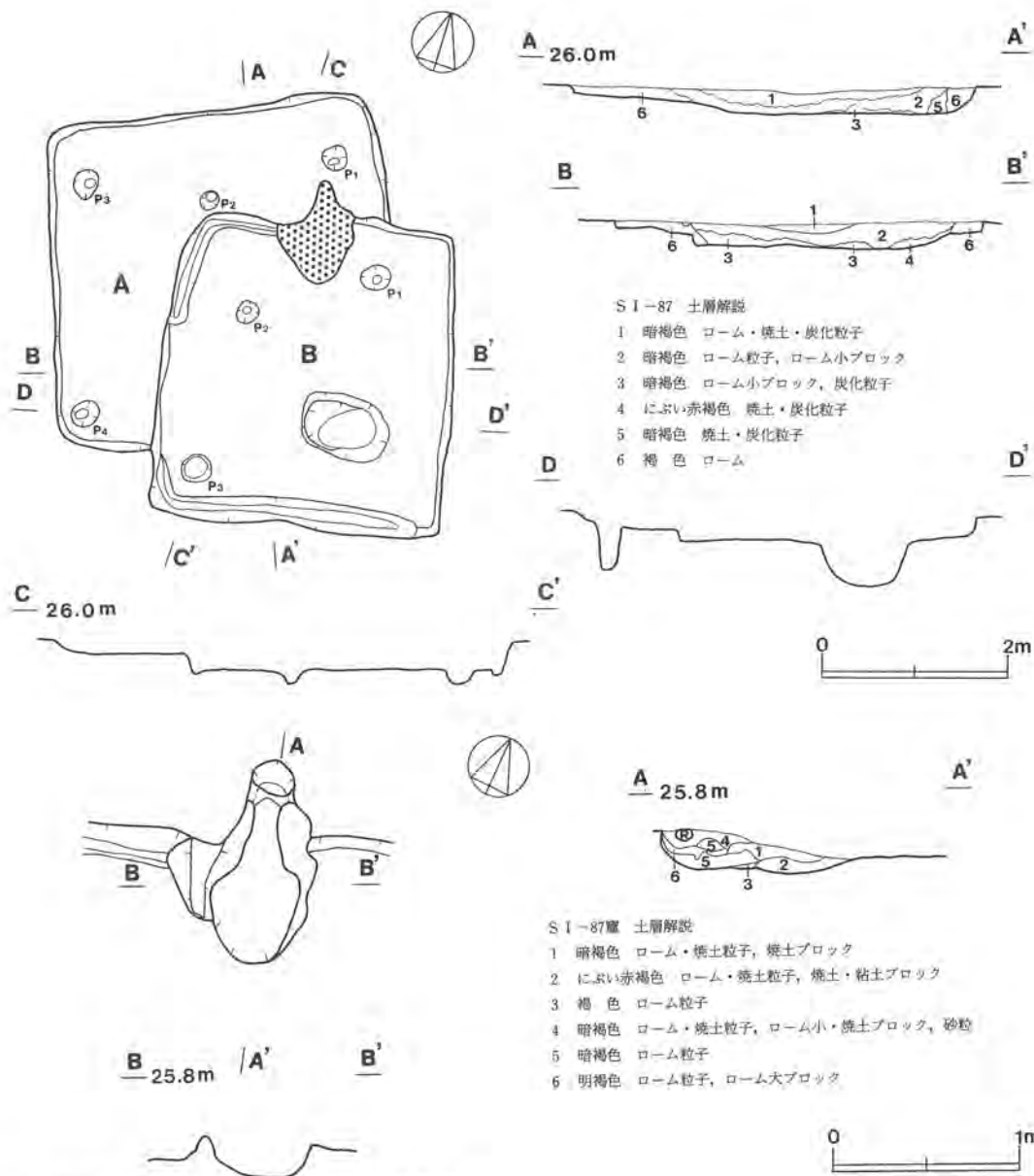
（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは、径30cm、深さ40～50cmを測る。検出されたのは4か所であるが、第87B号との重複部分に1か所存在が考えられることから支柱穴は5か所である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 全て覆土上層・中層から土師器，須恵器片が出土している。

（所見） 本跡は，第87B号との重複によって南東側が破壊されている。また竈は，検出されなかったが，柱穴の位置関係から，南壁側に付設されていた可能性も考えられる。本跡からは，本跡に伴う遺物が検出されないことから時期は不明である。



第166図 第87A・B号住居跡・竈実測図

第87B号住居跡 (第166図)

- (位置) 調査区の中央部, D7b_s区を中心に確認。
- (重複) 本跡は, 87A号を掘り込んで構築している。
- (規模と平面形) 3.5×3.3mの方形。
- (主軸方向) N-19°-W。
- (壁) 壁高は20cmで垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm, 深さ10cmを測り, 掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床) 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 3か所(P₁~P₃)。掘り込みは, 径30cm, 深さ10~30cmを測る。不規則な配列を示すことから主柱穴は不明。

(竈) 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。焚口部から火床部にかけて傾斜は緩く立ち上がり, 火床部は皿状に掘り込まれ, 焼土化している。燃焼部には, 多量の焼土粒・炭化物が充填されている。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層・中層から土師器(坏・甕), 須恵器(坏・甕), 土師質土器の破片が出土している。

(所見) 本跡は, 第87A号を破壊して構築されているが, 本跡に伴う遺物が検出されないことから時期は不明である。

第88号住居跡(第167図)

(位置) 調査区の中央部, D7f₉区を中心に確認。

(重複) 南壁部で第39号住居跡と重複。

(規模と平面形) 4.8m×3.9mの長方形。

(主軸方向) N-17°-W。

(壁) 壁高は36~46cmを測り, 外傾して立ち上がる。

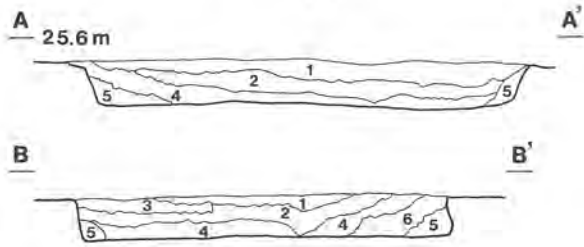
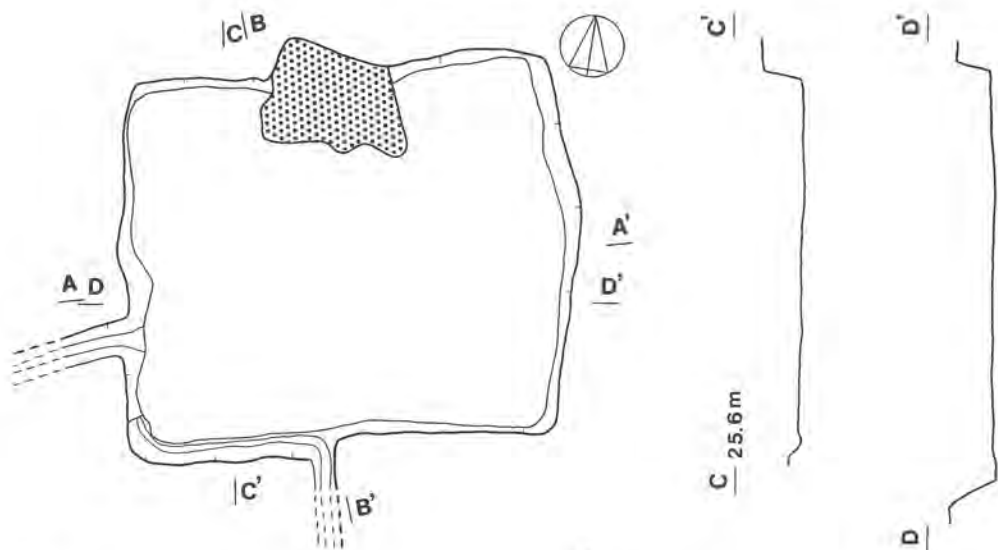
(床) 全体に凸凹しているが, 硬く踏み固められて堅緻である。

(竈) 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し, 燃焼部には, 焼土粒・炭化物が充填されている。煙道部の傾斜は緩く, 煙出口近くで急角度で立ち上がっている。

(覆土) 自然堆積。

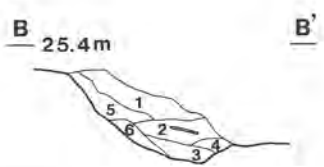
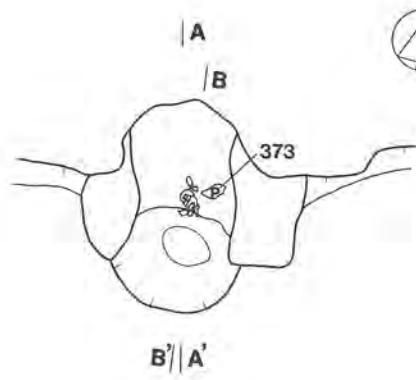
(遺物) 竈周辺及び東壁付近から土師器(坏・甕), 須恵器(坏・甕)の破片が散在して出土している。373は土師器甕で, 竈内から出土している状況から, 竈構築時に補強材として用いられたものである。

(所見) 本跡は, 遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。



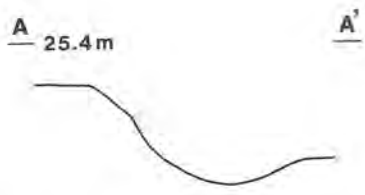
SI-88 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 2 暗褐色 ローム・焼土・炭化・粘土粒子
- 3 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子
- 4 極暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 5 褐色 ローム・焼土・粘土粒子
- 6 褐色 ローム・焼土・炭化粒子、ロームブロック

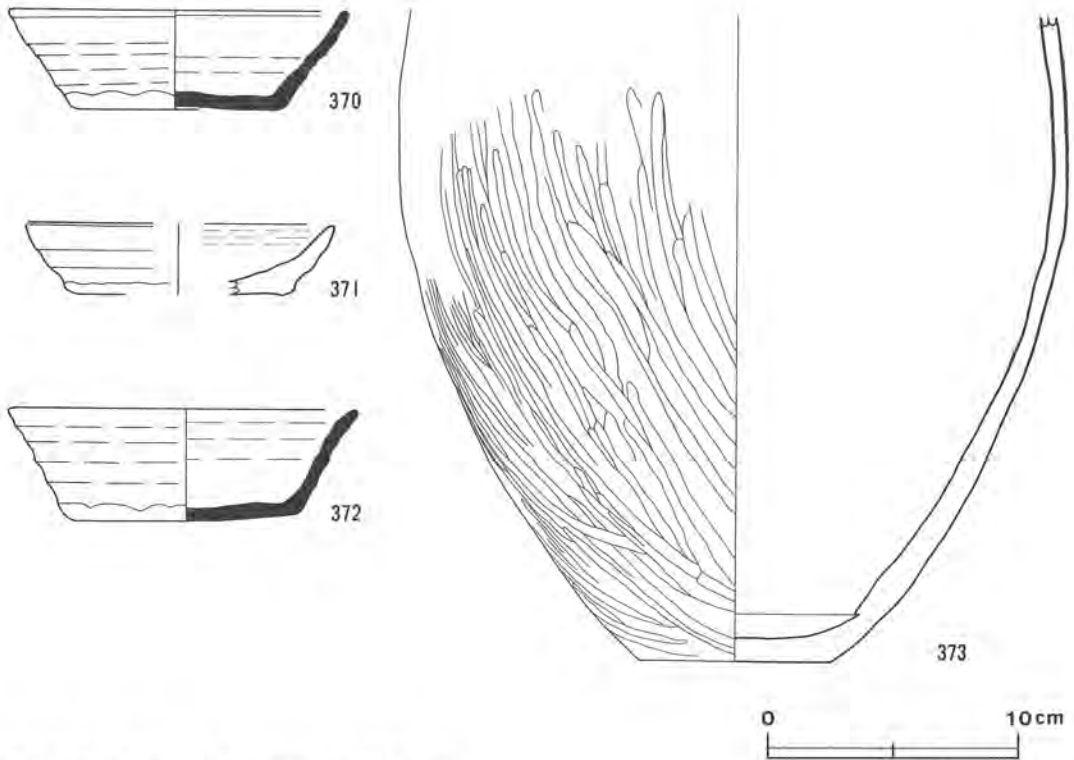


SI-88電 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土粒子
- 2 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子、焼土ブロック
- 3 にぶい赤褐色 灰
- 4 暗赤褐色 炭化粒子、灰
- 5 暗赤褐色 焼土・炭化粒子、焼土ブロック
- 6 暗赤褐色 焼土粒子



第167図 第88号住居跡・竈実測図



第168図 第88号住居跡出土遺物実測図

第88号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第168図 370	坏 須恵器	A 13.5 B 4.0 C 8.4	体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は小さく内彎する。 体部水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	80% 内面煤付着 床面
371	皿 土師質土器	A (12.4) B 2.9 C (8.4)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は若干外反する。 体部水挽き整形。底部糸切り。	砂粒・雲母 浅黄橙色 良好	50% 覆土
372	坏 須恵器	A (13.8) B 4.5 C 9.0	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 良好	70% 甕
373	甕 土師器	B (26.0) C 7.6	口縁部欠損。底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、 中位に最大径を有す。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・砂礫・長石 にぶい褐色 普通	60% 甕

第90号住居跡（第169図）

（位置） 調査区の北側，C6e₁区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.7×2.6mの方形。

（主軸方向） N-10°-W。

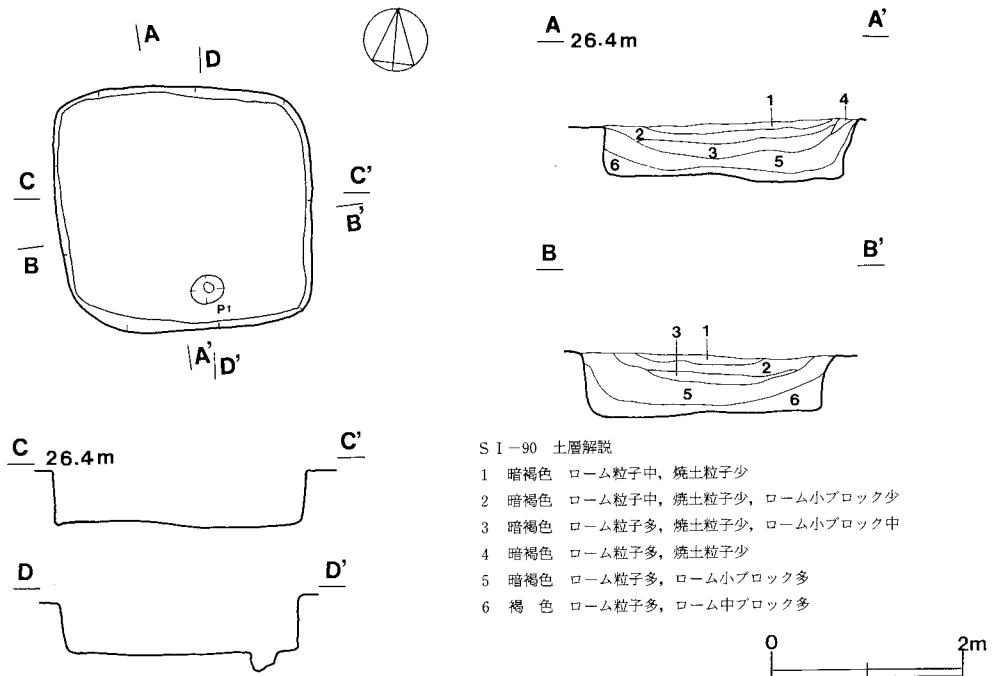
（壁） 壁高は60cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 全体に硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 1か所（P₁）。掘り込みは，南壁下に径30cm，深さ20cmを測る。

（覆土） 自然堆積。

（所見） 本跡は，小竪穴住居跡であるが，遺物は認められなかった。本遺跡の形態から判断して12世紀に比定される住居跡である。



第169図 第90号住居跡実測図

第91号住居跡（第170図）

（位置） 調査区の東側，D7c₃区を中心に確認。

（重複） 第11・12・13・14号土坑と重複。

（規模と平面形） 3.0×2.8mの方形。

（主軸方向） N-20°-W。

（壁） 壁高は8cmを測り，垂直に立ち上がり，掘り込みの浅い住居跡。

(壁溝) 西壁下の一部で検出。幅20cm、深さ10cmの掘り込みの断面形状はL状で西壁下に部分的に廻る。

(床) 全体に凸凹しているが、硬く踏み固められて堅緻である。

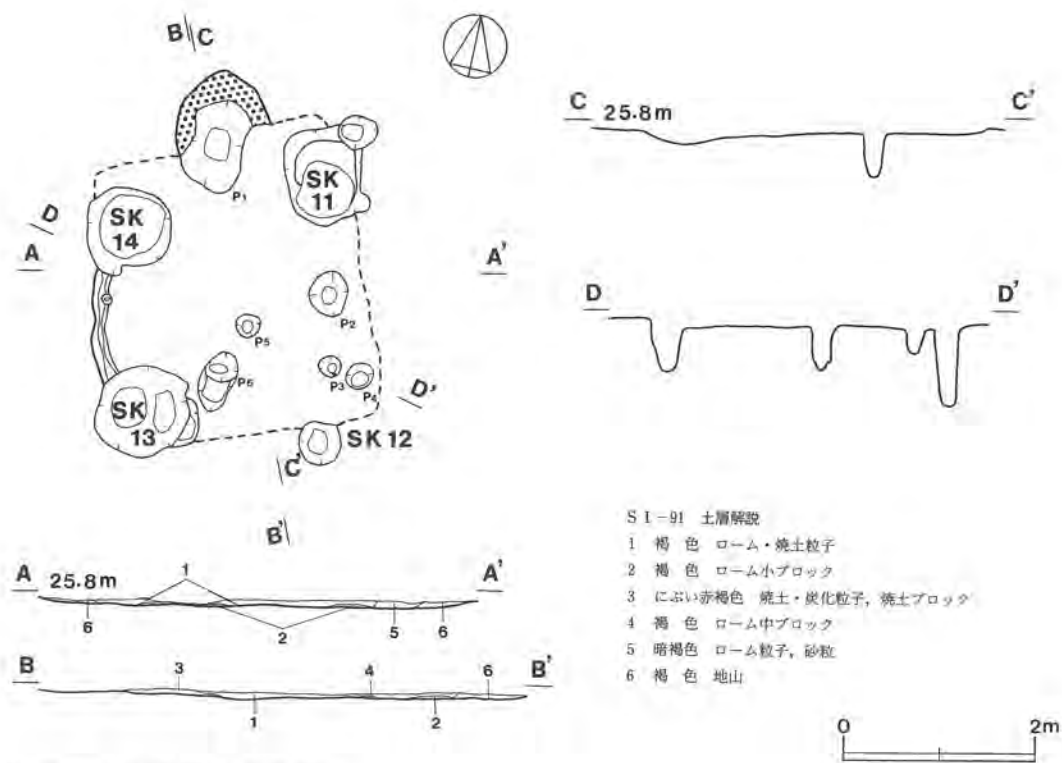
(ピット) 6か所(P₁~P₆)。掘り込みは、径28~40cm、深さ25~80cmを測る。支柱穴かどうかは不明。

(竈) 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込んで、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、馬蹄形を呈す。天井部・袖部の粘土及び焼土が竈前面に散乱し、袖部の確認もできなかった。火床部はさほど焼土化していないが、燃焼部からは、焼土粒・炭化物が若干検出されている。煙道部は焚口部から緩く立ち上がり、煙出口に至る。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土から土師器(坏・甕)の破片が若干出土している。

(所見) 本跡は、掘り込みの浅い住居跡であり、4基の土坑と重複している状況から、明確な形状を捉える事は困難であり、本跡に伴う遺物も検出されない状況から本跡の時期は不明である。



第170図 第91号住居跡実測図

第92号住居跡（第171図）

（位置） 調査区の中央部，D6g₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.7×3.7mの方形。

（主軸方向） N-30°-W。

（壁） 壁高は南壁部で16cm，東・西・北壁部で30cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床） 中央部は凸凹であるが，全体に硬く踏み固められて堅緻である。

（竈） 北壁中央部を30cm程壁外へ掘り込んで，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。燃焼部には，焼土粒・炭化物が多量に充填されている。火床部は皿状に掘り込まれ焼土化している。煙道部は焚口部から緩く立ち上がっている。

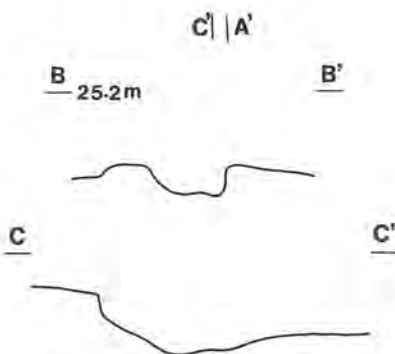
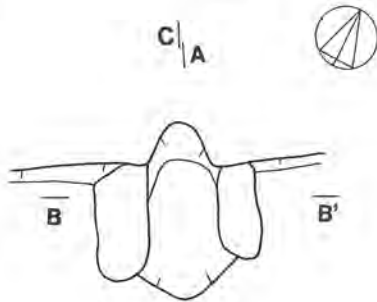
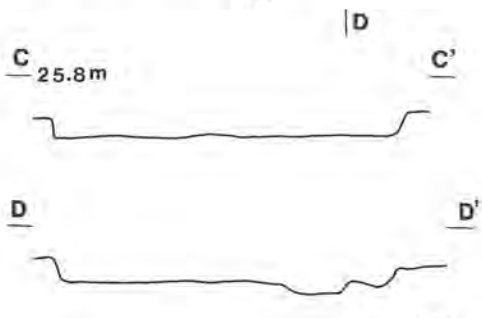
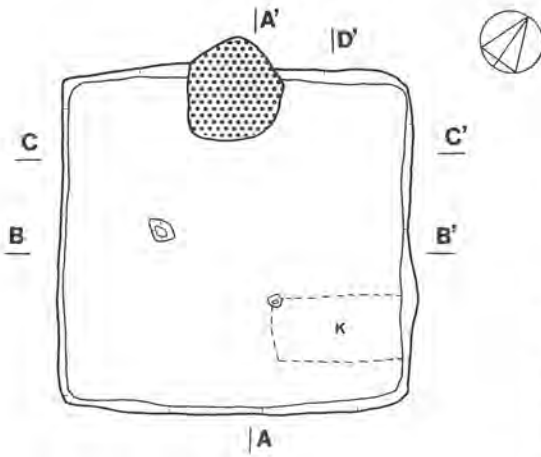
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近と住居跡の中央部から土師器（坏・鉢・甑・甕），須恵器（坏・甕）土師質土器の破片が集中して出土している。374は土師器坏，377は鉢，379は甑である。

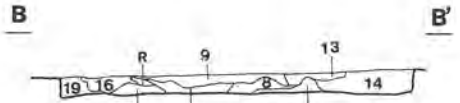
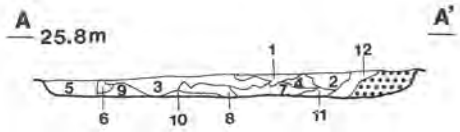
（所見） 本跡は，焼失家屋であり，家屋は廃絶後に周辺から少量の埋土が堆積し，その後に焼失している状況が本跡の土層観察状況から捉えられた。本跡は遺構の形態・遺物から判断して6世紀後半に比定される住居跡である。

第92号住居跡出土遺物解説表

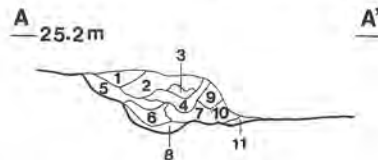
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 374	坏 土師器	A 13.4	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立気味に立ち上がる。体部は外面ヘラ切り後ナデ。口縁部ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 赤褐色 良好	80% 覆土
		B 4.4			
375	坏 土師器	A (11.5)	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもち，口縁部は屈曲して立ち上がる。体部外面ヘラナデ。内面ヘラ磨き。口縁部内外面磨き。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 良好	60% 覆土
		B 4.1			
376	坏 土師器	A 12.8	底部は丸底で体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜を持ち，口縁部は直立気味に立ち上がる。体部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 暗褐色 良好	70% 内面黒色処理 覆土
		B 3.6			
377	鉢 土師器	A 17.0	底部は丸底。体部から口縁部にかけては内彎気味に立ち上がり，体部と口縁部の境に稜をもつ。体部外面ヘラナデ。口縁部内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 良好	90% 覆土
		B 9.7			
378	皿 土師質土器	A (8.4)	体部は内彎気味に立ち上がり，口唇端部は丸味を持つ。体部内・外面水挽き整形。底部糸切り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙褐色 良好	40% 覆土
		B 2.4			
		C (7.0)			
379	甑 土師器	A 26.0	胴部は直線的に外傾して立ち上がり，頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。底面は，全面が開孔している。胴部外面はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	90% 覆土
		B 25.2			
		C 11.3			



第171図 第92号住居跡・竈実測図

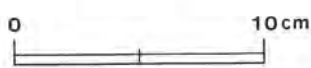
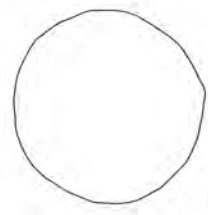
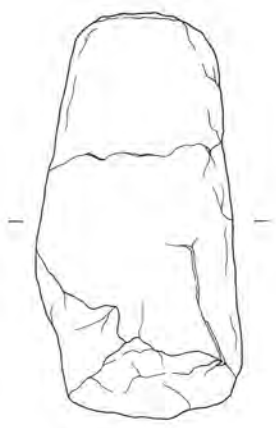
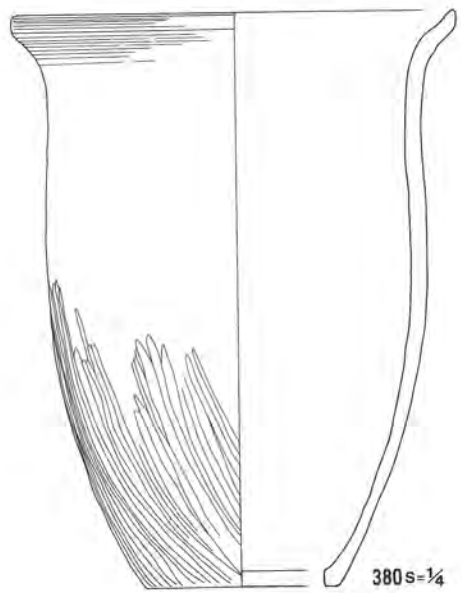
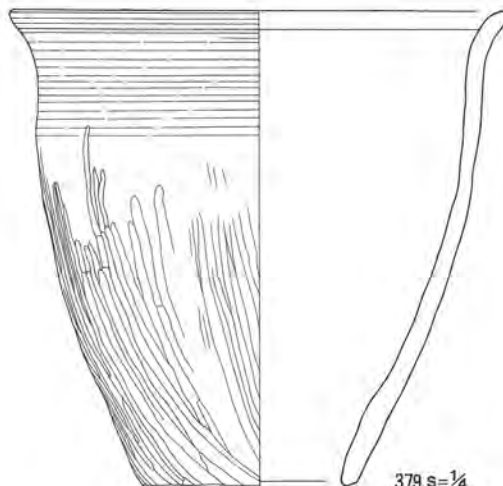
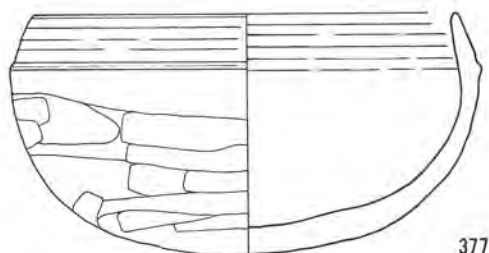


- S I - 92 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子中、焼土粒子少、ローム小ブロック少
 - 2 褐色 ローム粒子多、焼土粒子中、ローム小ブロック少
 - 3 暗褐色 ローム粒子多、ローム小ブロック少、焼土・炭化粒子少
 - 4 褐色 ローム粒子多、ローム小ブロック少、炭化粒子少
 - 5 褐色 ローム粒子中、ローム小ブロック少、炭化粒子少
 - 6 褐色 ローム粒子多、ローム大ブロック多
 - 7 暗赤褐色 ローム粒子中、焼土粒子多、炭化物
 - 8 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子中、炭化物
 - 9 暗褐色 ローム粒子多、ローム小ブロック中、焼土粒子中、炭化物
 - 10 黒褐色 ローム粒子少、炭化粒子多
 - 11 黒褐色 ローム・焼土粒子少、炭化粒子中、炭化物
 - 12 褐色 ローム・焼土・炭化粒子中
 - 13 暗褐色 ローム粒子中、焼土・炭化粒子少
 - 14 暗褐色 ローム粒子中、ローム小ブロック少、炭化粒子少
 - 15 褐色 ローム粒子多、ローム小ブロック少
 - 16 褐色 ローム粒子多、ローム小ブロック少、焼土・炭化粒子少
 - 17 黒褐色 ローム・焼土粒子少、ローム小ブロック少、炭化粒子多、炭化物
 - 18 褐色 ローム粒子多、ローム小ブロック少、炭化粒子少
 - 19 褐色 ローム粒子多、焼土粒子少、炭化粒子中



- S I - 92竈 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム粒子
 - 2 にぶい赤褐色 ローム小・中ブロック、焼土ブロック
 - 3 暗褐色 焼土粒子、焼土ブロック
 - 4 にぶい赤褐色 焼土・炭化粒子
 - 5 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子
 - 6 にぶい赤褐色 焼土・粘土粒子、焼土ブロック、砂粒
 - 7 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子
 - 8 暗赤褐色 ローム中ブロック
 - 9 暗赤色 焼土ブロック
 - 10 暗赤褐色 焼土・炭化粒子、焼土ブロック
 - 11 にぶい赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子





第172図 第92号住居跡出土遺物実測図

第92号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 380	甗 土師器	A (23.0)	体部は直線的に外傾して立ち上がり、口頸部は「く」の字状に外反して立ち上がる。底部は全面が開孔している。胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 黄橙色 普通	60% 覆土
		B 30.5			
		C 10.0			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
381	支脚	全長(16.4) 径(8.3)	上部が細くなる円柱状を呈す。 上・下部は欠損している。	粘土塊から成形	

第93号住居跡 (第173図)

(位置) 調査区の南側、E6h₁区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.7×3.7mの方形。

(主軸方向) N-20°-W。

(壁) 壁高は西壁で30cm、東・南・北壁部で40cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅18cm、深さ8cmを測り、掘り込み断面形状は断面□状を呈して全周。

(床) 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは、径20~26cm、深さ26~80cmを測り、全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を60cm程壁外へ掘り込んで、粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。焚口部から火床部は焼土化している。燃焼部は壁付近に位置し焼土粒・炭化物が検出されている。煙道部は壁外に設けられ、火床部端より急角度に一段上がり、緩やかに立ち上がる。

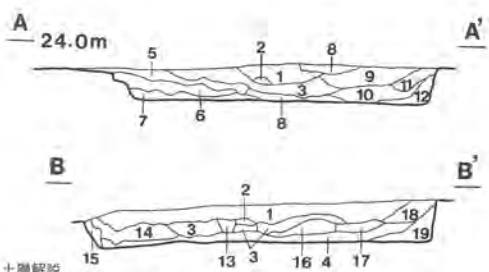
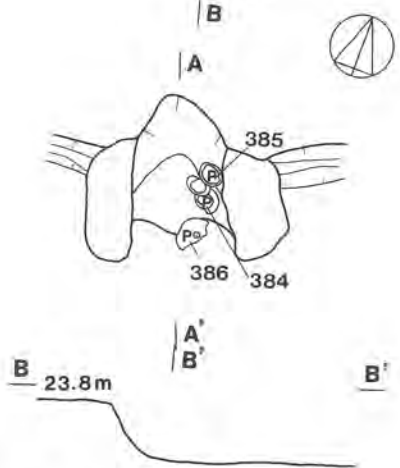
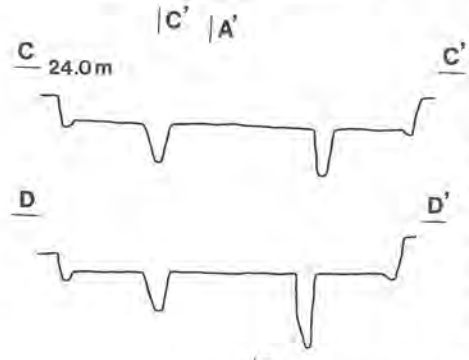
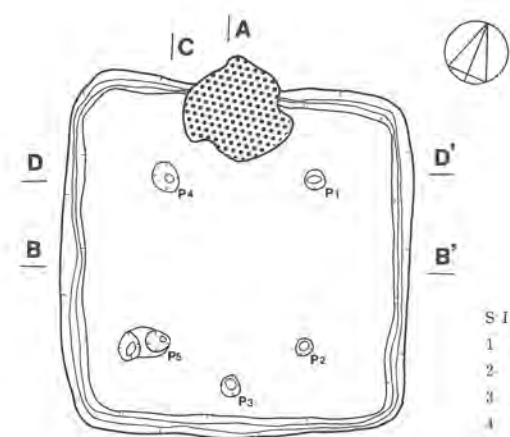
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 出土は少なく土師器(坏・甕)、須恵器(坏・蓋・甕・支脚)で大半は破片である。385・386は須恵器・蓋の破片で、竈の天井部から出土している。竈内から出土した土器は、いずれも竈の補強材として用いられていたものと思われる。

(所見) 本跡の構築は周溝を住居跡壁下に全周させ、その後に北壁中央部に竈を構築している。本跡は遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

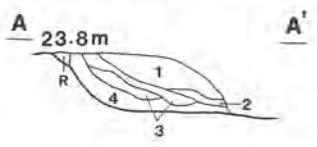
第93号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 382	坏 須恵器	A 13.2	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰色 良好	90% 覆土
		B 3.7			
		C 8.2			



S I - 93 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中, 炭化粒子少
- 2 暗褐色 ローム粒子中, 焼土粒子少, 焼土ブロック中
- 3 暗褐色 ローム粒子多, 焼土粒子少, 焼土ブロック中
- 4 暗褐色 ローム粒子少, 焼土粒子中
- 5 褐色 ローム・炭化・粘土粒子少, 焼土ブロック中
- 6 暗褐色 ローム・焼土粒子少
- 7 黒褐色 ローム粒子少, 焼土ブロック少
- 8 褐色 ローム・焼土粒子中
- 9 暗褐色 ローム粒子多
- 10 暗褐色 ローム粒子中, 粘土粒子少
- 11 褐色 ローム・焼土粒子少
- 12 暗褐色 ローム粒子少
- 13 にぶい赤褐色 炭化粒子中, 酸化砂土
- 14 暗褐色 ローム・焼土粒子中
- 15 褐色 ローム粒子少
- 16 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子多
- 17 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子少
- 18 黒褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少
- 19 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子少

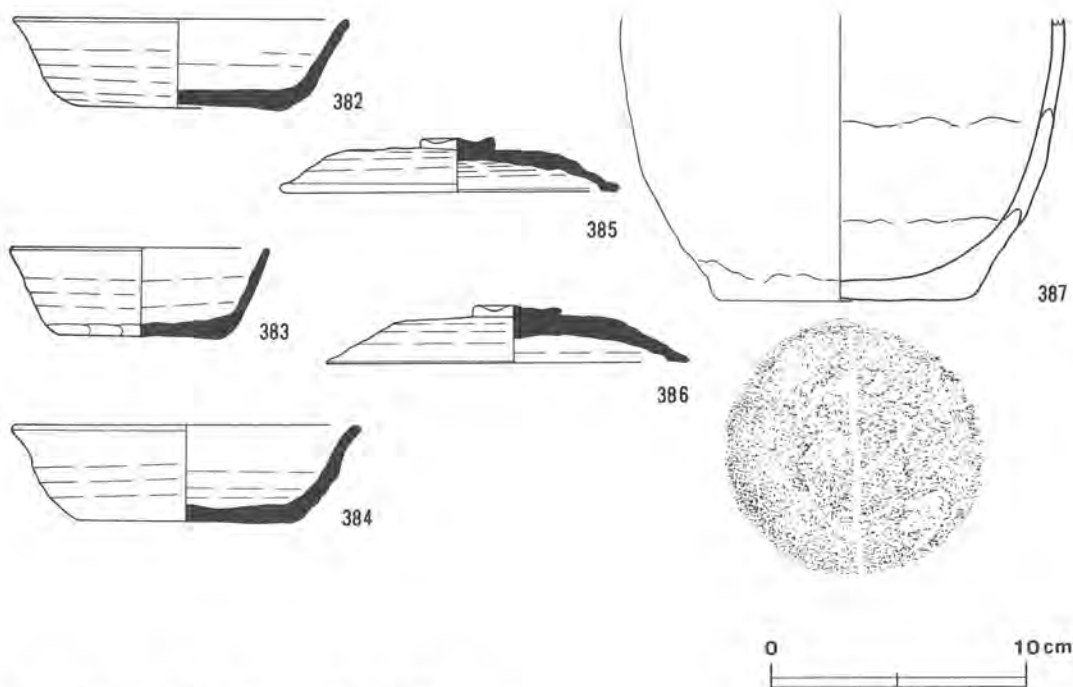


S I - 93電 土層解説

- 1 暗褐色 黒色土, ローム, 焼土ブロック
- 2 にぶい褐色 ローム, 粘土
- 3 赤褐色 黒色土, ローム, 粘土
- 4 暗褐色 黒色土, 焼土ブロック, 灰, 砂粒



第173図 第93号住居跡・電実測図



第174図 第93号住居跡出土遺物実測図

第93号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 383	須恵器	A 10.5	体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	80% 覆土
		B 3.6			
		C 6.5			
384	須恵器	A 13.8	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 におい褐色 良好	70% 覆土
		B 3.9			
		C 8.8			
385	蓋 須恵器	A 13.5	天井部の中央はわずかに中高で、周囲がくぼむつまみが付く。天井部は平坦で、内彎しつつ下降し、口縁部は平坦で端部は丸味をもつ。 天井頂部から中位にかけて、回転ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 良好	100% 竈
		B 2.1			
		F 3.0			
		G 0.5			
386	蓋 須恵器	A (14.4)	天井部中央に周囲がくぼむつまみが付く。 天井部は平坦で内彎しつつ下降する。口縁部は平坦で端部は丸味をもつ。 天井頂部から中位にかけて、回転ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 良好	60% 竈
		B 2.3			
		F 3.0			
		G 0.4			
387	甕 土師器	B (11.4)	底部から胴部中位にかけて内彎気味に立ち上がる。 体部外面摩擦・剝離激しく整形不明。	砂粒・砂礫・長石・雲母 におい橙色 普通	40% 底部に木葉痕 覆土
		C 10.4			

第94号住居跡（第175図）

（位置） 調査区の中央部，E6a₃区を中心に確認。

（重複） 本跡の東側は調査区外であり，西側は第5号溝と重複。

（規模と平面形） 不明。

（壁） 南壁の一部が残存。壁高24cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 南壁下で検出。幅16cm，深さ8cm，掘り込み断面形状は断面L状を呈す。

（床） 残存部は，全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

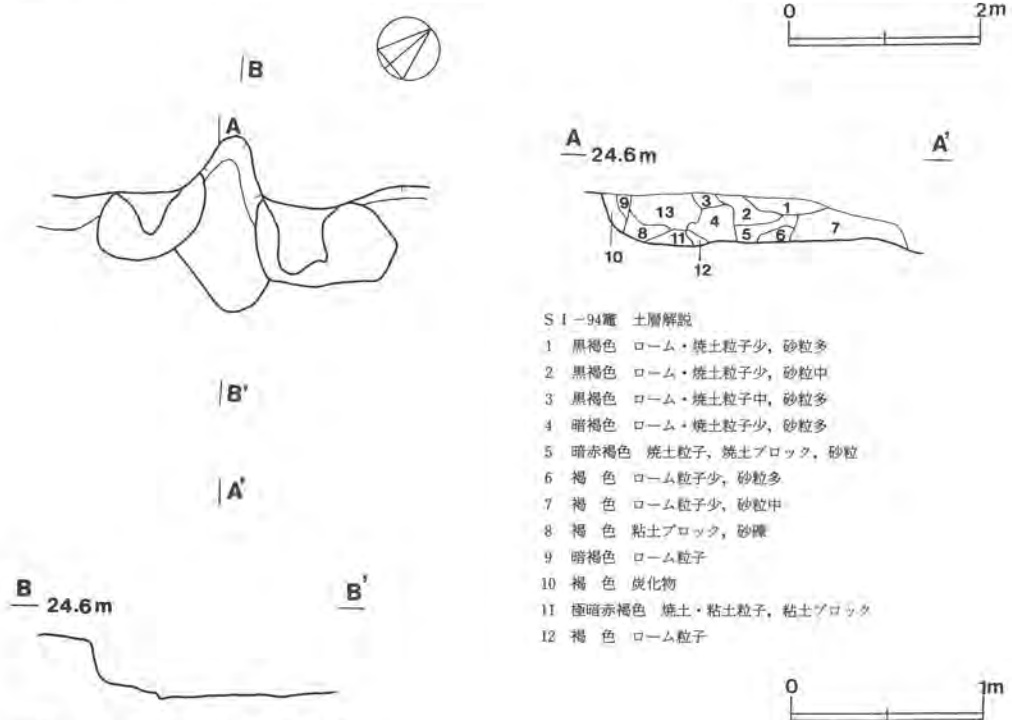
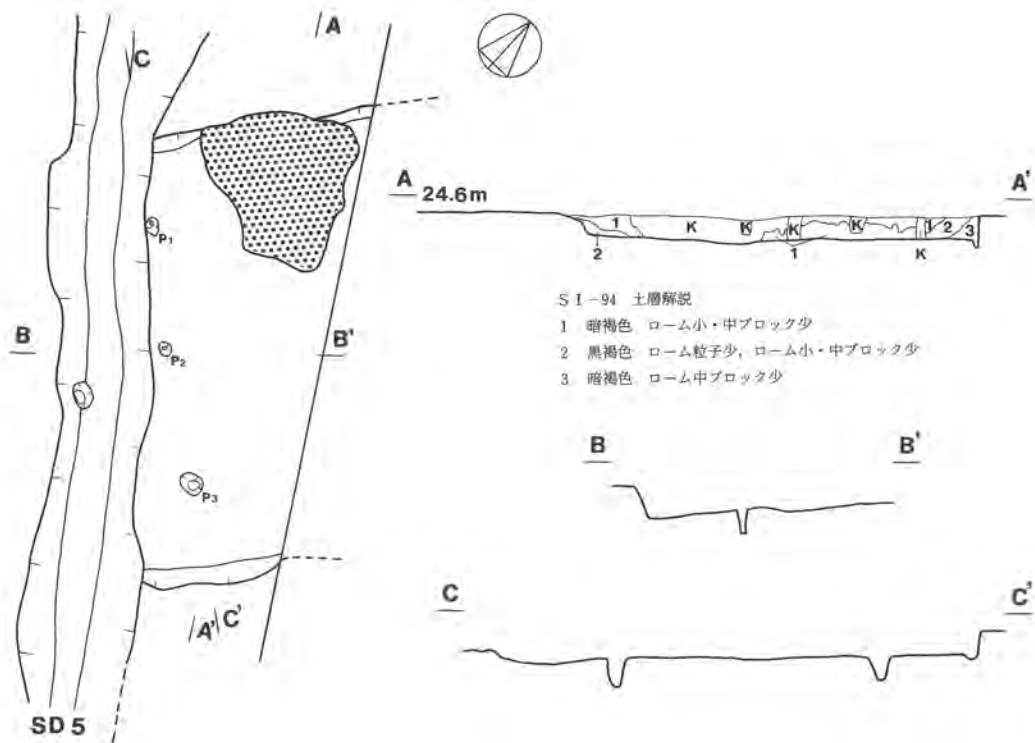
（ピット） 3か所（P₁～P₃）。掘り込みは，径16～26cm，深さ26～30cmを測る。主柱穴かは不明。

（竈） 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込んで，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部・袖部の一部の粘土が竈前面に多量に散乱していた。焚口部から煙道部へかけての内壁は焼けて焼土化している。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近から集中して土師器（坏・甕・蓋）の破片が出土し，これらの破片は竈の構築時に補強材として用いられた土器と考えられる。

（所見） 本跡は，溝によって壊され，また調査区域外にのびていることから，全容を把握することは，不可能の状況であり，出土遺物等も破片のため，時期を決定することは不可能であり，本跡の時期は不明である。



第175図 第94号住居跡・竈実測図

第95号住居跡（第176図）

（位置） 調査区の中央部，E6i₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.9×4.9mの方形。

（主軸方向） N-7°-E。

（壁） 東壁の64cm，南・西・北壁は38～40cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cm，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径50cm，深さ24～68cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を45cm程壁外へ掘り込んで，粘土・砂によって構築。天井部・袖部は既に崩壊し残存していないが，火床部から煙道部の一部は残存している。焚口部として捉えられる箇所にかかなりの焼土が認められる。煙道部は煙出口近くで急角度となって立ち上っている。

（覆土） 自然堆積。

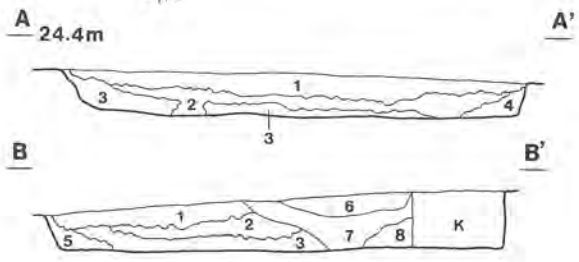
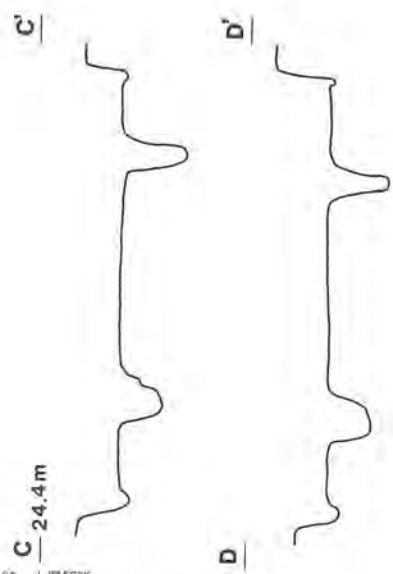
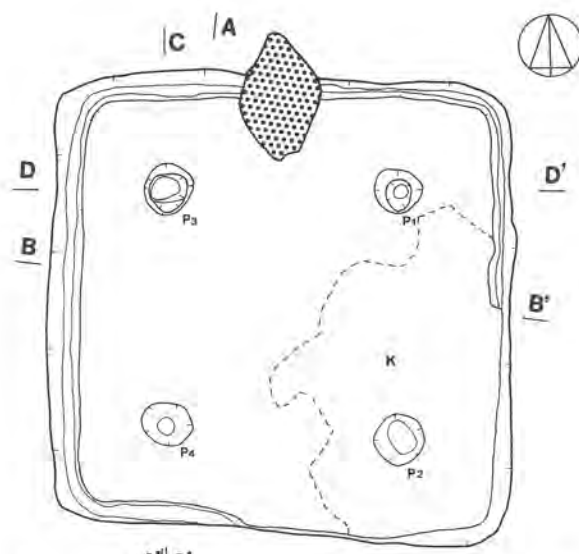
（遺物） 壁際から散在して土師器（坏・高坏・甕），須恵器（坏）の破片が出土している。

388は土師器坏である。

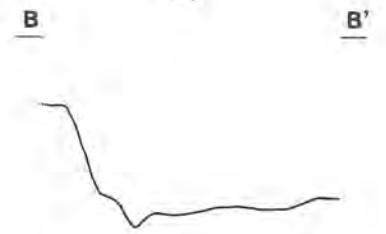
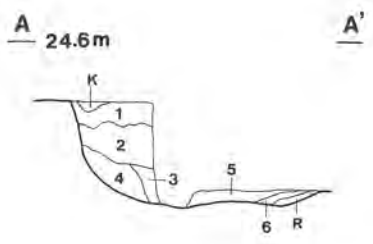
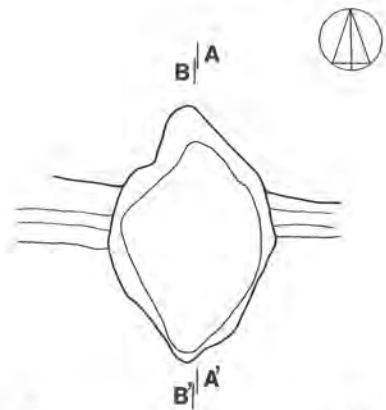
（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して6世紀前半に比定される住居跡である。

第95号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 388	土師器 坏	A 13.0	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反気味に立ち上がる。体部外面ヘラ切り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・雲母にぶい黄褐色 良好	90% 覆土
		B 4.8			
389	土師器 坏	A (14.6)	底部は丸底気味。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。体部外面ヘラ切り。内面ヘラ磨き。口縁部横ナデ。	砂粒・雲母にぶい橙色 良好	40% 内面黒色処理 覆土
		B 3.7			
390	土師器 坏	A 12.9	底部は丸底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反気味に直立する。体部外面ヘラ削り。口縁部・体部内面ナデ。	砂粒・砂礫にぶい橙色 良好	80% 覆土
		B (4.5)			

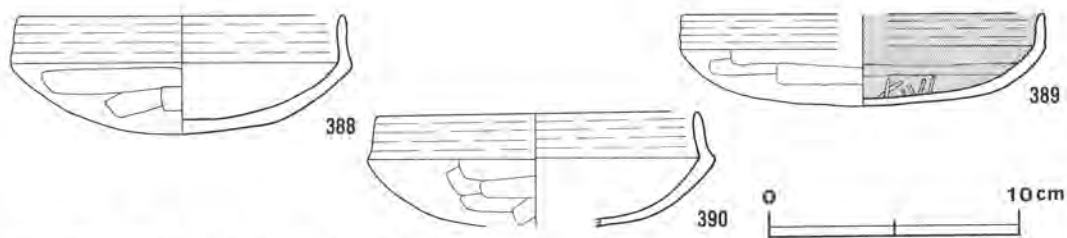


- S I-95 土層解説
- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子中
 - 2 褐色 ローム粒子多, 白色粘土粒子少
 - 3 褐色 ローム粒子多, 焼土・炭化粒子中
 - 4 褐色 ローム・焼土・炭化粒子中
 - 5 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子少
 - 6 暗褐色 ローム粒子中
 - 7 暗褐色 ローム粒子少, 焼土・炭化・白色粘土粒子中
 - 8 暗褐色 ローム粒子少, 焼土粒子中
- 0 2m



- S I-95 土層解説
- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土
 - 2 褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土, 炭化物
 - 3 褐色 焼土粒子, 粘土
 - 4 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, 炭化物
 - 5 褐色 ローム粒子, 焼土ブロック, 砂粒
 - 6 赤褐色 焼土
- 0 1m

第176図 第95号住居跡・竈実測図



第177図 第95号住居跡出土遺物実測図

第96 A号住居跡（第178図）

- （位置） 調査区の中央部，E6a₁区を中心に確認。
- （重複） 第96 B号住居跡と重複。
- （壁） 残存している南壁部で壁高36cmを測り，垂直に立ち上がる。
- （床） 残存部は凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。
- （覆土） 自然堆積。
- （遺物） 南壁際に集中して土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の小片が出土している。
- （所見） 本跡は，南壁と壁付近の床面を一部残しているが，大部分は，96 B号によって破壊されており，本跡の形状は不明である。出土した遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第96 B号住居跡（第178図）

- （位置） 調査区の中央部，E6a₁区を中心に確認。
- （重複） 第96 A号住居跡と重複。
- （規模と平面形） 4.5 × 4.3mの方形。
- （主軸方向） N-22°-W。
- （壁） 壁高52～56cmを測り，垂直に立ち上がる。
- （壁溝） 幅12cm，掘り込みは6cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。
- （床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。
- （ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは，径30cm，深さ38cmを測る。支柱穴はP₂・P₃・P₄・P₆・P₇の5本である。
- （竈） 北壁中央部より若干西側に位置し，壁を60cm程壁外へ掘り込んで，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，馬蹄形を呈している。天井部・袖部の粘土及び焼土が竈前面に散乱し，袖部の一部だけが残存している。焚口部から火床部へかけては焼土化し，燃燒部からは焼土粒・炭化物が検出されている。煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がり，煙出口近くで急角度となる。

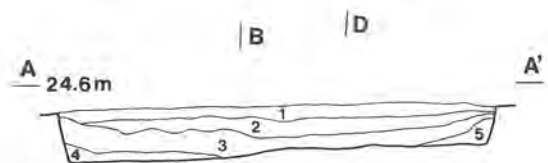
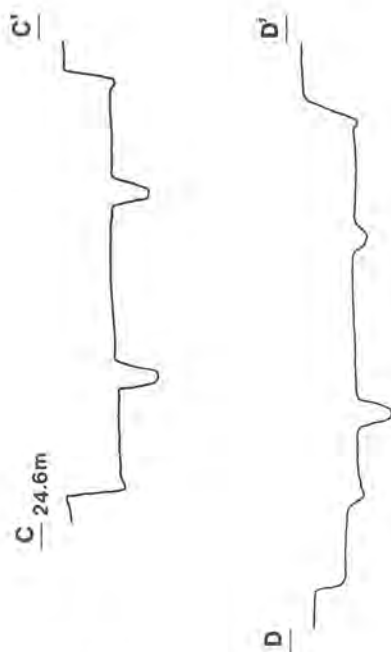
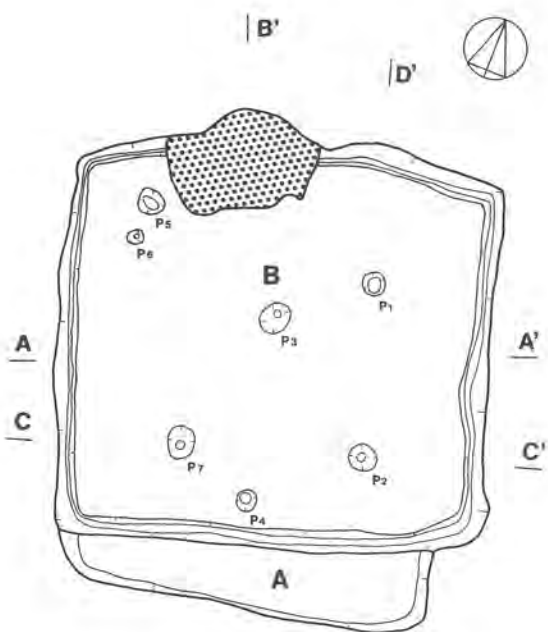
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 住居跡の全体から土師器(坏・高台付坏・甕・甗)、須恵器(坏・小型壺・皿・甕・甗)が出土しているが、大部分は覆土の上・中層からであり、投棄または流れ込みと考えられる。また、土師器・須恵器の甕片は竈の天井部と思われる付近からかなり出土しており、竈の補強材として用いられたものである。391は土師器坏であり、竈の袖部の芯として使用された状態で出土している。

(所見) 本跡は、第96B号住居跡を破壊して構築している。本跡は遺構の形態・遺物から判断して9世紀後半に比定される住居跡である。

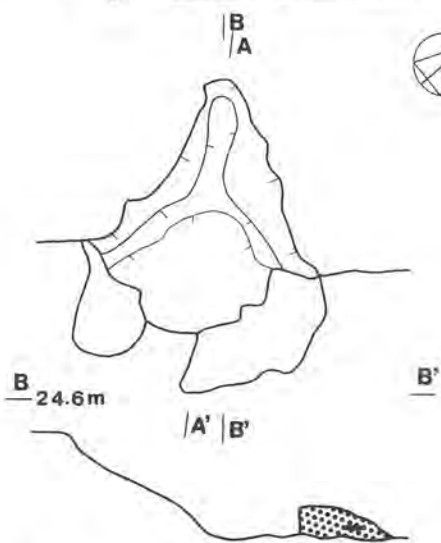
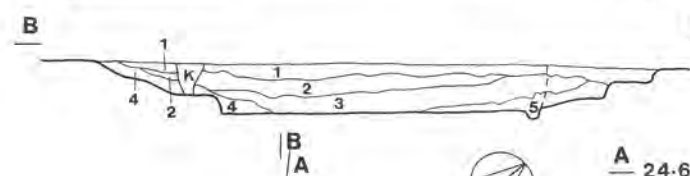
第96号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 391	土師器 坏	A 12.9	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部付近で外反する。端部は丸味をもつ。体部内・外面水挽き整形。底部内面ヘラ磨き。底部ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 橙色 良好	90% 内面黒色処理 竈
		B 4.5			
		C 6.0			
392	土師器 坏	A 12.0	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。端部は丸味をもつ。体部内・外面水挽き整形。底部回転糸切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・雲母 浅黄橙色 良好	90% 覆土
		B 3.7			
		C 7.1			
393	土師器 坏	A 14.1	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 良好	70% 覆土
		B 5.1			
		C 6.6			
394	土師器 坏	A (13.5)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 橙色 良好	50% 内面黒色処理 覆土
		B 4.4			
		C 6.7			
395	土師器 坏	A (14.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で小さく外反する。体部内・外面水挽き整形後、内面ヘラ磨き。口縁部ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒 におい赤褐色 良好	80% 覆土
		B 5.0			
		C 6.4			
396	土師器 坏	A 14.1	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・雲母 黄橙色 良好	100% 内面黒色処理 覆土
		B 5.1			
		C 5.6			
397	須恵器 坏	A (13.0)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	50% 覆土
		B 4.5			
		C 7.2			
398	須恵器 坏	A (13.4)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。端部は丸味をもつ。体部内・外面水挽き整形。底部周辺ヘラナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・長石 褐灰色 良好	40% 覆土
		B 4.1			
		C 7.6			



S 1-96 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・木炭粒子
- 2 褐色 ローム・焼土粒子
- 3 褐色 ローム・木炭粒子, ロームブロック
- 4 褐色 ロームブロック, 焼土, 木炭
- 5 暗褐色 ローム・粘土ブロック, 焼土・木炭粒子

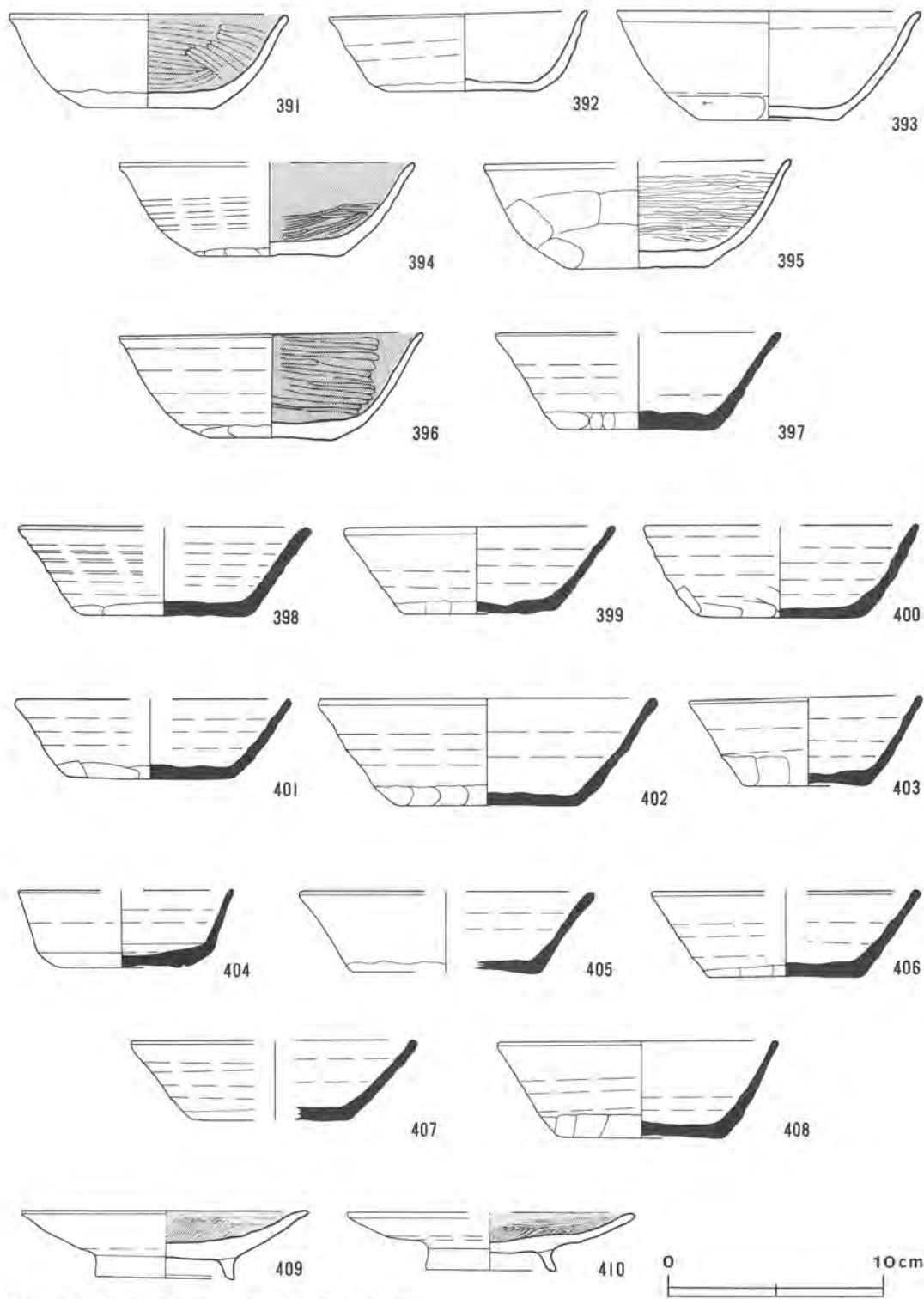


S 1-96 B 土層解説

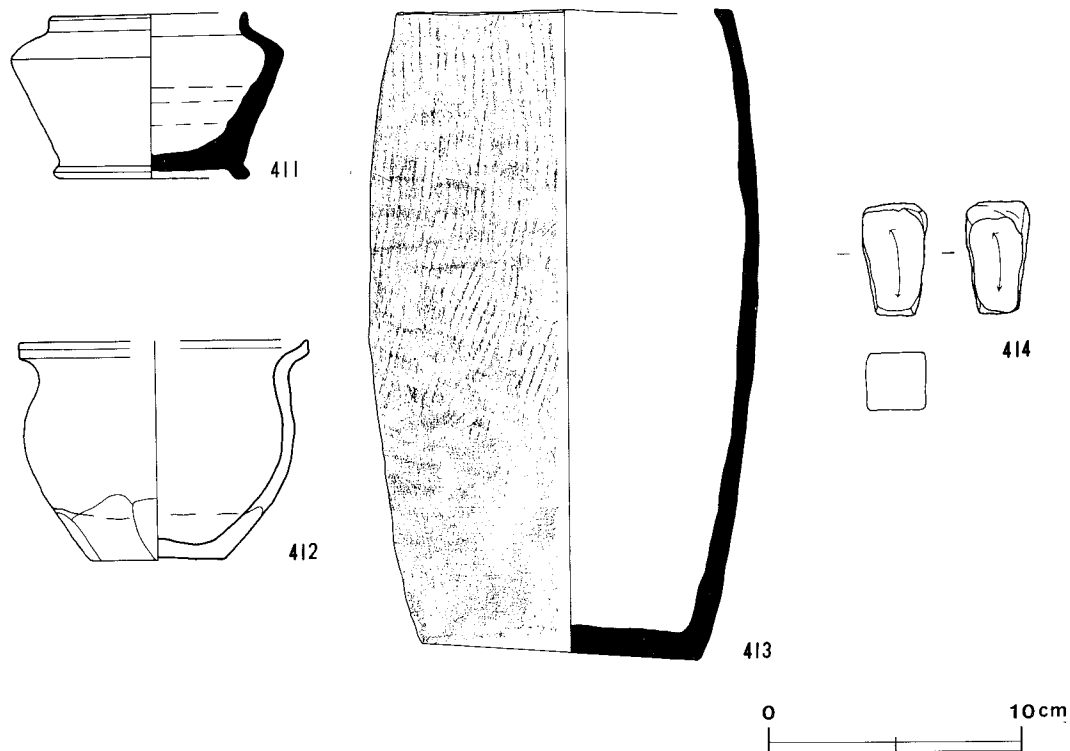
- 1 におい黄褐色 砂粒
- 2 暗褐色 焼土粒子
- 3 におい赤褐色 焼土・粘土粒子, 焼土・粘土ブロック
- 4 褐色 焼土粒子, 粘土ブロック, 砂粒, 砂礫
- 5 暗赤褐色 焼土, 炭化物
- 6 黒褐色 炭化粒子, 焼土ブロック
- 7 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, 砂粒
- 8 暗赤褐色 焼土粒子, 炭化物, 粘土
- 9 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック, 粘土
- 10 暗褐色 焼土・炭化粒子
- 11 暗褐色 焼土・炭化粒子, 粘土, 砂粒
- 12 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 13 暗褐色 ローム粒子, 粘土



第178図 第96A・B号住居跡・竈実測図



第179图 第96B号住居跡出土遺物実測図(1)



第180図 第96B号住居跡出土遺物実測図(2)

第96号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 399	坏 須恵器	A 12.6	体部から口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部周辺ヘラナデ。底部ヘラ切り。	砂粒・雲母 灰黄色 良好	70% 覆土
		B 4.1			
		C 7.1			
400	坏 須恵器	A (12.8)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形	砂粒・長石・雲母 灰色 良好	50% 覆土
		B 4.3			
		C (7.0)			
401	坏 須恵器	A (12.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部周辺ヘラ削り。底部ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 良好	50% 覆土
		B 3.7			
		C 7.6			
402	坏 須恵器	A (15.4)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部周辺ヘラナデ。底部ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 良好	50% 覆土
		B 5.0			
		C 8.6			
403	坏 須恵器	A 11.0	体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部周辺ヘラ削り。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 黄灰色 良好	100% 覆土
		B 4.2			
		C 5.8			

第96号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 404	坏 須恵器	A (10.1)	体部から口縁部は外反気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り後、底部に「V」状の溝。	砂粒・石英・雲母 灰色 良好	70% 覆土
		B 3.6			
		C 6.0			
405	坏 須恵器	A (13.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫 灰色 良好	40% 覆土
		B 3.8			
		C (8.8)			
406	坏 須恵器	A (12.4)	体部は直線的に開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 良好	50% 覆土
		B 4.0			
		C (7.2)			
407	坏 須恵器	A 13.2	体部は直線的に開き気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫 褐灰色 良好	30% 覆土
		B 3.8			
		C (7.2)			
408	坏 須恵器	A 13.0	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部で小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	60% 覆土
		B 4.6			
		C 7.6			
409	高台付皿 土師器	A 13.3	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。高台は「ハ」の字状に開く。 体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け。	砂粒・雲母 橙色 良好	90% 内面黒色処理 覆土
		B 3.3			
		D 6.4			
		E 1.0			
410	高台付皿 土師器	A (13.4)	体部から口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。高台は「ハ」の字状に開く。 体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け。	砂粒・雲母 明赤褐色 良好	70% 内面黒色処理 覆土
		B 2.7			
		D 6.1			
		E 1.0			
第180図 411	小型壺 須恵器	A 7.7	底部から内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開く。 体部・口縁部内・外面水挽き整形。	砂粒・雲母 灰白色 普通	90% 覆土
		B 6.7			
		C 7.6			
412	小型広口 壺 土師器	A (11.5)	底部は平底で、胴部は球状を呈し、頸部は「く」の字状に括れる。口縁部は直線的で、口唇部はつまみ上げる。 体部外面ヘラ削り後ナデ。口縁部ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	60% 覆土
		B 8.8			
		C 5.4			
413	小型広口 甕 須恵器	A 13.4	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、円筒状を呈す。口縁部は若干内彎する。 胴部外面は縦位の平行叩き目。下位はヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	95% 甕
		B 26.2			
		C 11.2			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
414	砥石	全長 4.5	方形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。 全面に使い減りが顕著。	凝灰岩	
		幅 2.6			
		厚さ 3.2			
		重さ 42.0g			

第97号住居跡（第181図）

（位置） 調査区の中央部，E6i₃区を中心に確認。

（重複） 第98号住居跡・第15号土坑と重複。

（規模と平面形） 3.2×3.1mの方形

（主軸方向） N-23°-W。

（壁） 壁高48～52cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 1か所（P₁）。

（竈） 北壁中央部を45cm程壁外へ掘り込んで粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く馬蹄形を呈している。天井部は崩落し，袖部だけが残存する。火床部は焼土化し，煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がる。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近と住居跡の中央部から土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片と砥石が出土し，土師器甕の破片は竈の補強材として用いられた状態で出土している。

（所見） 本跡は，第98号住居跡の埋没後に構築したものであり，本跡の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第98号住居跡（第181図）

（位置） 調査区の中央部，E6h₃区を中心に確認。

（重複） 第97号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.4×3.4mの方形。

（主軸方向） N-22°-W。

（壁） 壁高54～60cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅12cm，深さ6～8cmを測り，掘り込み断面形状はU字状を呈し，東・南・北壁下を廻る。

（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径30cm，深さ12cmを測るが，支柱穴としては捉えられない。

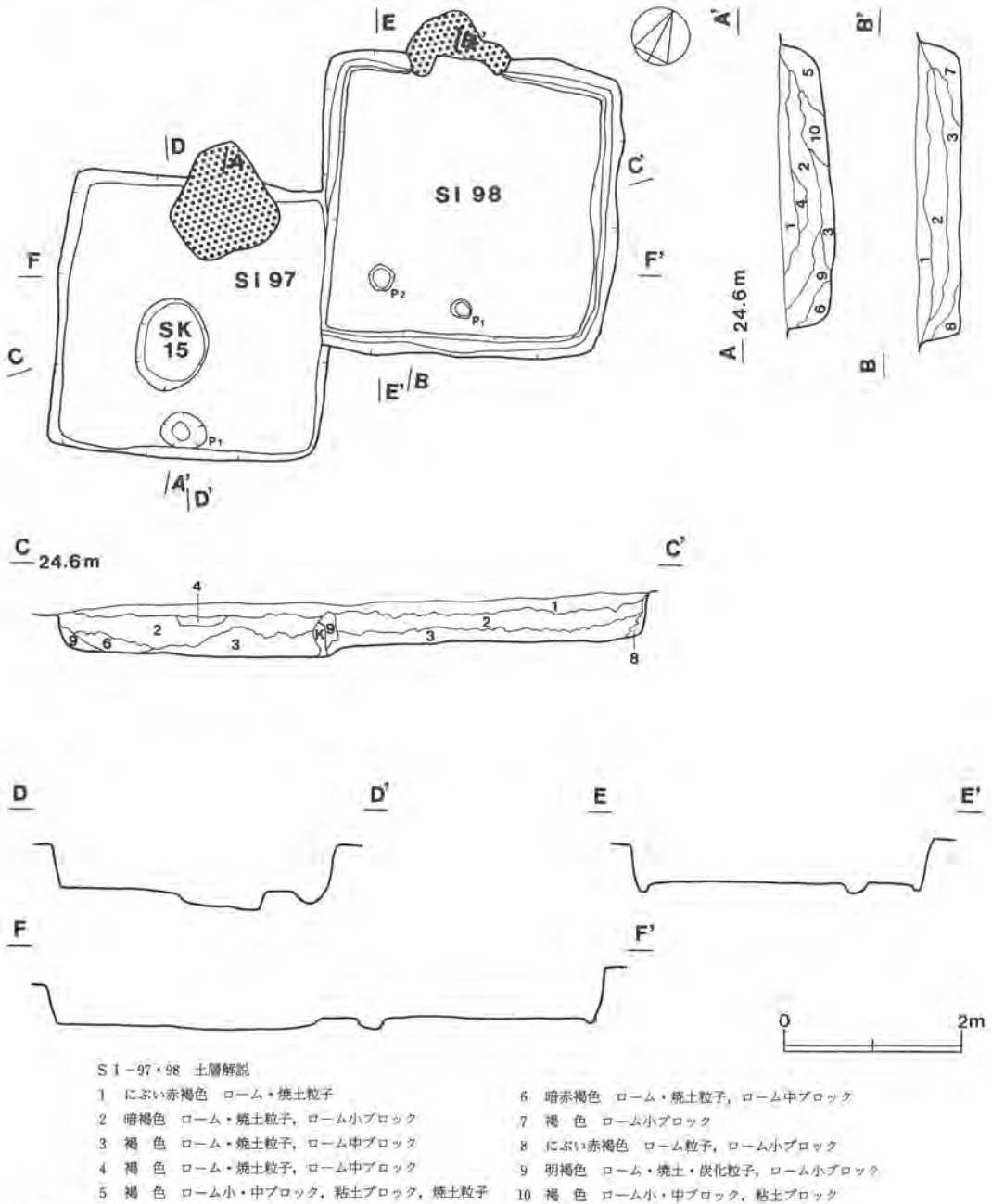
（竈） 北壁中央部を55cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く馬蹄形を呈する。天井部・袖部は崩壊し，焚口部から煙道部へかけては焼土化している。

（覆土） 自然堆積。

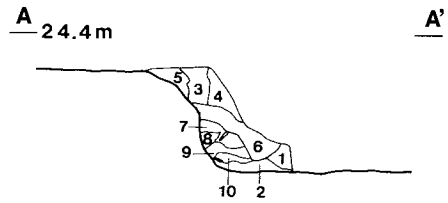
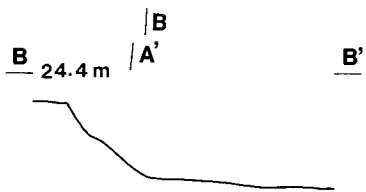
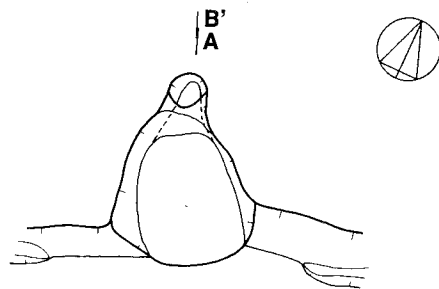
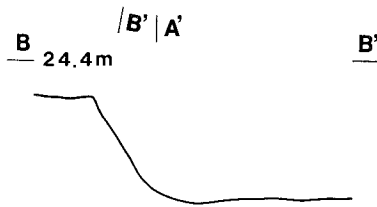
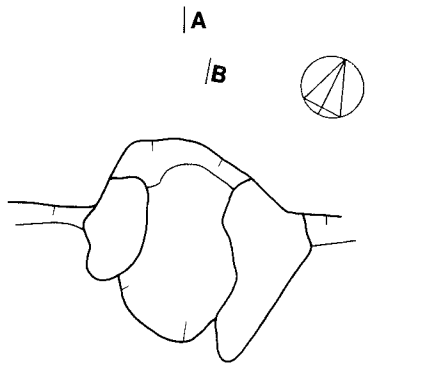
（遺物） 竈内から集中して土師器（坏・甕），須恵器（坏・碗・甕・長頸壺）の破片が出土して

いる。417は、土師器坏，418は須恵器高台付瓿でいずれも竈の補強材として用いられた状態で出土している。

(所見) 本跡は、第97号住居跡の構築時に西壁の一部を破壊されているが、遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

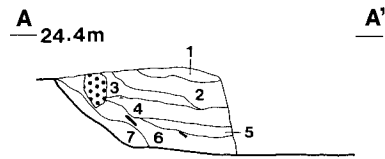


第181図 第97・98号住居跡実測図



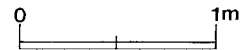
SI-97電 土層解説

- 1 褐色 焼土粒子, 粘土
- 2 暗赤褐色 炭化粒子
- 3 褐色 ローム・炭化粒子, 粘土
- 4 褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物, 粘土
- 5 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土
- 6 褐色 ローム粒子, 粘土
- 7 にぶい橙色 粘土
- 8 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 9 褐色 粘土ブロック, 砂粒
- 10 にぶい赤褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子



SI-98電 土層解説

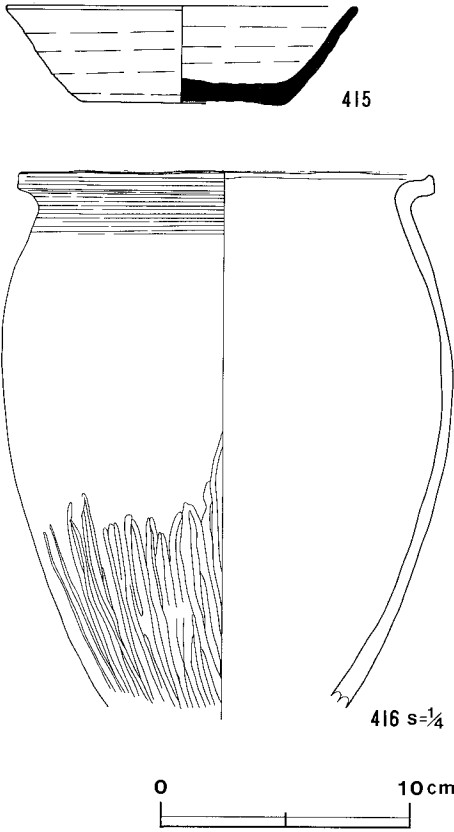
- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 2 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土
- 3 褐色 ローム粒子, 粘土
- 4 褐色 ローム・焼土粒子, 焼土・粘土ブロック
- 5 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 6 暗赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
- 7 褐色 ローム・焼土粒子



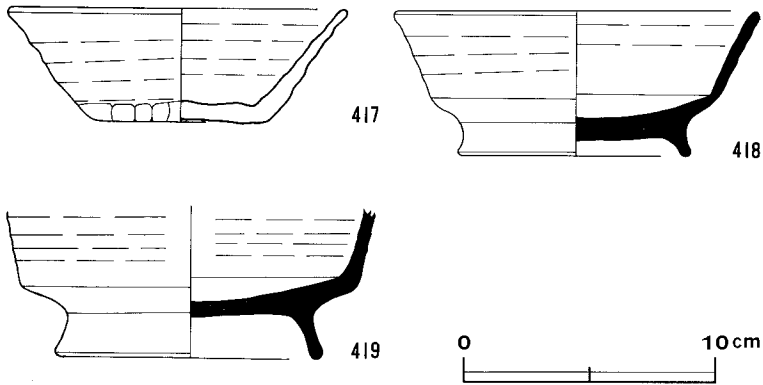
第182図 第97・98号住居跡竈実測図

第97号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第183図 4 1 5	坏 須恵器	A 13.9	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反する。体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・石英・雲母 灰白色 良	80% 床面
		B 4.0			
		C 8.0			
4 1 6	甕 土師器	A 21.7 B (28.3)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部中位に最大径を有する。頸部は「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口縁端部は外上方につまみ出されている。胴部外面はヘラ削り。口縁部内・外面は横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	80% 床面



第183图 第97号住居跡出土遺物実測図



第184图 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 417	坏 土師器	A 13.4	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 良好	80% 竈
		B 4.6			
		C 6.8			
418	高台付坑 須恵器	A 14.6	底部と体部の境界にやや明瞭な稜を持ち、体部は外反気 味に立ち上がる。高台は「ハ」の字に開く。 体部内・外面水挽き整形。高台貼り付け。底部ヘラ切り 後ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄色 良好	90% 竈
		B 5.9			
		D 9.3			
		E 1.5			
419	高台付坑 須恵器	B (6.1)	底部と体部の境界にやや明瞭な稜を持ち、体部は外反気 味に立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開く。 体部内・外面水挽き整形。高台貼り付け。	砂粒・雲母 灰色 良好	40% 覆土
		D (10.8)			
		E 1.8			

第99号住居跡（第185図）

（位置） 調査区の南側，E5i₄区を中心に確認。

（規模と平面形） 5.7×4.7mの長方形。

（主軸方向） N-20°-W。

（壁） 壁高は東壁16cm，南・西・北壁で20cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 中央部は凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

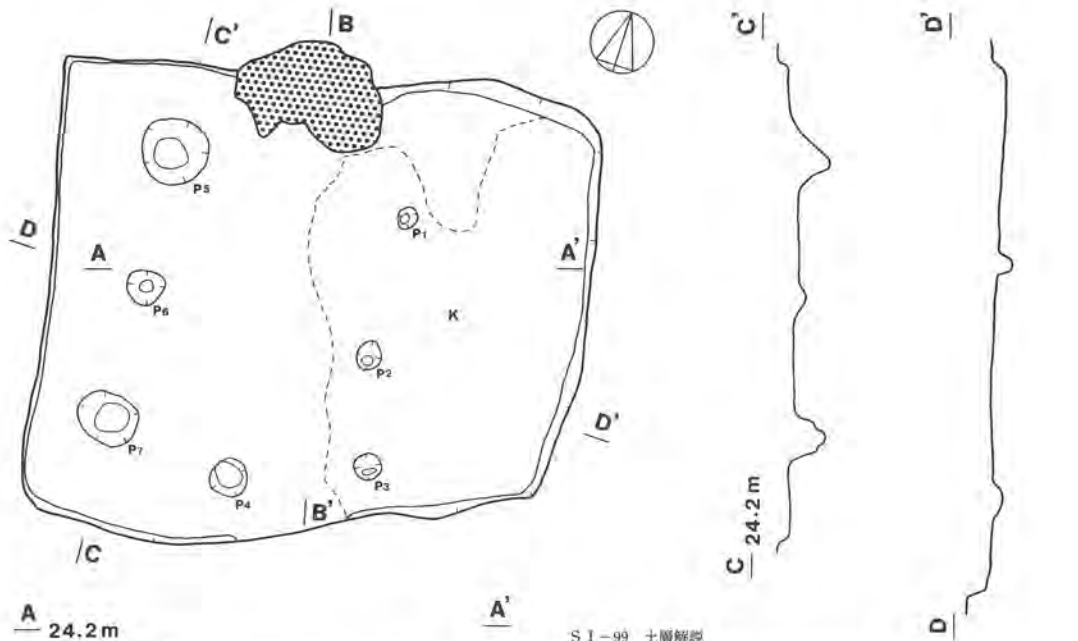
（ピット） 7か所（P₁～P₇）。掘り込みは，径20～60cm，深さ28～60cmを測るが，支柱穴として捉えられるのはP₄・P₅・P₇の3本であるが，他は不明。

（竈） 北壁中央部を60cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築され，天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し，焼土粒・炭化物が充填されている。煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がる。

（覆土） 自然堆積。

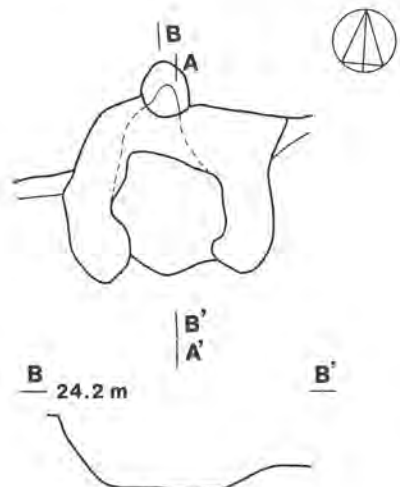
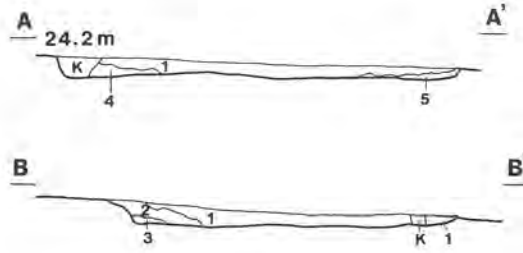
（遺物） 竈付近から集中して土師器（坏・甕），須恵器（高台付坑・甕）の破片が出土している。土師器甕片は，竈の補強材として用いられたものと考えられる。

（所見） 本跡は，出土遺物が破片のため，時期を決定することは不可能であり，本跡の時期は不明である。



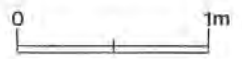
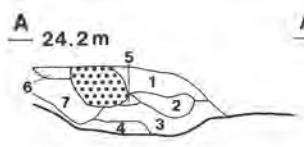
S1-99 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・粘土・白色粘土粒子
- 2 暗褐色 ローム・白色粘土粒子・白色粘土ブロック
- 3 暗赤褐色 ローム粒子少, 焼土粒子多
- 4 暗赤褐色 ローム粒子中, 焼土粒子少
- 5 暗赤褐色 ローム粒子少



S1-99 土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土・粘土粒子
- 2 暗赤褐色 粘土, 砂粒, 砂礫
- 3 極暗赤褐色 焼土ブロック, 粘土, 木炭, 砂粒
- 4 暗赤褐色 ローム, 粘土, 砂礫
- 5 にぶい赤褐色 粘土, 砂粒
- 6 褐色 ローム・炭化粒子, 砂粒
- 7 淡褐色 ローム粒子, ローム小ブロック, 焼土, 木炭, 砂粒



第185図 第99号住居跡・竈実測図

第100号住居跡（第186図）

（位置） 調査区の中央部，E6C₃区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.5×3.5mの方形。

（主軸方向） N-21°-W。

（壁） 壁高は東・南・北壁で28cm，西壁で10～16cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 3か所（P₁～P₃）。掘り込みは，径30cm，深さ36～42cmを測り，P₂・P₃が支柱穴の一部と考えられる。

（竈） 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し，燃燒部には焼土粒・炭化物が充填されている。煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がる。

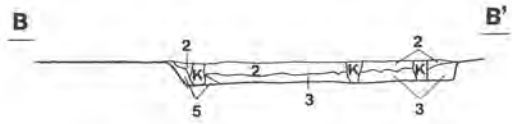
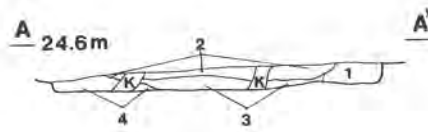
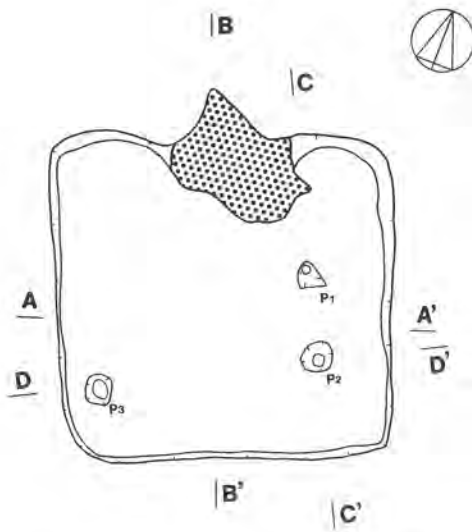
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近から土師器（坏・甕），須恵器（坏）支脚の破片が出土している。424は，土師器甕で，竈の右袖部から袖の芯として使用され，425は土師器甕で竈の燃燒部から付設された状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。

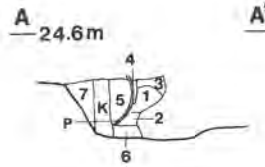
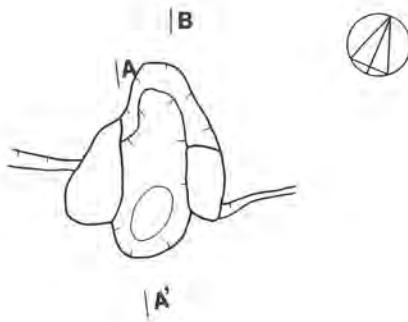
第100号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第187図 420	坏 土師器	A 14.8	底部は丸底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜を有し，口縁部は垂直気味に立ち上がる。体部外面へラ削り後ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 褐灰白色 普通	95% 内面黒色処理 覆土
		B 4.1			
421	坏 土師器	A (13.2)	丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は垂直気味に立ち上がる。体部外面へラ削り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	60% 内面黒色処理 竈
		B 5.2			
422	壺 土師器	A 9.9	底部は扁平な丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，肩部は強く張る。口縁部は外反気味に立ち上がり，口唇部に稜をもつ。体部外面へラ削り。口縁部内・外面ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	70% 竈
		B 7.4			
423	甕 土師器	B (28.0)	底部・口縁部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり，胴部中位に最大径を有す。胴部外面へラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄褐色 普通	40% 竈
424	甕 土師器	B (17.7)	底部は平底。胴部はやや下腹れ。頸部から口縁部はやや外反する。頸部から胴部下位にかけての外面斜位方向のへラ削り。頸部内面横位のへラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい褐色 普通	80% 竈
		C 9.0			



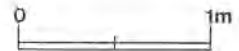
S I-100 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック少
- 2 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック中
- 3 褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少
- 4 褐色 ローム粒子多, 焼土粒子中, 炭化物
- 5 褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少

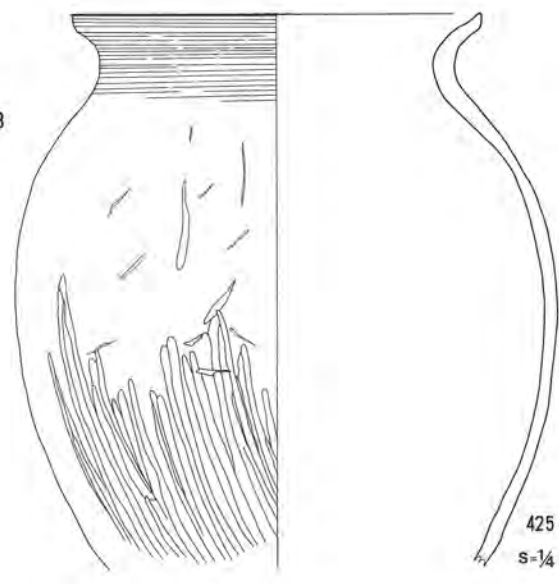
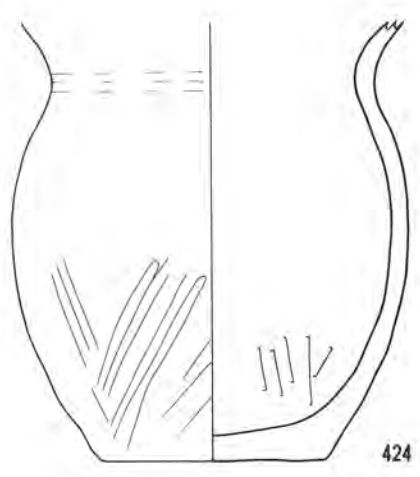
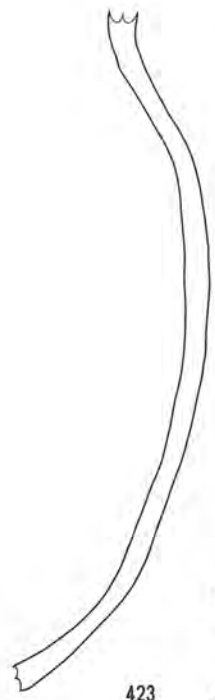
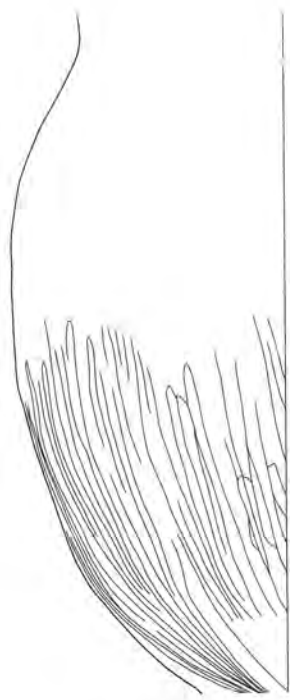
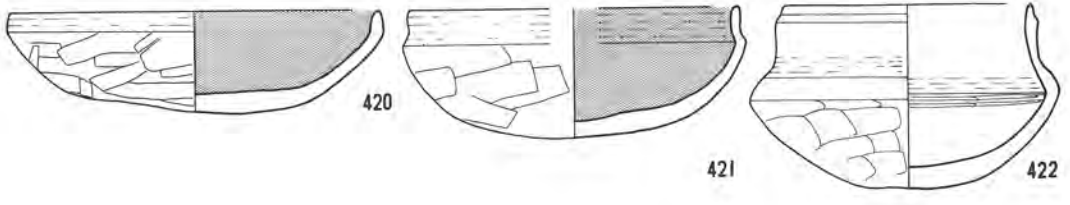


S I-100竈 土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 白色粘土
- 2 濃い赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土
- 3 褐色 焼土粒子, 粘土
- 4 暗褐色 ローム粒子, 粘土
- 5 褐色 ローム・焼土粒子
- 6 黄褐色 ローム粒子, 砂粒
- 7 褐色 ローム粒子, 焼土, 砂粒



第186図 第100号住居跡・竈実測図



第187図 第100号住居跡出土遺物実測図

第100号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第187図 425	甕 土師器	A 21.7 B (29.5)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり、球形を呈す。 頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 明褐色 普通	30% 甕

第101号住居跡（第188図）

（位置） 調査区の南側，E5h₄区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.1×2.9mの方形。

（主軸方向） N-11°-W。

（壁） 壁高は20cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（竈） 北壁中央部のやや東側に位置し，15cm程壁外へ掘り込んで，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く袖部だけが残存し，馬蹄形を呈する。火床部は焼土化し，煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がる。

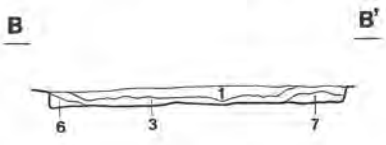
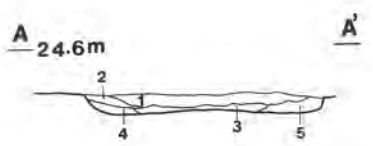
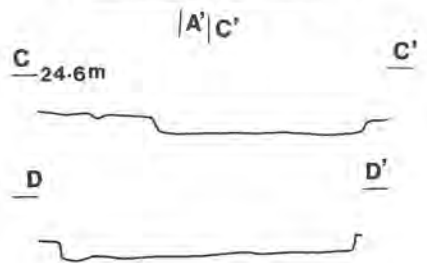
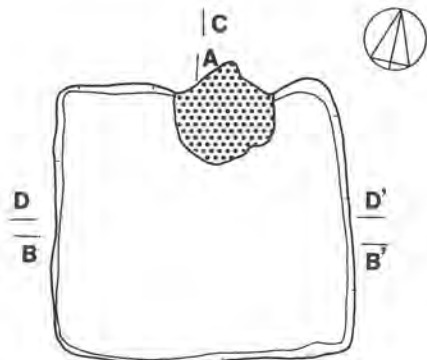
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 本跡の中央部と竈付近から土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が出土し，土師器甕片は竈の袖部の芯として，また天井部の補強材として用いられた状態で出土している。427は須恵器坏である。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

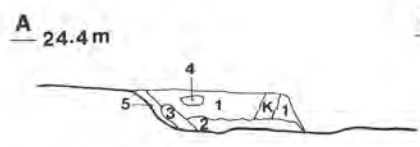
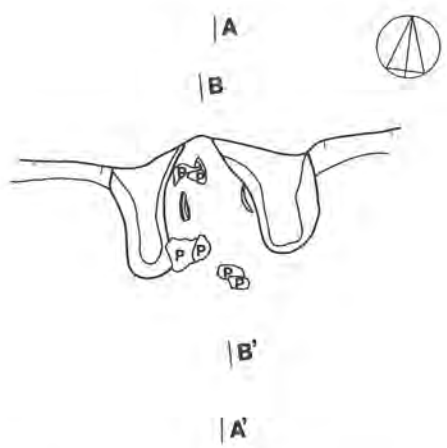
第101号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 426	坏 須恵器	A (12.8) B 3.8 C 6.8	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転へら削り。	砂粒・砂礫 灰色 良好	50% 覆土
427	坏 須恵器	A 13.8 B 4.6 C 7.8	体部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり，端部は小さく折れて丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 普通	90% 覆土



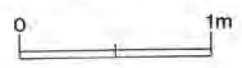
S I - 101 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少, 焼土ブロック
- 2 暗褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少, 粘土
- 3 褐色 ローム粒子多, 焼土・炭化粒子少, ローム小ブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子少, 焼土粒子中, 粘土
- 5 暗褐色 ローム粒子中, 焼土粒子少, 粘土
- 6 褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少
- 7 褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック中



S I - 101 竈 土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム・焼土ブロック, 粘土
- 2 によい赤褐色 ローム・焼土ブロック, 粘土
- 3 極暗赤褐色 黒色土, 焼土, 木炭
- 4 極暗赤褐色 ローム粒子, ローム・焼土ブロック
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック, 粘土



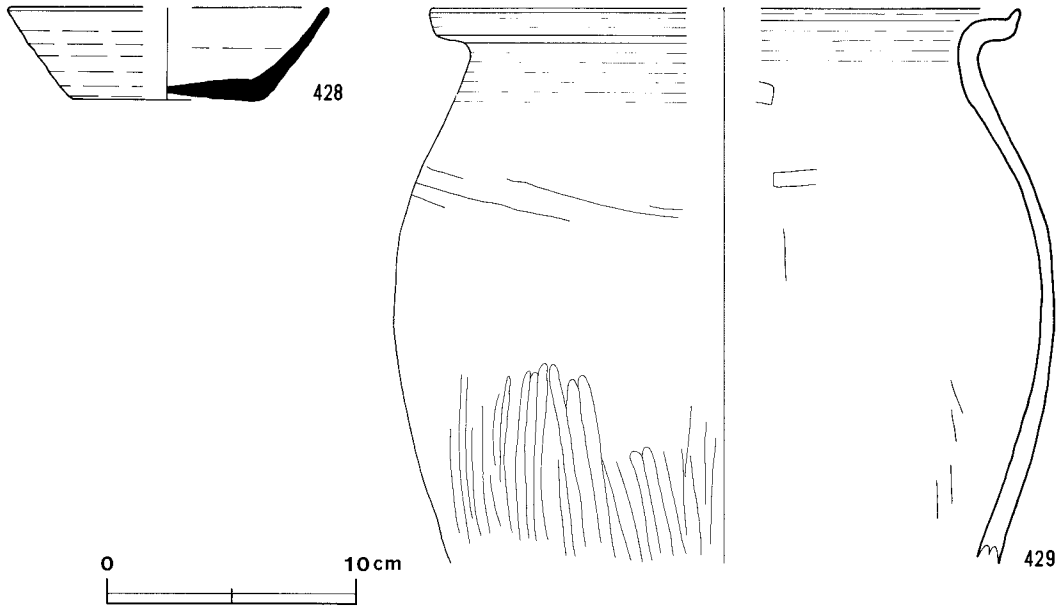
第188図 第101号住居跡・竈実測図



第189図 第101号住居跡出土遺物実測図

第102号遺構

本跡は、遺構確認の段階で竪穴住居跡として捉えたが、調査の結果、土層堆積状況・形態等から住居跡としてとらえることは不可能であった。



第190図 第102号遺構出土遺物実測図

第102号遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第190図 428	坏 須恵器	A (12.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	40% 覆土
		B 3.7			
		C (7.6)			
429	甕 土師器	A (23.6)	胴部は球形を呈し、頸部は「く」の字状に屈曲する。端部はつまみ上げる。 胴部外面斜位のヘラ削り。内面横方向のヘラナデ。頸部・口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 普通	40% 覆土
		B (22.4)			

第104A号住居跡（第191図）

（位置） 調査区の南側，E5b₁区を中心に確認。

（重複） 第104B号住居跡・第6号溝と重複。

（規模と平面形） 6.4×5.3mの長方形。

（主軸方向） N-20°-W。

（壁） 壁高は，東・西・北壁で31cm，南壁で18cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 11か所（P₁～P₁₁）。掘り込みは，径30～50cm，深さ68～78cmを測る。主柱穴はP₂・P₃・P₈・P₁₉・P₂₆・P₂₇・P₂₈の7本である。

（竈） 北壁中央部に構築されていたが，第6号溝によって破壊され，わずかに火床面が確認されただけである。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡の覆土上層から，土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が流れ込みの様相を呈して出土している。

（所見） 本跡は，埋没後に第104B号住居跡と第6号溝の構築に伴って壊され，全容を把握することは不可能であり，本跡に伴う遺物も検出されない状況から本跡の時期は不明である。

第104B号住居跡（第191図）

（位置） 調査区の南側，E5b₁区を中心に確認。

（重複） 第104A号住居跡・第6号溝と重複。

（規模と平面形） 3.9×3.3mの方形。

（主軸方向） N-21°-W。

（壁） 壁高22cmを測り，外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅10cm，深さ6～8cm，掘り込み断面形状はU字状を呈す。

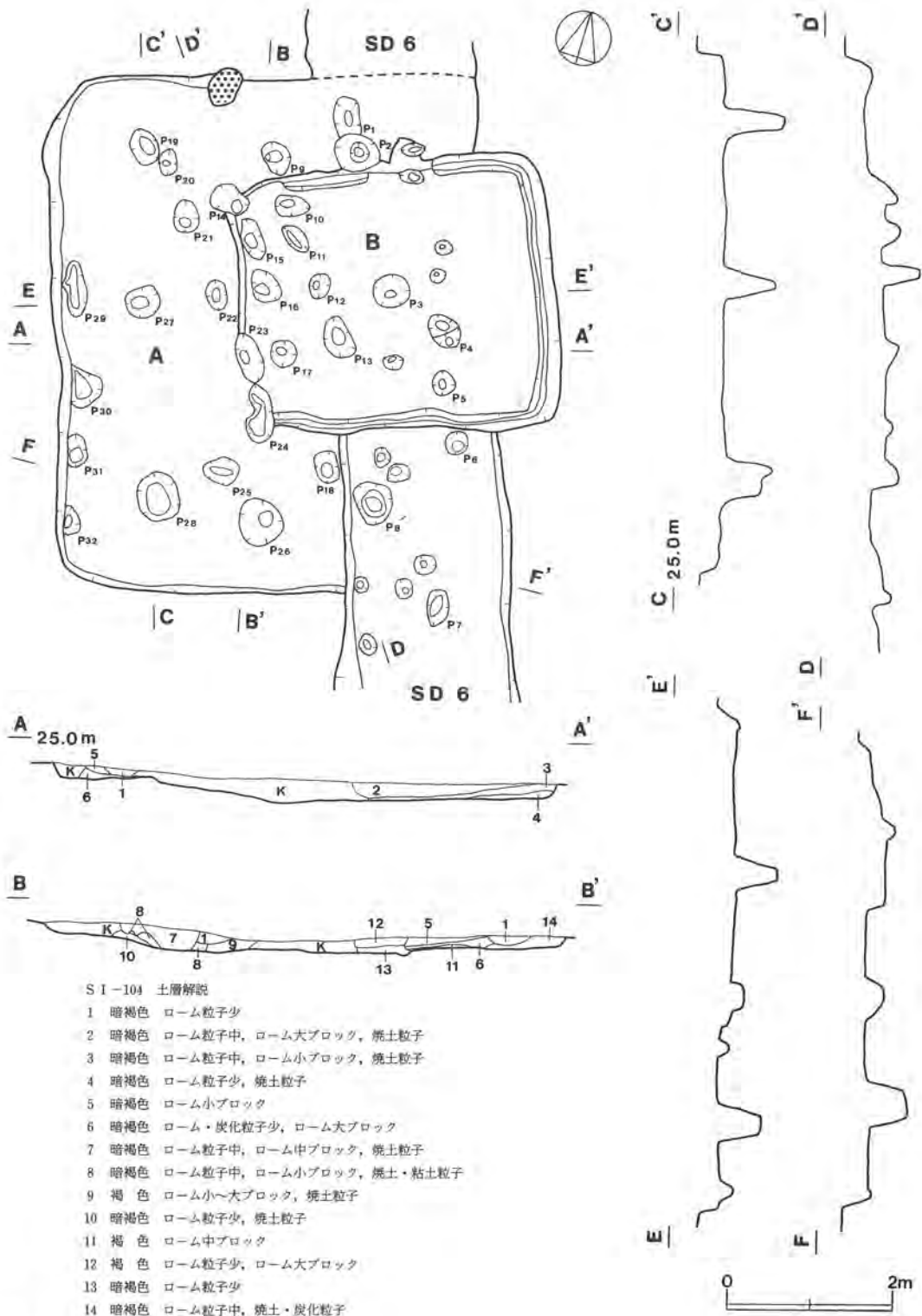
（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 13か所（P₁～P₁₃）。本跡に伴うものは不明。

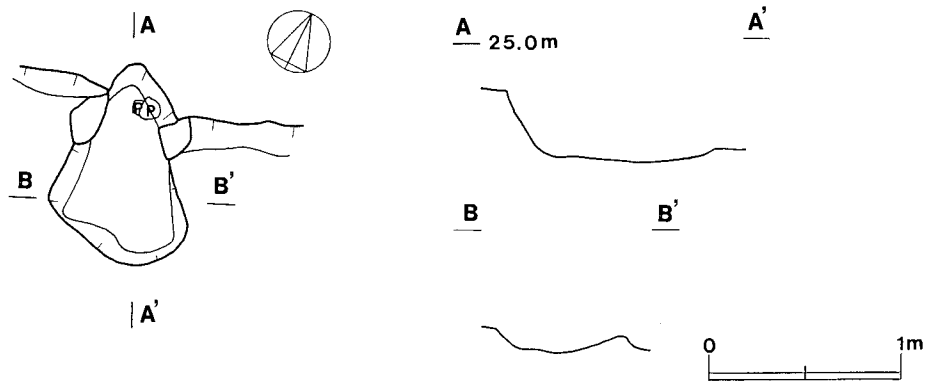
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から中層にかけて，土師器（坏・甕），須恵器（坏）の破片が流れ込みの状態ですら出土している。

（所見） 本跡は，第104A号住居跡の埋没後に104A号住居跡の中央部に構築しているが，本跡に伴う遺物が検出されない状況から本跡の時期は不明である。



第191図 第104 A・B号住居跡実測図



第192図 第104 A号住居跡竈実測図

第105号住居跡 (第193図)

(位置) 調査区の南側，E5i₄区を中心に確認。

(重複) 第140号住居跡と重複。

(規模と平面形) 3.9×3.9mの方形。

(主軸方向) N-21°-W。

(壁) 壁高は36～38cmを測り，垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20～30cm，深さ10～20cm，掘り込み断面形はL状を呈して全周。

(床面) 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

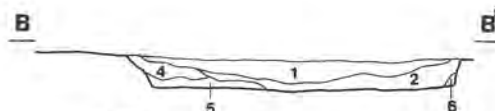
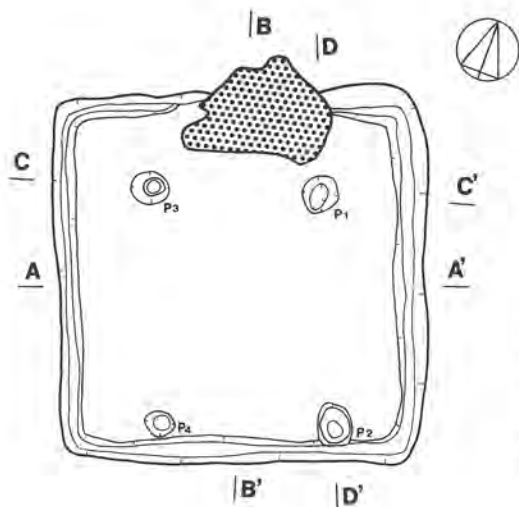
(ピット) 4か所 (P₁～P₄)。掘り込みは，径30～40cm，深さ32～65cmを測り，全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部よりわずかに東側に位置し，壁を25cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し，燃焼部には焼土粒・炭化物が充填され，煙道部は焚口部から急角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

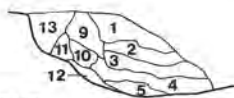
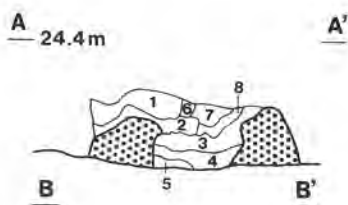
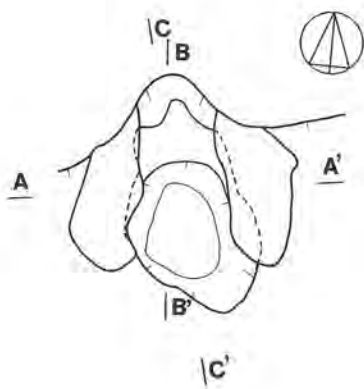
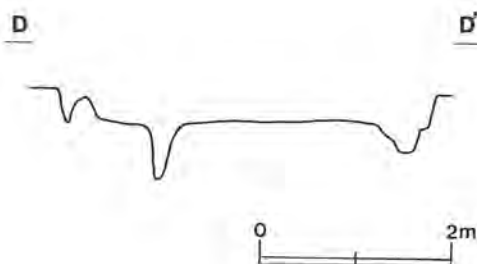
(遺物) 遺物量は少ないが土師器 (坏・甕)，須恵器 (坏) の破片が散在して出土している。430は，須恵器坏で西壁際の中層から出土している。

(所見) 本跡は小型の竪穴住居跡であり，竈が北壁中央部より若干東側に構築され，遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



SI-105 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小・中ブロック
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 3 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 4 暗褐色 ローム小ブロック, 焼土・粘土ブロック
- 5 褐色 焼土粒子, 粘土ブロック
- 6 暗褐色 焼土・炭化粒子

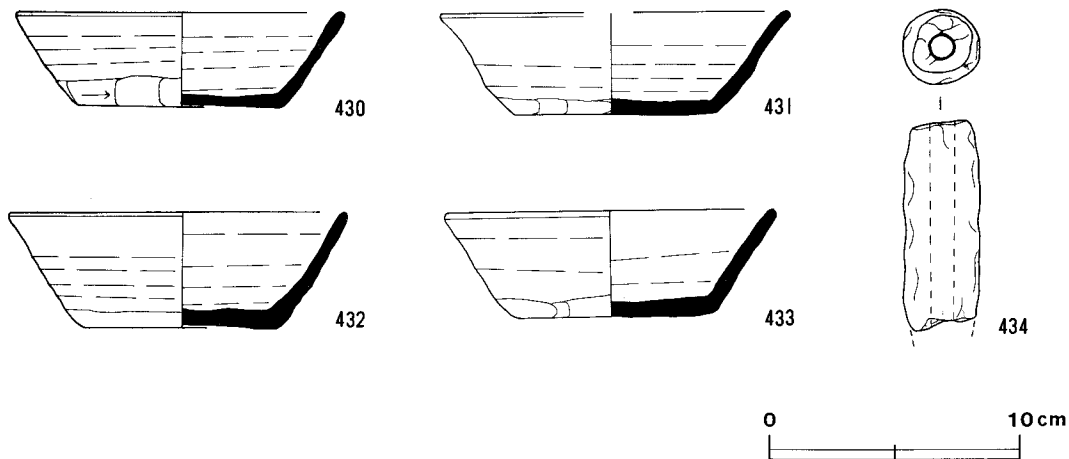


SI-105竈 土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム・木炭粒子, ローム小ブロック, 粘土
- 2 極暗赤褐色 ローム粒子, 粘土, 砂粒
- 3 暗赤褐色 焼土・粘土ブロック, 砂礫, 木炭
- 4 暗赤褐色 焼土, 木炭
- 5 にごい赤褐色 ローム
- 6 にごい赤褐色 粘土, 木炭
- 7 暗赤褐色 粘土, 木炭
- 8 暗褐色 焼土, 粘土
- 9 褐色 ローム, 焼土, 粘土, 木炭, 砂粒
- 10 黒褐色 ローム, 焼土粒子
- 11 黒褐色 ローム, 焼土粒子
- 12 褐色 ローム, 焼土粒子
- 13 黒褐色 ローム, 焼土・炭化粒子



第193図 第105号住居跡・竈実測図



第194図 第105号住居跡出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 430	坏 須恵器	A 13.0	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、 端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	90% 覆土
		B 3.9			
		C 8.0			
431	坏 須恵器	A (13.8)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 良好	40% 竈
		B 4.1			
		C 8.1			
432	坏 須恵器	A 13.4	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 良好	80% 覆土
		B 4.7			
		C 7.6			
433	坏 須恵器	A 13.2	体部から口縁部にかけては、外反気味に立ち上がる。口 縁端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 良好	80% 覆土
		B 4.3			
		C 7.7			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
434	管状土錘	全長(8.4) 外径 3.1 孔径 0.9 重さ 79.2g	中央に孔を有する。 両端部欠損。		

第106号住居跡（第195図）

（位置） 調査区の中央部。D5b₇区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.6×2.5mの方形。

（主軸方向） N-15°-W。

（壁） 壁高は東の南壁で30cm，西壁で28cm，北壁で36cmを測り垂直に立ち上がる。

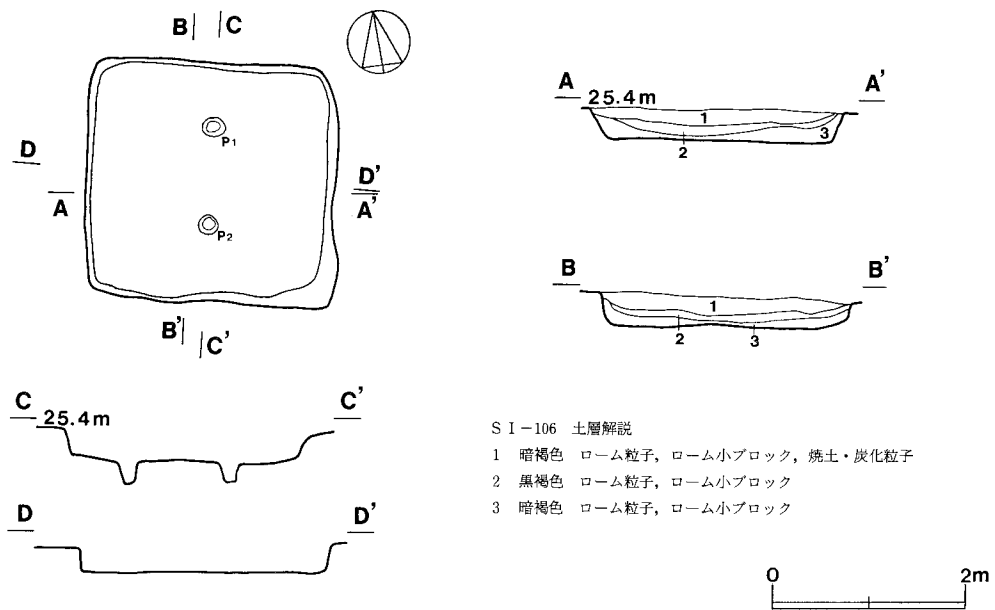
（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径20cm，深さ20cmを測り，全て主柱穴である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡の覆土上層から土師器（坏・甕），須恵器（甕）の破片が流れ込みの様相を呈して出土しているが，本跡に伴う遺物ではない。

（所見） 本跡は，小竪穴住居跡で遺構の形態から判断して12世紀に比定される住居跡である。



第195図 第106号住居跡実測図

第107号住居跡 (第196図)

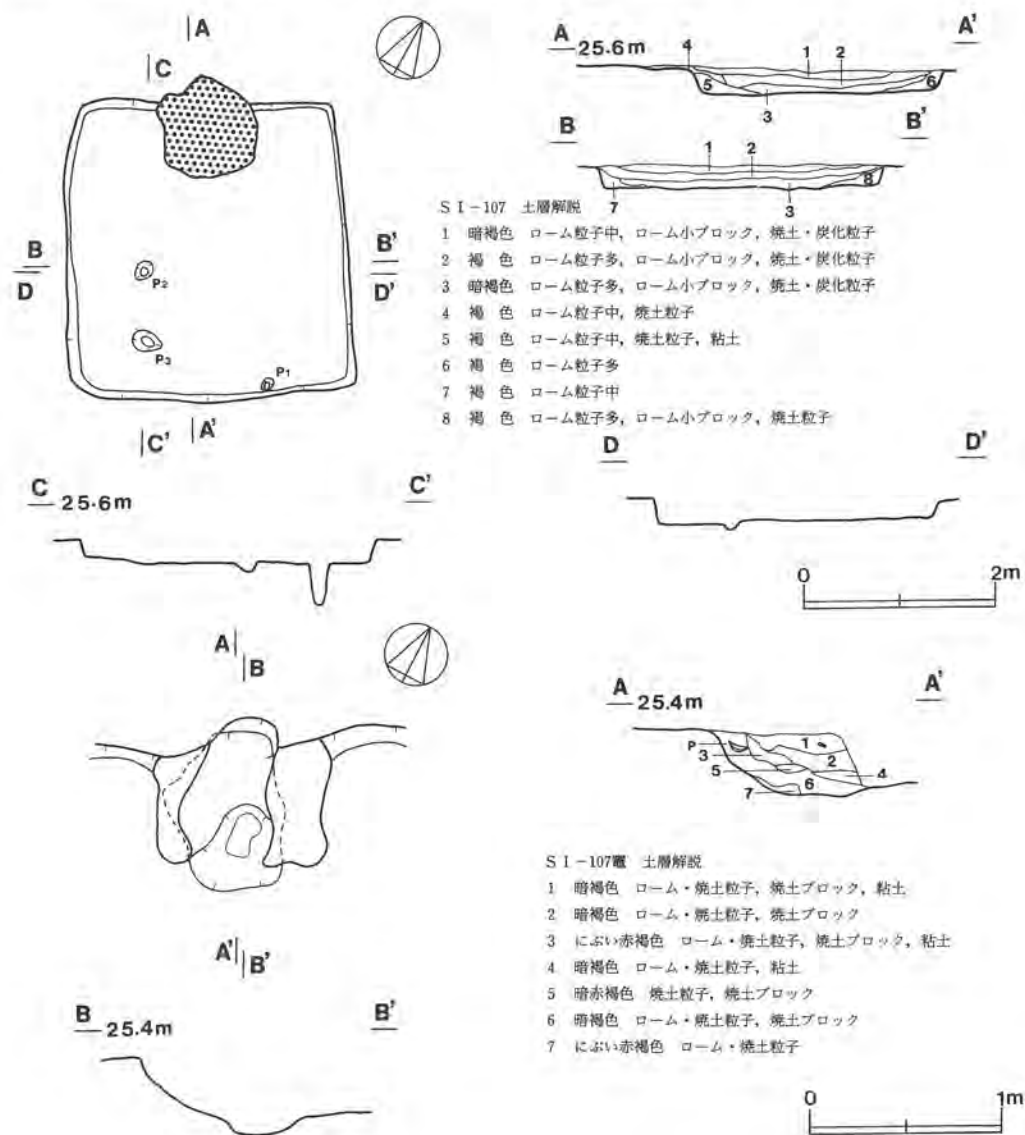
(位置) 調査区の東側, D7h₉区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.1×3.0mの方形。

(主軸方向) N-35°-W。

(壁) 壁高は東壁で16cm, 南・西・北壁で20~26cmを測り, 垂直に立ち上がる。

(床) 全体に凸凹しているが, 硬く踏み固められて堅緻である。



第196図 第107号住居跡・竪実測図

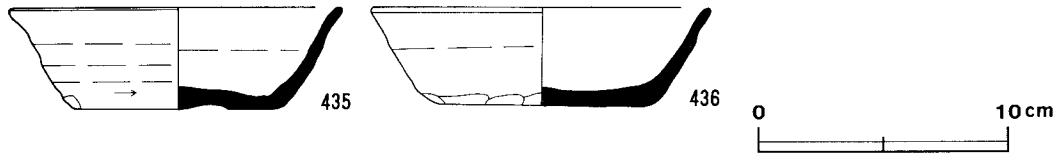
(ピット) 3か所(P₁~P₃)。掘り込みは、径18~40cm、深さ10~48cmを測る。支柱穴はP₃の1本だけである。

(竈) 北壁中央部を25cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し、焼土粒・炭化物が充填され、煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 住居跡中央部の中層から下層にかけて土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕)の破片が散在して出土している。

(所見) 本跡は、遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



第197図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 435	坏 須恵器	A 13.4	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。	砂粒・砂礫・長石・ 雲母 灰黄色 良好	90% 覆土
		B 4.1	端部は丸味をもつ。		
		C 8.2	体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。		
436	坏 須恵器	A 13.5	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、	砂粒・砂礫・長石・ 雲母 灰色 普通	90% 覆土
		B 4.0	端部は丸味をもつ。		
		C 8.5	体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。周辺へラ削り。		

第108号住居跡（第198図）

（位置） 調査区の東側，D8i区を中心に確認。

（重複） 本跡の北側は第114号住居跡，西側は第115号住居跡と重複。

（規模と平面形） 4.3×3.0mの長方形。

（主軸方向） N-60°-E。

（壁） 壁高は南壁で28cm，西・北壁で48cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 北・西壁下に検出され，幅20cm，深さ4～6cmを測り，掘り込み断面形状は，┌状を呈す。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径26～36cm，深さ36～60cmを測る。本跡に伴う主柱穴かどうかは不明。

（竈） 東壁の中央部を70cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落し，袖部だけが残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼けて焼土化し，煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がり，煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

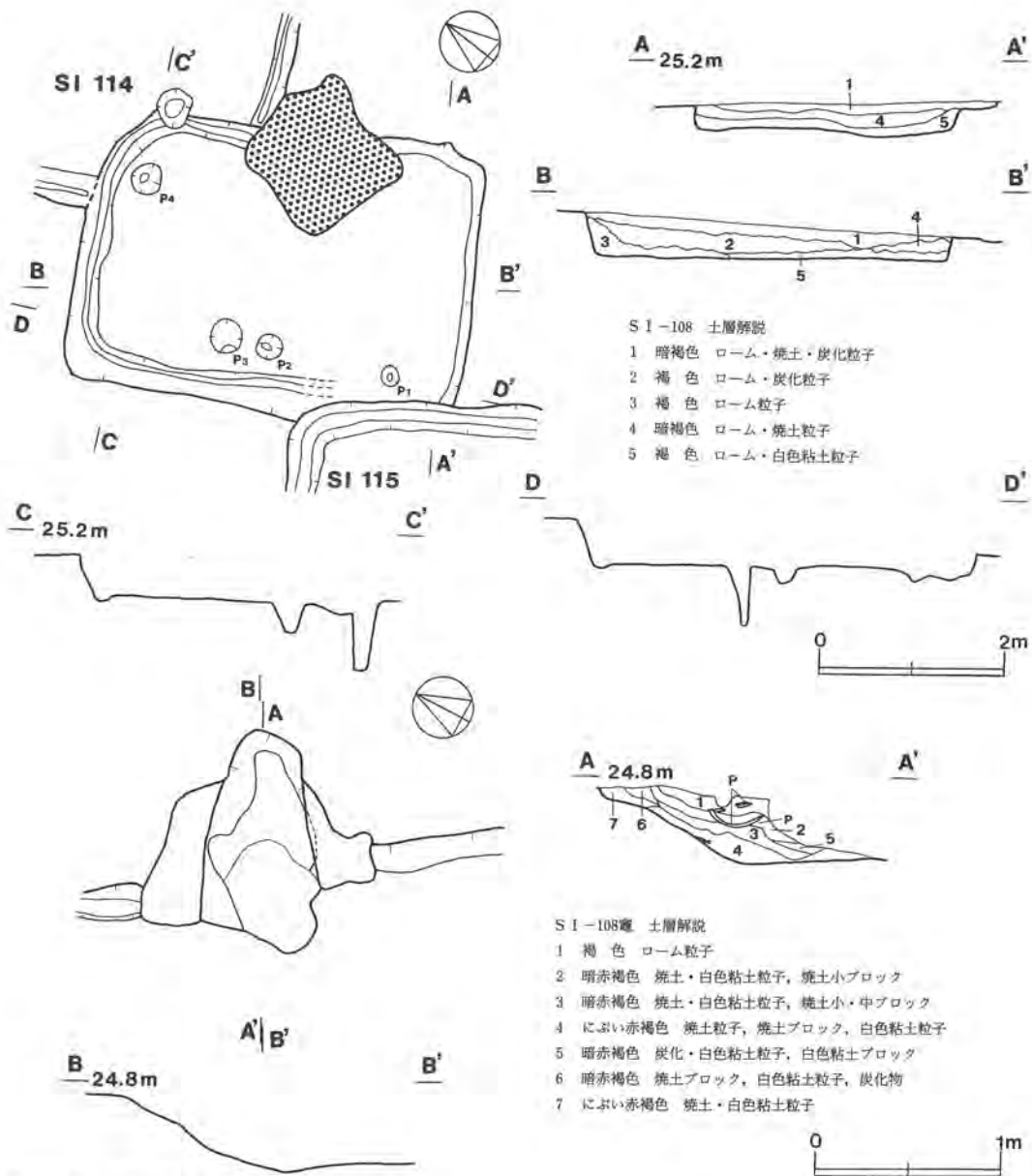
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物は少なく土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が散在して出土している。438は土師器坏片，442は土師器甕片で，竈の天井部に補強材として使用された状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。

第108号住居跡出土遺物解説表

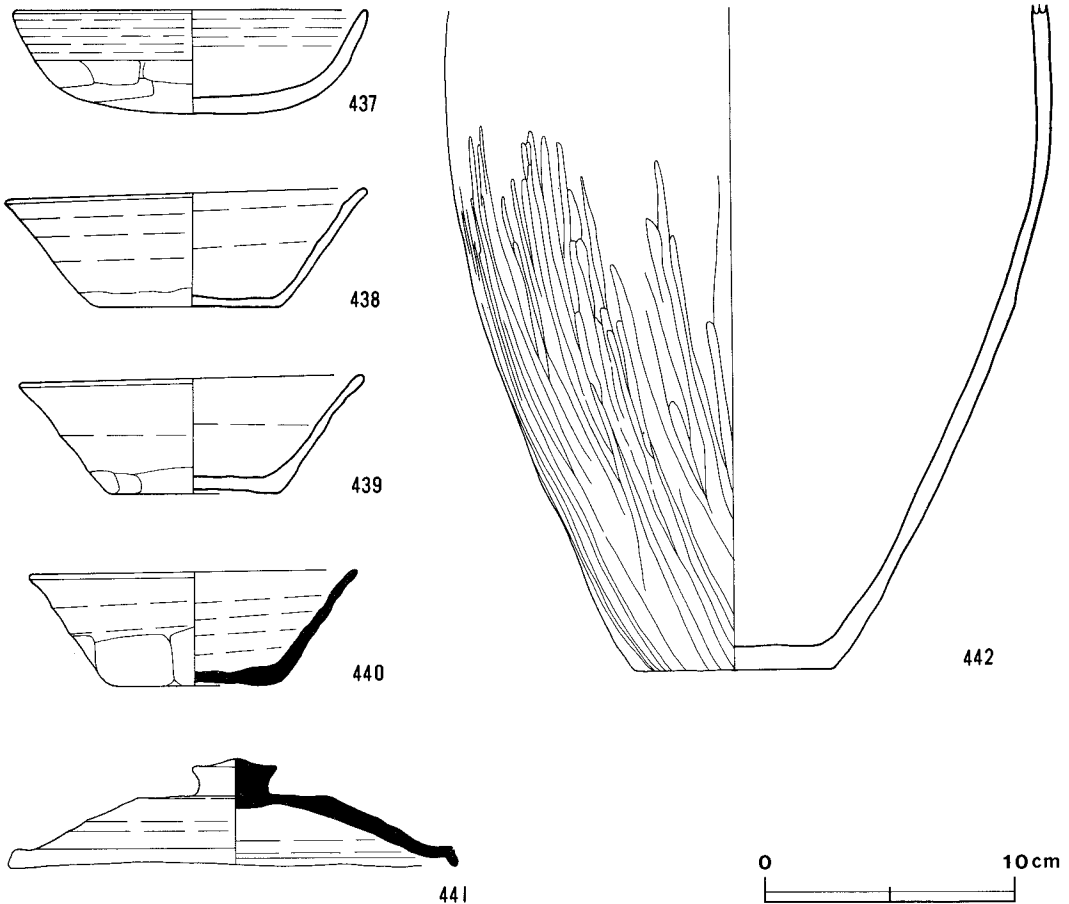
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 437	坏 土師器	A 14.2	底部は丸底気味で体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は小さく外反する。体部ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 普通	90% 覆土
		B 4.2			
438	坏 土師器	A 14.4	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。体部内・外面横ナデ。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・長石・雲母 にぶい橙色 普通	100% 竈
		B 4.8			
		C 7.4			
439	坏 土師器	A 13.7	体部は直線的に立ち上がり，口縁部は外反する。体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい赤褐色 良好	80% 竈
		B 4.8			
		C 6.8			
440	坏 須恵器	A 13.3	体部から口縁部にかけては外反気味に立ち上がり，口縁端部は丸味をもつ。体部内・外面水挽き整形，ヘラ削り。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫 灰色 普通	90% 覆土
		B 4.6			
		C 6.5			
441	蓋 須恵器	A 18.0	天井頂部はやや扁平で，反り気味に下降し，天井部と口縁部の境界に明瞭な稜をもつ。口縁部は下方方向に屈曲し，端部はやや尖る。天井頂部回転ヘラ削り調整。天井部から体部にかけては水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 良好	60% 覆土
		B 4.4			
		F 3.4			
		G 1.5			



第198図 第108号住居跡・竈実測図

第108号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 4.4.2	甕 土師器	B. (26.7) C. 8.0	口縁部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり、中位に最大径を有する。 胴部外面ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰褐色 普通	60% 竈



第199図 第108号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡 (第200図)

(位置) 調査区南側, E5d₁区を中心に確認。

(重複) 第6号溝と重複。

(規模と平面形) 1.9×2.4m (残存部)。

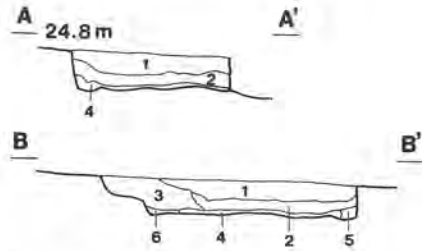
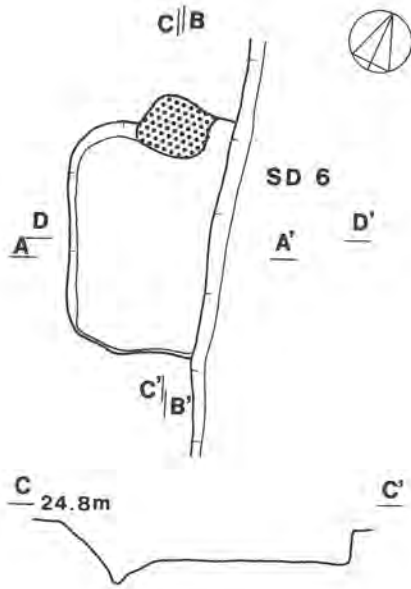
(壁) 壁高は38cmを測り, 垂直に立ち上がる。

(床) 全体に凸凹しているが, 硬く踏み固められて堅緻である。

(竈) 北壁中央部を60cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。遺存状態は良く, 天井部・袖部は残存している。火床部は焼土化し, 煙道部は焚口部から緩やかに立ち上がる。

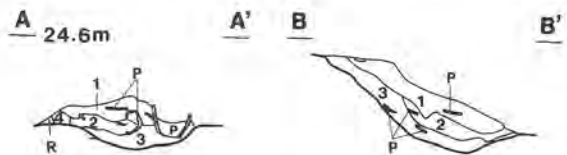
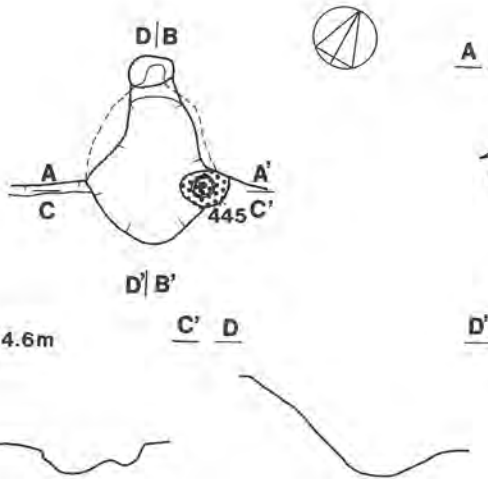
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈周辺から土師器 (坏・甕), 須恵器 (坏・甕) の破片が集中して出土している。444は土師器甕片, 446は須恵器甕片で, 竈の袖部・天井部に補強材として使用された状態で出土している。



S 1-109 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック, 焼土ブロック
- 2 褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック, 焼土ブロック
- 4 褐色 ローム粒子, 炭化物
- 5 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 6 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子



S 1-109 土層解説

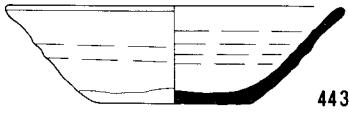
- 1 種暗赤褐色 ローム・焼土・木炭粒子
- 2 極暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 3 暗赤褐色 焼土, 木炭, 灰
- 4 暗赤褐色 粘土, 砂粒

第200図 第109号住居跡・竈実測図

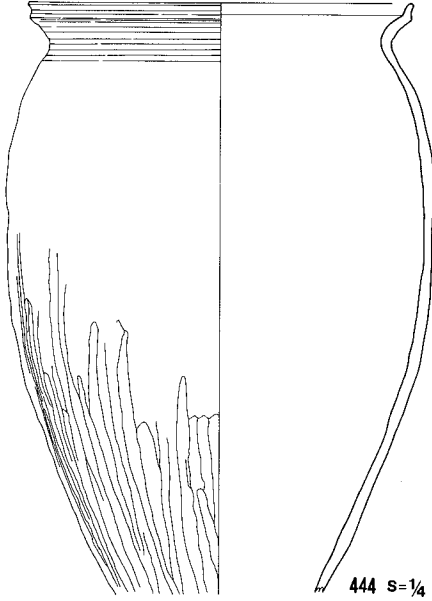
(所見) 本跡は第6号溝によって埋没後に破壊され、全容は把握できなかったが、遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第109号住居跡出土遺物解説表

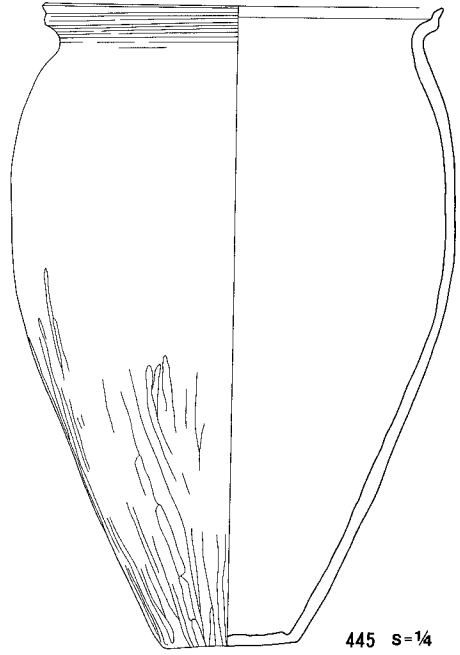
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第201図 443	坏 須恵器	A 13.4 B 3.9 C 6.2	体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は小さく折れる。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・長石・ 雲母 にぶい黄橙色 普通	90% 竈



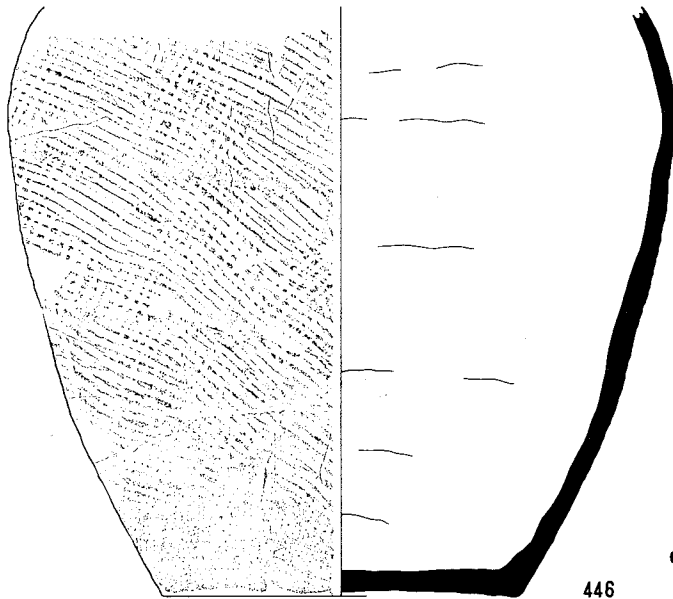
443



444 s=1/4



445 s=1/4



446



第201图 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第201図 444	甕 土師器	A (20.3)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 におい 普通	40% 竈
		B (31.5)			
445	甕 土師器	A 21.0	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 におい 普通	50% 竈
		B 34.5			
		C 7.0			
446	甕 須恵器	B (23.6)	底部破片。胴部は内彎気味に立ち上がる。 胴部外面斜位の平行叩き目。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	30% 竈
		C (14.3)			

第110号住居跡（第202図）

（位置） 調査区中央部，E6h₆区を中心に確認。

（重複） 第111号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.7×3.3mの方形。

（主軸方向） N-17°-W。

（壁） 壁高は南壁を除いて16cmを測り、やや外傾して立ち上がる。

（壁溝） 幅10cm，深さ4～6cmを測り、掘り込み断面形状は┌状を呈す。

（床） 全体に凸凹しているが、硬く踏み固められて堅緻である。

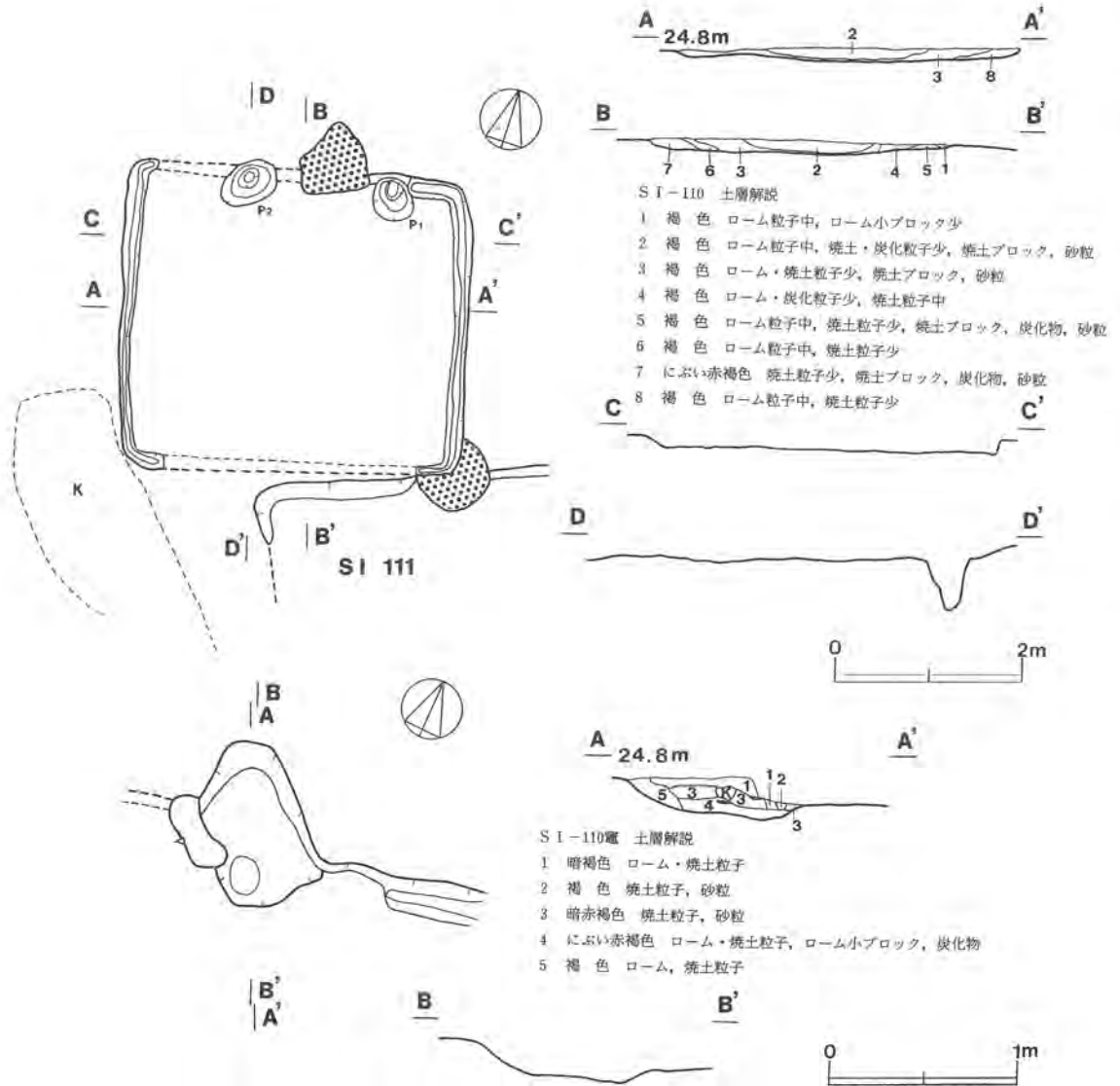
（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは、径40cm～50cm，深さ54～56cm，2段掘り込みで、本跡に伴う支柱穴かは不明。

（竈） 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部が若干残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し、焚口部から煙道部へかけての傾斜は緩く立ち上がり、煙出口近くで急角度となっている。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈周辺から土師器（坏・高台付皿・甕），須恵器（坏・甕）の破片が散在して出土している。448は土師器高台付皿で竈付近の床面上から、土師器甕片が竈天井部の崩落した場所から出土している状況から、竈の補強材として使用された土器と思われる。

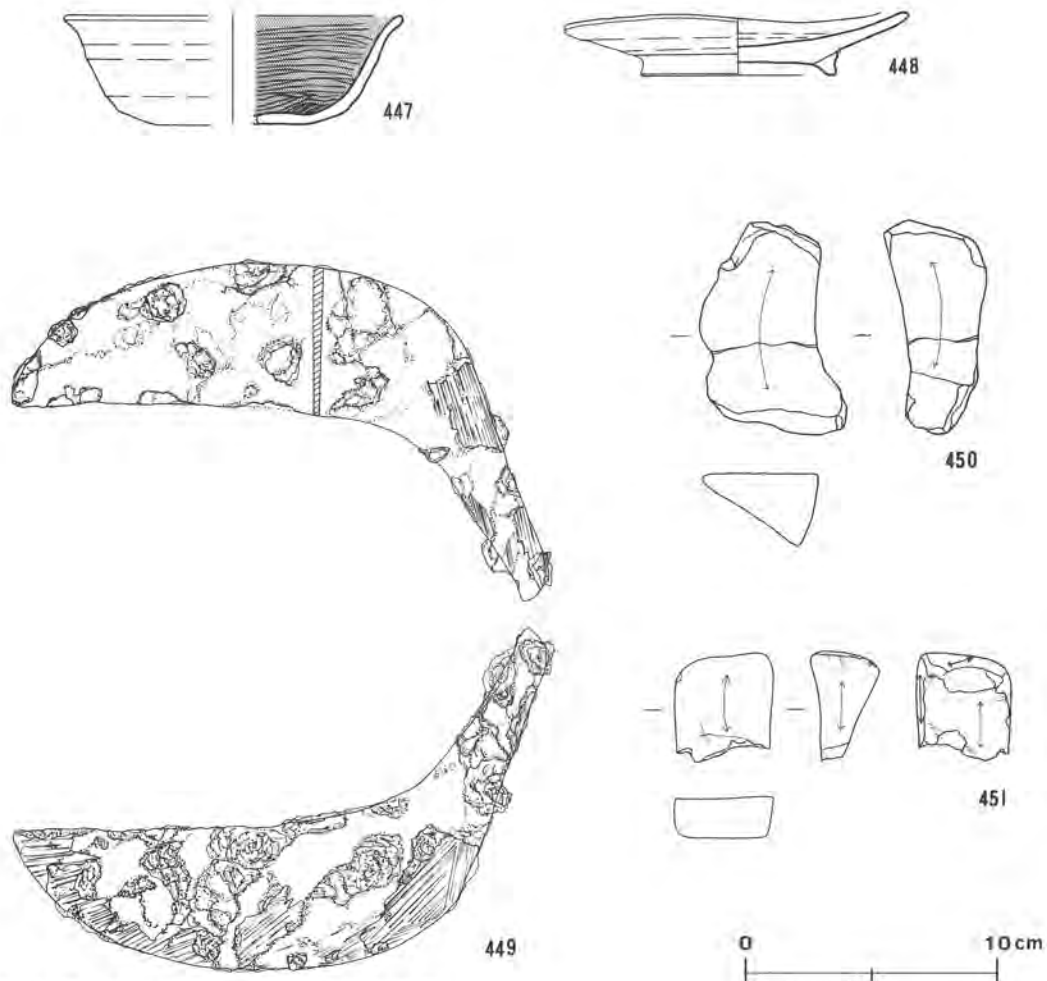
（所見） 本跡は、第111号住居跡と重複し、第111号住居跡の埋没後に111号住居跡を破壊して構築している。遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。



第202図 第110号住居跡・竈実測図

第110号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第203図 447	坏 土師器	A (13.4)	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部で外反する。 体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 におい橙色 普通	20% 内面黒色処理 覆土
		B 4.4			
		C (6.2)			
448	高台付皿 土師器	A 13.7	体部直線的に開く。口唇部は丸い。高台低く「ハ」の字 状に開く。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。高台貼り 付け。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 良好	100% 覆土
		B 2.5			
		D 7.8			
		E 1.0			



第203図 第110号住居跡出土遺物実測図

第110号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
第203図 449	鎌	全長 21.6 身幅 6.0 厚さ 0.4	棟は平棟で、断面は三角形を呈する。棟と刃が、ほぼ同様なカーブで彎曲する。基部表面に折れ曲がる。	棟に木質付着	451	砥石	全長 4.2 幅 3.9 厚さ 2.8 重さ 50.3g	台形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。特に、両側面部の使い減りが激しく顕著で凹んでいる。	凝灰岩
450	砥石	全長 8.7 幅 5.8 厚さ 4.2 重さ143.0g	三角形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。特に、中央部の使い減りが激しく顕著。	凝灰岩					

第111号住居跡（第204図）

（位置） 調査区中央部，E6h₇区を中心に確認。

（重複） 第110号住居跡と重複。

（規模と平面形） 3.3×3.1mの方形。

（主軸方向） N-21°-W。

（壁） 壁高は6cmを測り，外傾して立ち上がる。

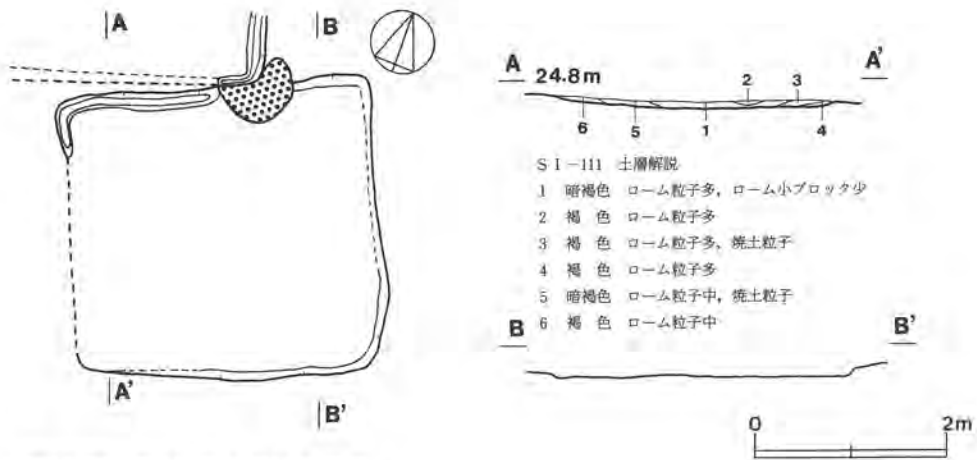
（床） 本跡の中央部から西壁にかけては硬く踏み固められて堅緻であるが，東・北側の床面は，攪乱を受けている。

（竈） 北壁中央部に位置するが，第110号住居跡に破壊されて，火床部がわずかに確認される程度である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物は少なく，土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が散在して出土している。

（所見） 本跡は，第110号住居跡構築時に，北壁が破壊されて遺存状態は悪い。遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



第204図 第111号住居跡実測図

第113号住居跡（第205図）

（位置） 調査区中央部，E6i₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.7×3.2mの方形。

（主軸方向） N-15°-W。

（壁） 壁高は東壁で16cm，北壁で30cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅14cm，深さ6cmを測り，東壁・西壁下で廻り，掘り込み断面形状はL状を呈す。

（床） 全体に凸凹であるが，硬く踏み固められて堅緻である。

（竈） 北壁中央部を15cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落し，袖部だけが残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し，煙道部は焚口部から緩く立ち上がる。

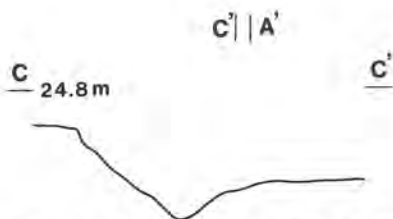
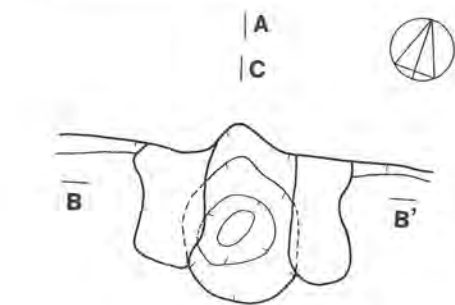
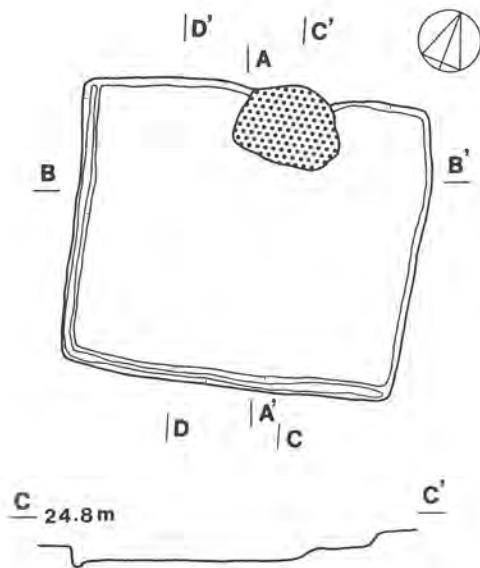
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物の出土量は少なく，土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が散在して出土している。

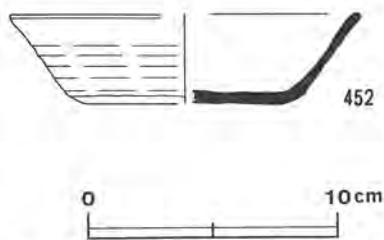
（所見） 本跡は遺構の形態・遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

第113号住居跡出土遺物解説表

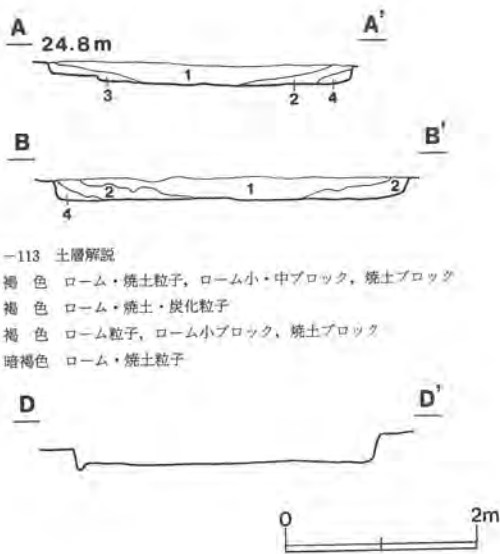
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第206号 452	坏 須恵器	A (14.0)	体部内礫気味に立ち上がり，口縁部は小さく外反し，口	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 良好	30% 覆土
		B 3.6	唇部は丸い。		
		C (7.8)	体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。		



第205図 第113号住居跡・竈実測図

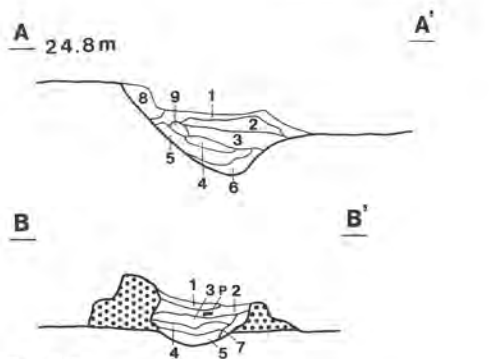


第206図 第113号住居跡出土遺物実測図



S I-113 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小・中ブロック, 焼土ブロック
- 2 褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 3 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック, 焼土ブロック
- 4 暗褐色 ローム・焼土粒子



S I-113竈 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 2 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 灰
- 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック, 灰
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子, 灰, 炭化物
- 5 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 灰
- 6 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 7 褐色 ローム粒子多, 焼土粒子少
- 8 褐色 ローム粒子多, 焼土粒子多
- 9 赤褐色 焼土

第114号住居跡（第207図）

（位置） 調査区の東側，D8h₁区を中心に確認。

（重複） 第108号住居跡と重複。

（規模と平面形） 5.2×5.1mの方形。

（主軸方向） N-32°-W。

（壁） 壁高は東・西・北壁で40cm，南壁で30cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅14~20cm，深さ10~14cm，掘り込み断面形状はL状を呈す。

（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁~P₄）。掘り込みは，径30~40cm，深さ50~70cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し，煙道部は焚口部から緩く立ち上がり，煙出口近くで急角度となる。

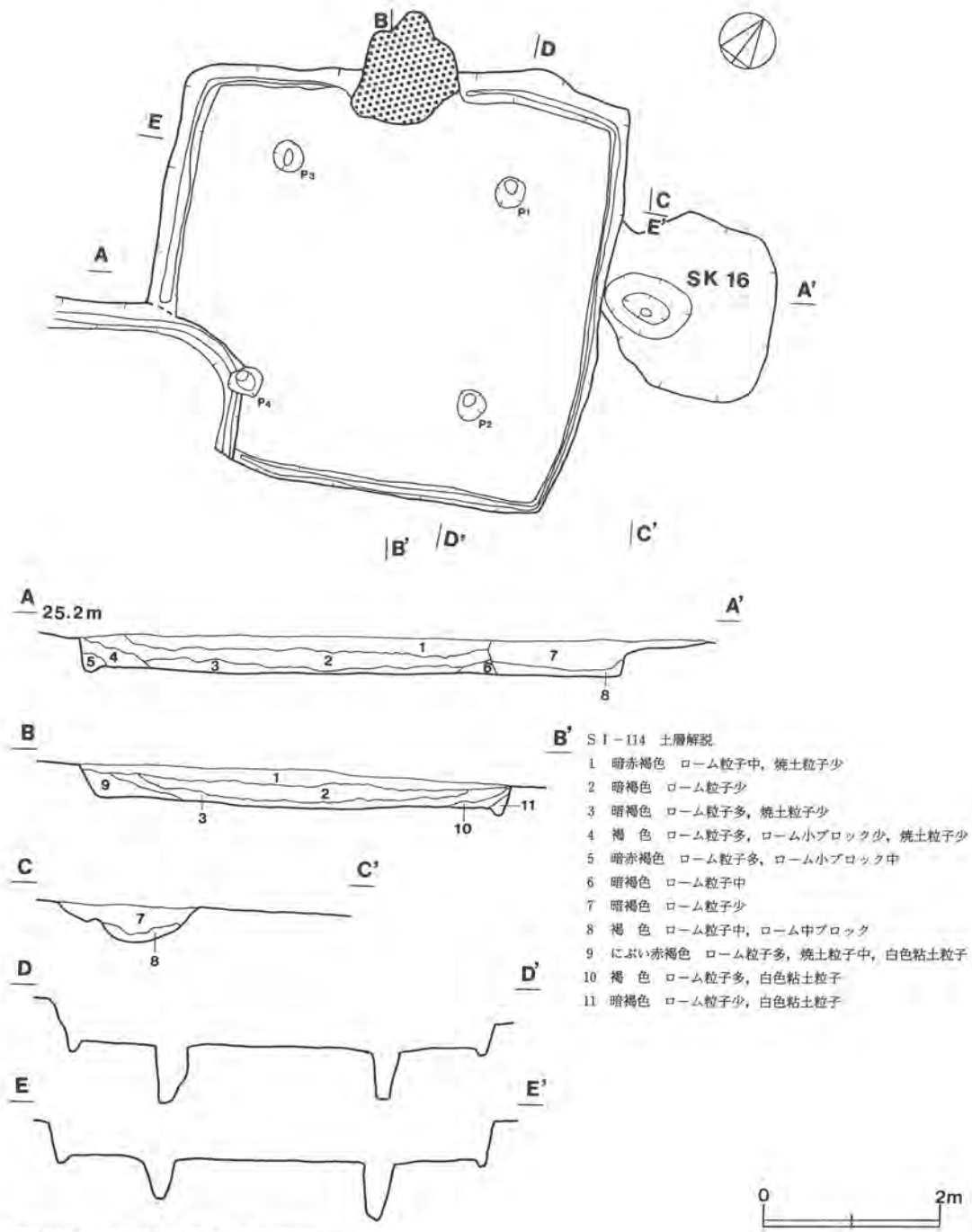
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡全体の覆土上層から中層にかけて土師器（坏・甕），須恵器（坏・蓋・甕）が散在して出土している。

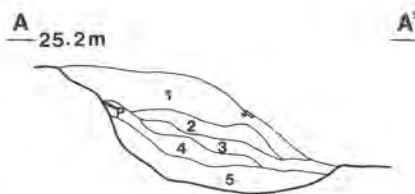
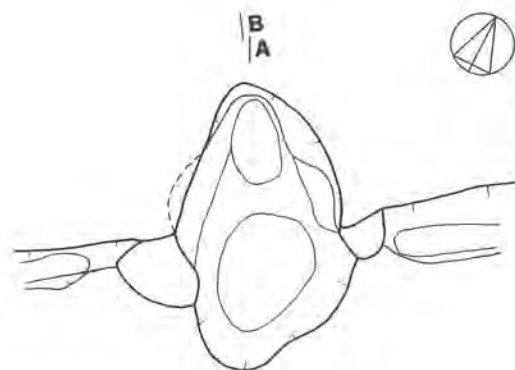
（所見） 本跡は第108号住居跡・第16号土坑等に東・南壁の一部を掘り込まれている。本跡は遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。

第114号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 453	坏 土師器	A (17.0)	底部は平底。口縁部やや外反気味に立つ。 口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	20% 覆土
		B 2.2			
454	坏 土師器	A (14.0)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部外反気味に立つ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 オリーブ黒色 良好	60% 覆土
		B 4.2			
		C 8.6			
455	坏 土師器	A (14.0)	体部は内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 黒褐色 良好	40% 覆土
		B (2.9)			
		C 8.2			
456	坏 須恵器	A (11.2)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部外反気味に立つ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 良好	60% 覆土
		B 2.8			
		C (6.6)			
457	坏 土師器	A (14.8)	底部は扁平な丸底。体部は外反気味に立ち上がり，口唇 端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 良好	30% 覆土
		B 3.8			

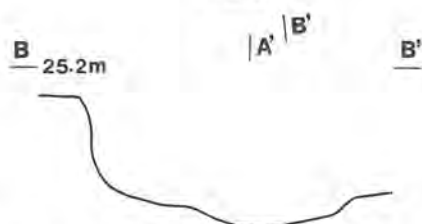


第207図 第114号住居跡実測図

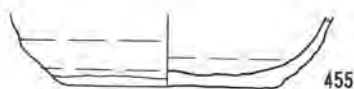


SI-114電 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 2 褐色 焼土・粘土粒子, 粘土ブロック
- 3 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 炭化物
- 5 にぶい褐色 焼土・粘土ブロック



第208図 第114号住居跡竈実測図



第209図 第114号住居跡出土遺物実測図

第115号住居跡 (第210図)

(位置) 調査区の南側, E7a₀区を中心に確認。

(重複) 第108号住居跡と重複。

(規模と平面形) 5.4×5.2mの方形。

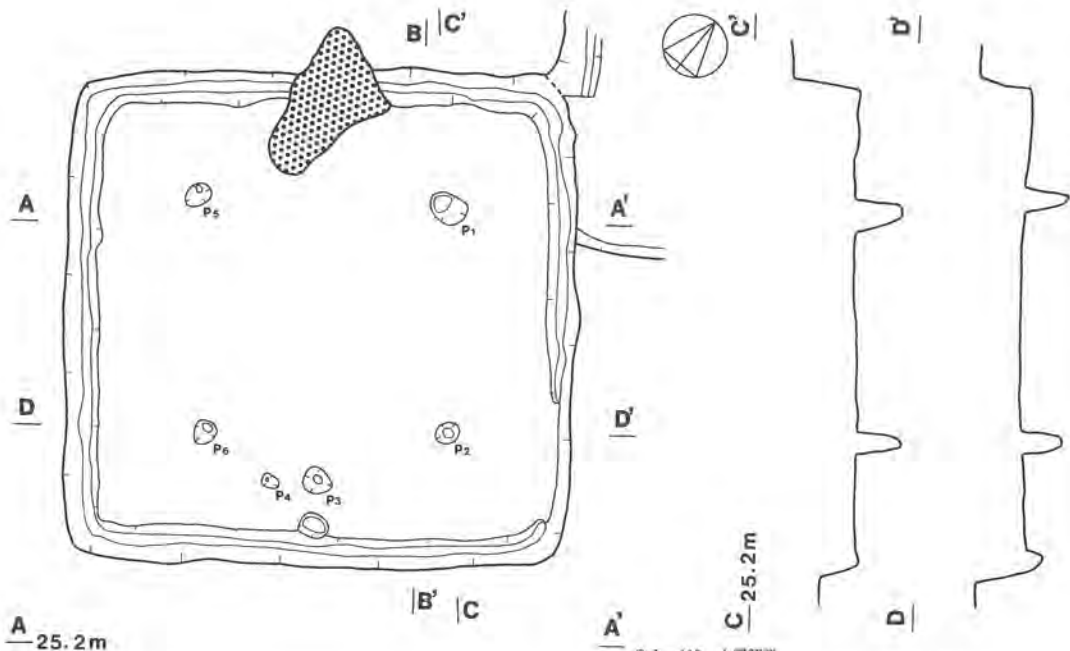
(主軸方向) N-38°-W。

(壁) 壁高は東壁50cm, 南壁で40cm, 北・西壁で70cmを測り, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm, 深さ10cm, 掘り込み断面形状はL状を呈す。

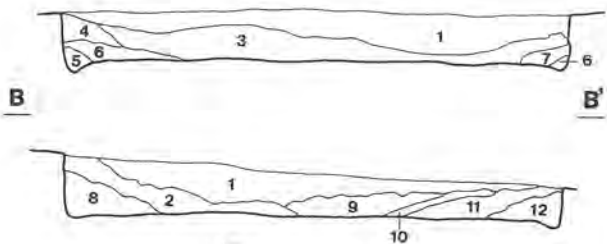
(床) 中央部で若干窪むが, 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所 (P₁~P₅)。掘り込みは, 径26~28cm, 深さ26~40cmを測り, 全て支柱穴で



A 25.2m

C 25.2m

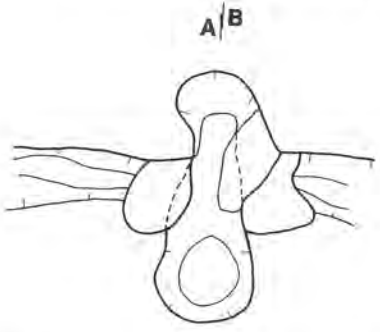


B

B'

S 1-115 土層解説

- 1 にぶい赤褐色 黒褐色土, ローム・焼土粒子, ローム中ブロック
- 2 褐色 ローム粒子, ローム中・大ブロック
- 3 暗褐色 ローム粒子, ローム中・大ブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子, 白色粘土
- 5 褐色 ローム粒子
- 6 暗赤褐色 ローム粒子中
- 7 暗赤褐色 ローム粒子少
- 8 暗褐色 ローム粒子
- 9 暗褐色 ローム粒子, ローム中・大ブロック
- 10 暗褐色 ローム小~大ブロック
- 11 褐色 ローム粒子
- 12 暗褐色 ローム粒子



B 25.0m

A 25.0m



S 1-115 土層解説

- 1 赤褐色 焼土, 炭化物
- 2 にぶい赤褐色 ローム, 焼土
- 3 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 白色粘土ブロック
- 4 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土・白色粘土ブロック
- 5 極暗赤褐色 焼土・白色粘土粒子, 焼土ブロック
- 6 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物
- 7 暗赤褐色 ローム粒子
- 8 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 9 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック, 灰
- 10 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック



第210図 第115号住居跡・竈実測図

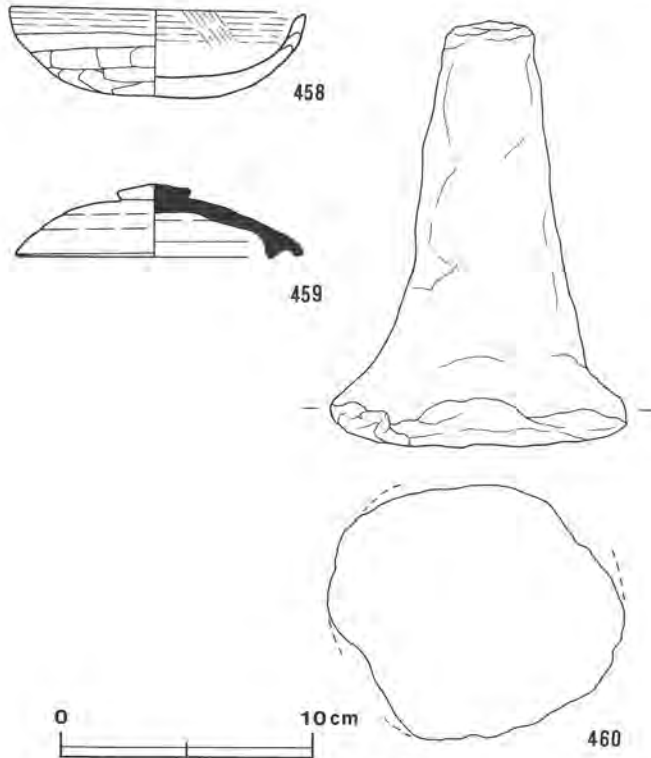
ある。

(竈) 北壁中央部を45cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落し、袖部だけが残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し、煙道部は焚口部から急角度で立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈付近から集中して、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・蓋・甕・灰釉陶器片)が出土している。458は土師器坏、459は須恵器蓋で竈の崩落土からの出土であり、これらは竈の構築時に使用されたものと考えられる。

(所見) 本跡は第108号住居跡を掘り込んで構築し、掘り込みの深い比較的遺存状態の良い住居跡である。遺構の形態・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。



第211図 第115号住居跡出土遺物実測図

第115号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第211図 458	坏 土師器	A 11.8 B 3.6	底部は丸底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。 底部・体部外面へラ削り。体部内面・口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 普通	100% 覆土

第115号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第211図 459	蓋 須恵器	A 11.5	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部はやや丸い。天井部と口縁部の境界に明瞭な稜を持つ。口縁部は下方方向に屈曲し、端部はやや丸い面をもつ。つまみは貼り付け。天井部から口縁部内外面水挽き整形。	砂粒・雲母 灰白色 普通	100% 覆土
		B 2.9			
		F 2.9			
		G 0.7			
図版番号	種 類	法量(cm)	器形の特徴	備 考	
460	支 脚	全長(17.3) 径 (11.9)	上部が細くなる。円柱状を呈す。上・下部は欠損している。	粘土塊から成形	

第116号住居跡（第212図）

（位置） 調査区の中央部，D5h₉区を中心に確認。

（重複） 第2号溝・第7号井戸と重複。

（規模と平面形） 5.3×5.0m（方形）。

（主軸方向） N-7°-W。

（壁） 壁高は28～30cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅30cm，深さ10～16cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈すが，北壁下には検出されない。

（床） 全体に凸凹しているが硬く踏み固められて堅緻である。

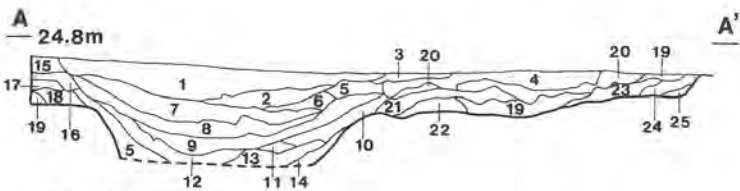
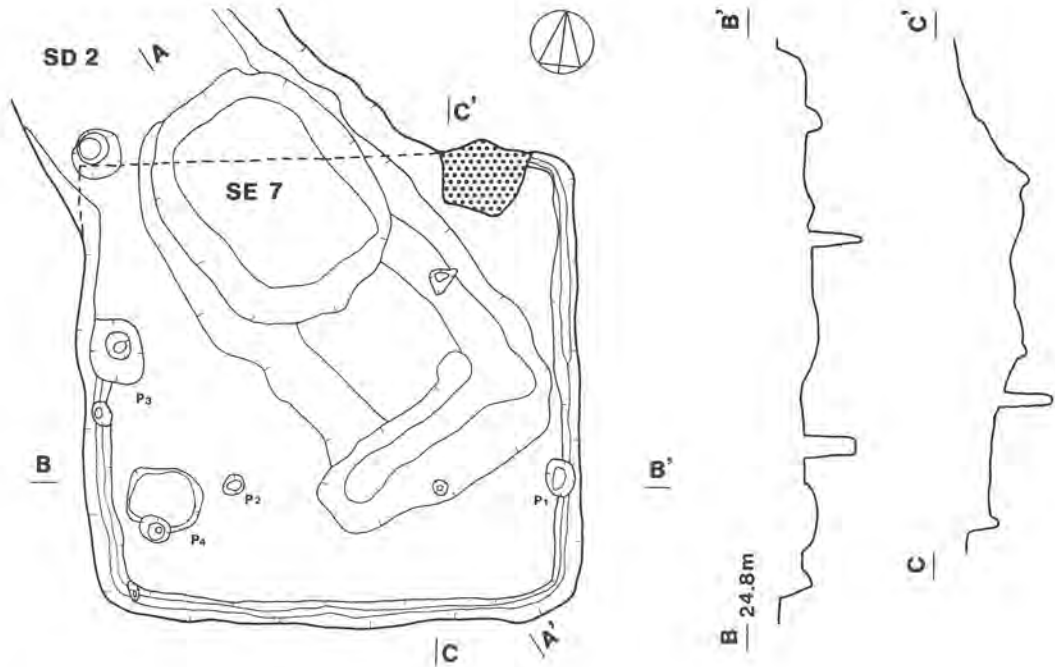
（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径20～28cm，深さ50cmを測る。

（竈） 北壁中央部のやや東側に位置し，壁を6cm程壁外に掘り込み，粘土・砂によって構築されている。本竈は溝・井戸によって掘り込まれ燃焼部と袖部の一部だけが残存している状態であるため，全容は不明であるが，袖部の内壁は，かなり焼土化している。

（覆土） 自然堆積。

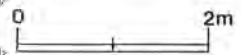
（遺物） 壁際の覆土上層・中層から土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）の破片と，手捏土器，支脚が出土している。

（所見） 本跡は第2号溝・第7号井戸の構築によって，北壁と床面を掘り込まれている状況であるが，遺構の形態・遺物等から判断して7世紀後半に比定される住居跡である。

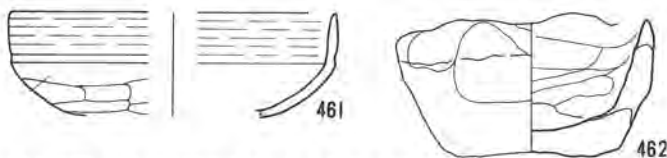


S I - 116 土層解説

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム・焼土粒子少 | 14 暗褐色 ローム粒子中, 粘土 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中, 焼土粒子少 | 15 明褐色 粘土 |
| 3 褐色 ローム粒子多, 粘土 | 16 暗褐色 ローム粒子多, ローム小・中ブロック多 |
| 4 明褐色 粘土 | 17 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック少 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少, 粘土 | 18 暗褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少 |
| 6 黒褐色 ローム・焼土粒子少 | 19 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック少 |
| 7 暗褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少, 焼土粒子少 | 20 褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック多 |
| 8 黒褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック, 焼土粒子少 | 21 暗褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少 |
| 9 黒褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック少 | 22 暗褐色 ローム粒子中, ローム小ブロック少 |
| 10 暗褐色 ローム粒子中, 粘土 | 23 黒褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子少 |
| 11 暗褐色 ローム・焼土粒子中 | 24 暗褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少 |
| 12 暗褐色 ローム粒子中, 粘土 | 25 黒褐色 ローム粒子多, ローム小ブロック少 |
| 13 暗褐色 ローム粒子中, ローム小・中ブロック少 | |



第212図 第116号住居跡実測図



第213図 第116号住居跡出土遺物実測図

第116号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第213図 461	坏 土 師 器	A (13.2) B (4.2)	底部は丸底。体部は内鬲気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直立する。体部外面へラ切り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 良好	30% 覆土
462	手捏土器 土 師 器	A 10.2 B 5.8 C 7.0	体部は内鬲気味に立ち上がる。体部内・外面指頭によるナデ。底部指ナデ整形。	砂粒・砂礫・長石 にぶい褐色 普通	80% 竈

第117A号住居跡（第214図）

（位置） 調査区の北東側，B8j₂区を中心に確認。

（重複） 第117A号<第117B号。

（規模と平面形） 5.5m×5.2mの方形。

（主軸方向） N-11°-W。

（壁） 壁高は78cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cm，掘り込み断面形状はU字状を呈して全周。

（床） 平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径50～70cm，深さ21～79cmを測り，全て支柱穴である。

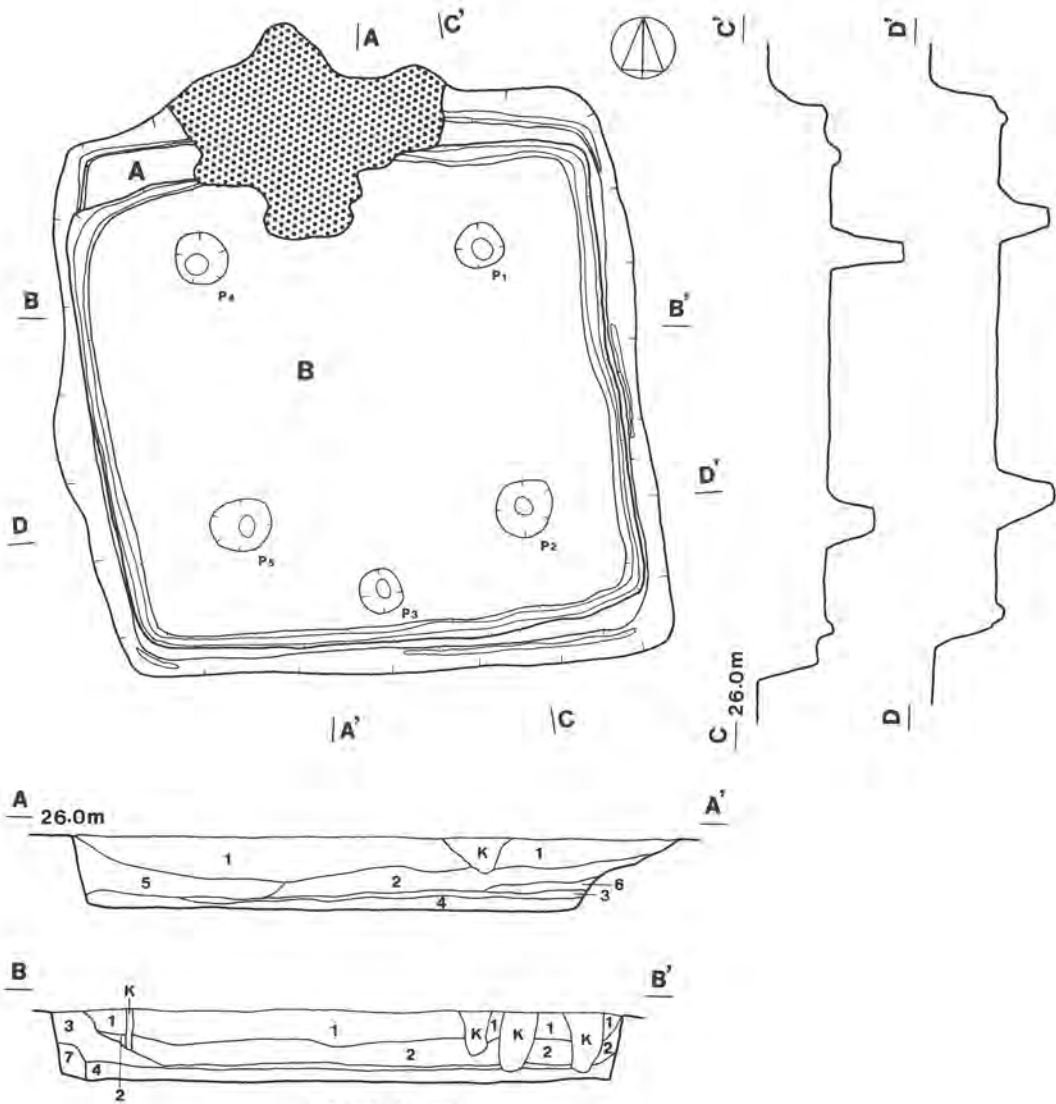
（竈） 本跡の竈は，重複する第117B号住居跡によって破壊され，床面にわずかに焼土と粘土・砂が，確認されただけである。

（覆土） 床面上10cmに第117B号住居跡の貼床が検出され本跡の状況を知り得るのは，わずか10cmの間層だけである。この間層には，黒色土・灰・焼土が推積している。

（遺物） 本跡からの遺物は，土師器・須恵器の土器細片が，間層から出土している。

（所見） 本跡は，第117B号住居跡と重複し，本跡の廃棄後（焼失家屋）に第117B号住居跡を構築している。竈は，第117B住居跡との重複により，焚口部と火床部の一部が残存し，全容は，確認できなかった。

本跡は，第117B号住居跡よりも古く，遺構の特徴や重複関係から9世紀前半に比定される住居跡である。

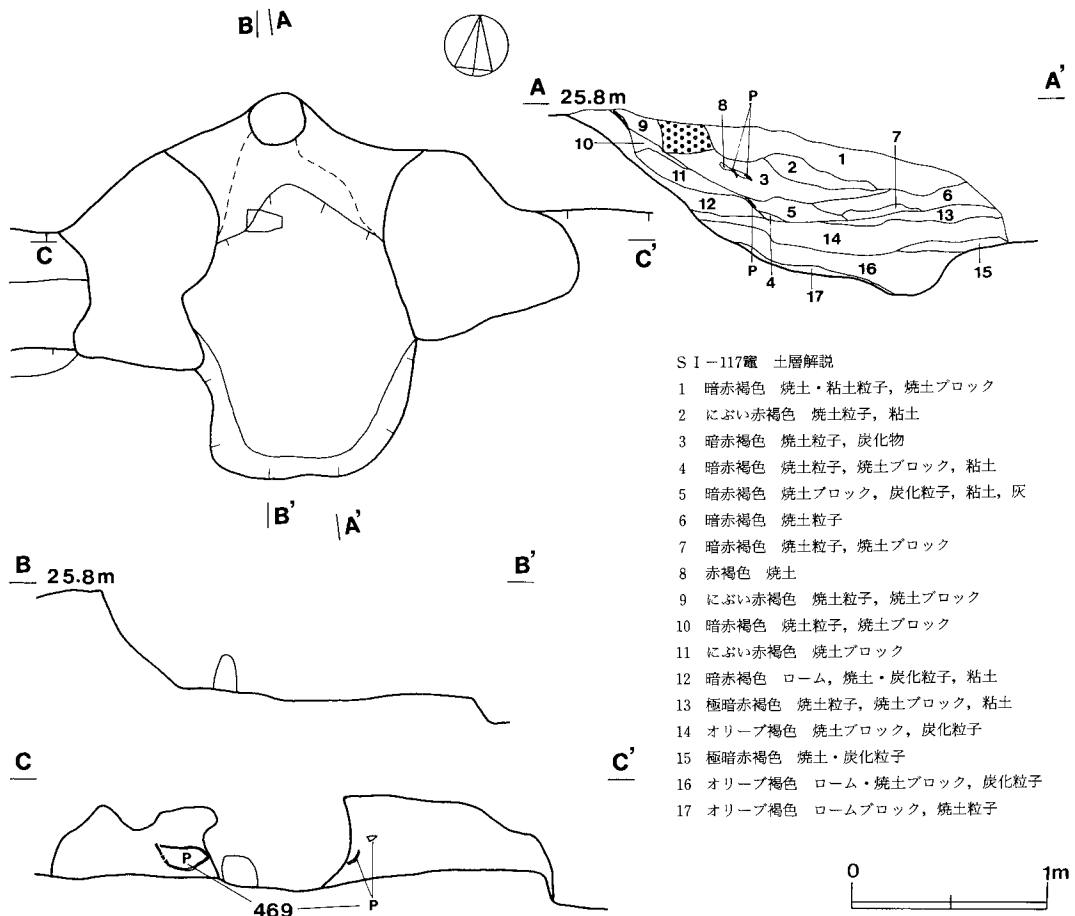


S [-117 土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土・白色粘土粒子, 焼土ブロック
- 2 暗赤褐色 ローム小・中ブロック, 焼土・白色粘土粒子
- 3 褐色 焼土・炭化・白色粘土粒子
- 4 におい赤褐色 ローム・焼土・白色粘土粒子, ローム小ブロック
焼土ブロック
- 5 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 6 におい赤褐色 焼土・炭化粒子
- 7 褐色 ローム粒子



第214図 第117 A・B号住居跡実測図



S I-117竈 土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土・粘土粒子, 焼土ブロック
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子, 粘土
- 3 暗赤褐色 焼土粒子, 炭化物
- 4 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック, 炭化粒子, 粘土, 灰
- 6 暗赤褐色 焼土粒子
- 7 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 8 赤褐色 焼土
- 9 にぶい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 10 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 11 にぶい赤褐色 焼土ブロック
- 12 暗赤褐色 ローム, 焼土・炭化粒子, 粘土
- 13 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土
- 14 オリーブ褐色 焼土ブロック, 炭化粒子
- 15 極暗赤褐色 焼土・炭化粒子
- 16 オリーブ褐色 ローム・焼土ブロック, 炭化粒子
- 17 オリーブ褐色 ロームブロック, 焼土粒子

第215図 第117B号住居跡竈実測図

第117B号住居跡 (第214図)

(位置) 調査区の北東側, B8j₂区を中心に確認。

(重複) 第117B号>第117A号。

(規模と平面形) 6.2×6.1mの方形。

(主軸方向) N-11°-W。

(壁) 壁高は60~70cmを測り, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 北壁, 南壁下でわずかに確認され, 幅20cm, 深さ6~8cm。掘り込み断面形状はU字状を呈す。

(床) 貼床。黒色土と褐色土混じりで, 硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは, 径50~70cm, 深さ21~79cmを測り, 全て支柱穴で, 本跡の支柱穴は, 第117A号の支柱穴を使用している。

(竈) 北壁中央部を壁外へ40cm程掘り込み, 粘土, 砂によって構築。天井部・袖部が残存して

遺存状態は良い。竈の内部は、火床部が焼土化し、焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から火床部・煙道部へかけての傾斜は緩く立ち上がり、煙出口付近で急角度で立ち上がっている。

(覆土) 自然推積

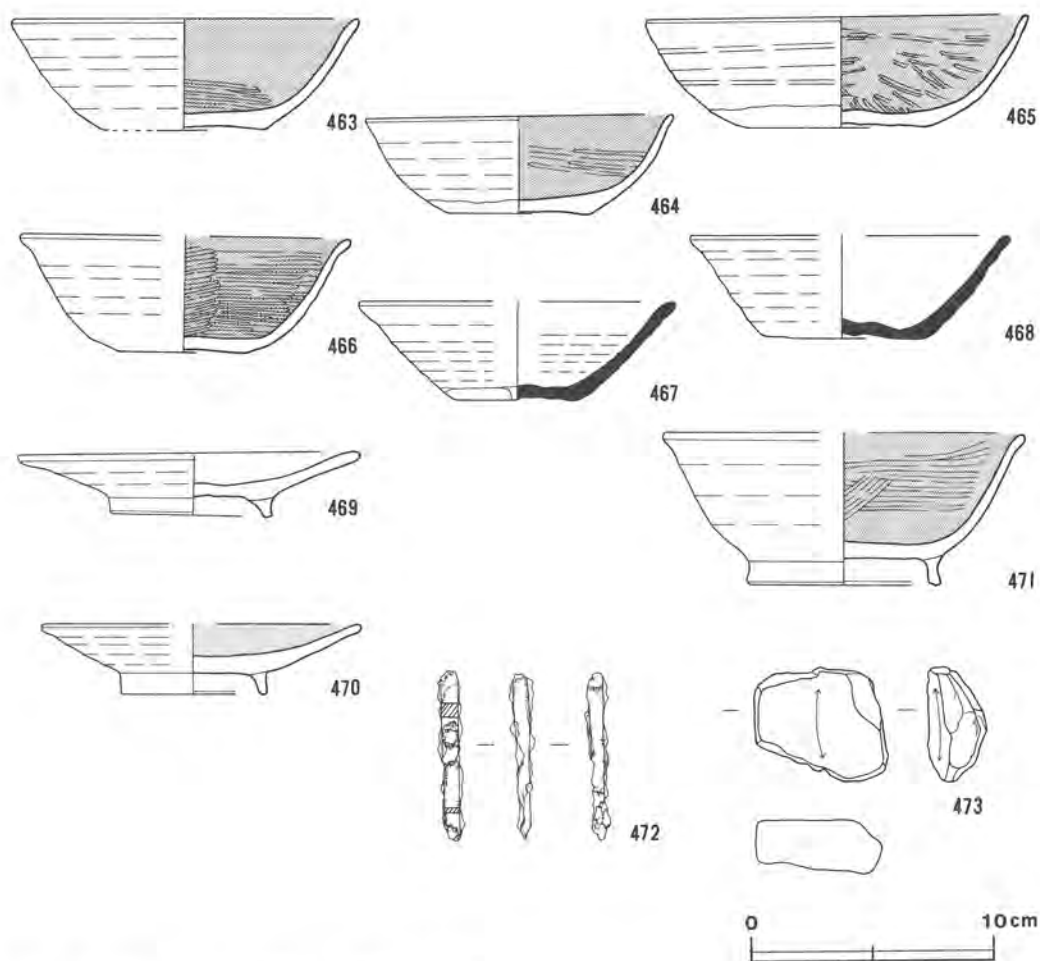
(遺物) 住居跡全体に散在し、土師器(坏・甕)須恵器(坏・高台付坏・甗)の破片が投棄された様相を呈して出土している。464は土師器坏, 469は高台付皿である。竈からは土師器甕片が袖部から逆位の状態で出土し、竈構築時に補強材として用いられた土器である。

(所見) 本跡は、第117A号住居跡の廃棄後(焼失家屋)北壁側で50cm, 東壁側で30cm, 南壁側で30cm, 西壁側で20cm程拡張し、床面は第117A号住居跡の床面より10cm上に、黒色土・ローム土を混ぜて貼床にして床を構築している。また支柱穴は5本柱であり、貼床面で確認された柱穴の位置と貼床を剥がし、第117A号住居跡の柱穴を確認した段階で、2軒とも同じ位置から検出された。これらの状況から、支柱穴は、第117A号住居跡の支柱穴とした柱穴痕を本跡が構築時に再使用していることが捉えられた。

本跡は第117A号住居跡よりも新しく、遺構の形態や重複関係、出土遺物から9世紀前半に比定される住居跡である。

第117B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 463	坏 土師器	A 14.3	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 良好	90% 内面黒色処理 覆土
		B 4.7			
		C (6.6)			
464	坏 土師器	A 12.8	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	90% 内面黒色処理 覆土
		B 4.2			
		C 6.0			
465	坏 土師器	A 15.7	体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。 体部内・外面水挽き後内面ヘラ磨き。 底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 良好	70% 内面黒色処理 覆土
		B 4.6			
		C 7.5			
466	坏 土師器	A (13.6)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。 体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。	砂粒 にぶい橙色 良好	20% 内面黒色処理 覆土
		B 4.8			
		C 5.2			
467	坏 須恵器	A (13.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 良好	40% 覆土
		B 4.1			
		C (5.2)			



第216図 第117B号住居跡出土遺物実測図

第117B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第216図 468	坏 須恵器	A (13.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部で小さく外反する。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色	50%	
		B 4.3				覆土
		C 6.7	体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	普通		
469	高台付皿 土師器	A 14.2	体部は直線的に開く。口唇部丸い。高台低く、「ハ」の字状に開く。	砂粒・砂礫・雲母 明赤褐色	80%	
		B 2.8				竈
		D 6.7	体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け。	普通		
		E 0.8				

第117B号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴		胎土・色調・焼成	備 考			
第206図 470	高台付皿 土 師 器	A (13.1) B 2.9 D 6.0 E 0.8	体部は直線的に開く。口唇部丸い。高台は垂下する。体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け。		砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	50% 内面黒色処理 覆土			
471	高台付坏 土 師 器	A (14.8) B 6.3 D 8.0 E 1.1	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に開く。体部内・外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け。		砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	50% 内面黒色処理 覆土			
図版番号	種 類	法量(cm)	器形の特徴	備 考	図版番号	種 類	法量(cm)	器形の特徴	備 考
472	不 明 鉄 製 品	全長(6.9) 幅 0.8 厚さ 0.6	断面が方形の棒状を呈している。 上・下端部欠損。		473	磁 石	全長 4.8 幅 5.5 厚さ 2.5 重さ 55.4g	長方形の磁石。側面は破損している。両面に使用痕が認められ、使い減りが顕著。	凝灰岩

第118号住居跡 (第217図)

(位置) 調査区の北東側、B8f₄区を中心に確認。

(規模と平面形) 6.6×5.9mの長方形。

(主軸方向) N-8°-W。

(壁) 壁高は60cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20~26cm、深さ10cm、掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床面) 中央部が窪むが、全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

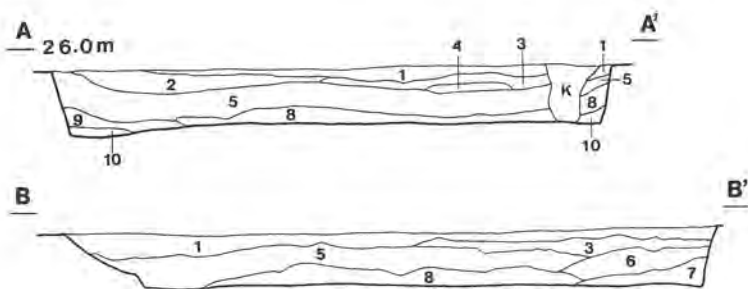
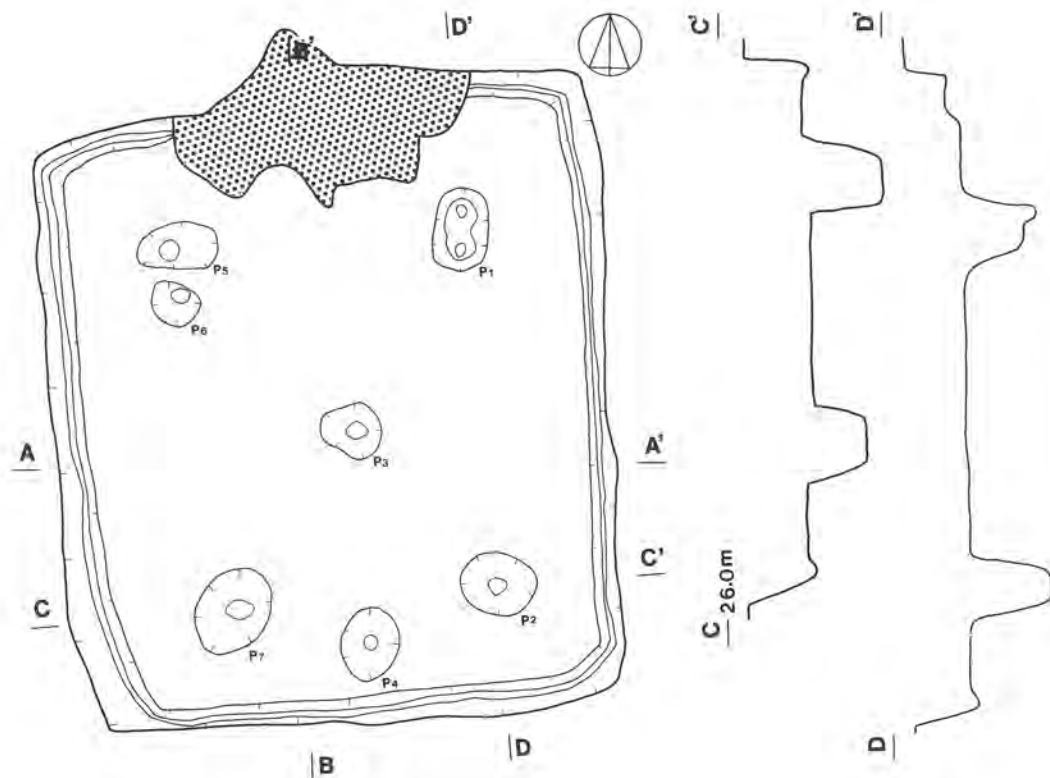
(ピット) 7か所(P₁~P₇)。掘り込みは、径60~80cm、深さ60~80cmを測り、支柱穴は5本である。

(竈) 北壁中央部を30cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し、焼土粒・炭化物が充填され、焚口部から煙道部へかけての傾斜は緩く立ち上がり、煙出口近くで急角度となっている。

(覆土) 人為堆積。

(遺物) 壁際から中央部にかけての覆土上層から中層にかけて投棄された状態で、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕・蓋)の破片が散在して出土している。特に須恵器片の出土量が多い。480は土師器甕で竈の袖部に用いられ、479は須恵器蓋で、竈からの流土に含まれて出土している状態から、これらは竈の補強材として用いられた土器と思われる。

(所見) 本跡は遺構の形態、出土遺物から判断して9世紀前半に比定される住居跡である。

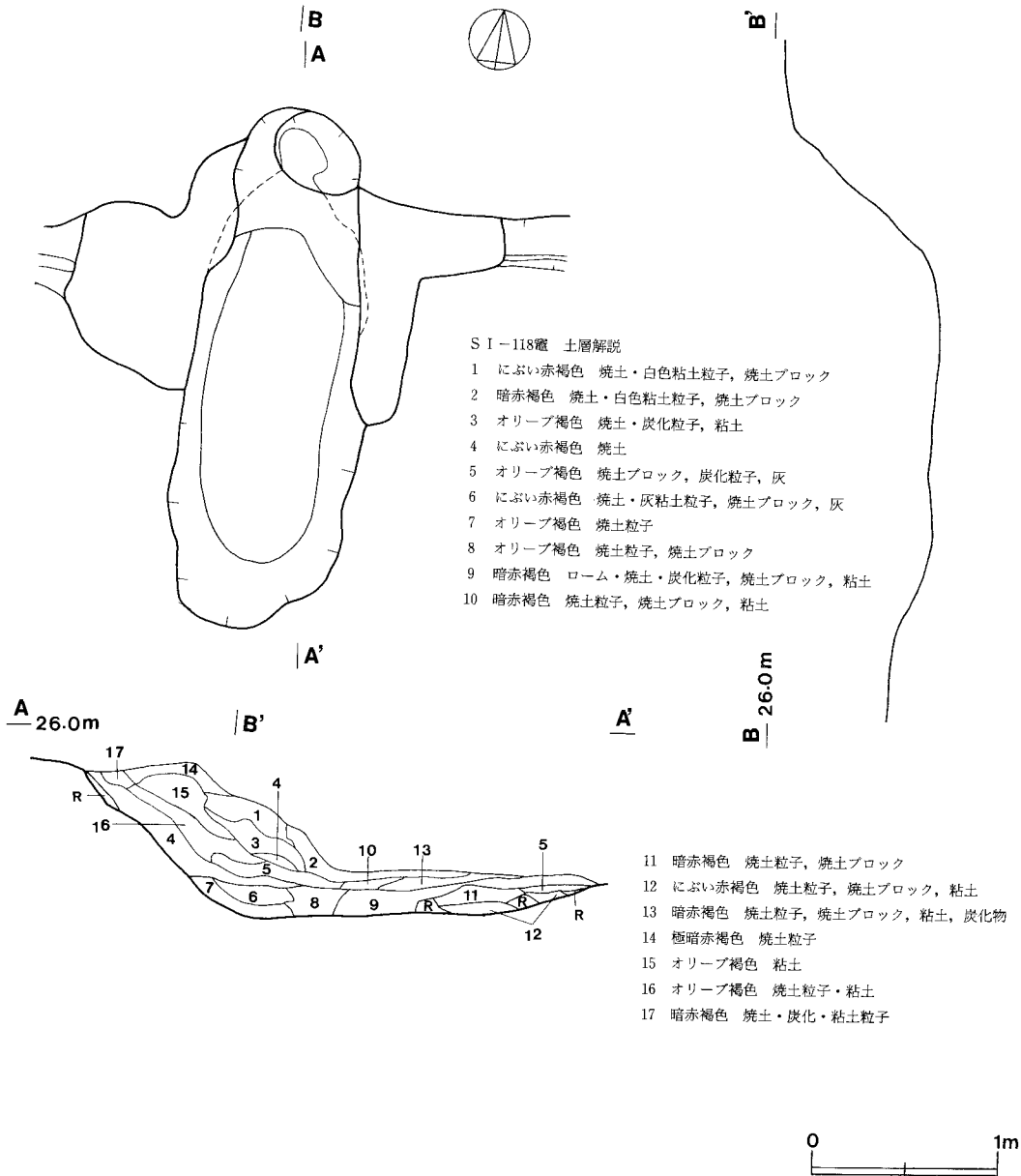


S1-118 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム大ブロック
- 2 褐色 焼土ブロック
- 3 褐色 ローム粒子, ローム中・大ブロック, 焼土ブロック
- 4 橙色 焼土
- 5 極暗赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子, 灰
- 6 暗褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
- 7 暗赤褐色 ローム・焼土粒子
- 8 褐色 ローム・焼土粒子, ローム中・大ブロック
- 9 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 10 暗赤褐色 ローム小ブロック



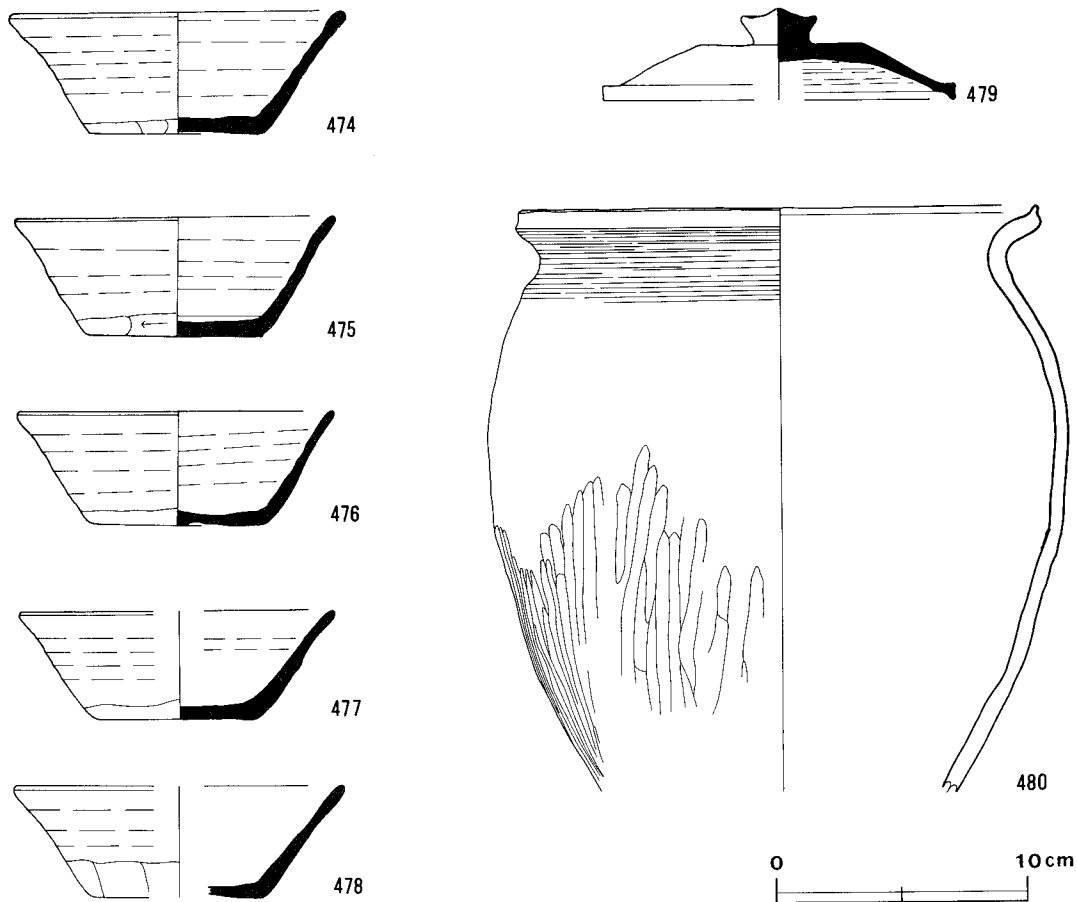
第217図 第118号住居跡実測図



第218図 第118号住居跡竈実測図

第118号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 474	坏 須恵器	A 13.2	体部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり, 口唇端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫 黄灰色 普通	70% 覆土
		B 5.0			
		C 6.8			
475	坏 須恵器	A 12.8	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 普通	80% 覆土
		B 4.9			
		C 6.7			



第219図 第118号住居跡出土遺物実測図

第118号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 476	坏 須恵器	A 12.7	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 紫灰色 普通	60% 覆土
		B 4.7			
		C 7.0			
477	坏 須恵器	A (12.5)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	60% 覆土
		B 4.4			
		C 6.4			
478	坏 須恵器	A (13.2)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へら切り。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	20% 覆土
		B 4.5			
		C (6.8)			
479	蓋 須恵器	A (14.0)	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみがつく。天井中心部は平坦で、口縁部は下方向に屈曲し、端部はやや尖る。 天井中心部へら削り。天井部から口縁部内・外面水挽き整形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	60% 竈
		B 3.7			
		F 3.0			
		G 1.5			

第118号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 480	甕 土師器	A 20.6 B (23.6)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、上位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 におい橙色 普通	60% 甕

第119号住居跡 (第220図)

(位置) 調査区の北東側, B8e₆区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.0×3.0mの方形。

(主軸方向) N-11°-E。

(壁) 壁高は東・南・北壁50cm, 西壁60cmを測り, 垂直に立ち上がる。

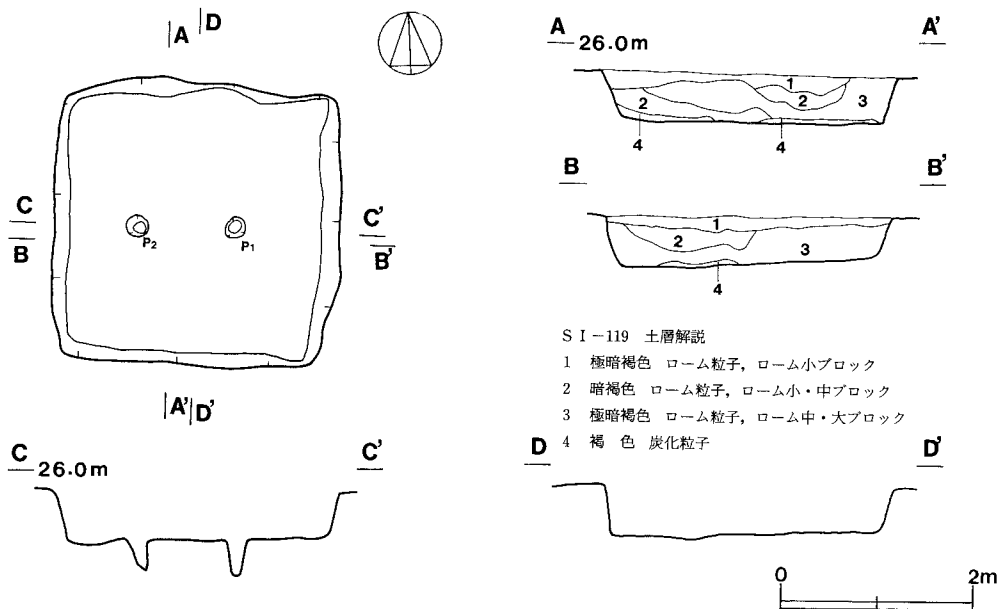
(床面) 平坦で柱穴付近は特に堅緻であり, 硬く踏み固められている。

(ピット) 2か所 (P₁・P₂)。掘り込みは, 径20cm, 深さ30~40cmを測り, いずれも支柱穴である。

(覆土) 人為堆積。

(遺物) 覆土上層から, 土師器 (甕), 須恵器 (坏・甕) の小片が流れ込みの様相を呈して出土し, 本跡に伴う遺物ではない。

(所見) 本跡は小竪穴住居跡であり12世紀に比定される住居跡である。



第220図 第119号住居跡実測図

第120号住居跡（第221図）

（位置） 調査区の北東側，B8e₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.0×4.3mの方形。

（主軸方向） N-9°-E。

（壁） 壁高40cm，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径50cm，深さ40～60cmを測る。支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄・P₅の5本である。

（竈） 北壁中央部を壁外へ45cm程掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落し，袖部だけが残存し馬蹄形を呈する。火床部は焼土化し，焚口部から煙道部へかけての傾斜は緩く立ち上がり，煙出口近くで急角度で立ち上がる。

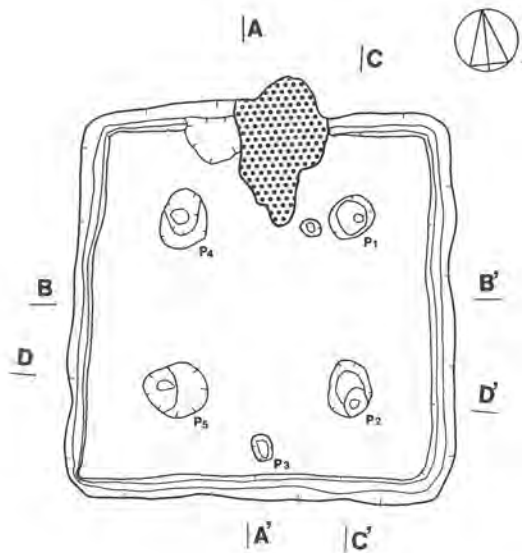
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡の甕付近や中央部・壁付近の主に覆土中層・下層から土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕・蓋）の破片が散在して出土している。482は土師器坏，484は須恵器坏で北壁コーナー付近の床面直上から出土している。

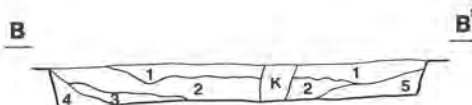
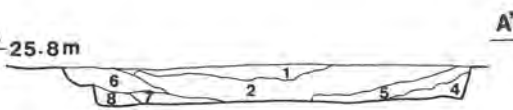
（所見） 本跡は，遺構の形状・遺物から判断して8世紀後半に比定される住居跡である。

第120号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第222図 481	坏 土師器	A (10.2)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は小さく外反する。 対部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 良好	40% 内面黒色処理 墨書アリ。解説不明
		B 2.9			
		C (5.8)			
482	坏 土師器	A 14.4	底部は扁平な丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもち，口縁部は直立気味に立ち上がる。 体部ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい赤褐色 良好	70% 床面
		B 4.9			
483	坏 土師器	A (10.6)	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもち。口縁部は小さく外反し，端部は丸味をもつ。 体部ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 明赤褐色 良好	40% 覆土
		B 4.0			
484	坏 須恵器	A 14.5	底部は丸底。体部は外反気味に立ち上がり，端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	80% 覆土
		B 4.7			
485	転用砥石 須恵器	径 9.2	須恵器甕底部を転用した砥石。使用痕跡は，両面・側面に摩耗痕が認められる。	砂粒・砂礫・雲母 明褐色 良好	覆土
		厚さ 1.1			



25.8m

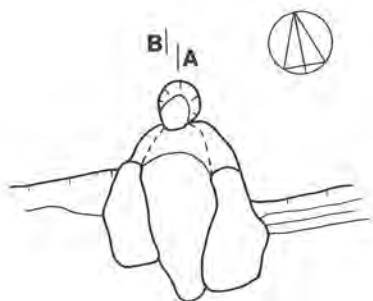
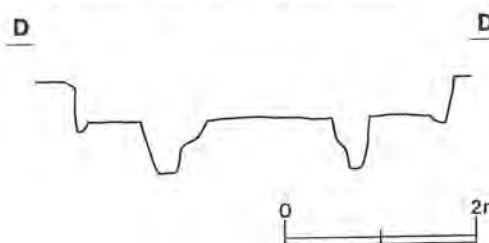


SI-120 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子
- 2 黒褐色 ローム小〜大ブロック, 焼土・炭化粒子
- 3 褐色 ローム小ブロック
- 4 暗褐色 ローム小・中ブロック, ローム粒子
- 5 暗褐色 ローム粒子
- 6 暗赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 7 暗褐色 粘土粒子, 粘土ブロック
- 8 黒褐色 ローム小ブロック, 焼土粒子, 炭化物



25.8m



B | A



B'

A'

25.8m



25.8m

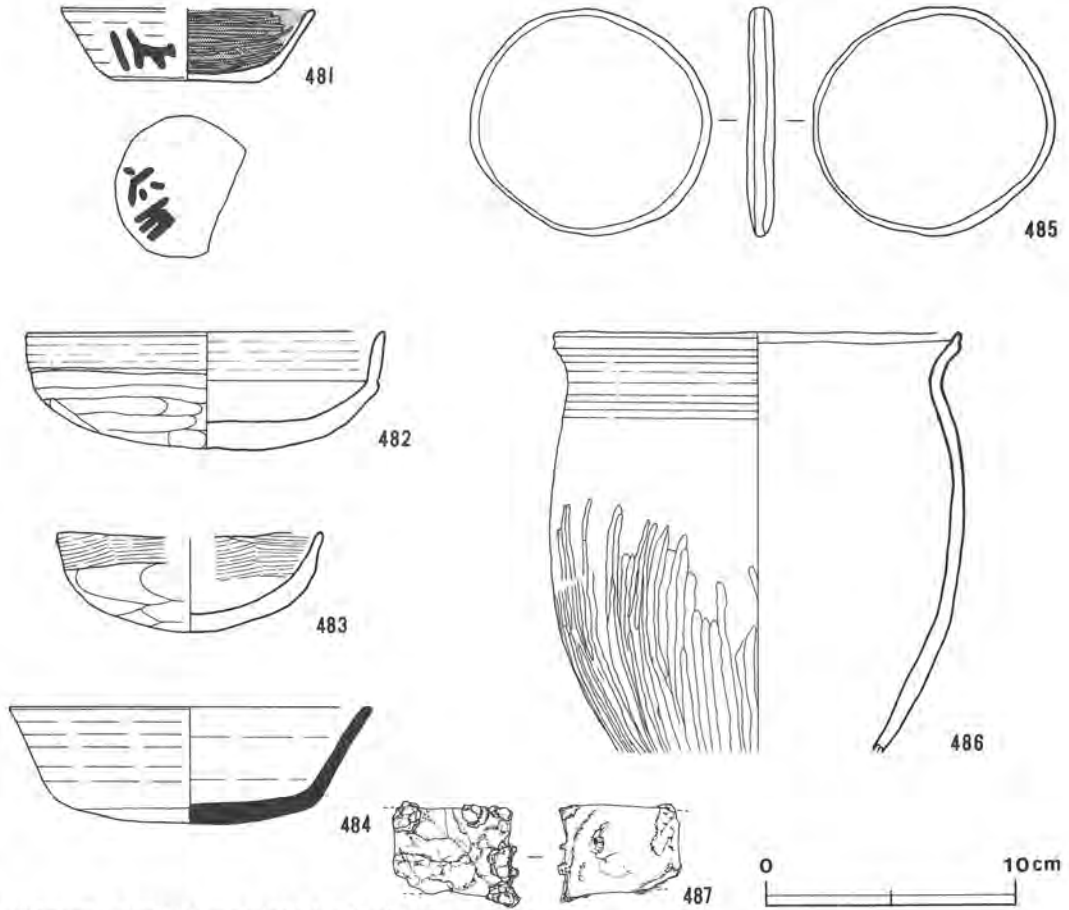


SI-120竈 土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム・白色粘土粒子, 白色粘土ブロック
- 2 暗赤褐色 白色粘土粒子
- 3 極暗赤褐色 焼土・白色粘土粒子, 白色粘土ブロック
- 4 暗赤褐色 炭化・白色粘土粒子, 白色粘土ブロック
- 5 赤褐色 焼土, 粘土, 砂礫
- 6 暗赤褐色 白色粘土粒子, 焼土・白色粘土ブロック
- 7 褐色 炭化・白色粘土粒子, 焼土ブロック
- 8 暗褐色 炭化・焼土粒子

0 1m

第221図 第120号住居跡・竈実測図



第222図 第120号住居跡出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考
第222図 486	甕 土師器	A 16.2	底部欠損。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。		砂粒・砂礫・長石にふい橙色普通	90% 床面
		B (16.8)				
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考		
487	鎌	全長(4.6) 幅 3.6	刃部の一部。 錆による腐蝕が著しく、現存断面は長方形を呈する。			

第121号住居跡（第223図）

（位置） 調査区の北東側，B8g₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.0m×2.8mの方形。

（主軸方向） N-40°-E。

（壁） 壁高40cm，垂直に立ち上がる。

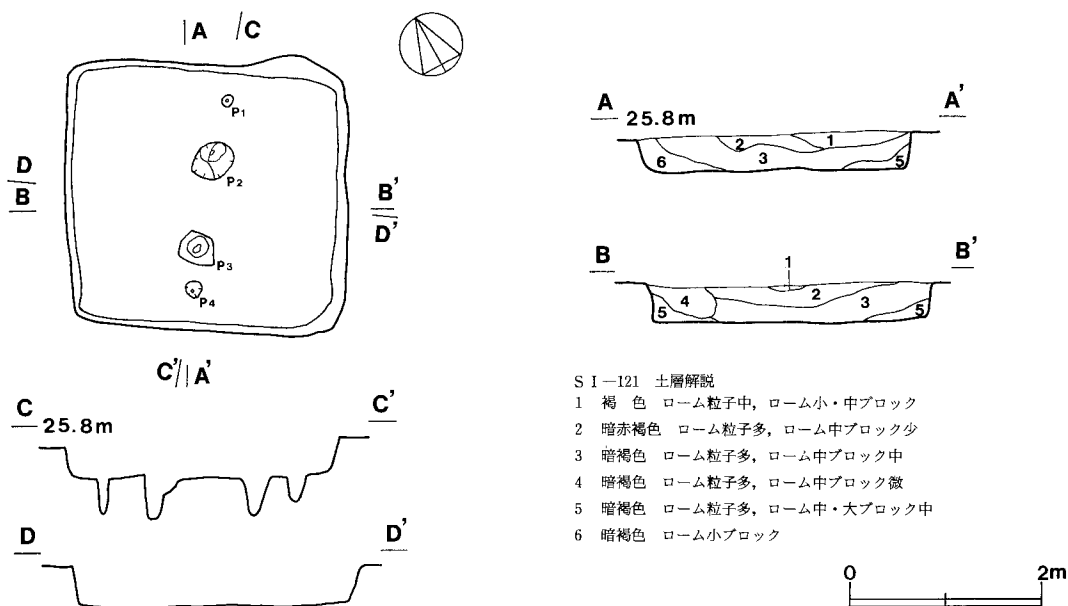
（床） 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径30～40cm，深さ40～50cm，支柱穴はP₂・P₃の2本である。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から土師器（甕），須恵器（甕）の破片が流れ込みの様相を呈して出土しており，本跡に伴うものではない。

（所見） 本跡は，小竪穴住居跡であり，遺構の形態から12世紀に比定される住居跡である。



第223図 第121号住居跡実測図

第122号住居跡（第224図）

（位置） 調査区の北東側，B8i₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.3×4.1mの方形。

（主軸方向） N-16°-W。

（壁） 壁高は60cmで垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅14cm，深さ6cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径30cm，深さ50～56cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落し，袖部だけが残存し馬蹄形を呈す。火床部は焼土化し，焚口部から煙道部へかけての傾斜は緩く，煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

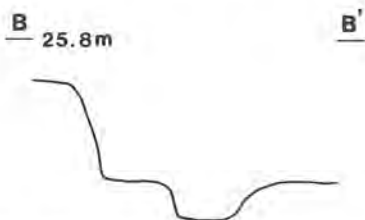
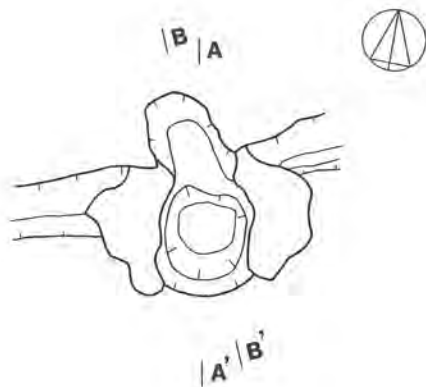
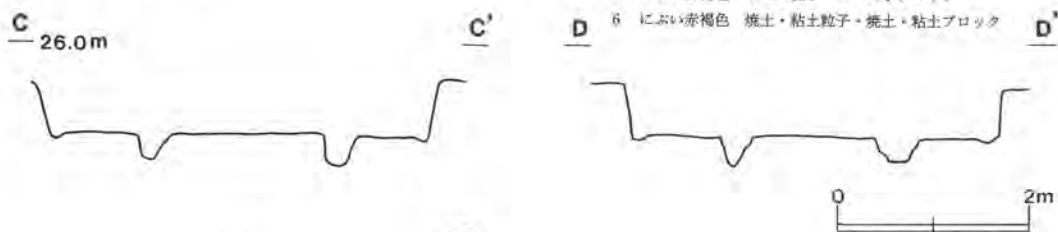
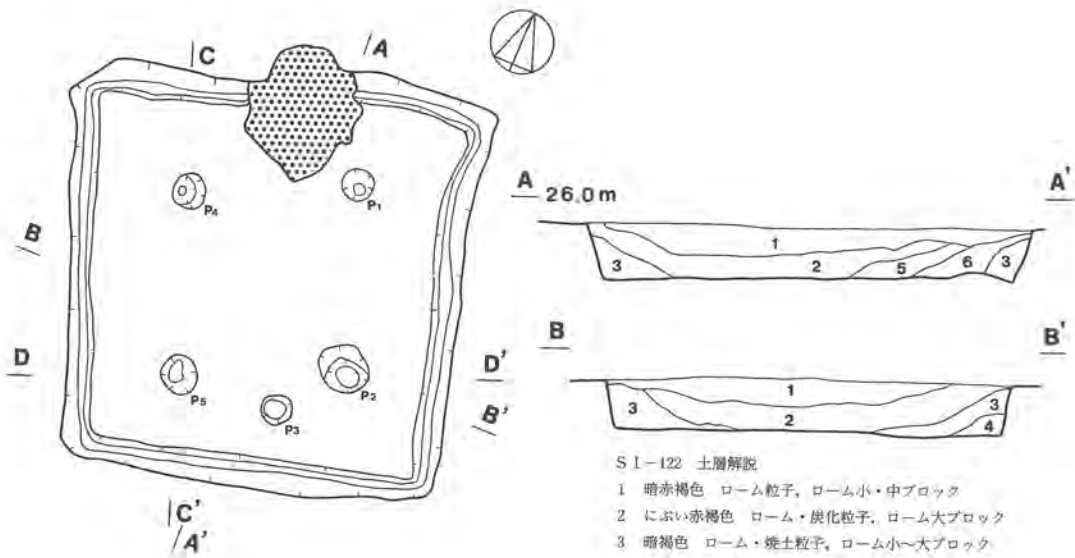
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 住居跡の覆土下層から土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片が数点と刀子片が出土しているが，本跡に伴うものは少なく，大部分は流れ込みや投棄された物である。489は，刀子片であり，西壁付近の床面直上から出土している。

（所見） 本跡は，本跡に伴う遺物が検出されない状況から本跡の時期は不明である。

第122号住居跡出土遺物解説表

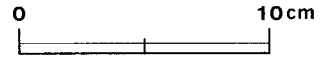
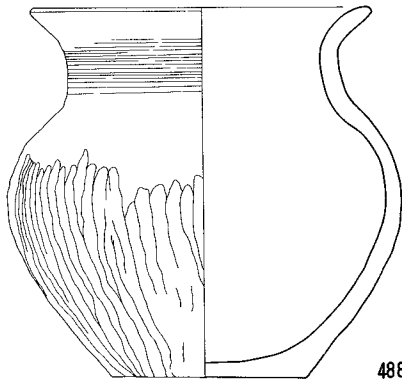
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第225図 488	小型甕 土師器	A (14.0)	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，中位に最大径を有す。口頸部は，「く」の字状に屈曲し，口縁端部は丸く，外反する。 胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい黄褐色 不良	80% 覆土
		B 15.4			
		C 8.0			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
489	刀子	全長(7.3) 刃幅 1.7 刃長(7.3)	茎部欠損。 刃部は断面V字状を呈する。		



- SI-122竈 土層解説
- 1 暗赤褐色 ローム粒子
 - 2 暗赤褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
 - 3 極暗赤褐色 ローム粒子
 - 4 暗赤褐色 ローム, 焼土粒子
 - 5 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 灰
 - 6 暗赤褐色 ローム小ブロック, 白色粘土粒子
 - 7 極暗褐色 ローム粒子, ローム中ブロック
 - 8 極暗赤褐色 ローム・焼土・木炭粒子, ローム小ブロック
 - 9 にぶい赤褐色 ローム・焼土ブロック, 焼土粒子
 - 10 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 11 にぶい赤褐色 焼土・粘土粒子
 - 12 極暗赤褐色 ローム・焼土ブロック, 焼土・炭化粒子
 - 13 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
 - 14 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
 - 15 暗褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック



第224図 第122号住居跡・竈実測図



第225図 第122号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡（第226図）

（位置） 調査区の北東側，B8h₉区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.1×3.1mの方形。

（主軸方向） N-27°-E。

（壁） 壁高は20cm，外傾して立ち上がる。

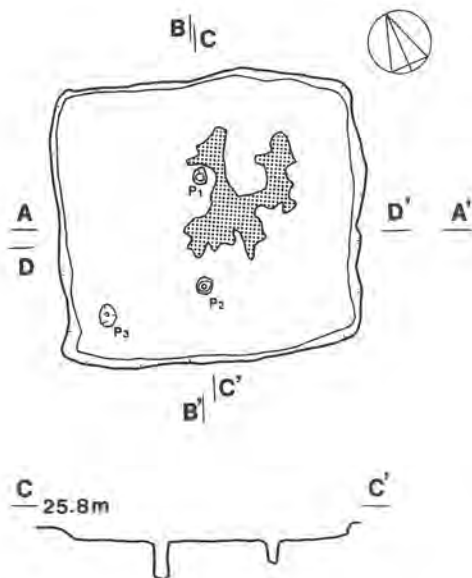
（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 3か所（P₁～P₃）。掘り込みは，径20cm，深さ20～40cmを測る。支柱穴はP₁・P₂の2本である。

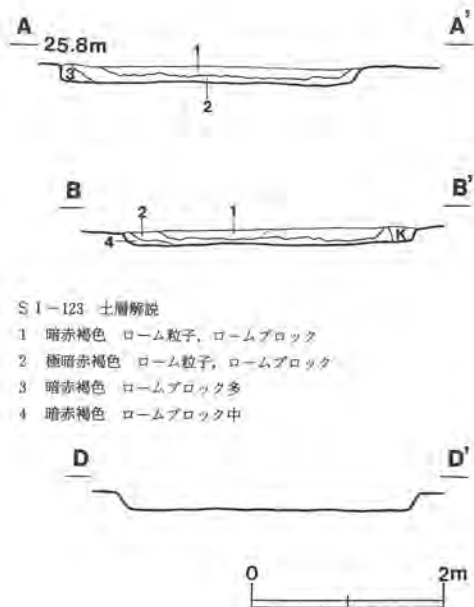
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物は少なく，土師器（甕）・須恵器（坏・甕）の破片が覆土上層から散在して出土しているがいずれも流れ込みであり，本跡に伴うものではない。490は，古銭で覆土下層から出土している。

（所見） 本跡は，小竪穴住居跡であり，遺構の形態から12世紀に比定される住居跡である。



第226図 第123号住居跡実測図



490

第227図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	器形の特徴	備考
第227図 490	銭	古銭「元豊通宝」である。	

第124号住居跡 (第228図)

(位置) 調査区の北側, A9j₁区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.2×2.8mの方形。

(主軸方向) N-11°-W。

(壁) 壁高は50cm, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅18cm, 深さ8~10cm, 掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

(床) 中央部は凸凹しているが, 全体に平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 3か所 (P₁~P₃)。掘り込みは, 径30cm, 深さ20cmを測り, 全て主柱穴である。

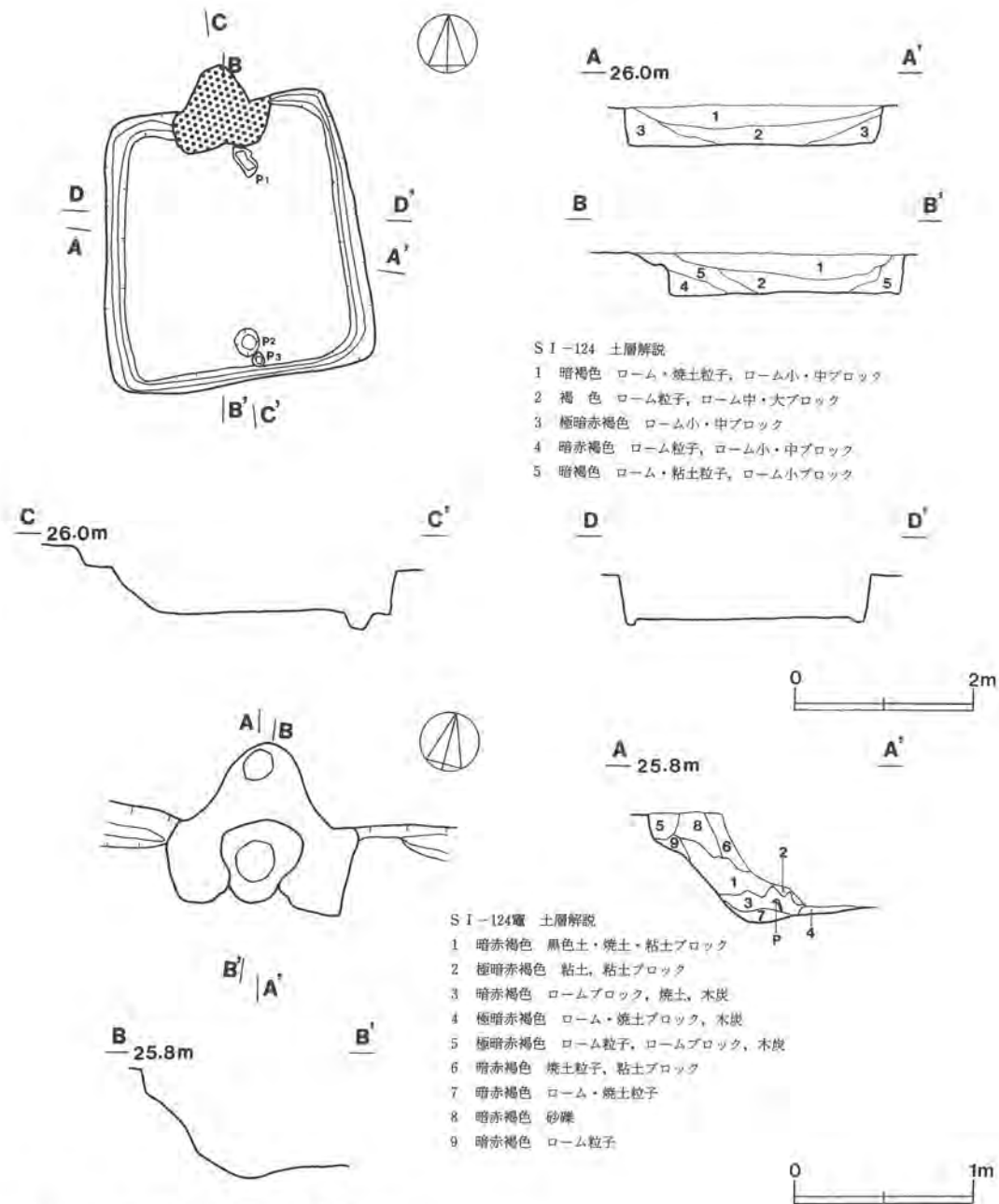
(竈) 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く, 天井部は崩落し, 袖部が残存し馬蹄形を呈する。火床部は焼けて赤化し, 焚口部から煙道部へかけての

傾斜は緩く、煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土中層から土師器(甕), 須恵器(坏)の破片が少量出土している。

(所見) 本跡は, 本跡に伴う遺物が検出されない状況から本跡の時期は不明である。



第228図 第124号住居跡・竈実測図

第125号住居跡（第229図）

（位置） 調査区の北側，B8c₀区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.1×4.0mの方形。

（主軸方向） N-10°-W。

（壁） 壁高は40cm，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10～16cm，深さ8～10cm，掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

（床） 平坦で，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径30cm，深さ30～40cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部の残存状態は良い。火床部は焼土化して，焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から煙道部へかけての傾斜は緩く立ち上がり，煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

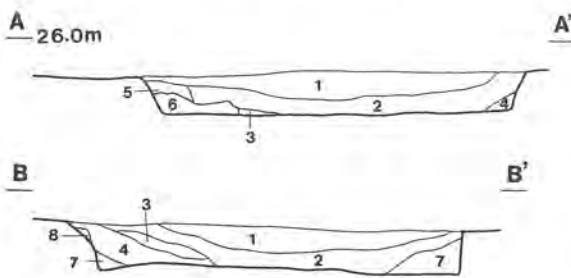
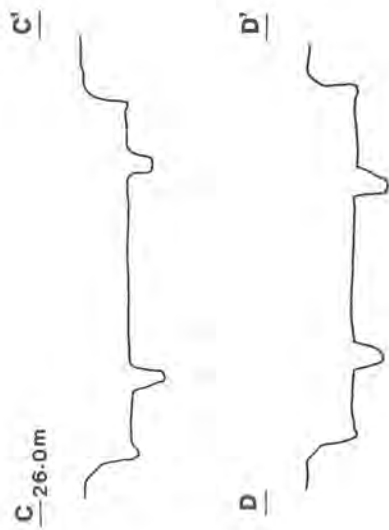
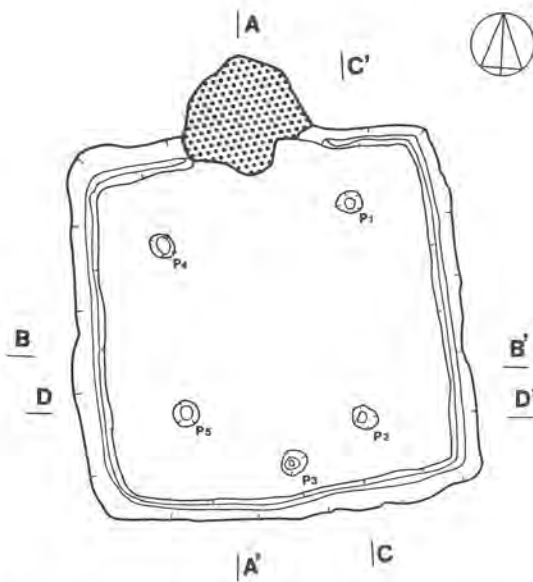
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土中層から土師器（甕），須恵器（坏・蓋・甕）の破片が散在して出土している。土師器甕片は，竈の天井部に補強材として用いられた状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形状・遺物から判断して，8世紀後半に比定される住居跡である。

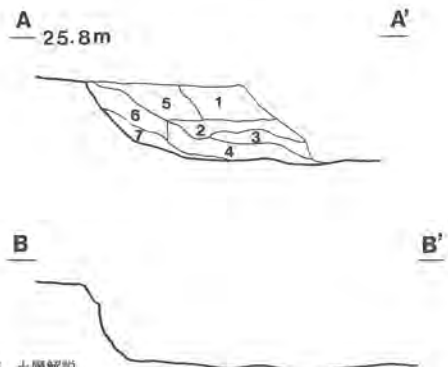
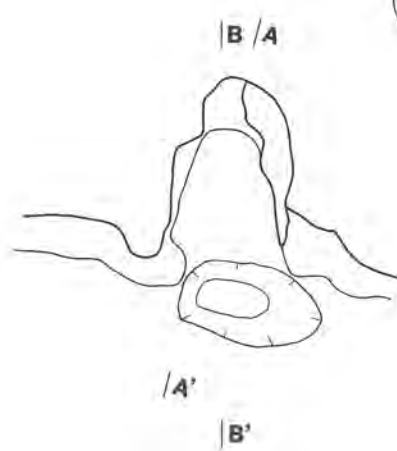
第125号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第230図 491	坏 土師器	A (14.4)	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境に稜をもち，口縁部は外反する。 体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 暗褐色 普通	60% 覆土
		B 5.2			
492	坏 須恵器	A (15.0)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部で小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。周辺へラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	40% 覆土
		B 4.8			
		C (8.0)			
493	転用硯 須恵器	径 14.4 厚さ 1.6	外縁の内側にU字形の海が若干残存するが，外縁部を壊 わし磨っている。内側に径12cmの陸をもつ。 脚部はなく，硯部だけである。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 良好	床面



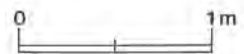
S I - 125 土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック
- 2 極暗赤褐色 ローム粒子, ローム小〜大ブロック
- 3 暗赤褐色 ローム粒子
- 4 黒褐色 ローム・炭化粒子, 炭化物
- 5 褐色 粘土粒子, 粘土ブロック, 砂礫
- 6 暗赤褐色 ローム小ブロック, 粘土ブロック
- 7 暗褐色 ローム粒子
- 8 褐色 地山

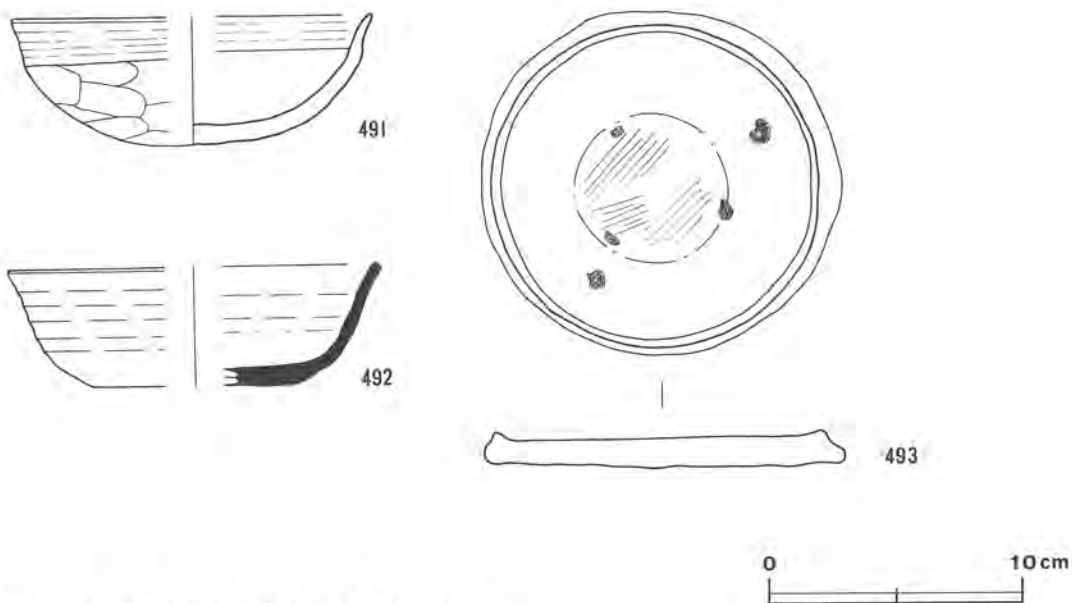


S I - 125電 土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 2 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 砂粒
- 3 暗赤褐色 焼土粒子, 酸化鉄
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 酸化鉄
- 5 によい赤褐色 ローム・焼土粒子
- 6 極暗赤褐色 焼土・炭化, 焼土ブロック
- 7 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック



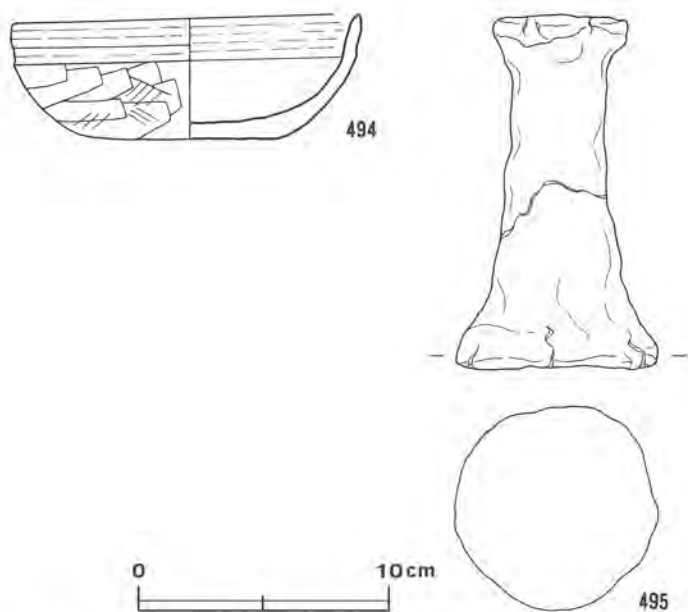
第229図 第125号住居跡・竈実測図



第230図 第125号住居跡出土遺物実測図

第127号遺構 (第231図)

本跡は、遺構確認の段階で竪穴住居跡として捉えたが、調査の結果、土層堆積状況・形態等から住居跡としてとらえることは不可能であった。



第231図 第127号遺構出土遺物実測図

第127号遺構出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 494	坏 土師器	A (14.0)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	70% 覆土
		B 5.0			
		C 6.8			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
495	支脚	全長 14.3 径 8.2	上部が細くなる円柱状を呈す。	粘土塊から成形。	

第129号住居跡 (第232図)

(位置) 調査区の北側, B7i₈区を中心に確認。

(壁) 壁高は36cm, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅14cm, 深さ6cm, 掘り込み断面形状はL状を呈している。

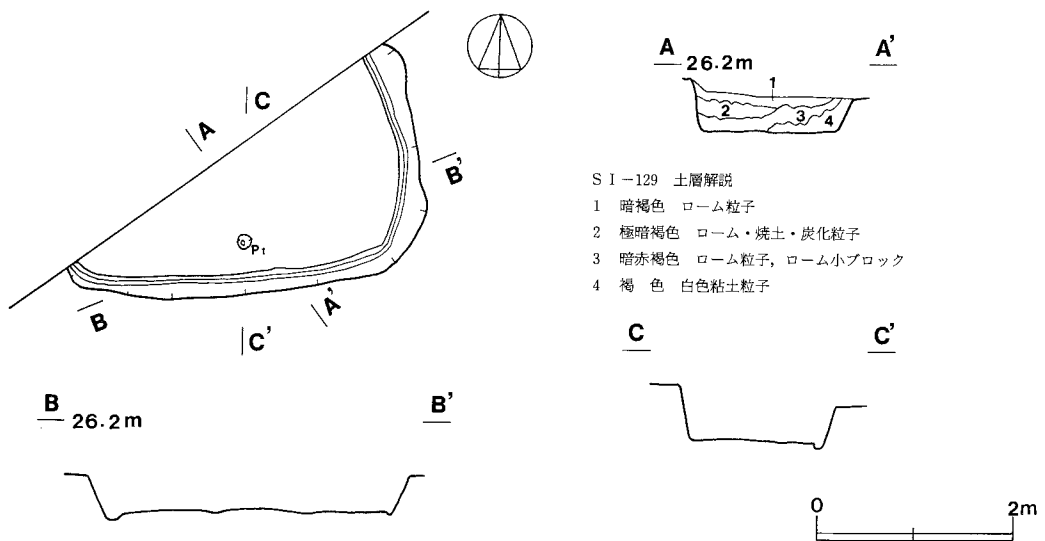
(床) 全体に凸凹しているが, 硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 1か所 (P₁)。掘り込みは, 径18cm, 深さ5cmで支柱穴としては捉えられない。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 遺物の出土量は少なく, 覆土中層から土師器 (甕), 須恵器 (甕) の破片が散在して出土しているが, 本跡に伴う遺物かどうかは不明。

(所見) 本跡は, 北側が調査区域外で, 本跡の1/3程度しか調査ができなかった状況から, 全容を把握することは困難であり, 本跡の時期は不明である。



第232図 第129号住居跡実測図

第130号住居跡（第233図）

（位置） 調査区の西側，E4b₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.4×3.0mの方形。

（主軸方向） N-10°-W。

（壁） 壁高30cm，垂直に立ち上がる。

（床） 平坦で，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 2か所（P₁・P₂）。掘り込みは，径20cm，深さ29cm，本跡に伴うものではない。

（竈） 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し，焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から煙道部への傾斜は緩く立ち上がり，煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

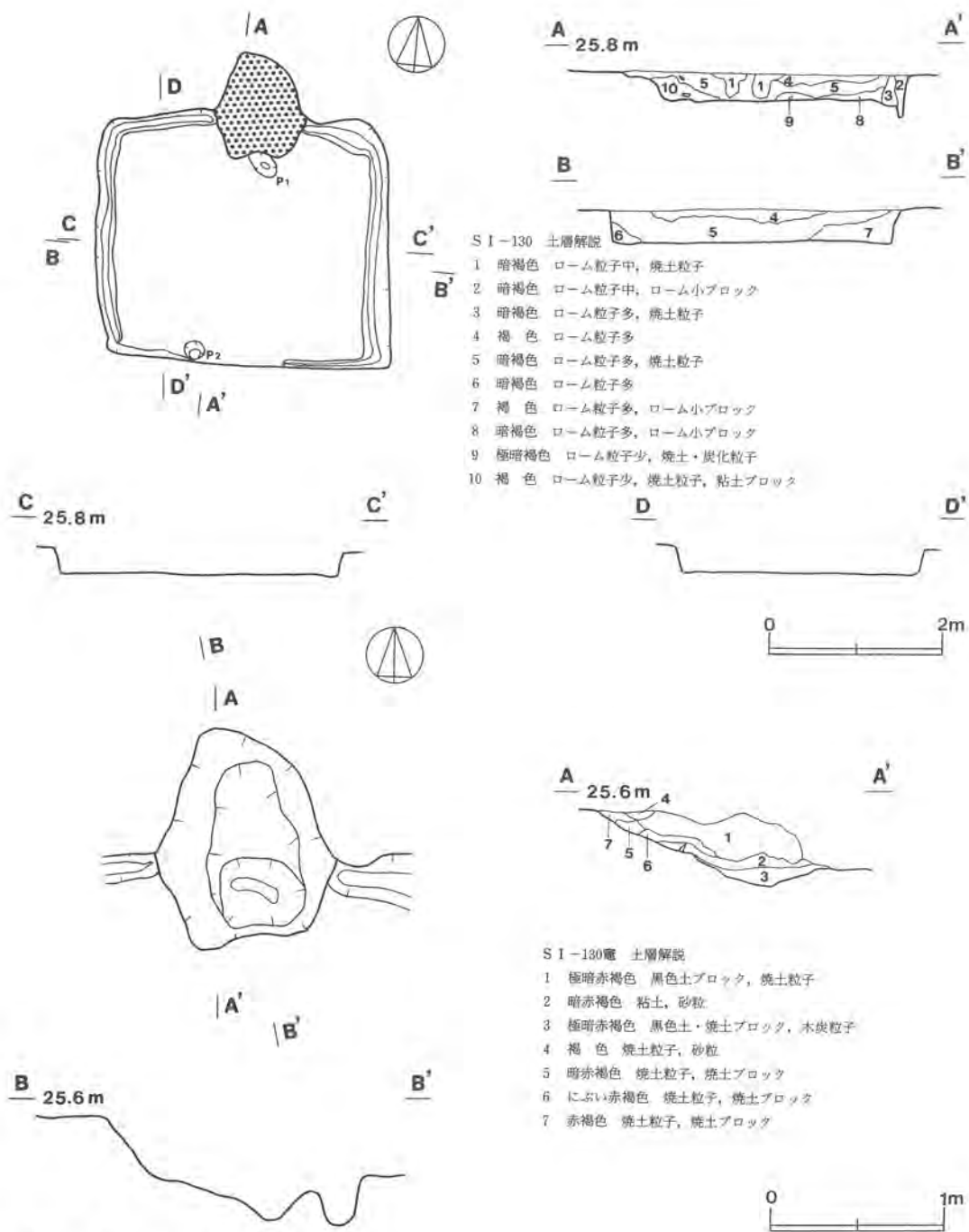
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物の出土は少なく，土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕）の破片であるが，竈内からの出土が多くみられる。497は，須恵器高台付碗，498は，長頸壺で竈天井部の補強材として用いられた状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形状・遺物から判断して10世紀前半に比定される住居跡である。

第130号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第234図 496	坏 須恵器	A 12.6	体部から口縁部は外反気味に立ち上がり，口縁端部は小さく折れる。 底部へラ切り。周辺へラ削り。体部内・外面水挽き整形。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 普通	70% 覆土
		B 4.1			
		C 7.0			
497	高台付碗 須恵器	A 10.4	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に開く。体部内・外面水挽き整形。底部回転へラ切り。高台貼り付け。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	90% 覆土
		B 4.1			
		D 6.2			
		E 0.5			
498	長頸壺 須恵器	A 9.8	頸部は上位ほど外反度が増す。口縁部は下方向に広がるが，端部は立ち上がる。 粘土紐巻き上げ。内・外面水挽き横ナデ整形。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	20% 竈
		B (5.9)			



第233図 第130号住居跡・竈実測図



第234図 第130号住居跡出土遺物実測図

第131号住居跡（第235図）

（位置） 調査区の西側，E4b_s区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.9×3.3mの長方形。

（主軸方向） N-15°-W。

（壁） 壁高30～40cm，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cm，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 全体に凸凹し窪むが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径20～30cm，深さ13～18cmを測り，全て主柱穴である。

（竈） 北壁中央部から東側に位置し，壁を50cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂で構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し，焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から煙道部への傾斜は緩く立ち上がり，煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

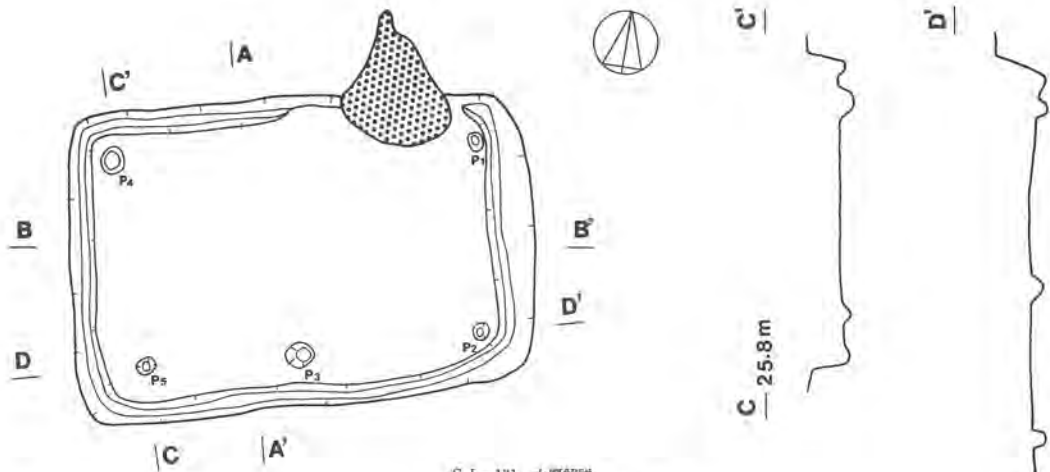
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈周辺，住居跡の中央部付近から土師器（坏・高台付坏・甕），須恵器（甕・甔）の破片が集中して出土している。東壁際からは鎌が出土している。

（所見） 本跡は，住居跡の形状・竈の付設された場所や出土遺物から，10世紀前半に比定される住居跡である。

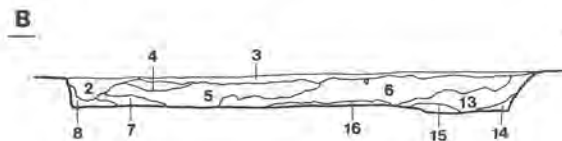
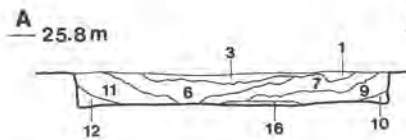
第131号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第236図 499	坏 土師器	A (13.0)	体部は直線的に立ち上がり，口縁端部で外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 良好	30% 覆土
		B 4.4			
		C (6.6)			
500	坏 土師器	A 13.1	体部は直線的に立ち上がり，口縁部は外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい褐色 普通	60% 竈
		B 4.2			
		C 7.2			

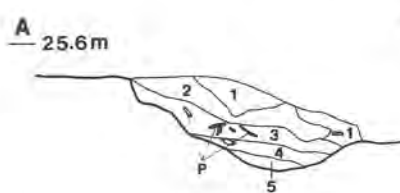
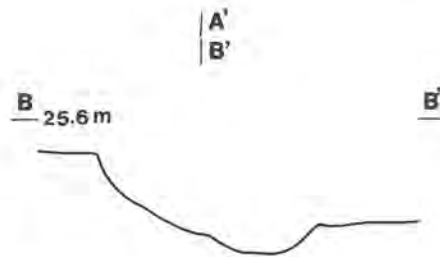
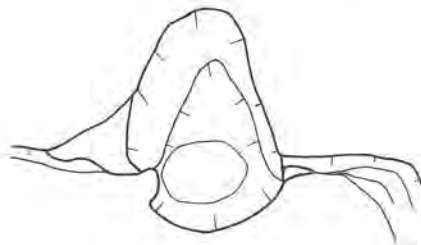


SI-131 土層解説

- 1 黒褐色 ローム・焼土粒子
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 3 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック, 炭化物
- 4 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック, 炭化物
- 5 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック, 焼土ブロック
- 6 褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック



- 7 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 8 褐色 ローム・焼土粒子
- 9 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 10 褐色 ローム粒子
- 11 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 12 褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
- 13 暗褐色 ローム粒子, ローム中ブロック, 焼土ブロック
- 14 暗褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック
- 15 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 16 黒褐色 ローム・焼土粒子

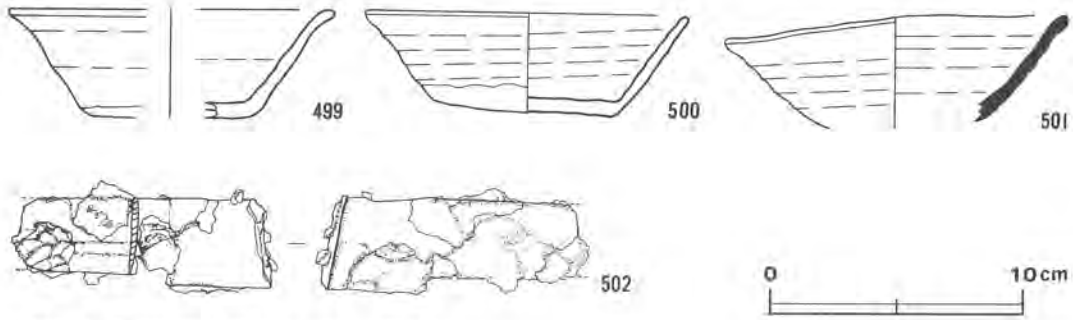


SI-131 土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土・木炭粒子, 粘土
- 2 暗赤褐色 焼土粒子, 粘土, 砂粒
- 3 によい赤褐色 焼土・木炭粒子, 焼土ブロック
- 4 極暗赤褐色 ローム, 焼土ブロック, 灰
- 5 極暗赤褐色 焼土・粘土粒子, 木炭



第235図 第131号住居跡・竈実測図



第236図 第131号住居跡出土遺物実測図

第131号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考
第236図 501	須恵器 坏	A 13.6	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。全体に扁平である。 体部内・外面水挽き整形。		砂粒・砂礫 黄灰色 普通	50% 覆土
		B (4.6)				
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考		
502	鎌	全長(10.5) 幅 3.4	刃部先端欠損。 断面V字状を呈し、 基部は表側に折れ曲がる。			

第132号住居跡 (第237図)

(位置) 調査区の西側, E4b₃区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.9×4.3mの方形。

(主軸方向) N-20°-W。

(壁) 壁高26cm, 垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅16cm, 深さ8~10cm, 掘り込み断面形状はU状を呈して全周。

(床) 平坦で, 硬く踏み固められて堅緻である。

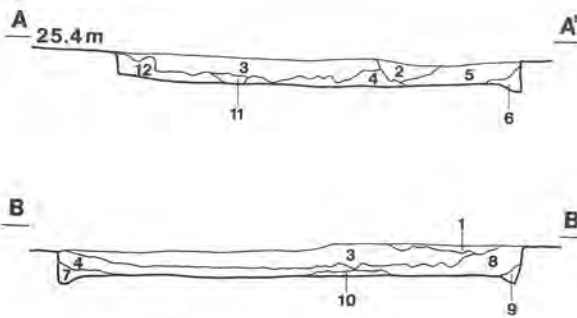
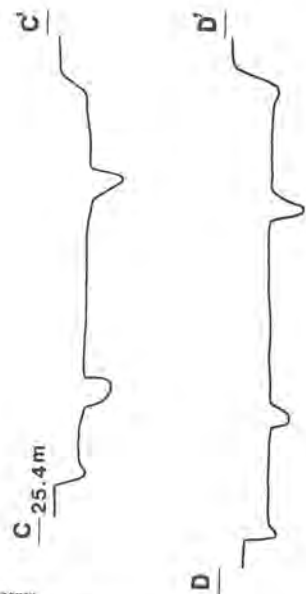
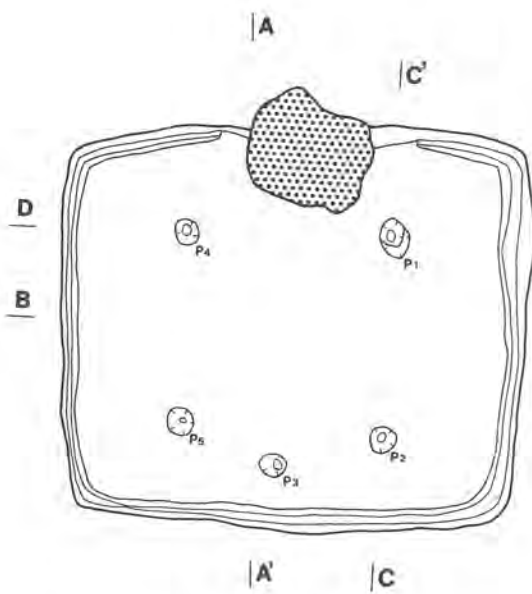
(ピット) 5か所(P₁~P₅)。掘り込みは, 径26~28cm, 深さ28~30cmを測り, 全て支柱穴である。

(竈) 北壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み, 粘土・砂で構築。遺存状態は悪く, 天井部は崩落し, 袖部だけが残存し馬蹄形を呈する。火床部は焼土化し, 煙道部は焚口部から緩く立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 遺物は少なく, 土師器(坏・高台付坏・甕), 須恵器(坏・蓋・甕)が散在して出土している。508は須恵器の甕で西壁際から正位で, 504は須恵器坏で西壁際からと逆位の状態で出土している。

(所見) 本跡は, 遺構の形状・遺物から判断して, 10世紀前半に比定される住居跡である。



SI-132 土層解説

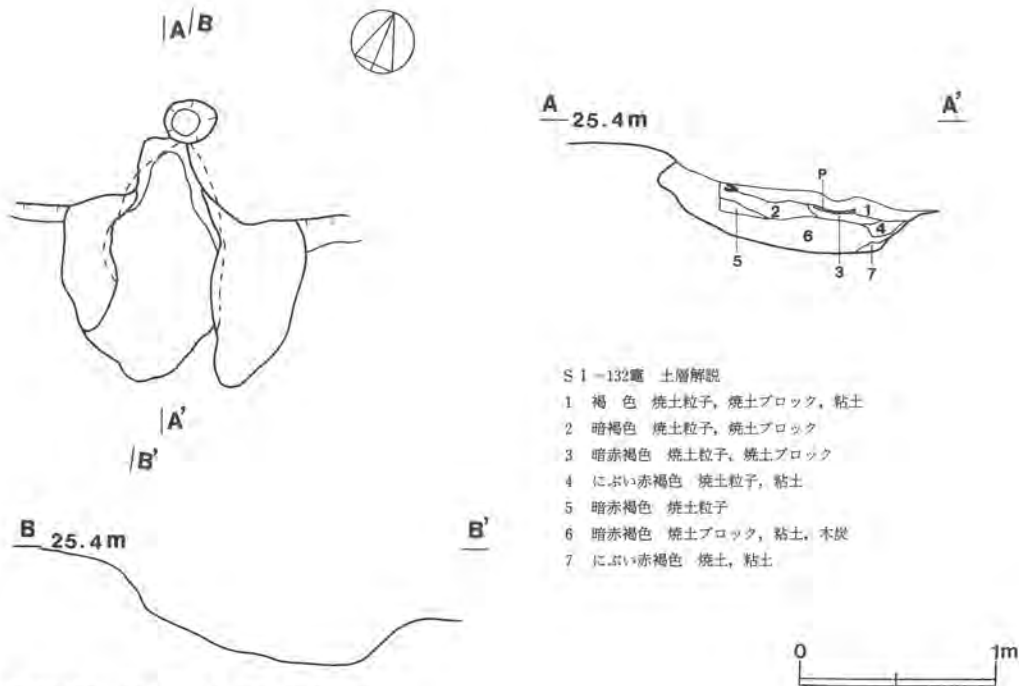
- 1 暗褐色 ローム粒子, 焼土ブロック, 炭化物
- 2 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 3 暗褐色 ローム・焼土粒子, ローム・焼土ブロック
- 4 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 6 褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物
- 7 褐色 ローム・焼土粒子
- 8 暗褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物
- 9 褐色 ローム粒子
- 10 暗褐色 ローム粒子
- 11 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 12 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土



第237図 第132号住居跡実測図

第132号住居跡出土遺物解説表

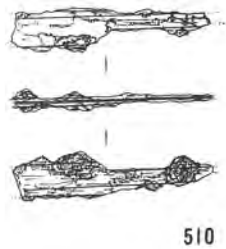
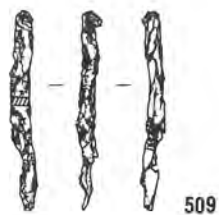
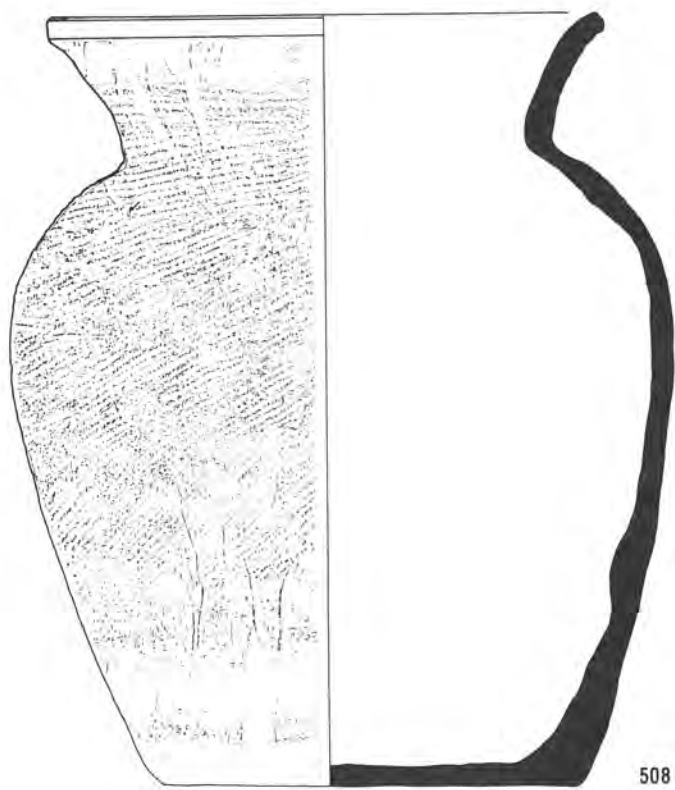
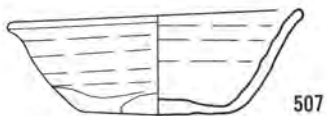
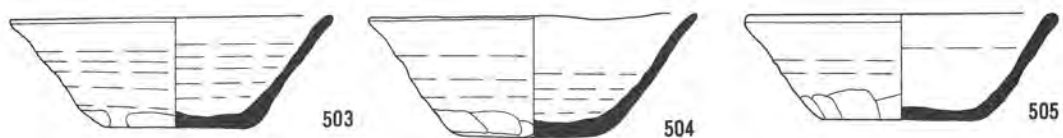
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第239図 503	坏 須恵器	A 13.0	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は小さく外反する。	砂粒・砂礫・雲母 黄灰色 普通	80% 覆土
		B 4.5	端部は丸味をもつ。		
		C 6.0	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。		
504	坏 須恵器	A 13.1	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	80% 覆土
		B 5.0	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り, 周辺ヘラ削り。		
		C 4.7			
505	坏 須恵器	A 12.4	体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は小さく外反し,	砂粒・砂礫・雲母 黒褐色 普通	70% 覆土
		B 4.3	端部は丸味をもつ。		
		C 6.4	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。		



第238図 第132号住居跡竈実測図

第132号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第239図 506	坏 土師器	A 13.3	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。		砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	50% 竈			
		B 4.1	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。						
		C 6.5							
507	坏 土師器	A 11.7	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。		砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	50% 覆土			
		B 4.3	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。						
		C 6.4							
508	甕 須恵器	A 21.9	底部は平底。胴部は直線的に外傾して立ち上がり、頭部		砂粒・砂礫・雲母 橙色 不良	80% 竈			
		B 31.3	は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は丸く、外反する。						
		C 16.8	胴部は斜位の平行叩き目、口縁部内・外面横ナデ。						
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
509	釘	全長(8.1)	頭部は方形を呈し、若干折れ曲がっている。下部欠損。		510	刀子	全長(8.0)	切先部と基端部欠損。刃部と茎部との間に関を有する。刃部断面V字状・基部断面長方形を呈する。	
		太さ(0.7)					刃幅(1.2)		



第239图 第132号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡（第240図）

（位置） 調査区の西側，E4a₃区を中心に確認。

（規模と平面形） 3.5×3.0mの方形。

（主軸方向） N-13°-W。

（壁） 壁高は40cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10~20cm，深さ4~8cm，掘り込み断面形状はL状を呈し，東・南・北壁下に廻る。

（床） 平坦で，全体に硬く踏み固められている。

（ピット） 1か所（P₁）。掘り込みは，径20cm，深さ50cmを測る。主柱穴かどうかは不明。

（竈） 北壁中央部を30cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部・袖部は崩落し，焚口部から煙道部へかけての内壁は焼けて焼土化している。天井部・袖部の粘土及び砂が竈前面に多量に散乱し，ほとんど原型をとどめない。

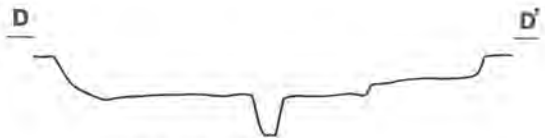
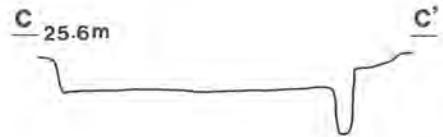
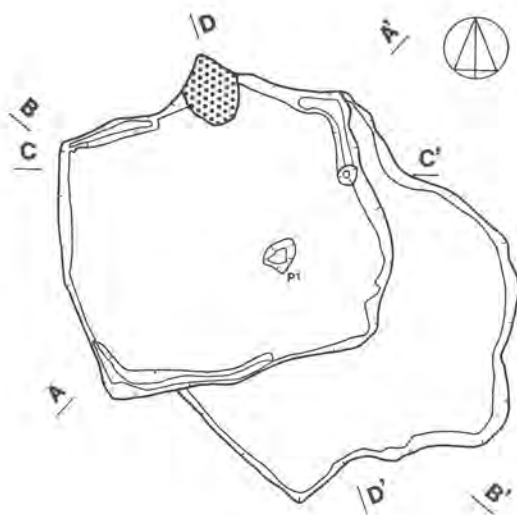
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 竈付近から，土師器（坏・高台付坏・甕），須恵器（坏・甕・壺）の破片が多量に出土している。511は土師器坏片，518は土師器甕片，519は須恵器壺片であり，いずれも竈の袖部の芯や天井部の補強材として用いられてた状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態，遺物から，9世紀後半に比定される住居跡である。

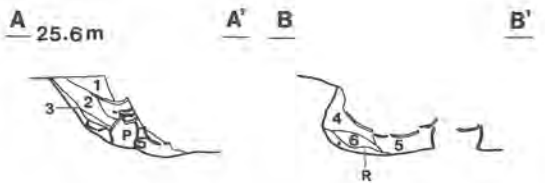
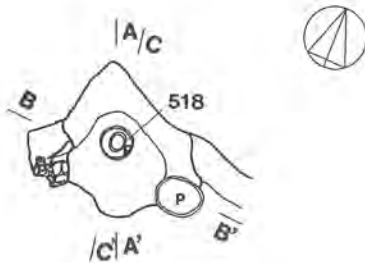
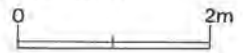
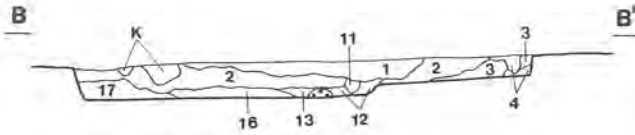
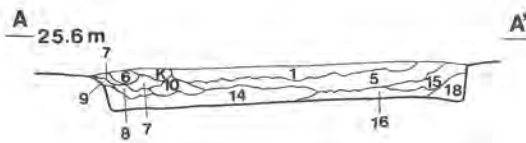
第133号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第241図 511	坏 土師器	A 13.0	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫 橙色 良好	100% 覆土
		B 4.0			
		C 6.2			
512	坏 土師器	A 12.9	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部は小さく外反し，丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい黄橙色 普通	90% 覆土
		B 4.1			
		C 5.7			
513	坏 土師器	A 13.4	体部は直線的に立ち上がり，口縁部は小さく外反して端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい褐色 普通	90% 体部外面に墨書 覆土
		B 4.0			
		C 5.5			
514	坏 土師器	A (13.2)	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は小さく外反し端部は丸味をもつ。 体部外面水挽き整形。内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。	砂粒・砂礫 橙色 良好	20% 覆土
		B 4.0			
		C (6.4)			
515	高台付皿 土師器	A 13.4	体部は直線的に開く。口唇部は丸い。高台は「ハ」の字状に開き，貼り付け。 体部水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	70% 覆土
		B (2.3)			
		E (0.3)			



SI-133 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子
- 2 黒褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 3 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 4 褐色 ローム粒子
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック, 炭化物
- 6 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 7 にぶい赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック, 砂粒
- 8 にぶい赤褐色 ローム粒子, 焼土ブロック
- 9 褐色 ローム粒子
- 10 暗褐色 ローム・焼土粒子, 砂粒
- 11 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 12 褐色 ローム粒子, ローム中ブロック
- 13 褐色 ローム粒子, 砂粒
- 14 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 15 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック, 砂粒
- 16 暗褐色 ローム粒子, 炭化物, 焼土
- 17 褐色 ローム粒子
- 18 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック

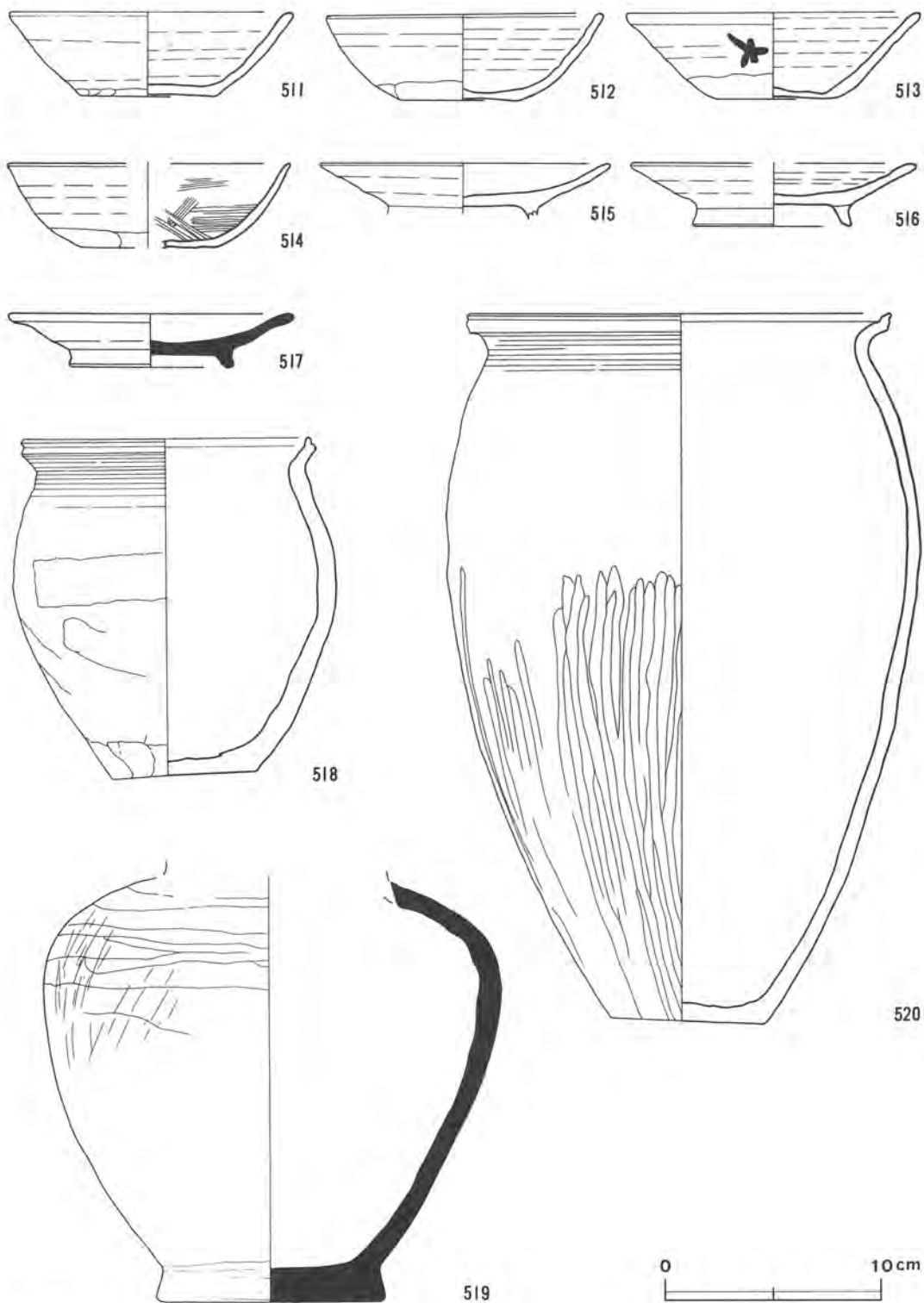


SI-133電 土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム, 粘土, 砂粒
- 2 暗赤褐色 焼土, 粘土
- 3 極暗赤褐色 ローム, 焼土, 炭化物
- 4 にぶい赤褐色 ローム・焼土粒子
- 5 暗赤褐色 焼土粒子, 炭化物
- 6 暗赤褐色 ローム・焼土粒子, 炭化物



第240図 第133号住居跡・竈実測図



第241图 第133号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第241図 516	高台付皿 土師器	A (13.3)	体部は直線的に開く。口唇部は丸い。高台は高く、「ハ」の字状に開き、貼り付け。体部水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母にふい黄橙色普通	40% 覆土
		B 2.9			
		D 7.4			
		E 0.9			
517	高台付皿 須恵器	A 13.0	体部は直線的に開き、口唇部は折れる。高台は「ハ」の字状に開き、貼り付け。体部水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母黄灰色普通	70% 底部に墨書 覆土
		B 2.5			
		D 7.4			
		E 0.8			
518	甕 土師器	A 13.5	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内上方につまみ出されている。胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石にふい橙色普通	70% 竈
		B 16.0			
		C 6.8			
519	高台付壺 須恵器	B (19.8)	胴部やや上位で「く」の字状に屈曲する。高台部は断面三角形で「ハ」の字に開く。外面水挽き整形。内面指頭圧痕。高台貼り付け。胴部内面に輪積痕が残る。	砂粒・砂礫灰色良好	80% 覆土
		D 10.4			
		E 1.6			
520	甕 土師器	A 19.6	底部は平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母にふい橙色普通	80% 覆土
		B 33.2			
		C 7.1			

第134号住居跡 (第242図)

(位置) 調査区の西側、E3j₀区を中心に確認。

(規模と平面形) 4.0×3.8mの方形。

(主軸方向) N-36°-W。

(壁) 壁高は40cmを測り、垂直に立ち上がる。

(壁溝) 幅20cm、深さ6cm、掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

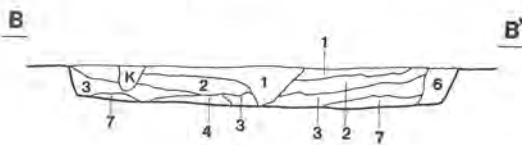
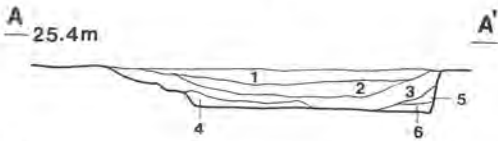
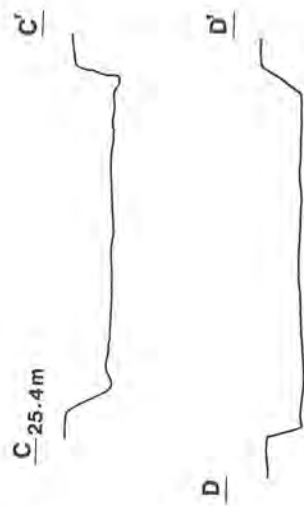
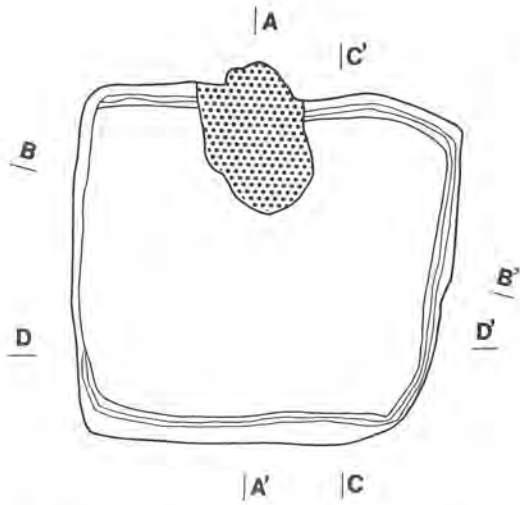
(床) 全体に凸凹しているが、硬く踏み固められて堅緻である。

(竈) 北壁中央部を15cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部は焼土化し、焼土粒・炭化物が充填されている。焚口部から煙道部にかけての傾斜は比較的緩く立ち上がり、煙出口近くで急角度となって立ち上がる。

(覆土) 自然堆積。

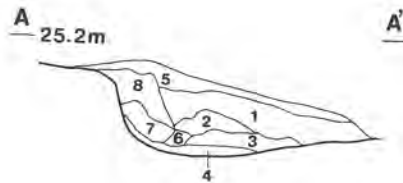
(遺物) 遺物は少なく、西壁際と竈内から土師器(坏・甕)破片が出土しているにすぎない。521は、土師器坏片で西壁際の床面から壊れた状態で出土している。

(所見) 本跡は、柱穴が全く検出されないが遺構の形態、遺物から、6世紀前半に比定される住居跡である。



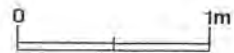
S1-134 土層解説

- 1 暗褐色 ローム・焼土粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子, ローム中ブロック
- 3 暗褐色 ローム中ブロック, 炭化粒子
- 4 におい赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 砂粒
- 5 褐色 ローム中・大ブロック
- 6 褐色 地山
- 7 暗褐色 ローム粒子

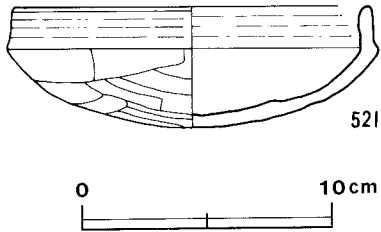


S1-134 土層解説

- 1 極暗赤褐色 黒色土・焼土ブロック, 粘土, 砂粒
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック, 砂粒
- 3 極暗赤褐色 焼土, 木炭, 灰
- 4 赤褐色 焼土
- 5 暗褐色 粘土, 砂粒
- 6 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土
- 7 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 木炭
- 8 褐色 焼土粒子, 炭化物



第242図 第134号住居跡・竈実測図



第243図 第134号住居跡出土遺物実測図

第134号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第243図 521	坏 土師器	A 14.2 B 4.8	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。体部外面へら切り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 におい橙色 普通	80% 竈

第135号住居跡 (第244図)

(位置) 調査区の西側、D3h₈区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.1×2.8mの方形。

(主軸方向) N-54°-W。

(壁) 壁高は28~36cmを測り、外傾して立ち上がる。

(床) 全体に凸凹しているが、硬く踏み固められて堅緻である。

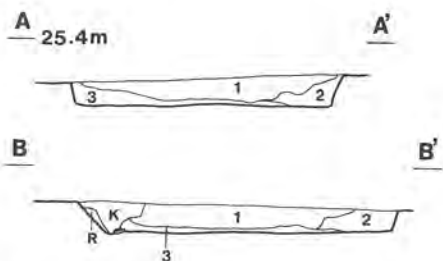
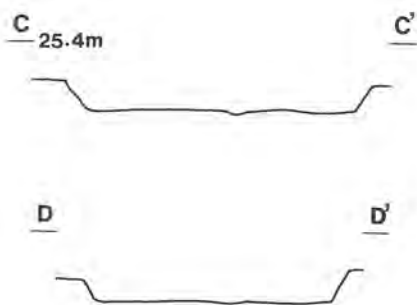
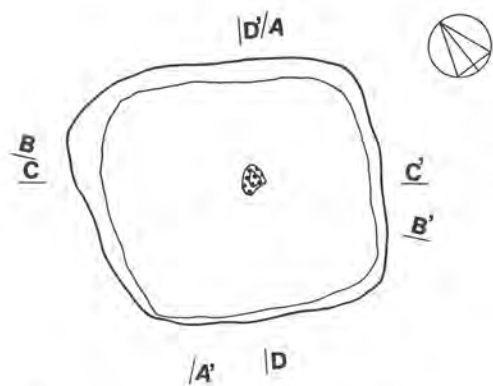
(炉) 中央部に、焼土(8cm程堆積)が認められるが、炉跡として捉えるのは疑問が生じることから、置き竈の場所とも考えられる。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 西壁付近の床面と覆土中層・上層から土師器(坏・甕)破片が出土している。

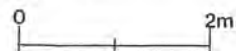
525は、土師器広口甕で逆位で、底部は欠損し床面に付着した状態で、522・523は、土師器坏で2個重ね合わせた状態で出土している。

(所見) 本跡は小型の住居跡であり、小竪穴住居跡と形態は同じ様相を呈している。出土遺物から、6世紀後半に比定される住居跡である。

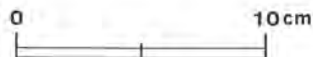
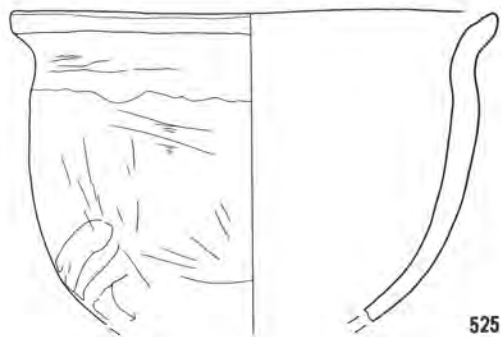
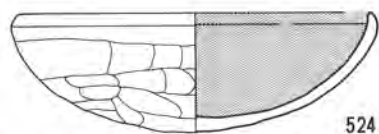
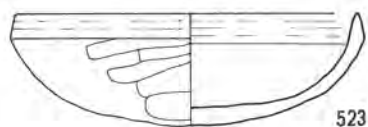
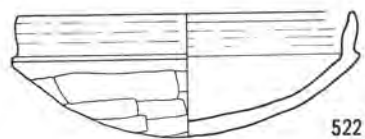


S I-135 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック, 炭化粒子
- 2 褐色 ローム小ブロック
- 3 黒褐色 ローム・焼土粒子, ローム中ブロック



第244図 第135号住居跡実測図



第245図 第135号住居跡出土遺物実測図

第135号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第245図 5 2 2	坏 土師器	A 13.4	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。体部外面ヘラ切り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい黄橙色 良好	70% 内面に煤付着 覆土
		B 5.0			
5 2 3	坏 土師器	A 13.7	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。体部外面ヘラ切り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 褐灰色 普通	90% 覆土
		B 4.5			
5 2 4	坏 土師器	A 14.2	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は小さく立ち上がる。体部外面ヘラ切り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 良好	100% 内面黒色処理 覆土
		B 4.8			
5 2 5	広口甕 土師器	A 19.4	底部欠損。胴部は丸く膨らみ、口縁部は短く屈曲して外反。口縁部横ナデ。胴部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい赤褐色 良好	80% 甕
		B (12.5)			

第136号住居跡（第246図）

（位置） 調査区の西側，E2d₀区を中心に確認。

（規模と平面形） 2.9×2.8mの方形。

（主軸方向） N-16°-W。

（壁） 本跡が位置する地区は西側に傾斜している地形であり，壁高は，東・南壁が28～30cmで，西壁が18cmを測り，壁は垂直に立ち上がる。

（床） 全体に平坦で，壁際は軟弱であるが，中央部付近は硬く踏み固められて堅緻である。

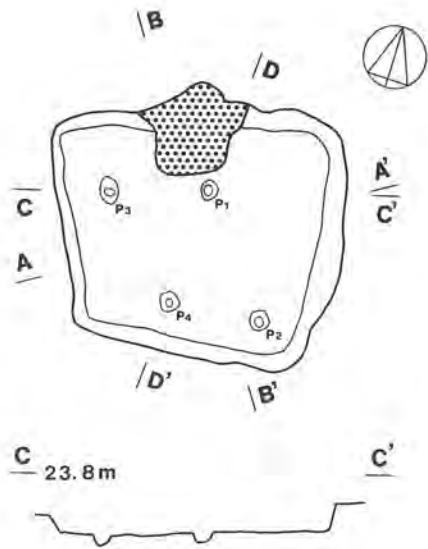
（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径20cm，深さ10～24cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を30cm壁外へ掘り込んで，粘土・砂によって構築。天井部・袖部の遺存状態は悪く，全容は把握できなかつた。確認できる火床部は，焼土化が認められる。

（覆土） 自然堆積。

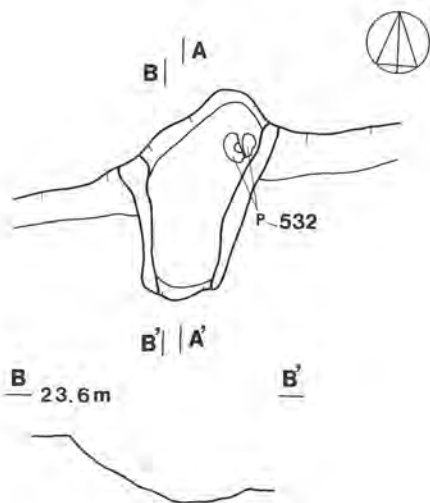
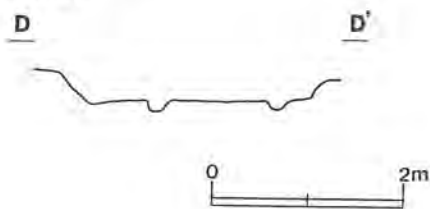
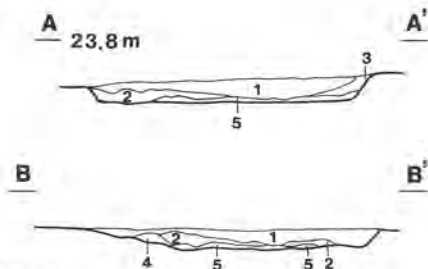
（遺物） 竈付近から集中して，土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕），陶磁器片が出土している。530は，土師器坏，532は，須恵器坏片で，これらは竈の構築時に補強材として用いられた状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から，8世紀後半に比定される住居跡である。



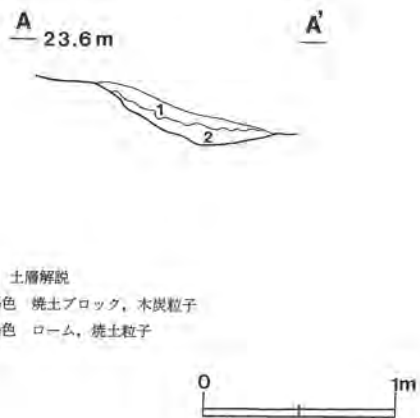
SI-136 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 2 黒褐色 ローム粒子多, 焼土・炭化粒子
- 3 黒褐色 ローム粒子中, 焼土・炭化粒子
- 4 黒褐色 ローム粒子中, 焼土粒子
- 5 暗褐色 ローム粒子



SI-136竈 土層解説

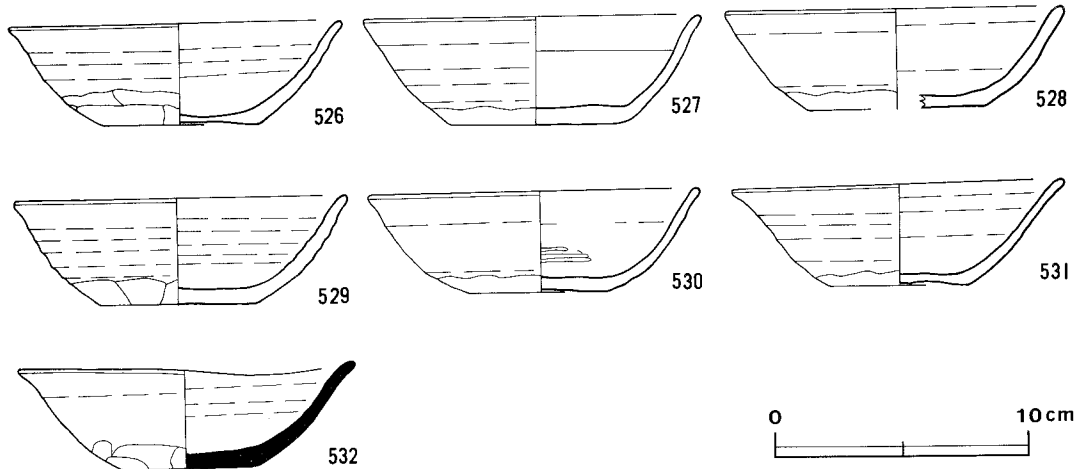
- 1 極暗赤褐色 焼土ブロック, 木炭粒子
- 2 極暗赤褐色 ローム, 焼土粒子



第246図 第136号住居跡・竈実測図

第136号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第247図 526	坏 土師器	A 13.3	体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫 にふい黄橙色 普通	100% 覆土
		B 4.2			
		C 6.2			
527	坏 土師器	A 13.6	体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	100% 覆土
		B 4.5			
		C 6.8			



第247図 第136号住居跡出土遺物実測図

第136号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第247図 528	坏 土師器	A 13.4	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、 端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい橙色 普通	60% 覆土
		B 4.0			
		C (7.0)			
529	坏 土師器	A 13.1	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、 端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 明黄褐色 普通	80% 覆土
		B 4.3			
		C 6.3			
530	坏 土師器	A 13.2	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、 端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫 浅黄褐色 普通	80% 内・外面煤付着 覆土
		B 4.1			
		C 5.6			
531	坏 土師器	A 13.0	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、 端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫 にぶい黄褐色 普通	60% 覆土
		B 4.2			
		C 5.5			
532	坏 須恵器	A 13.4	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部 は丸味をもって折れる。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫 灰白色 普通	90% 竈
		B 4.2			
		C 5.2			

第137号住居跡 (第248図)

(位置) 調査区の西側、E4g₁区を中心に確認。

(規模と平面形) 3.4×2.1mの方形。

(壁) 壁高は10cmを測り、垂直に立ち上がる。

(床) 平坦で、硬く踏み固められて堅緻である。

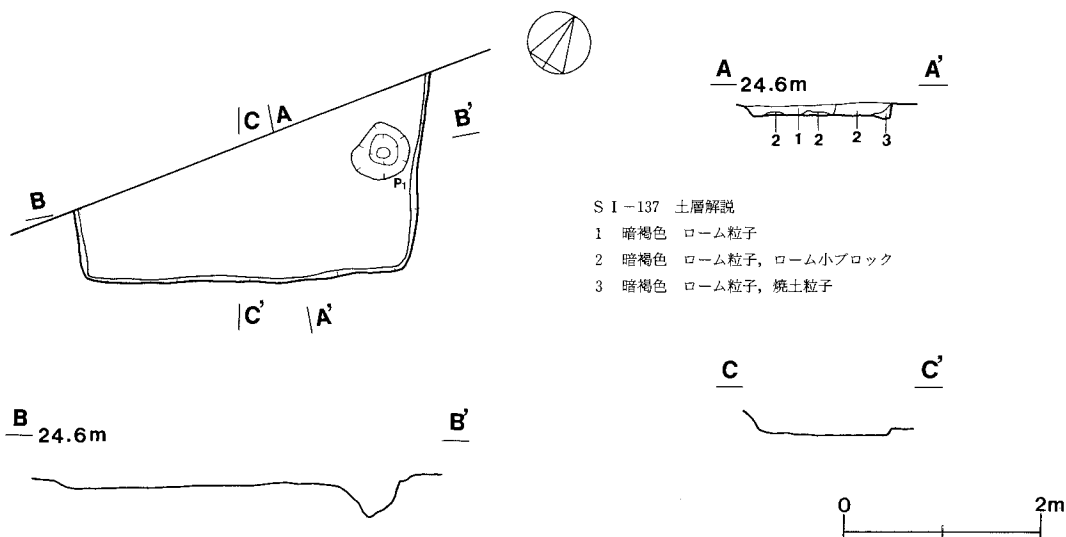
(ピット) 1か所 (P₁)。掘り込みは、径60cm、深さ37cmを測る。支柱穴である。

(覆土) 自然堆積。

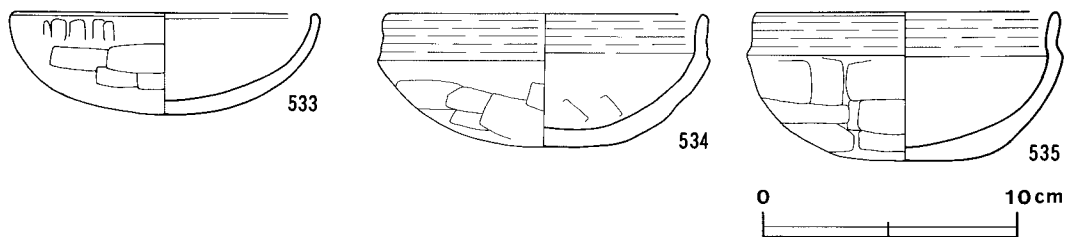
(遺物) 土師器 (坏・甕) の床面破片が全体に散在して出土している。534は土師器坏, 535は

土師器碗形土器で、いずれも床面から出土している。

(所見) 本跡の大部分は調査区域外であり、調査されたのは、全体の1/3程であった。出土遺物から、6世紀後半に比定される住居跡である。



第248図 第137号住居跡実測図



第249図 第137号住居跡出土遺物実測図

第137号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第249図 533	坏 土師器	A 12.2	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立気味に立ち上がる。 体部外面ヘラ削り後ナデ。内面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい赤褐色 良好	80% 覆土
		B 4.1			
534	坏 土師器	A 12.6	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。 口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。 体部ヘラ切り。口縁部横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 黒褐色 良好	90% 覆土
		B 5.5			

第137号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第249図 535	碗 土師器	A 11.9 B 6.0	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。 体部外面へラ削り後ナデ。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 普通	80% 覆土

第138号住居跡（第250図）

（位置） 調査区の南側，F4a₆区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.7×4.7mの方形。

（主軸方向） N-27°-W。

（壁） 壁高は10cmを測り，垂直に立ち上がる。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径30～40cm，深さ30～40cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を45cm程壁外へ掘り込み粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落しているが，袖部は残存している。火床部は焼土化し，焚口部から煙道部へかけての傾斜は緩い立ち上がりを示している。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 遺物の出土量は少なく，土師器（甕），須恵器（坏・甕）の破片が竈内から若干出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して，10世紀前半に比定される住居跡である。

第139号住居跡（第251図）

（位置） 調査区の南側，F4e₂区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.0×3.9mの方形。

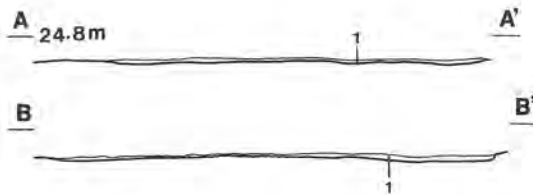
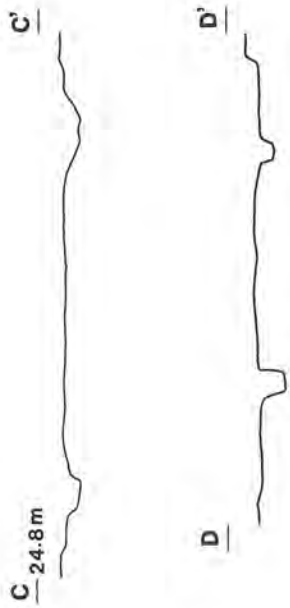
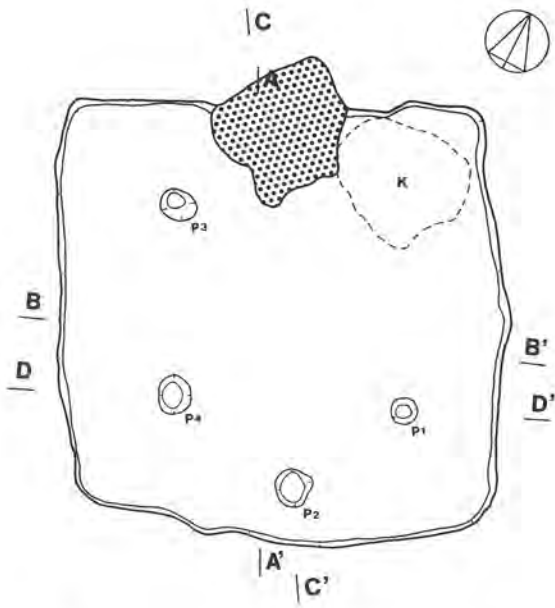
（主軸方向） N-32°-W。

（壁） 壁高は，北壁で30cm，東・南・西壁で8～10cmを測り，垂直に立ち上がる。

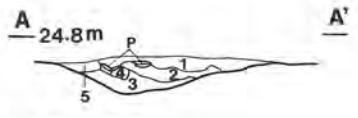
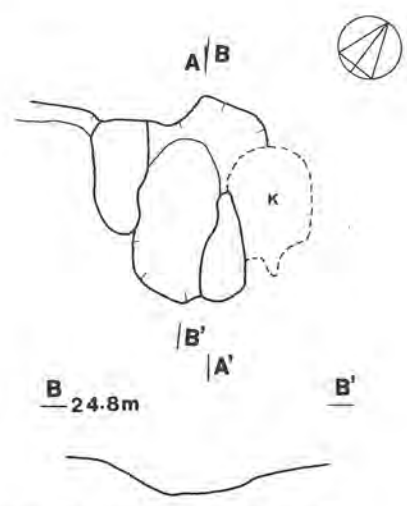
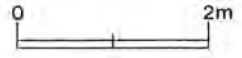
（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径40～70cm，深さ13～42cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込み粘土・砂によって構築。天井部・袖部が残存して遺存状態は良い。火床部の掘り方は皿状に掘り込まれて，焼土粒・炭化物が充填し，煙道部は焚口



S I -138 土層解説
 1 暗褐色 ローム・焼土粒子



S I -138竈 土層解説
 1 褐色 ローム・焼土粒子, 粘土
 2 暗赤褐色 焼土粒子, 焼土ブロック, 粘土, 炭化物
 3 褐色 ローム, 焼土粒子
 4 にぶい黄橙色 焼土粒子, 砂粒
 5 暗赤褐色 焼土ブロック, 炭化粒子



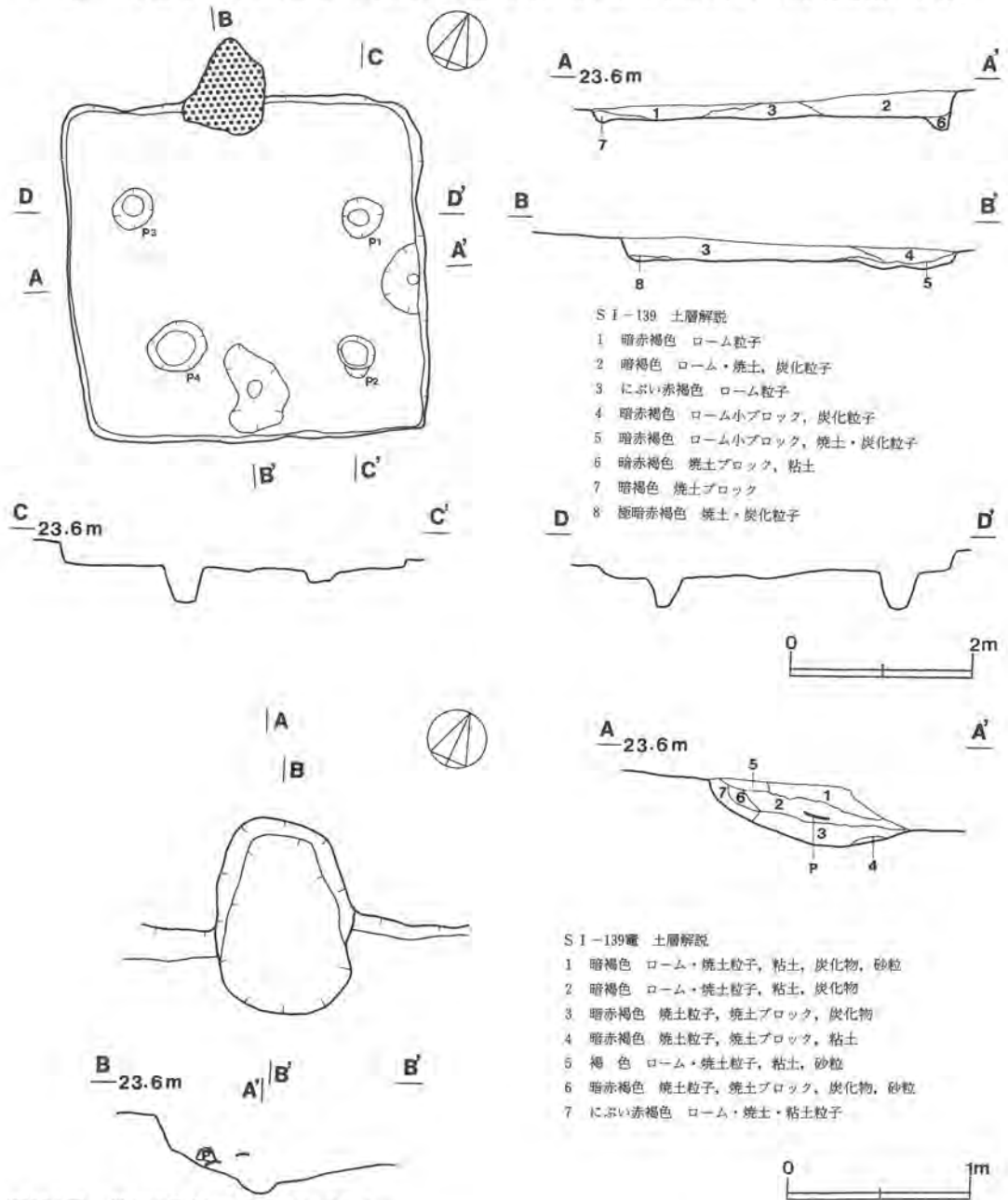
第250図 第138号住居跡・竈実測図

部から比較的緩やかに立ち上がる。

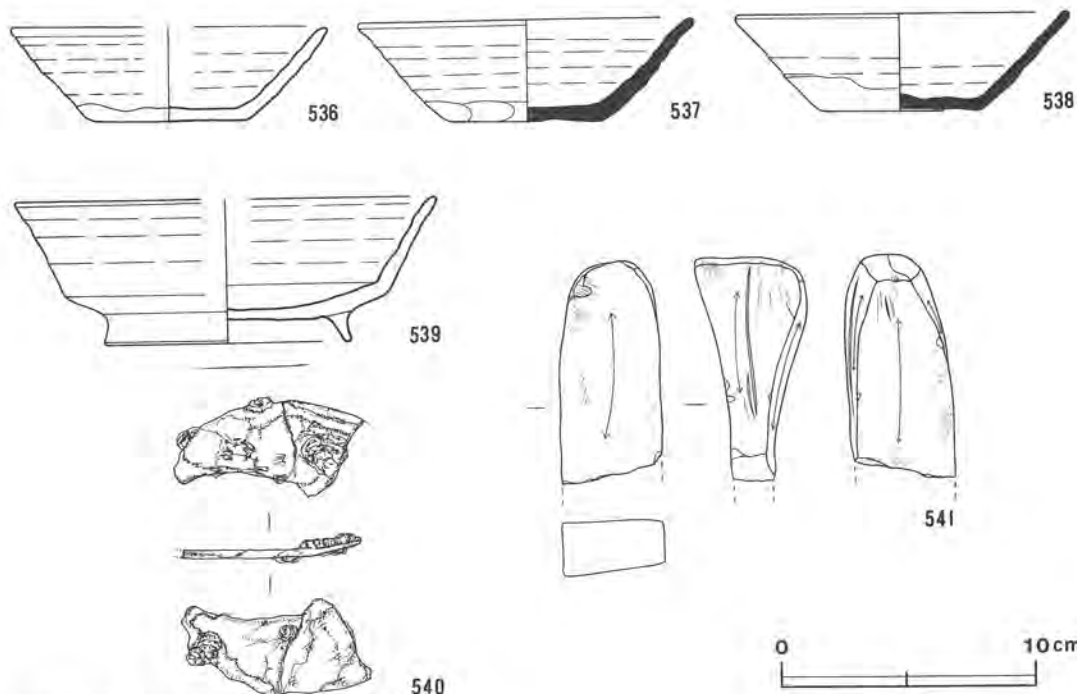
(覆土) 自然堆積。

(遺物) 壁際と竈内から土師器(甕), 須恵器(坏・蓋・甕)の破片の出土が多く, 536は土師器坏で壁際の床面から, 539は土師器高台坏片で, 竈の構築時に天井部に補強材として用いられている。

(所見) 本跡は, 遺構の形態・遺物から判断して, 9世紀前半に比定される住居跡である。



第251図 第139号住居跡・竈実測図



第252図 第139号住居跡出土遺物実測図

第139号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴		胎土・色調・焼成	備考			
第252図 536	坏 土師器	A (12.5)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部は丸味をもつ。		砂粒・砂礫 橙色 普通	50% 竈			
		B 3.8							
		C 6.0	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。						
537	坏 須恵器	A 13.1	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部は丸味をもつ。		砂粒・砂礫・雲母 灰褐色 普通	100% 覆土			
		B 4.1							
		C 6.0	体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り、周辺ヘラ削り。						
538	坏 須恵器	A 13.3	底部は平底。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部は丸味をもつ。		砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	60% 竈			
		B 4.0							
		C 6.4	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。						
539	高台付坏 土師器	A (16.8)	底部は平底で「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。		砂粒・砂礫・雲母 灰褐色 普通	50% 竈			
		B 5.8							
		D (10.0)	体部内・外面水挽き整形。高台貼り付け。底部回転ヘラ切り。						
		E 1.2							
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
540	鎌	全長(7.7) 幅 3.8	刃部先端部。断面長方形を呈し、刃部は若干V字状を呈する。下部欠損。		541	砥石	全長(9.0) 幅 4.1 厚さ 4.5 重さ172.8g	長方形の砥石。全面に使用痕が認められる。両側面部は、使い減りが激しく、凹んでいる。	凝灰岩

第140号住居跡（第253図）

（位置） 調査区の南側，E5g₃区を中心に確認。

（重複） 第105号・150号住居跡・第6号溝と重複。

（規模と平面形） 6.2×6.0mの方形。

（主軸方向） N-11°-W。

（壁） 壁高は16cmを測り，（北・東・南・西壁の一部は重複し不明。）垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅20cm，深さ10cm，掘り込み断面形状はL状を呈す。

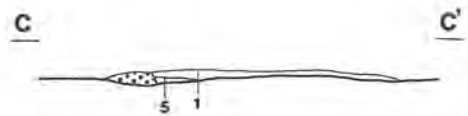
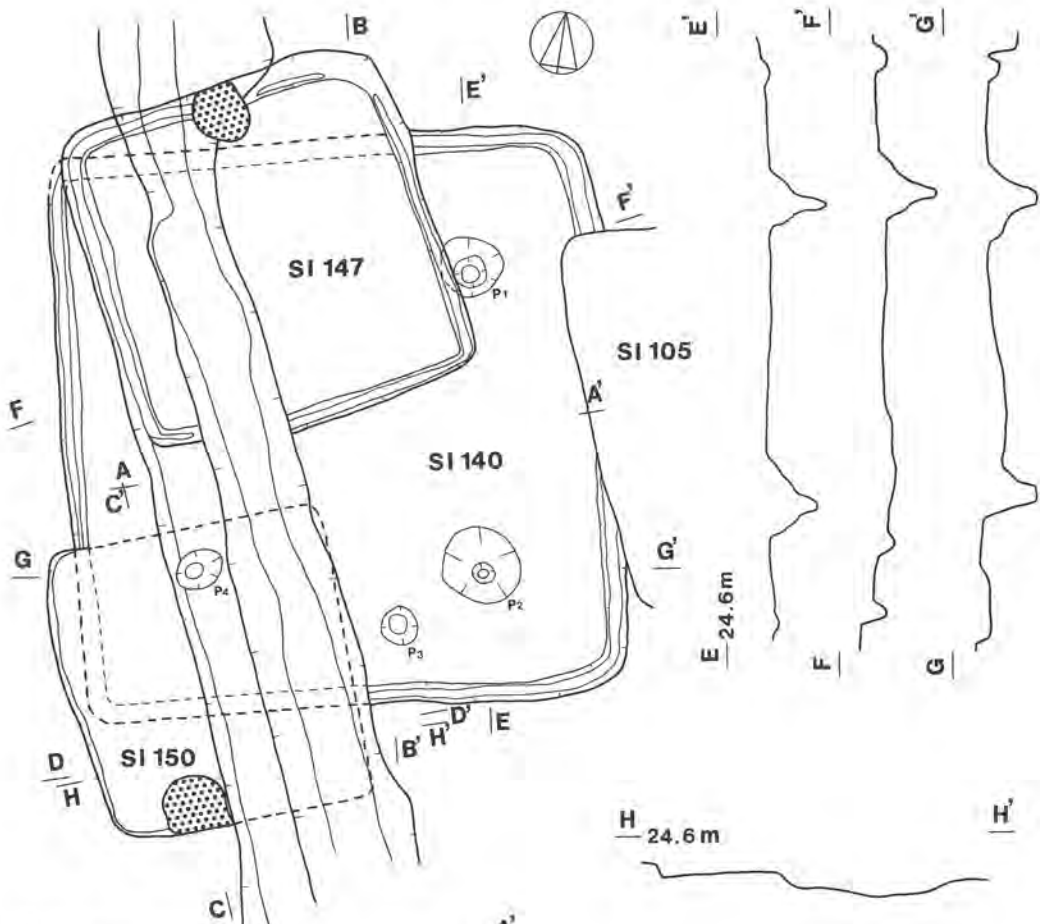
（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 4か所（P₁～P₄）。掘り込みは，径40～90cm，深さ25～58cmを測り，全て支柱穴である。

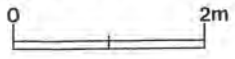
（覆土） 自然堆積。

（遺物） 土師器（甕）・須恵器（坏・甕）の破片が覆土中層から少量出土している。

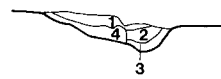
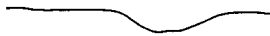
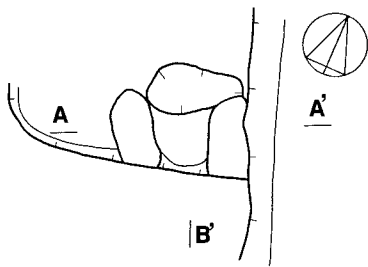
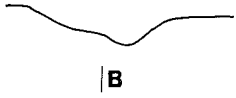
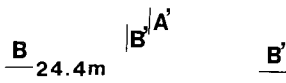
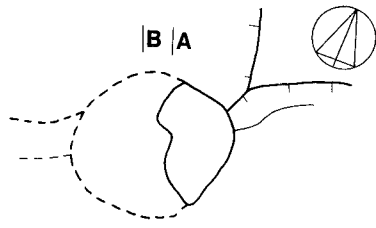
（所見） 本跡は，第105号・150号住居跡と第6号溝と重複しているが，本跡の方が古い。本跡は，遺構の形態・遺物から判断して，10世紀前半に比定される住居跡である。



- SI-140・147 土層解説
- 1 極暗赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
 - 2 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小, 焼土ブロック
 - 3 極暗赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム中ブロック
 - 4 暗褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- SI-150 土層解説
- 1 暗褐色 黒色土, ローム・焼土粒子
 - 2 暗褐色 ローム粒子, ローム・黒色土ブロック, 焼土
 - 3 暗褐色 ローム粒子, 黒色土ブロック
 - 4 褐色 ローム・黒色土ブロック
 - 5 褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土, 木炭

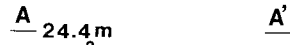
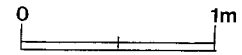


第253図 第140・147・150号住居跡実測図



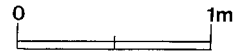
SI-147窟 土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中, 焼土ブロック少
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子中, 焼土ブロック中
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子少
- 4 褐色 ローム・焼土粒子, 焼土ブロック微



SI-150窟 土層解説

- 1 灰褐色 粘土
- 2 にぶい褐色 褐色土, 粘土
- 3 褐色 ローム粒子



第254図 第147・150号住居跡竈実測図

第141号住居跡（第255図）

（位置） 調査区の南側，E4e₈区を中心に確認。

（規模と平面形） 4.0×3.8mの方形。

（主軸方向） N-27°-W。

（壁） 壁高は48～50cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅10cm，深さ6cm，掘り込み断面形状はU状を呈す。

（床） 中央部がわずかに窪むが，平坦で硬く踏み固められて堅緻である。

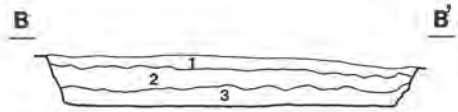
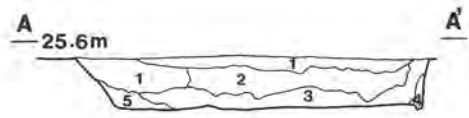
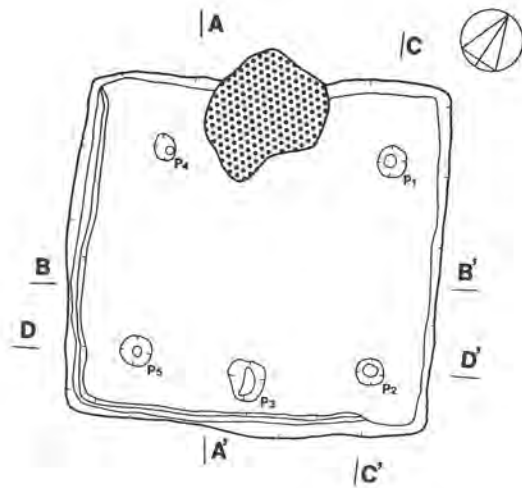
（ピット） 5か所（P₁～P₅）。掘り込みは，径30cm，深さ25～38cmを測り，全て支柱穴である。

（竈） 北壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み，粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落し，袖部は残存しているが，粘土及び焼土が散乱している。火床部は焼土化し，煙道部は焚口部から急角度で立ち上がっている。

（覆土） 自然堆積。

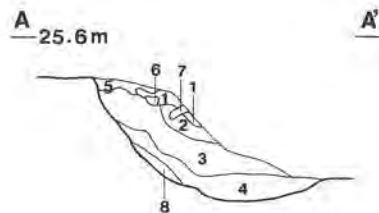
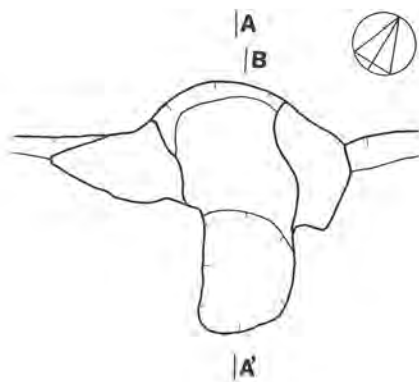
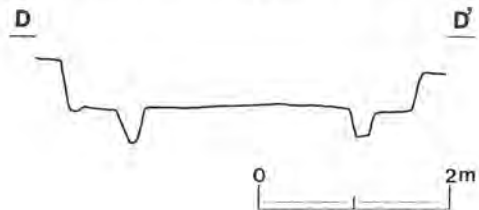
（遺物） 床面上から土師器（坏・甕），須恵器（高台付坏・蓋・甕）が散在して出土している。542は須恵器坏，543は土師器甕で住居跡の中央部から出土している。544は土師器甕で竈の袖部から袖の芯として用いられた状態で出土している。

（所見） 本跡は，遺構の形態・遺物から判断して，8世紀後半に比定される住居跡である。



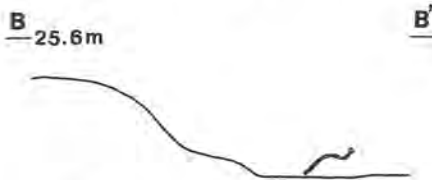
SI-141 土層解説

- 1 褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 2 褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土, 木炭
- 3 褐色 ローム粒子, ローム・焼土・木炭ブロック
- 4 褐色 ローム・黒色土ブロック, 焼土・木炭粒子
- 5 暗褐色 ロームブロック, 焼土粒子

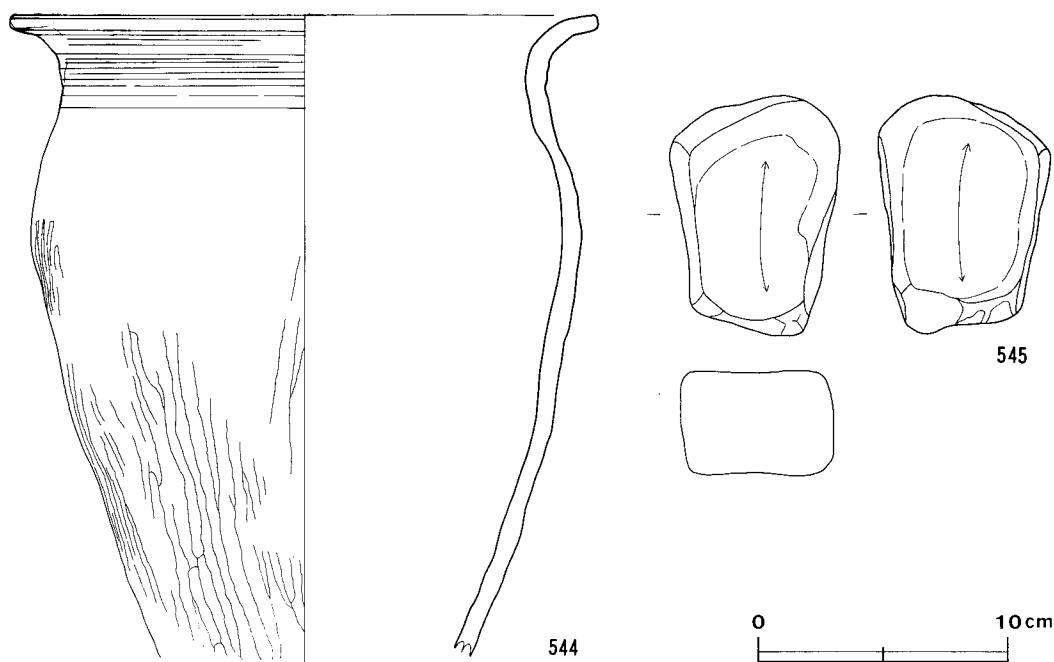
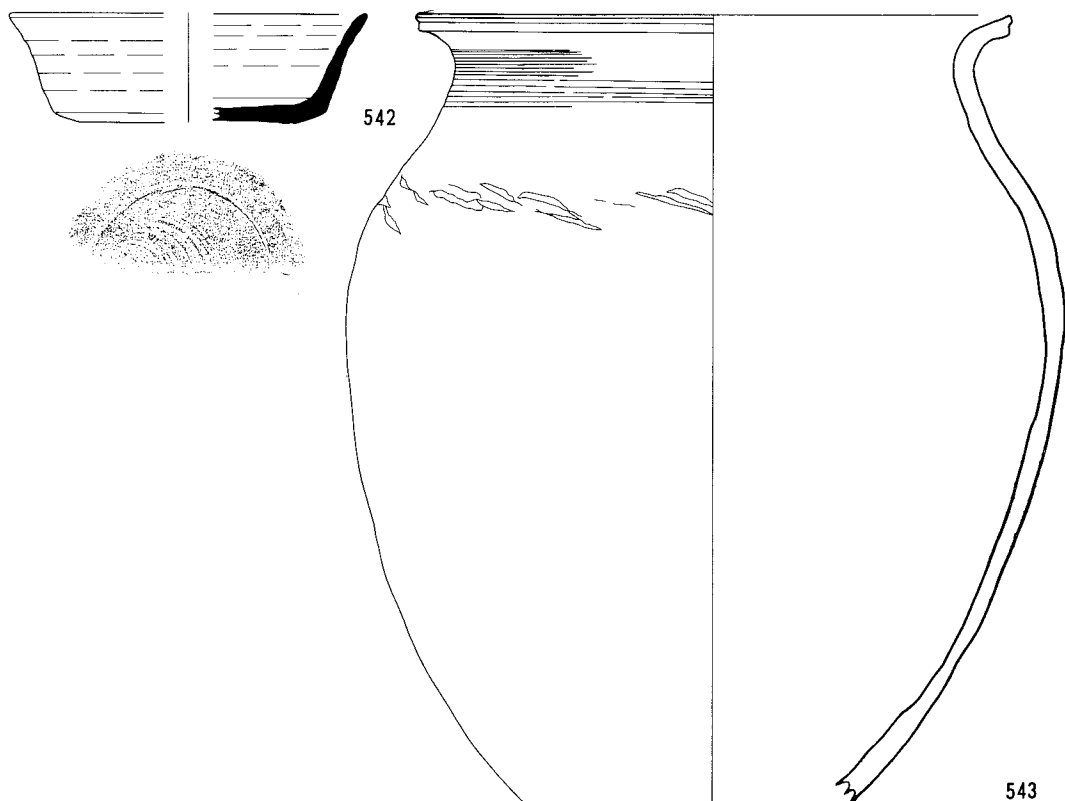


SI-141電 土層解説

- 1 褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
- 2 極暗赤褐色 黒色土, 焼土ブロック, 粘土
- 3 暗赤褐色 焼土・粘土・木炭ブロック
- 4 暗赤褐色 焼土
- 5 暗褐色 焼土・粘土・炭化粒子
- 6 にぶい赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 7 暗褐色 焼土粒子, 焼土ブロック
- 8 暗赤褐色 焼土・粘土粒子, 粘土ブロック



第255図 第141号住居跡・竈実測図



第256图 第141号住居跡出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第256図 542	坏 須恵器	A (14.4)	体部は直線的に立ち上がる。口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転素切り。周辺回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 褐灰色 良好	50% 覆土
		B 4.4			
		C (8.4)			
543	甕 土師器	A 23.9	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がり、胴部中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外上方につまみ出されている。 胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 におい橙色 普通	80% 竈
		B (32.0)			
544	甕 土師器	A 23.5	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はゆるやかに外反する。 胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 におい褐色 普通	40% 竈
		B (25.9)			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
545	砥石	全長 9.6	方形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。特に中央部の使い減りが顕著。	砂岩	
		幅 6.9			
		厚さ 4.6			
		重さ443.8			

第142号住居跡 (第257図)

(位置) 調査区の西側、E4i_s区を中心に確認。

(壁) 壁高は20~40cmを測り、垂直に立ち上がる。

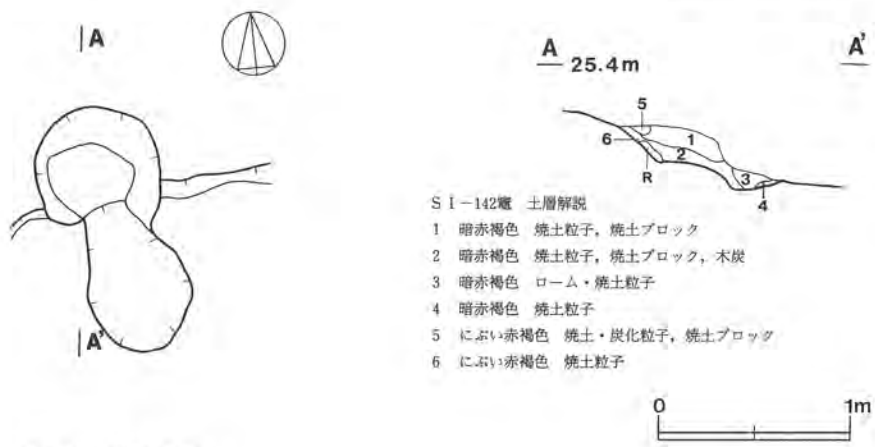
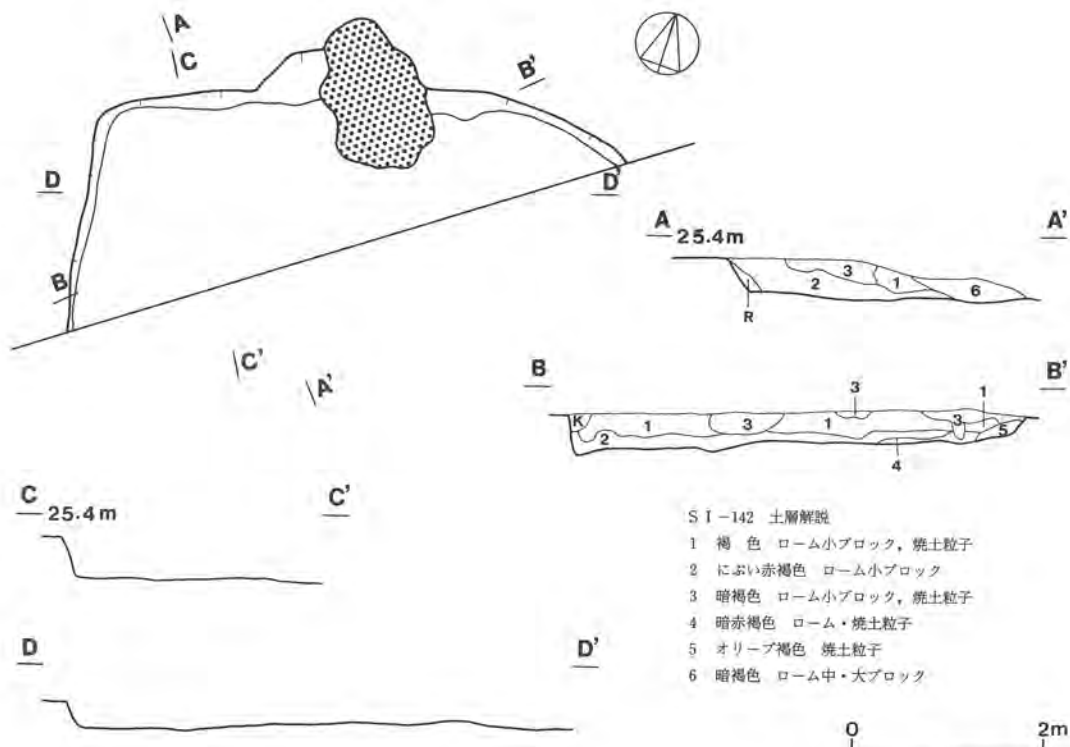
(床) 平坦で、硬く踏み固められて堅緻である。

(竈) 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み、粘土・砂によって構築。遺存状態は悪く、原形を残さない。焚口部から煙道部へかけての内壁は焼けて焼土化し、粘土及び焼土が竈前面に多量に散乱している。煙道部は焚口部から急角度で立ち上がる。

(覆土) 人為堆積。

(遺物) 遺物は少なく、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・高台付坏・高台付皿・高台付盤・甕)の破片が散在して出土している。土師器甕、土師器内面黒色研磨坏、須恵器高台付皿、須恵器高台付盤片がで竈構築に補強材として用いられた状態で出土している。

(所見) 本跡は、調査区域外に遺構が延び、全容を把握することはできなかったが、遺構の形態・遺物から判断して、9世紀後半に比定される住居跡である。



第257図 第142号住居跡・竈実測図



546



第258図 第142号住居跡出土遺物実測図

第142号住居跡出土遺物解説表

図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考
第258図 546	鉄 斧	全長 8.3 幅 3.1	有袋鉄斧である。鉄板を両側から折り曲げて袋状にしている。断面はV字状を呈している。	

第143号住居跡 (第259図)

(位置) 調査区北側, C7g_s区を中心に確認。

(重複) 第146号住居跡・第2号・18号土坑, 第1号溝と重複。

(壁) 壁高は26~40cmを測り, 垂直に立ち上がる。

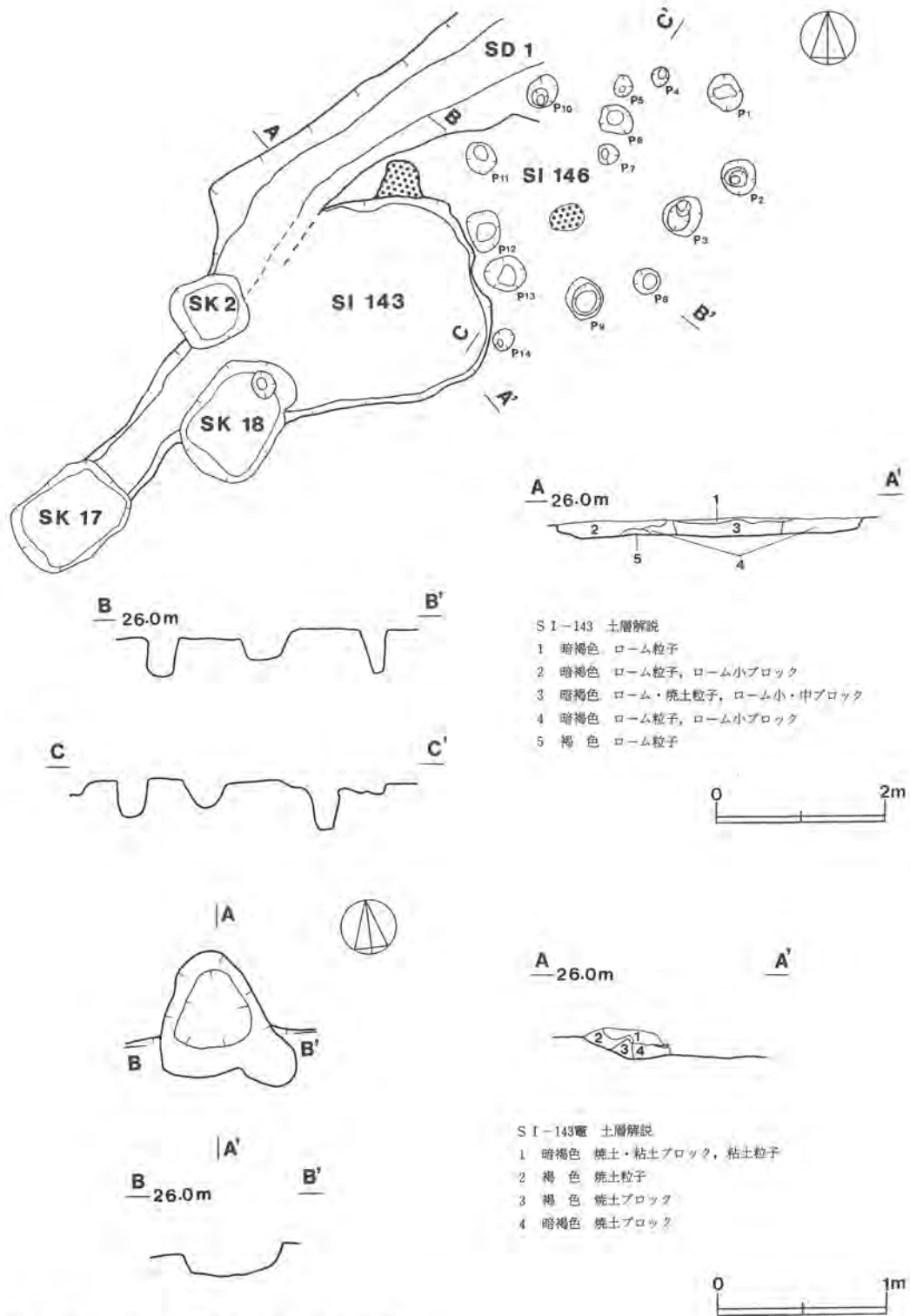
(床) 平坦で, 硬く踏み固められている。

(竈) 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込んで, 粘土・砂によって構築。遺存状態が悪く, わずかに火床部が捉えられる程度である。

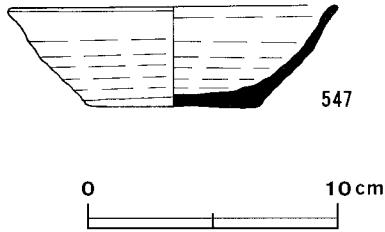
(覆土) 人為堆積。

(遺物) 遺物は竈周辺と壁際から土師器(坏・甕), 須恵器(坏・甕)の破片が散在して出土している。須恵器坏が東壁下床面上から, 547は須恵器坏と土師器甕が竈の補強材として用いられた状態で出土している。

(所見) 本跡は, 住居跡, 土坑, 溝と重複し, 全容を把握することは困難であったが, 本跡の形態・遺物から判断して, 9世紀前半に比定される住居跡である。



第259図 第143・146号住居跡・竈実測図



第260図 第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第260図 547	坏 須恵器	A 13.0	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り、周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	90% 覆土
		B 4.1			
		C 7.0			

第144号住居跡 (第261図)

(位置) 調査区北側, C7i₇区を中心に確認。

(重複) 第19B号・25号・86号住居跡と重複。

(壁) 残存部で壁高は14cmを測り, 垂直に立ち上がる。

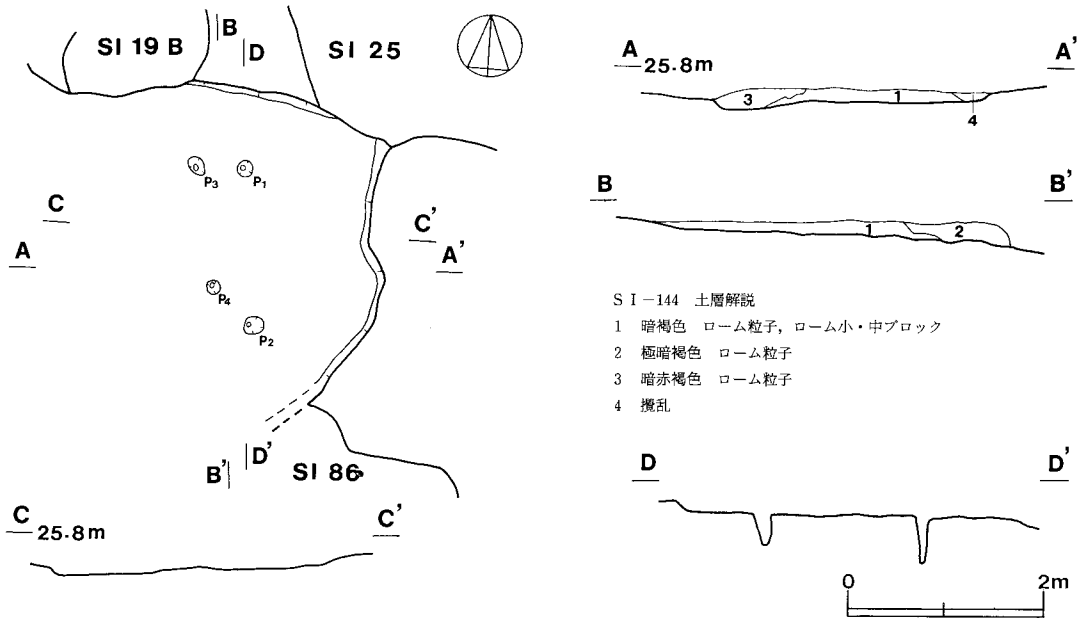
(床) 全体に凸凹しているが; 硬く踏み固められ堅緻である。

(ピット) 4か所(P₁~P₄)。掘り込みは, 径16cm, 深さ19~51cmを測り, 全て支柱穴である。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 遺物は少なく, 土師器(甕), 須恵器(甕)の破片が覆土上層から流れ込みの様相を呈して出土している。

(所見) 本跡は, 3軒の住居跡と重複し, 全容を把握することは不可能であったが, 残存している遺構の形態から小竪穴住居跡で, 12世紀に比定されるものと考えられる。



第261図 第144号住居跡実測図

第145号住居跡（第262図）

（位置） 調査区西側，D3c₆区を中心に確認。

（重複） 第7号溝と重複。

（規模と平面形） 4.3×4.1mの方形。

（主軸方向） N-28°-W。

（壁） 壁高は60cmを測り，垂直に立ち上がる。

（壁溝） 幅16cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈して全周。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（ピット） 6か所（P₁～P₆）。掘り込みは，径28～30cm，深さ45～50cm，支柱穴はP₁・P₃・P₄・P₆の4本である。

（竈） 北壁中央部を30cm程壁外へ掘り込んで，粘土と砂で構築。遺存状態は悪く，天井部は崩落しているが，袖部は残存している。火床部は焼けて焼土化し，焚口部から煙道部へかけての傾斜は比較的緩く立ち上がり，煙出口近くで急角度となる。

（覆土） 自然堆積。

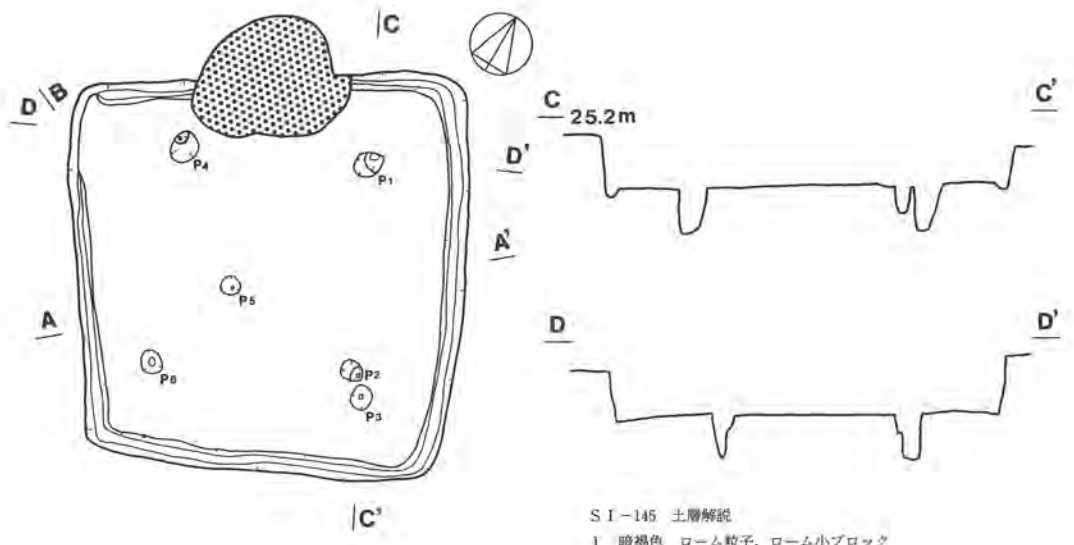
（遺物） 遺物は，竈付近と住居跡の中央部の覆土中層・下層から土師器（坏・甕），須恵器（坏・高台付盤・甕）の破片が集中して出土している。548は須恵器坏で，竈の両袖部から，552・553は須恵器坏で2個が重なって北壁際の床面より出土している。

（所見） 本跡は，第7号溝によって，東・南壁の一部が壊されているが，遺構の形態・遺物から

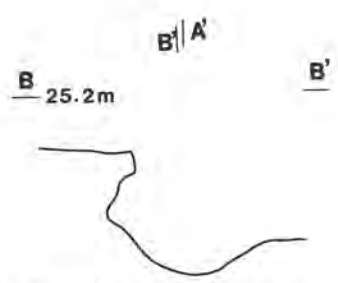
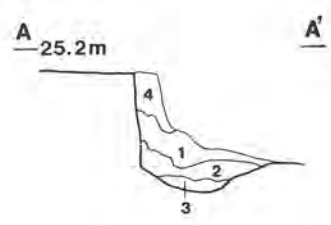
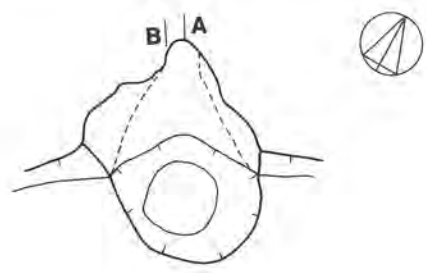
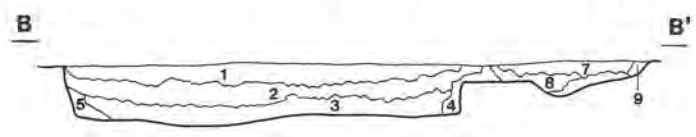
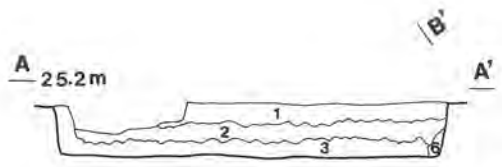
判断して、9世紀前半に比定される住居跡である。

第145号住居跡出土遺物解説表

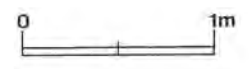
図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第263図 548	坏 須恵器	A 11.5	底部は平底。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	80% 覆土
		B 3.6			
		C 6.2			
549	坏 須恵器	A (14.4)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	50% 覆土
		B 4.3			
		C 8.1			
550	坏 須恵器	A (13.4)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫 灰色 良好	40% 覆土
		B 4.4			
		C (8.0)			
551	坏 須恵器	A (14.2)	底部は平底。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 不良	40% 覆土
		B 3.9			
		C (8.4)			
552	坏 須恵器	A 11.2	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰色 良好	100% 覆土
		B 3.4			
		C 7.2			
553	坏 須恵器	A 11.2	底部は平底。体部から口縁部にかけては内彎気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺部ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 良好	100% 覆土
		B 3.4			
		C 6.4			
554	坏 須恵器	A 11.2	底部は平底。体部から直立に近く、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	90% 覆土
		B 4.0			
		C 6.0			
555	坏 須恵器	A 14.7	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	70% 覆土
		B 3.9			
		C 9.6			
556	高台付皿 須恵器	A 22.2	体部は僅かに丸味をもち、口唇部は僅かな平坦面をもつ。 高台は角形を呈し、外端部が接地する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・砂礫・雲母 灰白色 普通	80% 覆土
		B 2.4			
		D 13.3			
		E 0.5			



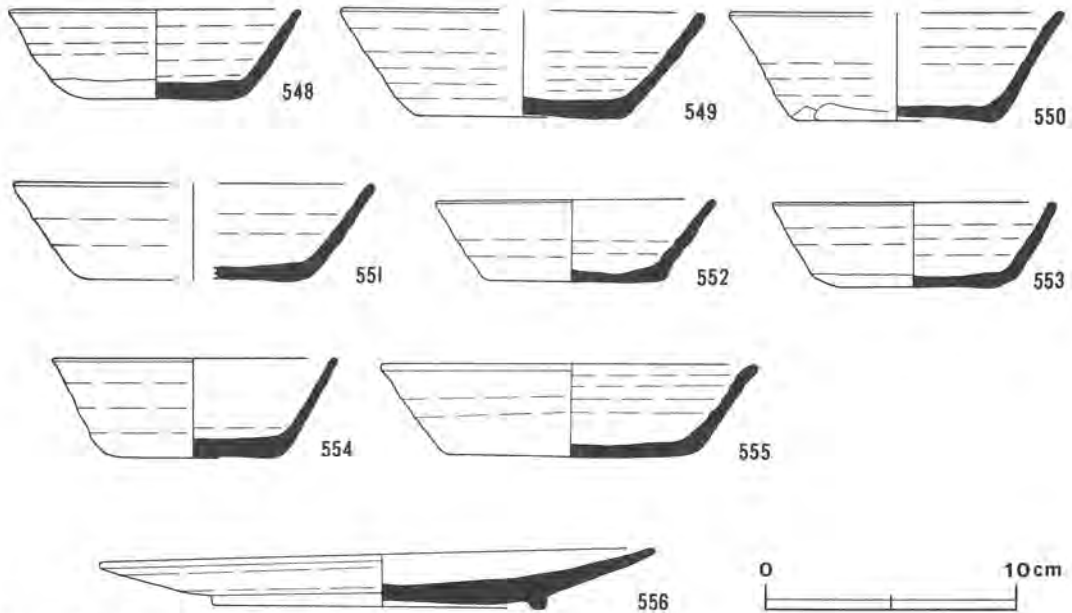
- SI-145 土層解説
- 1 暗褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
 - 2 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
 - 3 褐色 ローム粒子, ローム中ブロック
 - 4 暗褐色 ローム・炭化粒子
 - 5 褐色 ローム粒子
 - 6 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
 - 7 暗褐色 ローム・焼土粒子
 - 8 褐色 ローム粒子
 - 9 褐色 ローム粒子



- SI-145竈 土層解説
- 1 褐色 ローム粒子, 焼土, 粘土
 - 2 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, 焼土ブロック
 - 3 暗赤褐色 焼土
 - 4 褐色 ローム粒子, ロームブロック



第262図 第145号住居跡・竈実測図



第263図 第145号住居跡出土遺物実測図

第146号住居跡 (第259図)

(位置) 調査区北側。C7f₉区を中心に確認。

(重複) 第143号住居跡と重複。

(所見) 本跡は、縄文時代中期の加層利E II～III式期の遺物を出土しているが、住居跡は、溝と重複し遺構の全容を把握することは不可能であった。

第148号住居跡 (第264図)

(位置) 調査区の東側、C8f₄区を中心に確認。

(重複) 第9号溝と重複。

(床) 調査可能な箇所は硬く踏み固められて堅緻である。

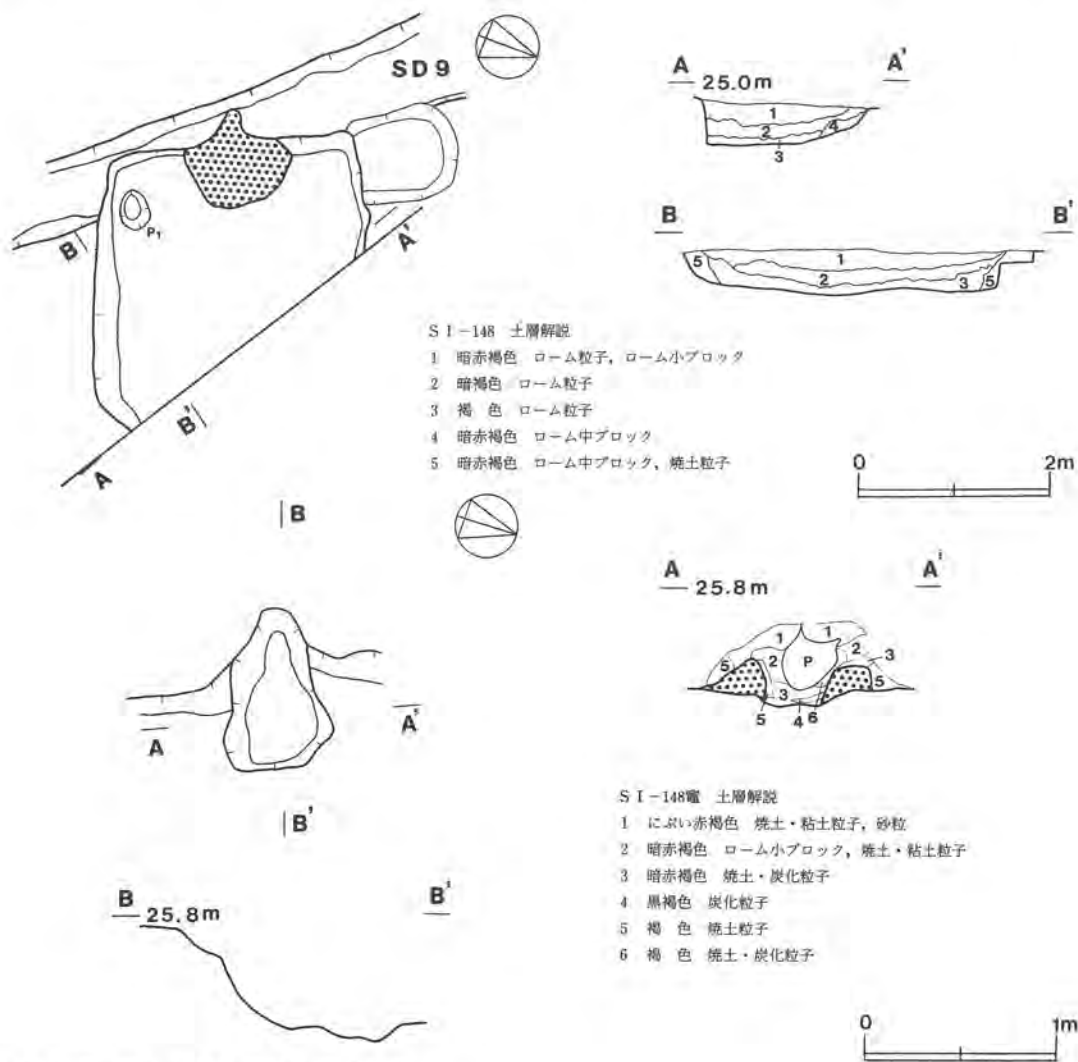
(竈) 北壁中央部の壁を40cm程壁外へ掘り込んで粘土・砂で構築。遺存状態は悪く、天井部は崩落しているが、袖部は残存している。火床部は焼土化し、焚口部から煙道部は比較的緩やかに立ち上がりを示し、煙出口近くでは急角度で立ち上がっている。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 竈付近から土師器 (坏・壺・甕)、須恵器 (坏・蓋) の破片が出土している。563は土師器甕、561は土師器小型壺、557土師器坏で床面から出土している。また、須恵器坏・蓋片がいずれも竈内部から出土している状況から、竈の補強材として用いられた土器である。

(所見) 本跡は調査区域外と接する地区から検出され、第9号溝に破壊されており、全容を把

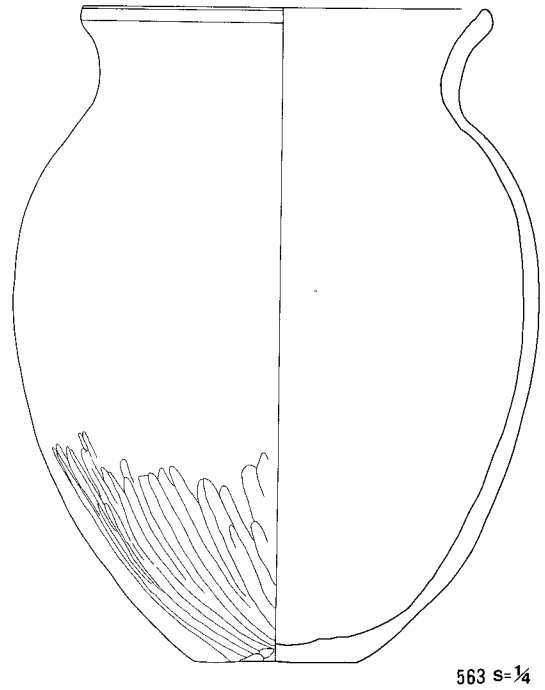
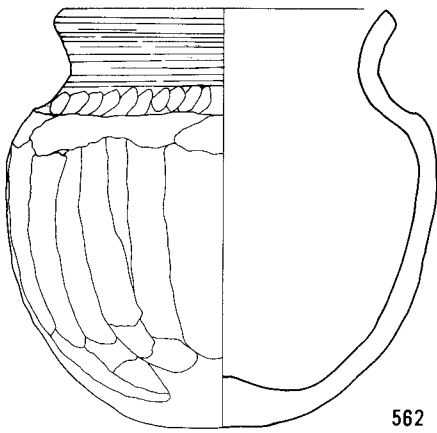
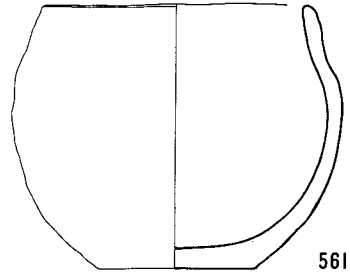
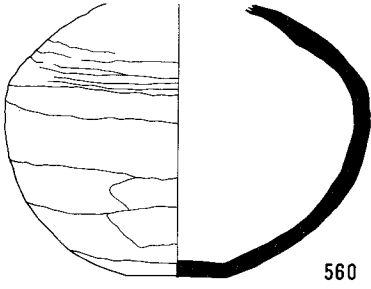
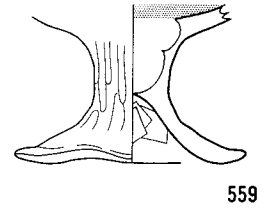
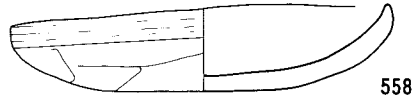
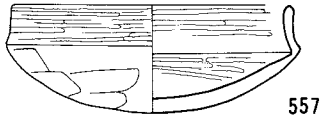
握することは困難であったが、出土した遺物から、6世紀後半に比定される住居跡である。



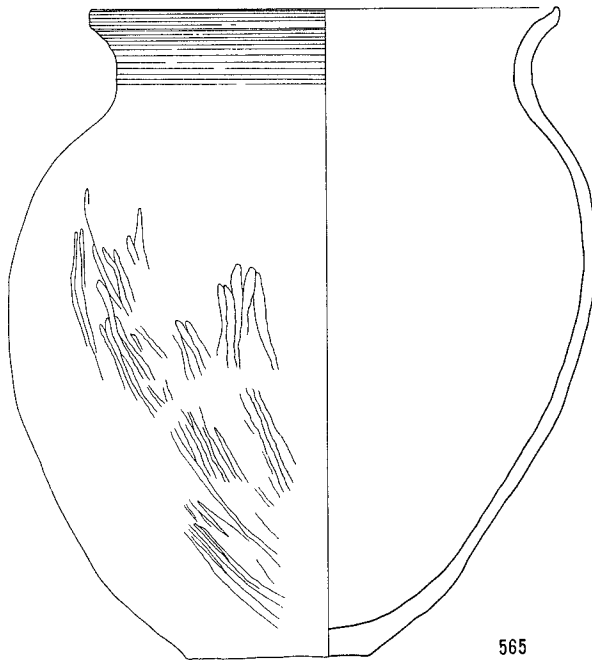
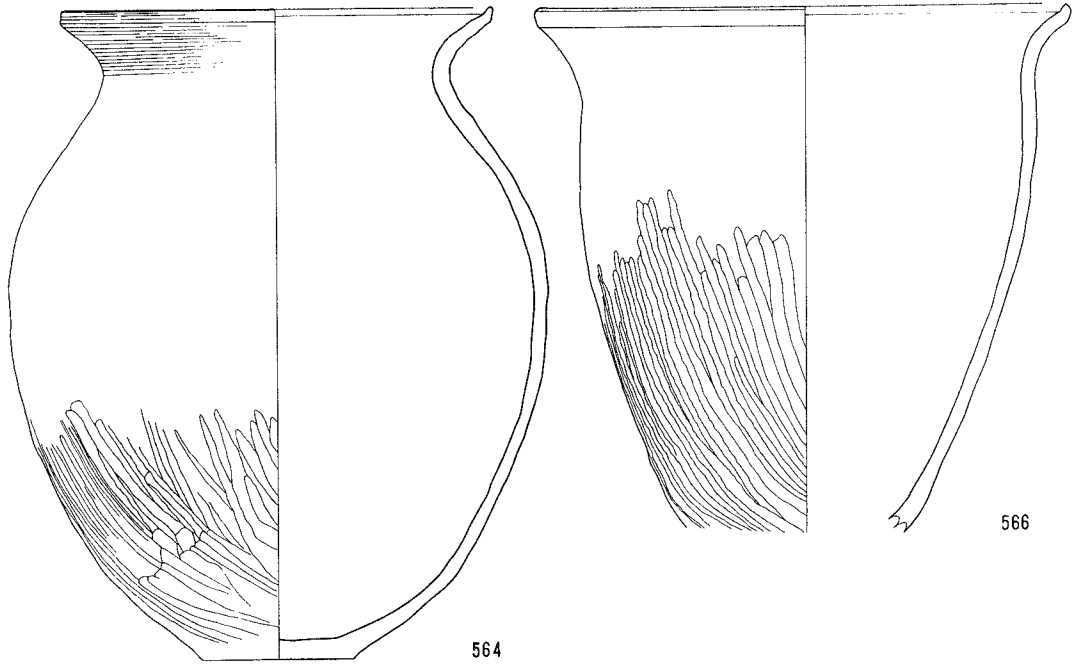
第264図 第148号住居跡・竈実測図

第148号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第265図 557	坏 土節器	A 11.1	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもち折れて外反気味に立ち上がる。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 良好	100% 覆土
		B 4.3			
558	坏 土節器	A 15.2	底部は丸底。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立し、端部は尖る。体部外面へラ削り。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	90% 覆土
		B 3.5			



第265图 第148号住居跡出土遺物実測図(1)



s=1/4



第266图 第148号住居跡出土遺物実測図(2)

第148号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第265図 559	高坏 土師器	B (6.4) C (9.2)	坏体部は直線的に立ち上がる。脚部膨らみなく、裾は大きく「ハ」の字状に開き、端部は尖る。外面ヘラ削り後磨き。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 良好	30% 坏内面黒色処理 覆土
560	壺 須恵器	B (11.0) C 3.9	底部は平底。口縁部欠損。胴部は強く内彎しながら肩部に向けて内傾する。胴部上位ヘラナデ、下位ヘラ削り。	砂粒・砂礫・長石 灰色 普通	90% 覆土
561	壺 土師器	A 10.3 B 10.6 C 6.1	底部は平底。胴部はやや球状を呈し、口頸部は内傾して立ち上がる。胴部外面ヘラナデ。	砂粒・砂礫・長石 黄褐色 普通	90% 覆土
562	壺 土師器	A 13.0 B 16.9	底部は丸底。胴部はやや球状を呈し、頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は丸味をもつ。胴部との境に稜を有す。胴部ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい橙色 普通	90% 覆土
563	甕 土師器	A 21.4 B 34.8 C 8.5	底部は平底。胴部はやや扁平な球状を呈し、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は丸味をもって立ち上がる。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 橙色 普通	95% 竈
第266図 564	甕 土師器	A (22.8) B 34.9 C 8.1	底部は平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方につまみ出されている。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい橙色 普通	60% 覆土
565	甕 土師器	A 24.6 B 34.6 C 9.6	底部は平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、中位に最大径を有す。頸部は「く」の字状に外反し、口縁部は内上方につまみ出されている。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 にぶい橙色 普通	40% 覆土
566	甕 土師器	A 27.7 B (28.2)	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は外に強く屈曲する。口縁部は上方につまみ出されている。胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・長石 橙色 普通	90% 覆土

第150号住居跡（第253図）

（位置） 調査区の南側，E5h₃区を中心に確認。

（重複） 第140号住居跡，第6号溝と重複。

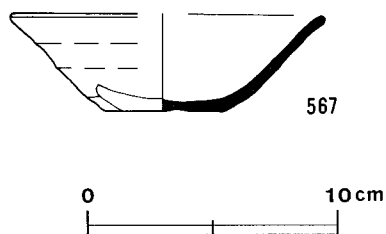
（壁） 壁高は30cmを測り，外傾して立ち上がる。

（床） 全体に凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

（覆土） 不明。

（遺物） 覆土中層・上層から，須恵器（坏・甕・蓋），灰釉陶器（長頸壺）の破片が出土している。

（所見） 本跡は第140号住居跡，第6号溝と重複している。本跡の形状を把握することは，重複している状況から不可能であるが，出土した遺物と重複関係から第140号住居跡よりも新しく，第6号溝より古いことは捉えられ，10世紀前半に比定される住居跡である。



第267図 第150号住居跡出土遺物実測図

第150号住居跡出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第267図 567	坏 須恵器	A 12.4 B 3.9 C 4.9	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り。周辺ヘラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	40% 覆土

第151号住居跡 (第268図)

(位置) 調査区の北側，C8e₂区を中心に確認。

(壁) 壁高は40cmを測り，垂直に立ち上がる。

(周溝) 幅20cm，深さ10cmを測り，掘り込み断面形状はL状を呈す。

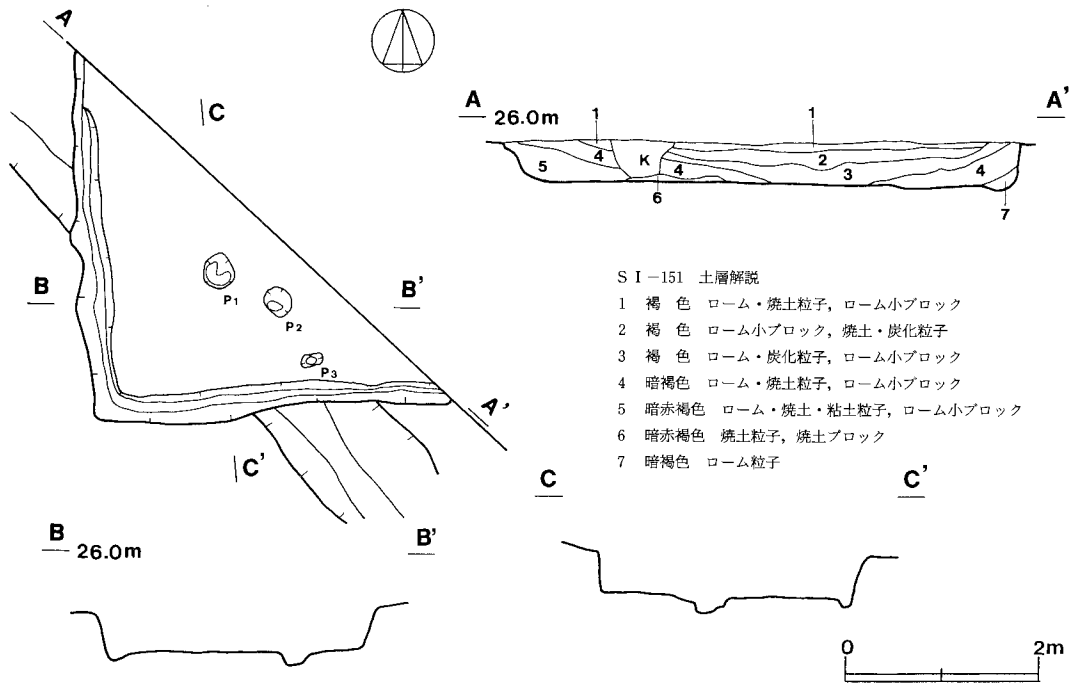
(床) 全体に若干凸凹しているが，硬く踏み固められて堅緻である。

(ピット) 3カ所(P₁～P₃)。掘り込みは，径30～40cm，深さ30～40cm。支柱穴の一部である。

(覆土) 自然堆積

(遺物) 遺物は，覆土上・中層から土師器坏・甕片が出土している。

(所見) 本跡の大部分は，農道下に構築されている状況で，全体の1/3程度しか調査が実施できなかった状況で全容を把握することは困難であり，本跡の時期は不明である。



第268図 第151号住居跡実測図

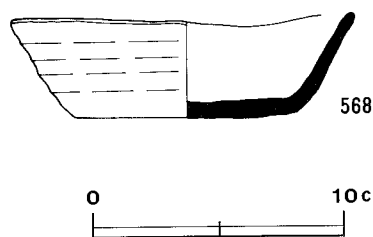
第3節 土坑

当遺跡からは、14基の土坑が検出されている。それぞれの土坑からは、必ずしも十分な資料が得られなかったために、時期・性格等を解明できたものは殆ど無かった。

各々の土坑の解説は、一覧表（第2表）の中に掲載した。

第2表 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (cm)			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径	短径	深さ					
1	C7i ₃	N-46°-E	方形	210	170	60	外傾	平坦	人為		SI-11A・B号と重複
2	C7g ₇	N-47°-W	方形	100	94	70	垂直	平坦	人為		
6	D6b ₃	N-25°-W	楕円形	150	120	44	外傾	平坦	人為		SI-53A・B号と重複
7	D6c ₅	N-8°-E	楕円形	150	140	24	外傾	平坦	人為		SI-53A・B号と重複
8	D6c ₄	N-44°-W	楕円形	140	120	30	垂直	平坦	人為		SI-53A・B号と重複
9	D6c ₄	N-34°-W	楕円形	80	72	11	外傾	平坦	自然		SI-53A・B号と重複
10	D6c ₄	N-28°-E	楕円形	114	100	23	外傾	凸凹	自然		SI-53A・B号と重複
11	D7c ₄	N-18°-W	楕円形	124	90	65	垂直	凸凹	人為		SI-91号と重複
12	D7d ₄	N-50°-W	楕円形	46	44	28	垂直	平坦	人為		SI-91号と重複
13	D7d ₃	N-55°-E	楕円形	110	94	68	垂直	平坦	人為		SI-91号と重複
14	D7c ₃	N-10°-W	不正方形	94	88	50	垂直	平坦	人為		SI-91号と重複
15	E6i ₂	N-25°-W	楕円形	106	82	20	外傾	平坦	人為	須恵器坏	SI-97号と重複
16	D8h ₂	N-38°-E	不正方形	230	200	45	外傾	凸凹	自然		
17	D7h ₇	N-50°-E	楕円形	140	120	30	外傾	平坦	人為		
18	D7h ₇	N-40°-E	楕円形	156	110	26	外傾	平坦	人為		



第269図 第15号土坑出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 568	坏 須恵器	A 13.6	底部は平底。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は丸味をもつ。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	75% 覆土
		B 4.2			
		C 8.8	体部内・外面水挽き整形。底部ヘラ切り。周辺ヘラ削り。		

第4節 地下式壙

当遺跡からは、4基の地下式壙が検出されている。検出位置は、遺跡の北側に3か所。西側に1か所と比較的まとまりをもって構築されている。

第1号地下式壙（第270図）

（位置） 調査区の北側、C7d₆区を中心に位置する。

（規模と形状） 竪坑と主室からなり、主室の天井部は、既に崩落している。全長は3.65mであり、竪坑は上面が楕円形で長径1.3m、短径1.1m、深さ1.6mを測る。上面の掘り方は楕円形で、底面は方形プランを呈し、一辺0.9mを測る。竪坑の底面南隅から羨道がのび、長さ9.5mで主室とつながる。羨道部の立面形はアーチ状を呈し、幅0.7m、高さ1.5mを測る。主室は、隅丸長方形を呈し、長さ2.0m、幅2.7m、高さ1.9mで、壁の立ち上がりの傾斜から判断して、ドーム状を呈していたものと考えられる。

（主軸方向） N-29°-W

（覆土） 土層は、自然堆積で、竪坑から主室に向かっては、斜め方向に堆積している。

（所見） 本跡は、比較的小型の地下式壙である。本跡からは、時期を決定する遺物は検出されなかったが、遺構の形状・規模等から判断して、中世に位置するものと考えられる。

第2号地下式壙（第270図）

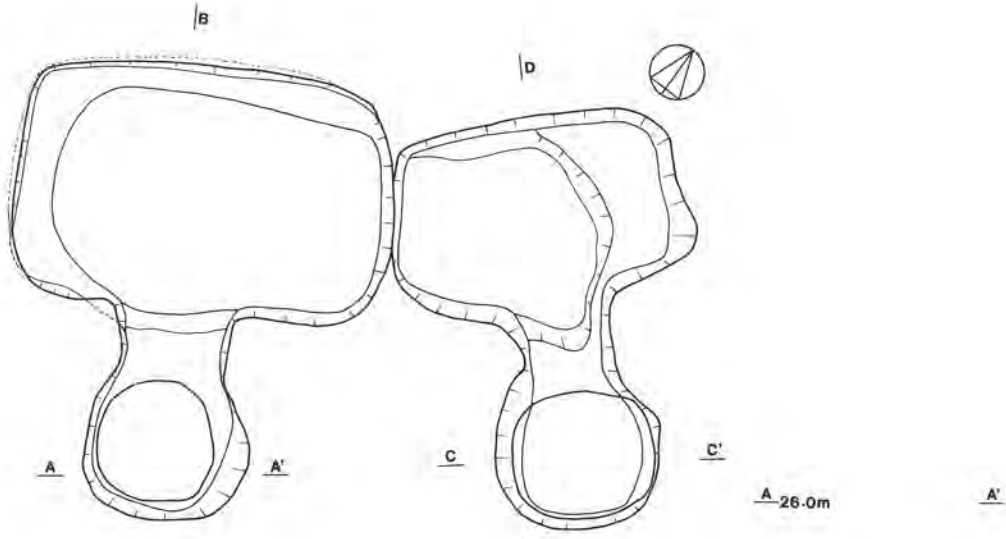
（位置） 調査区の北側、C8c₁区を中心に位置する。

（規模と形状） 竪坑と主室からなり、主室の天井部は既に崩落している。全長は3.35mであり、竪坑は上面が長方形で長辺1.35m、短辺1.3m、深さ1.1mを測る。底面は方形プランを呈し、1.1m×1.0mを測る。竪坑の底面南側から羨道がのび、長さ0.5mで主室とつながる。羨道部の立面形はアーチ状を呈し、幅0.7m、高さ1.0mを測る。主室は底面が隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅2.3m、高さ1.5mを測り、北壁・東壁はオーバーハングしている状況であり、壁の立ち上がり傾斜から判断して主室はドーム状を呈していたものと考えられる。竪坑部・羨道部・主室部の底面は段差がなく平坦でつながっている。

（主軸方向） N-43°-E

（覆土） 土層は、自然堆積で、竪坑から主室に向かっては、斜め下方に堆積している。

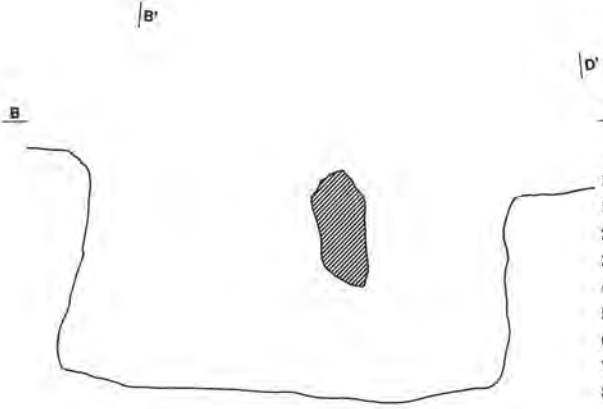
（所見） 本跡は、第1号地下式壙と接して構築され、比較的小型の地下式壙である。本跡からは、時期を決定する遺物は検出されなかったが、遺構の形状・規模等から判断して、中世の時期に構築されたものと考えられる。



1号

2号

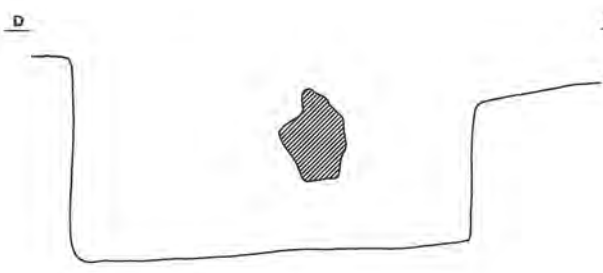
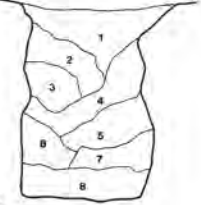
A 26.0m



D'

1号 地下式墳 土層解説

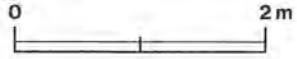
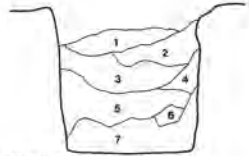
- 1 におい褐色 炭化粒子, ローム小~大ブロック多
- 2 褐色 焼土粒子, 粘土中ブロック, ローム小ブロック多
- 3 褐色 粘土中ブロック, ローム小ブロック多
- 4 褐色 粘土中ブロック, ローム中・大ブロック
- 5 褐色 ローム粒子, 粘土・ローム小ブロック多
- 6 褐色 粘土・ローム中ブロック
- 7 褐色 ローム粒子, 粘土中ブロック・ローム小ブロック多
- 8 褐色 ローム粒子, 粘土・ローム小ブロック



D'

2号 地下式墳 土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化粒子, ローム小ブロック
- 2 褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 3 褐色 ローム小・中ブロック
- 4 におい赤褐色 ローム粒子, ローム小ブロック
- 5 褐色 ローム小・中ブロック
- 6 褐色 砂粒・ローム小ブロック
- 7 褐色 ローム小ブロック



第270図 第1・2号地下式墳実測図

第3号地下式墳（第271図）

（位置） 調査区の中央部，D6e₁区を中心に位置する。

（規模と形状） 竪坑と主室からなり，主室の天井部が遺存している一番良好な地下式墳である。全長は3.1mであり，竪坑は上面の方形で一辺0.5m深さ1.3mを測る。底面は方形プランを呈し，一辺0.75m×0.6mを測る。羨道部の立面形はアーチ状を呈し，高さは0.8mを測る。羨道部は長さ0.6mで主室とつながっている。主室は，底面が隅丸長方形を呈し，長さ1.5m，幅2.0m，高さ0.9mを測り，東・南・西・北壁はオーバーハングして立ち上がり，天井部はドーム状を呈している。

（主軸方向） N-48°-W

（覆土） 土層は，自然堆積で，竪坑から主室に向かって，斜め方向に堆積している。

（所見） 本跡は，比較的小型の地下式墳であるが，羨道部から主室への接続する場所が主室の中央部ではなく，玄室の南東コーナー部であり，特異な形態を示している。本跡からは，時期を決定する遺物は検出されなかったが，遺構の形状・規模等から判断して，中世に位置するものと考えられる。

第4号地下式墳（第271図）

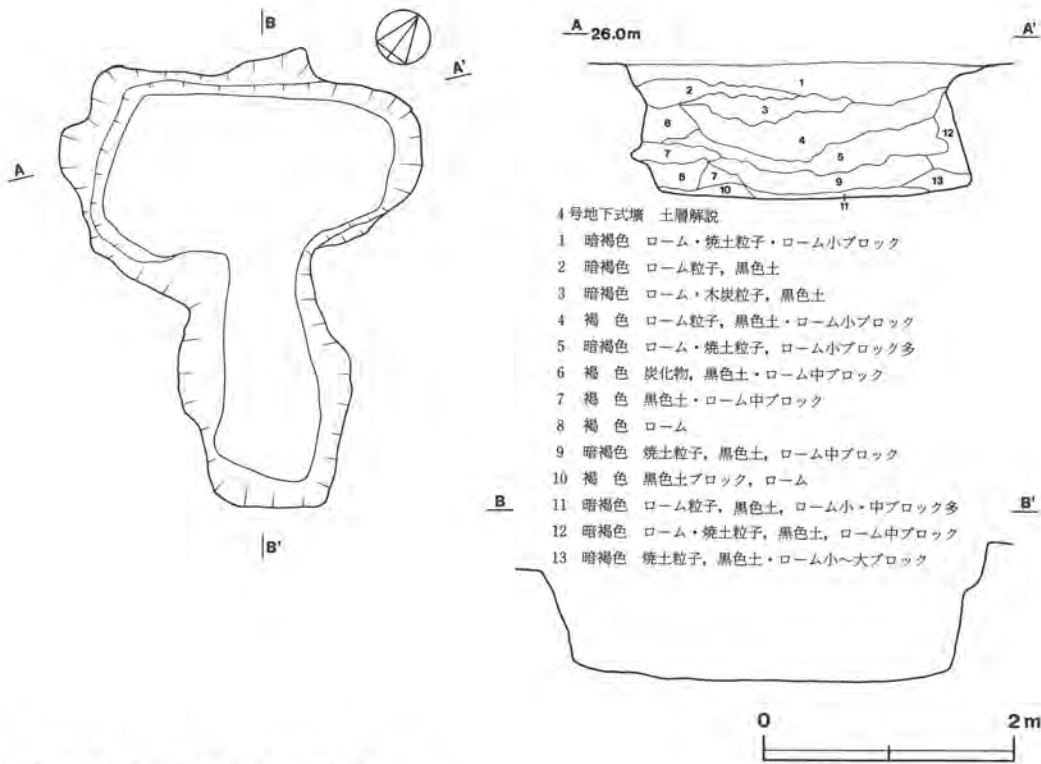
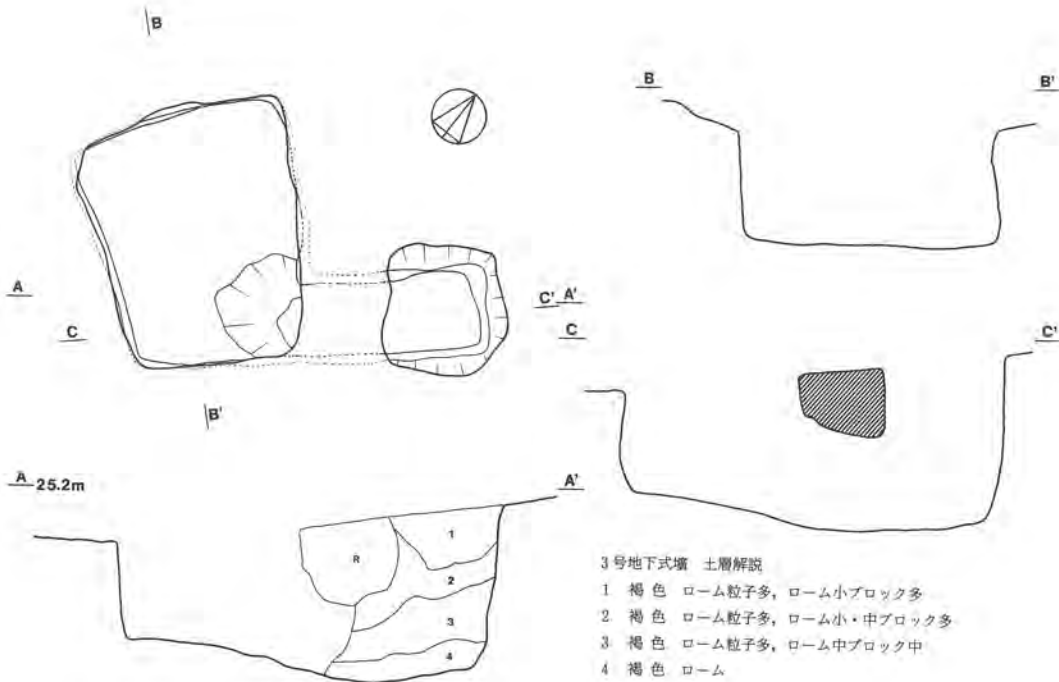
（位置） 調査区の北側，C7e₉区を中心に位置する。

（規模と形状） 竪坑と主室からなり，竪坑の一部と主室の天井部は，既に崩落している。全長は3.6mであり，竪坑は，上面が方形状で，長辺1.1m×短辺0.7m，深さ0.9mを測り，底面は長方形プランを呈し，長辺0.8m×短辺0.5mを測る。羨道部・主室部の天井は崩落し，立面形状は不明である。羨道部は長さ1.4m，幅2.3mを測る。主室部は長辺1.5m×短辺1.3mである。竪坑部・羨道部・主室部はいずれも平坦で，つながっている。

（主軸方向） N-37°-W

（覆土） 土層は，自然堆積で竪坑から主室に向かって，斜め方向に堆積している。

（所見） 本跡は，小型の地下式墳であり，本跡からは，時期を決定する遺物は検出されなかったが，遺構の形状・規模等から判断して，本跡も中世の時期に構築されたと考えられる。



第271図 第3・4号地下式墳実測図

第5節 井戸

当遺跡からは、8基の井戸が検出された。検出位置は、調査区中央部より北側に4基、西側に3基、南側に1基と比較的集中して検出されている。また、調査時には全ての井戸から湧水している状況であり、いずれも湧水のため壁の崩落が激しく、完掘はできなかった。

第1号井戸（第272図）

（位置） 調査区の北側，C7j₉区に確認。

（規模と形状） 長径2.9m×短径2.8mを測り，確認面は円形を呈している。掘り方は確認面から1.5mまでは円筒形で，それ以下は一辺1.2mの方形状の掘り込みである。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 全て覆土からの出土で，土師器甕片・須恵器坏片である。

（所見） 素掘りの井戸で，確認面から3.7mの深さまで調査したが，湧き水による壁の崩落が著しく，それ以下の調査は断念した。

第2号井戸（第272図）

（位置） 調査区の北側，C8i₅区・C8j₅区に確認。

（規模と形状） 長径3.6m×短径3.4mを測り，確認面は円形を呈している。掘り方は確認面から0.7mまでは円筒形で，それ以下は一辺1.4mの方形状の掘り込みである。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 全て覆土からの出土で，土師器坏片・須恵器坏片・礫片である。

（所見） 素掘りの井戸で，確認面から1.5mの深さまで調査したが，湧き水による壁の崩落が著しく，それ以下の調査は断念した。

第3号井戸（第273図）

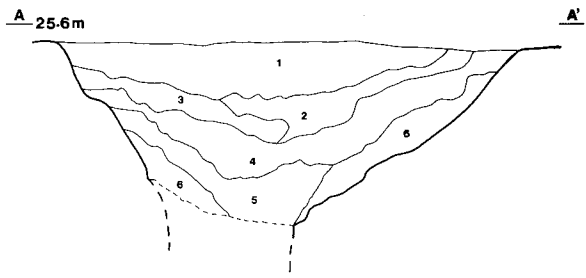
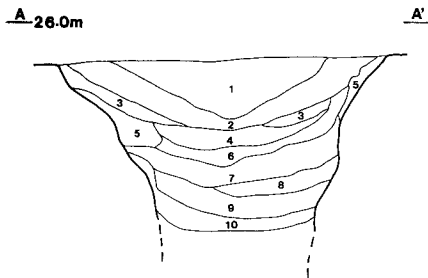
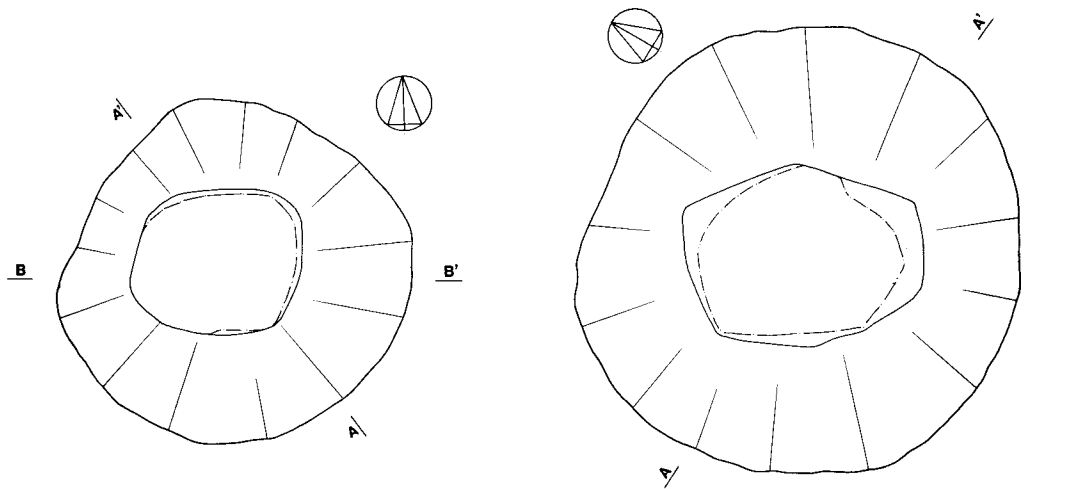
（位置） 調査区の南側，F6g₆区に確認。

（規模と形状） 掘り方上位は長径2.8m×短径2.6mの不整円形を呈しているが，1.0m以下の掘り方は1.15mの方形の掘り込みである。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土下層から，薄板や杭の断片とみられる木片及び土師器坏片・須恵器坏・蓋片が出土している。

（所見） 素掘りの井戸で，確認面は不整円形，掘り込みは方形である。確認面から2.0mの深さまで調査したが，湧き水による壁面の崩落が著しく，それ以下の調査は断念した。



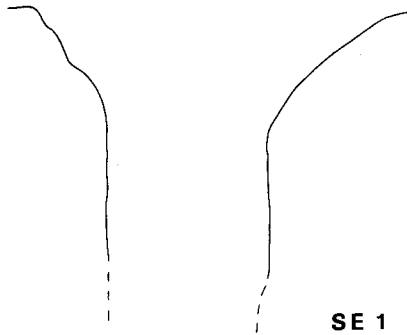
SE-1 土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 2 暗赤褐色 焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 3 にぶい赤褐色 ローム中ブロック, 焼土粒子
- 4 暗赤褐色 ローム・焼土・細砂小ブロック
- 5 にぶい赤褐色 ローム中ブロック, 焼土小・ローム中ブロック
- 6 暗褐色 ローム中ブロック, 焼土小ブロック
- 7 褐色 ローム粒子, ローム小・中・大ブロック多, 焼土ブロック
- 8 褐色 ローム中・大ブロック多
- 9 褐色 ローム中ブロック多, 砂粒
- 10 褐色 ローム小〜中ブロック多

SE-2 土層解説

- 1 暗褐色 焼土・木炭粒子, 黒色土・ロームブロック
- 2 暗褐色 黒色土・ロームブロック
- 3 褐色 砂, 黒色土・ロームブロック
- 4 極暗褐色 黒色土, 粘土粒子, ロームブロック
- 5 暗褐色 黒色土, 焼土・ロームブロック
- 6 褐色 ローム

SE 2



第272図 第1・2号井戸実測図

第4号井戸（第273図）

（位置） 調査区の中央部，D6e・f₁区に確認。

（規模と形状） 掘り方上位は長径3.7m×短径3.5mの不整円形を呈しているが，1.6m以下の掘り方は一辺が1.7mの方形の掘り込みである。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土中層から，土師器坏・甕片，須恵器坏片が出土している。

（所見） 素掘りの井戸で，確認面から1.7mで湧水が激しく，壁の崩落も著しいため，それ以下の調査は断念した。

第5号井戸（第274図）

（位置） 調査区の中央部，C5i₉区に確認。

（規模と形状） 長径2.8m×短径2.7mを測り，確認面は不整円形を呈している。上段部は長径1.6m×短径1.4m，深さ0.9mの不整円形で，下段部の掘り方は，長辺1.1m×短辺0.8m，深さ0.5mを測り，長方形の掘り込みである。

（覆土） 土層は，自然堆積で，全体にロームブロックが多量に混入している。

（遺物） 覆土上・中層より土師器坏片，須恵器坏片が出土している。

（所見） 素掘りの井戸で，二段の掘り込みを呈している。また，本跡は，1.4mで湧水が激しく，壁の崩落が著しいため，それ以下の調査は断念した。

第6号井戸（第274図）

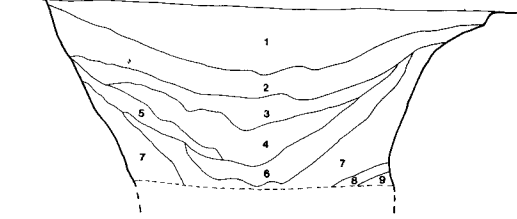
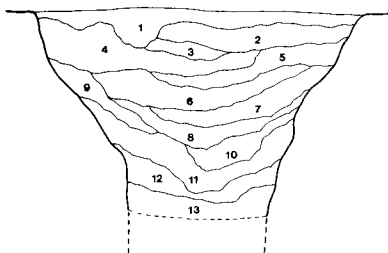
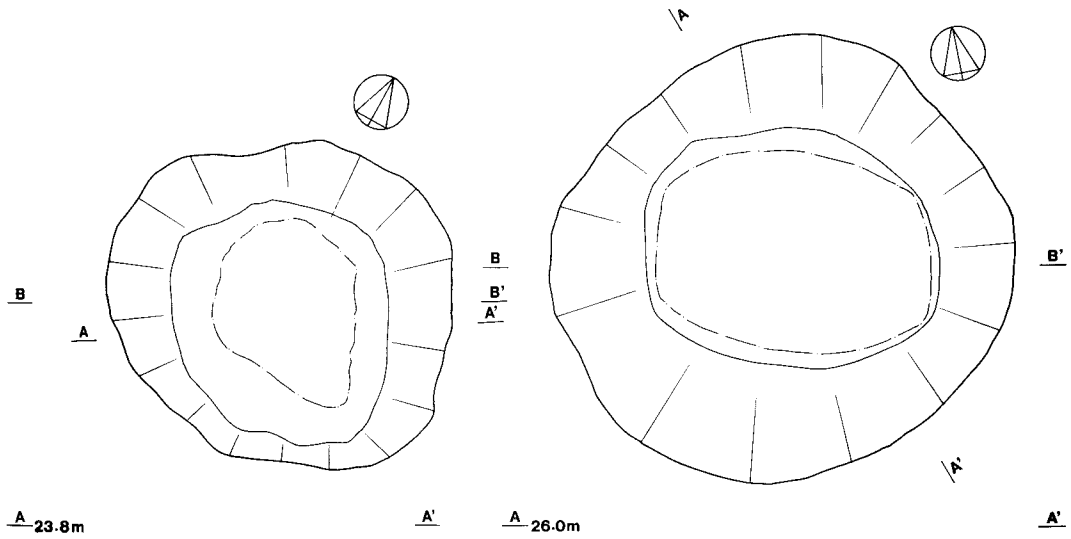
（位置） 調査区の中央部，D5f₅区を中心に確認。

（規模と形状） 掘り方上位は長径3.2m×短径2.6mの楕円形を呈しているが，1.2m以下の掘り方は一辺1.0mの方形の掘り込みである。

（覆土） 土層は，自然堆積で，ローム層と黒色土層とにロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が多量に混入した交互層になっている。

（遺物） 覆土中・下層より土師器坏・甕片，須恵器坏片，礫が投棄や流れ込みの様相を呈して出土している。

（所見） 素掘りの井戸で，確認面は楕円形，掘り方は方形である。また，東壁部は二段の階段状に構築され，第一段目は，検出面から0.8m，第二段目は，第一段目より0.5m下った位置に付設されている。本跡は，1.3mで湧水が激しく，それ以下の調査は断念した。



SE-3 土層解説

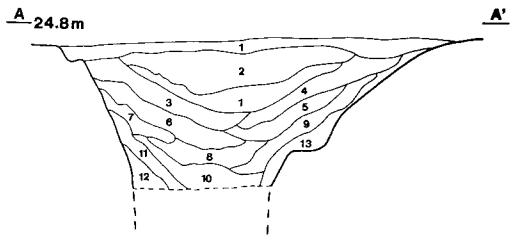
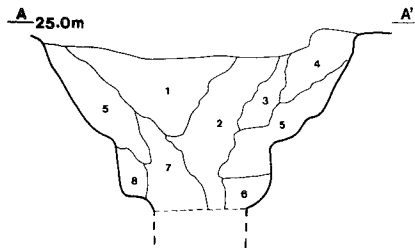
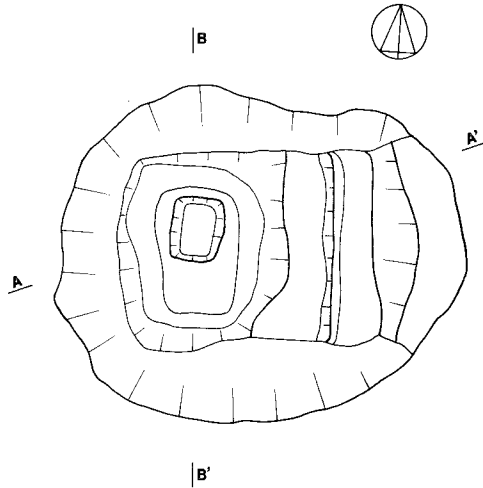
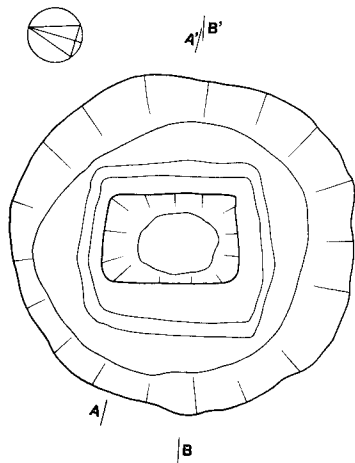
- 1 暗褐色 ローム粒子少, ローム小ブロック
- 2 褐色 ローム・粘土粒子少, ローム小ブロック
- 3 褐色 焼土小〜中ブロック多, 砂粒少
- 4 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子
- 5 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 6 褐色 ローム・焼土粒子, ローム小ブロック
- 7 褐色 ローム中・大ブロック多
- 8 暗褐色 焼土粒子, ローム小〜大ブロック中
- 9 明褐色 焼土粒子, ローム大ブロック
- 10 橙 色 粘土粒子, 粘土大ブロック多, ローム中ブロック
- 11 褐色 焼土・炭化粒子, 粘土小ブロック, ローム小・中ブロック
- 12 褐色 粘土大ブロック, ローム大ブロック多
- 13 暗褐色 炭化粒子, 粘土小ブロック

SE-4 土層解説

- 1 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 2 暗赤褐色 ローム・粘土粒子, ローム中ブロック
- 3 黒褐色 ローム粒子, 砂粒・ローム小ブロック
- 4 極暗褐色 ローム粒子, ローム中ブロック
- 5 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 6 褐色 ローム粒子, ローム小〜大ブロック多
- 7 褐色 粘土中ブロック, ローム小・中ブロック多
- 8 褐色 粘土中ブロック, 泥炭土
- 9 褐色 粘土



第273号 第3・4号井戸実測図

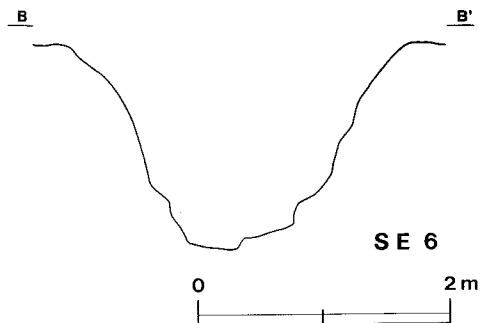
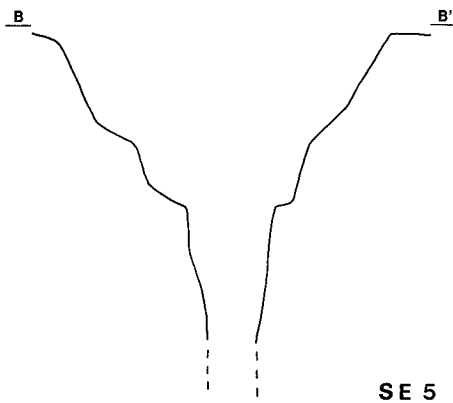


SE-5 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子, 炭化物, ローム中ブロック
- 2 暗赤褐色 炭化物, ローム中ブロック
- 3 暗褐色 焼土・炭化粒子, ローム小~大ブロック
- 4 褐色 炭化物, ローム・粘土小・中ブロック多
- 5 暗赤褐色 炭化物, 粘土, ローム小・中ブロック
- 6 暗褐色 炭化物, 粘土小・中ブロック, ローム中ブロック
- 7 暗褐色 炭化物, ローム中ブロック
- 8 におい赤褐色 粘土・ローム多

SE-6 土層解説

- 1 黒褐色 ローム・焼土粒子, 粘土小ブロック
- 2 黒褐色 ローム粒子, 粘土・ローム小・中ブロック多
- 3 黒褐色 焼土・炭化・ローム粒子
- 4 黒褐色 粘土・ローム小ブロック
- 5 黒褐色 炭化粒子, 粘土中ブロック, ローム小・中ブロック
- 6 黒褐色 炭化・ローム粒子
- 7 黒褐色 ローム中ブロック
- 8 黒褐色 炭化物・ローム粒子, 粘土中ブロック
- 9 黒褐色 炭化・ローム粒子, 粘土小・中ブロック多
- 10 暗褐色 ローム小ブロック
- 11 暗褐色 炭化・ローム粒子
- 12 暗褐色 焼土・炭化・ローム粒子
- 13 黒褐色 ローム粒子, 粘土小~大ブロック, ローム中ブロック



第274図 第5・6号井戸実測図

第7号井戸（第275図）

（位置） 調査区の中央部，D5h₉区に確認。

（規模と形状） 掘り方上位は長辺2.6m×短辺2.0mの長方形を呈している。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土中・下層から，土師器甕・坏片，須恵器坏片，礫が投棄や流れ込みの様相を呈して出土している。

（所見） 本跡は素掘りで，深さ1.2mを測り，底面が平坦な箱形を呈している。（本跡の北壁部が，第2号溝と接続している状況や，掘り込みが比較的浅く，箱形を呈していることから，井戸というよりはむしろ，排水溜，あるいは洗い場的な機能をもった遺構とも考えられる。）

第8号井戸（第275図）

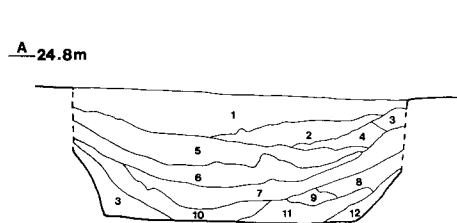
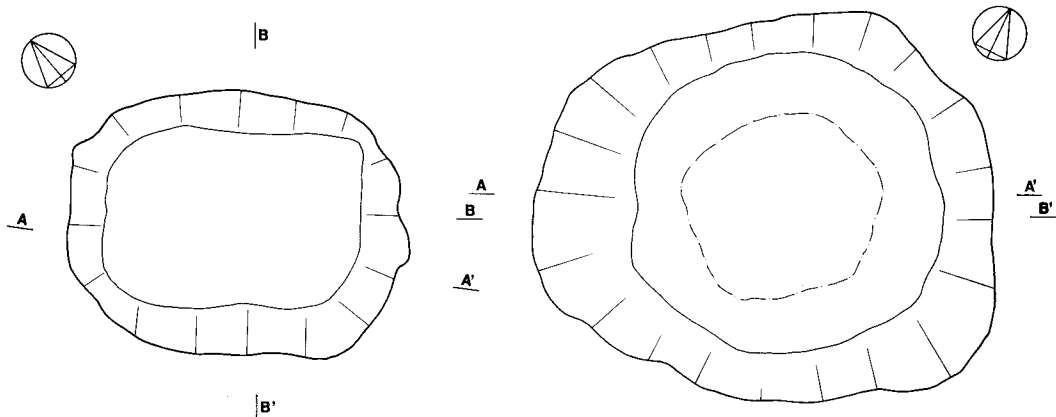
（位置） 調査区の東側，D8a₉区を中心に確認。

（規模と形状） 掘り方上位は長辺1.8m×短辺1.7mを測り，ほぼ方形を呈している。

（覆土） 自然堆積。

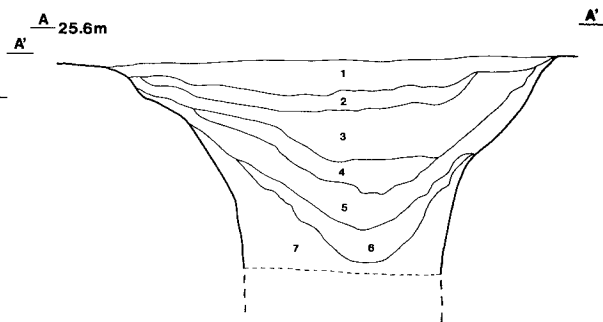
（遺物） 覆土中層から，土師器坏・甕片，須恵器坏片が出土している。

（所見） 素掘りの井戸で，掘り込みは方形である。確認面から1.8mで湧水が激しく，崩落が著しいためそれ以下の調査は断念した。



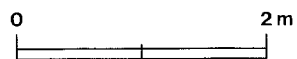
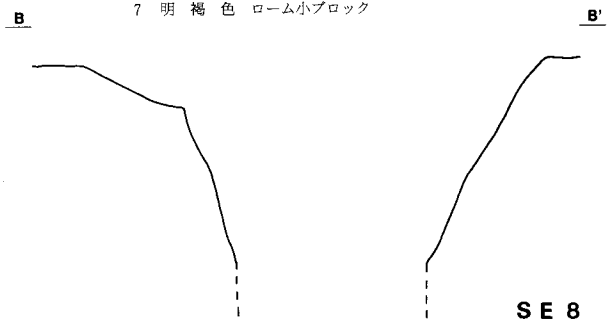
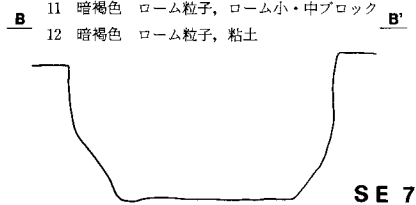
SE-7 土層解説

- 1 黒褐色 ローム・焼土粒子, 焼土小ブロック, 粘土
- 2 黒褐色 ローム・焼土粒子
- 3 褐色 ローム粒子, 粘土多
- 4 黒褐色 ローム・焼土粒子
- 5 暗褐色 ローム・焼土粒子多, ローム小ブロック
- 6 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子, ローム小ブロック
- 7 黒褐色 ローム・焼土粒子, 粘土, ローム小ブロック
- 8 暗褐色 ローム粒子, 粘土
- 9 暗褐色 ローム・焼土粒子, 粘土
- 10 暗褐色 ローム粒子, 粘土
- 11 暗褐色 ローム粒子, ローム小・中ブロック
- 12 暗褐色 ローム粒子, 粘土

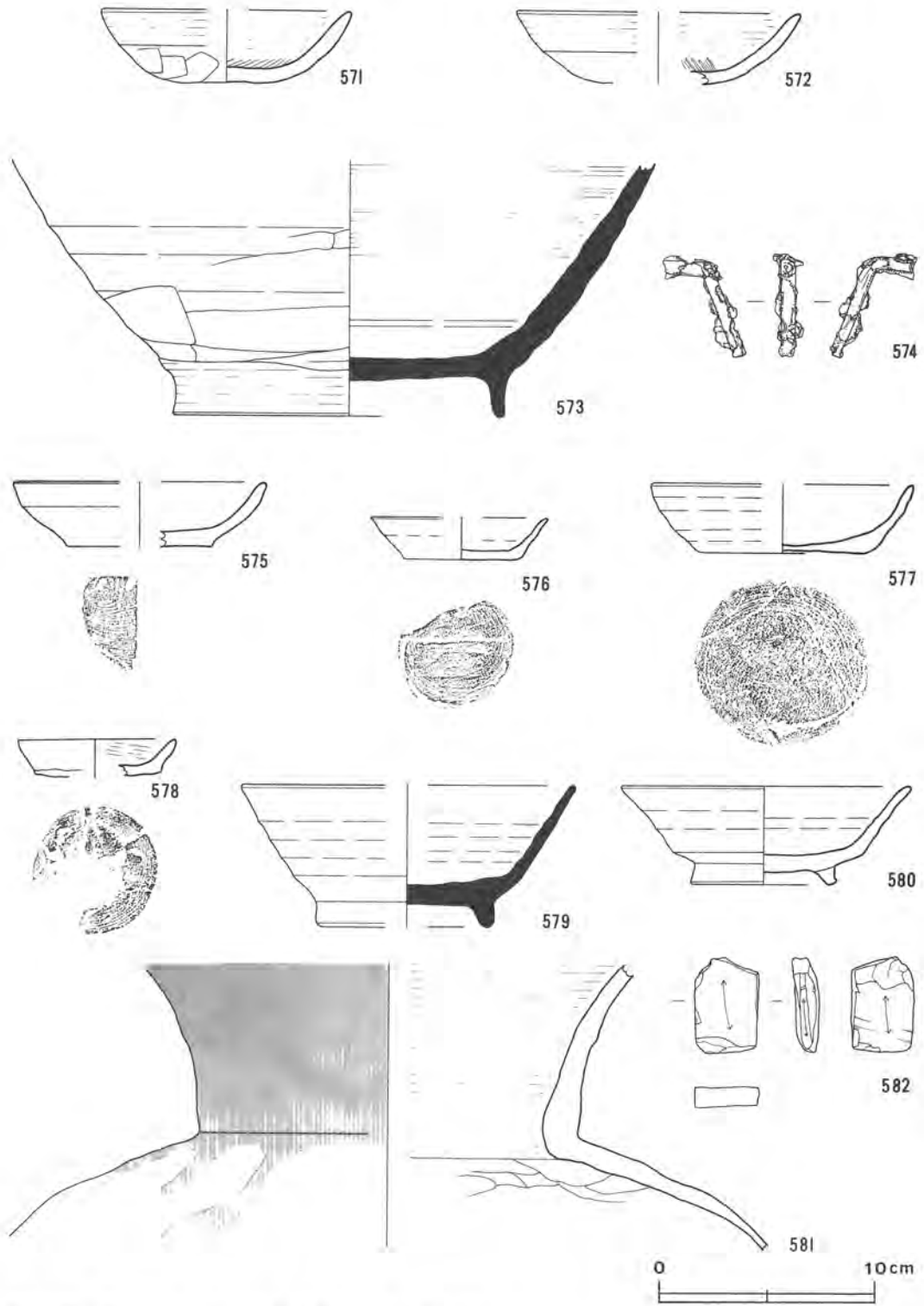


SE-8 土層解説

- 1 褐色 焼土・炭化粒子, ローム小・中ブロック
- 2 褐色 ローム小・中ブロック多
- 3 にぶい褐色 炭化粒子, ローム小・中ブロック
- 4 暗褐色 ローム・炭化粒子, 焼土小ブロック
- 5 褐色 炭化粒子, ローム小・大ブロック
- 6 褐色 炭化粒子, ローム小ブロック
- 7 明褐色 ローム小ブロック



第275図 第7・8号井戸実測図



第276図 第1・2・3・5号井戸出土遺物実測図

第1号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第276図 571	坏 土師器	A (11.6)	底部は丸底気味で、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は丸味をもつ。 体部外面へラ削り。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 良好	40% 器内面に煤付着 覆土
		B 3.4			
572	坏 土師質土器	A (13.3)	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は小さく外反する。 体部外面へラ削り。内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 橙色 良好	40% 覆土
		B (3.4)			
573	高台付壺 須恵器	B 11.9	体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。高台は高く、外下方に開き、端部に面をもつ。 体部外面は横ナデで一部へラナデ整形。底部外面へラナデ。内面ナデ。高台は貼り付け。	砂粒・砂礫 灰黄色 普通	20% 覆土
		D 15.4			
		E 2.0			
図版番号	種類	法量(cm)	器形の特徴	備考	
574	不明 鉄製品	全長(5.5) 太さ 0.6	全体に断面は方形を呈す。 両端部欠損。		

第2号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第276図 575	皿 土師質土器	A (11.6)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転糸切り。	砂粒・砂礫 橙色 良好	30% 覆土
		B 3.0			
		C (7.8)			
576	皿 土師質土器	A (8.2)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転糸切り。	砂粒・砂礫 橙色 良好	50% 覆土
		B 2.0			
		C 5.4			

第3号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第276図 577	皿 土師質土器	A (12.2)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。 体部内・外面水挽き整形。底部回転糸切り。	砂粒・砂礫・雲母 浅黄橙色 普通	70% 覆土
		B 3.2			
		C 7.3			
578	皿 土師質土器	A 7.3	底部は平底。体部は外反して立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部回転糸切り。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	60% 覆土
		B 1.8			
		C (5.8)			

第5号井戸出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第276図 579	高台付坏 須恵器	A (15.7)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。底部に「ハ」の字状に開く高台が付く。 体部内・外面水挽き整形。底部回転へラ切り後ナデ。高台貼り付け。	砂粒・砂礫 灰色 良好	40% 覆土
		B 6.7			
		D (8.3)			
		E 1.2			

第5号井戸出土遺物解説表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 及 び 整 形 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第276図 580	高台付 土師器	A (13.6)	底部は平底。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。底部に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部内・外面水挽き整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。高台貼り付け。	砂粒・砂礫 におい赤褐色 良好	80% 覆土
		B 4.6			
		D 6.6			
		E 0.9			
581	甕 陶磁器	B (13.2)	口縁部は肩部から「く」の字状に屈曲し、外上方にのびる。 肩部外面は叩き目。内面に指頭圧痕。	砂粒 暗オリーブ色 良好	10% 外面に粘付着 覆土
図版番号	種 類	法量(cm)	器形の特徴	備 考	
582	砥 石	全長 4.5 幅 3.0 厚さ 1.3 重さ 18.5g	長方形の砥石。全面に使用痕が認められ、平滑である。側面部は使い減りが顕著。	粘板岩	

第6節 溝

当遺跡からは、6条の溝が検出されている。各溝の時期や性格については、溝の配置状況や地形等から鑑み、排水路的な用途や区画的な用途が考えられるが、出土遺物も少なく不明な点が多い。なお、第1・8・9・10号溝は欠番となっているが、これらは、いずれも現代の土地区画の溝であることが判明したため欠番とした。

第2号溝（第277図）

（位置） 調査区の中央部、D5e_s区からD5i₉区に確認。

（重複関係） 本跡は、第7号溝につながり、第116号竪穴住居跡を掘り込んでいる。

（規模と形状） 上幅2.0m～2.5m、下幅0.5m、深さ0.2m～0.3mを測り、全長20mで、断面形状は「┌」状を呈し、底面は硬く締まっている。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から、土師器坏と須恵器坏の細片が出土している。

（所見） 本跡は、第7号井戸に付属する溝であり、排水溝として使用されたものと捉えられるが、時期は第116号竪穴住居跡を切って構築され、第7号井戸とつながっている状況から、7世紀後半以降に構築・使用されたものと考えられる。

第3号溝（第277図）

（位置） 調査区の中央部、D6a₁区からD6j₂区に確認。

（重複関係） 第5・6号溝、第102・103号竪穴住居跡と重複し、本跡との新旧関係は、第102・103号竪穴住居跡、第5号溝を本跡が掘り込み、第6号溝との関係は不明である。

（規模と形状） 上幅1.0m～2.0m、下幅0.5m～1.0m、深さ0.15m～0.2mを測り、全長74mで、断面形状は「┌」状を呈し、底面は硬く締まっている。

（覆土） 自然堆積。

（遺物） 覆土上層から、土師器坏・甕、須恵器坏の細片と小礫が数点出土している。

（所見） 本跡は、谷を廻るように掘られ、集落内の排水路として構築されたものと考えられるが、時期を決定することはできなかった。

第4号溝（第277図）

（位置） 調査区の南側、E6f₄区からE6i₁区に確認。

（規模と形状） 上幅1.5m～2.0m、下幅0.3m～0.5m、深さ0.5m～0.8mを測り、全長22mで、

断面形状は「┌」状を呈し、底面は硬く締まっている。本跡の東側は、調査区域外に延び、全容は不明。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) なし。

(所見) 本跡の全容を把握することができず、遺物の出土もない状況から、時期・性格を特定することはできなかった。

第5号溝 (第277図)

(位置) 調査区の南側、D6f₁区からE6j₂区に確認。

(重複関係) 第3号溝、第94・100号竪穴住居跡、第4号地下式墳と重複し、第3号溝に掘り込まれている。

(規模と形状) 上幅1.0m～1.5m、下幅0.5m～1.0m、深さ0.2m～0.25mを測り、全長43mで、断面形状は「┌」状を呈し、底面は硬く締まっている。

(覆土) 自然堆積。

(遺物) 覆土上層から、土師器坏・甕、須恵器坏の破片が出土している。

(所見) 本跡は、第4号地下式墳の西側に位置する第4号井戸と接していることから、第4号井戸に伴って構築された排水溝とも捉えられるが、時期等も含めて明確には捉えられない。

第6号溝 (第277図)

(位置) 調査区の西側、E5e₂区からF5b₄区に確認。

(重複関係) 第102・103・140・150号竪穴住居跡と重複し、各住居跡を本跡が掘り込んでいる。

(規模と形状) 上幅1.0m～1.5m、下幅0.5m～1.0m、深さ0.10m～0.15mを測り、全長30mで断面形状は「┌」状を呈し、底面は軟弱である。

(覆土) 自然堆積。

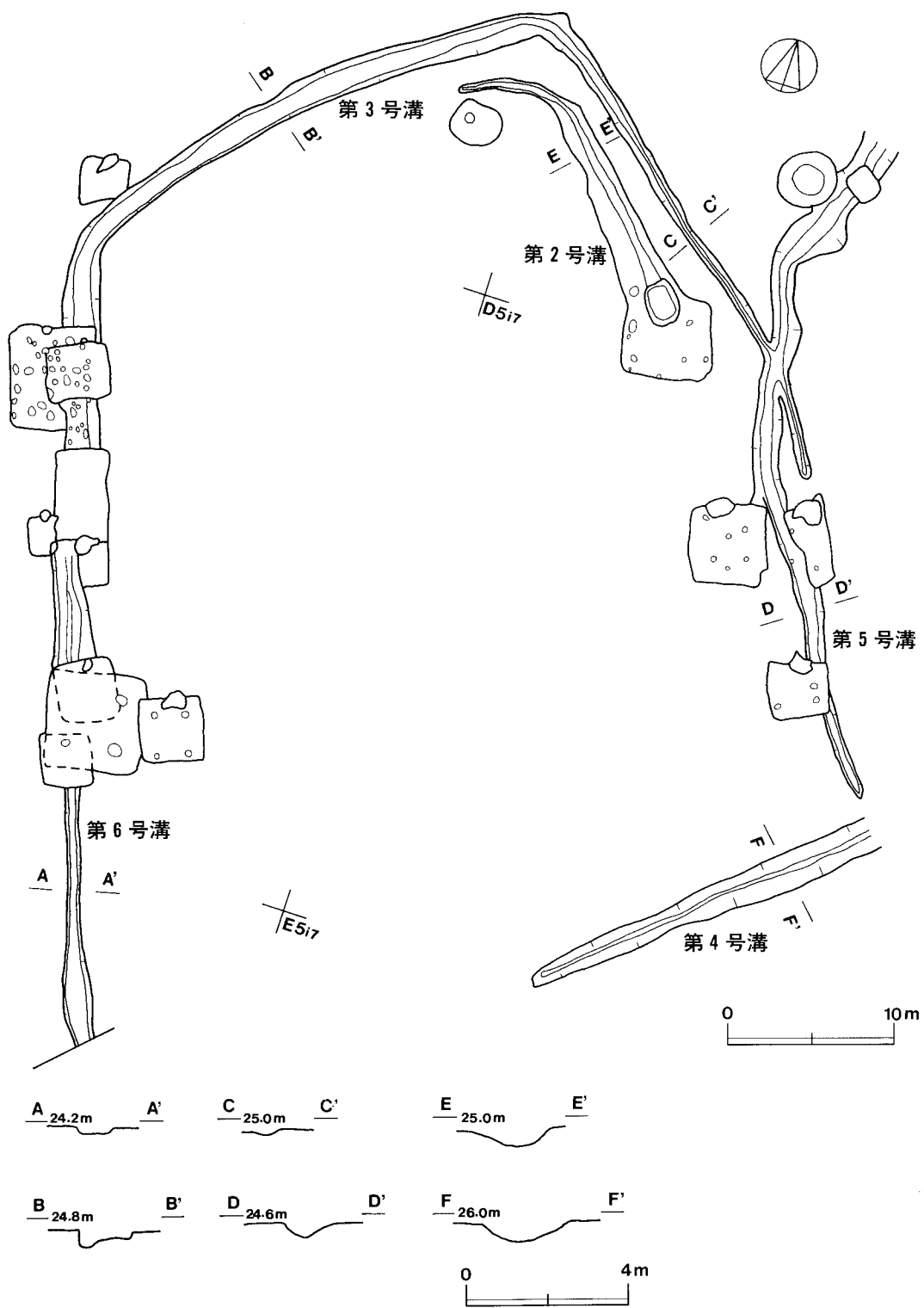
(遺物) 覆土上層から、土師器坏、須恵器坏・甕の細片が出土している。

(所見) 本跡は、第102・103号竪穴住居跡との重複で、明確に捉えることができなかったが、本跡の検出状況から、第3号溝と継続する可能性もある。また、時期を決定する遺物が出土していない状況から、本跡の時期を決定することはできなかった。

第7号溝 (第278図)

(位置) 調査区の西側、C3区からE2区に確認。

(重複関係) 第145号竪穴住居跡を本跡が掘り込んでいる。



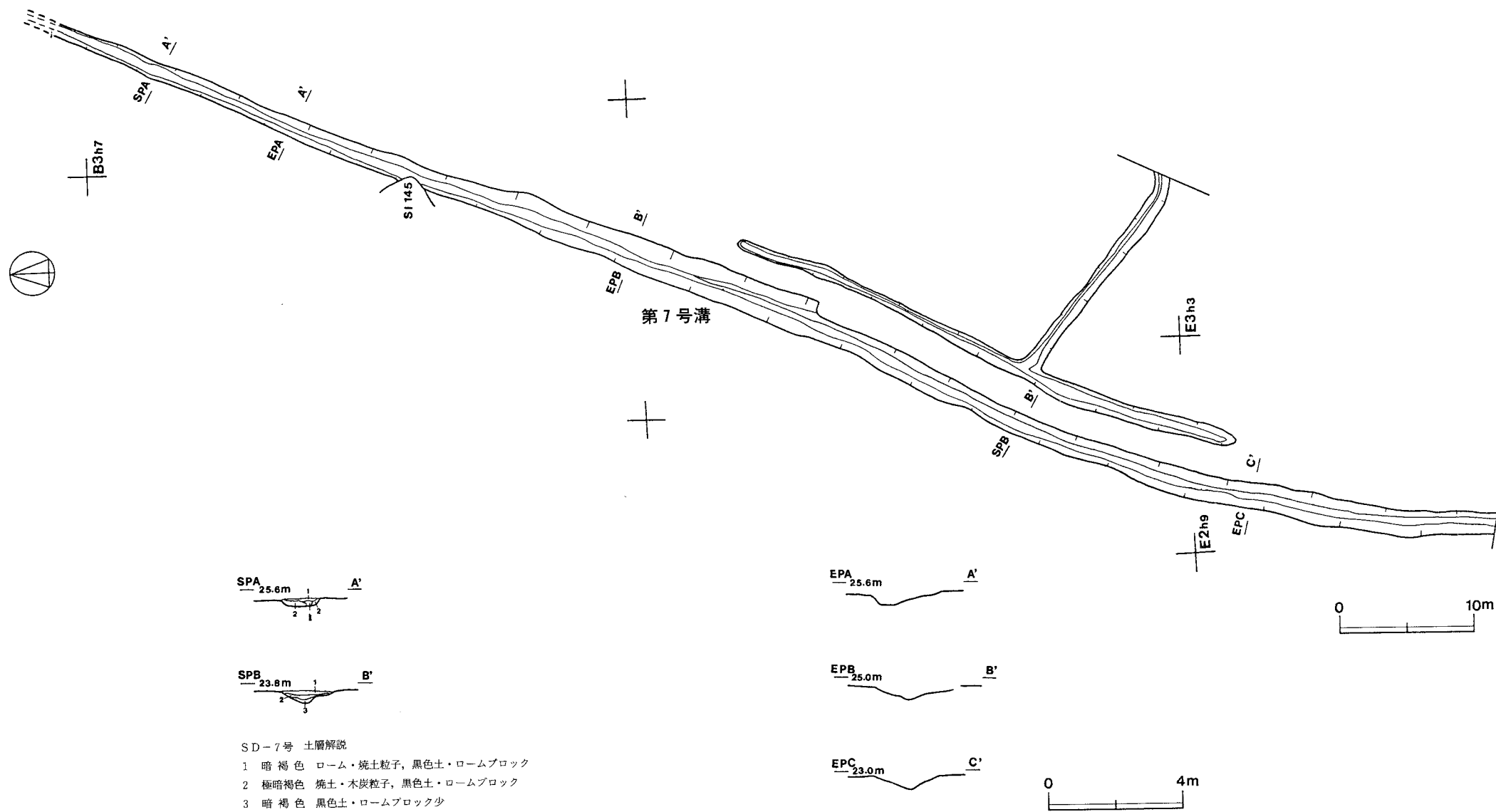
第277图 第2·3·4·5·6号沟实测图

(規模と形状) 上幅1.5m～2.5m, 下幅0.5m～0.8m, 深さ0.20m～0.25mを測り, 全長115mで, 台地上を東西に延び, 断面形状は「┌」状を呈し, 底面は硬く締まっている。

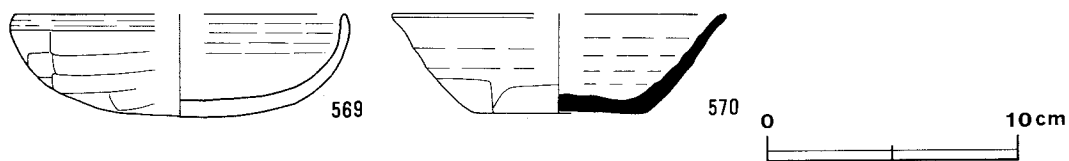
(覆土) 自然堆積。

(遺物) なし。

(所見) 本跡の東端部と西端部は調査区域外に延びて, 全容を把握することは不可能であった。また, 本跡の時期・性格については, 出土遺物がなく特定することはできなかった。



第278図 第7号溝実測図



第279図 溝出土遺物実測図

溝出土遺物解説表

図版番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第279図 569	坏 土師器	A 13.2	底部は丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は直立する。体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい黄橙色 良好	70% 覆土
		B 4.2			
570	坏 須恵器	A (13.2)	底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸味をもつ。 体部内・外面水挽き整形。底部へラ切り。周辺へラ削り。	砂粒・砂礫・雲母 灰黄色 普通	30% 覆土
		B 4.0			
		C (6.8)			

第7節 考察

(1) 柴崎遺跡における集落の変遷（第280図 付図2）

柴崎遺跡II区には、前章で述べたように竪穴住居跡146軒、土坑15基、地下式墳4基、井戸8基、溝6条等数多く遺構が検出された。

しかし、これらの遺構は全て同時期に存在したものでなく、6世紀後半から12世紀にかけての時期に集落が形成されたことが窺い知れる。

そこで、本節では各時期における遺構の構成や変遷について、柴崎遺跡I区調査報告書に報告されている集落の変遷に照らし併せて、II区内から検出された集落について若干の考察を記載する。

柴崎遺跡の立地する地形は、花室川の沖積低地に向かってなだらかに傾斜する標高25mほどの台地部に所在し、集落はこの台地の中央部と台地縁辺部に形成されている。

集落の所在する台地の中央部・台地縁辺部の土層は第4図に示す通り、台地中央部に比べて台地縁辺部は黒色土の堆積が厚く、ローム層の堆積が薄くなる状況である。検出された竪穴住居跡の掘り込みは、台地縁辺部で確認面からの掘り込みが浅く、台地中央部では掘り込みが深い状況である。

また、当遺跡で検出された溝は、集落内の区画設定や排水を目的として構築されたものと考えられ、溝の役割・用途が捉えられる。

さらに、柴崎遺跡のI区とII区の間には谷津が深く入り込んでおり、調査時においてもかなりの湧水が認められ、奈良・平安時代における谷津・小支谷の利用を考えると、I区とII区の間には谷津も水田（ヤト田）として使用されていた可能性も考えられる。

次に柴崎遺跡II区から検出された竪穴住居跡を、第I期（6世紀前半）、第II期（6世紀後半）、第III期（7世紀後半）、第IV期（8世紀後半）、第V期（9世紀前半）、第VI期（9世紀後半）、第VII期（10世紀前半）、第VIII期（12世紀）に分類し、集落変遷を捉えることにする。（付図2、第3表）

第I期（6世紀前半 第12号・40号・82号・86号・92号・95号・134号竪穴住居跡）

I期に編年される竪穴住居跡は7軒で、調査区全体に散在して検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、比較的大型で方形を呈し、内部施設は支柱穴が5か所で、北壁中央部に竈を有する竪穴住居跡である。

第II期（6世紀後半 第1号・2号・10号・31号・34B号・43号・44号・49号・71号・77号・135号・137号・148号竪穴住居跡）

II期に編年される竪穴住居跡は13軒で、調査区の中央部と西部に点在して検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、I期の竪穴住居跡に比べて若干大型で方形を呈し、内部施設は、主

柱穴が5か所で北壁中央部に竈を有する竪穴住居跡である。

第Ⅲ期（7世紀後半 第7号・22A号・34A号・42号・62号・80号・100号・116号竪穴住居跡）

Ⅲ期に編年される竪穴住居跡は8軒で、調査区の全域に点在して検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、Ⅱ期の竪穴住居跡と比較すると、規模は同じ程度で方形を呈し、内部施設は支柱穴が5か所で北壁中央部に竈を有する竪穴住居跡である。

第Ⅳ期（8世紀後半 第4号・5号・8号・9A号・11A号・13号・19C号・20号・22B号・30A号・32号・47号・63号・64号・67号・111号・114号・115号・120号・125号・136号・141号竪穴住居跡）

Ⅳ期に編年される竪穴住居跡は22軒で、調査区の中央部に比較的まとまって検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、Ⅰ～Ⅲ期の竪穴住居跡に比べて若干小型で第20号・30A号竪穴住居跡は大型である。形状は方形を呈するものが大半であるが、内部施設は支柱穴が5～9か所で北壁中央部に竈を有する。

第Ⅴ期（9世紀前半 第3号・9B号・11B号・18B号・18C号・24号・30B号・38号・39号・50号・52号・53A号・61号・65号・72号・73号・74号・83号・93号・96A号・97号・98号・101号・105号・107号・109号・110号・113号・117A号・117B号・118号・139号・143号・145号竪穴住居跡）

Ⅴ期に編年される竪穴住居跡は34軒で、遺跡の中央部付近と北側に点在して検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、Ⅳ期のものとは形状・規模等において差異は認められない。内部施設は、支柱穴が4か所で、竈は北壁中央部よりやや東、あるいは西側に寄った位置に構築されている。

第Ⅵ期（9世紀後半 第9C号・19B号・68号・69号・96B号・133号・142号竪穴住居跡）

Ⅵ期に編年される竪穴住居跡は7軒で、遺跡の中央部と西部に点在して検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、小型で方形を呈する。内部施設は支柱穴が4か所で、竈は北壁中央部よりやや東、あるいは西側に寄った位置に構築されており、Ⅴ期に所属する竪穴住居跡とはあまり変化は認められない。

第Ⅶ期（10世紀前半 第19A号・45号・51号・53B号・54号・56号・57号・66号・75号・88号・108号・130号・131号・132号・138号・140号・150号竪穴住居跡）

Ⅶ期に編年される竪穴住居跡は17軒で、調査区の中央部に点在して検出されている。

この時期の竪穴住居跡は、小型で方形や長方形を呈する。内部施設の支柱穴の数は、方形の竪穴住居跡は1か所、あるいは全く検出されなく、長方形の竪穴住居跡は4か所、あるいは1か所である。竈は北壁の東側コーナー部に構築されている。

第Ⅷ期（12世紀 第14A・B号・15号・16号・17号・18A号・23号・27号・28号・29号・37号・

41号・59号・85号・90号・106号・119号・121号・123号・144号竪穴住居跡)

VIII期に編年される竪穴住居跡は20軒である。これらの住居跡は調査区の北側部と中央部に点在している。

当該期に属する竪穴住居跡は、一辺2～3mの小型で方形を呈している。内部施設は、支柱穴が1～2か所で、床面中央部に若干焼土が検出されるものと、ほとんど検出されないものがある。

以上の様に、柴崎II区の集落は、第I期（6世紀前半）から第VII期（10世紀前半）までと、第VIII期（12世紀）に形成されている。第V期（9世紀前半）には最大の集落が形成されたが、その他の時期には小規模の集落が形成されたにすぎない。

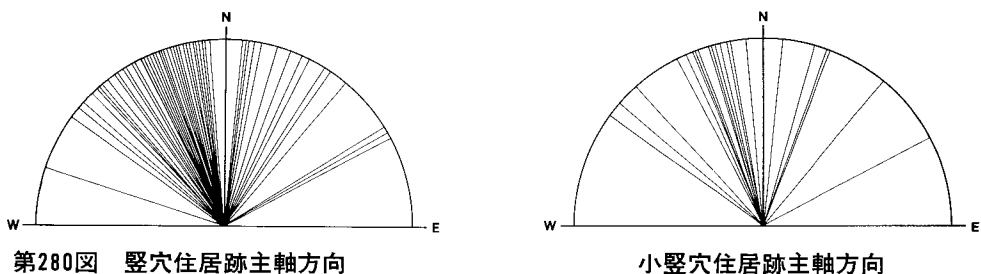
また、6世紀から8世紀にかけての集落は、大型の竪穴住居跡と小型の竪穴住居跡によって構成されているが、9世紀から10世紀にかけては大型の竪穴住居跡が消滅し、小型の竪穴住居跡によって集落が構成されている。

12世紀の集落は、さらに小型の一辺2～3mの竪穴住居跡によって構成されている。当該期の竪穴住居跡は、支柱穴が1～2か所であり、床面中央部には炉跡とは認め難い焼土痕が認められるものがある程度で、10世紀迄の竪穴住居跡の規模や内部施設とは大きな違いが認められる。

このような竪穴住居跡の形態の変遷から、10世紀迄の竪穴住居跡は、食・住を兼ねた住居であったのに対して、12世紀の竪穴住居跡は、住居内で食・住を共にするのではなく、食・住を別にした生活がおこなわれていたものと推測することができ、食の施設としての「竈屋」の存在が窺える。

上述の点から、柴崎遺跡I区とII区の集落変遷を概観すると、I区では6世紀後半に集落が形成され、7世紀には集落が形成されていなく、次に8世紀にふたたび集落が形成され、11世紀迄集落が形成されている。

II区では、6世紀前半から10世紀前半にかけて集落が継続して形成されている。12世紀にはふたたび集落が形成されている。



第3表 竪穴住居跡一覧表

番号	位置 グリッド	主軸方向	平面形	規 模		壁 垂直・外傾	床 傾斜・平坦	竈	時 期 世 紀	備 考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
1	D7d ₁	N-6°-W	方 形	6.4 × 6.1	28	垂 直	平 坦	N	6・後半	
2	D6g ₅	N-12°-W	方 形	5.0 × 4.8	5	垂 直	凸 凹	N	6・後半	
3	C5g ₅	N-15°-W	方 形	4.4 × 4.3	44~56	垂 直	平 坦	N	9・前半	
4	C5f ₈	N-22°-W	長方形	4.5 × 3.9	44~56	垂 直	平 坦	N	8・後半	
5	C5e ₆	N-6°-W	方 形	4.4 × 4.2	60	外 傾	平 坦	N	8・後半	
7	C6g ₁	N-33°-W	方 形	4.7 × 4.7	56~60	垂 直	平 坦	N	7・後半	
8	C5d ₉	N-10°-W	方 形	4.0 × 3.7	56~84	垂 直	平 坦	N	8・後半	
9 A	C6f ₃	N-23°-W	方 形	3.8 × 3.6	20	垂 直	平 坦	N	8・後半	SI-9B・Cと重複
9 B	C6f ₃	N-33°-W	方 形	3.3 × 3.0	36	外 傾	平 坦	—	9・前半	SI-9A・Cと重複
9 C	C6d ₃	N-8°-W	方 形	3.6 × 3.3	28~40	垂 直	平 坦	N	9・後半	SI-9A・Bと重複
10	C6c ₈	N-25°-W	方 形	3.8 × 3.7	42~56	垂 直	平 坦	N	6・後半	
11A	C7g ₃	N-12°-W	方 形	4.4 × 4.4	—	—	平 坦	N	8・後半	SI-11B, SK-1と重複
11B	C7h ₃	N-24°-E	長方形	5.3 × 4.2	36~44	外 傾	凸 凹	E	9・前半	SI-11A, SK-1と重複
12	D6e ₆	N-30°-W	方 形	4.3 × 3.9	28~32	垂 直	平 坦	N	6・前半	
13	C7f ₄	N-24°-W	方 形	3.8 × 3.6	56~60	垂 直	平 坦	—	8・後半	
14A	C7f ₅	N-21°-E	方 形	3.1 × 2.9	28~32	垂 直	凸 凹	—	1 2	SI-14Aと重複
14B	C7f ₅	N-72°-E	方 形	3.1 × 3.0	28	垂 直	平 坦	—	1 2	SI-14Aと重複
15	C7d ₅	N-24°-W	方 形	2.7 × 2.7	16~20	外 傾	傾 斜	—	1 2	
16	C7e ₆	N-27°-W	方 形	2.6 × 2.5	32	垂 直	平 坦	—	1 2	
17	C7e ₈	N-6°-E	方 形	2.8 × 2.8	36~40	垂 直	傾 斜	—	1 2	
18A	C7f ₆	N-42°-W	長方形	3.1 × 2.6	32~36	垂 直	平 坦		1 2	SI-18B号と重複
18B	C7f ₇	N-0°	方 形	(3.4)×(3.2)	24~36	外 傾	平 坦	N	9・前半	SI-18A・C号, SK-5号と重複
18C	C7g ₇	N-36°-W	方 形	3.8 × 3.7	40~44	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-18B号と重複
19A	C7i ₆	N-17°-W	長方形	3.1 × 2.6	40	垂 直	平 坦	—	10・前半	SI-19Cと重複
19B	C7i ₇	N-13°-W	方 形	3.5 × 3.2	32	外 傾	凸 凹	N	9・後半	SI-19C号と重複
19C	C7i ₆	N-27°-W	長方形	(3.2)×(2.4)	16~34	垂 直	平 坦	—	8・後半	SI-19A・B号と重複
20	C7h ₅	N-18°-W	長方形	5.5 × 3.8	28~36	垂 直	平 坦	N	8・後半	
22A	C7j ₃	N-39°-W	長方形	3.9 × (3.5)	52~56	垂 直	平 坦	N	7・後半	SI-22B号と重複
22B	C7j ₄	N-5°-W	長方形	4.2 × 3.5	56	垂 直	平 坦	N	8・後半	SI-22B号と重複
23	E7j ₆	N-40°-E	方 形	3.4 × 3.3	—	—	平 坦	—	1 2	SI-24号と重複
24	D7a ₅	N-19°-W	方 形	4.6 × 4.5	28~36	外 傾	平 坦	N	9・前半	SI-23号と重複
25A	C7i ₈	N-5°-W	方 形	5.2 × 4.8	20~32	垂 直	凸 凹	N	—	SI-25A号と重複
25B	C7i ₉	N-17°-W	長方形	3.5 × 2.6	40	垂 直	平 坦	—	—	SI-25A号と重複
26	C6a ₉	N-27°-W	方 形	3.2 × 3.2	40~56	外 傾	平 坦	N	—	
27	E7j ₉	N-35°-W	方 形	3.0 × 3.0	28	垂 直	平 坦	—	1 2	SI-37号と重複
28	C8h ₁	N-43°-W	方 形	3.2 × 3.2	30~40	垂 直	平 坦	—	1 2	
29	C8g ₁	N-49°-W	方 形	2.6 × 2.5	28~32	外 傾	平 坦	—	1 2	SI-30B号と重複

竪穴住居跡一覧表

番号	位置 グリット	主軸方向	平面形	規 模		壁 垂直・外傾	床 傾斜・平坦	竈	時 期 世 紀	備 考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
30A	C8f ₁	N-16°-W	方 形	3.2 × 2.7	16~28	外 傾	平 坦	N	8・後半	SI-30B号と重複
30B	C8g ₂	N-10°-W	方 形	5.4 × 5.3	40~60	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-29・30A号と重複
31	C8h ₂	N-7°-W	方 形	4.7 × 4.4	20~32	外 傾	平 坦	N	6・後半	
32	C8h ₅	N-27°-W	方 形	4.2 × 4.0	32~44	外 傾	平 坦	N	8・後半	
34A	D8a ₂	N-45°-E	方 形	4.6 × 4.3	20~24	外 傾	平 坦	N	7・後半	SI-34B号と重複
34B	C8j ₁	N-34°-E	長方形	(5.6) × 4.9	16~24	外 傾	平 坦	N	6・後半	SI-34Aと重複
36	D8b ₂	N-32°-E	長方形	6.4 × 6.1	10~12	外 傾	平 坦	N	—	
37	D6j ₀	N-25°-W	方 形	3.3 × 3.0	16	外 傾	平 坦	—	1 2	SI-27号と重複
38	D7a ₉	N-26°-W	方 形	4.4 × 4.1	28~40	垂 直	平 坦	N	9・前半	
39	D7e ₉	N-42°-W	方 形	5.0 × 5.0	24~34	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-88号と重複
40	D7g ₅	N-35°-W	方 形	4.8 × 4.8	16~28	垂 直	平 坦	N	6・前半	SI-41号と重複
41	D7g ₅	N-22°-W	方 形	2.9 × 2.7	20~24	垂 直	平 坦	—	1 2	SI-40号と重複
42	D6f ₃	N-26°-W	方 形	6.4 × 6.3	44~56	垂 直	平 坦	N	7・後半	
43	D7i ₄	N-41°-W	方 形	7.6 × 6.9	14~32	外 傾	平 坦	N	6・後半	
44	E7a ₃	N-39°-W	方 形	5.6 × 5.6	28~40	外 傾	平 坦	N	6・後半	
45	E7b ₂	N-11°-W	長方形	3.8 × 2.9	28	外 傾	平 坦	N	10・前半	
47	E7b ₂	N-51°-W	方 形	(3.7) × (3.7)	30	外 傾	平 坦	N	8・後半	
48	E7e ₇	N-36°-W	方 形	(5.1) × (4.9)	20~24	外 傾	平 坦	N	7・後半	
49	D6f ₃	N-39°-W	方 形	4.5 × 4.4	36~48	垂 直	平 坦	N	6・後半	
50	D6b ₃	N-20°-W	方 形	3.4 × 3.0	32~36	外 傾	平 坦	N	9・前半	
51	C6i ₅	N-16°-W	方 形	3.2 × 3.2	45~50	垂 直	平 坦	N	10・前半	
52	D6b ₂	N-27°-E	方 形	4.0 × 3.8	40	垂 直	平 坦	N	9・前半	
53A	D6c ₅	N-24°-W	方 形	(4.0) × (3.9)	30	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-53B号, SK6~10号と重複
53B	D6c ₄	N-58°-E	方 形	(3.7) × (3.0)	40	垂 直	平 坦	N	10・前半	SI-53A号, SK6~10号と重複
54	C6c ₂	N-21°-W	方 形	3.2 × 2.9	20	垂 直	平 坦	N	10・前半	第4号地下式墳と重複
56	D5d ₈	N-15°-W	方 形	3.7 × 3.5	43	垂 直	平 坦	N	10・前半	
57	D5b ₈	N-5°-E	方 形	3.9 × 3.4	22	外 傾	平 坦	N	10・前半	
59	D5a ₈	N-20°-E	方 形	2.7 × 2.7	35~40	垂 直	平 坦	—	1 2	
61	C4h ₆	N-8°-W	方 形	5.2 × 4.9	38	外 傾	凸 凹	N	9・前半	
62	C5i ₅	N-12°-W	方 形	3.9 × 3.6	44	垂 直	凸 凹	N	7・後半	
63	C5i ₁	N-42°-W	方 形	5.1 × 4.8	44	垂 直	平 坦	N	8・後半	
64	C4g ₇	N-10°-W	方 形	5.7 × 5.6	60	垂 直	平 坦	N	8・後半	SI-65号・66号と重複
65	C4g ₉	N-25°-W	方 形	4.1 × 3.5	51	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-64号と重複
66	C4i ₇	N-22°-W	方 形	3.8 × 3.6	28	垂 直	凸 凹	N	10・前半	SI-64号と重複
67	C4i ₄	N-12°-W	方 形	5.8 × 5.7	50	外 傾	平 坦	N	8・後半	
68	C4d ₇	N-29°-W	方 形	4.1 × 3.7	50	垂 直	平 坦	N	9・後半	
69	C4d ₉	N-18°-W	方 形	3.3 × 3.1	25	垂 直	凸 凹	N	9・後半	

竪穴住居跡一覧表

番号	位置 グリッド	主軸方向	平面形	規 模		壁 垂直・外傾	床 傾斜・平坦	竈	時 期 世 紀	備 考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
71	C5a3	N-22°-W	長方形	4.5 × 3.5	35	垂 直	凸 凹	N	6・後半	
72	D5c1	N-22°-W	方 形	5.3 × 4.8	42	垂 直	凸 凹	N	9・前半	
73	D5f1	N-24°-W	方 形	4.2 × 3.7	44	垂 直	平 坦	N	9・前半	
74	D4f3	N-19°-W	方 形	4.7 × 4.4	36	垂 直	平 坦	N	9・前半	
75	D4g3	N-62°-E	方 形	2.7 × 2.2	21	外 傾	凸 凹	N	10・前半	
76	D5i1	N-13°-W	方 形	3.1 × 2.0	19	垂 直	凸 凹	N	—	SD-3号と重複
77	E5b3	N-9°-W	長方形	7.0 × 4.9	15	垂 直	凸 凹	—	6・後半	
80	F5a3	N-19°-W	方 形	4.5 × 4.4	25	外 傾	平 坦	N	7・後半	
82	E2a3	N-32°-W	方 形	6.4 × 6.4	22	外 傾	平 坦	N	6・前半	
83	C7g3	N-5°-W	方 形	3.5 × 2.8	22	外 傾	凸 凹	N	9・前半	
85	D5b3	N-16°-E	方 形	2.8 × 2.8	49	垂 直	平 坦	—	1 2	
86	D7a3	N-32°-W	方 形	3.7 × 3.6	40	垂 直	平 坦	N	6・前半	
87A	D7b3	N-25°-W	方 形	3.8 × 3.7	16	外 傾	平 坦	—	—	SI-87B号と重複
87B	D7b3	N-19°-W	方 形	3.5 × 3.3	20	垂 直	平 坦	N	—	SI-87A号と重複
88	D7f3	N-17°-W	長方形	4.8 × 3.9	36~46	外 傾	凸 凹	N	10・前半	SI-39号と重複
90	C6e1	N-10°-W	方 形	2.7 × 2.6	60	垂 直	平 坦	—	1 2	
91	D7c3	N-20°-W	方 形	3.0 × 2.8	8	垂 直	凸 凹	N	—	SI-11~14号と重複
92	D6g2	N-30°-W	方 形	3.7 × 3.7	16~30	外 傾	凸 凹	N	6・前半	
93	E6h1	N-20°-W	方 形	3.7 × 3.7	30~40	垂 直	平 坦	N	9・前半	
94	E6a3	—	—	—	24	垂 直	凸 凹	N	—	本跡の一部を調査
95	E6i2	N-7°-E	方 形	4.9 × 4.9	38~64	垂 直	凸 凹	N	6・前半	
96A	E6a1	—	—	—	36	垂 直	凸 凹	N	9・前半	SI-96号と重複
96B	E6a1	N-23°-W	方 形	4.5 × 4.3	52~56	垂 直	凸 凹	N	9・後半	SI-96A号と重複
97	E6i3	N-22°-W	方 形	3.2 × 3.1	48~52	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-98号, SK15号と重複
98	E6h3	N-22°-W	方 形	3.4 × 3.4	54~60	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-97号と重複
99	E5i4	N-20°-W	長方形	5.7 × 4.7	16~20	垂 直	凸 凹	N	—	
100	E6c3	N-21°-W	方 形	3.5 × 3.5	10~28	外 傾	凸 凹	N	7・後半	
101	E5h1	N-11°-W	方 形	3.1 × 2.9	20	垂 直	凸 凹	N	9・前半	
104A	E5b1	N-20°-W	長方形	6.4 × 5.3	18~31	外 傾	凸 凹	N	—	SI-104B号, SD-6号と重複
104B	E5b1	N-21°-W	方 形	3.9 × 3.3	22	外 傾	凸 凹	—	—	SI-104A, SD-6号と重複
105	E5i1	N-21°-W	方 形	3.9 × 3.9	36~38	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-140号と重複
106	D5b7	N-15°-W	方 形	2.6 × 2.5	28~36	垂 直	平 坦	—	1 2	
107	D7h3	N-35°-W	方 形	3.1 × 3.0	16~26	垂 直	凸 凹	N	9・前半	
108	D8i1	N-60°-E	長方形	4.3 × 3.0	28~48	垂 直	凸 凹	E	10・前半	SI-114・115号と重複
109	E5d1	—	—	(1.9) × (2.4)	38	垂 直	凸 凹	N	9・前半	
110	E6h3	N-17°-W	方 形	3.7 × 3.3	16	外 傾	凸 凹	N	9・前半	SI-111号と重複
111	E6h7	N-21°-W	方 形	3.3 × 3.1	6	外 傾	平 坦	N	8・後半	SI-110号と重複

竪穴住居跡一覧表

番号	位置 グリット	主軸方向	平面形	規 模		壁 垂直・外傾	床 傾斜・平坦	竈	時 期 世 紀	備 考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
113	E6ie	N-15°-W	方 形	3.7 × 3.2	16~30	垂 直	凸 凹	N	9・前半	
114	D8h1	N-32°-W	方 形	5.2 × 5.1	30~40	垂 直	平 坦	N	8・後半	SI-108号と重複
115	E7a0	N-38°-W	方 形	5.4 × 5.2	40~70	垂 直	平 坦	N	8・後半	SI-108号と重複
116	D5hs	N-7°-W	方 形	5.3 × 5.0	28~30	垂 直	凸 凹	N	7・後半	SD-2号, SE-7号と重複
117A	B8j2	N-11°-W	方 形	5.5 × 5.2	78	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-117B号と重複
117B	B8j2	N-11°-W	方 形	6.2 × 6.1	60~70	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-117A号と重複
118	B8f4	N-8°-W	長方形	6.6 × 5.9	60	垂 直	平 坦	N	9・前半	
119	B8e6	N-11°-W	方 形	3.0 × 3.0	50~60	垂 直	平 坦	—	1 2	
120	B8e8	N-9°-W	方 形	4.0 × 4.3	40	垂 直	凸 凹	N	8・後半	
121	B8g8	N-40°-E	方 形	3.0 × 2.8	40	垂 直	平 坦	—	1 2	
122	B8i8	N-16°-W	方 形	4.3 × 4.1	60	垂 直	凸 凹	N	—	
123	B8hs	N-27°-E	方 形	3.1 × 3.1	20	外 傾	凸 凹	—	1 2	
124	A9j1	N-11°-W	方 形	3.2 × 2.8	50	垂 直	凸 凹	N	—	
125	B8c5	N-10°-W	方 形	4.1 × 4.0	40	垂 直	平 坦	N	8・後半	
129	B7ha	—	—	—	36	垂 直	凸 凹	—	—	
130	E4b6	N-10°-W	方 形	3.4 × 3.0	30	垂 直	平 坦	N	10・前半	
131	E4b5	N-15°-W	長方形	4.9 × 3.3	30	垂 直	凸 凹	N	10・前半	
132	E4b3	N-20°-W	長方形	4.9 × 3.3	26	垂 直	平 坦	N	10・前半	
133	E4b2	N-13°-W	方 形	3.5 × 3.0	40	垂 直	平 坦	N	9・後半	
134	E4a3	N-36°-W	方 形	4.0 × 3.8	40	垂 直	凸 凹	N	6・前半	
135	D3hs	N-54°-W	方 形	3.1 × 2.8	28~36	外 傾	凸 凹	—	6・後半	中央部に焼土あり
136	E2d0	N-16°-W	方 形	2.9 × 2.8	18~30	垂 直	平 坦	N	8・後半	
137	E4g1	—	方 形	3.4 × 2.1	10	垂 直	平 坦	—	6・後半	本跡の一部を調査
138	F4a6	N-27°-W	方 形	4.7 × 4.7	10	垂 直	凸 凹	N	10・前半	
139	F4e2	N-32°-W	方 形	4.0 × 3.9	8~30	垂 直	凸 凹	N	9・前半	
140	E5g3	N-11°-W	方 形	6.2 × 6.0	16	垂 直	凸 凹	—	10・前半	SI-105・150号, SD-6号と重複
141	E4e8	N-27°-W	方 形	4.0 × 3.8	48~50	垂 直	平 坦	N	8・後半	
142	E4i8	—	—	—	20~40	垂 直	平 坦	N	9・後半	本跡の一部を調査
143	C7g8	—	—	—	26~40	垂 直	平 坦	N	9・前半	SI-146, SK-2・18号, SD-1号と重複
144	C7i7	—	—	—	14	垂 直	凸 凹	—	1 2	SI-19B・25号・86号と重複
145	D3c6	N-28°-W	方 形	4.3 × 4.1	60	垂 直	凸 凹	N	9・前半	SD-7号と重複
146	C7g8	—	—	—	—	—	—	—	—	SI-143号と重複 縄文中期加曾利EIII
148	C8f4	—	—	—	—	—	—	—	6・後半	SD-9号と重複
150	E5h3	—	—	—	30	外 傾	凸 凹	—	10・前半	SI-140号, SD-6号と重複
151	C8e2	—	—	—	40	垂 直	凸 凹	—	—	

(2) 柴崎遺跡II区出土の9世紀から10世紀の土器について

柴崎遺跡II区の調査によって、6世紀から10世紀にかけての生活用具類や供膳具類である土師器（坏・高坏・埴・甕・甑）・須恵器（坏・高坏・高台付坏・蓋・小皿・甕・甑・小型壺・長頸壺）が出土している。

これらの土器の内、特に9世紀から10世紀にかけての時期に生産された土器をとりあげ、その内容から派生することがらについて述べる。

柴崎遺跡の9世紀から10世紀に属する竪穴式住居跡は57軒検出され、これらの竪穴式住居跡からは、これまでに使用されていた須恵器とは、色調・胎土に違いが認められる土器が出土している。

出土したこれらの土器の器種は、坏・高坏・埴類で、色調が明褐色、あるいは赤褐色を呈し、胎土は精製された粘土ではなく、土師器と同じような胎土を用い土師器よりも堅い土器である。

この明褐色、あるいは赤褐色の土器は、製作技法から須恵器の範疇に組み入れてもよい土器であり、須恵器的な要素としての水挽き整形が施されてはいるが、焼成は従来からの還元炎焼成から酸化炎焼成土器への変化によってもたらされた土器と考えられる。これとともに、これらの土器がどのようにして出現したかが大きな問題である。

須恵器が律令体制の解体とともに10世紀代に生産活動が終焉を迎えるということを考えるならば、明褐色、あるいは赤褐色の色調を呈した土器が、9世紀代に須恵器生産工人達によってこれまでの須恵器製作技法を用いて生産されたものであり、焼成の段階での変化によってもたらされた土器であるものと捉えられる。

この様に、須恵器生産における工人組織の体制がゆるみ、須恵器を製作する技法・技術を用いながら、酸化炎焼成で生産された須恵器に代わる土器、または須恵器に継続する土器として、生産されたことも考えられる。

また、これらの土器は、在地で生産されたものか、搬入されたものか、さらに限られた地域だけに供給されたものか、あるいは広い範囲にわたって供給されたものなのかは、今後の資料の増加をまって検討を加えねばならない。

以上の様に、柴崎遺跡II区から出土した9～10世紀の明褐色、あるいは赤褐色の須恵器は、律令体制の衰退といった要因が須恵器生産に強く影響を与え、須恵器工人・工房集団の解体現象とともに、次の時代への変遷過程で出現した土器と考えられる。

(3) 柴崎遺跡出土の杏葉について (第129図297)

杏葉は馬具の一部であり、胸繫・尻繫などから垂下する扁平な装飾物で、古墳に馬具が副葬されるのは、古墳時代後期を特徴づける葬送の風習である。

杏葉については、江戸時代に新井白石が、『本朝軍器考』に「杏葉の葉に似たれば、かくは名付しにや」と述べ、さらに、後藤守一が『日本考古学選集』に「杏葉は馬具三繫の垂飾品の一部であると述べ、さらに、『平安時代には「杏葉」と書かれ、和名を「ひら」といい、「きょうふ」は俗名と「和名類聚抄」に説いている』と述べて、杏葉の名称について説いている。

この様に、杏葉は馬具装飾品の一部であり、『延喜式』佐馬寮の條に「蕃客の乗騎する唐鞍云々」とあることから、奈良・平安時代にも馬具として用いられていたことが窺える。

また、杏葉の分類については、田中新史が『古代探叢』に古墳出土の杏葉を中心に分類し、その系譜を追い、朝鮮半島との関連と仏教関係遺品の文様形態をも含めて、古墳時代から奈良時代への系譜と、仏教関係の儀仗用金工品に系譜が根強く残ることを唱えている。

柴崎遺跡から出土した杏葉は、第64号竪穴住居跡の床面から出土したが、他の馬具に伴う遺物の出土はなかった。

出土した杏葉は、一枚の銅板に棘状突起のある身部と、山形の造出部の両袖に毛彫りを施した後に鍍金した金銅造りの棘葉形杏葉である。

当遺跡では、杏葉が竪穴住居跡から出土したが、こうした例は全国的にも数が少なく、馬具である轡・鐙などは単独で竪穴住居跡から出土している例も見られる。

次に、杏葉が出土した竪穴住居跡の形態であるが、第64号竪穴住居跡は、他の同時期（7世紀後半から8世紀後半）の竪穴式住居跡と比較しても特別に変化は認められず、竪穴住居跡の規模や形態から馬具の所有者や遺構の特異性を捉えることは不可能である。しかし、第64号竪穴式住居跡が形成された7世紀後半から8世紀後半の社会背景を考えると、地方における有力者の台頭が十分に考えられる。つまり、集落内での有力者、または、地域の権力者が権威の象徴として何らかのものを授持していたことも考えられる。

このように、柴崎遺跡から出土した杏葉は、当該地に形成された集落内での有力者が、集落内での「長」としての権威の象徴として保持していた物と考えられる。

柴崎遺跡第64号住居跡出土 金銅飾金具の保存処理について

東京国立文化財研究所 修復技術部

第三修復技術研究室長

青木 繁夫

1. はじめに

柴崎遺跡第64号住居跡出土金銅製飾金具（129図一297）の保存処理は、茨城県教育財団の依頼によって行ったものである。この金銅製飾金具は、通常見られる金銅製品に比べ、アマルガム鍍金された色調が銀色に近く、銀鍍金の発生時期と施工技術上の問題に関心がもたれている現在、研究資料として興味のあるものであった。なおこの金具の形状などの考古学上の特徴の記述などについては、本報告書第4章第2節（169P・PL115）を参照されたい。

2. 金銅製飾金具の劣化状態

この金具は、住居跡床面から発見され、その時点でかなり腐蝕が激しかったために取上げるのに苦労したとのことである。銅板上に彫金し、その上から鍍金を施してある。

基盤の銅は、完全に腐蝕しているように見られ、きれいな緑青に覆われている。形状は、かろうじて鍍金層によって形が保たれているようであり、取り扱いに注意しないと崩れてしまう。鍍金の色は金よりも銀色に近い色を呈している。

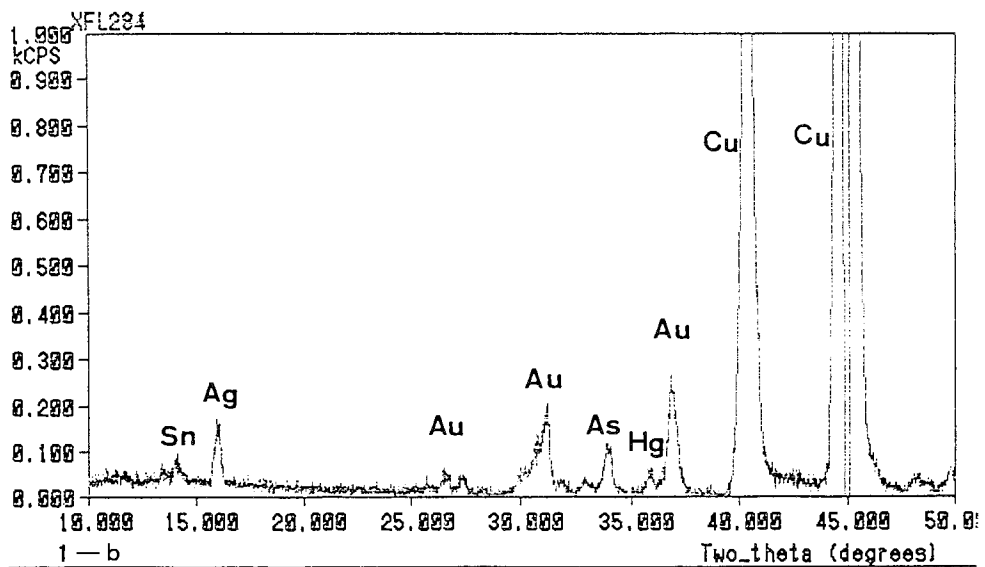
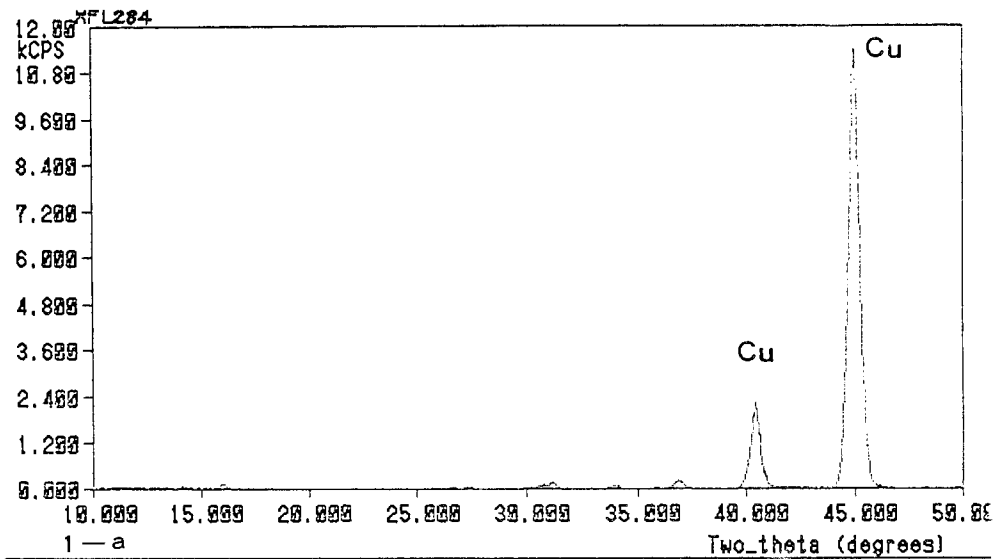
3. 化学組成分析

この金銅製飾金具の材料や製作技法等の情報を得るために、その化学組成を蛍光X線分析法で非破壊的に調査した。蛍光X線分析はフイリプス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSで行った。機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV、50mAで一次X線を発生させ、資料に照射し、二次X線を空気圧下でシンチレーションカウンターとガスフローカウンタの併用で測定した。測定角度範囲10度から50度までを25分かけて走査し、スペクトルを得た。

蛍光X線分析の結果

281図一1aに示された蛍光X線スペクトリを見ると銅を示すピークが2本強くでており、他の元素がほとんど見えないことから、この飾金具の地金は、かなり純度の高い銅であると推測される。

鍍金について知るために、さらにスペクトル倍率（281図一1b）を上げて拡大してみると、金、銀、水銀が検出されていることが判る。このことから、水銀アマルガム鍍金が施されていることが推測される。また鍍金の標準試料の蛍光X線スペクトルと比較してみると、鍍金中の銀は約23%となり、金と銅の比から金の厚さは約0.2マイクロメートルと推定できる。



第281図 金銅製品（茨城県柴崎遺跡出土・奈良時代）の蛍光X線スペクトル

4. 腐蝕生成物分析

修復の方針を決定するためには、この金具に出来た腐蝕生成物すなわち銅の錆を知る必要がある。とくにブロンズ病の原因と言われている塩化第一銅や塩基性塩化第二銅などの進行性の錆の存在の有無を確認しなければならない。そのために金具から錆粉末（錆は全体に同じ色調と劣化状態である）を1試料採取してX線回折法で調査した。

X線回折の結果

分析の結果（表－1）検出されたのは、塩基性炭酸銅（マラカイト）と酸化第一銅で、ブロンズ病の原因になる錆の酸化第一銅や塩基性塩化第二銅は確認されなかった。

表－1 X線回折による腐蝕生成物の分析結果

検 出 鉱 物	塩 基 性 炭 酸 銅	酸 化 第 一 銅
スペクトル強度	+++強	+弱

5. 保存修復

X線回折分析の結果、進行性の錆が確認されず、マラカイトの安定した錆に覆われていることが分かった。したがってこれらの錆の安定化処理を行う必要はないが、他の場所に存在する可能性も考えられるので、脱塩処理の後にベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理と樹脂含浸による強化処理のみを行うこととし、以下のような方法で実施した。

① クリーニング

表面に付着している土は、エチルアルコールに蒸留水をいれた溶液を綿棒に染み込ませて拭き取った。鍍金表面の緑青錆は、金具を痛めないように実体顕微鏡下で針とメスを利用して機械的に除去した。

② 脱塩処理

脱塩処理は、ソクスレー装置を用いて行なった。この装置は、フラスコに入れた水を加熱して水蒸気を発生させ、その水蒸気を遺物の入った容器の上部にセットした冷却器内で冷却して蒸留水を作り、その蒸留水を遺物の入った容器に導き、その中に遺物からの塩化物イオンを溶出させる。容器内に塩化物が溶けた蒸留水が一定量以上溜まるとサイホンの働きによって蒸留水は元のフラスコに戻る。この間水蒸気の上がりをも早めるためと、脱塩処理中の腐食を防止するために窒素ガスを毎分1リットル程度注入してソクスレー内部を窒素ガス雰囲気にしながらか200mm/Hg程度に減圧して脱塩処理した。

溶出した塩素イオン量については、イオンクロマトグラフィー分析によって評価した。

③ 錆の安定化処理

ベンゾトリアゾール3%エチルアルコール溶液を減圧含浸し、そのまま30日間浸漬した。

④ 安定化処理の評価

ベンゾトリアゾール処理の終わった遺物を高湿度下に1週間置き処理効果を判定した。今までの実験では、ベンゾトリアゾール処理の効果がないものは2日程でブロンズ病の特徴である明るく白っぽい粉状の緑青が発生するが、今回1週間放置してもなんら変化が認められなかったのでベンゾトリアゾール処理が有効であると判定した。

⑤ 強化処理

各遺物を強化するためにベンゾトリアゾールを3%含有したアクリル樹脂（インクラック）を30mm/Hgに減圧して含浸させた。

6. おわりに

錆の安定化処理をしたとはいえ、相対湿度が高いところに保存すれば、錆が発生する危険性が大きい。今後は水が露結しないように相対湿度40%以下の環境で保存管理することが望ましい。

この金具の鍍金は、かなり銀色に近く分析の結果、高濃度の銀が含まれていることが判明した。現在までのアマルガム鍍金の分析例から見ると銀の含量が6%以下のものが多い中で、この23%という値は、かなり銀の含量が多い例と云える。このような銀の量は、意識的に混入させた可能性があるので、その後の銀鍍金の流行と合わせて今後の検討課題であろう。

この分析と解析に関しては、東京国立文化財研究所保存科学部化学室長平尾良光氏にお願いした記して謝意を表したい。

参 考 文 献

- 青木繁夫 「古墳時代金銅製品の保存について」文化財保存修復研究協議会記録 平成元年9月
平尾良光 「鍍金の分析調査について」文化財保存修復研究協議会記録 平成元年9月
青木繁夫他 「新設脱塩装置について」保存科学29号 平成2年3月
青木繁夫 「青銅製品の保存修復」Museum 381号 昭和57年12月

第5章 中塚遺跡

第1節 遺跡の概要

中塚遺跡は、住宅・都市整備公団の「テクノパーク桜」造成計画である「桜柴崎土地区画整理事業」に伴い、茨城県教育委員会が、昭和59年4月、予定地内の埋蔵文化財の分布調査を実施した結果、新たに確認された遺跡である。当遺跡は、つくば市の東部、花室川と桜川との間に形成された標高20～30mの平坦な台地上に位置し、遺跡の南約650mには、主に古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が検出されている柴崎遺跡が所在している。

当遺跡の調査対象面積は7,568㎡であり、現況は畑地と雑地である。遺構確認調査は、調査区全域に、グリットによる試掘を実施した。その結果、表土からローム層までは30～50cmを測り、表土にかなり多量のロームブロックが混入し、人為的に攪乱されていることが判明した。

この地域は、昭和20年代に、山林に機械を導入して開墾し、畑地とした地域であるため、遺構や遺物の包含層が攪乱され、遺構・遺物の遺存状況は極めて悪く、僅かに残存しているにすぎなかった。

これらの結果、確認調査された遺構は、縄文時代の陥し穴 (Trap pit) 2基、奈良・平安時代の土坑2基、溝4条である。

遺物は、縄文土器片・石器 (石鏃・敲石・磨石)・土師器片・須恵器片が少量出土している。

第2節 遺構と遺物

1 土坑

第1号土坑 (第1図)


調査区のほぼ中央部B3i₆区に確認され、平面形状は楕円形を呈し、長径方向はN-6°-Eを指している。断面形状は「U」状を呈し、規模は、長径2.40m、短径1.52m、深さ0.80mを測る。壁は、底部からほぼ垂直に立ち上がり、中位からは外傾して上位に至るが、南壁の一部は崩落している。底面は全体的に平坦である。

覆土は、自然堆積で、全体にロームブロックを若干含む。

本跡に伴う遺物は皆無であるが、形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第2号土坑 (第1図)

調査区の南西部C1g₈区に確認され、平面形状は楕円形を呈し、長径方向はN-10°-Eを指して


いる。断面形状は「」状を呈し、規模は、長径3.12m、短径1.62m、深さ0.84mを測る。東西及び北壁は、底部から中位までほぼ垂直に立ち上がった後、緩やかに外側に傾斜して上位に至る。南壁は、底部から中位にかけて若干オーバーハングした後、上位に向けてほぼ垂直に立ち上がる。底面は南西側に向かって若干傾斜している。

覆土は、人為堆積で、暗褐色土を主体に、ローム・黒色土ブロックを少量含む。

遺物は、底面近くから本跡に伴うと思われる敲石が1点出土している。

本跡は、形状からとらえると、第1号土坑と同一形状を示し、さらに、出土遺物から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。


第3号土坑（第1図）

調査区の西部C2d₂区に確認され、平面形状は円形を呈し、長軸方向はN-44°-Eを指している。断面形状は「」状を呈し、規模は、長径1.80m、短径1.74m、深さ0.36mを測る。壁は、内彎気味に外傾して立ち上がり、底面は、凹凸である。

覆土は、人為堆積で、ロームブロックを多量に含む。

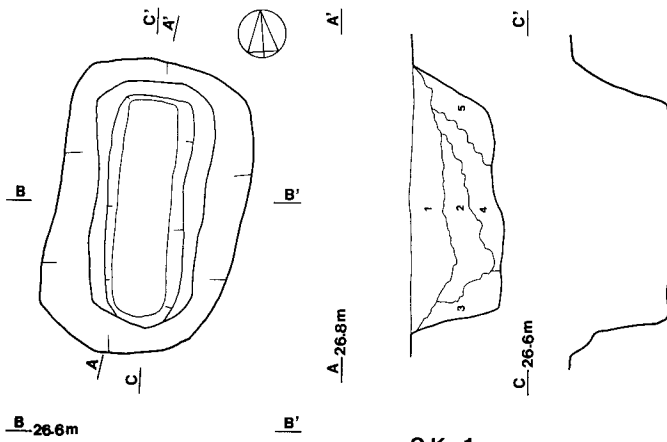
遺物は、北壁よりの底面から、平安時代のもものと比定される須恵器の坏が逆位の状態で出土しているが、出土状況を考えると、投棄された可能性が高く、この遺物から、本跡の構築時期を断定することは困難であるが、本跡は、出土した遺物とほぼ同時期に構築されたものと考えられる。

第4号土坑（第1図）

調査区の東部C3a₀区に確認され、平面形状は楕円形を呈し、長径方向はN-15°-Wを指している。断面形状は「」状を呈し、規模は、長径0.68m、短径0.48m、深さ0.16mを測る。壁は、底部から緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は、南側から北側にかけて徐々に低くなるが、壁との境は明瞭ではない。

覆土は、自然堆積で、上層が極暗褐色土、下層は褐色土を主体としてよく締まっている。

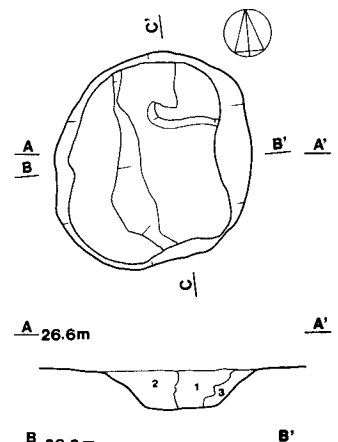
遺物は、北壁よりの覆土上層から、須恵器甕片が2点出土しているが本跡に伴うものとは考えられない。



SK 1

SK-1 土層解説

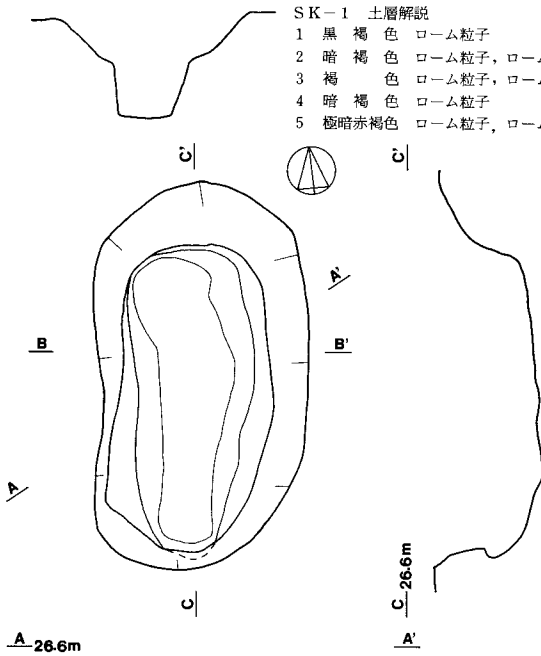
- 1 黒褐色 ローム粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 黒色土ブロック
- 3 褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 4 暗褐色 ローム粒子
- 5 極暗赤褐色 ローム粒子, ロームブロック



SK 3

SK-3 土層解説

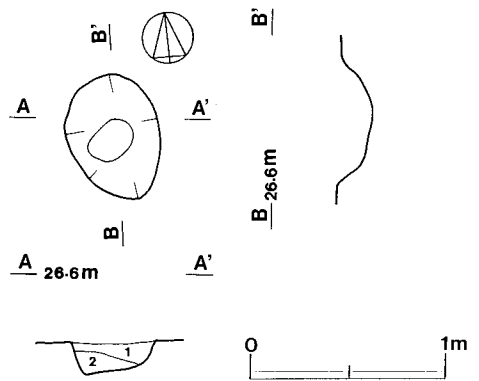
- 1 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 2 褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 3 褐色 ロームブロック



SK 2

SK-2 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 炭化粒子
- 3 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 焼土粒子
- 4 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 5 暗褐色 ロームブロック
- 6 褐色 ローム粒子, ロームブロック



SK 4

SK-4 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子, 炭化粒子
- 2 褐色 ローム粒子, 黒色土粒子



第1図 第1・2・3・4号土坑 (SK) 実測図

【土坑出土遺物】第6図(1・4・6)

第2号土坑底面から敲石1点、第3号土坑から完形の須恵器の坏1点、第4号土坑から同一個体のものと思われる須恵器の甕口縁部片・胴部片がそれぞれ1点出土している。

1は須恵器の坏で、口径12.9cm、器高4.1cm、底径7.5cmを測る。底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、水挽き整形後、底部及び体部下端に一定方向の手持ちヘラ削りを施す。胎土は、砂粒・砂礫・雲母を含み褐灰色を呈し、焼成は普通である。

4は須恵器の甕で胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に大きく外反し、口縁端部は突出する。外面は格子状の叩き目を施し、口縁部内・外面及び器内面は横ナデ整形である。胎土は、砂粒・砂礫・雲母を含み黒褐色を呈し、焼成は普通である。

6は敲石で、平面形状は楕円形を呈する。最大長14cm、最大幅6.1cm、最大厚3.5cmを測る。石質は安山岩で、両端部に使用痕跡を残す。

2 溝

第1号溝(第2図)

本跡は、調査区の南西部C2a₇区からD2a₇区にかけて確認され、D2d₉区で第2号溝に、C2f₈区で第3号溝に掘り込まれ、北端部と南東端部は、調査区域外に延びている。

全長約73mで、上幅0.96m～1.92m、下幅0.32m～0.64m、深さ0.36m～0.60mを測り、北から南へはやや蛇行し、C2e₉区からはほぼ直角に、東方向(N-69°-E)に向きを変え、10mあまりで調査区域外に至る。

底面の標高は、北部で25.96m、中部で25.92m、南東部で25.88mであり、北から南に向けて緩やかに傾斜している。

断面形状は、屈曲部で「∪」状を呈するほかは、逆台形状を呈している。

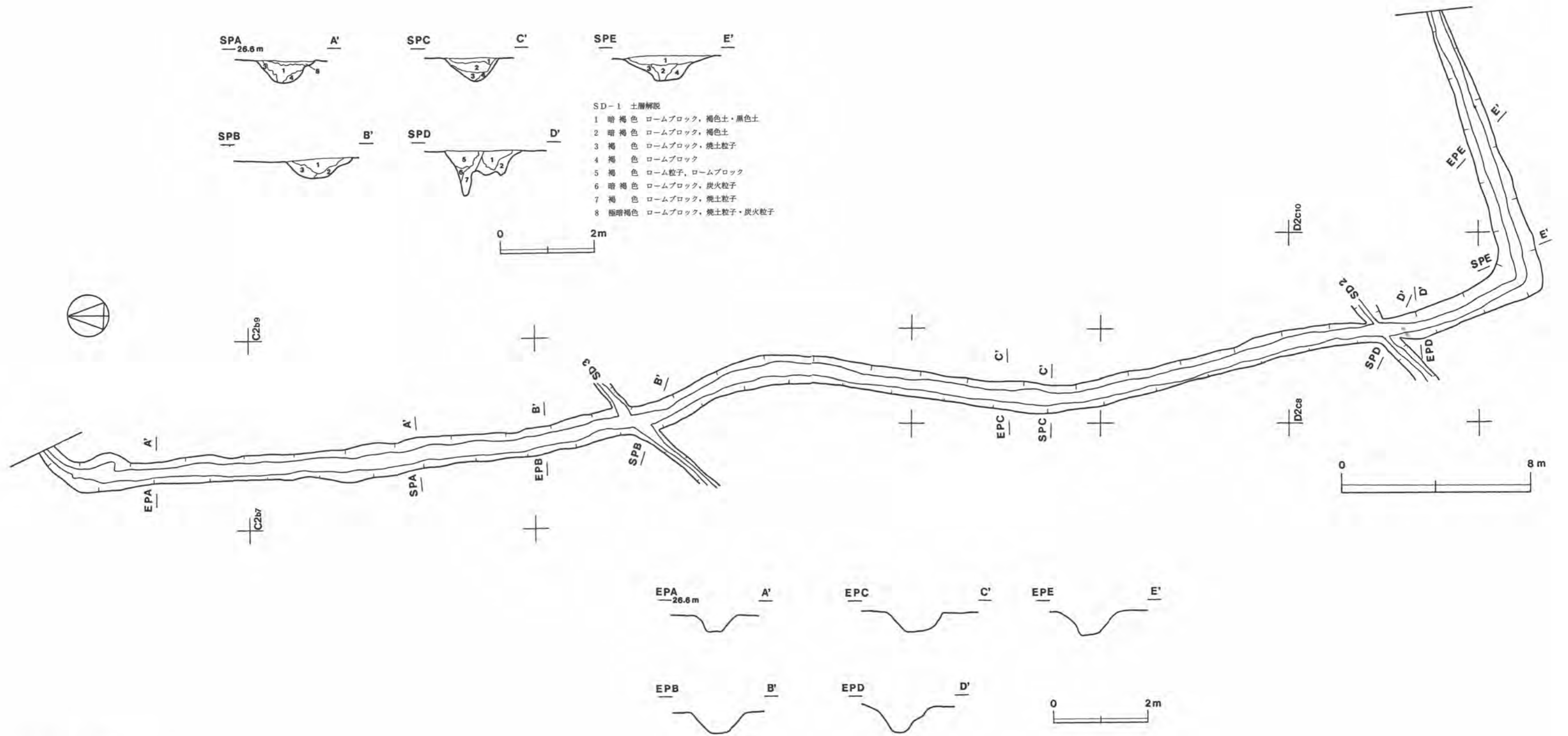
覆土は自然堆積で、大きく3～5層に分かれ、上層にはローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が、下層にはロームブロック・焼土粒子を若干含む褐色土が堆積している。

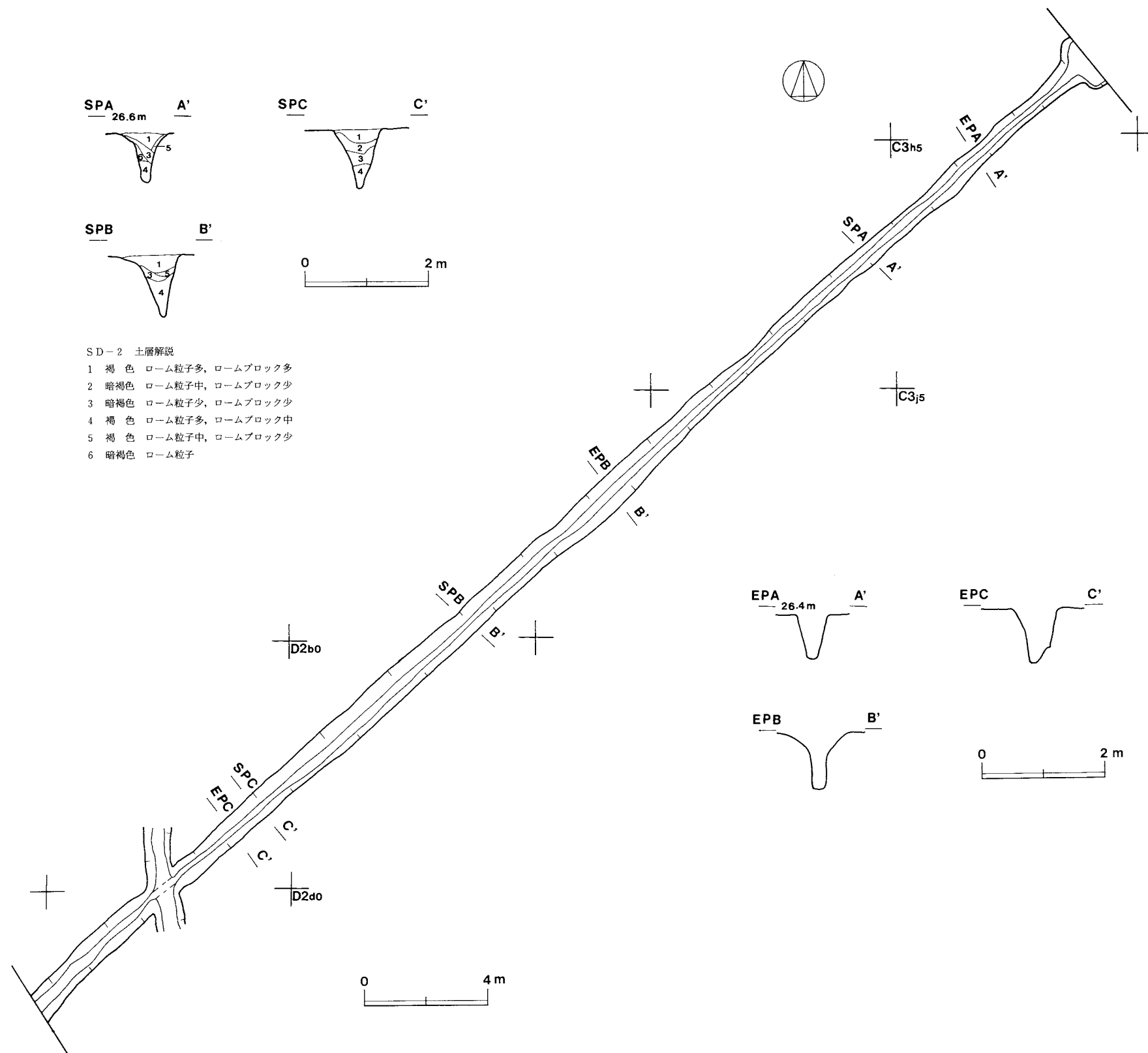
遺物は、底面から須恵器の坏・甕片・高坏脚部が、覆土から少量の土師器・須恵器片が出土している。

第2号溝(第3図)

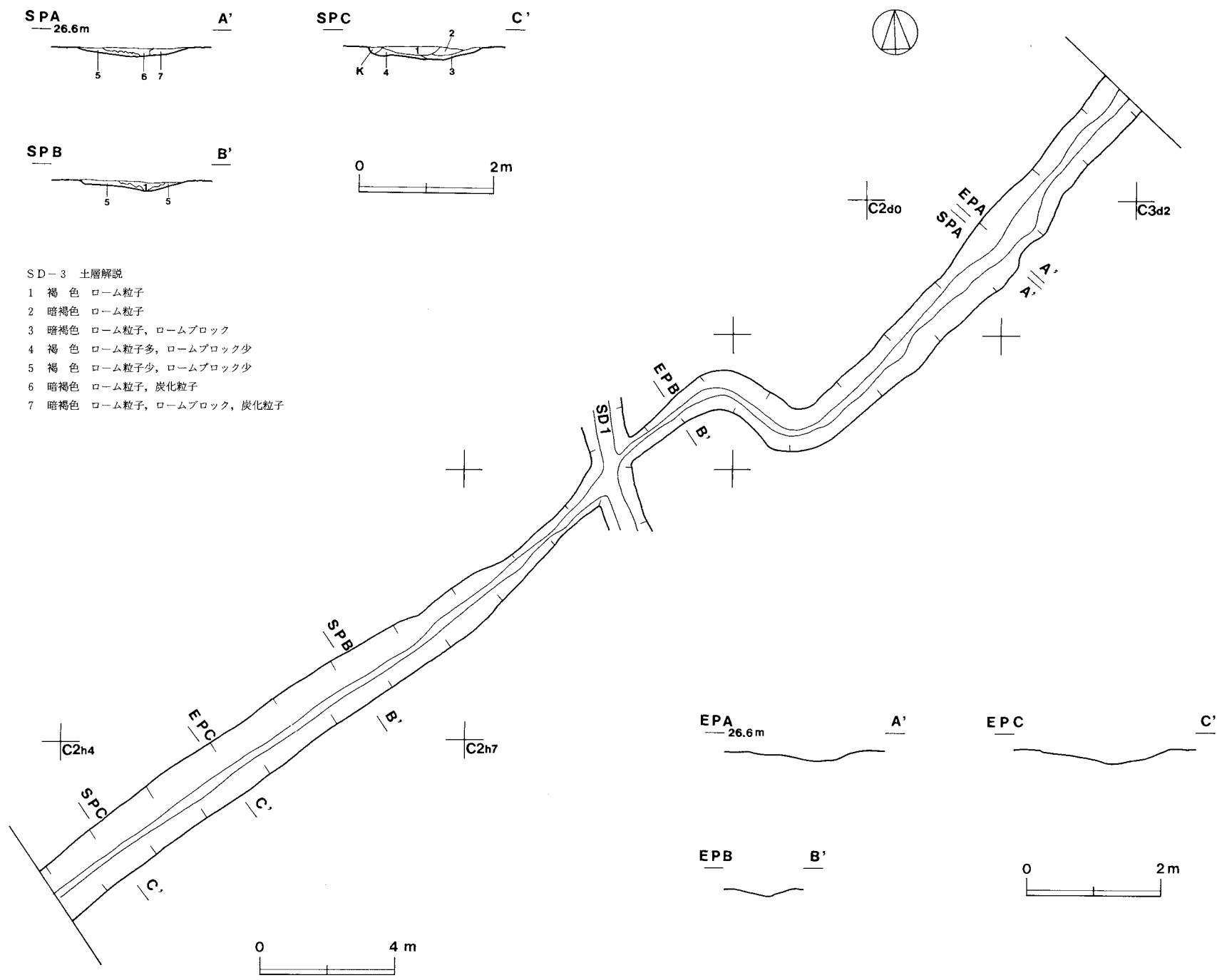
本跡は、調査区の南部C3g₆区からD2d₆区にかけて確認され、D2d₉区で第1号溝を掘り込んでい

る。全長は約46mで、上幅0.64m～1.12m、下幅0.16m～0.32m、深さ0.74m～0.96mを測り、北東から南西方向に直線的に延び、北東端部及び南西端部は調査区域外の道路下に延びている。





第3図 第2号溝実測図



SD-3 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子
- 2 暗褐色 ローム粒子
- 3 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック
- 4 褐色 ローム粒子多, ロームブロック少
- 5 褐色 ローム粒子少, ロームブロック少
- 6 暗褐色 ローム粒子, 炭化粒子
- 7 暗褐色 ローム粒子, ロームブロック, 炭化粒子

第4図 第3号溝実測図

底面の標高は25.52mほどで、高低差はほとんどない。断面形状は「U」状を呈する。

覆土は、自然堆積で、4～5層に分けられ、ロームブロック・ローム粒子を含む褐色土・暗褐色土である。下層は、締まりが極めて弱い。

遺物は、須恵器片が極少量覆土中から出土している。

第3号溝（第4図）

本跡は、C3c₁区からC2h₄区にかけて確認され、C2f₈区で第1号溝と重複して、第1号溝を掘り込んでいる。北東端部は、調査区域外である道路下に、南西端部も同様に道路下に延びている。

全長は約42m、上幅0.64m～1.92m、下幅0.16m～0.61m、深さ0.12m～0.22mを測り、北東から南西方向に直線的に延び、C2e₈区・C2e₉区でほぼ直角に屈曲し、再び南西方向に直線的に延びている。

底面の標高は、26.10m～26.18mでほとんど高低差はなく、ほぼ水平である。断面形状は、「U」状を呈する。

覆土は、ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を若干含む褐色土・暗褐色土で、自然堆積している。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が少量出土している。

第4号溝（第5図）

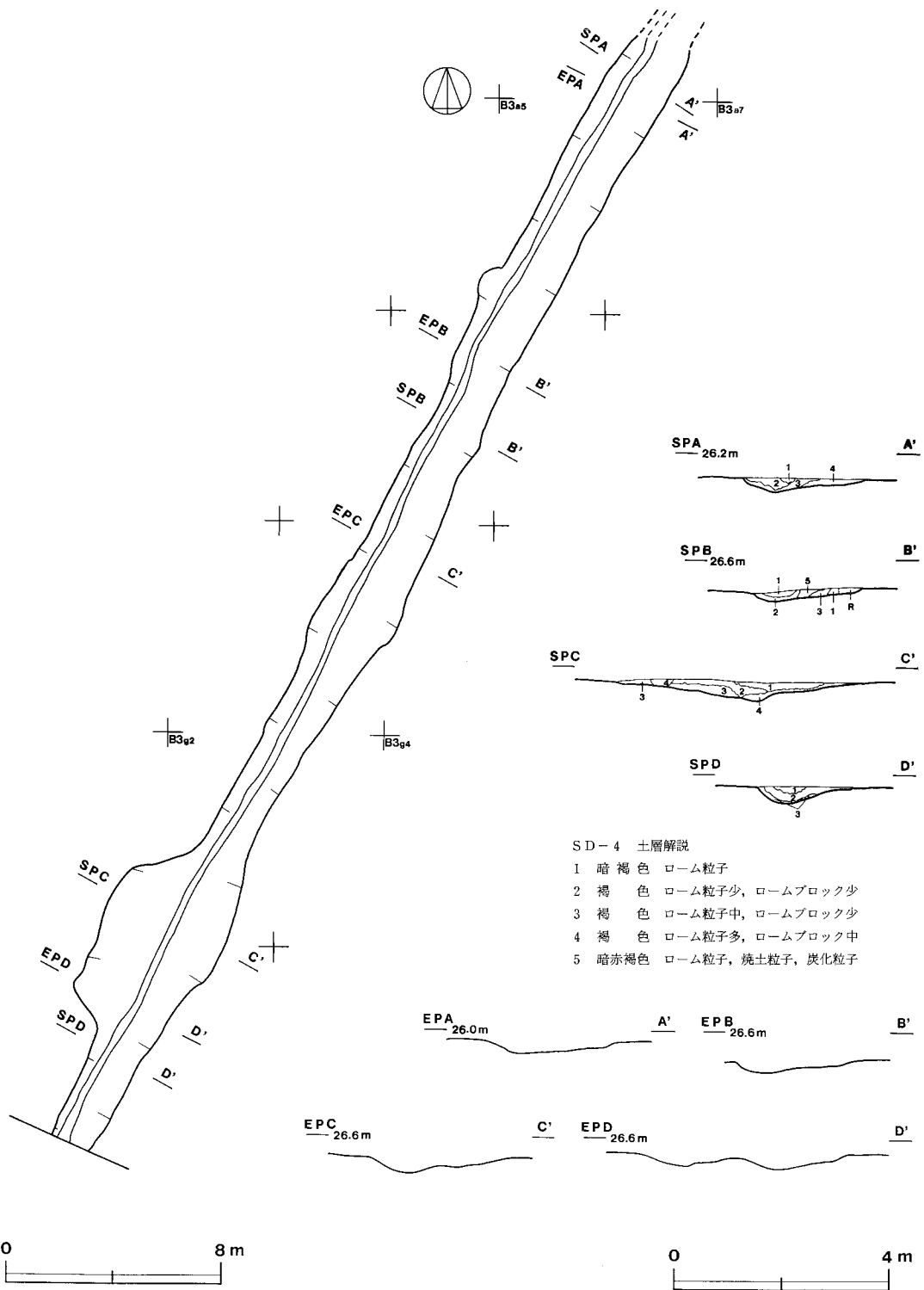
本跡は、A3j₆区からB3j₁区にかけて確認された溝であるが、調査区北東部に入り込む谷のため、北東端部は確認できなかった。南西端部は、調査区の中央部を東西に走る道路の東側に延びている。

全長は約46.5mで、上幅1.76m～3.76m、下幅0.16m～0.32m、深さ0.24m～0.32mを測り、北東方向から南西方向に直線的に延びている。

底面の標高は、南西部で26.04m、北東部で25.56mであり、南西から北東に傾斜している。南壁は北壁に比べ、緩やかに外傾して立ち上がっている。断面形状は「U」状を呈する。

覆土は、壁際が若干攪乱を受けているが自然堆積で、ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含む褐色土・暗褐色土である。

遺物は、覆土から縄文式土器・土師器・須恵器の破片、石鏃の他に、近世の磁器片が出土している。



第5図 第4号溝実測図

【溝出土遺物】第6図（2・3・5・8）

出土した遺物のほとんどは、土師器・須恵器の破片で出土量も少ない。第1号溝から、須恵器の坏・高坏脚部・甕の口縁部片が、第4号溝から石鏃が出土している。

2は須恵器の坏で、残存高は2.8cm、底径は推定で7.9cmを測る。底部は平底ではあるが、雑なヘラ削り整形でやや凸凹である。体部は内彎気味に立ち上がる。水挽き整形後、底部下端の一部に一定方向のヘラ削りを施す。胎土は、砂粒・雲母を含み灰白色を呈し、焼成は普通である。

3は須恵器の高坏で、脚部高は推定で9.9cmを測る。透かしのある脚部で、端部から基部に向かって大きく反って立ち上がり、端部は段をなす。内外面は、水挽き整形後、横ナデ整形。胎土は、砂粒・雲母を含み灰白色を呈し、焼成は普通である。

5は須恵器の甕で、胴部から大きく外反して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ出される。器内面に水挽き整形痕を残し、外面は平行叩き目を斜めに施す。胎土は、砂粒・砂礫・雲母を含み灰白色を呈し、焼成は普通である。

8は石鏃で、最大長4.1cm、最大幅2.4cm、最大厚0.8cmを測る。無茎で基部に抉りを有し、石質は黒曜石である。

3 遺構外出土遺物

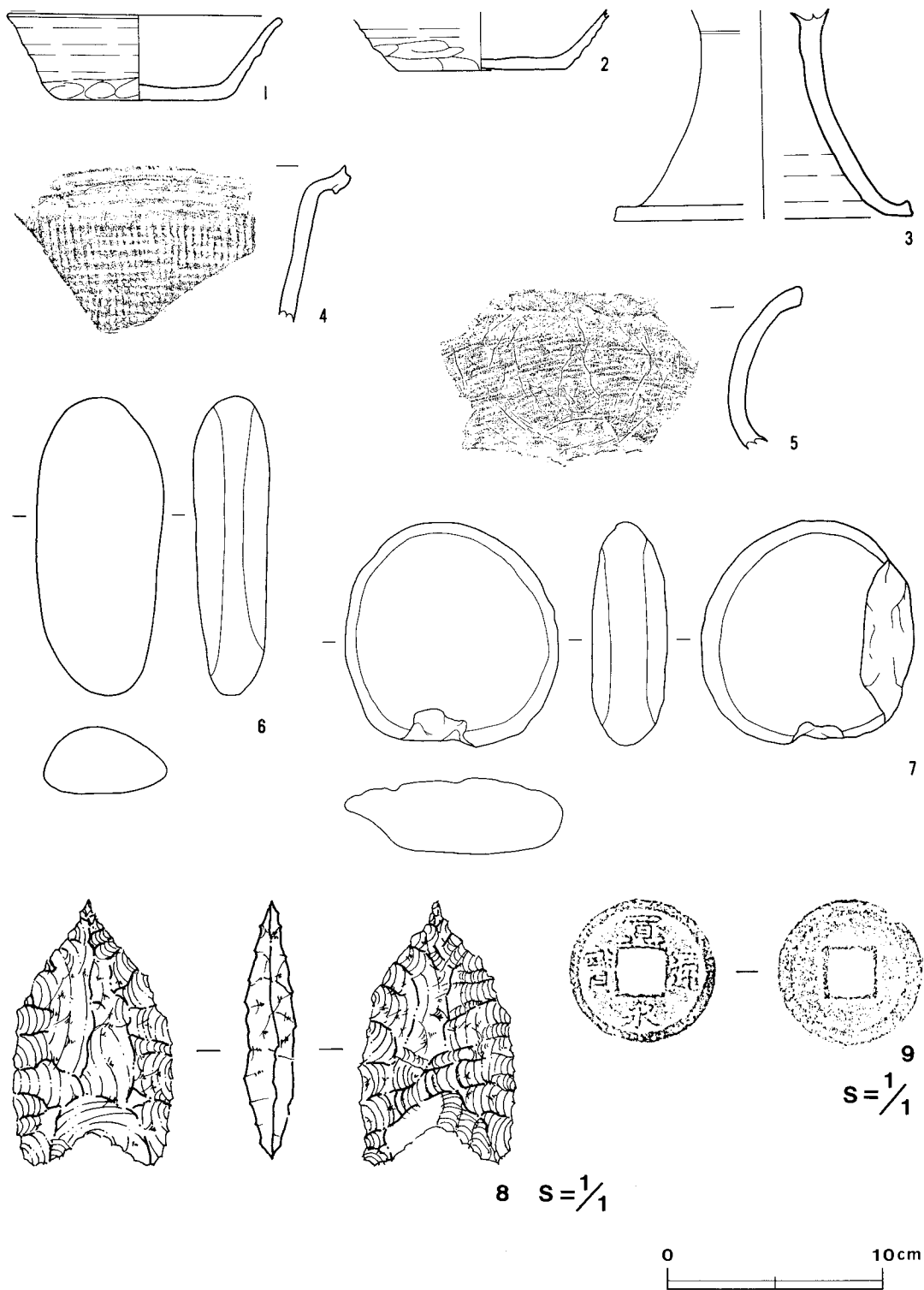
遺構外から出土した遺物は、縄文土器・土師器・須恵器の破片が主で、その他、石器1点、古銭1点である。近世の陶器の破片も数点出土しているが、いずれも細片のため詳細を把握することはできなかった。

(1) 縄文土器（第7・8図）

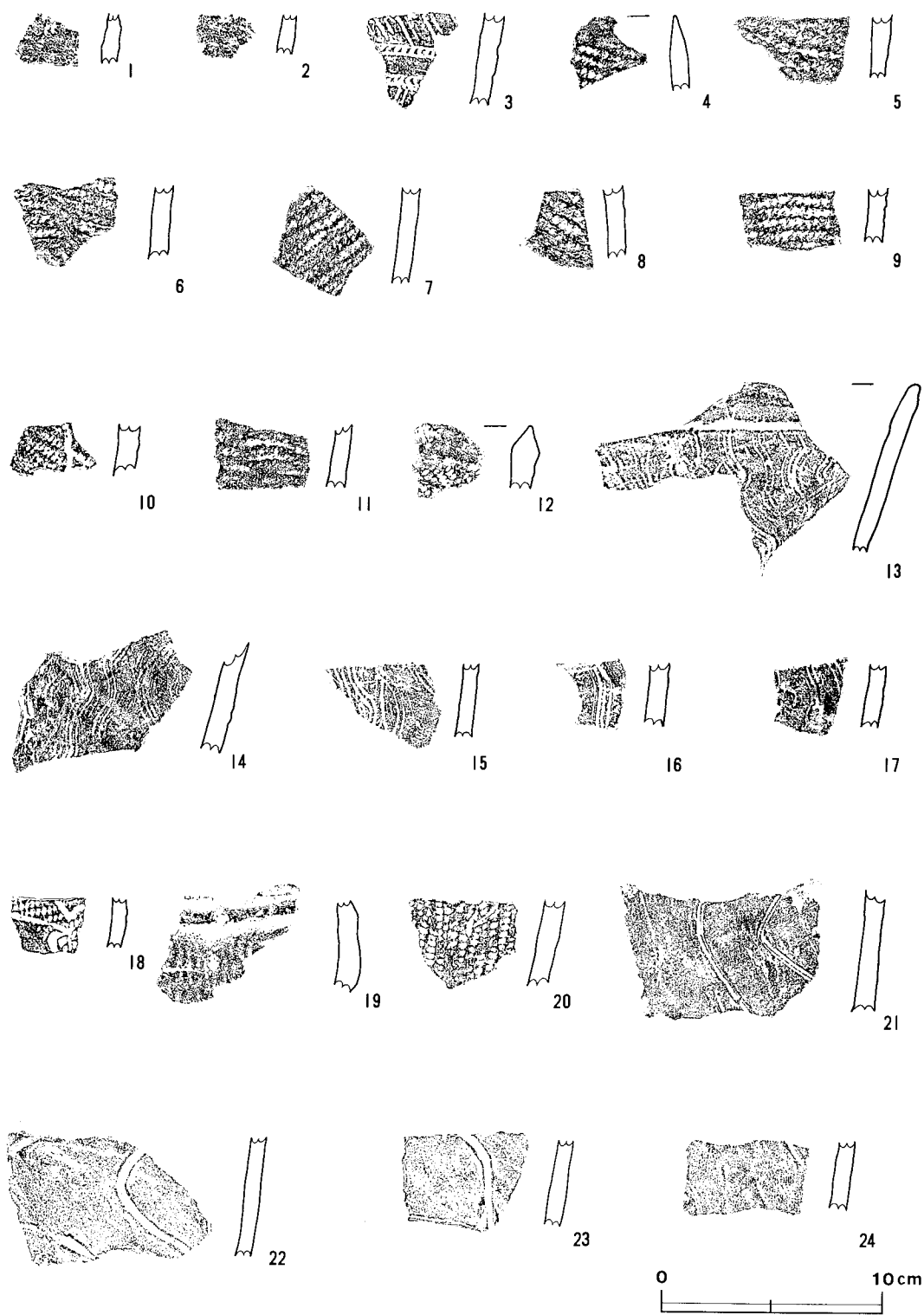
縄文時代前期・中期・後期に位置づけられる縄文式土器片の拓影図である。

1～12は、縄文時代前期の範疇に入ると考えられる土器である。1～3及び10の胎土には繊維が含まれる。1・2は同一個体の胴部片であるが、摩滅が著しく文様をとらえることはできない。3は胴部片で、平行する細い沈線間に半截竹管による刺突文を施す帯を有し、ヘラ状工具による方向の異なる斜めの沈線を施す。4は口縁部片であり、口縁部は無文で、口縁部下端から単節LRの斜位の回転縄文が施されている。5～11胴部片である。5は単節LRの縦位の回転縄文、6は単節LRの縦位及び斜位の回転縄文、7～9は単節LRの斜位の回転縄文が全面に施されている。11は摩滅が著しく文様をとらえることはできない。12は口縁部片で、口縁部は内彎気味に口唇部に至る。胴部にかけて単節RLの横位の回転縄文が施されている。

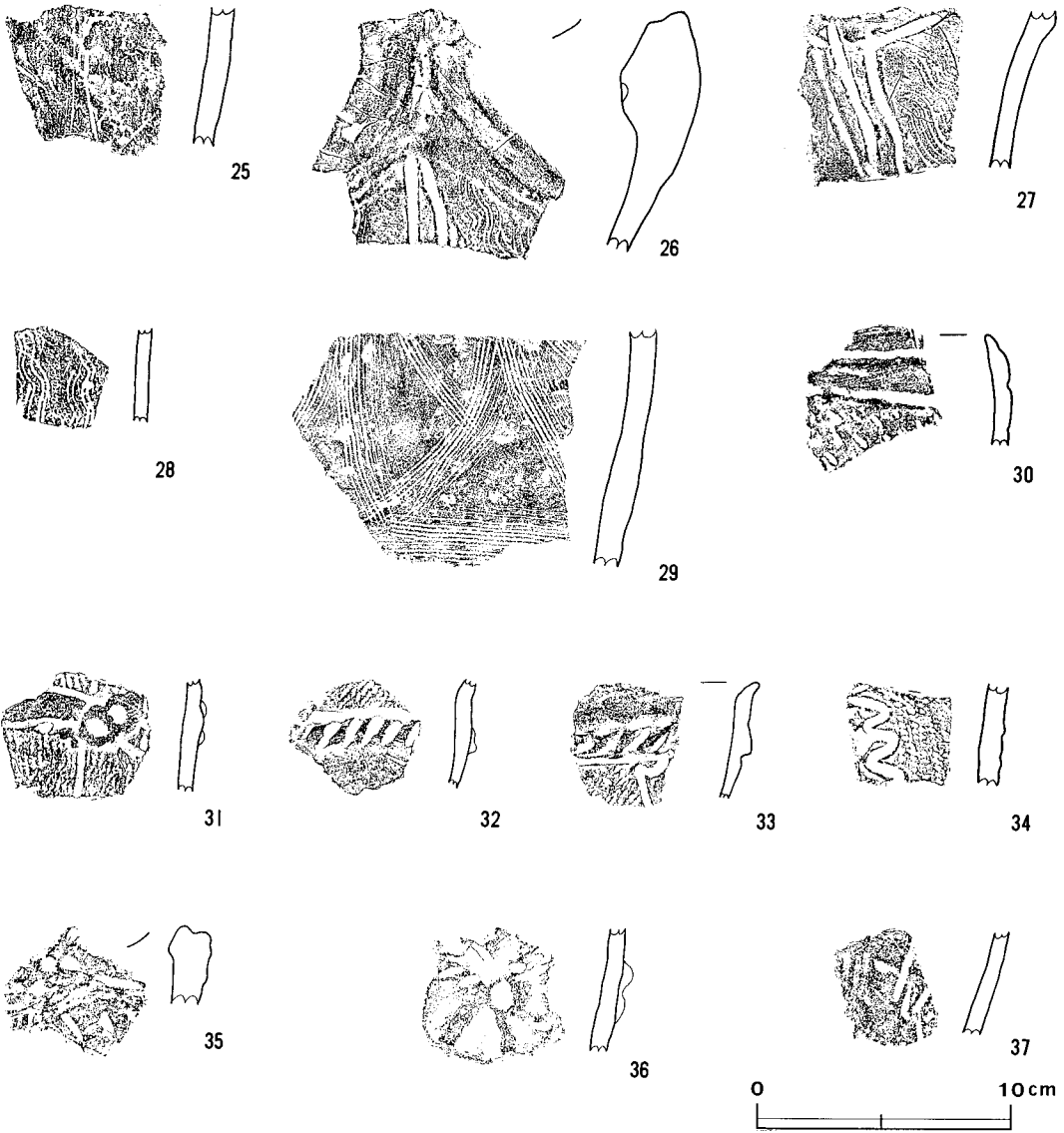
13～20は、縄文時代中期の範疇に入ると考えられる土器である。13は口縁部片で、口縁部下端に横位の沈線を施し、胴部上位から半截竹管による波状の条線文が垂下している。14～17は同一個体の胴部片で、13同様、波状の条線文が垂下している。18は胴部片で、単節LRの横位の回転



第6图 土坑(1·4·6), 溝(2·3·5·8), 遺構外(7·9)出土遺物実測図



第 7 图 遺構外出土土器拓影图(1)



第 8 图 遺構外出土土器拓影图(2)

縄文地と無文地とを沈線文で区画している。19は胴部片であり、断面三角形の隆帯下に一条の沈線を横位に施し、沈線下から単節RLの斜位の回転縄文が施されている。20は単節RLの斜位の回転縄文が施された胴部片である。

21～37は、縄文時代後期の範疇に入ると考えられる土器である。21は胴部片で、細い半截竹管による2本の沈線が「く」の字状に施され、一つの文様を構成している。22・23は同一個体の胴部片で、棒状工具による彎曲する太い沈線が施されている。24・25も同一個体の胴部片で、沈線の他に僅かに条線が施されている。26は波状口縁部片で、波状の突出部は頸部から内彎して立ち上がり、波頂下部の内面に円形刺突文が施され、突出部下から棒状工具による2条の沈線と、櫛歯状工具による波状の条線が垂下している。27・28は同一個体の胴部片で、櫛歯状工具による波状の条線文を棒状工具による3条の縦位の沈線と1条の横位の沈線とで区画している。29は胴部片で、櫛歯状工具を縦横に用い、条線文が施されている。30は口頸部片で、口縁部を2条の沈線で区画し、頸部から胴部にかけて、棒状工具による刺突文が施されている。31は頸部片で、上部の沈線と胴部の縄文を区画する2条の沈線間に「8」の字状の浮文が斜めに貼付されている。無節の縄文は「8」の字状の浮文下から垂下する沈線によって区画されている。32は頸部片で、横走る1条の沈線直上に、刻みの入る隆帯を有し、口縁部付近は無文である。胴部に単節LRの横位の回転縄文が施されている。33は32と隆帯・文様とも同様の傾向を示すが、隆帯直下に横位の沈線が鋭くカーブして垂下している。34は胴部片で、単節LRの縦位の回転縄文地に蛇行沈線が施されている。35は波状口縁部片で、波頂部下に横位に施した円形刺突文と沈線が施され、さらに、円形刺突文の下から2条の沈線が垂下している。36は頸部片で、縦位・横位の刻みを有する隆帯の接点上に「R」字状の浮文を貼付している。上部には浮文に向けて、僅かに沈線が施されている。37は底部付近の胴部片で、摩滅が著しく縦走る3条の沈線が僅かに施されている程度である。

(2) 土師器

調査区全域から出土しているがすべて破片である。器種は坏・甕・甑等であることがとらえられる。時期は、極少量の出土土器の口縁部片の観察結果から、古墳時代後期から奈良時代のものと考えられる。

(3) 須恵器

縄文式土器や土師器と同様に調査区全域にわたり出土している。すべて破片であるが、出土量は最も多い。時期は、奈良・平安時代に比定されるものと考えられる。

(4) 石器 (第6図7)

調査区の西部、B2j_i区から出土した「敲石」である。最大長10.5cm、最大幅10.1cm、最大厚3.5cmを測り、平面形状は円形に近い。両面磨石として使用しているが、一部敲石としても使用した

痕跡を残す。石質は安山岩である。

(5) 古銭（第6図9）

調査区のほぼ中央部，B3区から出土した「寛永通寶」である。新寛永銭で，裏面は無紋である。新寛永銭の初鑄造年は寛文8年（1668年）である。

第3節 考察

当遺跡は、既に第1節で記述した通り、後世の大規模な攪乱を受けたため、検出された遺構は土坑4基、溝4条で、出土遺物も少量である。

土坑は4基検出されたが、性格をとらえることができたのは、第1・2号土坑の2基だけであり、いずれも、平面形状は楕円形を呈し、ほぼ同一主軸方向を指している。遺構確認面からの深さは、第1号土坑で84cm、第2号土坑で80cmを測るが、遺構の上面がかなり削平されていることを考えると、より深い掘り込みであったことが窺われる。さらに、第2号の土坑の底面から縄文時代の遺物と思われる敲石が出土しており、類例の遺構との照合から、この2基の土坑は縄文時代の陥し穴であると考えられる。

茨城県内で、陥し穴状遺構が検出された遺跡は、1990年3月現在で10遺跡あり、総計77基が報告されている。さらに、未報告ながら見聞したものが、5遺跡52基を数える(表1)。これら検出された陥し穴状遺構を総覧すると、陥し穴状遺構は台地及び丘陵部に所在し、「けもの」の水飲み場である湧水地周辺、あるいは台地や丘陵部を移動するのに適した緩やかな傾斜地に位置するものがほとんどである。また、陥し穴状遺構の配置には、多数の遺構が検出された勝田市の武田遺跡、土浦市の向原遺跡、竜ヶ崎市の赤松遺跡・尾坪台遺跡にみられるように、列をなして分布するものや対をなして分布するもの、あるいは間隔の密なものと同様に、規則性がみられる傾向があり、地形と係わりに密接な関係があることが窺われる。「けもの」の捕獲・捕殺を目的とする陥し穴状遺構が、単独で存在する可能性は考えにくく、単独で検出されている遺跡でも、さらに周辺に同様の陥し穴状遺構が存在するものと考えられる。陥し穴状遺構は、平面形が長楕円形・楕円形を呈し、短軸の断面形がU字状・V字状のものがほとんどを占め、底面は長軸が上端部より短いものと長くて張り出すものがある。

以上のことから、当遺跡から検出された2基の陥し穴は、平面形は楕円形を呈し、断面形が概にU字状を示し、底面は長軸が上端部より短いタイプのものであり、調査区の北東部に侵入する谷津を意識し、いわゆる「けもの道」上に構築されたものであり、さらに南西部の調査区域外にも存在が想定される。

溝は4条検出されたが、4条とも調査区域外に延びているため部分的な調査に留まり、また、遺構に伴う遺物もなく、時期や性格を明確にとらえることはできなかった。第1号溝は、当遺跡から検出された溝の中で、最も古い溝と考えられるが、本跡に伴う遺物は皆無で、時期及び性格は不明である。第2・3号溝は、互いにほぼ平行に走り、土地を区画することを目的とする溝と考えられるが、掘り方・土層の堆積状況に相違があり、同一時期に構築されたものとは考えがたい。第4号溝は形状及び方向から、調査区の北東部に侵入する支谷への排水を目的とする溝であ

ると考えられる。

当遺跡から出土した遺物は少量で、遺構に伴う遺物は皆無に近い状況である。縄文時代の遺物と思われる石器3点のほかは、縄文土器・土師器・須恵器がほとんどを占めている。縄文土器はすべてが破片で、縄文時代前期から後期に属する遺物が出土している。土師器はすべてが環・甕・壺等の破片で、時期的には柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ区から出土しているものとほぼ同時期のものである。土器の中で唯一完形のまま出土した須恵器環は、柴崎遺跡Ⅰ区の編年によると、Ⅱ期（8世紀前半）に比定される環と同一のものであり、当遺跡の性格を考えるうえで貴重な遺物である。

当遺跡は、縄文時代前期から後期初頭に比定される遺物と陥し穴が検出されていることから、縄文時代には集落が形成されていたことも窺える。その後、攪乱によって住居跡等の遺構は検出されていないが、古墳時代後期から奈良・平安時代には、生活用具としての遺物が出土していることから、集落が形成されていた可能性がある。また、出土遺物（土師器・須恵器）が同一台地上に所在する柴崎遺跡と同時期のものであることから、柴崎遺跡とは一連の集落、もしくは同時期に集落が形成された地域であると考えられる。

（表1） 茨城県内の陥し穴状遺構検出遺跡

遺跡名	所在地	基数	遺 構 番 号	文 献
大 沼	日立市	4基	SK1・2・8・9	日立市文化財調査報告書3集 (1977年)
武田遺跡	勝田市	13基	西部地区SK17・18 南東部地区SK23・24・26・28・29・39・40・42・50・54・55	勝田市文化振興公社文化財調査報告第3集 (1990年)
森 戸 那 珂 町		6基	SK53・71・90・262・265・266	茨城県教育財団文化財調査報告第55集 (1990年)
志 筑	千代田村	1基	SK21	” V (1980年)
向 原	土浦市	18基	SK24・26・29・35・40・41・43・44・46・47・48・49・51・52・54・55・60・61	茨城県土浦市向原遺跡発掘調査報告書 (1987年)
大谷津A	谷和原町	7基	SK11・84・128・132・141・287・293	茨城県教育財団文化財調査報告第28集 (1985年)
赤 松	龍ヶ崎市	10基	SK119・120・122・125・126・127・129・133・215・216	” IV (1980年)
尾 坪 台	龍ヶ崎市	9基	SK20・29・30・32・34・37・38・57・59	” 第39集 (1986年)
廻り地A	龍ヶ崎市	8基	SK118・404・416・526・959・1043・1267・1494	” XV (1982年)
松 葉	龍ヶ崎市	1基	SK41	” I (1979年)
市毛下坪	勝田市	1基	「勝田市文化振興公社文化財調査報告第3集 武田III」 報文中より	
石 山 神	友部町	28基	現地説明会資料より	茨城県教育財団 (1989年)
長 峰	土浦市	4基	”	茨城県教育財団 (1989年)
陣 屋 敷	美浦村	15基	「第12回茨城県考古学協会遺跡報告会」 資料より	陸平調査会 (1989年)
柏木古墳群	桜川村	4基	現地説明会資料より	茨城県教育財団 (1989年)

(1990年 3月現在)

参考資料

- 「日立市文化財調査報告書3集 日立市大沼遺跡発掘調査報告書」 日立市教育委員会 1977年
- 「(財)勝田市文化振興公社文化財調査報告第3集 武田III」 (財)勝田市文化振興公社 文化財保護課 1990年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告第55集 森戸遺跡 北郷C遺跡」 茨城県教育財団 1990年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告V 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書I」 茨城県教育財団 1980年
- 「茨城県土浦市向原遺跡発掘調査報告書 向原遺跡」 向原遺跡調査会・土浦市教育委員会 1987年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告第28集 水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内 大谷津A遺跡(上)」 茨城県教育財団 1985年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告IV 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4 赤松遺跡」 茨城県教育財団 1980年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告第39集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14 尾坪台遺跡 十三塚遺跡」 茨城県教育財団 1986年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告XV 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7 廻り地A遺跡(上)」 茨城県教育財団 1982年
- 「茨城県教育財団文化財調査報告I 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1 松葉遺跡」 茨城県教育財団 1979年
- 「第12回茨城県考古学協会遺跡報告会資料」 茨城県考古学協会 1990年
- 「石山神遺跡 現地説明会資料」 茨城県教育財団 1989年
- 「長峰遺跡 現地説明会資料」 茨城県教育財団 1989年
- 「柏木古墳群 現地説明会資料」 茨城県教育財団 1989年

結 語

柴崎遺跡の発掘調査は、3年計画で実施し、遺跡をⅠ～Ⅲ区の3地区に分割して調査を進めた。本書は、昭和63年4月から平成元年3月迄に調査を実施した柴崎遺跡Ⅱ区と中塚遺跡の調査結果をまとめたものである。

柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡からは、縄文時代、古墳時代（6世紀後半）、奈良・平安時代（7～12世紀）の各期の遺構・遺物が検出され、幾多の先人達の生活の跡を窺い知ることができた。縄文時代については、出土した遺物から縄文人の生活の痕跡を窺い知ることができた。

古墳時代以降、奈良・平安時代にかけては、台地上に集落が形成され生活が営まれ、柴崎遺跡の所在する台地は、居住地として最適な場所であったことが窺える。

また、出土遺物では、9～10世紀の土器（須恵器）の中にこれまでの須恵器に対して、胎土・焼成・色調に違いの認められる土器が出土している。これらの土器は、社会状況の変化に伴い出現した土器ではないかと考えられる。

遺構では、11世紀末から12世紀にかけて出現する小竪穴式住居跡が19軒検出され、6世紀後半から12世紀にかけての集落の変遷とともに、堅穴式住居跡の構造の変遷がとらえられ、さらに社会構造についても不透明ながらとらえられるのではないだろうか。

中塚遺跡は、調査の結果、縄文時代後期と奈良時代（8世紀）の遺物が出土し、遺構としては縄文期の陥し穴を検出しただけである。調査の段階で、当遺跡は概に開墾等による攪乱を受けたことが判明し、陥し穴以外の遺構は破壊されたものと考えられる。

今回報告した柴崎遺跡のⅡ区は、前年度に調査報告したⅠ区とⅡ区の一部とは、谷津を挟んで位置している。遺構の配置状況も、谷津を囲む様な状態を示し、集落は排水と区画を目的とした溝によって区分されている。

以上が柴崎遺跡Ⅱ区の調査結果の報告である。さらに、平成元年度に調査を実施したⅢ区の遺構配置状況や出土遺物を加えて検討することにより、今後、柴崎遺跡（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区）の全容が明らかになるものと確信する。

なお、本書をまとめるに際しては、関係各機関・関係各位からの御指導と御援助を賜りましたことに対して、文末を借りて心から謝意を表わす次第である。

茨城県教育財団文化財調査報告第63集

研究学園都市計画桜柴崎土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）

柴崎遺跡Ⅱ区（上）
中塚遺跡

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
Tel 0292-25-6587

印刷 (株)あけぼの印刷社
水戸市松が丘2-6-24
Tel 0292-51-5265

